

岐阜県文化財保護センター

調査報告書 第154集

上 切 寺 尾 古 墳 群
日 焼 遺 跡
(第1分冊)

2021

岐阜県文化財保護センター

かみ ぎり てら お
上 切 寺 尾 古 墳 群
ひ やけ
日 焼 遺 跡
(第1分冊)

2021

岐阜県文化財保護センター



上切寺尾古墳群A地点発掘区遠景（平成27年度調査、西から）



上切寺尾古墳群D地点発掘区遠景（平成28年度調査、北東から）



SZ13 周溝内遺物出土状況（東から）



上切寺尾古墳群の出土土器



SB04 検出状況（北から）



SK223 出土瑞花双鳥八稜鏡



SK485出土墨書土器「大令」



SK517出土ロクロ土師器

序

飛騨地方は、季節により装いを変える木々と、山あいを流れる数々の清流によって育まれた美しい自然のなかにあります。岐阜県の中でも北陸や中部高地とのかかわりが深く、古くから各地との交流を盛んにもちつつ豊かな文化を育み続けてきました。遺跡の所在する高山盆地北西部は、牧ヶ洞断層などの影響で南西から北東方向に直線的に伸びる丘陵が特徴であり、眼下に暴れ川として知られる川上川が流れ、市街から続く宮川との合流点も望むことができます。

このたび、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所による中部縦貫自動車道高山清見道路の建設に伴い、高山市上切町にある上切寺尾古墳群と日焼遺跡の発掘調査を実施しました。今回の調査では、7世紀後半から8世紀前半にかけての集落跡や、平安時代後期の宗教施設、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての広大な墓域を確認することができました。遺跡の西側の谷を抜け国府町へ抜けるルートは、中世以前は主要な交通路であったことが知られています。また、遺跡が所在する川上川左岸の山麓部分には、縄文時代から古代の集落跡である赤保木遺跡、国分寺の瓦を焼成した赤保木瓦窯跡、弥生時代から古代の集落が断続的に営まれたウバガ平遺跡や野内遺跡など、注目すべき遺跡が数多く存在します。今回の調査は、弥生時代の終わりから古墳時代初めの墓域、古墳時代の終わりから奈良時代にかけての集落など、これまで周辺の成果では知られていなかった時代の遺構や遺物を多数確認し、地域の歴史を考える上で重要な成果となりました。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御支援・御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、高山市教育委員会、地元地区の皆様にご深く感謝申し上げます。

令和3年2月

岐阜県文化財保護センター
所長 森 勝利

例 言

- 1 本書は、岐阜県高山市上切町に所在する上切寺尾古墳群（岐阜県遺跡番号 21203-06586）・日焼遺跡(岐阜県遺跡番号 21203-00455)の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、中部縦貫自動車道高山清見道路に伴うもので、国土交通省中部地方整備局から岐阜県が委託を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 徳田誠志宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査官の指導のもとに、発掘作業は平成 27・28 年度、整理等作業は平成 29 年度～令和元年度に実施した。
- 4 発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第 1 章第 2 節に一括して掲載した。
- 5 本書の執筆は、第 1 章から第 3 章を柏木賢一と柳坪武志が分担して行った他、第 5 章 1 節を三島誠、第 5 章第 2 節を長谷川幸志、第 5 章 3 節を澤村雄一郎、第 5 章第 4 節を柳坪が行った。
- 6 発掘作業における現場管理、掘削、測量、景観写真撮影、出土遺物の洗浄・注記などの支援業務は、株式会社イビソクに委託して行った。整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、平成 29 年度は国際文化財株式会社、平成 30 年度は橋本技術株式会社岐阜営業所、令和元年度は株式会社イビソクに委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 SZ35 出土炭化材の放射性炭素年代測定、SK223 出土の鏡付着物の同定、同遺構埋土内の微細物分析、灰釉陶器の 5 点の付着物同定は、株式会社パレオ・ラボに委託して行い、第 4 章に掲載した。第 4 章第 1 節は柏木が執筆した。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。
岩田修、岩田崇、岩花秀明、牛丸岳彦、大石崇史、梶原義実、久保智康、近藤大典、清水ひろ子、高橋浩二、田中彰、成瀬正勝、馬場伸一郎、藤澤良祐、三好清超、渡邊博人、高山市教育委員会、富山県埋蔵文化財センター
- 10 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ系を使用する。
- 11 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2014『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目次（第1分冊）

序

例言

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第2節 調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

第2節 調査前地形測量成果について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

第3節 遺構・遺物の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

第4節 上切寺尾古墳群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

第5節 縄文時代から弥生時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 139

第6節 古代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 159

報告書抄録

目次（第2分冊）

第3章 調査の成果

第7節 中世以降の遺構と遺物

遺構一覧表・遺物観察表

発掘区全域図分割図

第4章 自然科学分析

第1節 分析の概要

第2節 放射性炭素年代測定

第3節 礎石建物内土坑出土の八稜鏡付着物の同定

第4節 土器付着物同定

第5節 土坑内堆積物の微細物分析

第5章 総括

第1節 平安時代の礎石建物について

第2節 上切寺尾古墳群の造墓の変遷及び位置づけについて

第3節 飛騨地域における古代の土器について

第4節 高山盆地北部丘陵における土地利用の変遷について

参考文献

写真図版

挿図目次

図 1 遺跡位置図…………… 1	図 35 SZ15 遺構図 (1) …… 56
図 2 試掘・確認調査坑位置図…………… 2	図 36 SZ15 遺構図 (2)、出土遺物…………… 57
図 3 発掘区地区割り図…………… 3	図 37 SZ16 遺構図 (1) …… 59
図 4 遺跡周辺の地質…………… 9	図 38 SZ16 遺構図 (2) …… 60
図 5 周辺の地形と遺跡の立地…………… 9	図 39 SZ16 遺構図 (3)、出土遺物…………… 61
図 6 発掘区周辺の地割…………… 10	図 40 SZ17 遺構図 (1) …… 63
図 7 周辺遺跡位置図…………… 12	図 41 SZ17 遺構図 (2)、出土遺物…………… 64
図 8 基本層序模式図 (1) …… 16	図 42 SZ18 遺構図 (1) …… 65
図 9 基本層序模式図 (2) …… 17	図 43 SZ18 遺構図 (2) …… 66
図 10 上切寺尾古墳群調査前地形測量図…………… 19	図 44 SZ19 遺構図 (1) …… 67
図 11 SZ01 遺構図 (1) …… 26	図 45 SZ19 遺構図 (2)、出土遺物…………… 68
図 12 SZ01 遺構図 (2)、出土遺物 (1) …… 27	図 46 SZ20 遺構図 (1) …… 69
図 13 SZ01 出土遺物 (2) …… 28	図 47 SZ20 遺構図 (2)、出土遺物…………… 70
図 14 SZ02 遺構図、出土遺物…………… 29	図 48 SZ21 遺構図 (1) …… 71
図 15 SZ03 遺構図、出土遺物…………… 31	図 49 SZ21 遺構図 (2) …… 72
図 16 SZ04 遺構図 (1) …… 32	図 50 SZ22 遺構図 (1) …… 73
図 17 SZ04 遺構図 (2) …… 33	図 51 SZ22 遺構図 (2) …… 74
図 18 SZ05 遺構図 (1) …… 34	図 52 SZ23 遺構図 (1) …… 76
図 19 SZ05 遺構図 (2)、出土遺物…………… 35	図 53 SZ23 遺構図 (2)、出土遺物…………… 77
図 20 SZ06 遺構図 (1) …… 36	図 54 SZ24 遺構図 (1) …… 79
図 21 SZ06 遺構図 (2)、出土遺物…………… 37	図 55 SZ24 遺構図 (2) …… 80
図 22 SZ07 遺構図 (1) …… 39	図 56 SZ24 出土遺物…………… 81
図 23 SZ07 遺構図 (2)、出土遺物…………… 40	図 57 SZ25 遺構図…………… 83
図 24 SZ08 遺構図 (1) …… 41	図 58 SZ26 遺構図 (1) …… 84
図 25 SZ08 遺構図 (2)、出土遺物…………… 42	図 59 SZ26 遺構図 (2)、出土遺物…………… 85
図 26 SZ09 遺構図、出土遺物…………… 44	図 60 SZ27 遺構図…………… 86
図 27 SZ10 遺構図…………… 45	図 61 SZ28 遺構図 (1) …… 87
図 28 SZ10 出土遺物…………… 46	図 62 SZ28 遺構図 (2)、出土遺物…………… 88
図 29 SZ11 遺構図、出土遺物…………… 47	図 63 SZ29 遺構図 (1) …… 90
図 30 SZ12 遺構図 (1) …… 49	図 64 SZ29 遺構図 (2) …… 91
図 31 SZ12 遺構図 (2)、出土遺物…………… 50	図 65 SZ29 出土遺物…………… 92
図 32 SZ13 遺構図 (1) …… 52	図 66 SZ30 遺構図 (1) …… 93
図 33 SZ13 遺構図 (2)、出土遺物…………… 53	図 67 SZ30 遺構図 (2) …… 94
図 34 SZ14 遺構図…………… 54	図 68 SZ31 遺構図…………… 95

図 69	SZ32 遺構図 (1) ……………	96	図 106	SI31 遺構図 ……………	140
図 70	SZ32 遺構図 (2) ……………	97	図 107	SI31 出土遺物 ……………	141
図 71	SZ32 遺構図 (3) ……………	98	図 108	SI38 遺構図 (1) ……………	142
図 72	SZ32 出土遺物 ……………	99	図 109	SI38 遺構図 (2) ……………	143
図 73	SZ33 遺構図 (1) ……………	100	図 110	SI38 出土遺物 ……………	144
図 74	SZ33 遺構図 (2)、出土遺物 ……………	101	図 111	SL02 遺構図、出土遺物 ……………	145
図 75	SZ34 遺構図 (1) ……………	102	図 112	SL03 遺構図、出土遺物 ……………	146
図 76	SZ34 遺構図 (2) ……………	103	図 113	SK110・SK111 遺構図、SK111 出土遺物 ……………	147
図 77	SZ35 遺構図 (1) ……………	104	図 114	SK133 遺構図、出土遺物 ……………	148
図 78	SZ35 遺構図 (2) ……………	105	図 115	SK357・SK360・SK371・SK376・SK381 SK382 遺構図、SK376・SK382 出土遺物 ……………	151
図 79	SZ36 遺構図 (1) ……………	106	図 116	SK387・SK410 遺構図、SK387 出土遺物 ……………	152
図 80	SZ36 遺構図 (2) ……………	107	図 117	SK444・SK445・SK574・SK598・SK658 遺構図、SK445・SK598・SK658 出土遺物 ……………	154
図 81	SZ37 遺構図、出土遺物 ……………	109	図 118	遺構外出土縄文土器 ……………	155
図 82	SZ38 遺構図 (1) ……………	110	図 119	遺構外出土石器 (1) ……………	156
図 83	SZ38 遺構図 (2)、出土遺物 ……………	111	図 120	遺構外出土石器 (2) ……………	157
図 84	SZ39 遺構図 ……………	113	図 121	遺構外出土弥生土器 ……………	158
図 85	SZ40 遺構図 (1) ……………	114	図 122	ST01・ST02 遺構図、ST02 出土遺物 ……………	160
図 86	SZ40 遺構図 (2) ……………	115	図 123	ST03 遺構図、出土遺物 ……………	161
図 87	SZ41 遺構図 (1) ……………	116	図 124	ST04 遺構図、出土遺物 ……………	162
図 88	SZ41 遺構図 (2) ……………	117	図 125	ST05 遺構図 ……………	163
図 89	SZ41 遺構図 (3)、出土遺物 ……………	118	図 126	ST06～ST08 遺構図 ……………	164
図 90	SZ42 遺構図 (1) ……………	119	図 127	ST09 遺構図、出土遺物 ……………	165
図 91	SZ42 遺構図 (2)、出土遺物 ……………	120	図 128	ST10 遺構図 ……………	166
図 92	SZ43 遺構図 (1) ……………	121	図 129	SI01 遺構図 (1) ……………	167
図 93	SZ43 遺構図 (2) ……………	122	図 130	SI01 遺構図 (2)、出土遺物 ……………	168
図 94	SZ44 遺構図 (1) ……………	123	図 131	SI02 遺構図 (1) ……………	169
図 95	SZ44 遺構図 (2)、出土遺物 ……………	124	図 132	SI02 遺構図 (2)、出土遺物 ……………	170
図 96	SZ45 遺構図 ……………	125	図 133	SI03 遺構図 (1) ……………	172
図 97	SZ46 遺構図、出土遺物 ……………	127	図 134	SI03 遺構図 (2)、出土遺物 (1) ……………	173
図 98	SZ47 遺構図 ……………	128	図 135	SI03 出土遺物 (2) ……………	174
図 99	SZ48 遺構図 (1) ……………	130	図 136	SI04 遺構図 ……………	175
図 100	SZ48 遺構図 (2)、出土遺物 ……………	131	図 137	SI04 出土遺物 ……………	176
図 101	SZ49 遺構図、出土遺物 ……………	132	図 138	SI05 遺構図 ……………	177
図 102	SZ50 遺構図 ……………	134	図 139	SI05 出土遺物 ……………	178
図 103	SZ51 遺構図 (1) ……………	135	図 140	SI06 遺構図 ……………	179
図 104	SZ51 遺構図 (2) ……………	136			
図 105	SZ51 遺構図 (3)、出土遺物 ……………	137			

図 141	SI06 出土遺物	180	図 178	SI20 遺構図 (1)	220
図 142	SI07 遺構図	181	図 179	SI20 遺構図 (2)	221
図 143	SI07 出土遺物	182	図 180	SI20 遺構図 (3)	222
図 144	SI08 遺構図	183	図 181	SI20 出土遺物	223
図 145	SI08 出土遺物	184	図 182	SI21 遺構図 (1)	225
図 146	SI09 遺構図 (1)	185	図 183	SI21 遺構図 (2)	226
図 147	SI09 遺構図 (2)、出土遺物	186	図 184	SI21 出土遺物	227
図 148	SI10 遺構図 (1)	187	図 185	SI22 遺構図	228
図 149	SI10 遺構図 (2)、出土遺物	188	図 186	SI22 出土遺物	229
図 150	SI11 遺構図 (1)	190	図 187	SI23 遺構図 (1)	230
図 151	SI11 遺構図 (2)、出土遺物	191	図 188	SI23 遺構図 (2)	231
図 152	SI12 遺構図 (1)	192	図 189	SI23 出土遺物	232
図 153	SI12 遺構図 (2)、出土遺物	193	図 190	SI24 遺構図、出土遺物	234
図 154	SI13 遺構図 (1)	195	図 191	SI25 遺構図 (1)	235
図 155	SI13 遺構図 (2)、出土遺物	196	図 192	SI25 遺構図 (2)	236
図 156	SI13 遺構図 (3)	197	図 193	SI25 遺構図 (3)、出土遺物 (1)	237
図 157	SI14 遺構図 (1)	198	図 194	SI25 出土遺物 (2)	238
図 158	SI14 遺構図 (2)	199	図 195	SI25 出土遺物 (3)	239
図 159	SI14 遺構図 (3)	200	図 196	SI26 遺構図 (1)	240
図 160	SI14 出土遺物	201	図 197	SI26 遺構図 (2)	241
図 161	SI15 遺構図 (1)	202	図 198	SI26 出土遺物 (1)	242
図 162	SI15 遺構図 (2)	203	図 199	SI26 出土遺物 (2)	243
図 163	SI15 出土遺物	204	図 200	SI27 遺構図	244
図 164	SI16 遺構図 (1)	205	図 201	SI27 出土遺物	245
図 165	SI16 遺構図 (2)	206	図 202	SI28 遺構図	246
図 166	SI16 遺構図 (3)、出土遺物	207	図 203	SI28 出土遺物	247
図 167	SI17 遺構図 (1)	209	図 204	SI29 遺構図 (1)	248
図 168	SI17 遺構図 (2)	210	図 205	SI29 遺構図 (2)、出土遺物	249
図 169	SI17 遺構図 (3)、出土遺物	211	図 206	SI30 遺構図	250
図 170	SI17・SI18 上層出土遺物	212	図 207	SI30 出土遺物	251
図 171	SI18 遺構図 (1)	213	図 208	SI33 遺構図、出土遺物	252
図 172	SI18 遺構図 (2)	214	図 209	SI34 遺構図、出土遺物	253
図 173	SI18 遺構図 (3)	215	図 210	SI35 遺構図	255
図 174	SI18 出土遺物	216	図 211	SI36 遺構図 (1)	256
図 175	SI19 遺構図 (1)	217	図 212	SI36 遺構図 (2)、出土遺物	257
図 176	SI19 遺構図 (2)	218	図 213	SI37 遺構図 (1)	258
図 177	SI19 出土遺物	219	図 214	SI37 遺構図 (2)	259

図 215	SI37 出土遺物 (1) ……	260	遺構図、SP29・SP40・SP55 出土遺物……	302	
図 216	SI37 出土遺物 (2) ……	261	図 252	SD04 遺構図、出土遺物 ……	303
図 217	SI39 遺構図、出土遺物……	262	図 253	SD10 遺構図、出土遺物 ……	304
図 218	SB01 遺構図 (1) ……	263	図 254	SD12 遺構図、出土遺物 ……	305
図 219	SB01 遺構図 (2)、出土遺物……	264	図 255	SD32 遺構図、出土遺物 ……	306
図 220	SB02 遺構図 (1) ……	266	図 256	SK009 遺構図、出土遺物 ……	308
図 221	SB02 遺構図 (2)、出土遺物……	267	図 257	SK029・SK064 遺構図、出土遺物 ……	309
図 222	SB03 遺構図 (1) ……	268	図 258	SK139・SK173 遺構図、出土遺物 ……	310
図 223	SB03 遺構図 (2)、出土遺物……	269	図 259	SK180 遺構図、出土遺物 ……	311
図 224	SB04 遺構図 (1) ……	271	図 260	SK182 遺構図、出土遺物 ……	312
図 225	SB04 遺構図 (2) ……	272	図 261	SK183 遺構図、出土遺物 ……	313
図 226	SB04 遺構図 (3) ……	273	図 262	SK184 遺構図 ……	314
図 227	SB04 遺構図 (4) ……	274	図 263	SK184 出土遺物 ……	315
図 228	SB04 遺構図 (5) ……	275	図 264	SK185 遺構図、出土遺物 ……	317
図 229	SB04 遺構図 (6) ……	276	図 265	SK186 遺構図 ……	318
図 230	SB04 遺構図 (4) ……	277	図 266	SK186 出土遺物 ……	319
図 231	SB04 出土遺物 (1) ……	279	図 267	SK194・SK200 遺構図、出土遺物 ……	321
図 232	SB04 出土遺物 (2) ……	280	図 268	SK201・SK204 遺構図、SK201 出土遺物…	322
図 233	SB04 出土遺物 (3) ……	281	図 269	SK207 遺構図、SK204・SK207 出土遺物…	323
図 234	SB04 出土遺物 (4) ……	282	図 270	SK208・SK209 遺構図、SK208 出土遺物…	325
図 235	SB04 出土遺物 (5) ……	283	図 271	SK211 遺構図、SK209・SK211 出土遺物…	326
図 236	SB04 出土遺物 (6) ……	284	図 272	SK232 遺構図、出土遺物 ……	327
図 237	SB05 遺構図……	285	図 273	SK233・SK239 遺構図、SK233 出土遺物…	329
図 238	SB06 遺構図、出土遺物……	286	図 274	SK239 出土遺物 (1) ……	330
図 239	SB07 遺構図……	288	図 275	SK239 出土遺物 (2) ……	331
図 240	SB08 遺構図、出土遺物……	289	図 276	SK239 出土遺物 (3) ……	332
図 241	SB09 遺構図 (1) ……	290	図 277	SK243 遺構図、出土遺物 ……	333
図 242	SB09 遺構図 (2) ……	291	図 278	SK262・SK363 遺構図、出土遺物 ……	334
図 243	SB09 出土遺物……	292	図 279	SK405 遺構図、出土遺物 ……	335
図 244	SA01 遺構図……	293	図 280	SK438 遺構図、出土遺物 ……	336
図 245	SA02 遺構図……	294	図 281	SK485 遺構図、出土遺物 ……	337
図 246	SA03 遺構図……	295	図 282	SK506 遺構図、出土遺物 ……	338
図 247	SA06 遺構図、出土遺物……	296	図 283	SK511 遺構図、出土遺物 ……	339
図 248	SU01 遺構図……	297	図 284	SK514・SK516 遺構図、出土遺物 ……	340
図 249	SU01・SK143・SK144 出土遺物……	298	図 285	SK517 遺構図、出土遺物 ……	342
図 250	SS01・SS02 遺構図……	299	図 286	SK527・SK557・SK589 遺構図、出土遺物 …	343
図 251	SP29・SP30・SP40・SP54・SP55・SP60・SP66		図 287	SK622・SK644・SK650 遺構図、出土遺物 …	344

図 288	SK659 遺構図、出土遺物	345	図 293	古代の遺構外出土遺物 (1)	350
図 289	SK669・SK677 遺構図、出土遺物	346	図 294	古代の遺構外出土遺物 (2)	351
図 290	SK708・SK759 遺構図、出土遺物	347	図 295	古代の遺構外出土遺物 (3)	352
図 291	SK767・SK782 遺構図、出土遺物	348	図 296	古代の遺構外出土遺物 (4)	353
図 292	SK808・SK811 遺構図、出土遺物	349	図 297	古代の遺構外出土遺物 (5)	354

表目次

表 1	試掘・確認調査結果	2	表 4	遺構数量表	21
表 2	周辺の遺跡一覧	13	表 5	出土遺物一覧表	23
表 3	上切寺尾古墳群遺跡名対応表	18			

挿入写真目次

写真 1	上切寺尾古墳群調査前風景	4	写真 3	平成 27 年度現地見学会	6
写真 2	日焼遺跡調査前風景	4	写真 4	タイムスリップ探検隊	6

写真図版目次

巻頭図版 1

上切寺尾古墳群 A 地区発掘区遠景

上切寺尾古墳群 D 地区発掘区遠景

巻頭図版 2

SZ13 周溝内遺物出土状況

上切寺尾古墳群の出土土器

巻頭図版 3

SB04 検出状況

SK223 出土瑞花双鳥八稜鏡

巻頭図版 4

SK485 出土墨書土器「大令」

SK517 出土ロクロ土師器

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

上切寺尾古墳群と日焼遺跡は、岐阜県北部、飛騨地域の中心都市である高山市に所在し、市街地が広がる高山盆地北西端に位置する（図1）。

今回の発掘調査は、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所（以下、「事務所」という。）による中部縦貫自動車道高山清見道路の建設に伴い実施したものである。この道路は、高山市と東海北陸自動車道を直結し、高速交通サービスの提供、高山市内の交通混雑の緩和、さらには沿線の文化・観光資源を活かした地場産業振興や観光リゾートとしての地域発展の支援等を目的に計画された一般国道の自動車専用道路である。

事業予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地「上切寺尾古墳群」（岐阜県遺跡番号21203-06586）と「日焼遺跡」（岐阜県遺跡番号21203-00455）が所在することから、事業に先立ち事務所は試掘・確認調査を岐阜県教育委員会（以下、「県教育委員会」という。）に依頼し、県教育委員会は上切寺尾古墳群で平成26年10月29日と11月4日、12月1日の3日間、日焼遺跡で平成26年12月1日～3日の3日間実施した。この試掘・確認調査の結果、上切寺尾古墳群では古墳の他に古代の竪穴建物・土坑・溝が、日焼遺跡では古代の竪穴建物・土坑・溝が確認されたため、岐阜県発掘調査適用基準に基づき、それぞれ8,250㎡と1,852㎡の本発掘調査が必要との意見がまとめられた（図2）。

その後、文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、事務所長から県教育委員会教育長に埋蔵文化財発掘通知（平成27年4月9日付け国部整高調第3号）が提出され、同条第4項の規定に基づき、県教育委員会教育長から事務所長あて発掘調査実施勧告（平成27年4月9日付け社文第54号の17、同年5月20日付け社文第54号の215）が通知された。事務所長は、発掘調査の実施を県教育委員会教育長に依頼し、岐阜県文化財保護センター（以下、「センター」という。）が実施した。センターは調査着手後、文化財保護法第99条第1項の規定に基づき、発掘調査の報告（平成27年5月27日付け文財セ第80号、

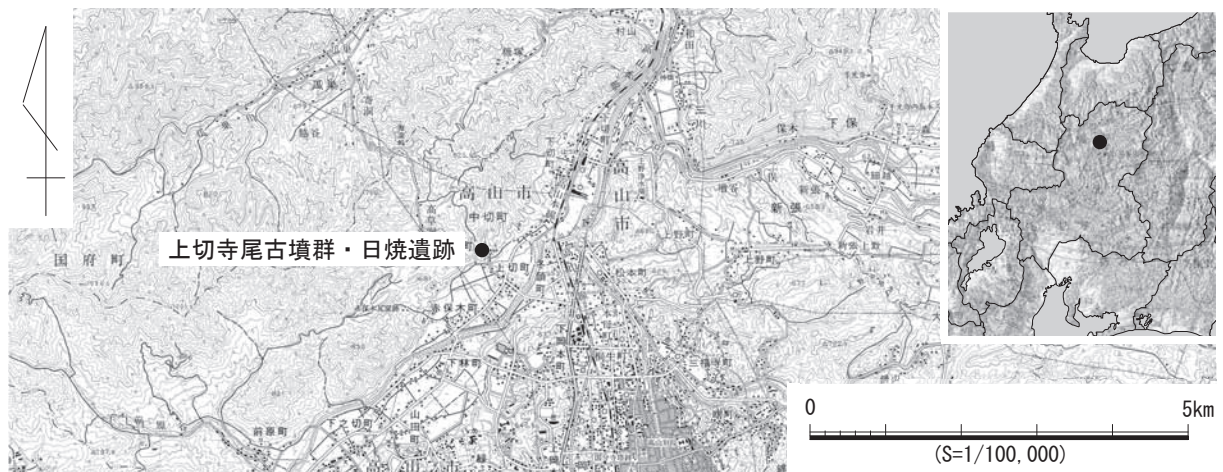


図1 遺跡位置図（国土地理院発行1:50,000地形図「飛騨古川」「高山」「町方」（平成13年度版）、「三日町」（平成11年度版）に一部加筆）

2 第1章 調査の経緯

平成28年5月11日付け文財セ第80号) を県教育委員会教育長に提出した。

表1 試掘・確認調査結果

試掘坑 No.	検出遺構 (基数)	縄文土器	弥生・土師器	須恵器	灰釉陶器	中近世陶磁器	石器	合計	試掘坑 No.	検出遺構 (基数)	縄文土器	弥生・土師器	須恵器	灰釉陶器	中近世陶磁器	石器	合計
上切寺尾古墳群	TP1 墳丘1、周溝1	0	0	0	0	0	0	0	上切寺尾古墳群	TP9 竪穴建物1	1	11	12	0	0	5	29
	TP2 墳丘1、周溝1	0	0	0	1	0	2	3		TP10 土坑2	0	0	18	0	0	1	19
	TP3 墳丘1、周溝1	0	0	0	0	0	0	0		TP11 なし	0	1	0	0	0	0	1
	TP4 墳丘1、周溝1	0	0	3	0	0	0	3	日焼遺跡	TP1 なし	0	0	0	0	0	0	0
	TP5 墳丘1、周溝1	0	0	0	0	0	0	0		TP2 土坑5	1	0	17	17	0	0	35
	TP6 竪穴建物1	0	0	1	0	0	0	1		TP3 なし	1	0	6	0	0	0	7
	TP7 土坑2	0	0	1	0	0	0	1		TP4 竪穴建物1	0	0	28	5	0	0	33
	TP8 竪穴建物1	0	0	2	0	0	0	2		TP5 なし	0	0	0	0	0	0	0

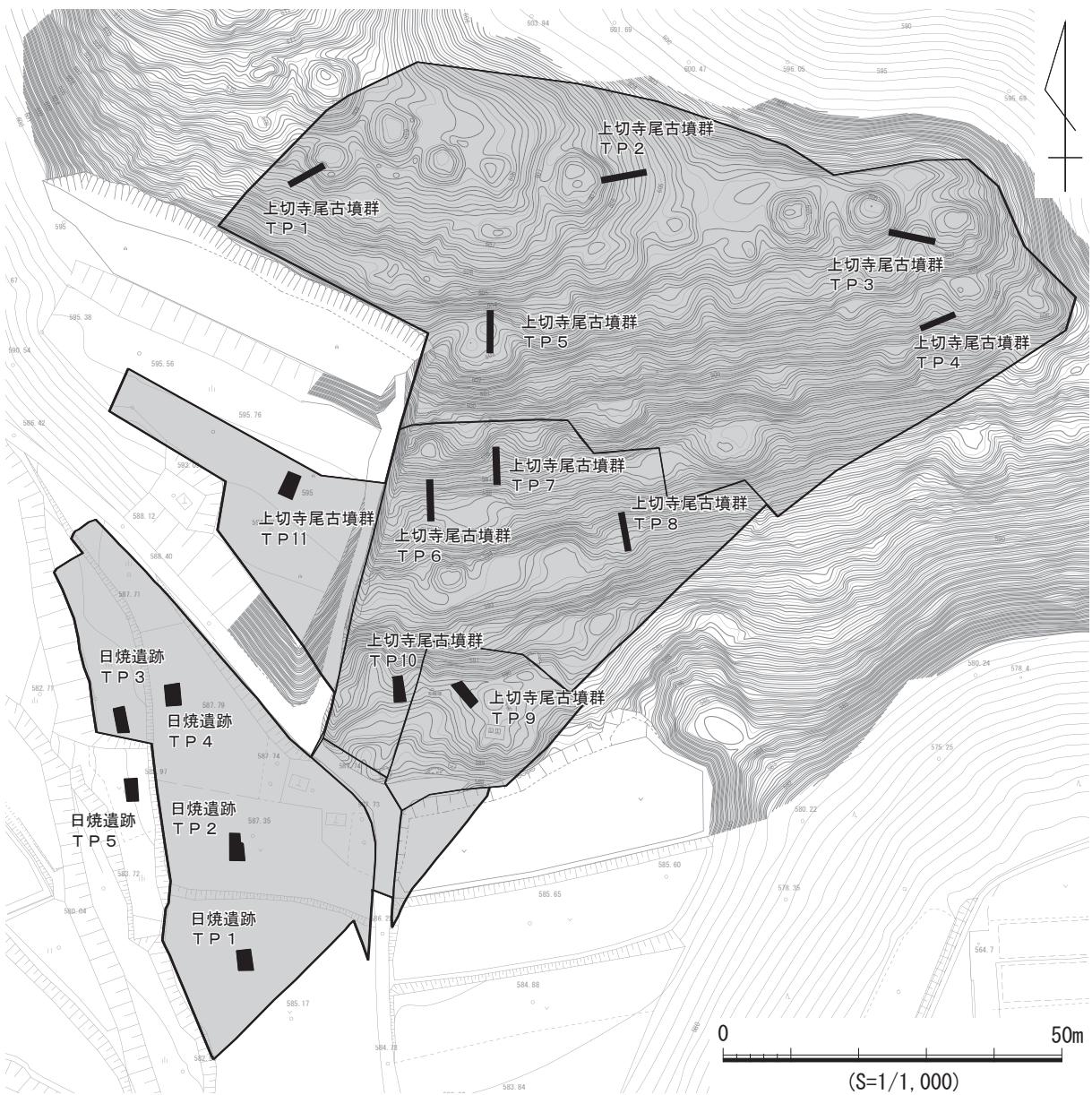


図2 試掘・確認調査坑位置図

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

発掘作業は、日焼遺跡で平成27年度に1,750㎡と平成28年度に102㎡、上切寺尾古墳群で平成27年度に1,800㎡と平成28年度に6,450㎡を対象に実施した。

発掘区には世界測地系を基に(X, Y) = (18,900, 5,800) をもとに100m×100m四方の大グリッドをAからEの6つ設定した。さらに、大グリッド内に5m×5mの小グリッド(以下、「グリッド」という。)を設定し、北から南へAからT、西から東へ1から20を設定した(図3)。なお、日焼遺跡は、平成27年度の発掘区の農道を挟んで西側をA地点、東側をB地点、平成28年度の発掘区となる農道部分をC地点と便宜的に呼称した。上切寺尾古墳群は、平成27年度の発掘区をA地点、平成28年度の発掘区は、A地点の南側をB地点、西側をC地点、北側をD地点と便宜的に呼称した。

表土掘削は、日焼遺跡全地点と上切寺尾古墳群A・B・C地点及びD地点の墳丘以外をバックホウで、D地点の墳丘部分は、大型の掘削道具を用いて人力で行った。

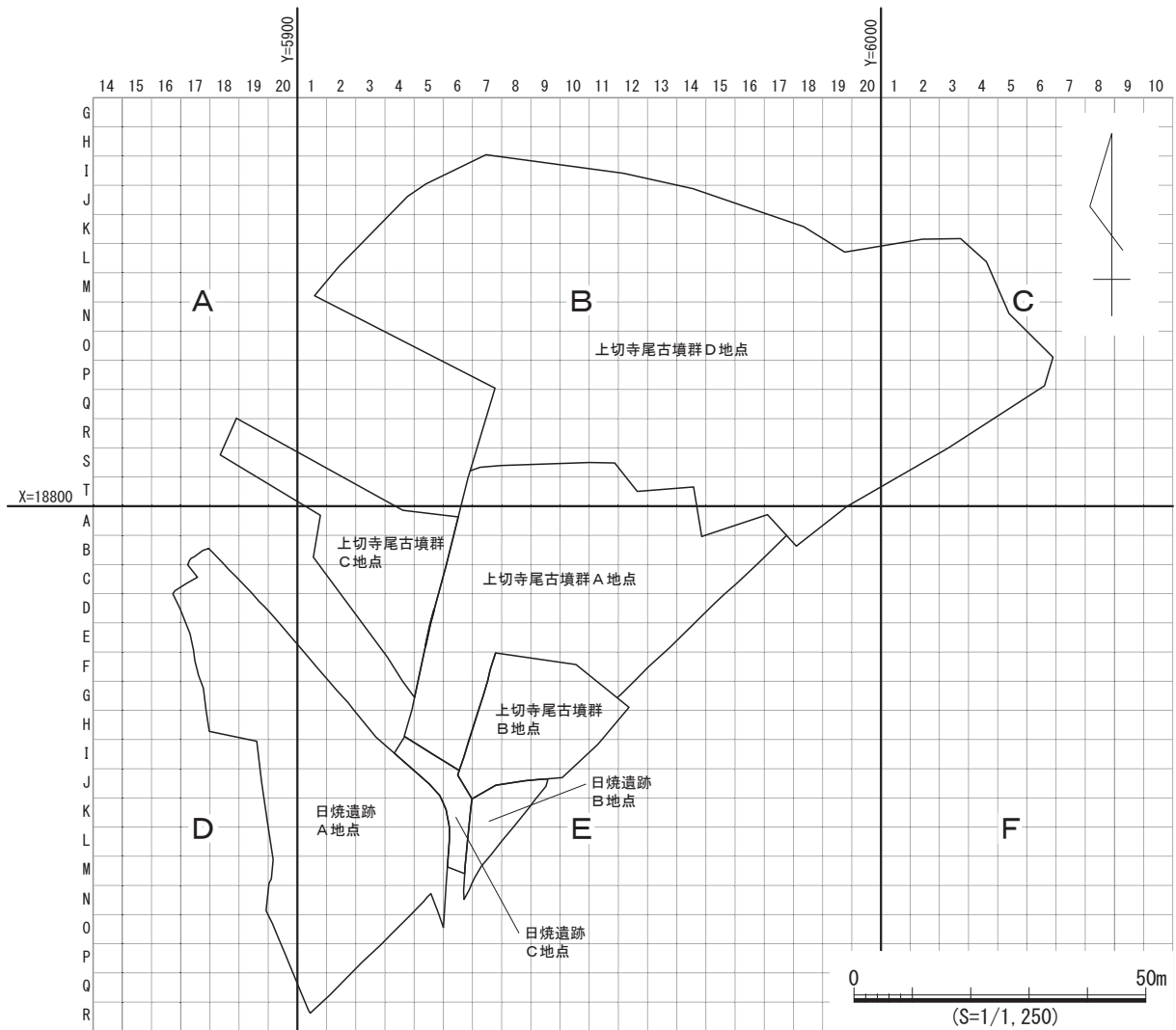


図3 発掘区地区割り図



写真1 上切寺尾古墳群調査前風景



写真2 日焼遺跡調査前風景

遺物包含層掘削・遺構検出・遺構掘削は、ジョレン・草削り鎌などを用いて人力で行った。竪穴建物や土坑、古墳周溝などの遺構掘削は、土層堆積状況や遺物出土状況等の記録を作成しつつ、最終的に遺構埋土をすべて取り除いた。また、必要に応じて遺構断割り調査を実施した。墳丘部分は、十字トレンチを設定し、墳丘盛土の堆積状況や主体部の存在を確認しながら掘削を行った。発掘作業時の遺構番号は検出順の通番とし、日焼遺跡は、平成27年度がS001から、平成28年度はC001から付与した。上切寺尾古墳群は、平成27年度はS001から、平成28年度は担当調査職員毎にA001、B001、C001から付与した。この遺構番号は、整理等作業時に遺構種別ごとに新たな番号を付けたが、発掘作業時の遺構番号も表6～表42の遺構一覧表に「調査時番号」として掲載した。

遺構実測図の作成は、平面図が三次元測量・図化システム、土層断面図は手測りで行った。図面の縮尺は20分の1を基本とし、実測対象によって縮尺を変更した。

写真撮影は、35mmフィルムカメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、6×7cmフィルムカメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、デジタルカメラで撮影した。遺跡全景写真は、ラジコンヘリコプターにより空中写真撮影を実施した。

遺物の取り上げは、トータルステーションにより三次元座標を測定して行った。遺物が集中して出土した場合は出土状況図を作成した後、出土位置を測定して取り上げた。

出土遺物の洗浄及び注記作業、遺物台帳作成（一次整理作業）は、発掘作業支援業務の一部として飛騨国府事務所及び飛騨駐在事務所で行った。

2 発掘作業の経過

現地での調査経過は以下のとおりである。

平成27年度日焼遺跡（A地点・B地点）

第1週（5/7～5/8）A地点の表土掘削を開始。

第2週（5/11～5/15）表土掘削を引き続き実施。並行してグリッド杭打設。

第3週（5/18～5/22）引き続き表土掘削とグリッド杭打設。A地点の北部から人力により包含層掘削、遺構検出を開始。

第4週（5/25～5/29）縄文時代及び古代の竪穴建物（SI37、SI38、SI39）を検出し、掘削を開始。SI37とSI39には北壁にカマドを確認。

- 第5週（6/1～6/5）発掘区の南半部にある土坑群の検出、掘削を開始。
- 第6週（6/8～6/12）灰釉陶器の集積土坑（SK496）を検出し、掘削を開始。墨書土器を含む灰釉陶器が、積み重なるように出土した。
- 第7週（6/15～6/19）古代の竪穴建物（SI37）やSK496の掘削。景観写真撮影を実施。
- 第8週（6/22～6/26）EM04グリッドで再度遺構検出作業を行ったところ、縄文時代早期の煙道付炉穴（SL02）を検出し掘削。
- 第9週（6/29～7/3）A地点の補足調査実施。高山市教育委員会大石崇史氏が来跡し、SL02に関して助言を得る。
- 第10週（7/6～7/10）A地点の埋め戻し作業実施。
- 第11週（7/13～7/17）B地点の表土掘削実施。
- 第12週（7/20～7/24）随縁寺裏B地点遺跡発掘作業のため作業休止。
- 第13週（7/27～7/31）B地点の包含層掘削、遺構検出を実施。検出した遺構の掘削を終了。
- 第14週（8/3～8/7）景観撮影を実施。
- 第15週（8/10～8/14）夏期作業休止。
- 第16週（8/17～8/21）B地点の埋め戻し作業実施。

平成27年度上切寺尾古墳群（A地点）

発掘作業前の5月7日にA地点とB地点、7月4日にC地点とD地点の現況地形測量を実施した。

- 第1週（7/27～7/31）表土掘削を開始。高山市教育委員会岩田崇氏とともに現況地形測量図をもとに、上切寺尾古墳群1号古墳から18号古墳の位置の照合作業を実施。
- 第2週（8/3～8/7）表土掘削を終了。
- 第3週（8/10～8/14）夏期作業休止。
- 第4週（8/17～8/21）遺物包含層掘削、遺構検出作業を開始。SZ03、SZ06とその周溝、古代の竪穴建物（SI12、SI18）などを検出。
- 第5週（8/24～8/28）縄文時代の土坑（SK133）、墳丘や周溝を伴わない埋葬施設（ST02、ST03）、SZ05などを検出。
- 第6週（8/31～9/4）SZ04を検出。SK133の底面付近から完形の縄文土器（309）が出土。
- 第7週（9/7～9/11）集石遺構（SS01）などを検出。
- 第8週（9/14～9/18）竪穴建物（SI20、SI21）などを検出。
- 第9週（9/21～9/26）竪穴建物（SI21）のカマドなどを検出。
- 第10週（9/28～10/2）竪穴建物（SI18）のカマドなどを検出。関連指導調査員渡邊博人氏による現地調査指導。
- 第11週（10/5～10/9）竪穴建物（SI16）などを検出。
- 第12週（10/12～10/17）竪穴建物（SI11）及びそのカマド、竪穴建物（SI17）のカマド、竪穴建物（SI12）のカマドなどを検出。現地見学会を開催（参加者167名）。
- 第13週（10/19～10/24）竪穴建物（SI04、SI19）などを検出。
- 第14週（10/26～10/31）重複する竪穴建物（SI23、SI24、SI28）を検出。
- 第15週（11/2～11/7）発掘区南側（EF5～EI6グリッド）の遺物包含層掘削、遺構検出作業を実施。



写真3 平成27年度現地見学会



写真4 タイムスリップ探検隊

第16週（11/9～11/13）遺構掘削を終了し、景観写真撮影を実施。

第17週（11/16～11/20）発掘区内の埋戻し作業を開始。

第18週（11/23～11/27）墳丘解体及び下部調査を実施。

第19週（11/30～12/3）発掘区の埋め戻しが終了。

出土遺物の洗浄、注記等の一次整理作業は、上切寺尾古墳群・日焼遺跡・随縁寺裏B地点遺跡と合わせて、9月16日から1月15日までの期間に飛騨国府事務所で行った。

平成28年度日焼遺跡（C地点）

第1週（5/9～5/13）発掘区東半分の表土掘削、グリッド杭の打設を実施。包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を開始。古代の竪穴建物（SI33、SI36）、柵跡（SA04、SA05）、土坑（SK006、SK673）などを検出。

第2週（5/16～5/20）検出した遺構を掘削。

第3週（5/23～5/27）竪穴建物（SI33）などを掘削。

第4週（5/30～6/3）関連指導調査員梶原義実氏による現地調査指導。

第5週（6/6～6/10）竪穴建物（SI34、SI35）を掘削し、北壁にカマドを検出。竪穴建物（SI36）掘削。

第6週（6/13～6/14）発掘区東半分の遺構掘削を終了。発掘区西半分は上切寺尾古墳群発掘作業の排土運搬用作業道として使用していたため、7月29日まで作業休止とした。

第13週（8/2～8/5）発掘区西半分の表土掘削、グリッド杭打設、包含層掘削、遺構検出を実施。古代の柵（C）を検出。遺構掘削を終了。8月30日まで作業を休止。

第17週（8/29～9/2）景観写真撮影を実施。

第18週（9/5～9/6）埋め戻し作業実施。

平成28年度上切寺尾古墳群（B地点・C地点・D地点）

第1週（5/9～5/13）B地点とD地点の重機による表土掘削実施。D地点は墳丘部分の表土掘削は人力により実施。包含層掘削、遺構検出作業を開始。礎石建物（SB04）の礎石などを検出。

第2週（5/16～5/20）D地点は表土掘削作業も引き続き実施。C地点の重機による表土掘削作業実施。

第3週（5/23～5/27）SZ51の墳丘とその周溝を検出及び掘削。

第4週（5/30～6/3）礎石建物（SB04）の調査。SZ22の周溝を検出。

第5週（6/6～6/10）SZ22周溝などの掘削。

第6週（6/13～6/17）SZ20（9号古墳）の墳丘やSZ22（11号古墳）主体部を検出。関連指導調査員高橋浩二氏による現地調査指導。

第7週（6/20～6/24）SZ38、SZ39、SZ40の墳丘などを検出。

第8週（6/27～7/1）SZ21（10号古墳）、SZ30（13号古墳）、SZ38（12号古墳）主体部などを検出。SZ38周溝内においてST10を検出。

第9週（7/4～7/8）礎石建物（SB04）中央の土坑から八稜鏡が出土。SZ40主体部、SZ50主体部などを検出。

第10週（7/11～7/15）SZ47などを検出。

第11週（7/18～7/22）SZ36、SZ46などを検出。タイムスリップ探検隊（飛騨）開催（参加者20名）。

第12週（7/25～7/29）SZ20（9号古墳）主体部、SZ30（13号古墳）主体部、SZ37墳丘などを検出。

第13週（8/1～8/5）SZ12（4号古墳）、SZ14（3号古墳）、SZ49などを検出。関連指導調査員成瀬正勝氏による現地調査指導。

第14週（8/8～8/12）SZ15（5号古墳）、SZ16（7号古墳）、SZ44などを検出。

第15週（8/15～8/19）SZ17（8号古墳）、SZ26（15号古墳）、SK324などを検出。

第16週（8/22～8/26）B地点、C地点の遺構掘削作業終了。SZ27、SZ45などを検出。

第17週（8/29～9/2）SZ24（17号古墳）、SZ34、SZ35（14号古墳）などを検出。B地点、C地点の景観写真撮影を日焼遺跡C地点と合わせて実施。

第18週（9/5～9/9）B地点墳丘下部調査実施。

第19週（9/12～9/16）SZ29（16号古墳）主体部、SZ25、SZ34、SZ44を検出。

第20週（9/19～9/23）指導調査員徳田誠志氏による現地調査指導。

第21週（9/26～10/1）SZ15（5号古墳）主体部、SZ33などを検出。10月1日に現地見学会を計画するが、降雨により中止となる。

第22週（10/3～10/7）SZ32、SZ33主体部などを検出。

第23週（10/10～10/15）SZ41（18号古墳）、SZ42などを検出。

第24週（10/17～10/22）SZ43、SZ51主体部などを検出。

第25週（10/24～10/28）柱穴状の土坑などを検出。

第26週（10/31～11/4）D地点景観写真撮影実施。全体図校正実施後、墳丘解体及び墳丘下部遺構調査開始。事業者との埋め戻し等に関する打合せ。

第27週（11/7～11/11）落とし穴状の土坑（SK444）、竪穴建物（SI30）などを検出。

第28週（11/14～11/18）竪穴建物（SI30）の掘削。D地点墳丘下部の遺構調査終了。

第29週（11/21～11/25）図面校正作業終了後、埋め戻し作業実施。

出土遺物の洗浄・注記等の一次整理作業は、上切寺尾古墳群・日焼遺跡と合わせて、10月12日から12月6日までの期間に飛騨国府事務所及び飛騨駐在事務所で行った。

3 整理等作業の経過

整理等作業はセンター飛騨駐在事務所において平成29年4月から令和2年3月まで実施した。平成

8 第1章 調査の経緯

29年度は、上切寺尾古墳群の調査記録及び出土遺物の整理等作業を行い、6月30日に渡邊博人氏（元各務原市教育委員会文化財課長）に上切寺尾古墳群から出土した須恵器に関する指導を、8月21日に久保智康氏（叡山学院教授）に礎石建物に関する指導を、12月4日に徳田誠志氏（宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査官）に古墳群に関する指導を受けた。なお、SZ35主体部から出土した炭化物の放射性炭素年代測定とSK223出土の鏡付着物の同定、同遺構埋土内の微細物分析、灰釉陶器の5点の付着物同定を実施した。平成30年度も上切寺尾古墳群の調査記録及び出土遺物の整理等作業を行い、12月17日に高橋浩二氏（富山大学人文学部准教授）に古墳群及び古墳から出土した遺物に関する指導を、2月25日・26日に徳田誠志氏に古墳群の特質に関する指導を受けた。平成31年度は、上切寺尾古墳群及び日焼遺跡の調査記録及び出土遺物の整理等作業を行い、2月6日・7日に徳田誠志氏に報告書総括に関する指導を、2月17日に藤澤良祐氏（愛知学院大学教授）に出土した灰釉陶器や陶磁器類の産地や編年的位置づけなどに関する指導を、2月21日に久保智康氏に礎石建物及び建物に関連する出土遺物に関する指導を受けた。

4 調査体制

発掘作業及び整理等作業の体制は、以下のとおりである。

センター所長	宮田敏光（平成27年度）、羽田能崇（平成28・29年度）、野村幹也（平成30年度）、小林法良（令和元年度）
総務課長	二宮 隆（平成27・28年度）、加藤武裕（平成29・30年度・令和元年度）
調査課長	成瀬正勝（平成27年度）、春日井恒（平成28～30年度・令和元年度）
調査担当係長	大宮次郎（平成27・28年度）、鷲見博史（平成29年度）、春日井恒（平成30年度・令和元年度兼務）
調査担当総括	長谷川幸志（平成30年度）、澤村雄一郎（令和元年度）
担当調査職員	三島 誠（平成27・28年度）、小林新平（平成27・28年度）、柏木賢一（平成28・29年度）、柳坪武志（平成30年度・令和元年度）

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

日焼遺跡と上切寺尾古墳群は、高山盆地の北西に位置する三枝山^{みえだ}（標高825m）の南麓に所在する（図4）。遺跡周囲の地質は、三枝山側で礫岩・砂岩・凝灰岩・安山岩などの多様な岩石からなる上広瀬層と、寿美峠^{すみ}の西に位置する見量山^{みはか}（標高997m）側は、火山活動によって形成された濃飛流紋岩（溶結凝灰岩）で構成される。また、寿美峠の入口付近から中切地区までの山裾は、頁岩と砂岩の互層で構成された森部層^{もりぶ}がある¹⁾。

見墓山と三枝山の南には、牧ヶ洞断層や原山断層と同じ方角で、南西から北東方向に流れる川上川がある。川上川は幾多の川筋を変えながら砂礫を堆積させ、河岸段丘を形成してきた。高曽洞川^{こそぼら}の右岸では河岸段丘が明瞭に確認でき、上位面と下位面に区分される（図5）。両遺跡は、三枝山から南に延びる丘陵尾根部（標高608m付近）から南側の傾斜地及び緩斜面（標高585m付近）に位置する。河岸段丘上の上切町集落とは比高差が約30mあり、両遺跡からは眼下に上切町や中切町が一望できる。こうした立地から、字名「日焼」は日当たりのよい場所であることを由来としているのではないかと

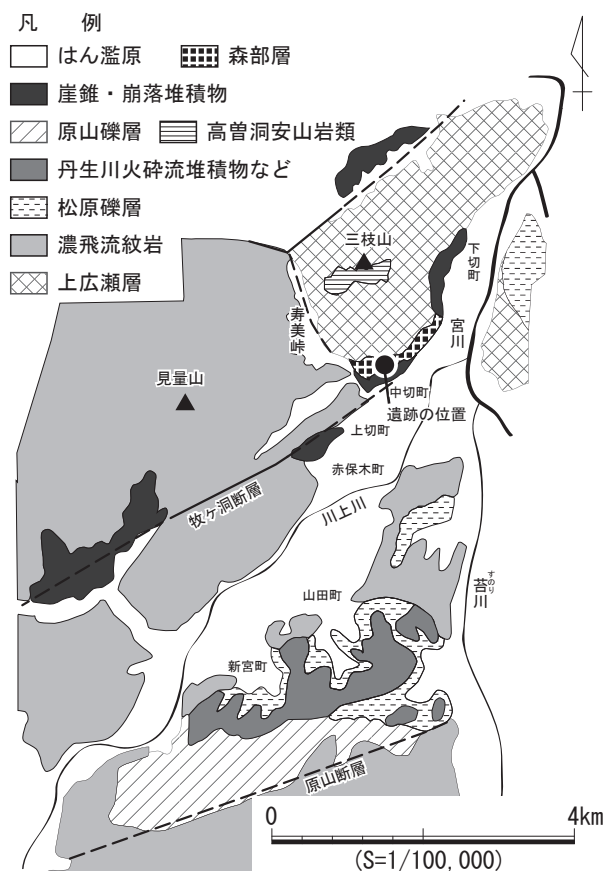


図4 遺跡周辺の地質（上枝村史編纂委員会 2000『上枝村史』を一部改変）



図5 周辺の地形と遺跡の立地（年国土地理院2万5千分の1地形図「飛驒古川」「三日町」に加筆）

考えられる。

明治年間の地割（図6）をもとに両遺跡付近の地割と土地利用について確認すると、上切寺尾古墳群の土地の地目は木山、草山、芝山とあり里山として活用され、日焼遺跡では畑として耕作されていたことがわかる。

両遺跡が所在する場所は、丘陵尾根部から南側傾斜地及び緩斜面にあたり、東西が浸食による開析谷、南は段丘崖となる。当地へ向かうルートには、河岸段丘面の集落からは、北西から南東へ延びる里道があり、更に丘陵緩斜面の中央付近から南方向に直線的に続いた後、屈曲して下りる里道がある。丘陵緩斜面上では、里道を基準にして両側に東西方向の短冊型の地割が確認できる。里道は、丘陵地斜面手前の約10m×約8m方形の地割（図6の②）で途切れ、その北東の位置には約9m×約4mの方形の地割（図6の①）が確認できる。発掘調査前には、②の周囲3箇所と①に現代の民間墓地が存在していた。①の北西10mの表土と北東角付近のⅡ層から五輪塔の空風輪が各1点、5m南のⅢa層からは地輪1点が出土したことから、中世から現代にわたり墓域として利用されていた可能性が高いと考える。また、①の地割は当発掘調査で検出した礎石建物と南側で重なる。②の地割は明治期に畑地であるため、詳細は不明である。

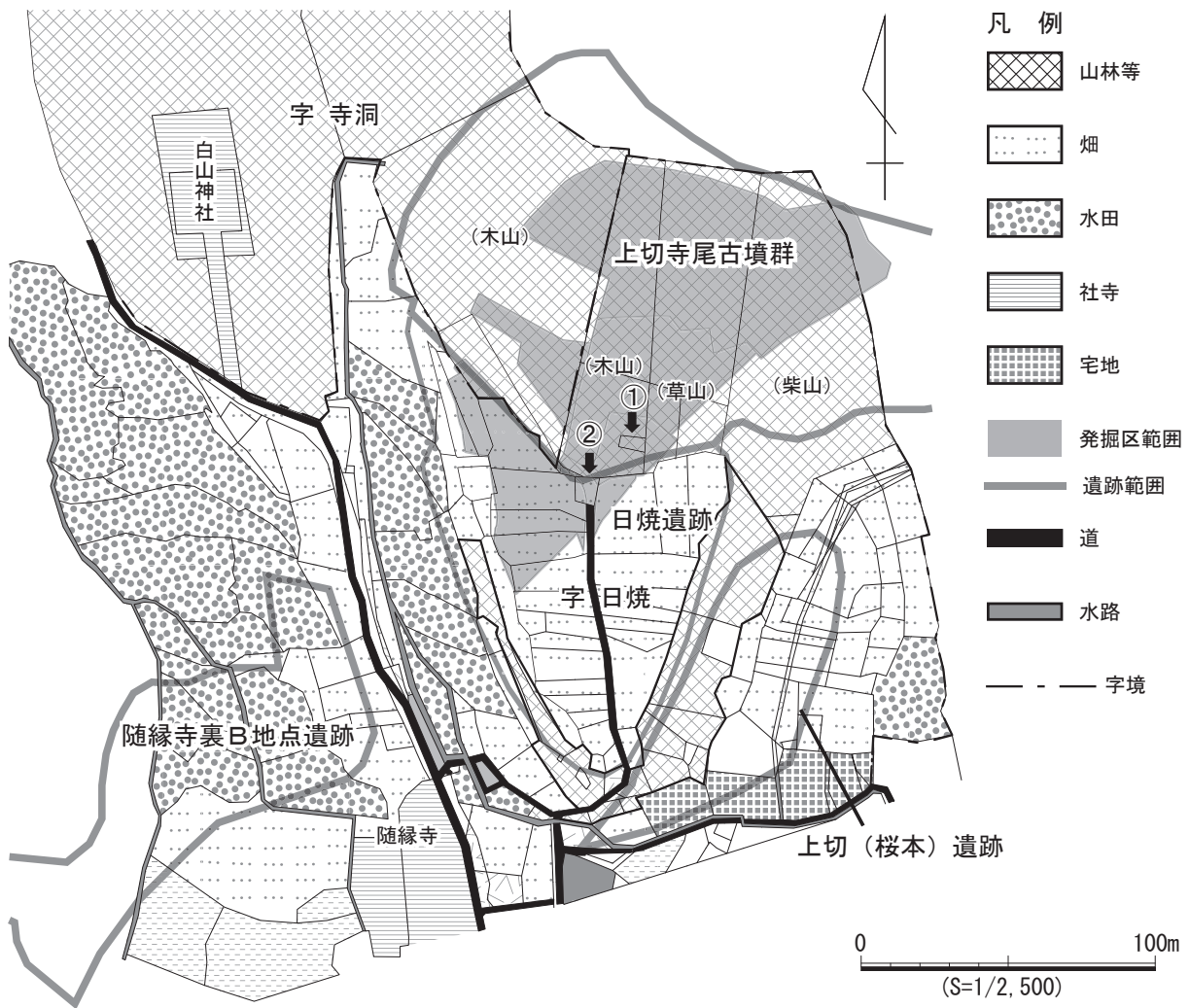


図6 発掘区周辺の地割

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺には数多くの遺跡が分布しており、それらの中には発掘調査によって遺跡の性格が明らかとなったものもある。本節ではそれらの概要を時代順に記す。図7に示した遺跡数は120箇所あり、時代ごとの遺跡数（重複も含む）は縄文時代が31件、弥生時代が17件、古墳時代が47件、古代が43件、中世が8件、近世が4件あり、古墳時代、古代、縄文時代の順に遺跡が多い。

以下に、時代ごとの主な遺跡の概要を記す。なお、文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、図7・表2と一致する。

縄文時代の遺跡は、川上川と宮川兩岸の丘陵地や河岸段丘上に集中する。中切上野遺跡（23）は、平成8年度に高山市教育委員会（以下、「市教委」と記載する。）が発掘調査を実施し²⁾、早期の集石遺構2基と前期の竪穴建物15軒が検出された。赤保木遺跡（71）では、平成3年度に市教委が発掘調査を実施し³⁾、竪穴建物4軒が検出された。また、平成16年度に財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター（以下、「県センター」と記載する。）が発掘調査を実施し、中期中葉から後葉の竪穴建物26軒を検出した。出土遺物には、信州や北陸、東海、関西などの周辺地域の影響を受けた土器がある。ウバガ平遺跡（41）は、平成13・19年度に県センターが発掘調査を実施し、前期から中期の竪穴建物2軒を検出した。出土遺物には、草創期の有舌先頭器などがある。前平山稜遺跡（112）では、平成2～3年度に市教委が発掘調査を実施し³⁾、早期の異形部分磨製石器4点などが出土した。

弥生時代の遺跡の多くは、縄文時代の遺跡と立地が類似するが、遺跡数は減少し半数程度になる。赤保木遺跡（71）では中期の竪穴建物2軒が検出され、横羽状文の甕などが出土した。ウバガ平遺跡では中期後半の竪穴建物3軒を検出し、横羽状文の甕などが出土した。

古墳時代の遺跡は古墳群3箇所、古墳39箇所、集落跡2箇所、散布地が3箇所である。遺跡の分布は見墓山南東部の緩斜面と、川上川左岸と宮川との合流点付近に認められる。集落跡では、野内遺跡A地区（50）で平成15年度に県センターが発掘調査を実施し、5世紀代の竪穴建物を多数検出した。野内遺跡B地区（50）では平成14・16・17年度に県センターが発掘調査を実施し、弥生時代終末期～古墳時代早期と前期、終末期の竪穴建物12軒を検出した。野内遺跡D地区（50）では平成16・17年度に県センターが発掘調査を実施し、後期の竪穴建物1軒を検出した。ウバガ平遺跡では、古墳時代前半末から後期後半の竪穴建物9軒を検出した。赤保木ぼた上古墳群（76～82）は、平成4年度に市教委が5号古墳（80）の範囲確認調査を実施し、埋葬施設が竪穴式石室であることが判明した。冬頭大塚古墳（92）では昭和45年度に市教委が発掘調査を実施し⁴⁾、5世紀後半の2段構築の円墳であることが判明した。埋葬施設は川原石積みの竪穴式石室2基で、内部より直刀や素文鏡などが出土した。冬頭山崎1号古墳（89）、冬頭山崎2号古墳（90）、冬頭山崎1号横穴（91）は、平成10年度に県センターが発掘調査を実施した。冬頭山崎2号古墳は5世紀末の2段構築の円墳で、石室から金銅製の刀装具をもつ鉄剣が出土した。冬頭山崎1号古墳（89）は横穴式石室を主体部とする7世紀前半の古墳で、冬頭山崎1号横穴は高山盆地北東部以外で初めて発掘調査した横穴で、7世紀代のものであることが判明した。与島3・4・6号古墳（45・46・48）は、平成9年度に県センターが発掘調査を実施し、横穴式石室を主体部とする7世紀中葉の円墳であることが判明した。ウバガ平古墳群（42）では、7世紀末から8世紀初頭と考えられる終末期の円墳4基を検出した。



図7 周辺遺跡位置図 (国土地理院発行 1 : 25,000 地形図「飛驒古川」「高山」「町方」「三日町」に一部加筆)

表2 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	上切寺尾古墳群	古墳	古墳	60	赤保木8号古窯跡	生産遺跡	奈良
2	日焼遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良	61	赤保木9号古窯跡	生産遺跡	奈良
3	瓜巢大洞1号古墳	古墳	古墳	62	赤保木10号古窯跡	生産遺跡	奈良
4	瓜巢大洞1号古窯跡	生産遺跡	平安	63	赤保木11号古窯跡	生産遺跡	奈良
5	瓜巢大洞2号古窯跡	生産遺跡	平安	64	赤保木12号古窯跡	生産遺跡	奈良
6	瓜巢中島古窯跡	生産遺跡	白鳳	65	下やせ尾1号古墳	古墳	古墳
7	瓜巢小坂古窯跡	生産遺跡	白鳳	66	下やせ尾2号古墳	古墳	古墳
8	わせ洞石灰窯跡	生産遺跡	近世	67	赤保木古窯跡群	生産遺跡	奈良
9	瓜巢わせ洞古窯跡	生産遺跡	奈良	68	真言屋敷裏山古墳	古墳	古墳
10	より洞遺跡	散布地	縄文	69	赤保木本願寺遺跡	散布地	縄文
11	三川落合遺跡	散布地	縄文	70	赤保木7号古窯跡	生産遺跡	平安
12	後洞遺跡	散布地	縄文	71	赤保木遺跡	集落跡	縄文
13	三川越中街道	その他の遺跡	近世	72	ミヨガ平1号古墳	古墳	古墳
14	的場遺跡	散布地	奈良	73	ミヨガ平2号古墳	古墳	古墳
15	恵喜庵寺跡	社寺跡	縄文・室町	74	川上川左岸1号古墳	古墳	古墳
16	下切芦谷遺跡	散布地	古墳	75	下之切遺跡	散布地	縄文
17	下切古墳	古墳	古墳	76	赤保木ぼた上1号古墳	古墳	古墳
18	松本上野遺跡	散布地	縄文	77	赤保木ぼた上2号古墳	古墳	古墳
19	下切遺跡	散布地	縄文・弥生	78	赤保木ぼた上3号古墳	古墳	古墳
20	宮野B地点遺跡	散布地	縄文・弥生	79	赤保木ぼた上4号古墳	古墳	古墳
21	中切宮ヶ平遺跡	散布地	縄文・古墳	80	赤保木ぼた上5号古墳	古墳	古墳
22	中切城跡	城館跡	中世	81	赤保木ぼた上6号古墳	古墳	古墳
23	中切上野遺跡	集落跡	縄文・奈良	82	赤保木ぼた上7号古墳	古墳	古墳
24	中切上野1号古墳	古墳	古墳	83	上ヶ見古墳	古墳	古墳
25	中切上野2号古墳	古墳	古墳	84	東田遺跡	散布地	縄文
26	中切上野3号古墳	古墳	古墳	85	流れ田古墳	古墳	古墳
27	中切上野4号古墳	古墳	古墳	86	冬頭遺跡	散布地	縄文・弥生
28	中切上野5号古墳	古墳	古墳	87	大洞塚古墳	古墳	古墳
29	中切上野6号古墳	古墳	古墳	88	冬頭城跡	城館跡	室町
30	日焼(炭焼き)古窯跡	生産遺跡	奈良	89	冬頭山崎1号古墳	古墳	古墳
31	中切日焼遺跡	散布地	縄文・奈良	90	冬頭山崎2号古墳	古墳	古墳
32	中切王塚古墳	古墳	古墳	91	冬頭山崎1号横穴	横穴墓	古墳
33	中切前平城跡	城館跡	鎌倉・室町・安土桃山	92	冬頭大塚古墳	古墳	古墳
34	中切遺跡	古墳	縄文・弥生・奈良	93	下岡本遺跡	散布地	奈良・平安
35	四十九院廃寺	社寺跡	弥生・白鳳	94	冬頭竹田の湯遺跡	散布地	平安
36	上切(桜本)遺跡	散布地	平安	95	下岡本(瀬木)遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳・白鳳
37	随縁寺裏A地点遺跡	散布地	縄文	96	中山古窯跡	生産遺跡	平安
38	随縁寺裏B地点遺跡	散布地	縄文	97	竹ヶ洞A地点遺跡	散布地	縄文
39	与島B地点遺跡	散布地	奈良	98	竹ヶ洞B地点遺跡	散布地	縄文
40	与島C地点遺跡	散布地	古代	99	下林遺跡	散布地	弥生
41	ウバガ平遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・平安	100	山田城跡	城館跡	室町
42	ウバガ平古墳群	古墳	古墳	101	狐洞遺跡	散布地	縄文・弥生
43	与島1号古墳	古墳	古墳	102	打越遺跡	散布地	縄文・弥生
44	与島2号古墳	古墳	古墳・近世	103	中山城跡	城館跡	室町
45	与島3号古墳	古墳	古墳	104	下岡本神田遺跡	散布地	平安
46	与島4号古墳	古墳	古墳	105	古館遺跡	散布地	平安
47	与島5号古墳	古墳	古墳	106	腰宮田遺跡	散布地	弥生・奈良
48	与島6号古墳	古墳	古墳	107	西ノ山遺跡	散布地	弥生・奈良
49	三枝城跡	城館跡	弥生・古代・室町	108	飛騨国分寺跡	社寺跡	奈良
50	野内遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	109	飛騨国分尼寺跡	社寺跡	奈良
51	よしま1号古窯跡	生産遺跡	平安	110	桜ノ前遺跡	散布地	奈良
52	よしま2号古窯跡	生産遺跡	平安	111	茂島古墳	古墳	古墳
53	よしま3号古窯跡	生産遺跡	平安	112	前平山稜遺跡	散布地	縄文・弥生
54	与島A地点遺跡	散布地	縄文	113	前平古墳	古墳	古墳
55	平野遺跡	散布地	縄文	114	西ヶ洞古墳	古墳	古墳
56	上切平野平古墳群	古墳	古墳	115	前平遺跡	散布地	縄文・弥生
57	平野1号古窯跡	生産遺跡	平安	116	越中街道	その他の遺跡	近世
58	平野2号古窯跡	生産遺跡	平安	117	上畑遺跡	散布地	縄文
59	平野3号古窯跡	生産遺跡	平安	118	牧ヶ洞古墳	古墳	古墳
				119	馬場古墳	古墳	古墳

古代では、遺跡数の半分を古窯群1箇所と古窯跡20箇所が占め、見量山の西麓と寿美峠を越えた国府町瓜巢に集中する。散布地は寿美峠を挟んだ見量山と三枝山付近と、中山丘陵地に分布する。三枝城跡(49)は、平成18・20年度に県センターが発掘調査を実施し、9世紀前半から10世紀前半の桁行3間、梁行1間の礎石建物を検出した。その周辺からは、托・火舎・鉄鉢を模倣した須恵器などの仏

具や雁股鏃が出土した。このことから、この礎石建物の性格が山林寺院の可能性が高いとされている。また、北東に隣接する与島C地点(40)では、平成19年度に県センターが実施した発掘調査により、鉄鉢を模倣した須恵器や鉢などの仏具と漆が付着した土器5点が出土した。三枝城跡の南麓にある野内遺跡B地区(50)では、竪穴建物45軒と掘立柱建物4棟、鍛冶関連遺構30基を検出した。緑釉陶器や巡方などが出土し、9世紀前半から10世紀前半に鍛冶関連遺構が構築され、竪穴建物が急増するこの時期の集落は、官営工房的な性格であることが指摘されている。また、野内遺跡C地区(50)では平成17・18年度に県センターが発掘調査を実施し、古代の水田を検出した。水田区画が当地域の推定条里地割と一致していることから、施行時期が9世紀中葉から後葉である可能性が考えられる。

寺院跡では、飛驒国分寺跡(108)が昭和61年度に市教委により範囲確認調査を実施され、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、鬼瓦などが出土した。飛驒国分尼寺跡(109)は、昭和63年度に市教委により範囲確認調査が実施され、桁行7間、梁行4間の礎石建物(金堂)が確認された。

古窯跡では、市教委が昭和48年度に赤保木1～6号古窯(67)を発掘調査し、6基の窯を確認した。1～4号窯は瓦窯で、飛驒国分寺と飛驒国分尼寺に瓦を供給していたことが明らかとなっている。赤保木8号古窯跡(60)では、平成13年度に市教委が発掘調査を実施し、窯体に伴う遺構は確認できなかったが、10世紀初頭の灰釉陶器が出土した。平野1号古窯跡(57)は平成15年度に市教委が発掘調査を実施し、8世紀前半の須恵器を生産した窯であることが判明した。この発掘調査により、この付近一帯の窯跡は、平野1号古窯→赤保木3号古窯→よしま古窯→赤保木5・6号窯跡→赤保木8号古窯跡の変遷が想定でき、出土土器では8世紀中頃の国分寺造営をきっかけとして、美濃須衛古窯系統の須恵器から猿投古窯系統の須恵器へと変化する点が注目されている⁵⁾。

中世では、城館跡6箇所、社寺跡1箇所、集落跡1箇所である。平野部を見下ろす尾根上に分布するのが特徴である。三枝城跡(49)は、平成18・20年度に県センターが発掘調査を実施し、主郭西側に二重の堀切がある山城で、寿美峠方面からの進入に対する監視・防御的な性格を持つことが判明した。冬頭城跡(88)は平成10年度に県センターが発掘調査を実施し、尾根上に簡素な切岸や削平地などの防御施設を有する山城であることが判明した。野内遺跡D地区(50)では、12世紀後半～13世紀前半の四面庇建物2軒を検出した。

近世では、遺跡数4箇所のうち2箇所が三川越中街道(13)と越中街道(116)の街道である。越中街道とは、飛驒高山から越中富山に至る江戸時代の街道の飛驒側の呼称である。わせ洞石灰窯(8)は、上広瀬層に含まれる石灰を焼成する窯跡である。

なお、上切町付近には近世まで条里地割が遺存しており、『上枝村史』では明治期の地割から条里区画を推定している。

注

- 1) 上枝村史編纂委員会2000『上枝村史』「第1章 上枝村の風土」より引用。
- 2) 高山市教育委員会1998『中切上野遺跡発掘調査報告書』
- 3) 高山市教育委員会1993『前平山稜遺跡 赤保木遺跡発掘調査報告書』
- 4) 高山市教育委員会1971『冬頭大塚古墳発掘調査報告書』
- 5) 高山市教育委員会2005「4 赤保木8号古窯跡」『高山市内遺跡発掘調査報告書』

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の基本層序

発掘調査前の土地利用状況は、上切寺尾古墳群A地点・B地点・D地点が山林、上切寺尾古墳群C地点と日焼遺跡が畑地であった。山林であった場所は人工林で、一部を除き近年の人為的な地形改変による削平はあまり見られない。ただし、尾根上から傾斜地、そして緩斜面と地形が変化するため、層相は一様でない。尾根上（上切寺尾古墳群D地点）ではⅡ層の堆積が認められないが、傾斜地から緩斜面にかけて（上切寺尾古墳群A地点・B地点・C地点）はⅡ層の堆積が認められる。また、畑地として利用されていた上切寺尾古墳群C地点や日焼遺跡では、段切り造成による整地層が認められた。山林ではあるが、比較的平坦な場所であった上切寺尾古墳群A地点とB地点でも土地の造成が認められた。こうした場所では、遺物包含層の残存状態が悪い。

図8と図9に、各地点での基本層序を柱状模式図で示した。尾根上及び傾斜地は柱状図1～10、傾斜地を段切り造成した畑地は柱状図11～19、山林から畑地となる緩斜面は柱状図20～31である。全体的に遺物包含層の残存状態は悪く、墳丘盛土下層の他は部分的に残る程度である。特に日焼遺跡においては残存状態が悪く、耕作土を除去すると、遺構基盤層が現れる状態となり、縄文時代から古代にかけての遺構を層位的に検出することはできなかった。墳丘部分の柱状図については、表土除去後に土層図を作成したため、柱状図には表土の記載がないが、I a層が0.1m～0.2mほど堆積していた。

基本層序の概要は以下のとおりで、土性や堆積状況から大きくI層からIV層に区分し、必要に応じて細分した。なお、遺構検出は、原則としてIV層上面で行った。

I層：表土及び耕作土や土地造成時の盛土。

I a層：7.5YR2/2 黒褐色土～10YR3/3 暗褐色土。腐植土。

I b層：10YR3/4 暗褐色土～10YR4/4 褐色土。現代の畑地の耕作土や造成地の表土。

I c層：7.5YR4/4 褐色土～10YR3/4 暗褐色土。段切り造成による盛土。ビニール片を含む。

Ⅱ層：上切寺尾古墳群における、尾根上や斜面地の基盤層（Ⅳ層）が雨水等により流出し斜面下に堆積したもの。7.5YR4/3 褐色土～10YR5/2 灰黄褐色土。調査ではⅢ層上や遺構埋土上に堆積することを確認した。

Ⅲ層：遺物包含層及び墳丘盛土下層で確認した旧表土層。

Ⅲ a層：10YR2/2 黒褐色土～10YR4/6 褐色土。日焼遺跡や上切寺尾古墳群A地点・B地点・C地点で確認でき、上切寺尾古墳群A地点では古代の遺物が出土した。

Ⅲ b層：7.5YR3/2 黒褐色土～10YR4/1 褐灰色土。上切寺尾古墳群D地点の墳丘盛土下層で確認した。古墳築造前の旧表土層で、縄文時代の遺物が出土した。

Ⅳ層：遺構基盤層。7.5YR5/6 明褐色土～10YR7/6 明黄褐色粘質土で堆積土中に砂岩や緑色泥岩を含む。

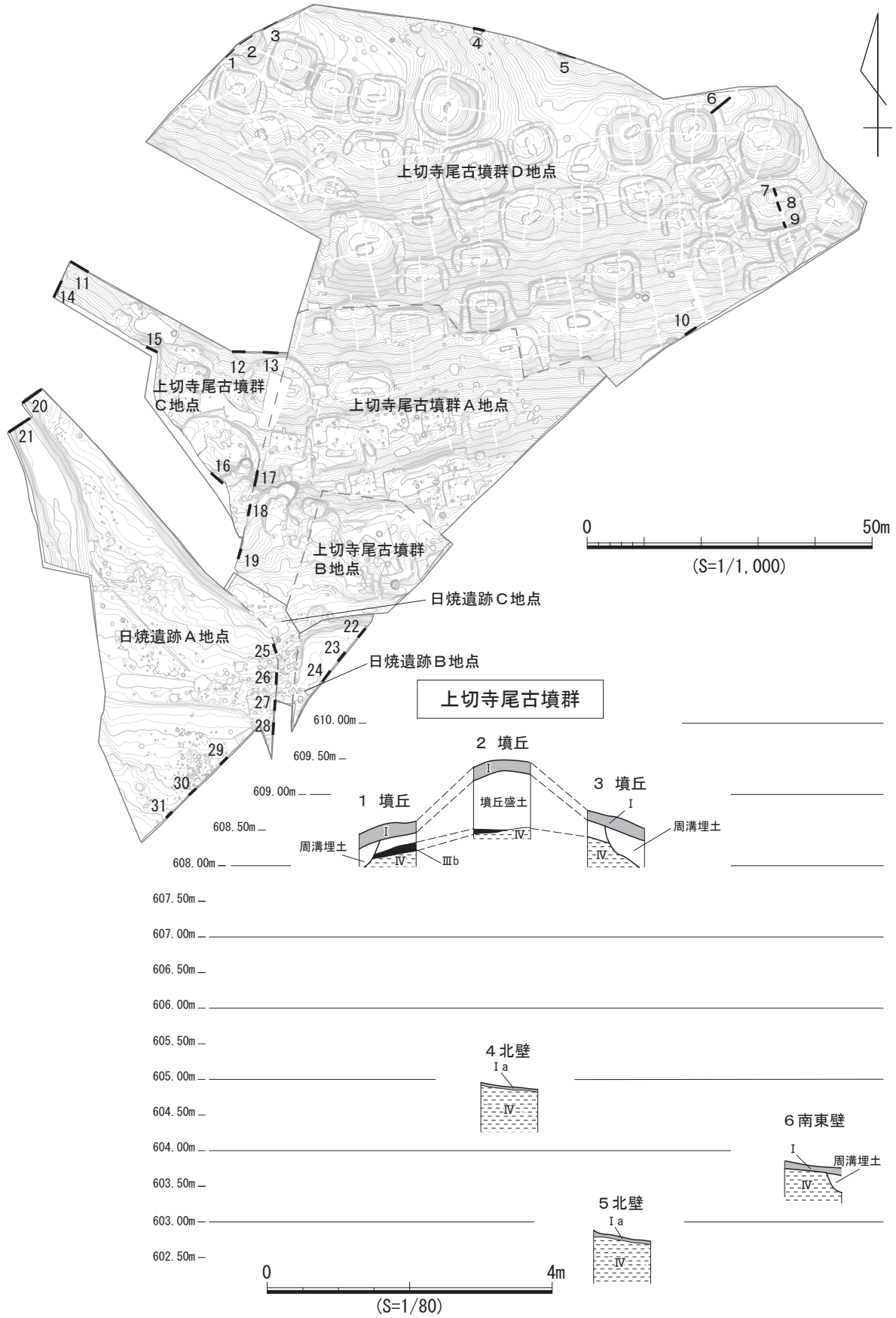


図8 基本層序模式図(1)

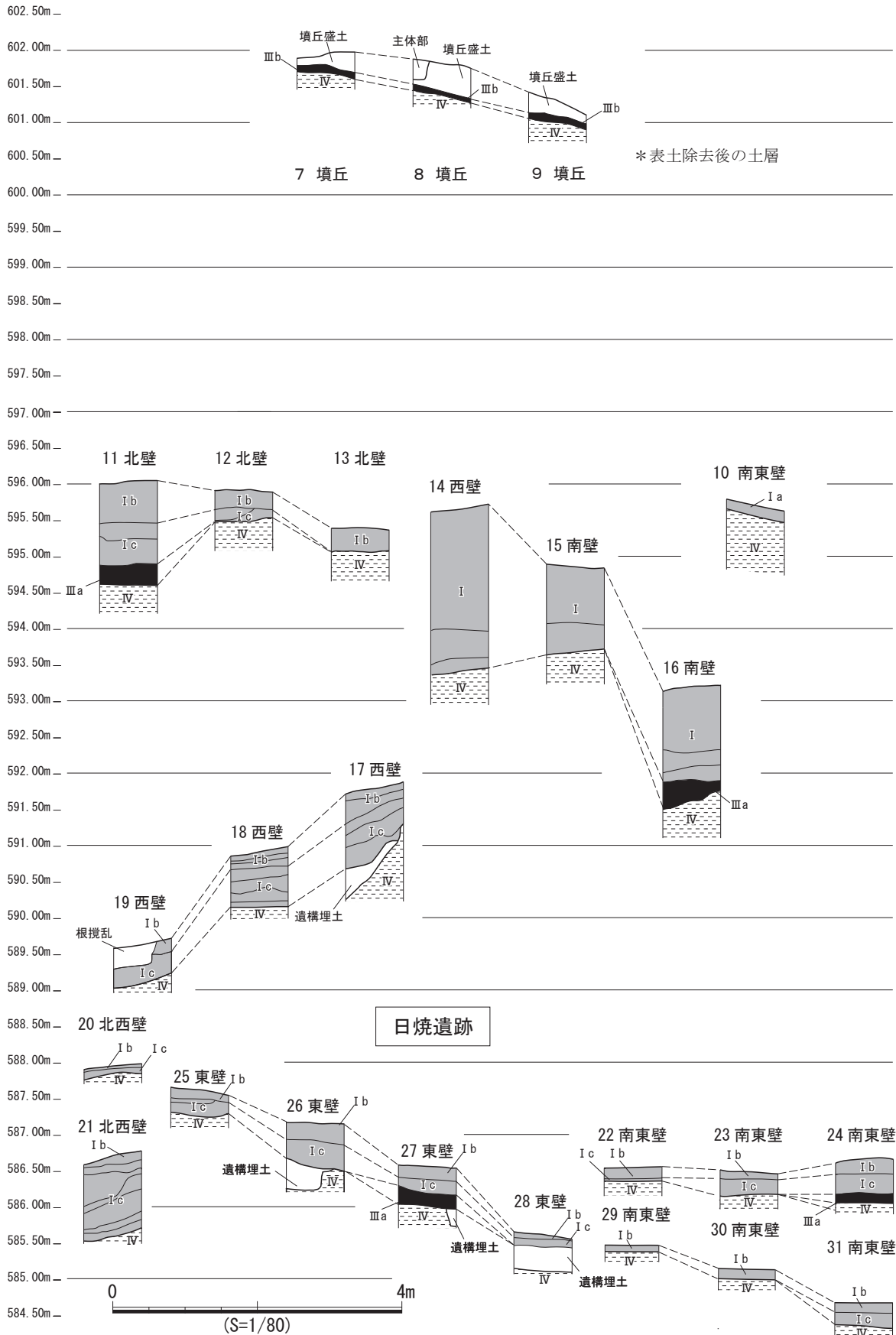


図9 基本層序模式図(2)

第2節 調査前地形測量成果について

上切寺尾古墳群は、高山市教育委員会が刊行した遺跡地図（高山市教育委員会1995）に「上切寺尾古墳群」として6基、「寺尾古墳群」として12基が掲載されている。これによると「寺尾古墳群」は、古墳時代後期の群集墳と考えられていた。平成27年度に、調査に先立って高山市教育委員会と協議し、平成27年4月7日に高山市教育委員会が遺跡名を「上切寺尾古墳群」に統一するとともに、遺跡範囲を変更する手続きを行った。また、同年7月30日には高山市教育委員会とともに、調査において作成した現況地形測量図を元に、現地にて周知の18基との照合を行った。その結果を表3に示すとともに、図10に今回の調査成果と現況地形測量成果を照合して掲載した。これらの図や表で示したとおり、周知の古墳の内、1号古墳・2号古墳を除く3号古墳～18号古墳を今回調査した。なお、6号古墳については、SB04を設置するために築かれた基壇を墳丘と認識したものであったが（第3章第6節）、結果的にその下層からSZ10・11を検出した。図10の照合結果から、ほとんどの墳丘は地形測量図の等高線に表れているため、発掘区外の北西や南東に認められる尾根上や傾斜面における地形の起伏も、同様な遺構群である可能性が高い。

また、上切寺尾古墳群の傾斜面において、複数の平坦面を確認した（図10）。調査においては、平坦面の多くで竪穴建物などの遺構を検出した（第3章第6節）。遺構を検出した平坦面は、SZ03の西側（平坦面①、SI10）、SZ06周辺（平坦面②、SI11・SI12）、SZ08周辺（平坦面③、SI13・SI15～SI17）、SZ09周辺（平坦面④、SI21～SI24・SI28）、SZ10・SI11周辺（平坦面⑤、SI25～SI27）、SZ41の墳頂部周辺（平坦面⑥、SI29・SI30）がある。また、平坦面③ではSB02・SB03、平坦面⑤ではSB04も検出した。なお、SZ10・SZ11南西の平坦面⑦は、SK182等の廃棄土坑群やSB04や基壇と長軸が揃うSA03が所在するため（第3章第6節）、宗教施設に関連する造成の可能性がある。以上の状況を踏まえると、上切寺尾古墳群の墳丘部を避けるように、あるいは一部を破壊して建物施設造営のため平坦面を造成していたことがわかる。平坦面⑤・⑦ではさらに礎石建物であるSB04の建設を中心に土地が改変され、現代に至る地形となったと考えられる。なお、斜面上方のSZ23等には、古墳時代・古代の遺構に関連

表3 上切寺尾古墳群遺跡名対応表

県遺跡番号	遺跡名	市遺跡地図 遺跡名	遺構 番号	県遺跡番号	遺跡名	市遺跡地図 遺跡名	遺構 番号
21203-0449	上切寺尾 1号古墳	上切寺尾 1号古墳	未調査	21203-6589	上切寺尾10号古墳	寺尾 4号古墳	SZ21
21203-0450	上切寺尾 2号古墳	上切寺尾 2号古墳	未調査	21203-6590	上切寺尾11号古墳	寺尾 5号古墳	SZ22
21203-0451	上切寺尾 3号古墳	上切寺尾 3号古墳	SZ14	21203-6591	上切寺尾12号古墳	寺尾 6号古墳	SZ38
21203-0452	上切寺尾 4号古墳	上切寺尾 4号古墳	SZ12	21203-6592	上切寺尾13号古墳	寺尾 7号古墳	SZ30
21203-0453	上切寺尾 5号古墳	上切寺尾 5号古墳	SZ15	21203-6593	上切寺尾14号古墳	寺尾 8号古墳	SZ35
21203-0454	上切寺尾 6号古墳	上切寺尾 6号古墳	SZ10 ・ 11	21203-6594	上切寺尾15号古墳	寺尾 9号古墳	SZ26
21203-6586	上切寺尾 7号古墳	寺尾 1号古墳	SZ16	21203-6595	上切寺尾16号古墳	寺尾10号古墳	SZ29
21203-6587	上切寺尾 8号古墳	寺尾 2号古墳	SZ17	21203-6596	上切寺尾17号古墳	寺尾11号古墳	SZ24
21203-6588	上切寺尾 9号古墳	寺尾 3号古墳	SZ20	21203-6597	上切寺尾18号古墳	寺尾12号古墳	SZ41

すると思われる土器が持ち込まれていることから（第3章第4節）、斜面に残る墳丘部分も何らかの形で利用されたと考えられる。

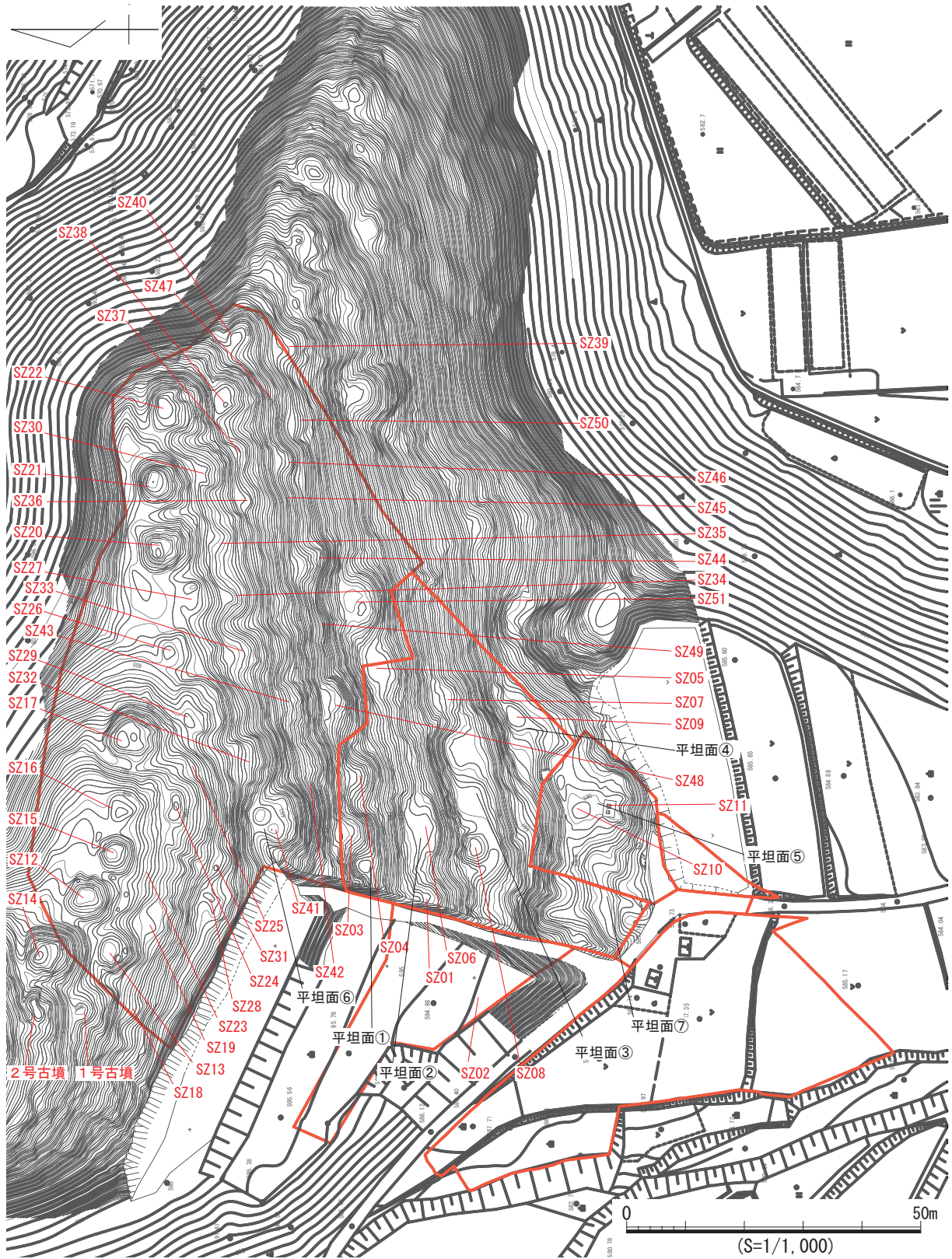


図10 上切寺尾古墳群調査前地形測量図

第3節 遺構・遺物の概要

1 遺構概要

上切寺尾古墳群と日焼遺跡の調査では、縄文時代早期から近世にかけての多数の遺構を検出した。検出した遺構数は、表4のとおりである。このうち古墳時代から古代の遺構が多い。遺構の時期決定は、出土遺物や遺構の重複関係、埋土の類似性などから判断したものの、時期不明とした遺構も多い。また、出土遺物が複数の時代にまたがる場合は原則として新しい時期を選択したが、出土状況や出土量も判断材料とした。

本報告書では、これらの遺構のうち、遺跡の性格を反映する竪穴建物や掘立柱建物、柵、墓は、すべての遺構を報告した。溝状遺構や土坑などは検出数が多いため、区画施設のように遺跡の性格を検証する上で重要な遺構や、一括性の高い遺物が出土した遺構、類例の少ない遺物が出土した遺構などを抽出して報告した。なお、各遺構の「遺物出土状況」に出土点数を記載した場合は、接合前の破片数である。

墳墓（SZ） 今回の調査では周溝を伴う、方形若しくは不定形の平面形をもつ遺構を51基検出した。調査前から墳丘が確認できたものも多く、「上切寺尾古墳群」として遺跡地図に登載された周知の遺構も含む（第3章第2節）。弥生時代においては、「溝掘り・削りだし・または盛り土、あるいはその組み合わせをもって一定の墓域を画し、そこに埋葬を行う」（近藤1977）遺構が出現する。「方形周溝墓」や「方形台状墓」、「墳丘墓」などと呼ばれる遺構である。これらを区画が伴わない土壌墓群などと区別する意味で、「区画墓」と呼称する場合もある（藤田1987）。「方形周溝墓」という名称は、溝によって方形に区画された墓域をもって命名された経緯もあり、低墳丘を伴う遺構として認識され始めて以降は、その名称に疑義を唱える研究者も増えた（都出1986、田代1987）。現在では、前方後方墳などへの発達過程を念頭に置いた平面形の形態分類も進んでおり、周溝による区画を重要視する観点からも「(方形)周溝墓」という名称は使われ続けている。一方「方形台状墓」は、尾根や丘陵上に立地し、硬い基盤層を削り出して構築する墓（森岡2013）とされるが、前述のように方形周溝墓と同質の区画墓ととらえる考え方もある。また、北陸地方では、方形周溝墓が尾根や丘陵上に造営され、立地では方形台状墓と区別することは困難である（高橋2009）。「墳丘墓」は弥生後期後半以降に出現した大規模な墳丘をもつ墳墓を首長墓とし評価し「弥生墳丘墓」と呼称する一方、中期の大規模な盛土をもつ弥生墓を含めた普遍的な概念として「弥生墳丘墓」の用語が用いられることも多い（高野2013）。

以上を踏まえ、今回の調査で検出された遺構を概観すると、尾根上に造成されたものについては、構築方法も含め、北陸地方にみられる尾根や丘陵上に立地する方形周溝墓群と同様な遺構群と考えられる。その一方、傾斜面に造営された遺構については、基盤層の削り出しは行われていないものの、傾斜面下方を除いた部分を溝状に掘削した排土を利用して墳丘を構築している状況など、周溝より墳丘が主体となる遺構であることは明らかである。この点で、より方形台状墓に近い特性を持つ遺構と考えられる。また、円形とも方形とも言い難い平面形のものも含まれており、「方形」の平面形をもつ遺構として一まとめにすることは難しい。さらに、「墳丘墓」といわれるような規模や副葬品をもつ遺構も認められない。このような状況から、今回検出した遺構群については「墳墓」と記載し、その性格について第5章第2節において検討する。

表4 遺構数量表

時代	S Z	S T	S I	S B	S A	S L	S U	S S	S P	S D	S K	合計
縄文時代	0	0	2	0	0	2	0	0	2	0	60	66
弥生時代～ 古墳時代初頭	51	0	0	0	0	0	0	0	0	2	6	59
古代	0	10	36	9	4	1	1	2	16	18	183	280
中世以降	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	9	10
不明	0	0	0	0	0	1	0	0	53	20	563	637
合計	51	10	38	9	4	4	1	2	72	40	821	1052

なお、周溝に囲まれた墳丘を含む範囲を「方台部」としたが、平面形の形状を厳密に区分することが難しいことから、方形だけでなく円形・不定形のものも含む呼称とする。また、方台部から検出した土坑については、規模や墳丘との関係から埋葬施設と判断した場合は「主体部」と表記し、このような遺構を複数確認した場合は「主体部1」・「主体部2」とした。ただし、主体部や墳丘が残存しないものについても、周溝の形状や規模から「墳墓」としたものがある。この他、周溝底面あるいは埋土中で検出した主体部と同等な規模をもつ土坑については「周溝内土坑」とし、複数確認した場合は主体部と同様「周溝内土坑1」・「周溝内土坑2」と表記した。

土坑墓（S T） 土坑の中で、埋土が人為堆積の可能性が高く、遺体を埋葬できる規模をもち、副葬品や供献土器と考えられる遺物が出土したもの。また、そうした遺構に類似する規模や形状のもの。

竪穴建物（S I） 地表を掘り下げた位置に床面を持つ建物で、柱穴・炉・カマド・壁際溝・貯蔵穴・貼床など、建物を構成する要素のうち、一部又はすべて確認でき、建物の可能性が考えられるもの。なお、床面で検出した柱穴や土坑、竪穴外でも関連すると判断したものの略号をPとし、S B-Pのように表した。また、附属する炉やカマド、壁際溝は略号を用いなかった。

掘立柱建物・礎石建物（S B） 向かい合う2辺以上が確認できるように、規則的に並んだ複数の柱穴や礎石によって構成される遺構を掘立柱建物、礎石建物とした。2辺が直角に屈曲した場合でも、発掘区外に向かい合う辺が想定されるような場合は、柵とせずに掘立柱建物としたものがある。なお、確認した柱穴や礎石の略号をPとし、S B-Pのように表した。また、建物に対して位置や配置が関連付けられる土坑もPとしたが、雨落溝や段切り、硬化面など建物に関連するものは略号を用いなかった。

柵（S A） 直線的あるいは、屈曲して並んだ3基以上の柱穴によって構成される遺構を柵とした。削平等により、対応する柱穴の並びが確認できない掘立柱建物の可能性があるものを含む。なお、確認した柱穴の略号をPとし、S A-Pのように表した。

焼土・炉跡（S L） 遺構検出面や土坑の壁面・底面などに、被熱した痕跡がある遺構で、他の遺構に付属しないもの。

遺物集積（S U） 掘り込みを伴わず、遺物が集積あるいは意図的に配置されたような状態で出土したもの。

集石遺構（S S） 礫が集積あるいは意図的に配置されたような状態で出土したもの。

単独柱穴（S P） 建物に伴う柱穴と同様の形状のものや、土層断面で柱痕跡や柱抜き取り痕が確認できるもの、遺構底面に柱当たりが確認できるもので、規則的な配置が確認できず建物遺構として認定

できないもの。

溝状遺構（SD） 長細い平面形で、上端の短軸（幅）に対し長軸（長さ）が5倍以上の長さとなるもののうち他の遺構の付属施設ではないもの溝状遺構とした。

土坑（SK） 上記の遺構以外で地面に掘りくぼめられた穴。

検出したすべての遺構の位置や規模などの基礎的情報は、種別ごとに作成した遺構一覧表に示した。遺構の種別により一覧表の項目は異なるが、内容は次のとおりである。

規模 上端及び下端での長軸長と短軸長、深さを表記し、（ ）は残存長を示す。

長軸方位 墳墓や墳墓の主体部、土坑墓、建物遺構などは、長軸の傾きを表記した。

遺構属性分類 柱穴や土坑などは、平面形や底面形、断面形、埋土などを以下のように表記した。

平面形 上端での形状を「平面形」、下端での形状を「底面形」とし、堅穴建物付属遺構は形状と長軸／短軸により次のようにアルファベットと数字を組み合わせて表記した。

A 円形・楕円形 B 方形・長方形 C 不定形 D 不明

1 長軸／短軸が1～1.2未満 2 長軸／短軸が1.2以上

断面形 掘り込みのある遺構は、断面形状を次のようにアルファベットで表記した。

- a 半円形・皿状で、底面と壁面との境が不明瞭なもの
- b 方形・逆台形で、壁面が底面から直線的に立ち上がるもの
- c 三角形で、明瞭な底面を持たないもの
- d 壁面の最大径が上端の最大径よりも大きいもの
- e 2段以上の底面を持つもので、2基以上の重複である可能性があるものを含む
- f 底面に複数の凹凸があるもの
- g 不明

埋土 堆積状況を次のように表記した。

- I 単層 II 水平堆積 III 中央がU字状に窪む堆積が認められるもの
- IV 堆積の窪みが一方の掘方壁面に偏るもの V 複数の遺構が重複した可能性があるもの
- VI 柱痕跡が認められるもの VII その他

出土遺物 以下のとおり、記号化して表記した。なお、弥生土器と古墳時代初頭の土師器を明確に区別することが困難であったため、便宜的に墳墓に伴う土師器を弥生土器に含めた。

J：縄文土器 Y：弥生土器（古墳時代初頭の土師器を含む） H：土師器（古墳時代後期以降のもの） D：瓦・土製品 P：須恵器 K：灰釉陶器 F：ロクロ土師器 T：山茶碗・中近世陶磁器 S：石器・石製品類 I：金属製品

2 遺物概要

縄文時代から近世に至る遺物が、20,678点出土した。遺物の種類と点数は表5のとおりである。大半は土器類で、石器・石製品類や金属製品が少量出土した。縄文土器は、中期のものが多く、次いで前期のものが多くあり、早期のものは少量出土した。上切寺尾古墳群の墳墓からは、主に弥生時代後期から古墳時代初頭の土器類が出土した。縄文時代や古墳時代後期以降の土器類も少量出土したが、古墳時代後期以降の土器類は、周溝埋土上部から出土したものが大半である。日焼遺跡の集落域からは、古墳時代後期から古代の土器類が多く出土し、礎石建物周辺からは瓦類がまとまって出土した。

表5 出土遺物一覧表

種別	遺構出土		遺構外出土点数		合計	
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
縄文土器	496	5,456.9	108	2,013.3	604	7,470.2
弥生土器(古墳時代初頭の土師器を含む)	772	8,639.3	15	429.5	787	9,068.8
土師器(古墳時代後期以降の土師器)	4,470	47,104.6	2,419	14,124.0	6,889	61,228.6
瓦・土製品	170	28,350.4	746	95,886.6	916	124,237.0
須恵器	3,041	76,440.2	2,676	78,861.3	5,717	155,301.5
灰釉陶器	686	9,248.2	934	12,158.9	1,620	21,407.1
ロクロ土師器	2,861	13,505.8	739	3,887.1	3,600	17,392.9
山茶碗・中近世陶磁器	57	1,753.4	46	674.5	103	2,427.9
石器・石製品類	221	21,589.5	63	12,578.9	284	34,168.4
金属製品	100	1,379.4	58	1,078.3	158	2,457.7
合計	12,874	213,467.7	7,804	221,692.4	20,678	435,160.1

※土器類の破片数は、接合前のものである。

灰釉陶器には、在地産で灰釉を伴わないものが含まれるが、器形から須恵器や山茶碗とは区別した。また、ロクロ成形による土師器が出土し、可能な範囲で他の土師器と区別した。中世から近世の遺物は非常に少なかった。

なお、図示した遺物は、遺構の性格や時期などを検討する上で必要な遺物や、遺跡の性格を端的に示す遺物、時期の判別がある程度可能な遺物を中心に抽出した。土器類の器種や時期の判断には、以下の文献を参考にしたほか¹⁾、岩田崇氏、大石崇史氏、梶原義実氏、久保智康氏、高橋浩二氏、徳田誠志氏、三好清超氏、渡邊博人氏から指導・助言を得た。

図示した遺物の出土位置や大きさなどの基礎的な情報は、種類別に遺物観察表・一覧表に示した。遺物の種別により観察表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

出土位置 遺物が出土したグリッド若しくは遺構で、複数のグリッドや遺構から出土した遺物が接合した場合は、複数のグリッドや遺構を記入した。

層位 遺構以外の遺物包含層などから出土した場合は基本層序番号を、遺構から出土した場合は、人工層位（5 cmごとにa層・b層・c層・・・として取り上げ）若しくは、分層した土層番号（1層・2層・3層・・・として取り上げ）をアルファベットや数字で記入した。

大きさ 「口径」・「器高」・「長さ」・「幅」などの単位はcmである。また、土製品や石器類などの重さの単位はg（グラム）である。土器の口径・底径・器高のうち、（ ）で示した大きさは、図上復元した際の数値である。また、高台を持つ土器の場合は、高台部での径を底径として記入した。土製品・石器・石製品の大きさで、（ ）で示した数値は欠損した残存値である。

石材 石器・石製品については、肉眼観察により石材を判断した。

注

1) 参考にした文献は以下のとおりである。

赤塚次郎2005「第1章第3節 時期区分」『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』、愛知県

24 第3章 調査の成果

- 恩田知美2004「美濃地方における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相」『美濃の考古学』第7号、美濃の考古学刊行会
- 各務原市教育委員会1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』（各務原市資料調査報告書第4号）
- 小林達雄1994『縄文土器大観 1 草創期 早期 前期』、小学館
- 斎藤孝正1995「I 東海西部（愛知・岐阜）」『須恵器集成図録 第3巻 東日本編 I』、雄山閣出版株式会社
- 城ヶ谷和弘2010「第1章第3節 編年及び編年表 土師器・須恵器・施釉陶器（緑釉・灰釉）」『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～平安』、愛知県
- 高橋浩二2000「古墳出現期における越中の土器様相－弥生時代後期から古墳時代前期前半土器の編年的位置付け」『庄内式土器研究』XXII、庄内式土器研究会
- 宮腰健司2003「第1章第3節 時期区分」『愛知県史 資料編2 考古2 弥生』、愛知県
- 吉岡康暢1991『日本海域の土器・陶磁器』、六興出版
- 渡邊博人2008「美濃須衛窯について」『2008年度愛知県大会研究発表資料集』、日本考古学協会2008年度愛知県大会実行委員会

第4節 上切寺尾古墳群

SZ01 (図11～図13)

検出状況 平成27年度のA地点と平成28年度のC地点にまたがり、緩斜面に位置する。EA4～EC7グリッド、IV層の上面で検出した。現況地形測量においては、A地点において墳丘と思われる盛土を確認したが、C地点では段切り造成や作業道による削平のため墳丘は確認できなかった。SZ01はSI04やSI12と重複するが、どちらも周溝埋没後の遺構であることからSZ01が古い。

方台部 西辺は直線的で北西隅はやや角張るが、北東隅は丸味を帯びているため、部分的に丸味を持った方形となる。墳丘が残存したA地点の調査では、方台部中央の攪乱坑東辺を基準にL字形にトレンチを設定し、墳丘盛土の堆積状況を観察した。墳丘盛土は、旧表土上に灰黄褐色土とにぶい黄褐色土を積み上げるが、各土層にはIV層起源のブロック土を多く含むことから、墳丘周囲の土を盛り上げて構築していると考えられる。墳丘盛土観察時に、主体部の掘り込みを確認した。この主体部は旧表土上に一旦盛土した後で掘削し、埋葬した後さらに盛土したものと考えられる。このため主体部を覆う盛土を除去した後平面的に検出した。作業道による削平で西半部が不明であるが、残存した東半部の平面形の形状から、東西方向が長軸となるほぼ長方形であったと思われる。東端部にテラス状の段を持ち、最大の深さは0.20mである。検出した位置が方台部のほぼ中央であり、盛土中に造られたものであることから、SZ01の主体部と判断した。

周溝 緩斜面に位置することから、南側の周溝は存在していなかったと思われる。他辺においては方台部を囲むように周溝を検出した。周溝の幅は0.73m～1.34mで各辺に大きな差はなく、深さは0.14m～0.54mで斜面上部となる北辺側が深い。北辺部の底面で2基の土坑を検出したが、長軸方向が周溝の向きに合い、周溝の幅の中におさまる大きさであることから、周溝内に掘削された土坑と思われる。土坑墓と考えるには浅いが、周溝がある程度埋没した後に掘削されたことも考えられることから、周溝内に掘削された埋葬施設の可能性がある。これらの土坑は、平面形が長方形（周溝内土坑2）若しくは長楕円形（周溝内土坑1）で、遺物は出土しなかった。

遺物出土状況 縄文土器や土師器、須恵器、石器が周溝と墳丘盛土から出土したが、遺物点数は少ない。主な遺物は、北辺の周溝埋土d層から須恵器の壺(3)、西辺の周溝埋土b層から石錘(6・7)とc層から須恵器の蓋(1)、西辺の周溝埋土2層から甕(4)、墳丘南側盛土2層から長頸壺(2)、1層から長胴甕(5)が出土した。

出土遺物 1～4は須恵器である。1は赤色が強く、焼きが甘い在地系の返りの付いた坏蓋である。2は在地系の長頸壺で、頸部に螺旋状に巡らせた沈線と胴部に波状文が付く。また、逆さ状態で胴部の一部に黒色の液体が付着し、胴部上面へ向かって垂れている。3は須恵器の壺の底部で底面をへら切り、側面をへら削りしている。4は甕の胴部下半部で、外面に格子目の叩きと内面に同心円の当て具の痕跡がある。5は土師器の長胴甕で、7世紀末～8世紀初めの竪穴建物内から出土した甕類と比べ口縁部が短く、表面に縦方向のハケ目、口縁部の裏面に指押さえがある。6と7は石錘で両端を打ち欠いている。

時期 遺物は全て墳丘上面や周溝埋土上層から出土したのもので、7世紀末のSI04とSI12などの構築に伴う土地造成等により、窪地状となった周溝が埋没する際に含まれたものと考えられる。このため、

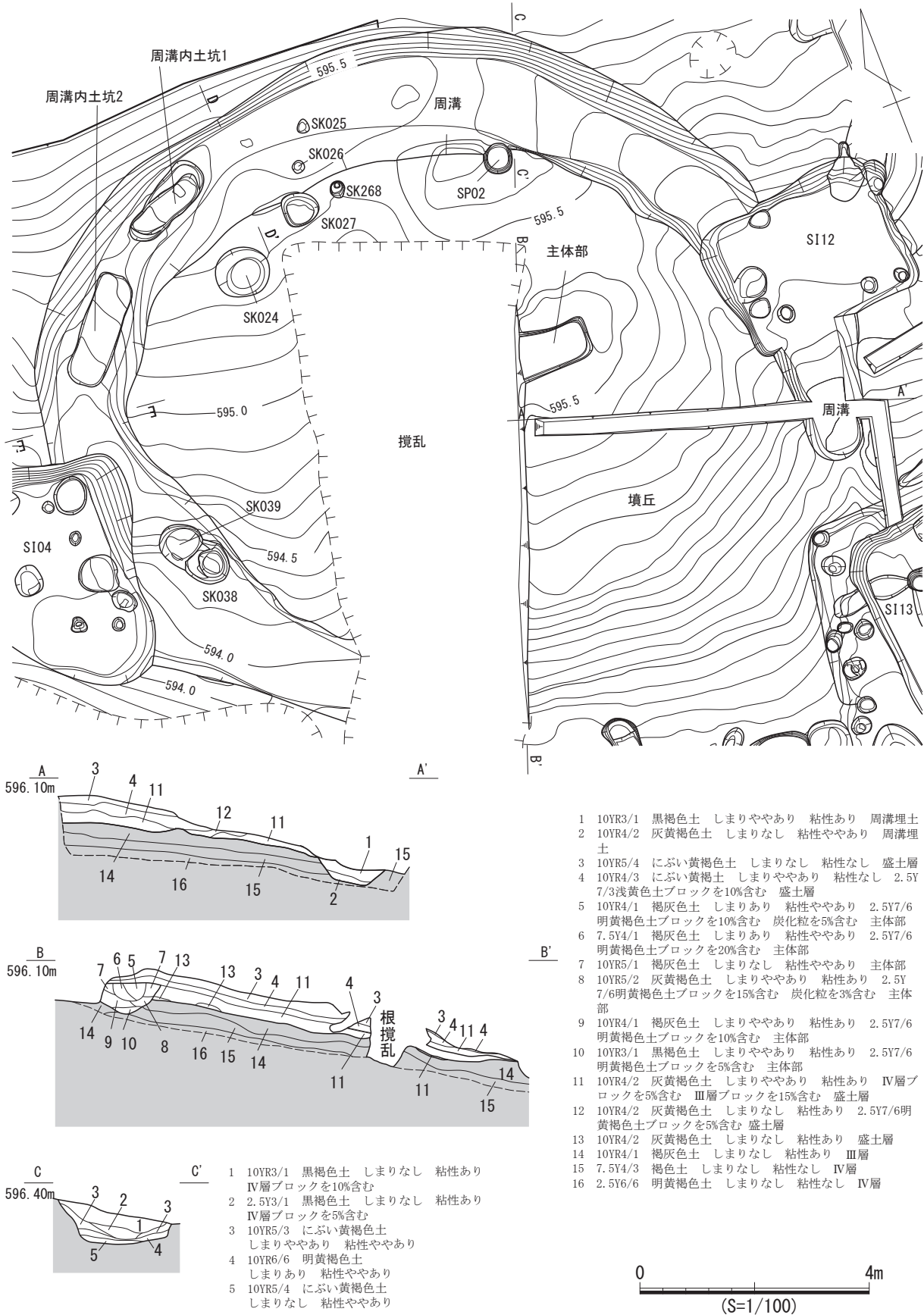
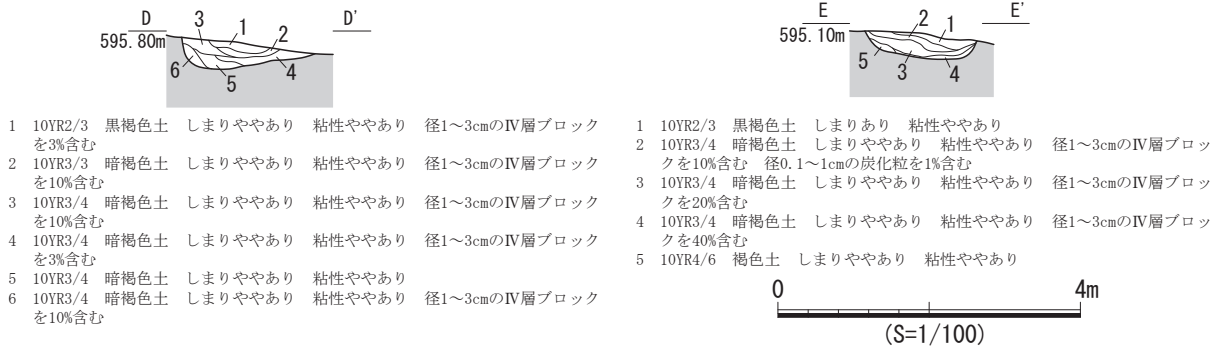


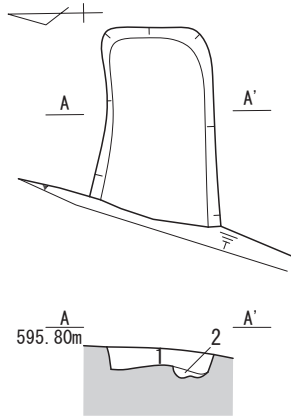
図11 SZ01遺構図(1)



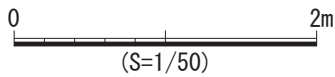
- 1 10YR2/3 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを3%含む
- 2 10YR3/3 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを10%含む
- 3 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを10%含む
- 4 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを3%含む
- 5 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 6 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを10%含む

- 1 10YR2/3 黒褐色土 しまりあり 粘性ややあり
- 2 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを10%含む 径0.1~1cmの炭化粒を1%含む
- 3 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを20%含む
- 4 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを40%含む
- 5 10YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり

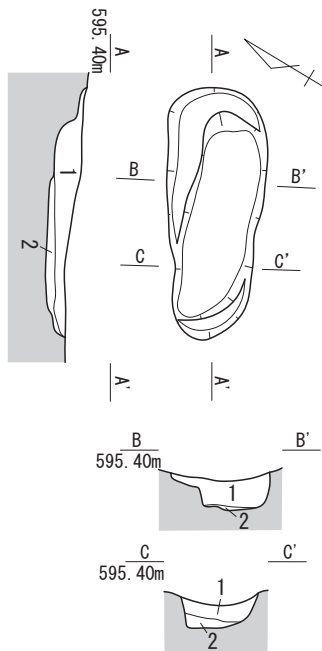
主体部



- 1 10YR4/1 褐灰色土 しまりあり 粘性ややあり
- 2.5Y7/6明黄褐色土ブロックを10%含む
- 2 10YR5/1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり

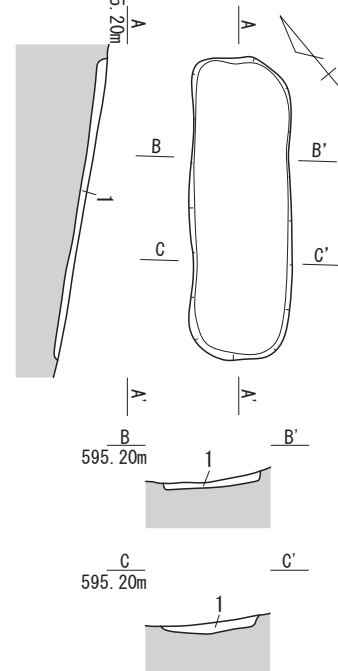


周溝内土坑1



- 1 10YR3/3 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1cmのIV層ブロックを10%含む
- 2 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり

周溝内土坑2



- 1 10YR3/3 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり

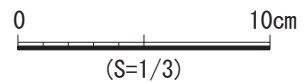
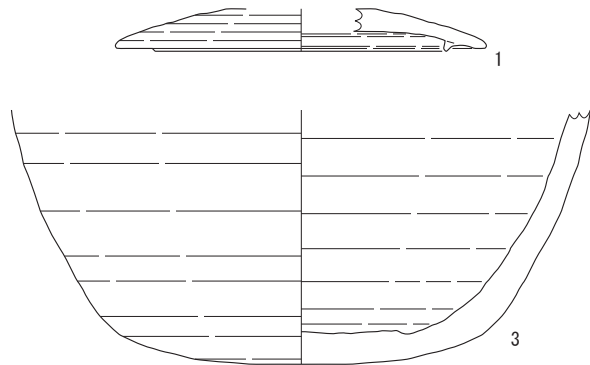
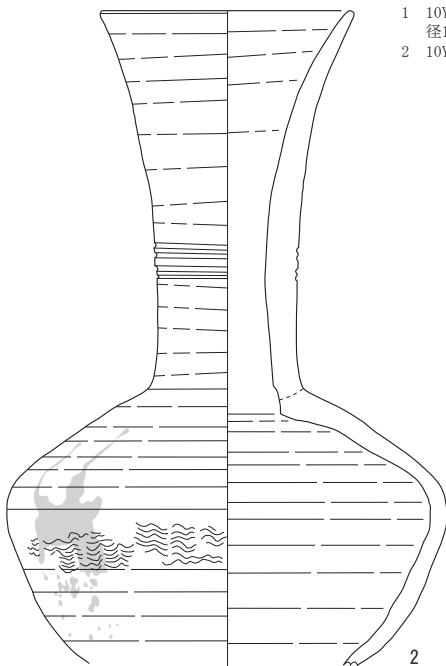


図12 SZ01遺構図(2)、出土遺物(1)

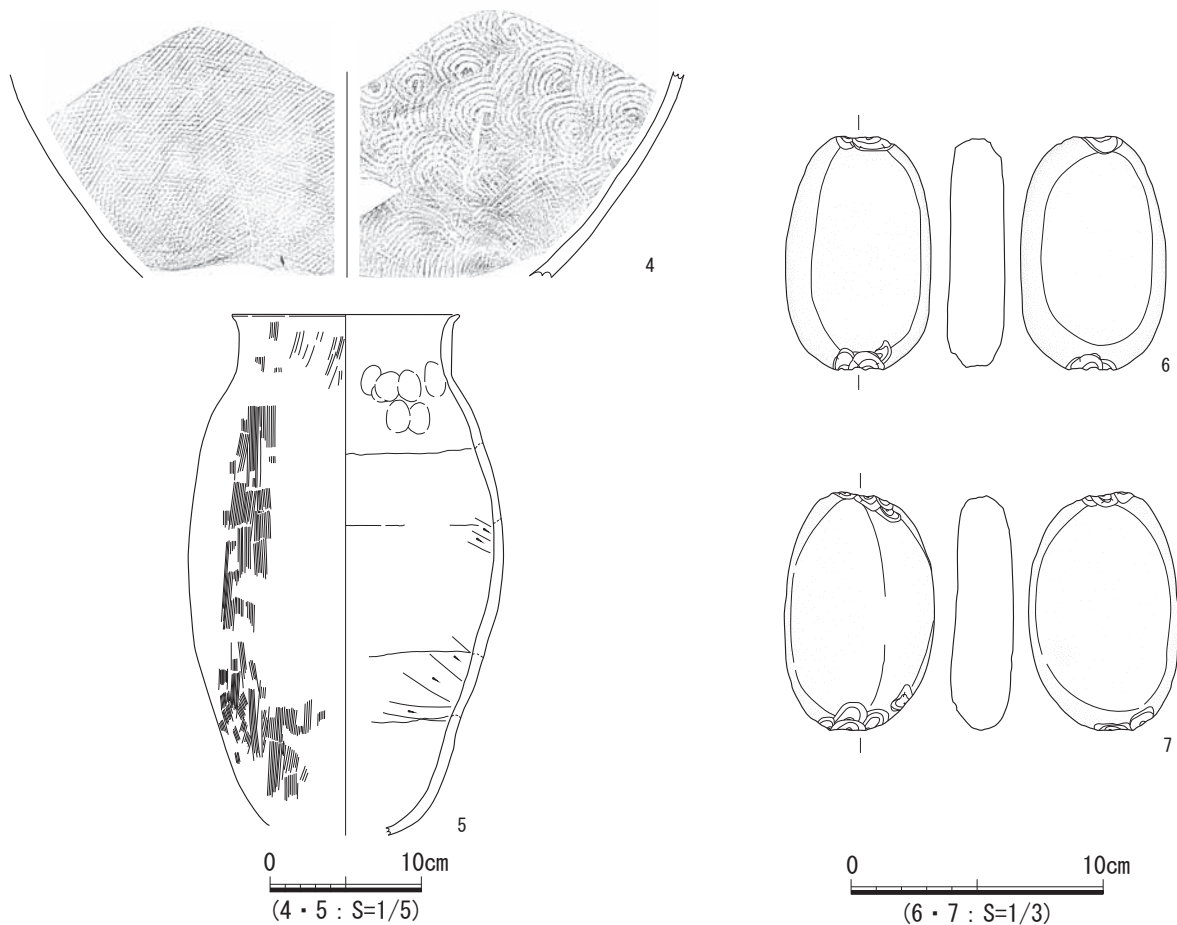


図13 SZ01出土遺物（2）

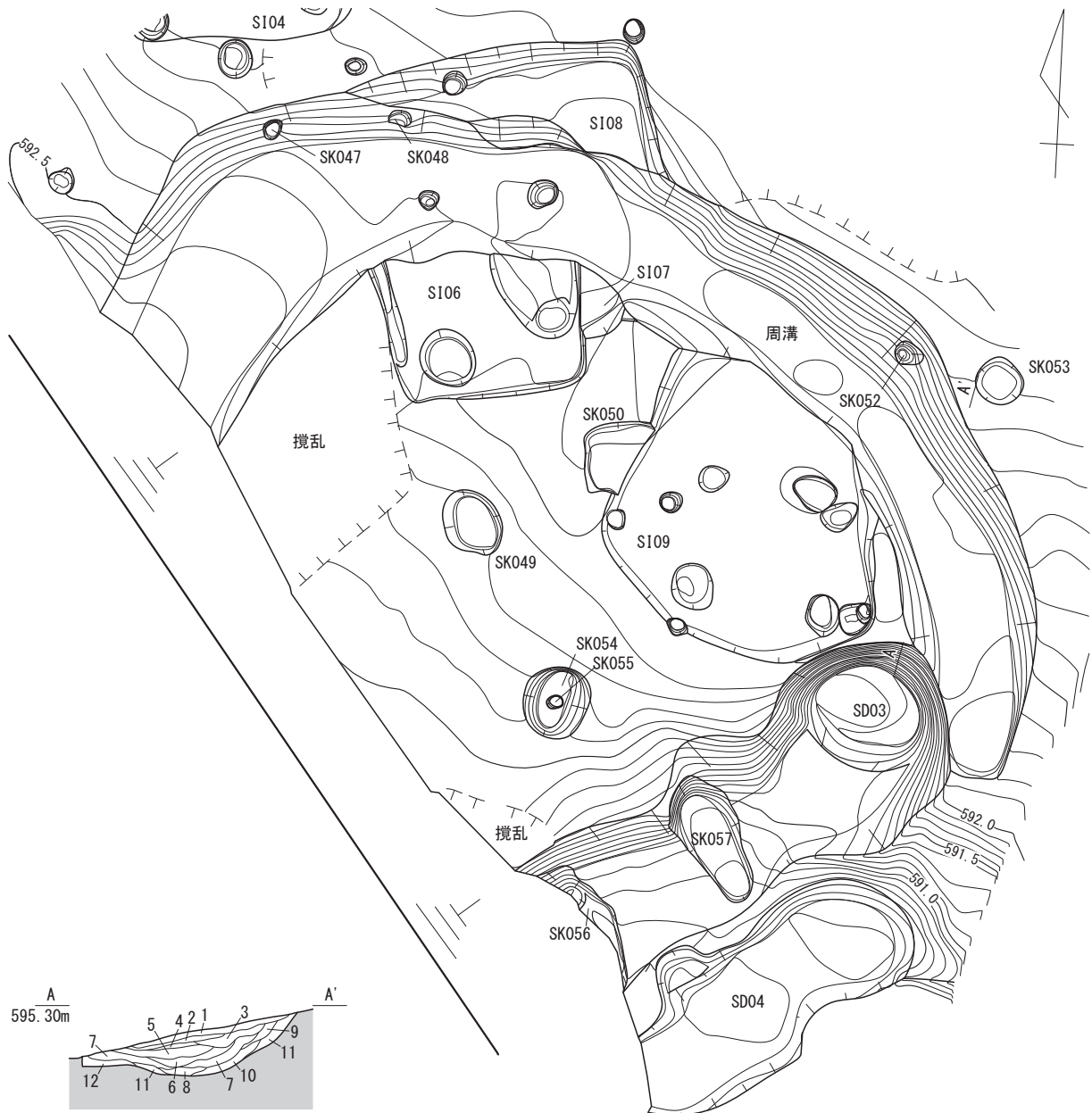
築造年代を示す遺物は確認できなかったが、他の時期が判明した墳墓は弥生時代後期から古墳時代前期と考えられることから、ほぼ同じ時期のものと考えられる。

SZ02（図14）

検出状況 EC2～EE5グリッドの緩斜面に位置し、IV層の上面で検出した。段切り造成され、畑地として利用されていた場所であり、墳丘等の存在は当初想定していなかった。南西部が発掘区外となるが、北西部から東部にかけて周溝を確認したことから墳墓であると判断した。SZ02は、SD03やSI06～SI09と重複するが、いずれの遺構も周溝埋没後のものであることからSZ02が古い。なお、南東部側は旧地形の傾斜が強くなり周溝は途切れ、段切り造成等による土地の改変のため、墳丘盛土は確認できなかった。

方台部 西辺は一部の検出ではあるが、比較的直線的である。北辺から東辺にかけてはSZ01に似て弧を描くようになるが、部分的に丸味を持った方形と考えられる。なお、方台部上には主体部と考えられるような土坑は検出できなかった。

周溝 緩斜面に位置することから、南側の周溝は存在しなかったと思われる。他の辺については、方台部を囲むように周溝を検出した。周溝の幅は約2.00m～2.50mで、西辺がやや幅広である。深さは0.31m～0.66mで斜面上部となる北辺側が深い。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性あり 径0.1cmの炭化粒を1%含む
- 2 10YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを7%含む 径1~3cmの炭化材を1%含む
- 3 10YR2/3 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1cmのIV層ブロックを3%含む
- 4 10YR2/3 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1cmのIV層ブロックを10%含む
- 5 10YR2/3 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径5~10cmのIV層ブロックを3%含む
- 6 10YR2/3 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径5~10cmのIV層ブロックを10%含む
- 7 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを10%含む
- 8 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 9 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径3~5cmのIV層ブロックを10%含む
- 10 10YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 11 10YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径3~5cmのIV層ブロックを20%含む
- 12 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性ややあり

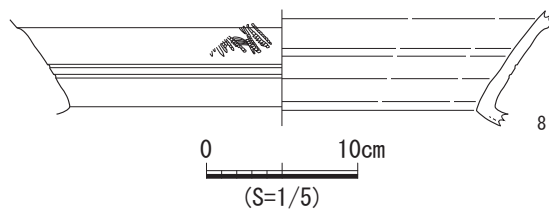
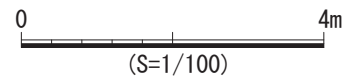


図14 SZ02遺構図、出土遺物

遺物出土状況 北東の周溝上面のa層から須恵器の甕（8）が出土した。

出土遺物 8は須恵器の甕の口縁部である。二重の沈線を巡らした上に楕状工具で列点文が施される。

時期 遺物は周溝埋土上層から出土したもので、7世紀末以降の集落形成に伴い窪地状となった周溝が埋没した際のもと考えられる。このため、築造年代を示す遺物は確認できなかったが、他の時期が判明した墳墓は弥生時代後期から古墳時代前期と考えられることから、ほぼ同じ時期の遺構と考えられる。

SZ03（図15）

検出状況 平成27年度のA地点と平成28年度のD地点にまたがり、緩斜面に位置する。BS7～BT9グリッド、IV層の上面で検出した。現況地形測量では、A地点において方形となる盛土状の高まりを確認し、墳墓が存在することが予測できた。D地点では北辺の周溝の一部、A地点には墳丘及び他の周溝を検出した。SI10をSZ03東辺周溝埋土上で検出したことから、SI10が新しい。また、SZ04の東辺周溝と一部重複しているが、土層観察の結果、SZ03が古いと判断した。

方台部 北辺と東辺、西辺は周溝により直線的であるが、南辺はやや丸味を持つ方形となる。方台部には、各辺に直交するようにL字形のトレンチを2箇所設定して墳丘盛土の堆積状況を観察した。方台部の盛土は5層に分層したが、このうち7層は南辺側にのみ積まれており、他の土層は地形に沿うように盛られている。方台部では主体部と考えられる土坑は確認できなかった。

周溝 緩斜面に位置することから、南側の周溝は存在しないが、他辺においては方台部を囲むように周溝を検出した。北辺の周溝は、斜面上部に広がるような形状で最大幅2.30mとなるが、西辺と東辺の周溝は1.20m～1.40mの幅で、深さが0.21mである。北辺の周溝底部は、長楕円形の土坑状に一部深くなるが、土層観察の結果別に掘削されたものではなく、周溝の底面が段を持つものと思われる。

遺物出土状況 遺物は2点のみで極めて少ない。墳丘中央のe層から弥生土器の鉢1点（9）と、SI10との境の4層周溝埋土から須恵器の甕片1点（10）が出土した。

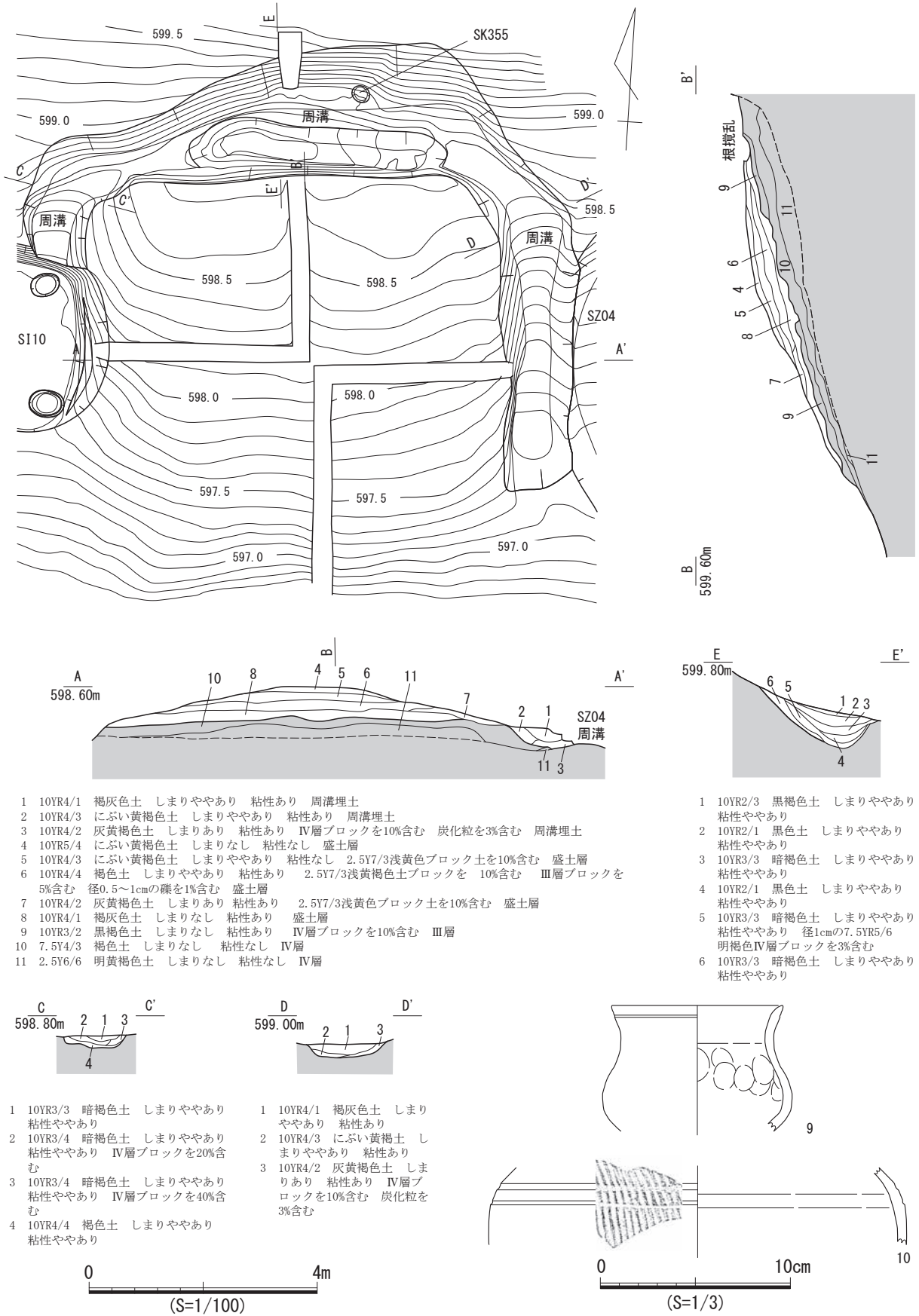
出土遺物 9は胴部下半から大きく張り出しつつ頸部までに緩やかに窪み、口縁部が外反する。口縁部よりも胴部が張り出す形状で、底面に脚部が付く可能性がある。胴部内面に指押さえの痕跡がみられる。10はやや焼成不良の甕の胴上部の小破片で、外面の平行叩き目痕と二条の沈線が巡る。

時期 10はSI10から混入した可能性が考えられるが、9や他の墳墓との関連性などから、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と思われる。

SZ04（図16・図17）

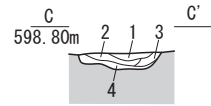
検出状況 BS9～BT11グリッドの緩斜面に位置し、IV層の上面で検出した。現況地形測量ではSZ03と並んで盛土状の高まりが確認し墳墓が存在することが確認できた。しかし、重機による表土掘削時に盛土状の高まりを掘削してしまったため、調査では墳丘盛土を検出できなかった。このため方台部において検出した2基の土坑も非常に浅いものとなってしまった。なお、SZ03の東辺周溝とSD05及びSK067が重複するが、検出時の状況からSZ04が新しいと判断した。しかし、SD05とSK067はA地点での検出状況からは、平成28年度のD地点に広がると思われたが、平成28年度の調査では広がりを確認することができず、遺構と誤認して掘り下げてしまったことも考えられる。

方台部 北辺と東辺、西辺は周溝により直線的であるが、南辺はやや丸味を持つ方形となる。方台部には、各辺に直交するようにL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。盛土は前述の理由から確

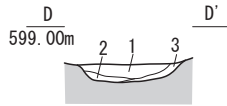


- 1 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土
- 3 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 炭化粒を3%含む 周溝埋土
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりなし 粘性なし 盛土層
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性なし 2.5Y7/3浅黄色ブロック土を10%含む 盛土層
- 6 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性あり 2.5Y7/3浅黄褐色土ブロックを 10%含む III層ブロックを5%含む 径0.5~1cmの礫を1%含む 盛土層
- 7 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性あり 2.5Y7/3浅黄色ブロック土を10%含む 盛土層
- 8 10YR4/1 褐灰色土 しまりなし 粘性あり 盛土層
- 9 10YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性あり IV層ブロックを10%含む III層
- 10 7.5Y4/3 褐色土 しまりなし 粘性なし IV層
- 11 2.5Y6/6 明黄褐色土 しまりなし 粘性なし IV層

- 1 10YR2/3 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 2 10YR2/1 黒色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 3 10YR3/3 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 4 10YR2/1 黒色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 5 10YR3/3 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1cmの7.5YR5/6 明褐色IV層ブロックを3%含む
- 6 10YR3/3 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり



- 1 10YR3/3 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 2 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを20%含む
- 3 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを40%含む
- 4 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり



- 1 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり
- 3 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 炭化粒を3%含む

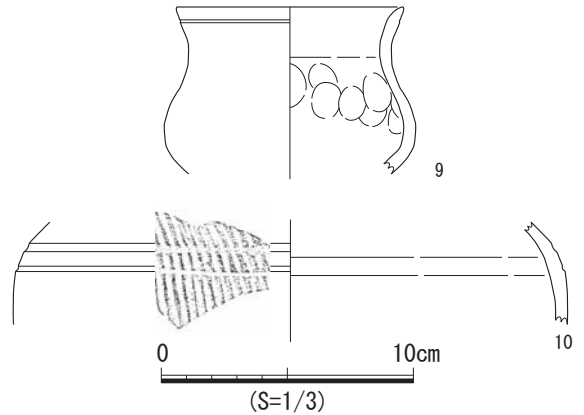


図15 SZ03遺構図、出土遺物

認することができず、方台部上の南西部で長方形の土坑を2基検出した。これらの土坑をその形状や方台部において検出したことから、主体部の可能性があるものとし、主体部1、主体部2とした。主体部1は、長軸を南北方向持つ長方形で、深さは最大0.12mと浅い。主体部2は、長軸方向がN-62°Eとなる長楕円形で、深さは最大0.23mと浅い。いずれも埋土は2層で水平堆積である。

周溝 緩斜面に位置することから、南側の周溝は存在していなかったと思われる。他辺においては方台部を囲むように周溝を検出したが、西辺と東辺の周溝は短いため、周溝からは方台部が長方形となる。周溝の幅は、1.34m~2.20mで各辺に西辺の周溝がやや幅広となる。深さは0.10m~0.42mで斜面上部となる北辺側が深い。周溝の底面は比較的平坦で、埋葬施設と考えられるような土坑は確認で

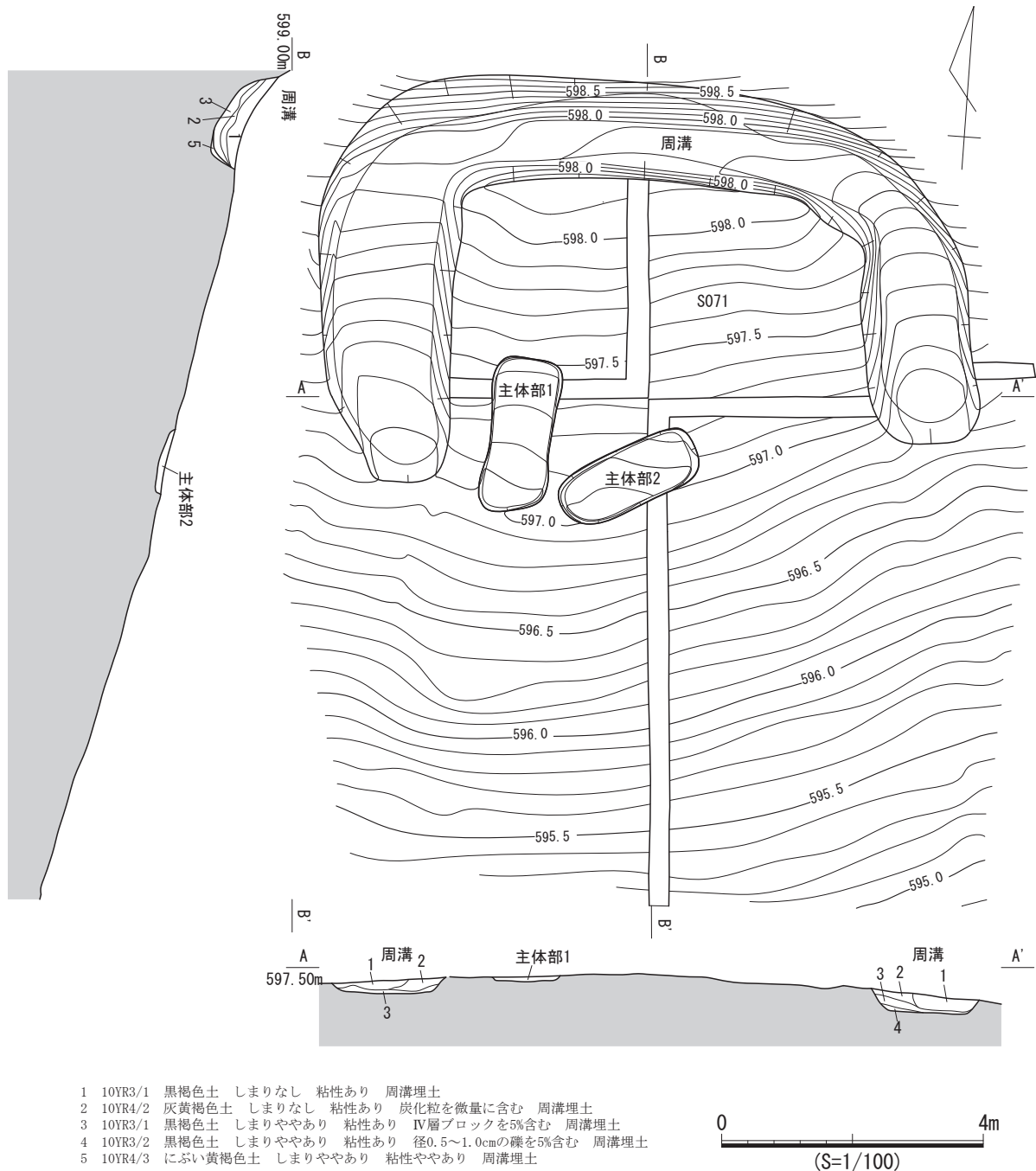


図16 SZ04遺構図(1)

きなかった。

遺物出土状況 周溝の北西角から弥生土器3点と、主体部1の南側の盛土中から焼成の甘い須恵器の甕片3点、土師器1点が出土した。

時期 SZ04に伴う遺物がないが、隣接するSZ03と方位を合わせて構築していることから時期的に近く、重複関係からSZ03よりやや新しいと思われる。

SZ05 (図18・図19)

検出状況 平成27年度のA地点と平成28年度のD地点にまたがり、緩斜面に位置する。BT13～EA15グリッド、IV層の上面で検出した。現況地形測量では墳丘状の高まりや方台部の平坦面を確認した。A地点では北辺の周溝の一部と方台部の西半を、D地点では残りの北辺周溝と東辺周溝、方台部の東半を検出した。斜面上部にはSZ48が位置し、周溝の重複関係からはSZ05が新しいと判断した。また、東側に位置するSZ51の周溝との重複関係からはSZ05が新しいと判断した。

方台部 北辺及び東辺は直線的であるが、西辺及び南辺は明確でなく、全体の形状は不明である。しかし、北辺と東辺の状況から概ね方形と思われる。A地点調査時には墳丘の形状からL字形のトレンチを2箇所設定して墳丘盛土の堆積状況を観察した。墳丘盛土は7層に分層したが、旧表土上にほぼ水平に積み上げている状況であった。方台部の北辺寄り、東西方向が長軸となる長方形の土坑を検

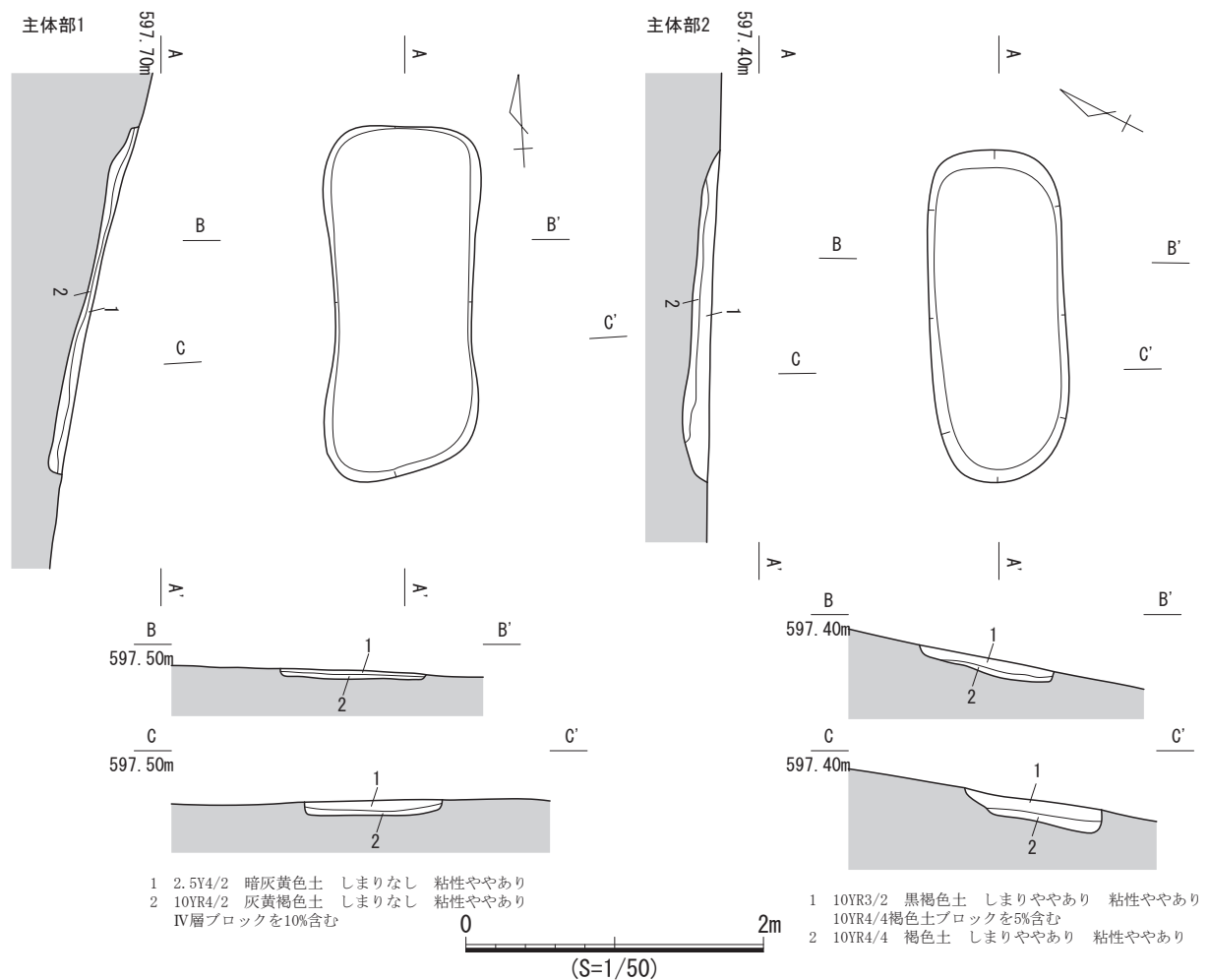


図17 SZ04遺構図(2)

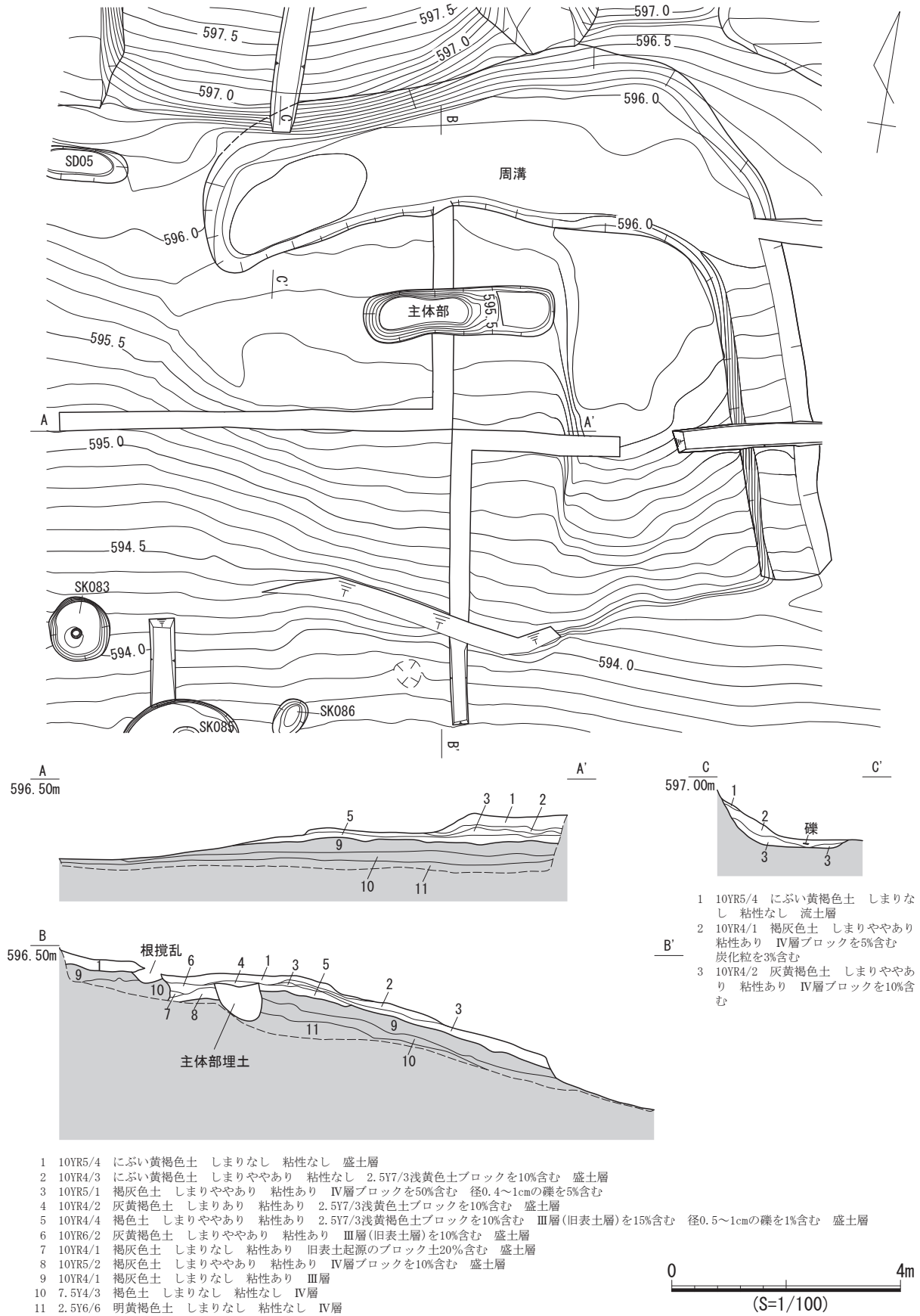


図18 SZ05遺構図(1)

出した。旧表土上に最初の盛土をした後に掘削された土坑で、その上にはさらに墳丘が盛土されることから、SZ05の主体部と考えられる。検出面での長軸長は3.30mを超えるが、東部は0.10m程でテラス状となり、中央から西側がさらに深くなる。最も深いところで0.70mとなるが、底面は平坦ではなく湾曲する。

周溝 斜面に位置することから、傾斜の下方となる西側及び南側には周溝を確認することができなかった。北辺及び東辺では周溝を検出したが、北辺で最大3.20mの幅があり、東辺では1.40m程と差が大きい。深さは0.40m～0.52mで、斜面上部となる北辺側が深い。周溝の底面は比較的平坦で、埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 周溝の北側東寄りのb層～c層中から弥生土器の高坏（11～13）とa層から壺（14）が出土した。なお、包含層出土としたが、墳丘上の中央東寄りから焼成不良の須恵器の甕片（869）が、主体部北側の墳丘上から周溝内にかけて出土した。

出土遺物 11～13は、外面に赤彩の痕跡のある弥生土器の高坏である。12と13の底面は平坦で、緩やかに立ち上がり、11はハの字に開く。14は弥生土器の壺で、胴部が大きく張り出しつつ頸部で屈曲し、口縁部は直線的に大きく外反する。外面は縦方向、内面口縁部は横方向を基調としたハケ目調整が確認できる。

時期 周溝埋土内で出土した14から、弥生時代末期から古墳時代初めの遺構と思われる。

SZ06 (図20・図21)

検出状況 EA7～EC10グリッドの緩斜面に位置し、IV層の上面で検出した。現況地形測量では、SZ03

主体部

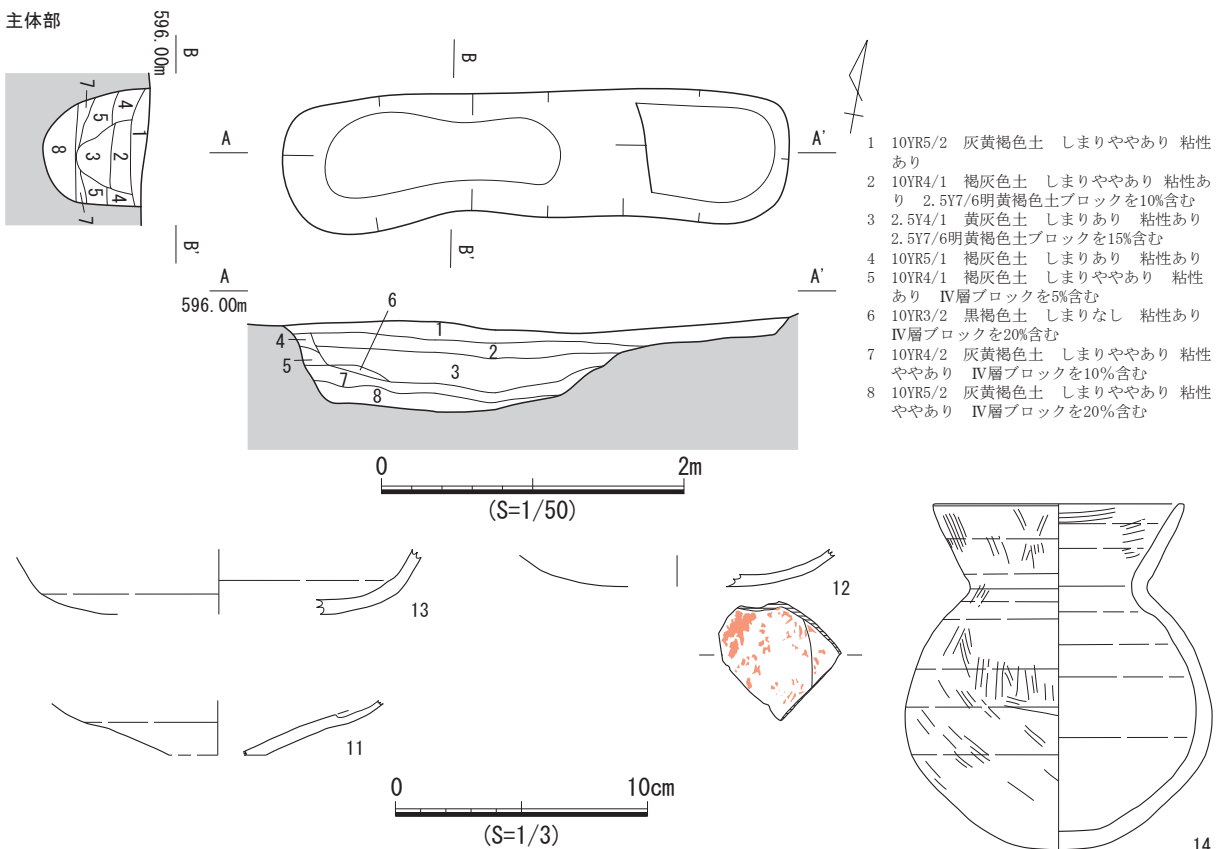


図19 SZ05遺構図(2)、出土遺物

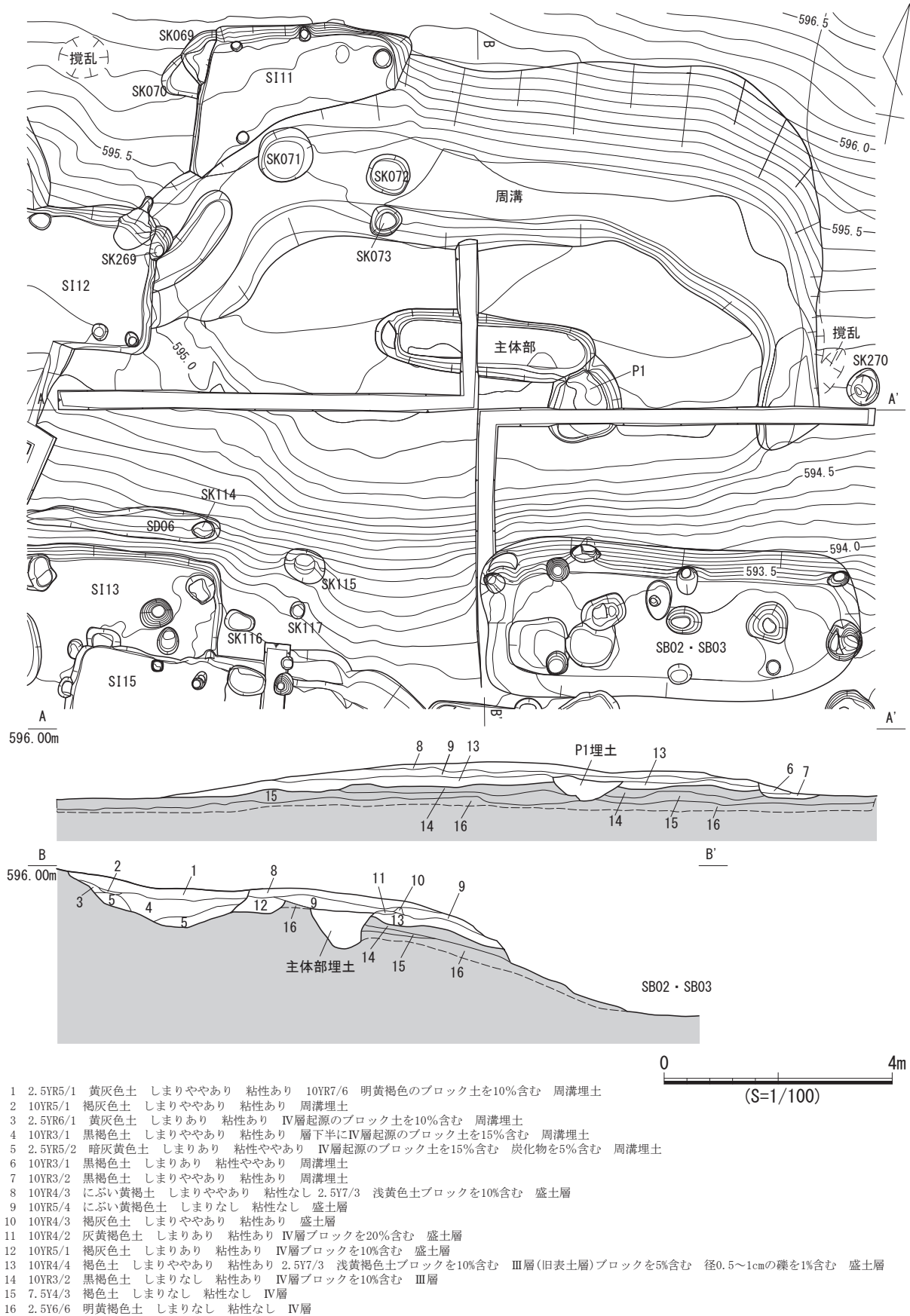
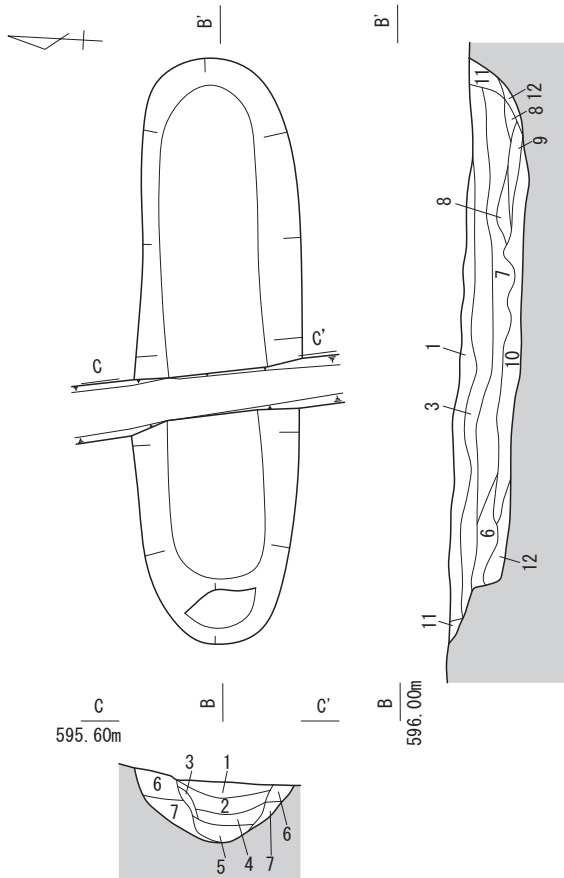


図20 SZ06遺構図(1)

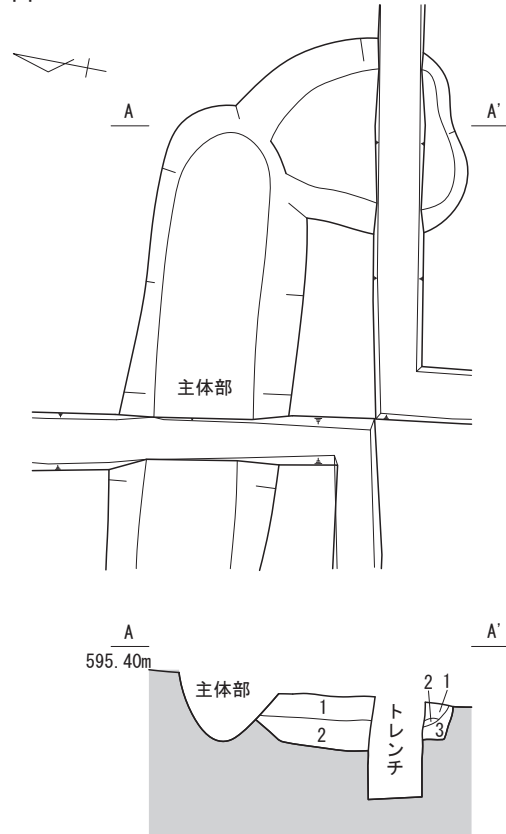
とSZ04の南側にあり、盛土状の高まりを確認したが、その南側は傾斜が強くなり人為的な削平の可能性も考えられた。西辺から北辺、東辺の周溝を検出したが、墳丘の南半部は古代の遺構（SB02やSB03、SI13など）により削平されていた。また、西辺と東辺の周溝も古代の遺構による削平で一部残存するだけであった。墳丘の南半部を削平されたほか、SI11やSI12を周溝埋土上で検出したことからSZ06が古い。

方台部 北辺の周溝がやや湾曲するものの概ね直線的で、西辺と東辺は残存部が短い、東辺は比較的直線的であり、平面形は方形若しくは長方形と思われる。墳丘は、残存部の中心を交点とするよう

主体部



P1



- 1 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む
- 2 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり 10Y7/6明黄褐色土ブロックを10%含む
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを15%含む
- 4 10YR4/1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり 10Y7/6明黄褐色土ブロックを30%含む
- 5 2.5Y4/1 黄灰色土 しまりなし 粘性あり IV層ブロックを10%含む
- 6 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性あり 2.5Y7/3浅黄色土ブロックを10%含む
- 7 10YR4/1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり

- 1 10YR4/1 灰黄褐色土 しまりあり 粘性あり
- 2 5Y7/3浅黄色土ブロックを10%含む
- 2 10YR4/1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり
- 3 10YR3/1 黒褐色土 しまりあり 粘性あり

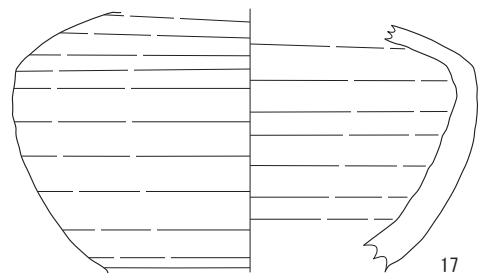
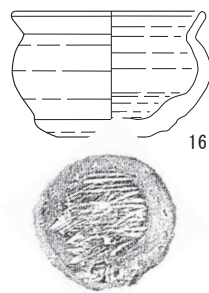
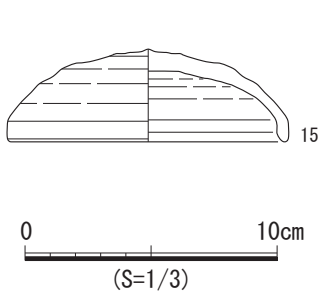
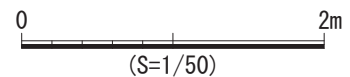


図21 SZ06遺構図(2)、出土遺物

にL字形トレンチを2箇所設定して、墳丘盛土の堆積状況を観察した。墳丘盛土は6層に分層したが、旧表土上にはほぼ水平に積み上げている状況であった。北辺に近い位置で、長軸方向をほぼ東西に向けた長楕円形の土坑を検出した。旧表土上に13層を積み上げた後に掘削されており、その上にはさらに墳丘が盛土されることから、SZ06の主体部と考えられる。主体部の検出面での長軸長は3.85m、幅は1.10m、深さ0.40mである。また、この主体部南東側で不定形の土坑（P1）を1基検出した。この土坑も墳丘盛土13層を積み上げた後掘削され、その上にはさらに墳丘が盛土されることから、主体部に関連するものと考えられるがその内容は不明である。なお、墳丘盛土の13層は、主体部の位置よりも南側に堆積し、主体部から北側では旧表土層（14層）が認められなかったことから、主体部掘削にあたり緩斜面を平坦化するためのものと思われる。

周溝 南半部は削平され不明であるが、西辺と東辺の一部と北辺で周溝を検出した。周溝の幅は、北辺では最大3.80mほどあるが、西辺で2.30mほど、東辺では1.10mほどとなる。深さは1.05mで、斜面上部となる北辺側が深い。周溝底面は比較的平坦で、埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 縄文土器や土師器、須恵器、石器が出土したが、遺物点数は少ない。北辺の周溝から出土した遺物が多く、北西部の1層や墳丘埋土から須恵器の坏蓋（15）、北辺の周溝の1層から須恵器の広口壺（16）と壺（17）が出土した。

出土遺物 15は基部からの立ち上がりは緩やかで、口縁部付近で直立する。16は7世紀後半の美濃須衛産の広口壺で、底面から胴部にかけて緩やかに立ち上がり、頸部に向けて僅かに内湾しつつ口縁部が直線的に広がる。底面には回転ヘラ削り後にハケ目の調整がされている。17は壺の胴部で、やや丸味を持つ胴部から、屈曲が明瞭な肩部を経て直線的に頸部に至る。

時期 遺物は周溝埋土上層から出土したのもので、7世紀後半以降のSB02などの構築に伴う土地造成等により、窪地状となった周溝が埋没する際に含まれたものと考えられる。このため、築造年代を示す遺物は確認できなかったが、他の時期が判明した墳墓は弥生時代後期から古墳時代前期と考えられることから、ほぼ同じ時期の遺構と考えられる。

SZ07（図22・図23）

検出状況 EB12～ED14グリッド[※]の緩斜面に位置し、IV層の上面で検出した。現況地形測量では盛土状の高まりを確認し墳墓が存在することが予測された。また、高まりの西側には方形の平坦部があり、この場所では大型竪穴建物であるSI18を検出した。盛土状の高まりが認められたものの、試掘・確認調査においてこの位置に竪穴建物の存在が想定されたため、重機による表土掘削を行ったことにより墳丘盛土を除去してしまった。遺構中心部からL字にトレンチを設定し、主体部は6分割に設定して掘削した。

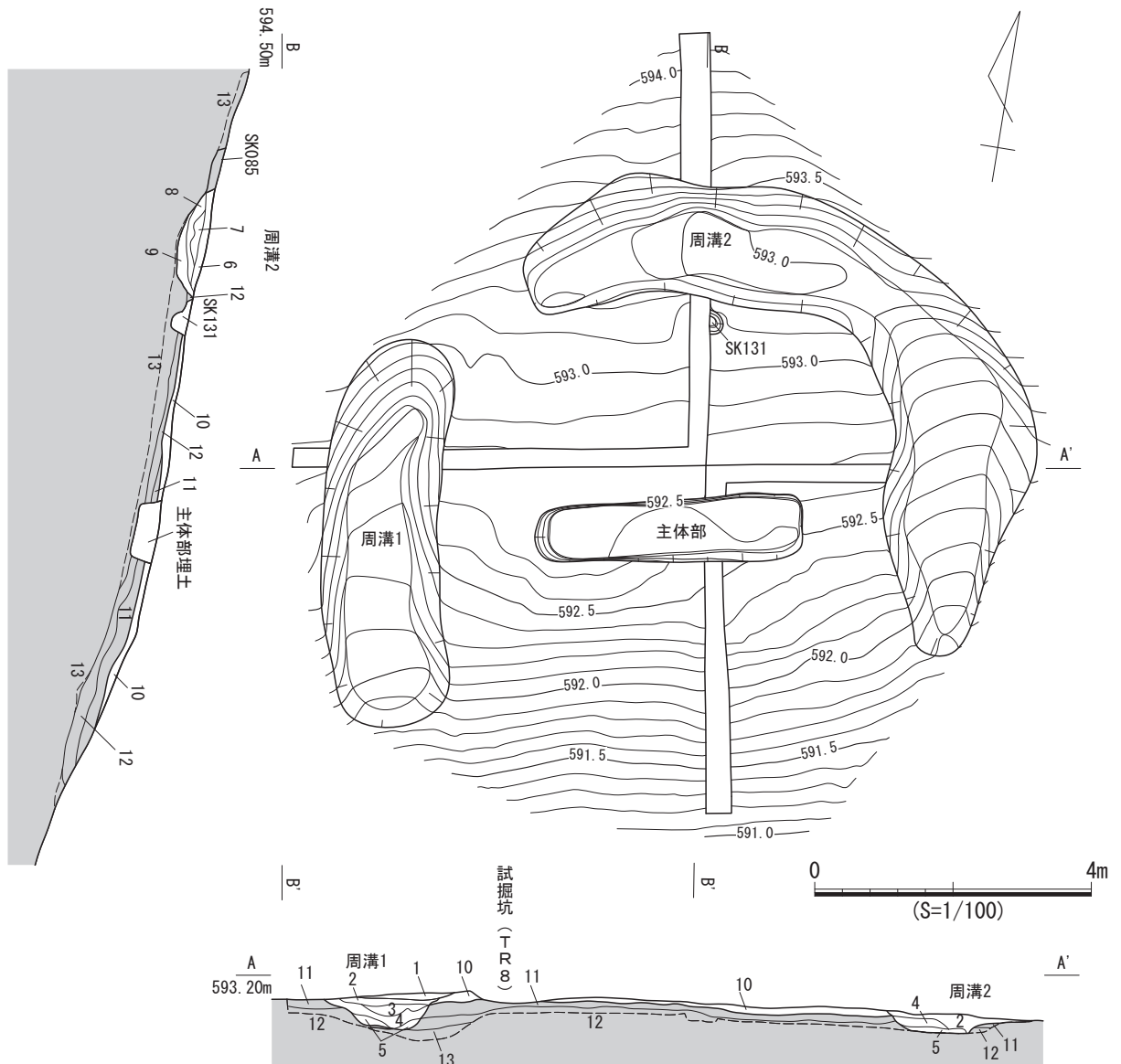
方台部 四辺とも概ね直線的で方形となる。方台部には、各辺に直交するようにL字形のトレンチを2箇所設定して、墳丘盛土の堆積状況を観察したが、墳丘盛土は確認できなかった（0.10mほど残存していた）。方台部の中央では長軸が東西方向となる長方形の土坑を検出したが、北辺とほぼ並行することや検出した位置、土坑の形状から主体部と思われる。主体部の検出面での長軸長は3.82m、幅は0.92m、深さ0.32mで、SZ06の主体部とよく似ている。

周溝 緩斜面に位置することから、南側までは周溝が巡っていないと思われる。西辺では長さ5.60m、

幅1.70m、深さ0.47mの周溝1を検出したが、北辺には連続せず陸橋状に掘り残されている。北辺から東辺にかけて周溝2を検出した。幅0.70m～2.05m、深さ0.28m～0.52mで、斜面上部となる北辺側が深い。周溝底面は比較的平坦で、埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 主体部西端のb層で出土した縄文土器（18）と周溝1方台部寄りのc層から須恵器の坏蓋（19）、a層から須恵器の蓋（20）が出土した。

出土遺物 18は深鉢の破片で口縁部外面に沈線文、口縁端部内面側に刻みを施す。19は須恵器坏蓋である。20は内面が浅黄橙色、外面がにぶい黄褐色の色調で内面に返りがつく。口縁部を折り曲げて厚



- | | |
|---|--|
| 1 10YR4/3 黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 8 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土 |
| 2 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを15%含む 周溝埋土 | 9 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを30%含む 周溝埋土 |
| 3 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土 | 10 10YR5/1 黒褐色土 しまりなし 粘性あり IV層ブロックを10%含む 墳丘盛土 |
| 4 10YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土 | 11 10YR4/1 褐灰色土 しまりなし 粘性あり III層 |
| 5 10YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土 | 12 7.5Y4/3 褐色土 しまりなし 粘性なし IV層 |
| 6 10YR3/1 黒褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土 | 13 2.5Y6/6 明黄褐色土 しまりなし 粘性なし IV層 |
| 7 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土 | |

図22 SZ07遺構図（1）

みを加え、ケズリ出しで返り部分を成形する。

時期 須恵器は周溝埋土上層から出土したのもので、SI18などの構築に伴う土地造成等により、窪地状となった周溝が埋没する際に混入したと考えられる。このため、築造年代を示す遺物は確認できなかったが、他の時期が判明した墳墓は弥生時代後期から古墳時代前期と考えられることから、ほぼ同じ時期の遺構と考えられる。

SZ08 (図24・図25)

検出状況 EC7～EE9グリッドの緩斜面に位置し、IV層の上面で検出した。現況地形測量ではやや平坦な平場があり、盛土状の高まりは確認できなかった。この平場は、SI13やSI15・SI19を建てたことで形成されたと思われる。また、SI13やSI15・SI19は、SZ08周溝埋没後に建てられていることからSZ08の方が古いと思われる。さらにSZ08南側のSI20を検出した一段低い平場は、SZ08の墳丘を一部削平して造成されたと思われる。

方台部 西辺は直線的で東辺はやや湾曲する。南辺は直線的に検出したが、古代の竪穴建物によって削平された結果と思われる。なお、北辺は竪穴建物との重複により不明であるが、東辺の周溝が屈曲する状況が確認できることから方台部は、ほぼ方形若しくは長方形と思われ、残存部の大きさは東西約8.75m、南北約6.15mである。SI15から方台部にかけて設定したトレンチによる土層観察では、墳丘盛土は確認できなかった。方台部のほぼ中央に、東西方向が長軸となる長方形の土坑を検出した。長軸長5.20m、幅1.44m、深さ0.54mで、他の主体部とした土坑よりも長軸長が長いことから、当初は主体部とは考えず、溝状遺構と判断して短軸部の土層観察用畔を残して掘削した。しかし、埋土の

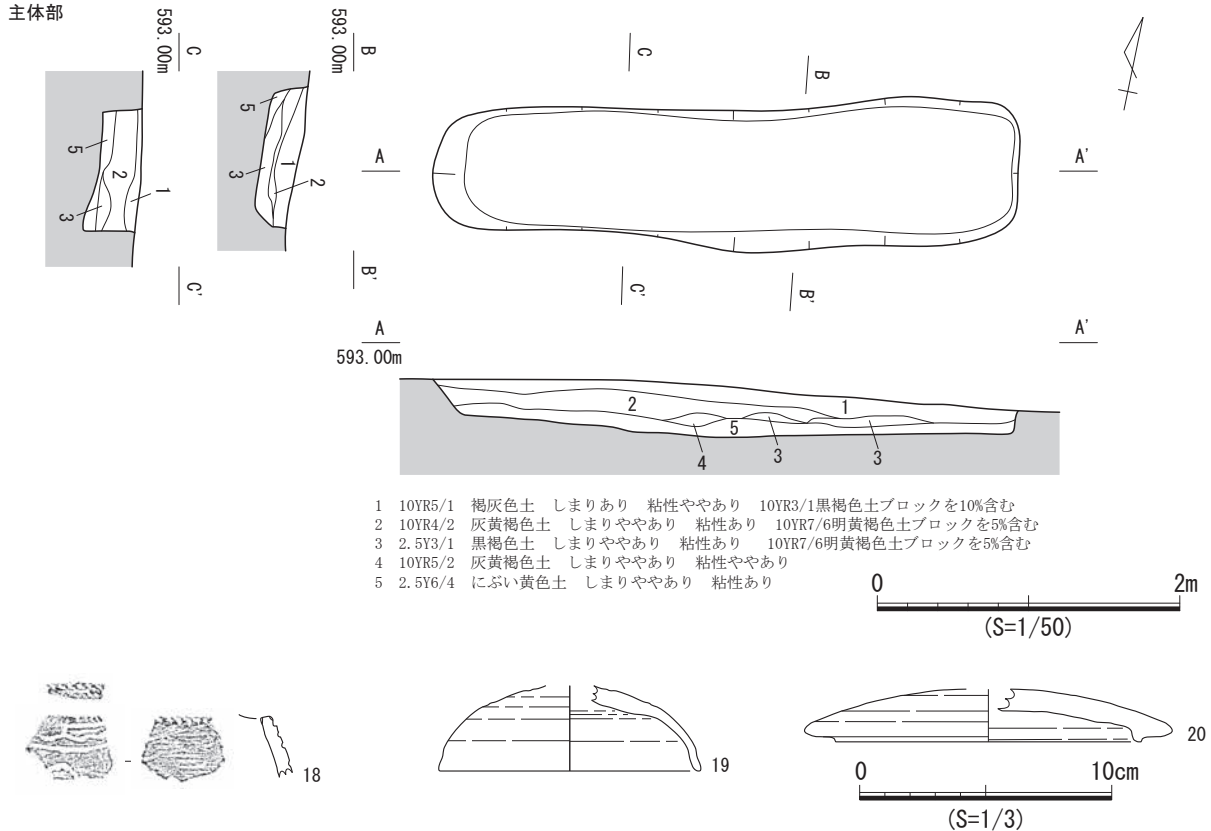


図23 SZ07遺構図(2)、出土遺物

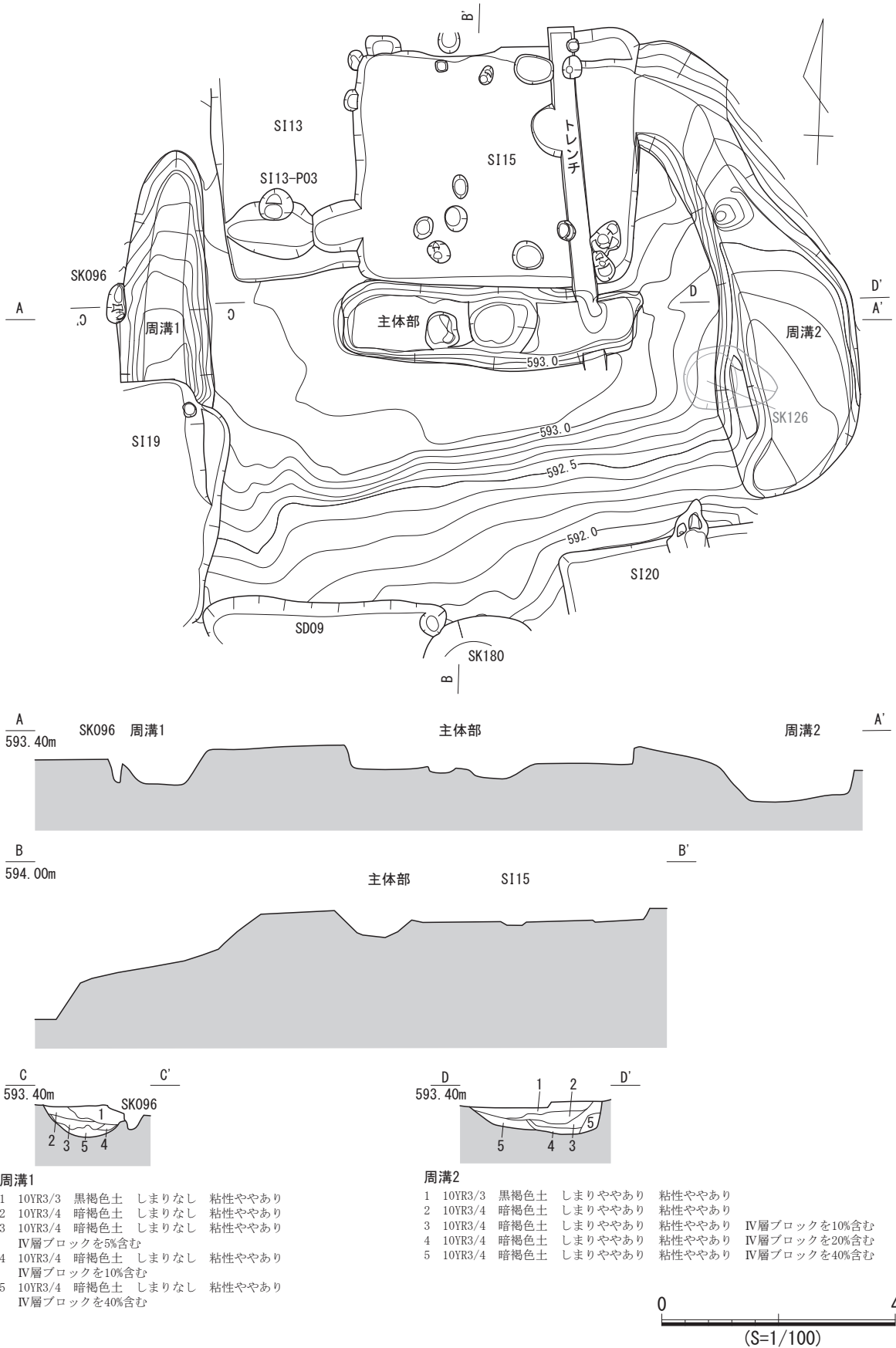


図24 SZ08遺構図(1)

半分程度掘削した段階で主体部の可能性を考え、途中から東西方向にも土層観察用畔を残して掘削した。この土坑は、層位的にはSZ08との関係は確認できなかったが、方台部のほぼ中央にあることやSZ06やSZ07主体部と長軸方向が合うことから、主体部の可能性があると思われる。主体部埋土の土層堆積状況や底面が凹むこと、新しい時期の遺物が出土したことから別の掘り込みが重複して存在していたことが考えられるが、主体部と新しい掘り込みを明確に区別することができなかった。

周溝 東辺及び西辺の周溝を検出し、北辺の周溝2は、大半が竪穴建物に削平されているが、東辺の周溝2が屈曲するところを検出しており、北辺に沿って存在していたと思われる。しかし、西辺の周溝1とは連続していない。また、西辺の周溝1は、SI19により南部が削平され、残存長は約4.40m、幅1.60m、深さ0.54mである。東辺の周溝2は、最大幅約2.40m、深さ0.56mである。周溝の残存部での底面は比較的平坦で、埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 弥生土器や土師器、須恵器、石器が出土した。周溝1のSI19との境付近から須恵器の坏身や壺片のほか、2層から須恵器の短頸壺(22)と土師器が、周溝2のSK126との境付近の2層か

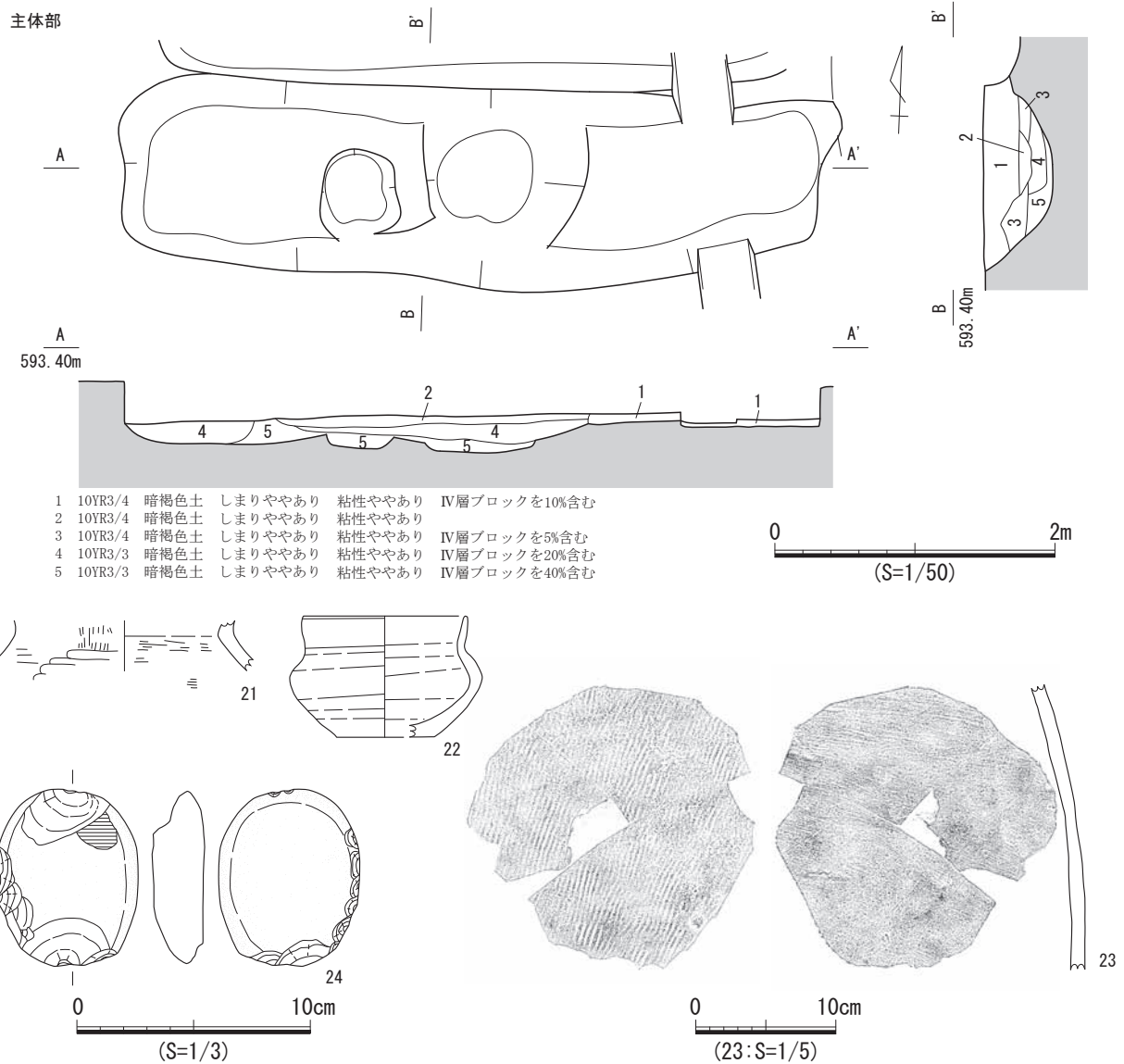


図25 SZ08遺構図(2)、出土遺物

ら石錘（24）が出土した。主体部では、遺構の西半分のc層から弥生土器の壺（21）と土師器、中央付近の3層から須恵器の甕（23）が出土した。

出土遺物 21は、表面が明赤褐色の壺の肩部の破片で、外面は縦方向にハケ目とミガキ、内面は横方向のハケ目が認められる。22は短頸壺で、SZ06周溝出土の16に比して口縁部が直立気味で、底面を回転ヘラ削りする。23は甕の胴部片で、外面には並行タタキ目、内面は当て具痕を板状工具で擦り消している。24は長軸の両端を打ち欠いた石錘である。

時期 須恵器は周溝埋土上層から出土したのもので、7世紀後半以降のSI13やSI15などの構築に伴い、窪地状となった周溝が埋没する際に混入したものと考えられる。このため、築造年代を示す遺物は確認できなかったが、周溝で出土した21や他の時期が判明した墳墓は弥生時代後期から古墳時代前期と考えられることから、ほぼ同じ時期の遺構と考えられる。

SZ09（図26）

検出状況 平成27年度のA地点と平成28年度のB地点にまたがり、斜面裾部に位置する。ED10～EF13グリッド、IV層の上面で検出した。現況地形測量では、やや平坦な平場（平坦面④）があり、盛土状の高まりは確認できなかった。この平場は、SI22～SI24などを建てたことにより形成されたと思われる。また、SI21は、SZ09周溝埋没後に建てられていることから、SZ09が古い。さらに、B地点にあたるSZ09南西部は、SI25～SI27や礎石建物が建てられた平場により削平されている。なお、この平場で検出したSZ10東辺の周溝は、SZ09西辺周溝と重なる位置にあり、周溝の一部を共有していた可能性がある。

方台部 北辺及び東辺は直線的で、西辺と南辺は不明であるが、残存部の大きさは東西8.45m、南北5.01mである。墳丘盛土は確認できず、主体部と思われる土坑も検出できなかった。

周溝 南辺は発掘区外となるため不明であるが、他辺においては方台部を囲むように周溝が存在する。ただし、西辺及び東辺は一部検出ただけである。周溝の幅は、1.40m～1.90mで北辺の幅が広く、深さは0.56m～0.58mで斜面上部となる北辺側が深い。周溝の底面は比較的平坦で、埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 縄文土器や土師器、須恵器が出土した。周溝出土遺物はSI21との境付近に集中し、縄文土器1点のみ北側周溝の東寄り出土した。SI21との南側境付近のc層から須恵器の蓋（25）と広口壺（28）、d層から坏身（26）、e層から高坏（27）が、g層から土師器の甕（29）が出土した。

出土遺物 25～28は須恵器で、25は返りの付いた蓋、26は坏身である。受け部が内側に大きく傾き、底面には回転ヘラ切り痕が確認できる。27は高坏の脚部で、全面を回転ナデ調整している。28は広口壺の口縁部から胴部上半で、口縁部がやや外反する。焼成が甘く、表面をナデ調整している。29は土師器の甕の胴部下半部片で、表面にハケ目調整、内面に板ナデ調整が確認できる。

時期 遺物は周溝埋土上層から出土したのもので、7世紀後半以降のSI21～SI24などの構築に伴う土地造成等により、窪地状となった周溝が埋没する際に含まれたものと考えられる。このため、築造年代を示す遺物は確認できなかったが、他の時期が判明した墳墓は弥生時代後期から古墳時代前期と考えられることから、ほぼ同じ時期の遺構と考えられる。

SZ10（図27・図28）

検出状況 斜面裾部のEF9～EH11グリッド、礎石建物（SB04）の基壇下で検出した。現況地形測量で

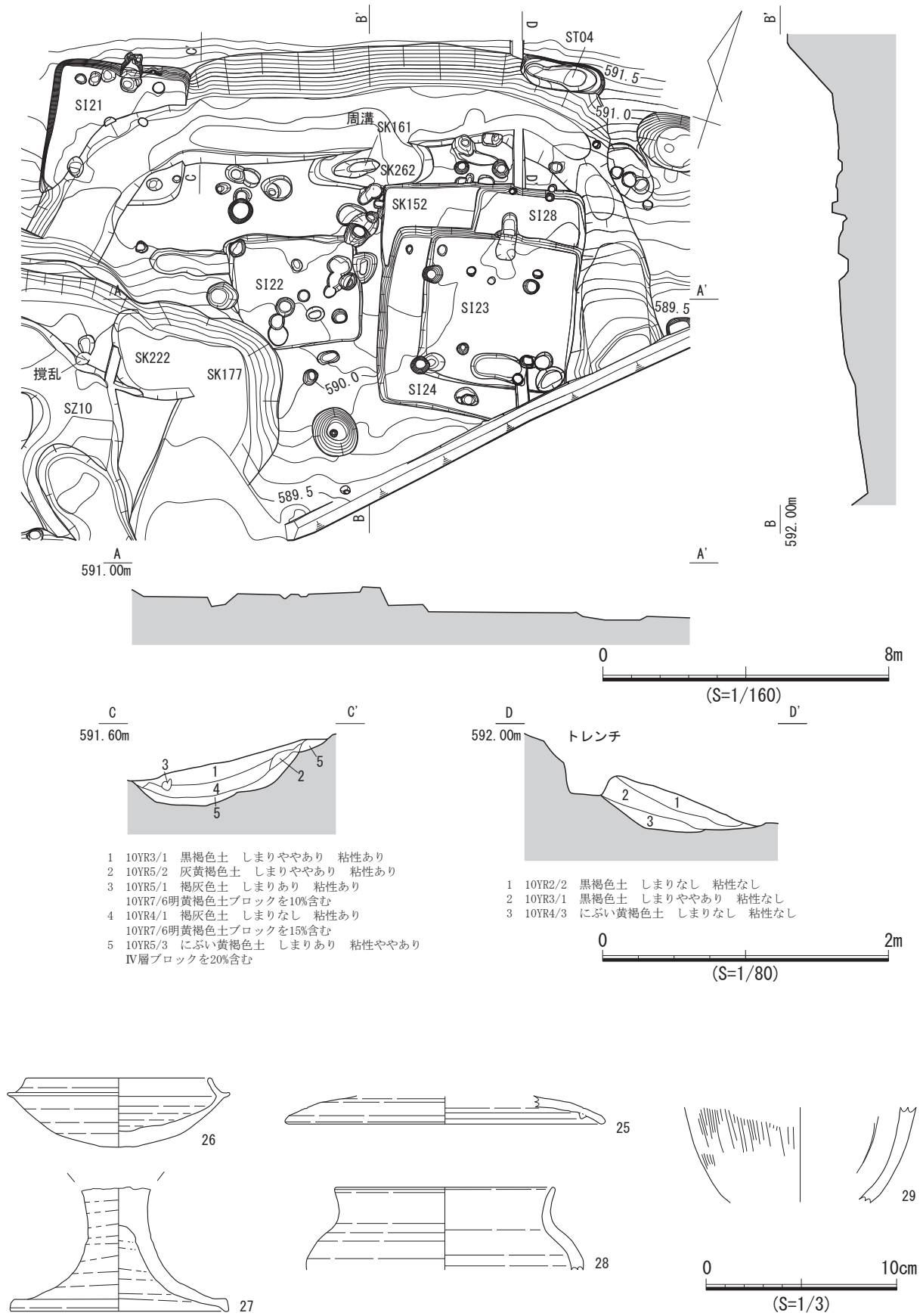


図26 SZ09遺構図、出土遺物

はやや平坦な場所に盛土状の高まりを確認し（平坦面⑤）、発掘調査実施前は上切寺尾6号古墳とされていた。平成26年度の試掘・確認調査では墳丘や周溝は確認できず、竪穴建物（SI25）が検出された。表土掘削後、当初想定していなかった礎石建物を検出し、これが基壇を構築した上に建てられていることが判明したことから、盛土状の高まりはこの基壇であることが判明した。基壇除去後にSI25とSZ10、SZ11の周溝が重複していることを確認しが、検出状況からSI25などの竪穴建物が新しく、次いでSZ11、最も古いのはSZ10と判断した。

方台部 方台部の形状は、SI25などの竪穴建物やSZ11により大半を削平されて不明である。墳丘盛土は確認できず、主体部と思われるような土坑も検出できなかった。

周溝 西辺の周溝2をSI25床面で、ごく一部を検出したほか、北辺と東辺の周溝1も一部を確認した。南辺については不明であるが、SZ11と共有していた可能性がある。また、東辺の周溝1についても、SZ09周溝と位置が重なることから共有していた可能性が考えられる。周溝の幅は、1.75m～3.10mで

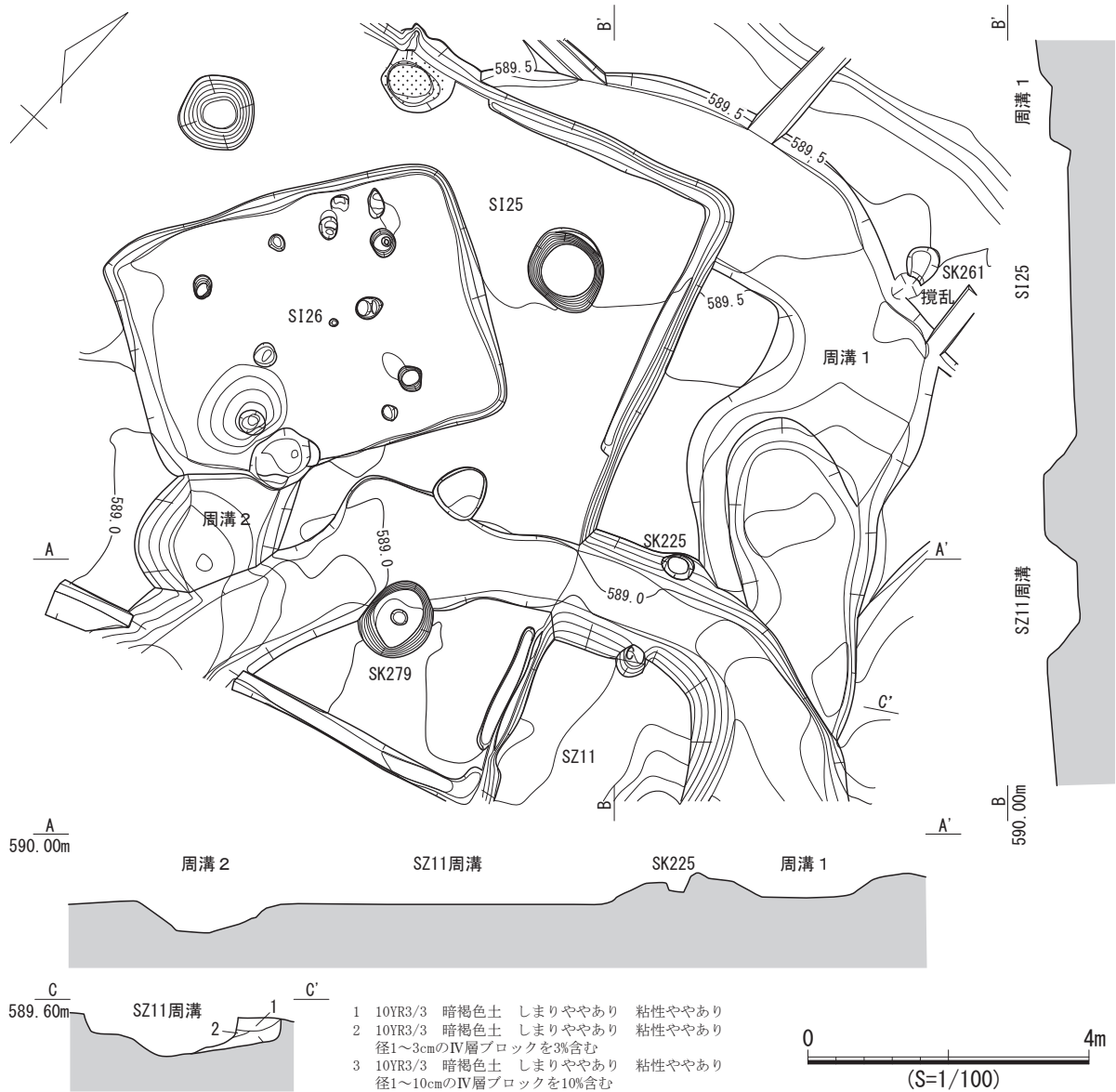


図27 SZ10遺構図

東辺の幅がやや広く、深さは0.96mで東辺側がやや深い。残存部での周溝の底面は比較的平坦で、埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 須恵器の坏身の破片が、周溝1の北東角と南側のSZ11周溝の境のa層で各1点出土している。この他d層で石錘(30)が出土した。

出土遺物 2点の須恵器の坏身は細片のため図示しなかった。30は打ち欠き石錘である。楕円形の円礫の両端に抉りを作り出している。

時期 遺物は周溝埋土上層から出土したのもので、7世紀後半以降のSI25などの構築に伴う土地造成等により、窪地状となった周溝が埋没する際に含まれたものと考えられる。このため、築造年代を示す遺物は確認できなかったが、他の時期が判明した墳墓は弥生時代後期から古墳時代前期と考えられることから、ほぼ同じ時期の遺構と考えられる。

SZ11 (図29)

検出状況 斜面裾部のEG9～EH11グリッド、礎石建物(SB04)の基壇下で検出した。現況地形測量ではやや平坦な場所に盛土状の高まりが確認されていた(平坦面⑤)が、前述のようにこの盛土状の高まりは礎石建物基壇であった。基壇除去後にSI25とSZ10、SZ11の周溝が重複していることを確認したが、検出状況からSI25などの竪穴建物が新しく、次いでSZ11、最も古いのはSZ10と判断した。

方台部 南東部は発掘区外となるが、東辺及び南辺は直線的であるが、西辺から北辺にかけては弧を描いており、扇形の形状となる。墳丘盛土は確認できず、主体部と思われるような土坑も検出できなかった。

周溝 南辺の周溝2は一部を検出しただけであり、西辺の周溝1とは連続しないが、東辺の周溝1との関係は発掘区外となり不明である。西辺から東辺は方台部を囲むように周溝を検出した。周溝の幅は1.20m～2.70mで東辺がやや広く、深さは0.55m～0.94mで西辺側が深くなる。残存部での周溝の底面は比較的平坦で、埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 縄文土器や須恵器、石器が出土した。北側の周溝の底面直上で須恵器の高坏(34)、c層で坏蓋(33)と横瓶(35)が出土した。周溝西側ではd層で縄文土器(31・32)、a層で石匙(36)が出土した。

出土遺物 31は縄文時代中期の船元I式土器の口縁部片で、口縁部外面にへら状工具によるI字状刻みと円形刺突列を施し、口縁部内面にはRL縄文を横位に施す。32は縄文時代中期後半の土器で、口縁部に刺突列や沈線文を施す。33は蓋と考えられる。34は無蓋高坏の口縁部小破片である。35は横瓶で胴部の破片である。36は下呂石製の石匙で、縦長剥片の一端に摘み部、両側辺の片面を調整して刃部を作出する。

時期 須恵器は周溝埋土上層から出土したのもので、7世紀後半以降のSI25などの構築に伴う土地造成等により、窪地状となった周溝が埋没する際に混入したものと考えられる。このため、築造年代を示す遺物は確認できなかったが、他の時期が判明した墳墓は弥生時代後期から古墳時代前期と考えられることから、ほぼ同じ時期の遺構と考えられる。

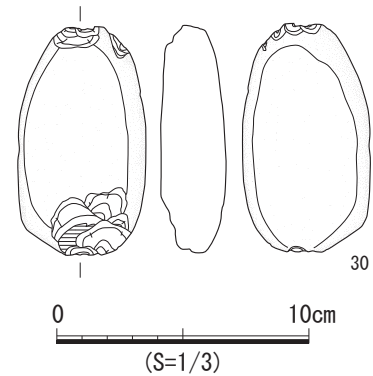


図28 SZ10出土遺物

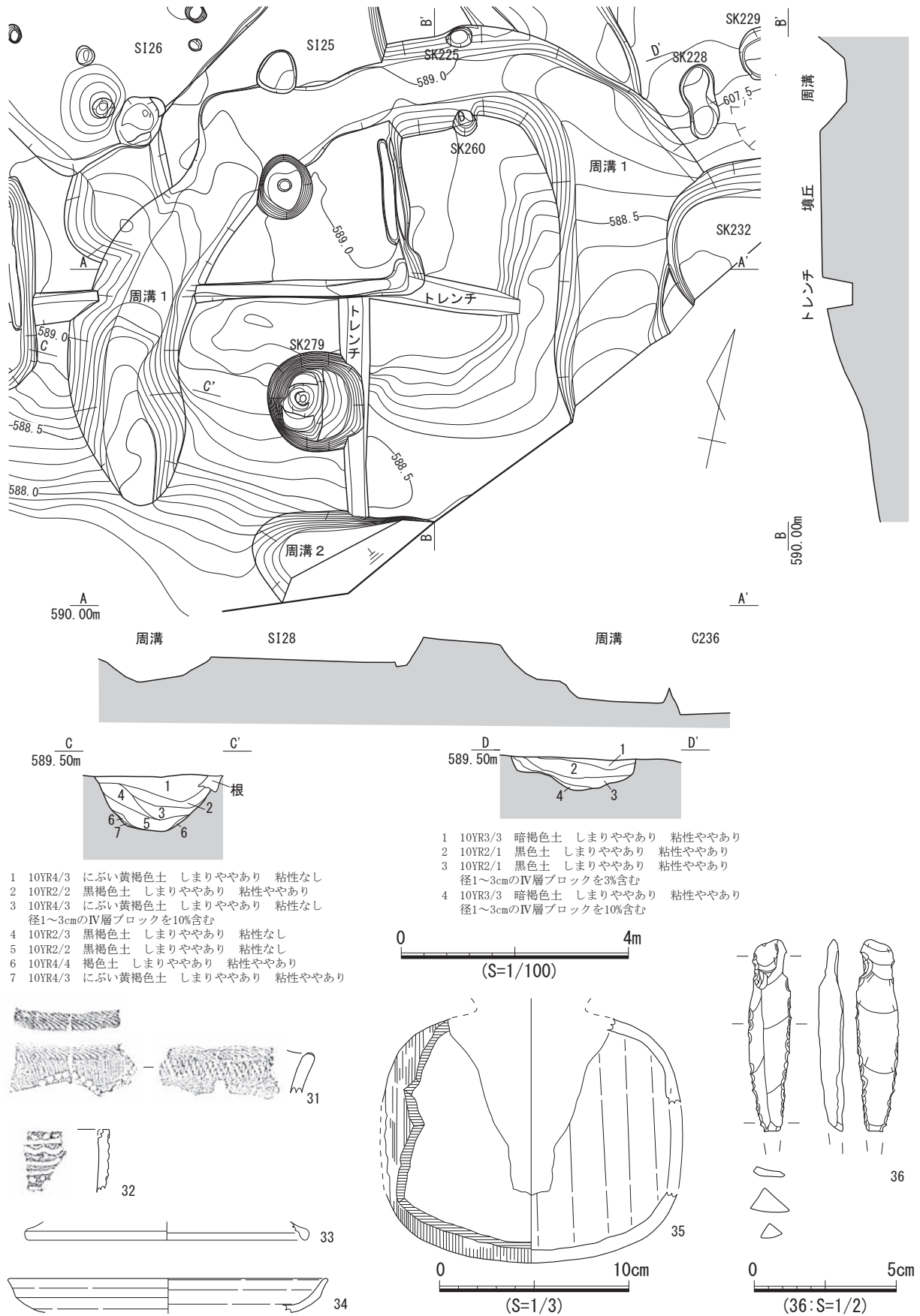


図29 SZ11遺構図、出土遺物

SZ12 (図30・図31)

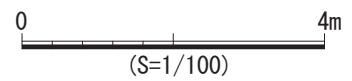
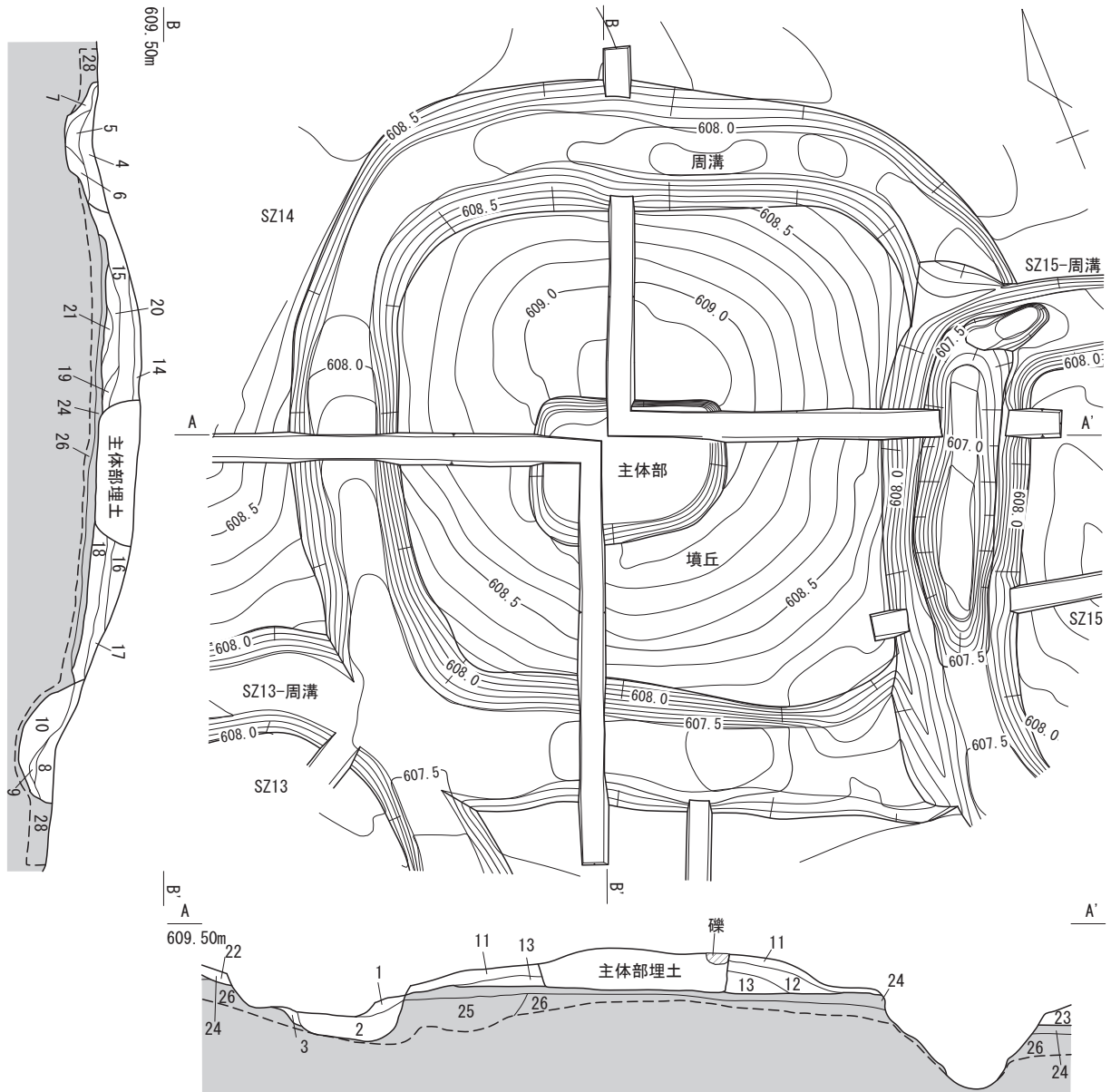
検出状況 BJ6～BK7グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の北西部尾根上に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。方台部南西部の盛土下面で、縄文時代の竪穴建物SI31を検出した。SZ12の西部でSZ14、南西部でSZ13、東部でSZ15の各周溝と重複する。トレンチの土層断面から、SZ12はSZ13とSZ15より古いと判断した。なお、SZ14との重複関係については、調査時においてSZ12の方が新しいと考え、掘削したが、整理作業段階における検討の結果、SZ12の方が古いと判断した。この検討内容については、SZ14の項で詳述する。以上からSZ12は周囲の墳墓の中では最も古くなり、構築順はSZ12<SZ15<SZ16、SZ12<SZ14<SZ13<SZ19である。

方台部 東辺はSZ15の周溝によって削られるが、本来の平面は4辺が直線的な方形である。方台部には、各辺に直交するようにL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。盛土は、Ⅲb層の上に方台部中央付近から灰黄褐色土とにぶい黄褐色土を積み上げている。各土層にIV層起源のブロックを多く含むことから、墳丘周囲の土を用いて構築していると考えられる。なお、周溝埋土の2層のように炭化物を含む堆積が部分的に認められるが、SZ12の周溝と重複するSI31の埋土を盛土として利用した影響と思われる。方台部の中央やや南西寄り、東西方向が長軸となる不整形の土坑を検出した。Ⅲb層上に盛土をした後に掘削された土坑であることから、SZ12の主体部と考えられる。主体部の平面は北辺が直線的で、他は丸みを帯びる。最大の深さは0.58mである。埋土は墳丘と同様、IV層を起源とする堆積である。主体部の掘方東辺に接する埋土上面で、人頭大の礫を検出した。この礫の一部が墳丘の盛土にかかるため、原位置を保っている可能性がある。

周溝 方台部の周りを全周していたと考えられるが、南西部でSZ13、西部でSZ14、東部でSZ15の各周溝と重複し、一部が消失している。周溝の南溝は直線的であるが、北溝と西溝はやや湾曲し、北西と北東の隅は丸みを帯びる。断面の形状は半円形に近い。埋土には一部IV層起源のブロックや炭化物も認められるが、これらは墳丘から流出した堆積と考えられる。周溝の幅は1.30m～2.00mで北東隅のみ若干狭いが、幅はほぼ同じである。深さは0.40m～0.54mである。周溝の底面は比較的平坦で、埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 縄文土器や弥生土器、石器が、墳丘盛土や主体部及び周溝の埋土から出土した。縄文土器の深鉢(37)は主体部の西端付近でまとまって出土したが、SZ12の墳丘底面で検出した縄文時代のSI31から出土した111と類似しており、同一個体の可能性が考えられる。浅鉢(38)も墳丘盛土表面から0.20m～0.25m下で出土したが、37・38ともに出土位置がSI31に近く、SZ12周溝の掘削によって生じたSI31の埋土を含む排土を、墳丘盛土としてそのまま利用したためと考えられる。なお、土偶と思われる39も37に近接する位置で出土した。弥生土器は、周溝底面直上で出土したものもあるが、いずれも細片で詳細は不明である。その他の遺物は埋土中から散在して出土しており、特徴は認められなかった。

出土遺物 37と38は縄文土器である。37は深鉢で、直線的な口縁部がやや緩やかに開く器形で、わずかに波状口縁となる。外面に縄文を施したのち、口縁部及び体部上半に半截竹管状工具による半隆起線文を施す。縄文の原体は単節の斜縄文と思われるが、摩滅のため判然としない。口縁部には1条の横位の半隆起線の一部が垂下し、その上にヘラ状工具による連続刻みを施す。体部には横長の楕円文を施文する。38は小形の浅鉢で、体部から口縁部にかけて内湾する器形で、丁寧にナデ調整した底部



- 1 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土
- 2 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 炭化粒を1%含む 周溝埋土
- 3 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土
- 4 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土
- 5 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 炭化粒を1%含む 周溝埋土
- 6 10YR3/1 黒褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土
- 7 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土
- 8 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土
- 9 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土
- 10 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土
- 11 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 盛土層
- 12 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 炭化粒を1%含む 盛土層
- 13 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 盛土層
- 14 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IIIb層ブロックを5%含む 盛土層
- 15 10YR5/1 褐灰色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 盛土層
- 16 2.5Y5/2 暗灰黄色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを3%含む 盛土層
- 17 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 盛土層
- 18 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 炭化粒を1%含む 盛土層
- 19 10YR5/1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 盛土層
- 20 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IIIb層ブロックを5%含む IV層ブロックを1%含む 盛土層
- 21 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IIIb層ブロックを10%含む 盛土層
- 22 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む SZ14盛土層
- 23 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり SZ15盛土層
- 24 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IIIb層 (旧表土層)
- 25 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 炭化粒を15%含む SI31埋土
- 26 10YR6/6 明黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層

図30 SZ12遺構図(1)

外面は、中央がやや窪む。口縁部から体部にかけて4条の横位沈線が引かれており、1条目と2条目の間に連続して刻み、3条目の沈線には半截竹管状工具による押し引きが認められる。内外面の対応する位置に煤が付着するが、煮沸に使用したかは不明である。39は土偶と思われる土製品で、縄文時代のものと思われる。未調整の平面を下にして脚部として図化しているが、腕部の可能性もある。外面に3条の沈線を施す。

時期 重複関係からは弥生時代後期後半のSZ16よりも古いと考えられるが、周溝の重複状況から、大きな時期差はないと思われる。

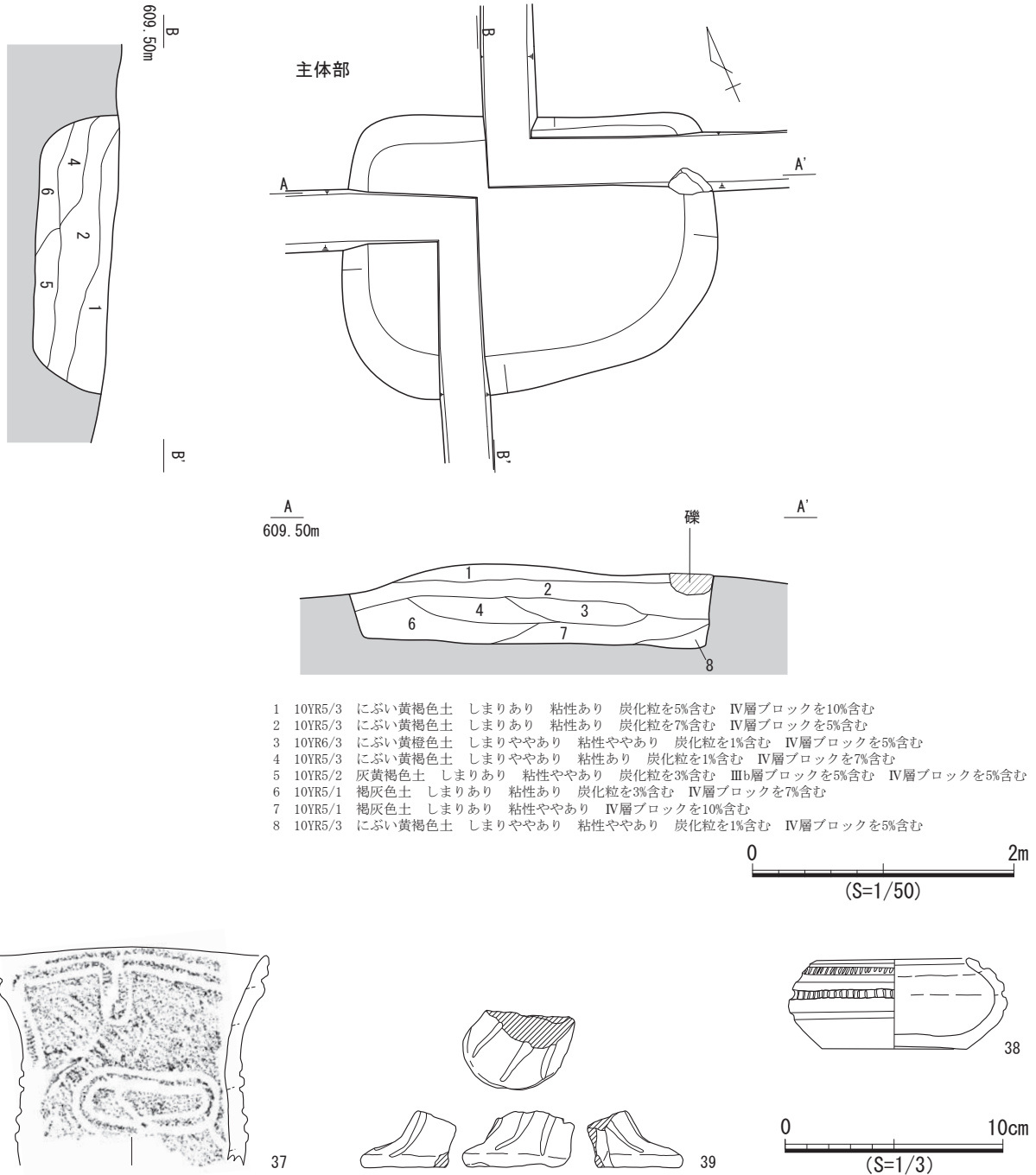


図31 SZ12遺構図(2)、出土遺物

SZ13 (図32・図33)

検出状況 BK3～BL5グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の北西部尾根上に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。SZ13の北部でSZ14、北東部でSZ12、南東部でSZ19の各周溝と重複する。検出状況とトレンチの土層断面から、SZ13はSZ12とSZ14よりも新しく、SZ19よりも古いと判断したことから、構築順はSZ12<SZ14<SZ13<SZ19である。

方台部 平面は、4辺が直線的な隅丸方形である。方台部には、対角線に沿ってL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。墳丘の構築は、周溝内側に周堤状の盛土（19層～30層）を施した後、その内側に充填する。盛土は、主に褐色土で炭化物を含む堆積も認められる。方台部の中央で、東西方向が長軸となる不整楕円形の土坑を検出した。Ⅲb層（31層）上に盛土した後に掘削し、その後さらに盛土されていることから、SZ13の主体部と考えられる。主体部は、底面から緩やかに丸みをもって立ち上がり、最大の深さは0.38mである。埋土は墳丘の盛土と同様の起源と考えられ、IV層と類似する明褐色土や褐色土である。また、墳丘盛土よりもIV層起源のブロックが細かい特徴がある。

周溝 方台部の周りを全周している。周溝の北溝は直線的であるが、その他はわずかに丸みを帯びる。断面の形状は半円形に近い。上層の埋土は墳丘と類似した色調の堆積であり、墳丘から流出した可能性が高い。B-B'断面の北東端ではSZ12の周溝との重複があり、SZ12の周溝が一定以上埋没した後にSZ13の周溝を掘削した状況を確認できる。周溝の幅は、東溝及び西溝の北部が1mほどで狭いが、その他は1.80m前後でほぼ同じである。深さは0.36m～0.56mである。周溝の底面は平坦で、埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

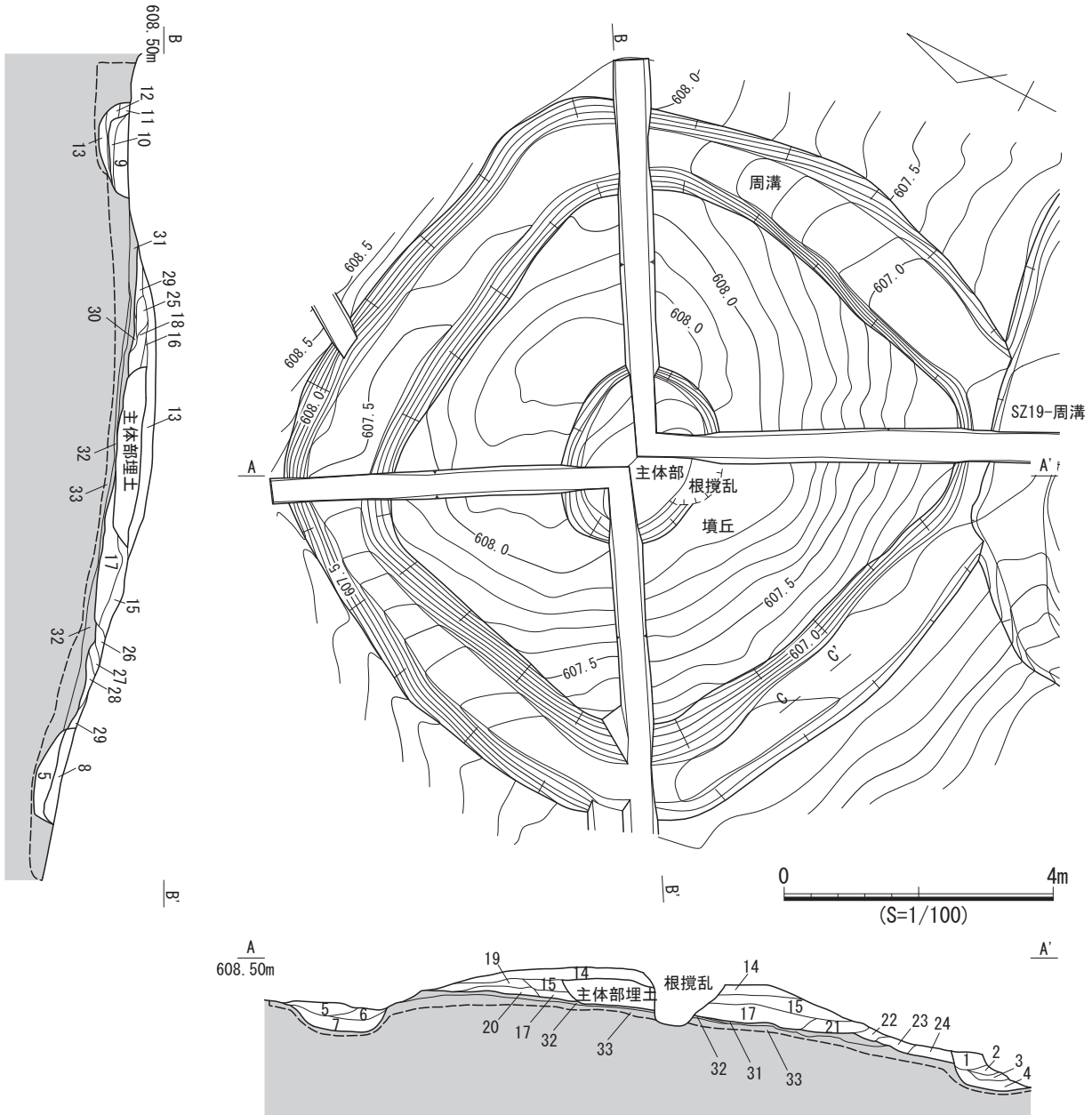
遺物出土状況 弥生土器や石器が周溝の埋土から出土した。弥生土器の有段口縁壺（40）と高坏（41）は方台部の南側の周溝で、底面から若干浮いた状態で出土した。41は脚部片が正位で、坏部がその西側に横位で潰れた状態で出土した。40は、41の北側で41とほぼ同様の高さから出土したが、底部を含め1/2以上を欠損している。その他の遺物は埋土中から散在して出土した。

出土遺物 40と41は弥生時代末から古墳時代初めの土器である。40は有段口縁壺で、口縁部外面に横位の擬凹線文を施す。口縁部と頸部の外面の境は明瞭な段をもつ。口縁部内外面と体部外面には赤彩が残る。41は高坏で、底面から直線的に開く坏部と棒状で裾部のみ開く脚部をもつ。外面はミガキ調整の可能性が高いが、摩滅しており判然としない。外面と坏部の内面の一部に赤彩が残る。

時期 40は北陸地方の月影式に比定でき、41の坏部が深く坏底部の径がやや大きいことから、弥生時代末から古墳時代初めに位置付けられる。

SZ14 (図34)

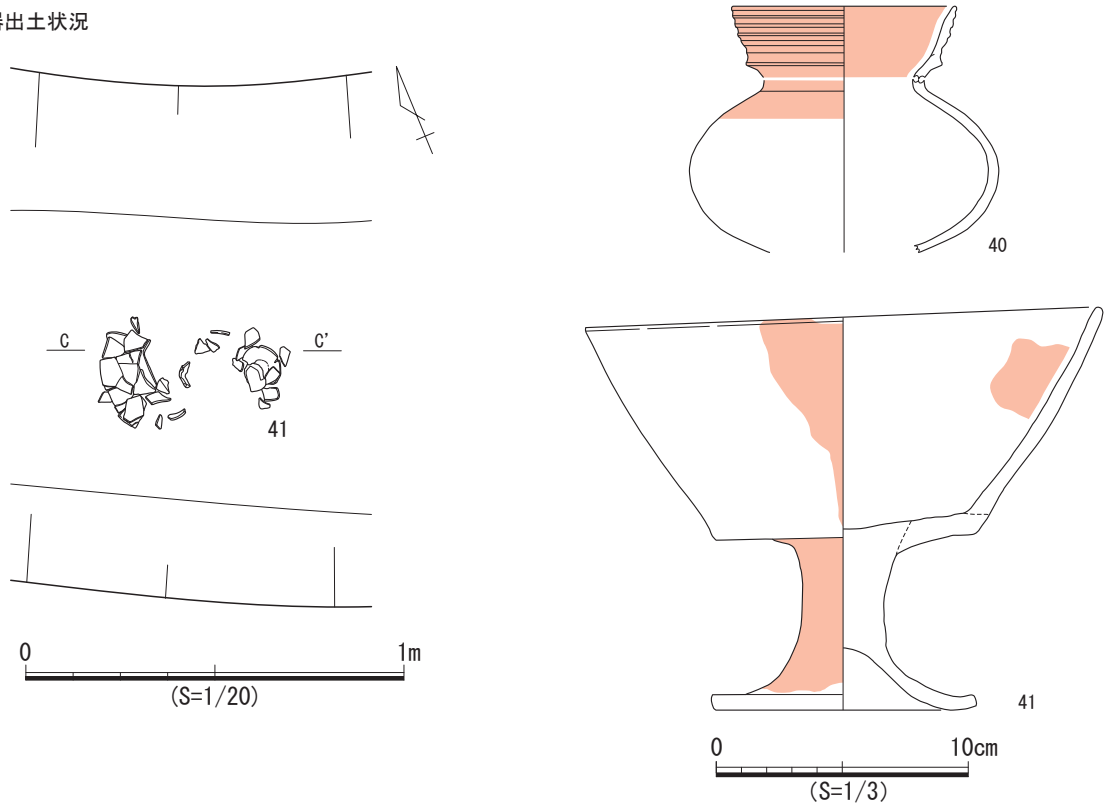
検出状況 BI4～BJ6グリッド、IV層の上面で検出した。D地点北西端部の尾根上に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。北西部は発掘区外である。SZ14の東部でSZ12、南部でSZ13の各周溝と重複する。トレンチの土層断面から、SZ14はSZ13よりも古いと判断した。SZ12との重複は、掘削当初においては、SZ14とSZ12の間に設定したトレンチの土層断面（B-B'断面の3層・8層、A-A'断面の1層～3層）で、SZ12の周溝埋土のみが堆積し、SZ14の周溝は残存していないと判断していた。その後、SZ12の検出作業を行ったが、この際確認したSZ12周溝の上端が、SZ12のA-A'断面において3層の西端と一致することから、SZ14の8層を除去した状況で、SZ12の周溝のみを検出してしまった可能性が高いと考えられる。B-B'断面では、Ⅲb層の東端部と8層が近接しており、SZ14のC-C'断面（発掘



- | | |
|---|---|
| 1 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり | 18 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cmの炭化粒を1%含む 盛土層 |
| 2 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1cmの炭化粒を1%含む | 19 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 盛土層 |
| 3 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cmの炭化粒を1%含む | 20 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 盛土層 |
| 4 7.5YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 盛土層から流れてきた堆積土か | 21 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cmの炭化粒を1%含む 盛土層 |
| 5 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cmの炭化粒を1%含む | 22 7.5YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cmの炭化粒を1%含む 盛土層 |
| 6 7.5YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cmの炭化粒を1%含む | 23 7.5YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 盛土層 |
| 7 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cmの炭化粒を1%含む | 24 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性ややあり 盛土層 |
| 8 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 25 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性ややあり 盛土層 |
| 9 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり | 26 7.5YR4/3 褐色土 しまりなし 粘性ややあり 盛土層 |
| 10 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1cmの炭化粒を1%含む | 27 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cmの炭化粒を1%含む 盛土層 |
| 11 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性ややあり | 28 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性ややあり 盛土層 |
| 12 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり | 29 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 盛土層 |
| 13 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cmの炭化粒を1%含む | 30 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cmの炭化粒を1%含む 29層よりやや赤みがある 盛土層 |
| 14 7.5YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性ややあり 封土 | 31 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IIIb層 (旧表土層) |
| 15 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 盛土層 | 32 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層 |
| 16 7.5YR4/3 褐色土 しまりなし 粘性ややあり 盛土層 | 33 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層 |
| 17 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmの7.5YR5/6明褐色土ブロックを3%含む | |

図32 SZ13遺構図(1)

周溝内土器出土状況



主体部

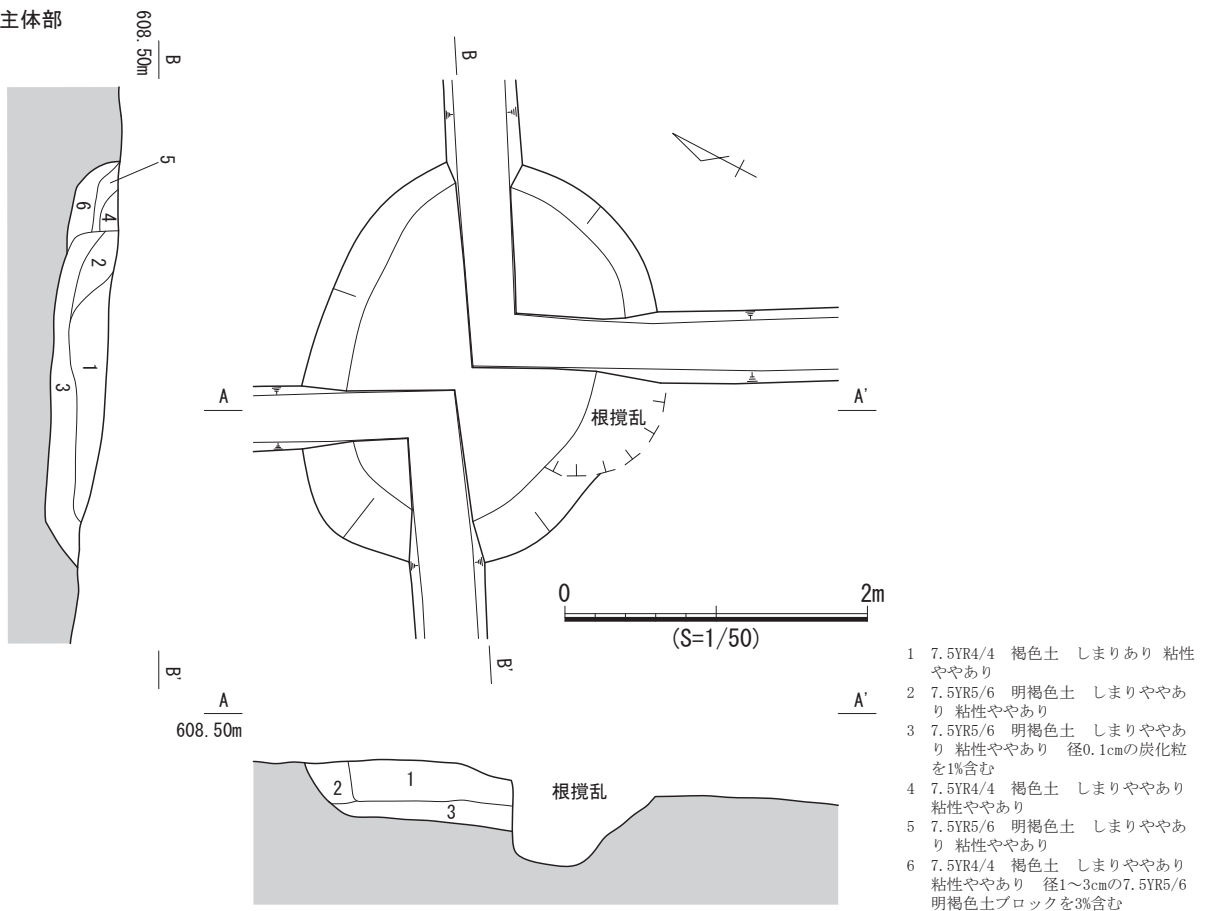


図33 SZ13遺構図(2)、出土遺物

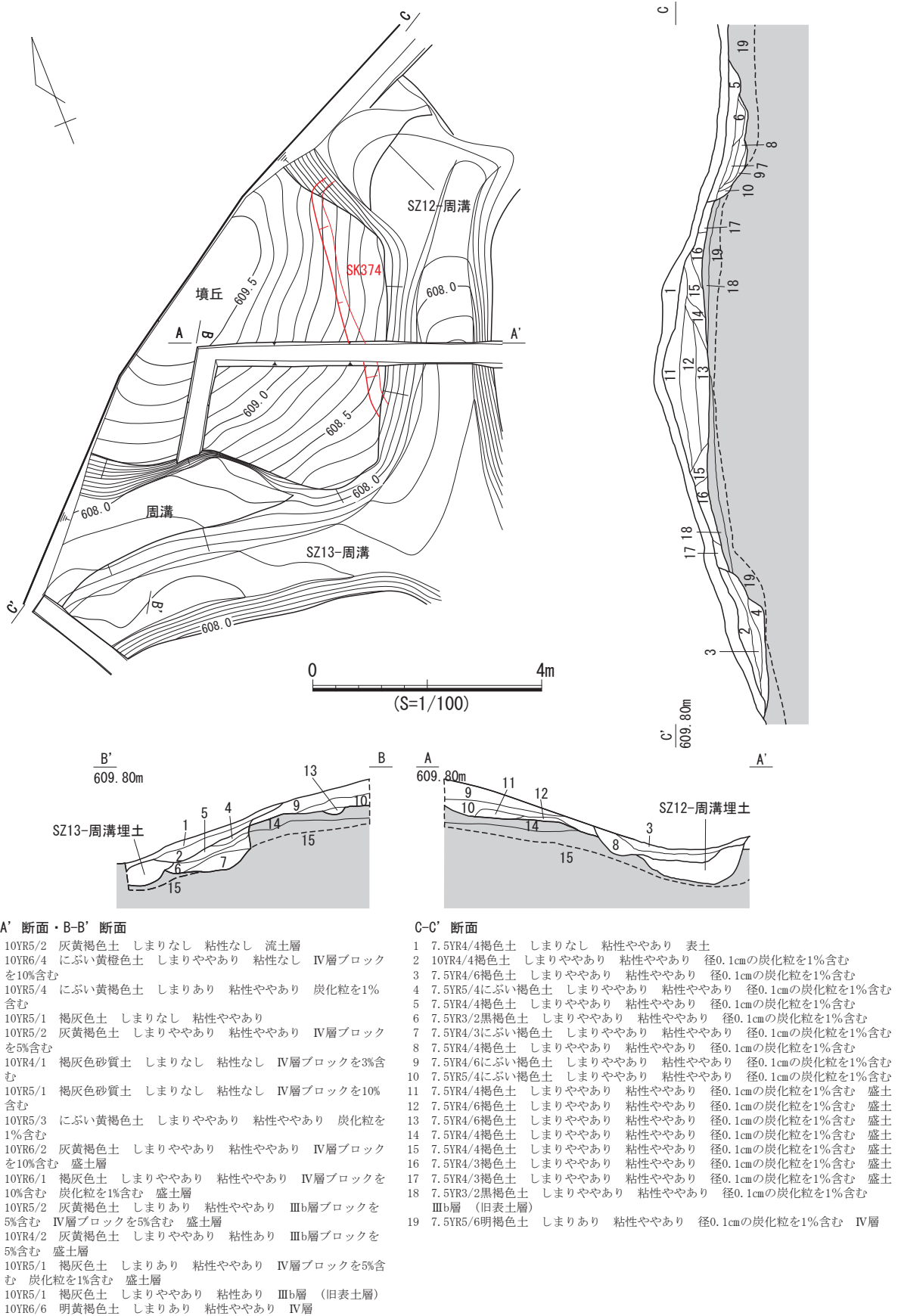


図34 SZ14遺構図

区西壁)に見られる周溝の堆積が8層と類似することや、SZ14の南溝や北溝の形状や深さが8層とほぼ一致することから、B-B'断面の8層がSZ14の周溝埋土と考えられる。このことから、調査時の所見は誤りと判断し、SZ12よりSZ14の方が新しい遺構とした。以上から構築順は、SZ12<SZ14<SZ13<SZ19である。

方台部 北側は発掘区外で検出範囲が狭く、全体の形状は不明である。先述のように重複するSZ12及びSZ13との重複を確認する目的でL字形のトレンチを設定して掘削した。A-A'及びB-B'断面の14層がⅢb層であり、その上にIV層起源の土を盛り上げている。しかしB-B'断面の10層はC-C'断面におけるⅢb層(18層)と盛土の関係から考えると不自然な堆積であり、10層のⅢb層より東の部分は8層と同様の周溝埋土であった可能性がある。また、先述のような検出時の判断から、平面図で示した方台部南東部の形状は、周溝埋土の掘り残しを表していると考えられる。C-C'断面では周溝の内側に周堤状の盛土(14層~17層)を施した後その内側を充填する(11層~13層)工法をとった状況が確認できる。いずれも褐色土でありIV層起源の土と考えられる。なお、方台部からは埋葬施設と考えられる土坑は確認できなかった。

周溝 西溝と北溝の大部分は発掘区外である。先述のように、東溝は誤って掘削してしまったため、本来の平面形は不明である。残存する周溝の幅は、1.44m~2.80mで北溝が広い。深さは0.32m~0.75mで、断面形は浅い窪み状である。周溝内では、埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。また、墳丘盛土除去後の東端底面でSK374を検出した。この土坑は、先述した周溝埋土の掘り残し部分と位置が一致することや、隣接するSZ12やSZ13と長軸方位が類似することから周溝の痕跡と考えられ、SZ14も本来は方形の方台部と、周囲を取り囲む周溝で構成された遺構であった可能性が高い。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 SZ12より新しく、SZ13より古いことから、弥生時代後期から古墳時代前期と思われる。

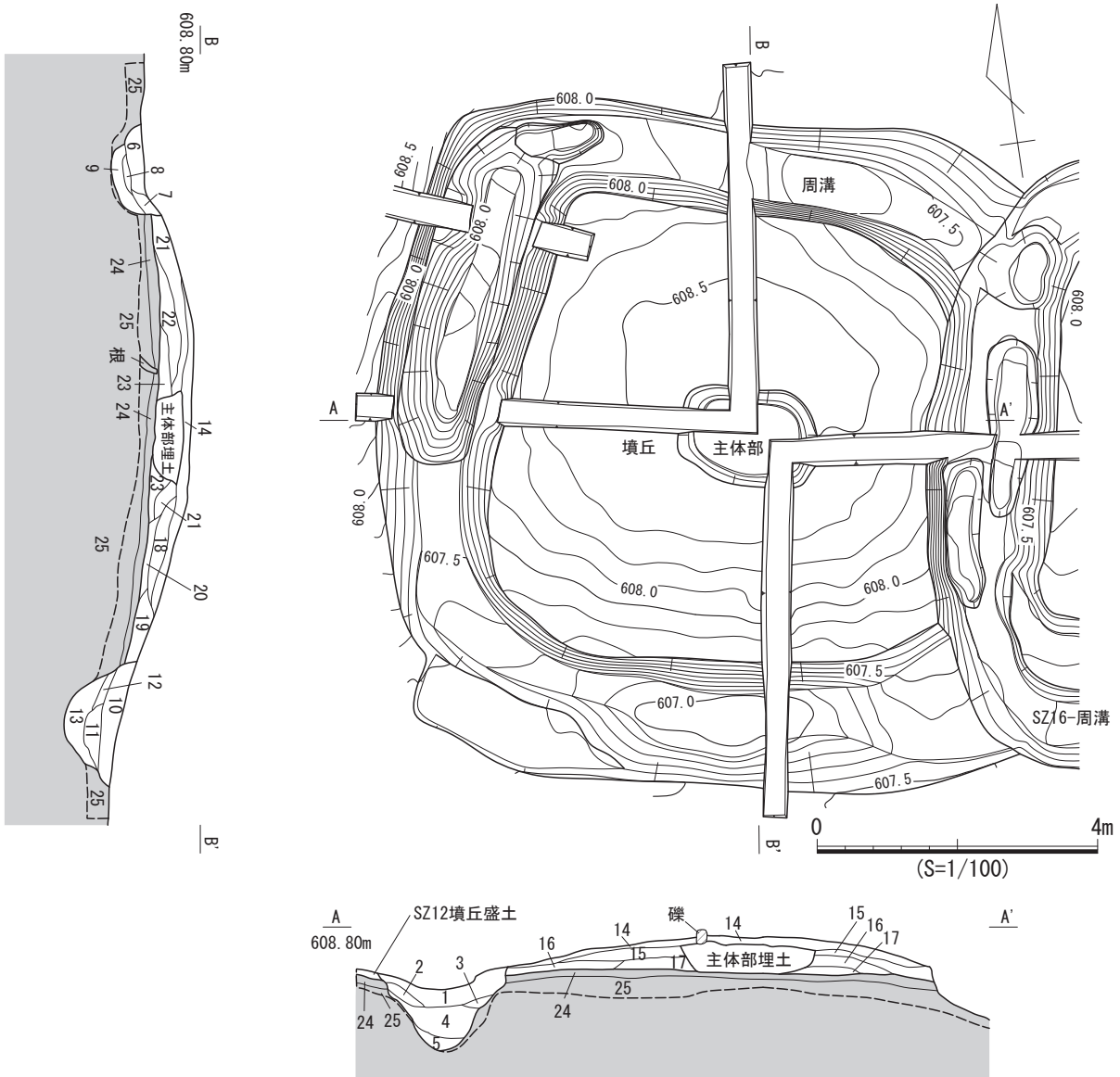
SZ15 (図35・図36)

検出状況 BK7~BL8グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の北西部尾根上に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。SZ15の西部でSZ12、東部でSZ16の各周溝と重複する。周溝の検出状況等から、SZ15はSZ12よりも新しく、SZ16よりも古いと判断した。構築順は、SZ12<SZ15<SZ16である。

方台部 東辺はSZ16の周溝によって削られているが、平面は4辺が直線的な隅丸方形と思われる。方台部には、各辺に直交するようにL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。墳丘の構築は、最初に墳丘中央から北側にかけて21層~23層を盛土し、後から南側に19層と20層を積み上げたと思われる。墳丘中央部の盛土はやや暗めの褐灰色系の土であるが、上層には明るい黄橙色系の土も認められる。このため、中央部にはⅢb層(24層)由来、盛土上層にはIV層由来の土を利用した可能性がある。墳丘中央で、長軸が方台部の長軸とほぼ平行となる不整楕円形の土坑を検出した。Ⅲb層上に最初に盛土した後に掘削されており、その後さらに盛土されていることから、SZ15の主体部と考えられる。断面の形状は逆台形に近く、最大の深さは、0.40mである。主体部の埋土直上で人頭大の円礫を検出した。この礫の上に盛土されていることから、礫は原位置を保っている可能性がある。

周溝 東部でSZ16の周溝と重複するが、方台部の周りを全周していたと考えられる。北溝は直線的で、南東と南西の隅は丸みを帯びる。北溝は深さが0.24mであるが、南溝の中央部や西溝の北半部は深く

なっており、ともに約0.8mの深さがある。幅は1.30m~2.0mで、北溝が狭い。埋土にはIV層起源のブロックを多く含み、中央が緩やかに窪む堆積が認められるため、自然堆積と考えられる。周溝内で



- | | |
|---|--|
| 1 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 炭化粒を5%含む 周溝埋土 | 15 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 盛土層 |
| 2 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 | 16 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 盛土層 |
| 3 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土 | 17 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 盛土層 |
| 4 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを7%含む 周溝埋土 | 18 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 炭化粒を1%含む 盛土層 |
| 5 10YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを15%含む 周溝埋土 | 19 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 盛土層 |
| 6 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 炭化粒を1%含む 周溝埋土 | 20 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 盛土層 |
| 7 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土 | 21 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 盛土層 |
| 8 10YR4/1 褐灰色土 しまりなし 粘性あり 炭化粒を1%含む 周溝埋土 | 22 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 盛土層 |
| 9 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 炭化粒を1%含む 周溝埋土 | 23 10YR6/1 褐灰色土 しまりあり 粘性ややあり IIIb層ブロックを1%含む IV層ブロックを5%含む 盛土層 |
| 10 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土 | 24 10YR4/1 褐灰色土 しまりなし 粘性あり IIIb層 (旧表土層) |
| 11 10YR5/1 褐灰色土 しまりなし 粘性あり 炭化粒を5%含む 周溝埋土 | 25 10YR6/6 明黄褐色土 しまりあり 粘性あり IV層 |
| 12 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを1%含む 周溝埋土 | |
| 13 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 | |
| 14 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりなし 粘性ややあり 木の根を多く含む 盛土層 | |

図35 SZ15遺構図(1)

埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 縄文土器や弥生土器、須恵器、灰釉陶器、石器が、墳丘盛土や主体部及び周溝の埋土から出土した。弥生土器の鉢と考えられる42は、周溝北西隅で同一個体と考えられる破片が出土した。埋土中から散在して出土しているため、SZ15に關係する遺物かは不明である。須恵器の甕(44)は南溝の中央付近から南側でまとまって出土しているが、接合した破片の大半は遺物包含層から出土した遺物である。SZ15周溝埋没後にこの場所に持ち込まれ、若干残存していた周溝の窪地に破片の一部が落ち込んだと考えられる。43は西溝中央から出土した別個体の須恵器の甕であるが、埋没の経緯は同様と思われる。その他の遺物は埋土中から散在して出土した。

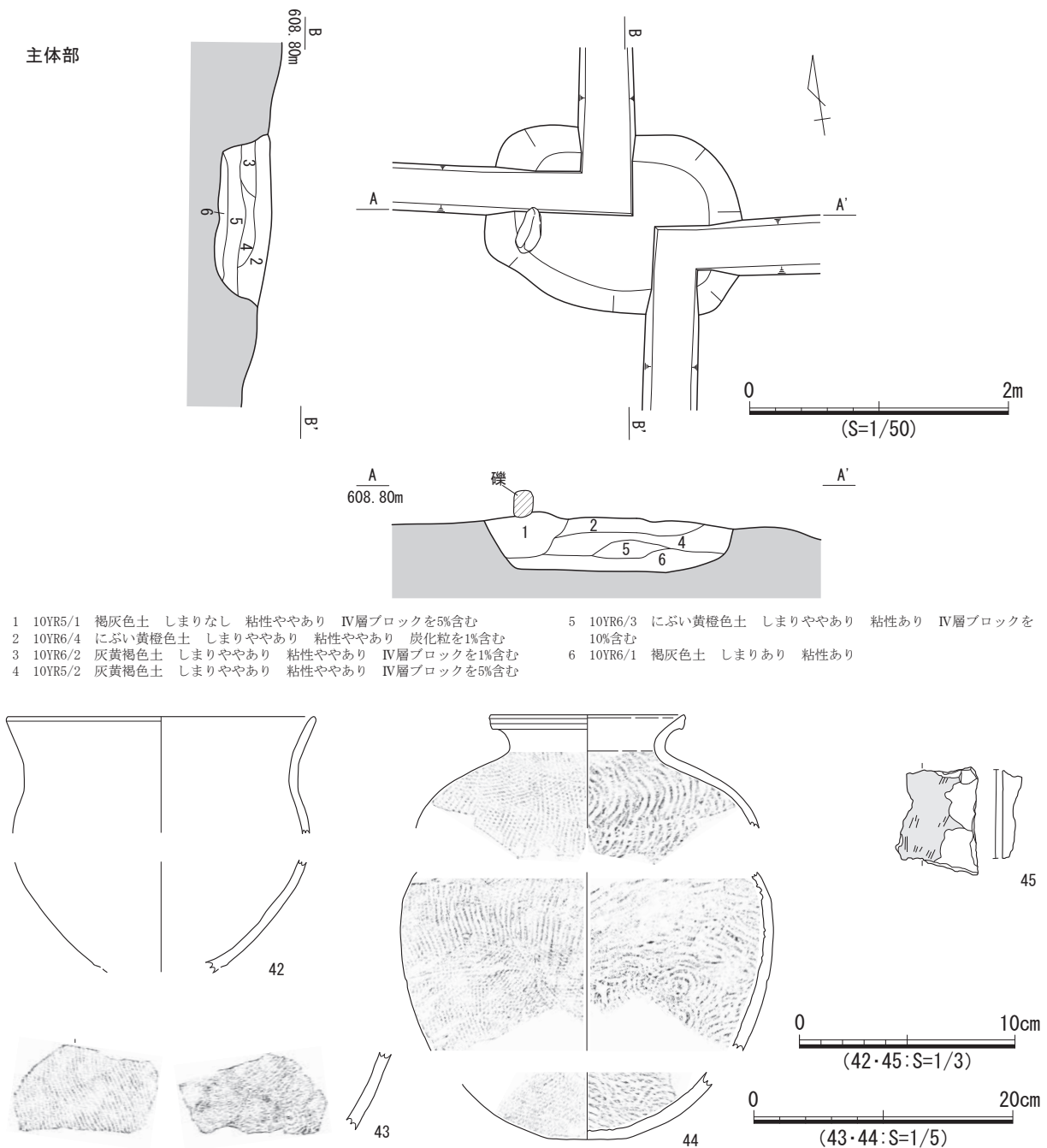


図36 SZ15遺構図(2)、出土遺物

出土遺物 42は弥生土器の鉢と考えられる。体部に丸みがあり、口縁部が短く直線的に開く。底部外面に剥がれ痕があるため、台付きの可能性もある。43・44は須恵器の甕である。43は44とは異なり、体部内面の当て具痕をナゲ消す。44は3点を図化した。胎土や調整等から同一個体の可能性が高い。器高が30cm程度の小形品と思われる。45は砥石の破片である。剥離した砥面の一部が残る。砥面が非常に平滑であるため、金属砥石の可能性もある。

時期 重複関係から弥生時代後期後半のSZ16よりも古いと考えられるが、周溝の重複状況から、大きな時期差はないと思われる。

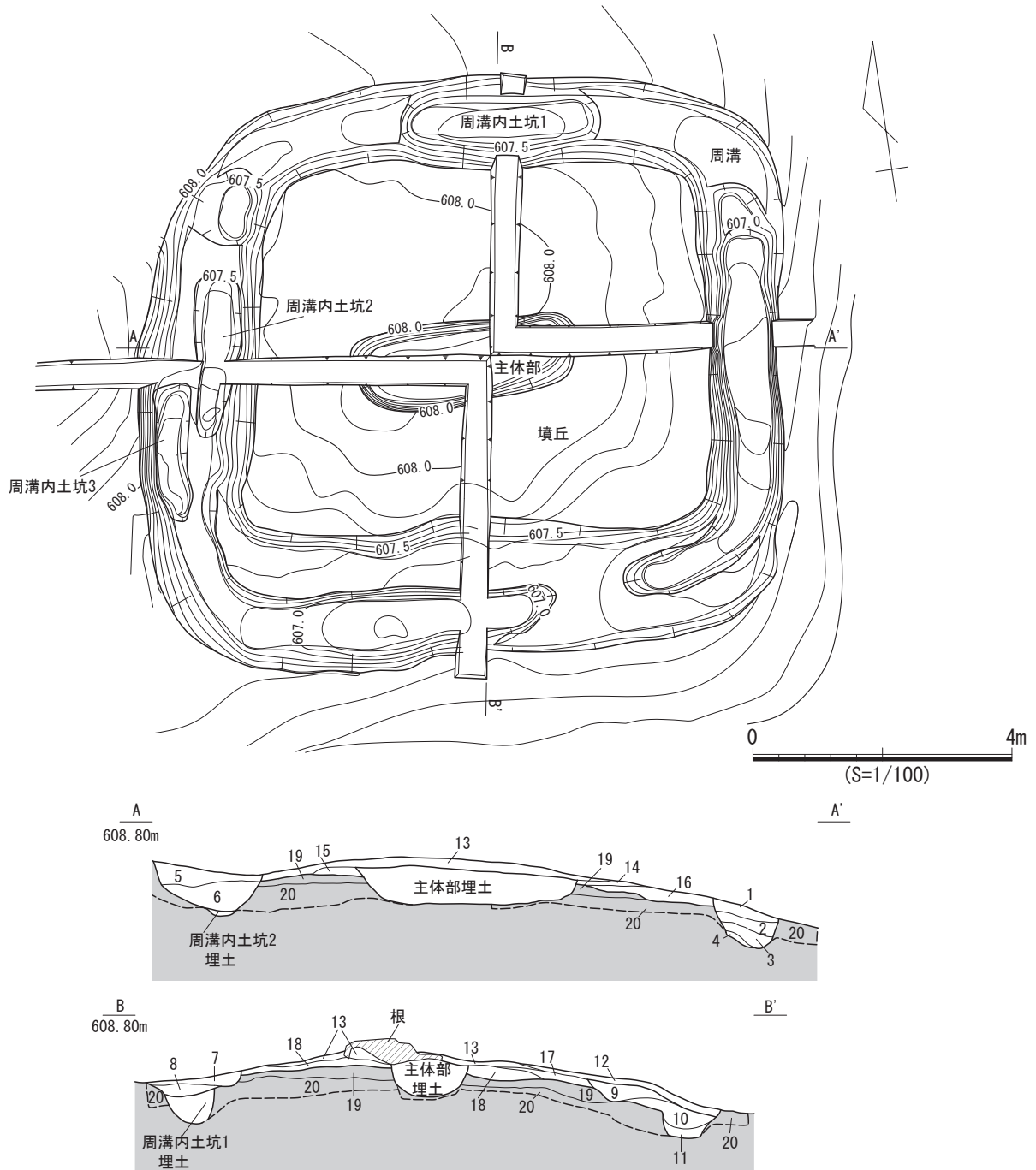
SZ16 (図37～図39)

検出状況 BK8～BM10グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の北西部尾根上に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。SZ16の西部でSZ15の周溝と重複する。土層断面から、SZ16はSZ15よりも新しいと判断した。SZ15はSZ12より新しいため、構築順はSZ12<SZ15<SZ16である。

方台部 平面は4辺が直線的で、東西にやや長い長方形である。方台部には、各辺に直交するようにL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。盛土の色調はIV層に類似するにぶい黄褐色や褐灰色で、墳丘周囲の土を用いて構築していると考えられる。方台部の中央で、東西方向が長軸となる長楕円形の土坑を検出した。III b層上に最初に盛土した後に掘削されており、その後さらに盛土されていることから、SZ16の主体部と考えられる。III b層(21層)より深く掘り込まれる特徴がある。南北の断面の形状は半円形に近く、最大の深さは0.60mである。埋土は墳丘の盛土と同様のIV層起源のものと考えられ、IV層起源のブロックを多く含む。西から東へ下がるような堆積が認められるが、埋没過程を示すかどうかは不明である。

周溝 方台部を全周しており、いずれの溝も直線的である。埋土にはIV層起源のブロックが多く混じる。周溝の幅は1.05m～2.10mで、南溝と西溝の幅が広く、北溝と東溝の幅が狭い。深さは段状の深い部分も含めて0.20m～0.65mであり、北溝が最も浅い。埋土中にはIV層起源のブロックが多く混じる。各辺の周溝底面には2段に掘り込まれた部分が目立ち、この内北溝と西溝の底面で検出した掘り込み3基について、周溝の幅におさまる規模で周溝の各辺と長軸方位が揃うことから、周溝内土坑とした。北溝の周溝内土坑1は、平面が長楕円形で、短軸側の断面の形状は長方形に近く、長軸側の壁面の立ち上がりは比較的緩やかである。埋土の下層には底面に灰黄色土(4層)が、北壁の際のみにぶい黄橙色土(3層)が堆積する。その上層には、IV層に比べて色調の暗い灰黄褐色土(1層と2層)が認められる。2層以外にはIV層起源のブロックが多く混じる。西溝の周溝内土坑2は、平面が不整な長楕円形で、断面の形状は浅い窪み状である。埋土は灰黄褐色土の単層であり、IV層起源のブロックが多く混じる。同じく西溝にある周溝内土坑3は、平面が不整な長方形で、断面の形状は浅い窪み状である。埋土はにぶい黄橙色土の単層であり、ブロックを含まない。いずれの土坑も性格は不明である。

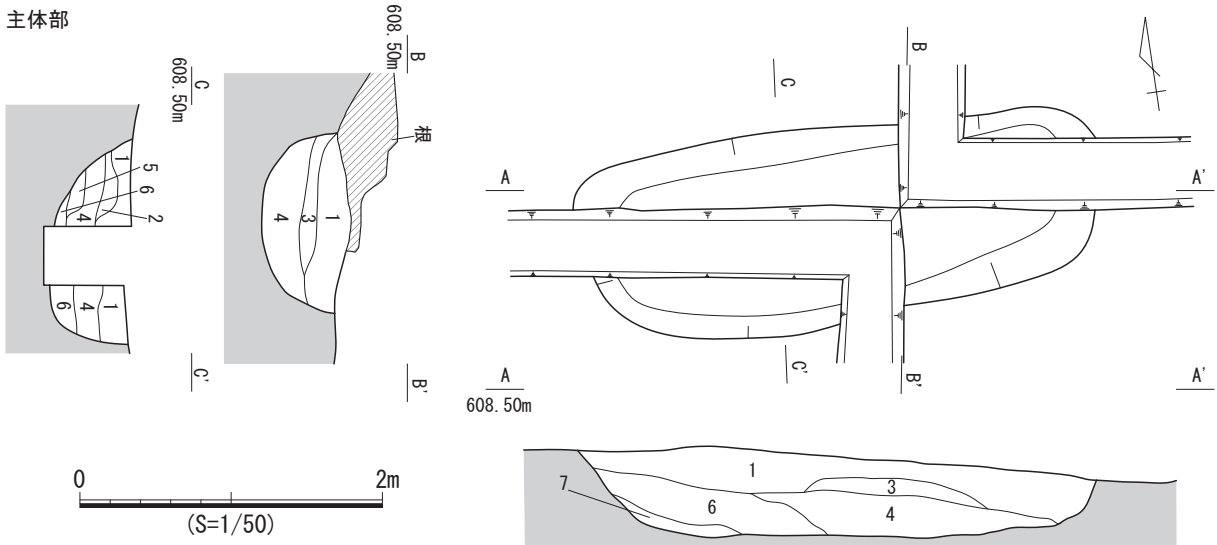
遺物出土状況 縄文土器、弥生土器、須恵器、石器が墳丘盛土や主体部及び周溝の埋土から出土した。弥生土器と考えられる47・48・50は西溝の中層から底面付近で出土したが位置的なまとまりはない。弥生土器の有段口縁鉢(51)と高坏(52)は、土層確認のトレンチ掘削の際に主体部のやや西寄り墳丘の最も高い場所から出土した遺物である。また、出土した標高は608.2m程度で、検出した墳丘頂部の標高(約608.3m)よりわずかに低い。そのため、51と52は埋葬後墳頂部付近で行われた祭祀



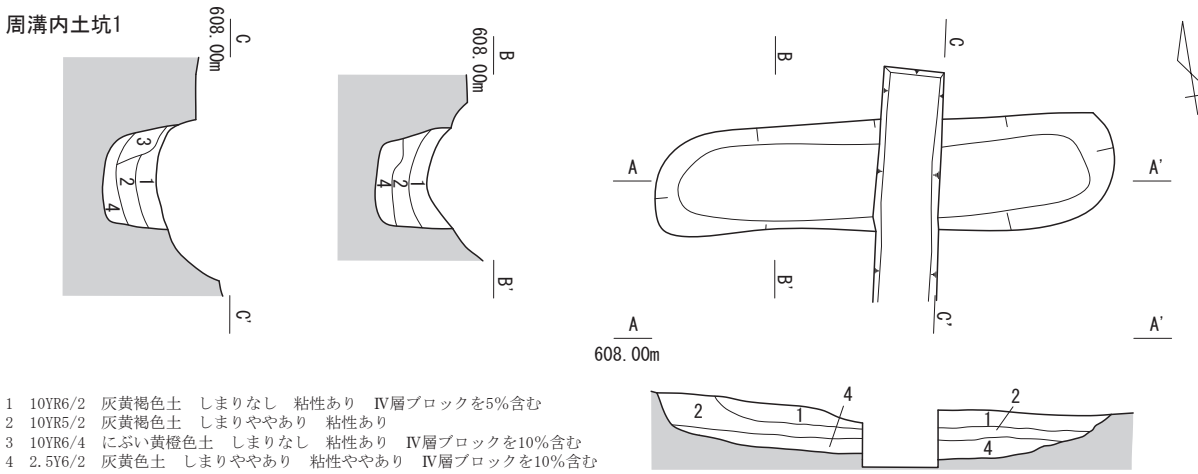
- | | | | |
|----|---|----|---|
| 1 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土 | 11 | 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土 |
| 2 | 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土 | 12 | 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりなし 粘性あり IV層ブロックを10%含む 流土 |
| 3 | 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 | 13 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 盛土層 |
| 4 | 10YR5/1 褐灰色土 しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを3%含む 周溝埋土 | 14 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 盛土層 |
| 5 | 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 | 15 | 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 盛土層 |
| 6 | 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 16 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 盛土層 |
| 7 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 | 17 | 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 盛土層 |
| 8 | 10YR5/1 褐灰色土 しまりなし 粘性あり 炭化粒を1%含む 周溝埋土 | 18 | 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 炭化粒を1%含む 盛土層 |
| 9 | 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 | 19 | 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IIIb層 (旧表土層) |
| 10 | 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土 | 20 | 10YR6/6 明黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層 |

図37 SZ16遺構図(1)

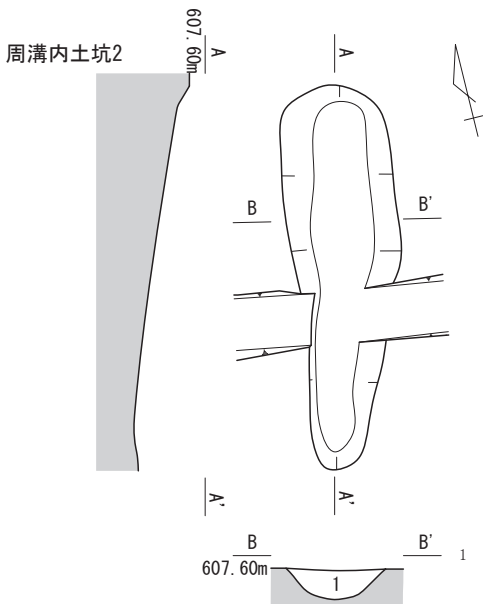
主体部



周溝内土坑1



周溝内土坑2



周溝内土坑3

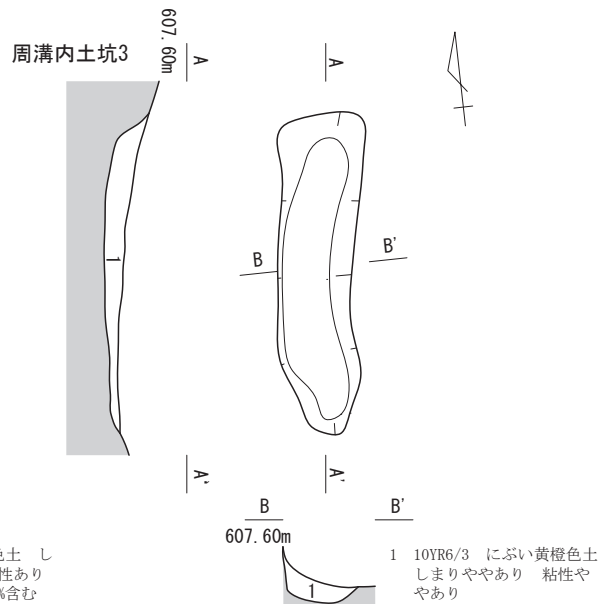


図38 SZ16遺構図(2)

に伴う土器で、祭祀後に主体部とともに封土で覆われた可能性がある。なお、52に接合する破片が東溝から出土した。周溝からは須恵器の蓋（46）も出土したが、埋土の上層から出土したため、流れ込みと考えられる。スクレイパー（53）は墳丘の上層から出土した。その他の遺物は埋土中から散在して

遺物出土位置

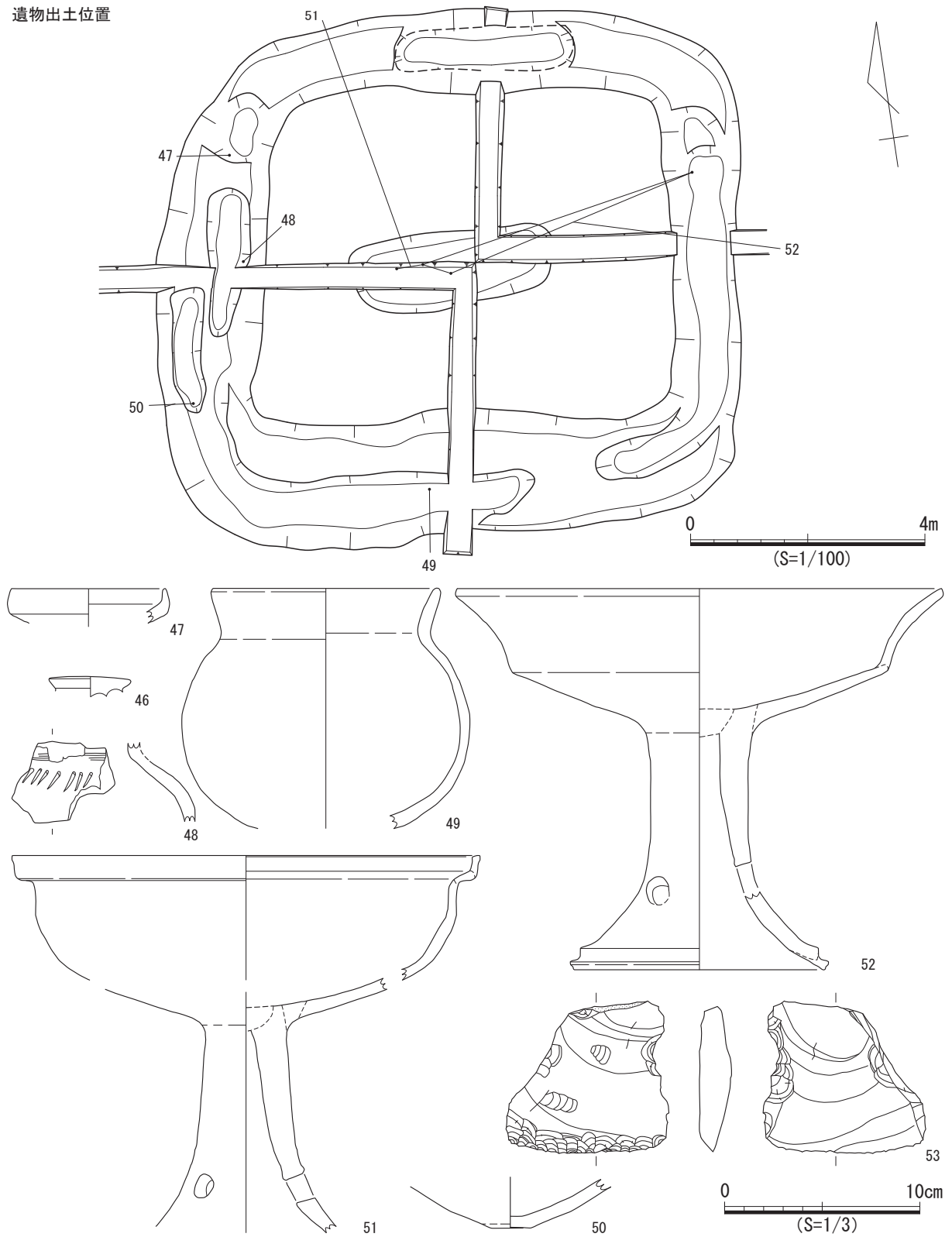


図39 SZ16遺構図（3）、出土遺物

出土した。

出土遺物 47～52は弥生土器である。47は器種が不明であるが受口状の口縁部である。48は鉢と考えられ、頸部外面に横位の櫛描文、その下の体部上半にヘラ状工具による刻みを施す。頸部と体部の文様は同じ工具で施文された可能性がある。49も鉢である。体部中ほどに最大径があり、口縁部は直線的に開く。50は壺類の底部で、狭小な平底である。51は脚付の有段口縁鉢である。器形は北陸地方の法仏式期に類例があるが、受口部の外面に擬凹線は認められない。また、脚部には三方向から円形の透孔があげられている。52は高坏で、口縁部が外反しながら開く。脚部の段は、北陸地方の有段脚部の模倣である可能性がある。51と同様、脚部に三方向から円形の透孔を施す。46は須恵器の蓋の摘み部分である。53はスクレイパーで、剥片の一方の側縁両面に抉り状の加工、下端の片面に刃部が作出される。ただし、加工のある側縁の反対側は折損の可能性がある。

時期 51は北陸地方の法仏式に比定でき、また52も同時期の可能性が高いことから、弥生時代後期後半に位置付けられる。

SZ17 (図40・図41)

検出状況 BK11～BM13グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の北西部尾根上に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。同じ尾根上に立地する本遺構東側のSZ12～16や、南側傾斜面のSZ25、SZ29とも重複しない。また、尾根の東西に若干空間が認められ、独立した印象を受ける。

方台部 北辺は直線的であるが、東辺と西辺の南部が湾曲してそのまま南辺に連続するため、平面は円形に近い形状となる。方台部には、L字形にトレンチを2箇所設定して掘削した。墳丘の構築は、方台部外側に周堤状の盛土を施した後その内側に充填する工法をとった可能性があるが、墳丘南部は後述する主体部構築より後に盛られた可能性もある(8層・18層・19層)。方台部のA-A'断面の西部でIV層が露出しているが、旧地形は西側が高いことから、この部分を含めて墳丘築造時に改変された可能性が高い。盛土にはIV層起源のブロックが多く含まれ、色調もIV層に近いものが多いことから、墳丘周囲の土を用いて構築していると考えられる。方台部の中央で、長軸が方台部の長軸とほぼ平行となる隅丸長方形の土坑を検出した。Ⅲb層(48層)上に最初に盛土した後で掘削し、その後盛土していることから、SZ17の主体部と考えられる。最大の深さは0.90mで、IV層まで掘り込まれている。長軸の断面が2段になっており、北側が深い。また、東壁の下部が奥に抉れるような形状であるが、理由は不明である。埋土はほぼ水平堆積で、墳丘の盛土と同様、IV層と類似する黄褐色土や褐灰色土で埋没しており、埋土中にはIV層起源のブロックを多く含む。

周溝 方台部の周りを全周している。断面の形状は逆台形に近く、底面はほぼ平坦である。地形が低い東溝や南辺の土層断面では、斜面下方側に傾く堆積が認められることから、これらは方台部の墳丘から流出した堆積と考えられる。周溝の幅は1.20m～1.80mで、深さは0.30m～0.70mであり、斜面上方に当たる西部は幅が広くて浅いが、原地形が低い東溝や南溝は幅が狭くて深い。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 灰釉陶器が墳丘盛土と周溝埋土の上層から出土している。墳丘出土のものは出土層が不明であるが、出土した位置と標高から墳丘東斜面の表面付近で出土したと思われる。灰釉陶器の碗(54)は西溝の上層で出土しており、周溝の埋没過程で流入したと考えられる。

出土遺物 54は灰釉陶器の碗である。貼り付け高台の断面は丸みがあり、高さは低い。内面は使用に

よる摩耗が認められる。

時期 時期が判別できる遺物は54のみであり、いずれの遺構とも重複がないため詳細な時期は不明である。ただし、他の墳墓と一連のものと思われることから、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と

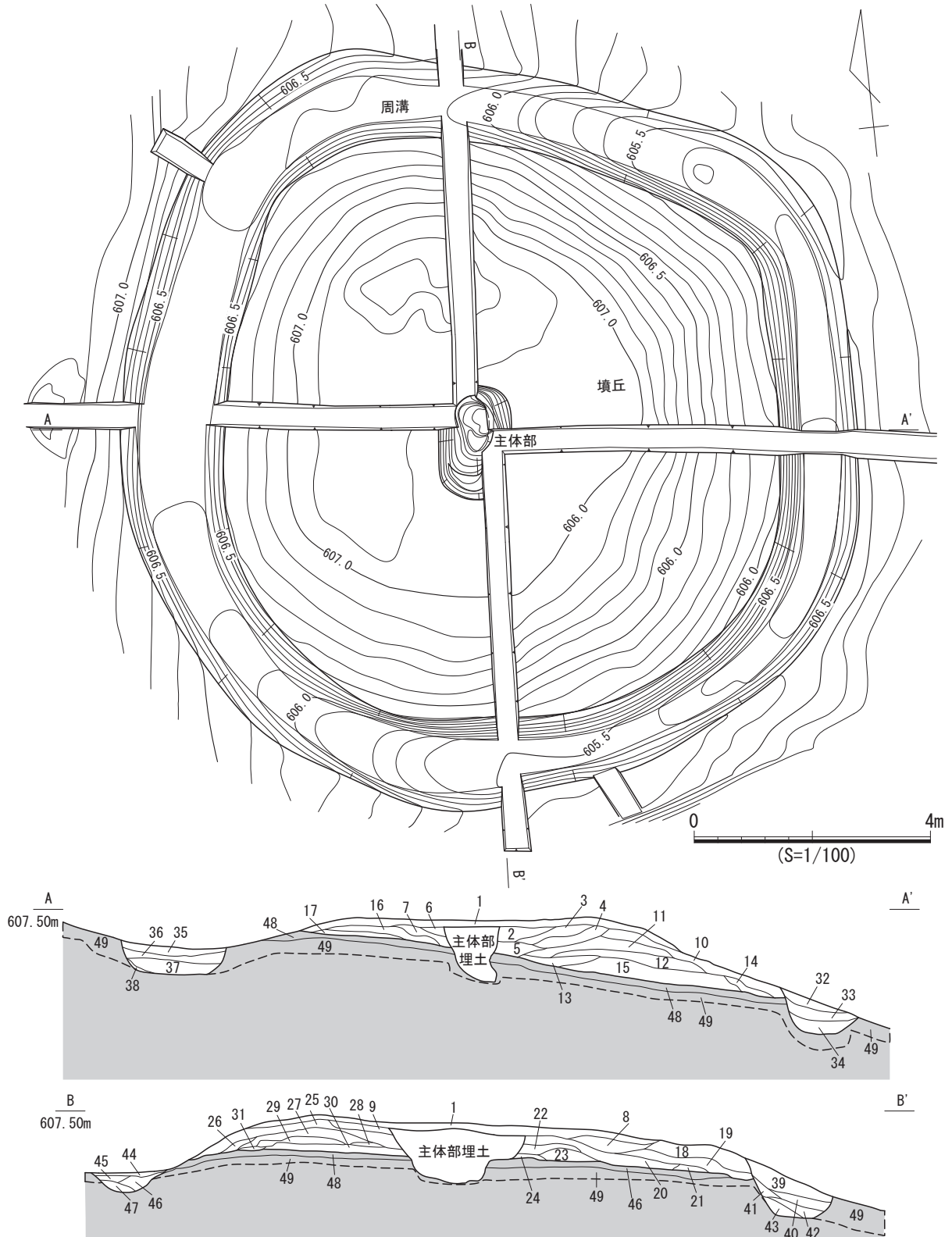
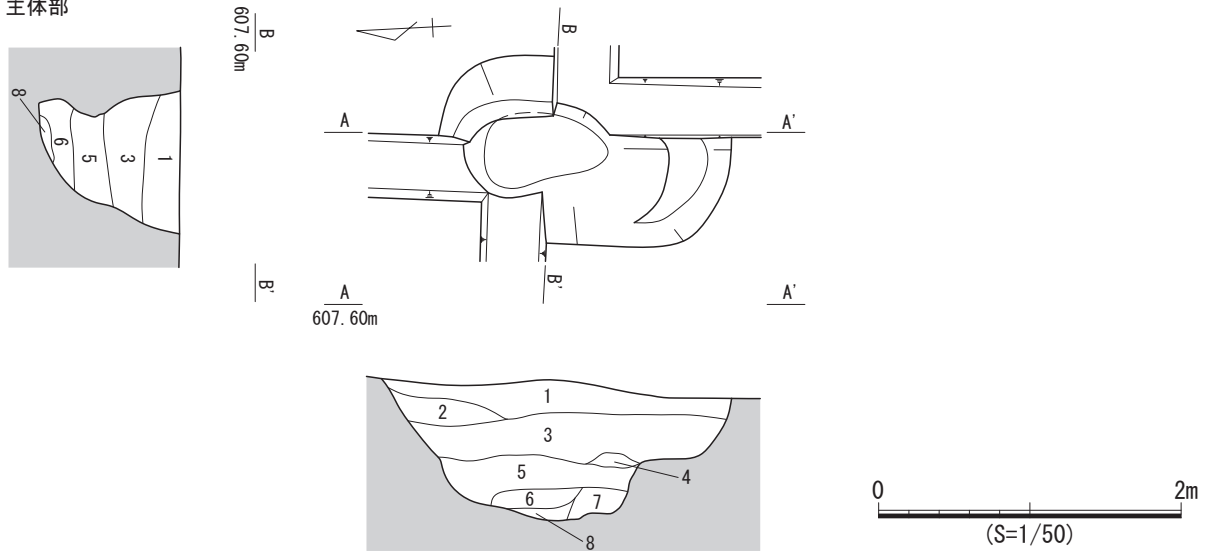


図40 SZ17遺構図(1)

墳丘土層断面注記

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 盛土層
- 2 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを3%含む 盛土層
- 3 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 盛土層
- 4 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 盛土層
- 5 2.5Y6/2 灰黄色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 盛土層
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 盛土層
- 7 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを15%含む 盛土層
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 盛土層
- 9 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 盛土層
- 10 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 盛土層
- 11 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり III-b層ブロックを5%含む IV層ブロックを5%含む 盛土層
- 12 2.5Y5/3 黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 盛土層
- 13 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 盛土層
- 14 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 盛土層
- 15 2.5Y6/2 灰黄色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを15%含む 盛土層
- 16 10YR6/1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 盛土層
- 17 7.5YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 盛土層
- 18 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 盛土層
- 19 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 盛土層
- 20 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 盛土層
- 21 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 盛土層
- 22 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり III-b層ブロックを5%含む IV層ブロックを10%含む 盛土層
- 23 2.5Y6/2 灰黄色土 しまりややあり 粘性ややあり III-b層ブロックを5%含む IV層ブロックを5%含む 炭化粒を1%含む 盛土層
- 24 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 炭化粒を1%含む III b層ブロックを5%含む IV層ブロックを5%含む 盛土層
- 25 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 炭化粒を1%含む IV層ブロックを5%含む 盛土層
- 26 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを1%含む 盛土層
- 27 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 盛土層
- 28 7.5YR5/2 灰褐色土 しまりややあり 粘性あり 盛土層
- 29 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 盛土層
- 30 10YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 炭化粒を1%含む 盛土層
- 31 10YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 盛土層
- 32 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土
- 33 10YR4/1 褐灰色土 しまりなし 粘性ややあり 炭化粒を1%含む IV層ブロックを5%含む 周溝埋土
- 34 10YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土
- 35 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土
- 36 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土
- 37 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを15%含む 炭化粒を1%含む 周溝埋土
- 38 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土
- 39 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土
- 40 7.5YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを3%含む 炭化粒を1%含む 周溝埋土
- 41 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土
- 42 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 炭化粒を3%含む 周溝埋土
- 43 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土
- 44 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土
- 45 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土
- 46 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土
- 47 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性あり IV層ブロックを15%含む 周溝埋土
- 48 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IIIb層 (旧表土層)
- 49 2.5Y7/6 明黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層

主体部



- 1 10YR5/6 黄褐色土 しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 炭化粒を1%含む
- 2 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 炭化粒を1%含む
- 3 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む
- 4 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 炭化粒を1%含む
- 5 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む
- 6 7.5YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む
- 7 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを15%含む
- 8 10YR6/1 褐灰色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 炭化粒を1%含む

図41 SZ17遺構図(2)、出土遺物

思われる。

SZ18 (図42・図43)

検出状況 BL2~BM4グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の西端部、尾根からやや南へ下がった傾斜面に立地する。現況地形測量においてわずかではあるが墳丘を確認した。遺構の西部は発掘区外で、重複する遺構はなかった。

方台部 北辺と東辺は直線的で、隅部は丸くなる。南辺は明確ではないが、他の辺の状況から平面状は隅丸方形と考えられる。方台部には、北辺と東辺に直交するようにL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。墳丘の構築は、方台部外側の傾斜下方に周堤状の盛土（6層～8層）を施した後、斜面上方側に盛土する。これらの盛土の色調はいずれも褐色である。方台部中央で長軸が方台部の長軸とほぼ直交する隅丸長方形の土坑を検出した。III b層（10層）上に最初に盛土した後掘削し、その後さらに盛土されていることから、SZ18の主体部と考えられる。断面は逆台形に近く、最大の深さは0.16mで、SZ17の主体部と比べて非常に浅く、IV層を掘り込まない。埋土は墳丘盛土と類似する褐色土である。

周溝 斜面に設置されたためか、傾斜の下方となる南溝は確認できなかった。その他は方台部を囲むように検出した。北溝と東溝の接合部はやや湾曲しており、東溝の中央部分から南溝が方台部と反対

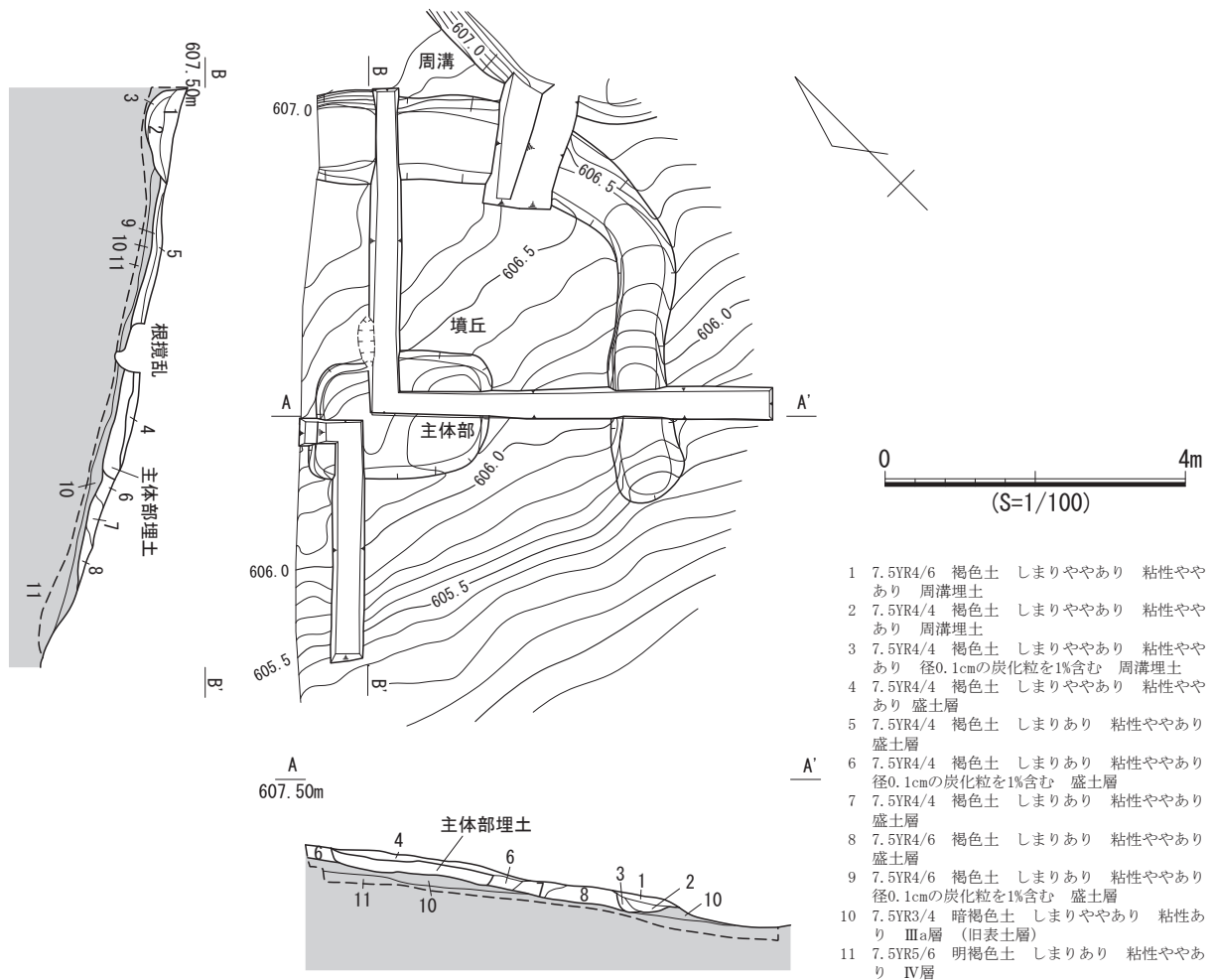


図42 SZ18遺構図(1)

側に曲がっている。断面形は半円形に近い。周溝の幅は0.72m～1.16mで東溝に比べ、北溝が広い。深さは0.36m～0.40mで場所による大きな差はない。周溝の底面はほぼ平坦で、埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 出土遺物がなく、遺構の重複もないため、詳細な時期は不明である。ただし、他の墳墓と一連のものと思われることから、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と思われる。

SZ19 (図44・図45)

検出状況 BL4～BN6グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の西部、尾根からやや南へ下がった傾斜面に立地する。現況地形測量においてわずかではあるが墳丘を確認した。SZ19の北部でSZ13の周溝と重複する。土層断面から、SZ19はSZ13よりも新しいと判断した。SZ13はSZ12やSZ14より新しいため、構築順はSZ12<SZ14<SZ13<SZ19である。

方台部 北辺と東辺、西辺が直線的で、隅部は丸くなる。南辺は明確でなく、盛土の範囲もはっきりしないが、他の辺の状況から平面は隅丸方形と考えられる。方台部には、各辺に直交するようにL字形にトレンチを設定して掘削した。墳丘は、まず周溝内側の傾斜下方側の南西部を中心に15層～17層を盛土することから、主体部を設置する平坦面を作り出す意図があった可能性がある。そのためか、原地形が高い北西隅では、主体部設置前の盛土が認められない。盛土の色調は褐色や明褐色で、IV層に類似する。方台部中央やや北寄り、南北方向に長軸をもつ土坑を検出した。一旦表土層上に盛土した後、掘削された土坑で、その後さらに盛土されていることから、SZ19の主体部と考えられる。III b層(18層)より深く掘り込まれる特徴がある。平面は不整な方形で、掘方壁面は底面から緩やかに開く。最大の深さは0.62mである。埋土は墳丘の盛土と同様、IV層と類似する明褐色土や褐色土である。

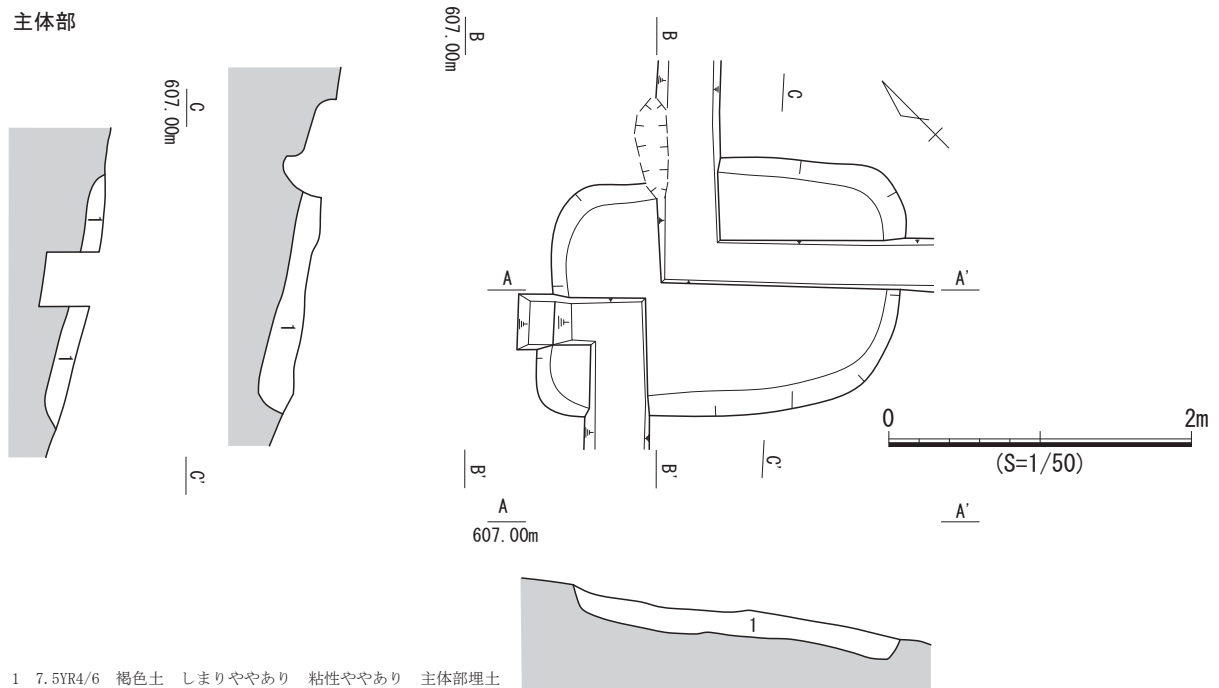


図43 SZ18遺構図(2)

周溝 斜面に設置されたため、傾斜の下方となる南溝は確認できなかった。その他は方台部を囲むように検出した。いずれの溝も直線的で、断面は半円形に近い。北溝と西溝はほぼ直交し、北溝と東溝の接合部はやや丸みがある。周溝の幅は0.70m～1.60mで、西溝に比べ東溝が広い。深さは0.30m～0.35mで場所による大きな差はない。埋土中にはいずれもIV層に色調が類似する褐色土や明褐色土で、中央が窪む堆積が認められる。周溝の底面はほぼ平坦で、埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 弥生土器が、墳丘盛土や周溝の埋土から散在した状況で出土した。

出土遺物 図示した遺物はいずれも細片であるため、弥生土器とした。55・56は直線的に開く口縁部

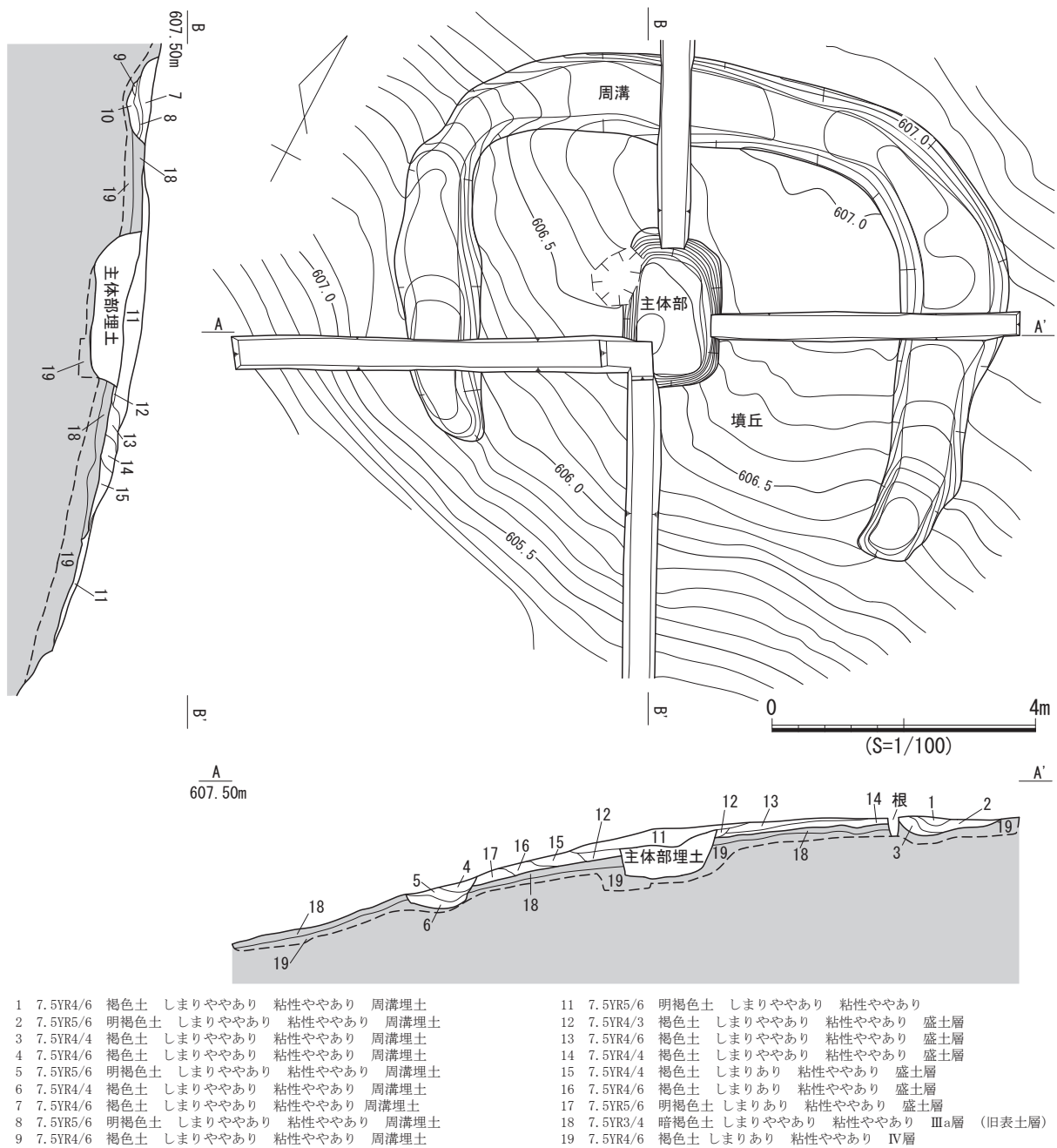


図44 SZ19遺構図(1)

の破片で、口径は不明であるが高坏の可能性はある。57は装飾器台の可能性はある。針田遺跡（財団法人岐阜県文化財保護センター2001）SB42の342に類似する器形と考えられる。

時期 SZ13より新しいことから弥生時代末～古墳時代初め以降と思われる、57を積極的に評価するならば古墳時代前期まで時期が降る可能性がある。

SZ20 (図46・図47)

検出状況 BL17～BN19グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の北西部尾根上に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。SZ20の南西部でSZ27の方台部と周溝、東側でSD19と重複する。周溝の検出状況や土層断面から、SZ20はSZ27よりも新しく、SD19よりも古いと判断した。なお、SD19はSZ21の周溝より新しいため、SZ20はSZ21より古いと思われる。こうした重複関係は連続して認められ、その構築順はSZ27<SZ20<SZ21<SZ30<SZ37である。また、SZ37から先についても、SZ38やSZ46といった墳墓との重複が連続する。

方台部 北辺と東辺が直線的で、西辺と南辺が外側に湾曲し、隅部は丸くなる。平面は南北に長い隅丸方形である。方台部には、各辺に直交するようにL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。盛土は、III b層（26層）上にIV層と類似する明褐色土を積み上げている。方台部の中央で、北東-南西方向の長軸方位をもつ平面が長楕円形の土坑を検出した。III b層上に盛土した後に掘削し、その後さらに盛土されていることから、SZ20の主体部と考えられる。長軸方位が方台部の長軸から約45°傾く特徴が認められ、東側に位置するSZ21と類似する。壁面は底面から丸みを持って立ち上がり、最大の深さは0.38mである。埋土は墳丘の盛土と同様、IV層と類似する明褐色土である。

周溝 方台部の周りをほぼ全周しているが、北東隅で途切れる。また、北西や南西隅の底面もやや浅くなっている。周溝の東溝と北溝は直線的であるが、西溝と南溝は湾曲する。そのため、方形に近い

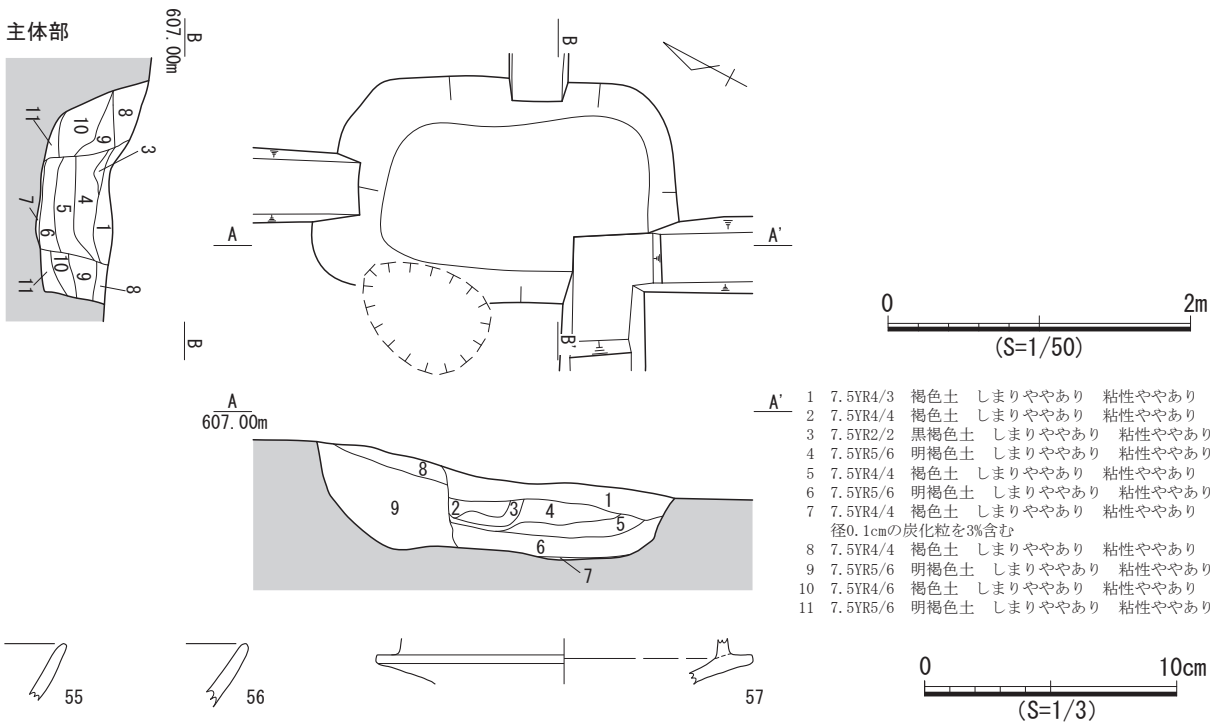
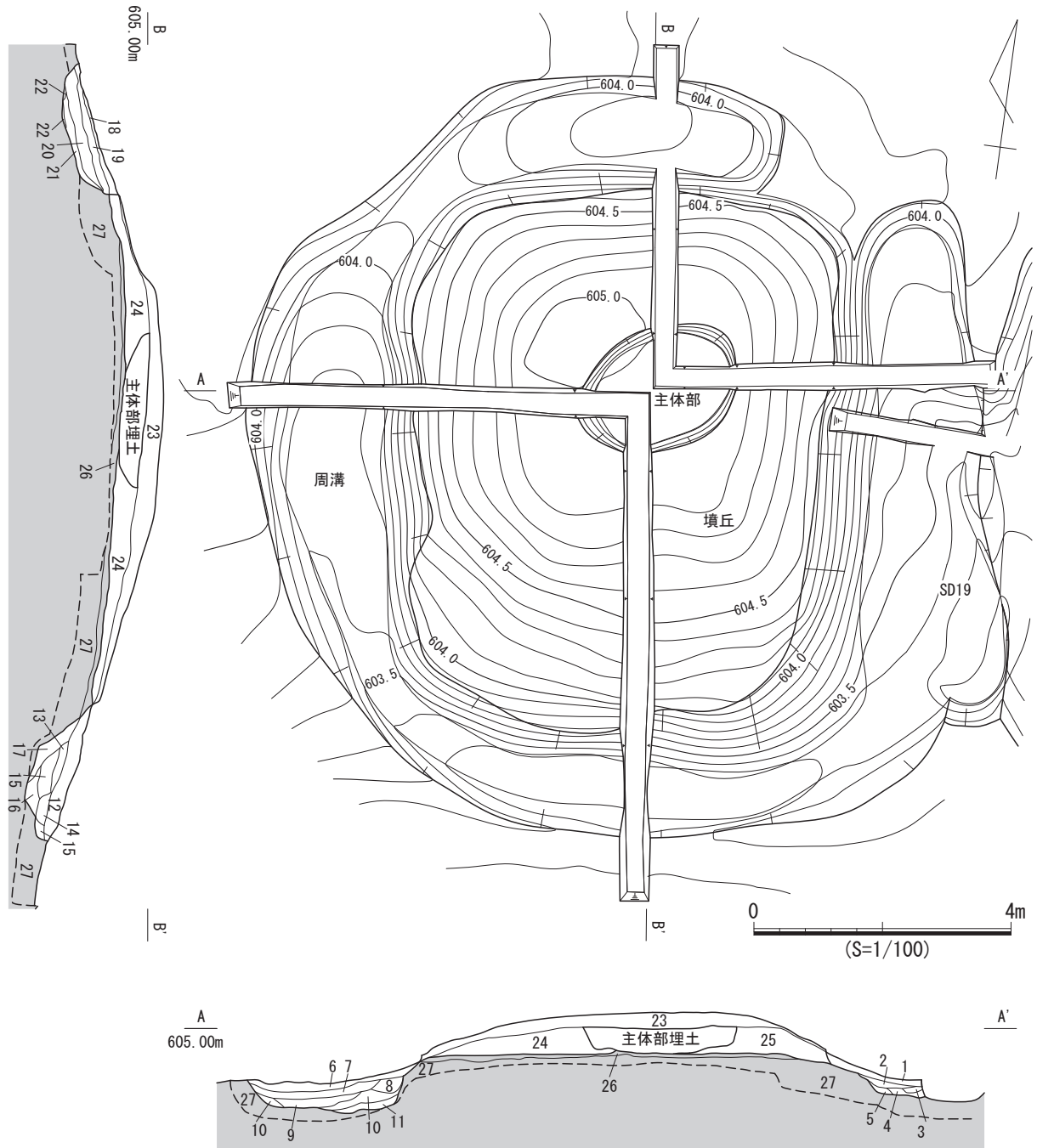


図45 SZ19遺構図（2）、出土遺物



- | | |
|---|--|
| <p>1 7.5YR5/8 明褐色土 しまりなし 粘性なし 周溝埋土</p> <p>2 7.5YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土</p> <p>3 10YR3/1 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり 周溝埋土</p> <p>4 7.5YR4/6 褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径1~3cmの10YR4/1褐色土ブロックを30%含む 周溝埋土</p> <p>5 7.5YR4/6 褐色土 しまりなし 粘性ややあり 周溝埋土</p> <p>6 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性なし 周溝埋土</p> <p>7 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径6~8cmの10YR3/1黒褐色土ブロックを30%含む 周溝埋土</p> <p>8 7.5YR5/8 明褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土</p> <p>9 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性ややあり 周溝埋土</p> <p>10 7.5YR5/8 明褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径3~5cmの10YR4/1褐色土ブロックを20%含む 周溝埋土</p> <p>11 7.5YR4/4 明褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土</p> <p>12 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性なし 周溝埋土</p> <p>13 7.5YR5/8 明褐色土 しまりなし 粘性なし 周溝埋土</p> <p>14 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性なし 径3~5cmの7.5YR2/1黒褐色土ブロックを30%含む 周溝埋土</p> <p>15 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性なし 径3~5cmの7.5YR3/1黒褐色土</p> | <p>ブロックを20%含む 周溝埋土</p> <p>16 7.5YR4/6 褐色土 しまりなし 粘性なし 周溝埋土</p> <p>17 7.5YR4/6 褐色土 しまりなし 粘性なし 径2~3cmの7.5YR5/6明褐色土ブロックを10%含む 周溝埋土</p> <p>18 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性なし 周溝埋土</p> <p>19 7.5YR5/8 明褐色土 しまりなし 粘性なし 周溝埋土</p> <p>20 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径3~5cmの7.5YR2/1黒褐色土ブロックを30%含む 周溝埋土</p> <p>21 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径1~2cmの7.5YR5/6明褐色土ブロックを5%含む 周溝埋土</p> <p>22 10YR5/6 黄褐色土 しまりなし 粘性ややあり 周溝埋土</p> <p>23 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性ややあり 盛土層</p> <p>24 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmの10YR4/1褐色土ブロックを30%含む 盛土層</p> <p>25 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径2~3cmの10YR4/1褐色土ブロックを5%含む 盛土層</p> <p>26 7.5YR3/1 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり III層 (旧表土層)</p> <p>27 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性ややあり</p> |
|---|--|

図46 SZ20遺構図(1)

形状の方台部を円形の周溝が取り巻いているように見える。周溝の上層はIV層に類似する明るい色調の埋土が多いが、下層にはやや黒っぽい色調の堆積も認められる。周溝の幅は1.45m～2.70mで西辺と東溝が広く、北西と南西の隅が特に狭い。深さは0.30m～0.70mで東溝が浅いが、SD19と重複しており、残存状態が悪い。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。なお、SD19は、SZ20とSZ21の周溝と同じ方向で掘削された溝であり、重複からSZ20の周溝が埋没した後に掘削され、SD19埋没後にSZ21の周溝が掘削されているが、SZ20及びSZ21との関係は不明である。

遺物出土状況 弥生土器の壺若しくは鉢の脚部（58）が主体部直上の封土から出土した。SZ16と類似する出土状況であるが、1点のみであるため詳細は不明である。

出土遺物 58は弥生土器の壺若しくは鉢の脚部で、小形の器種と考えられる。

時期 重複関係からは弥生時代末～古墳時代初めのSZ38より古いが、周溝の重複状況から、大きな時期差はないと考えられる。

SZ21（図48・図49）

検出状況 BL19～CN1グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の北東部尾根上に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。SZ21の西部でSD19、南部でSZ30の周溝と重複する。土層断面から、SZ21はSD19より新しく、SZ30より古いと判断した。なお、SZ20はSZ27より新しく、SZ30はSZ37より古いことから、その構築順はSZ27<SZ20<SZ21<SZ30<SZ37である。また、SZ37から先についても、SZ38やSZ46といった墳墓との重複が連続する。

方台部 東辺と西辺は直線的であり、北辺と南辺はやや丸みを帯びる。方台部には、各辺に直交するようにL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。墳丘は、方台部南部に29層～31層を盛土した後、主体部の周囲に21層～28層を盛土している。盛土には、主にIV層に類似する褐色土と明褐色土が用いられる。方台部の中央やや北寄りでは北東-南西方向が長軸となる長楕円形の土坑を検出した。

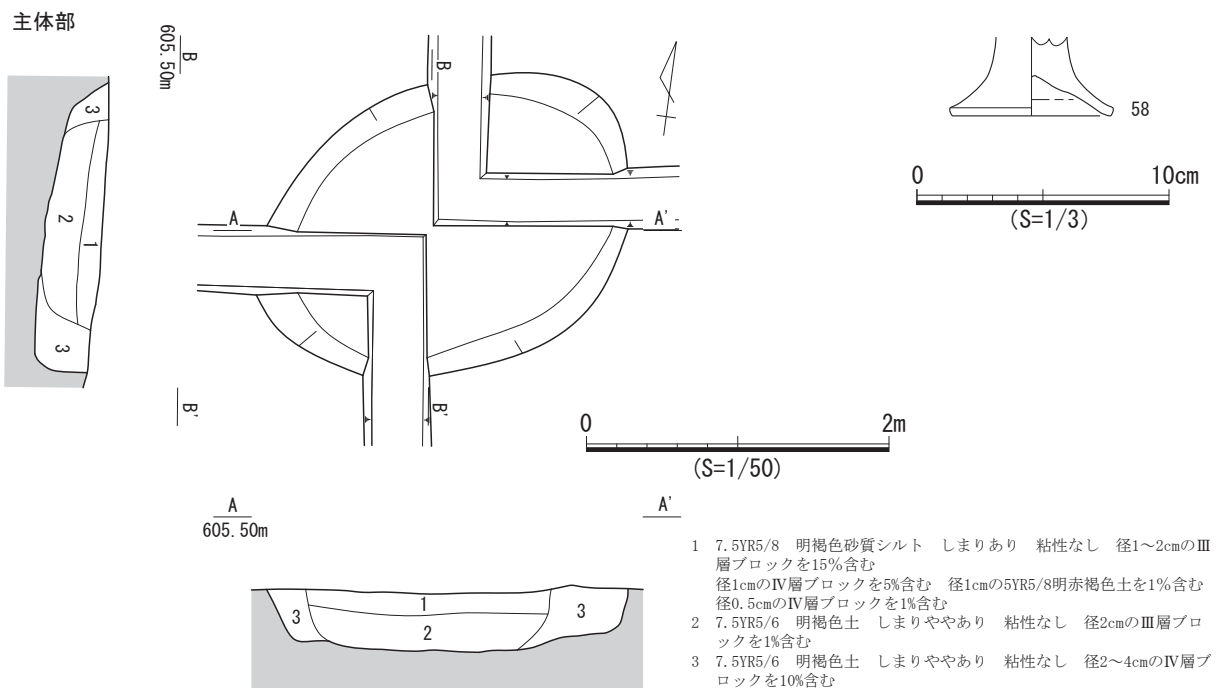


図47 SZ20遺構図（2）、出土遺物

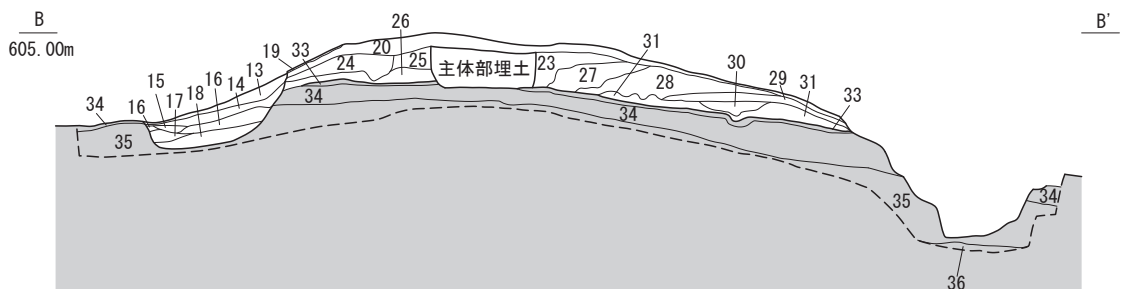
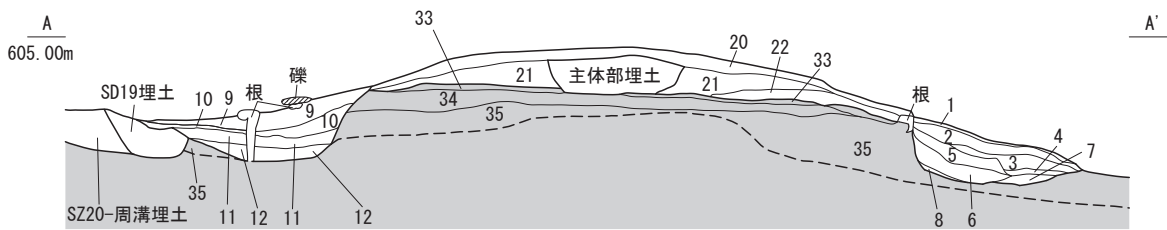
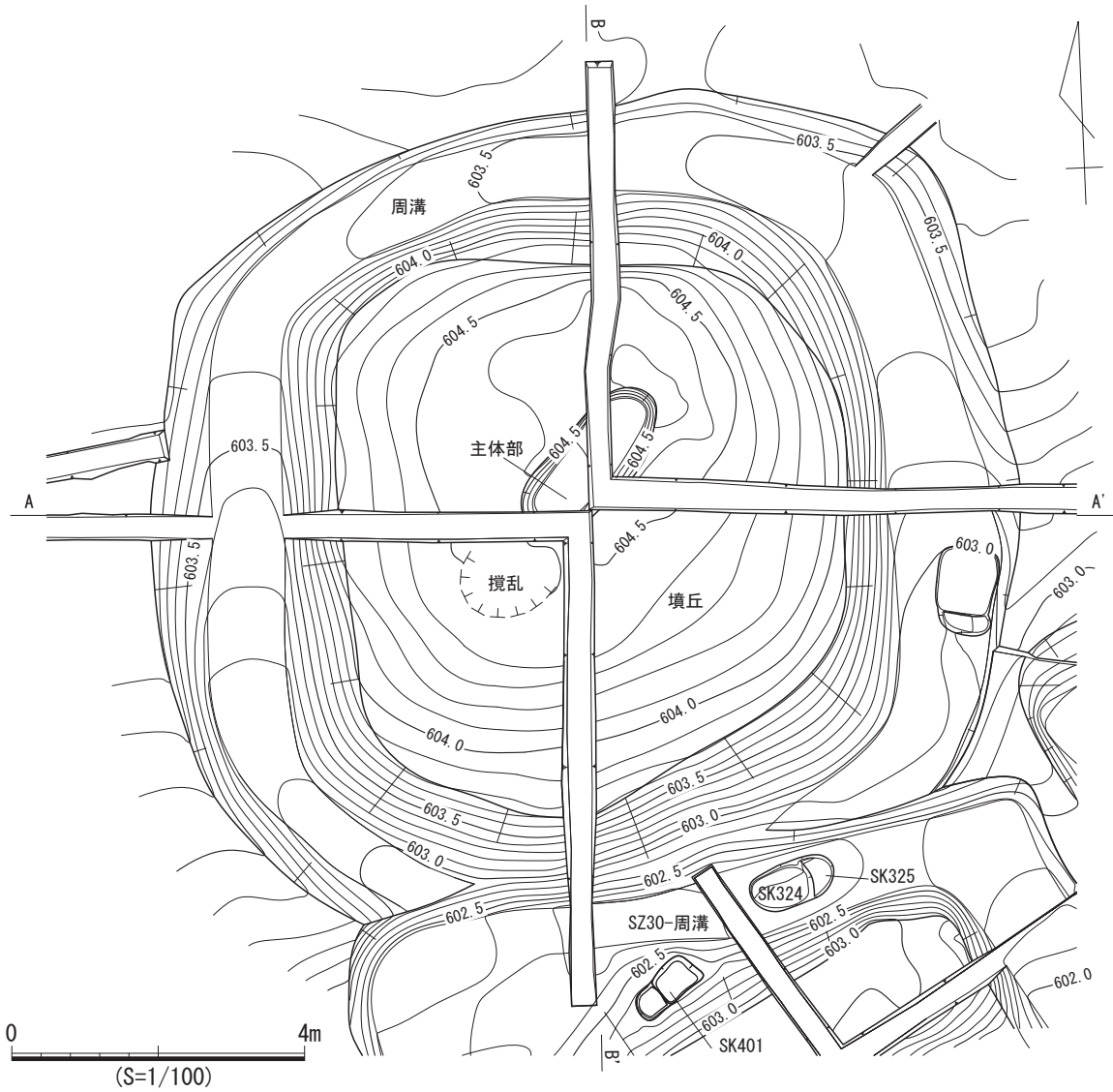


図48 SZ21遺構図(1)

III b層（33層）上に盛土した後に掘削し、その後さらに盛土していることから、SZ21の主体部と考えられる。断面は逆台形で、最大の深さは0.40mである。埋土は墳丘盛土と色調が類似する明褐色土である。

周溝 方台部を全周する。方台部に沿うように、周溝の西溝と東溝は直線的で、北溝と南溝は丸みを帯びる。北溝の掘方断面は方台部側の傾斜が緩く、東溝と西溝は方台部側の傾斜が強い。周溝の幅は1.60m～2.85mで東西の溝が広く、北西の隅が特に狭い。深さは0.55m～0.62mで全体的にほぼ同じである。埋土中には一部IV層起源の土も認められるが、これらは墳丘から流出した堆積と考えられる。A-A'断面の西溝10層～12層には黒褐色土ブロックが混じり、III b層を起源とする堆積も認められる。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 重複関係からは弥生時代末～古墳時代初めのSZ38より古い、周溝の重複状況から、大きな時期差はないと考えられる。

墳丘土層断面注記

- | | |
|--|---|
| 1 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし 周溝埋土 | 21 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 盛土層 |
| 2 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 長さ5cmの炭化材を10%含む 周溝埋土 | 22 7.5YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 盛土層 |
| 3 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性なし 粘性ややあり 周溝埋土 | 23 7.5YR5/8 明褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.5～2cmのIV層ブロックを20%含む 5YR4/8赤褐色ブロックを5%含む 細砂を多く含む 盛土層 |
| 4 7.5YR4/3 褐色土 しまりなし 粘性ややあり 周溝埋土 | 24 7.5YR5/8 明褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1～3cmのIV層ブロックを5%含む 盛土層 |
| 5 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径3～5cmの7.5YR4/1褐色土ブロックを30%含む径0.5～2cmの炭化材を1%含む 周溝埋土 | 25 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性あり 径0.5cmの角礫を5%含む 盛土層 |
| 6 7.5YR4/6 褐色土 しまりなし 粘性なし 細砂を多く含む 周溝埋土 | 26 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性なし 盛土層 |
| 7 7.5YR5/6 黄褐色土 しまりなし 粘性ややあり 周溝埋土 | 27 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし 径2～4cmの10YR5/6黄褐色土ブロックを20%含む 盛土層 |
| 8 10YR5/6 明黄褐色土 しまりややあり 粘性なし 細砂を多く含む 周溝埋土 | 28 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし 径0.5～6cmの10YR5/6黄褐色土ブロックを10%含む 盛土層 |
| 9 7.5YR5/8 明褐色土 しまりあり 粘性なし 周溝埋土 | 29 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし 径1～3cmの10YR5/6黄褐色土ブロックを5%含む 盛土層 |
| 10 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径1～5cmの10YR3/1黒褐色土ブロックを20%含む 周溝埋土 | 30 10YR5/6 黄褐色土 しまりあり 粘性あり 径1～3cmの7.5YR5/6明褐色土ブロックを10%含む 径1cmの10YR3/1黒褐色土ブロックを10%含む 盛土層 |
| 11 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性なし 径2～5cmの10YR3/1黒褐色土ブロックを40%含む径0.5～2cmの炭化材を1%含む 周溝埋土 | 31 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし 径0.5～6cmの10YR5/6黄褐色土ブロックを10%含む 盛土層 |
| 12 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性あり 径1～3cmの10YR3/1黒褐色土ブロックを40%含む 周溝埋土 | 32 7.5YR4/4 褐色土 ややしまる 粘性あり 径1～3cmの10YR3/1黒褐色土ブロックを10%含む 雲母を1%含む |
| 13 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性なし 周溝埋土 | 33 10YR3/1 黒褐色土 しまりややあり 粘性あり 径0.5～1cm炭化物を5%含む III層（旧表土層） |
| 14 10YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1～4cmの7.5YR4/1褐色土ブロックを20%含む 周溝埋土 | 34 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層 |
| 15 7.5YR3/1 黒褐色土 しまりややあり 粘性あり 長さ15cm、厚さ2cmの10YR5/6黄褐色土ブロックを5%含む 周溝埋土 | 35 10YR5/6 黄褐色土 しまりあり 粘性あり IV層 |
| 16 7.5YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土 | 36 7.5YR6/8 橙色土 しまりあり 粘性なし 径5～8cmの2.5YR5/6明黄褐色土ブロック5%含む |
| 17 7.5YR5/8 褐色土 しまりなし 粘性ややあり 周溝埋土 | |
| 18 10YR5/6 黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土 | |
| 19 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性なし 盛土層 | |
| 20 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし 盛土層 | |

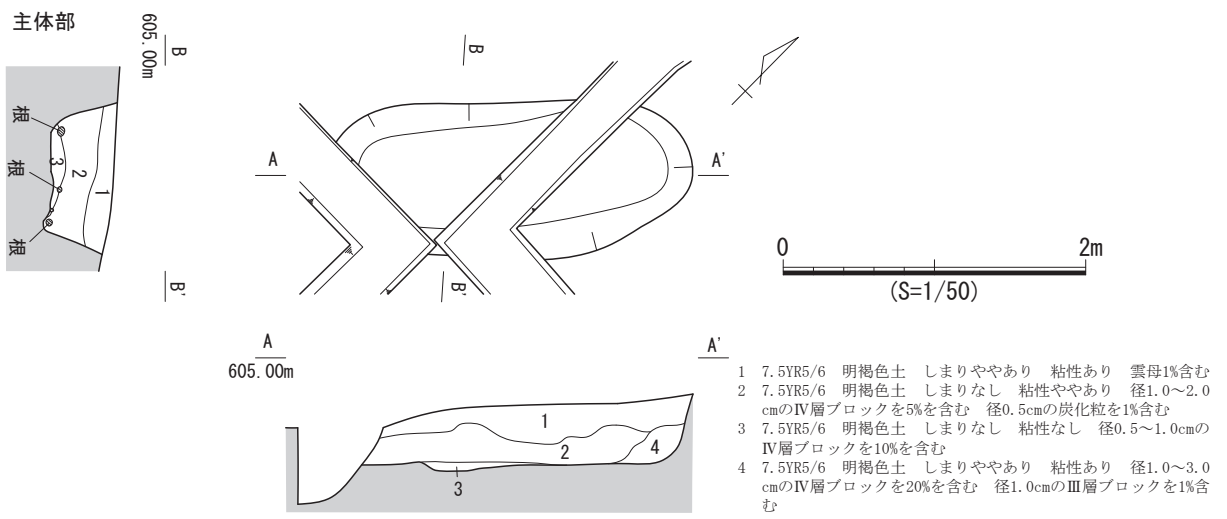


図49 SZ21遺構図（2）

SZ22 (図50・図51)

検出状況 CL2~C04グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の北東部尾根の東端に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。この遺構から尾根の向きが東から南東方向に変化し、本遺構の東側は急な崖状の地形になる。SZ22の南部でSZ38の周溝と重複する。土層断面から、SZ22はSZ38よりも新

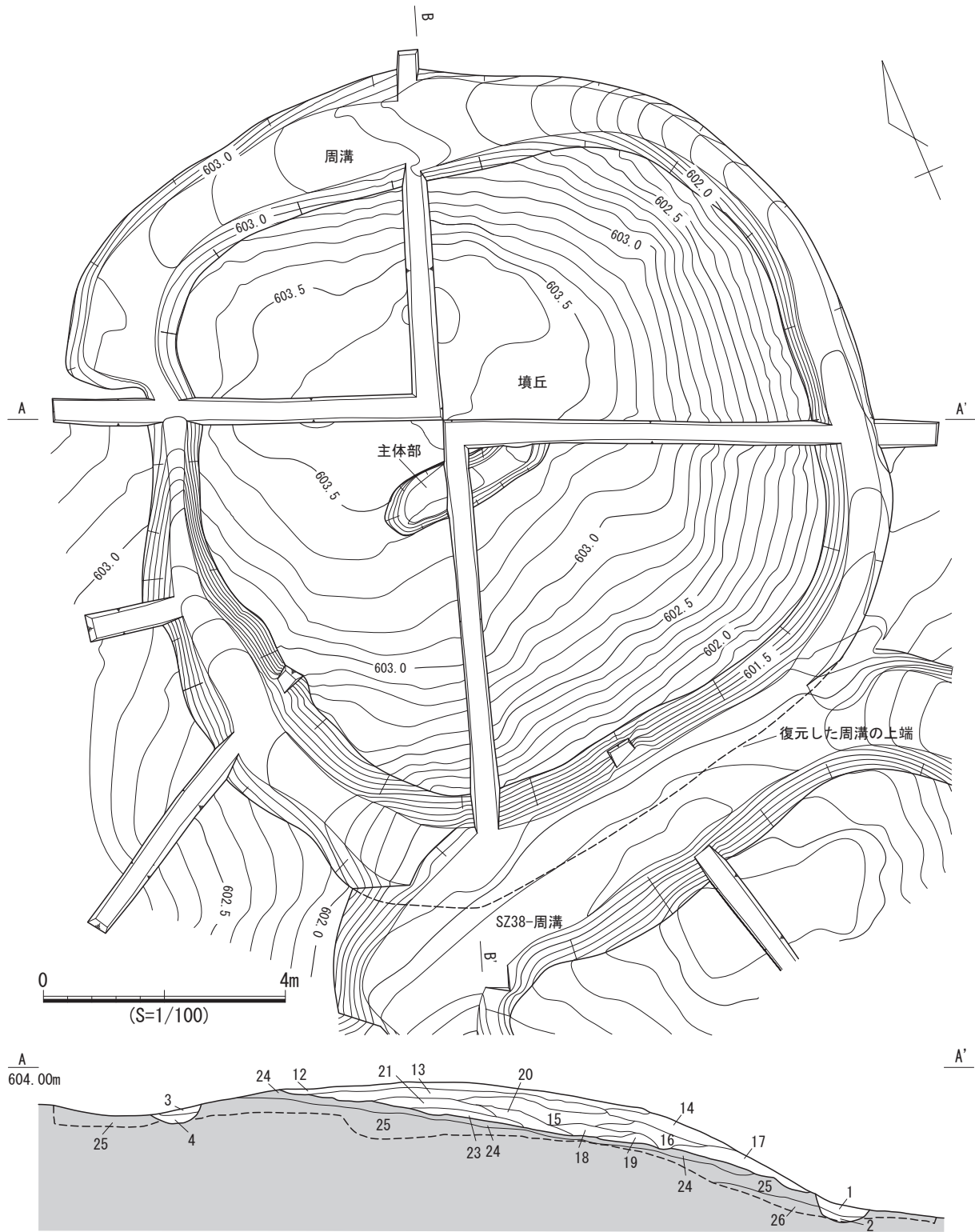


図50 SZ22遺構図(1)

しいと判断した。なお、本遺構の構築順は、周囲の墳墓の中で最も新しい。

方台部 各辺はいずれも直線的であるが、西辺はやや湾曲する。各隅部は丸みを帯びているため、隅丸方形となる。方台部には、L字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。墳丘は、方台部の東西に16層～23層を堤状に盛土した後、14層と15層によりその間を充填した可能性がある。さらにその後、12層と13層を盛土している。盛土は、IV層に類似する明黄褐色土や褐灰色土が用いられる。A-A'断面の西部とB-B'断面の東部では、墳丘盛土の裾と周溝までの間が離れているが、III b層の状況から推

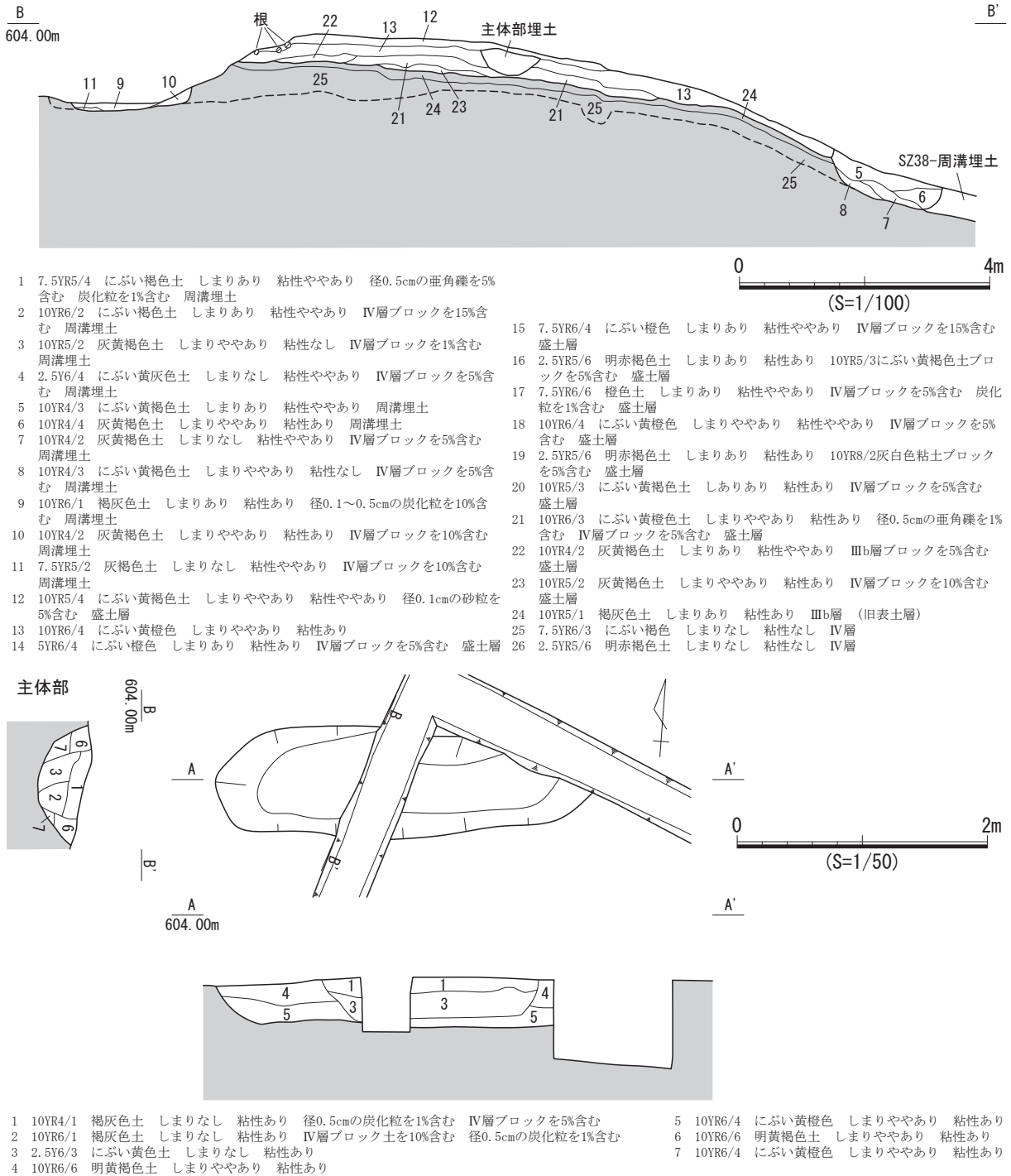


図51 SZ22遺構図(2)

測すると、この部分も地形を改変した周溝の一部と考えられる。方台部の中央で、方台部の長軸とほぼ直交し、東西方向が長軸となる長楕円形の土坑を検出した。一旦Ⅲb層上に盛土した後に掘削され、その後さらに盛土されていることから、SZ22の主体部と考えられる。主体部の断面は半円形に近く、最大の深さは0.40mである。埋土1層はやや黒く炭化物を含む褐色土で、その他の埋土は、墳丘盛土と同様にⅣ層に類似する土である。

周溝 SZ22とSZ38の周溝の重複部分について、調査後はSZ38の方が新しいとしているが、掘削当初はSZ22が新しいと判断している。調査中に所見を変更した理由が判然としないため、SZ22の南溝の上端を修正前の図面を元に復元して破線で表示した。検出した周溝は墳丘を全周し、断面形はどの部分も半円形に近い。周溝の幅は0.80m～2.00mと一定でなく北西の隅が特に狭いが、平面図では埋没した部分のみ周溝としており、前述のように本来はA-A'断面西端の緩やかな落ち込み全体が周溝と考えられるため一定の幅であった可能性が高い。また、深さは0.15m～0.40mで東溝や南溝が深い。埋土は北西部で炭化物を含む褐灰色の土が認められるが、その他はⅣ層起源の土と考えられる。また、地形が低い南溝の土層断面では斜面下方側に傾く堆積が認められることから、方台部から流出した堆積の可能性もある。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 重複関係からは弥生時代末～古墳時代初めのSZ38より新しいが、周溝の重複状況から大きな時期差はないと考えられる。

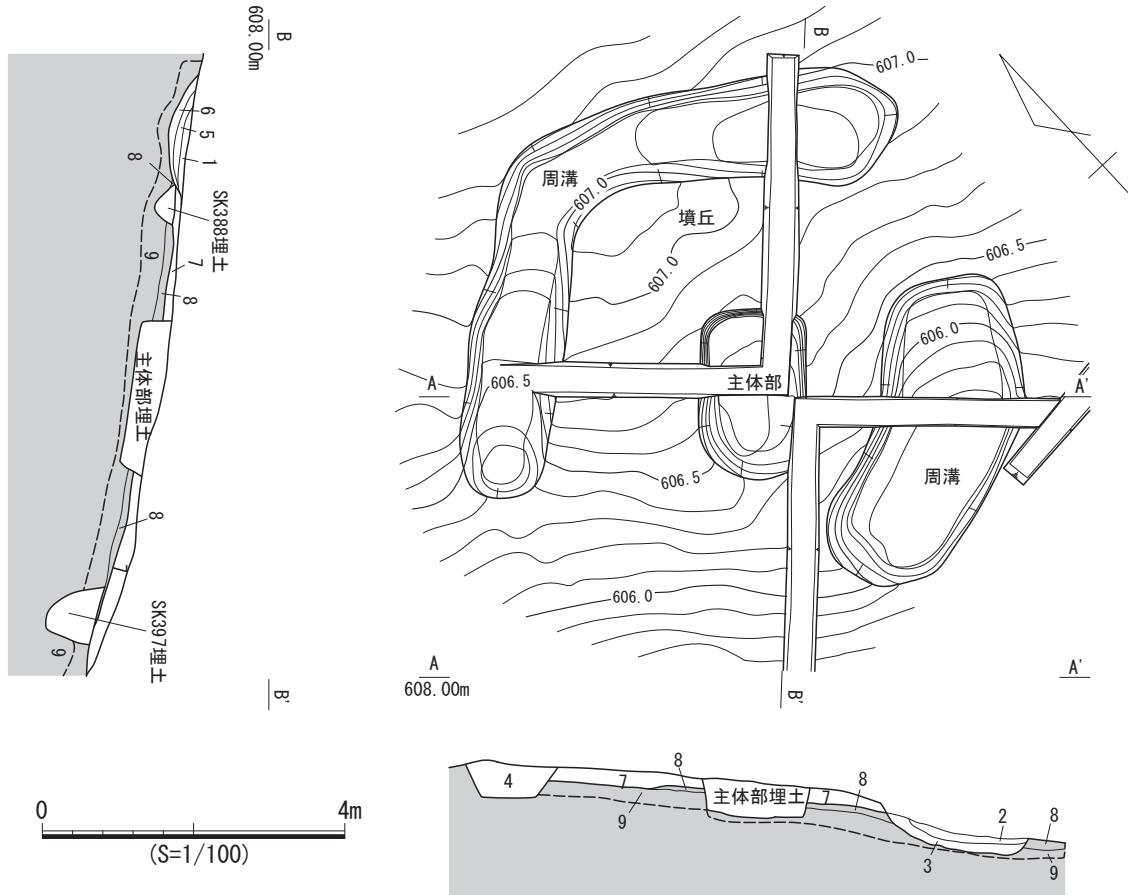
SZ23 (図52・図53)

検出状況 BM7～BM8グリッド、Ⅳ層の上面で検出した。D地点の北西部、尾根からやや南へ下がった傾斜面に立地する。現況地形測量図では墳丘がほとんど確認できないが、周溝南溝の落ち込みが認められる。

方台部 北辺と西辺は直線的で、北西隅部は丸くなる。東辺はやや湾曲している。南辺は盛土範囲を把握できなかったため形状は不明である。方台部には、各辺に直交するようにL字形にトレンチを2箇所設定して掘削した。盛土は、Ⅲb層(12層)上にⅣ層(13層)と色調が類似する褐色土を積み上げていく。方台部中央やや南東寄り、方台部の長軸とほぼ平行し北東-南西方向に長軸をもつ隅丸長方形の土坑を検出した。Ⅲb層上に盛土した後に掘削された土坑であることから、SZ23の主体部と考えられる。断面は、逆台形に近く、最大の深さは0.49mである。埋土は墳丘の盛土と同様に、Ⅳ層と類似する明褐色土である。

周溝 斜面に立地するためか、傾斜の下方となる南西側の溝は確認できなかった。西溝と北溝はL字形に接続しているが、南溝はやや離れた位置にあり緩く湾曲している。そのため、墳丘の北東部が陸橋状になっている。B-B'断面は半円形に近い。周溝の幅は1.08m～1.92mで西溝・北溝に比べ、南溝が広い。深さは0.30m～0.40mで場所による大きな差はない。埋土3層と6層にはⅢb層に色調が類似する黒褐色土が堆積する。その上の2層と5層は墳丘の盛土と類似することから、墳丘から流出した堆積と考えられる。周溝の底面はほぼ平坦で、埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 弥生土器や須恵器が墳丘盛土と周溝の埋土から出土した。59・60を含む弥生土器の破片は、周溝の東溝で出土し、位置的にはまとまっているが、どれも細片である。須恵器の短頸壺(62)



- | | |
|---|--|
| 1 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 6 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 |
| 2 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 7 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性ややあり 盛土層 |
| 3 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを3%含む 周溝埋土 | 8 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cmの炭化粒を1%含む IIIb層 (旧表土層) |
| 4 土層記録なし | 9 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層 |
| 5 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | |

主体部

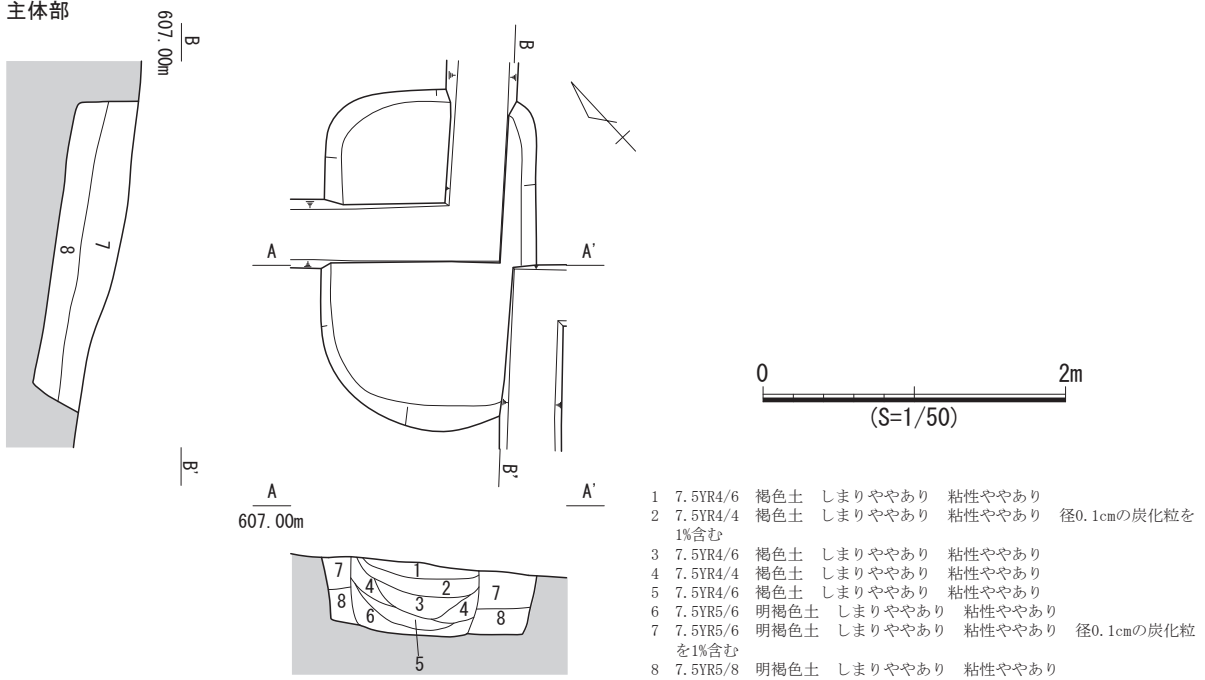


図52 SZ23遺構図(1)

は、BM7～BN8グリッドの遺物包含層や墳丘上面、周溝上層で出土した破片が接合した。これらの分布状況から、SZ23の北溝の斜面上方から下方に向けて流出した可能性がある。ただし、1点のみ東に離れたBN10グリッドで出土した破片がある。須恵器の甕（61）は北溝で出土した破片とその周囲の遺物包含層で出土した破片が接合した。石器のスクレイパー（63）は、主体部の底面直上で出土した。その他の遺物は埋土中から散在して出土しており、特徴は認められなかった。

出土遺物 59・60は弥生土器の可能性はあるが、いずれも細片で摩滅が著しい。61は須恵器甕で、口縁部は頸部から直線的に開き、口縁部端部は内傾する面となる。口縁部外面に2条の横位沈線を施す。体部上半外面の叩き目は、降灰のため不明瞭である。62は須恵器短頸壺である。口縁部が短く立ち上がり、体部上半が強く張って明瞭な稜となる。体部下半には底部外面から見て時計回りに削り調整を

遺物分布図

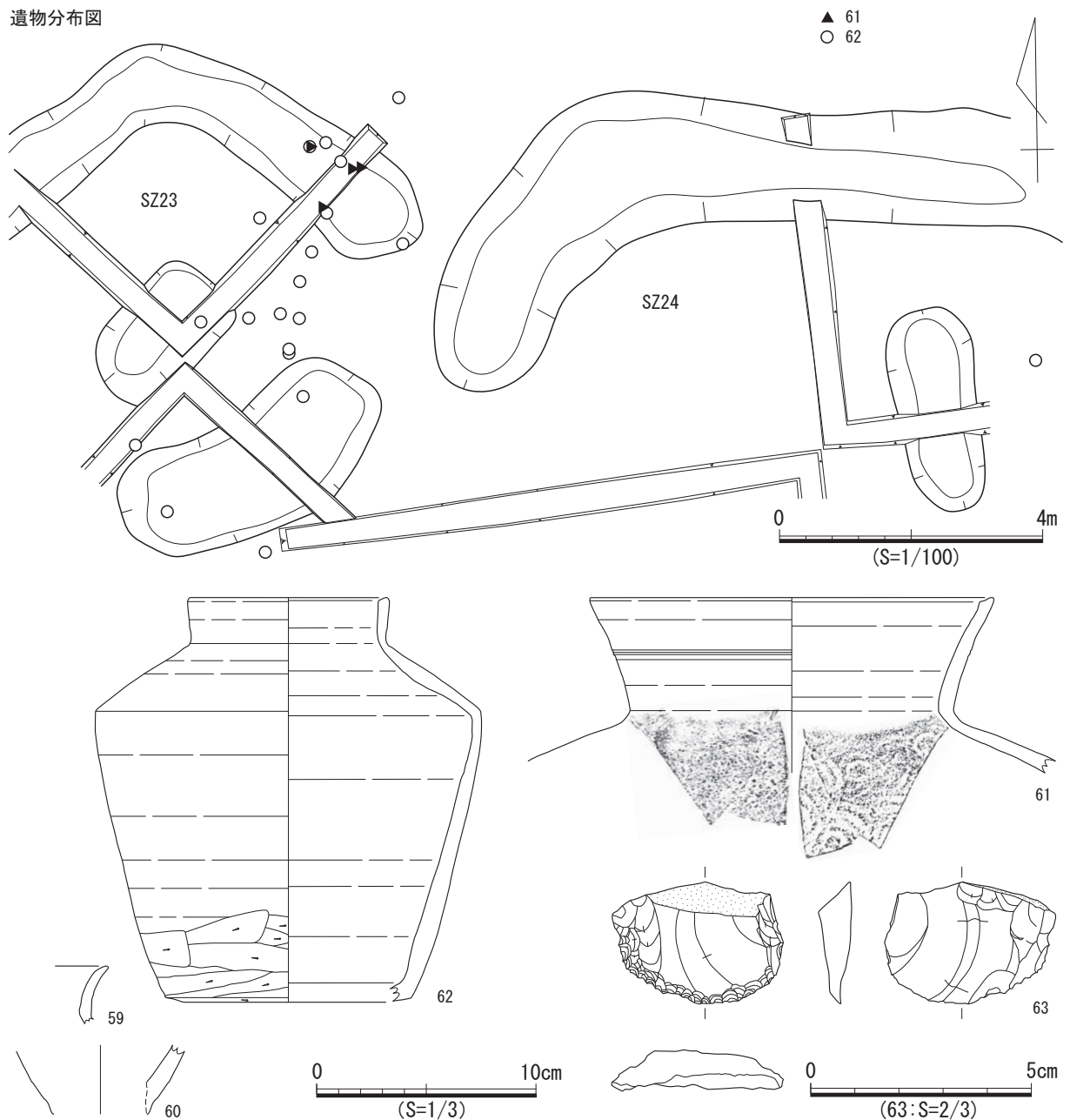


図53 SZ23遺構図（2）、出土遺物

施す。非常に丁寧な造りであるが、胎土から在地窯の製品と考えられる。63は石器のスクレイパーである。自然面の残る縦長剥片の背面側に刃部を作り出す。

時期 61や62は、出土状況からSZ23がある程度埋没した後に残されたと考えられ、本遺構の構築時期を示す資料とは言えない。東溝から弥生土器の可能性のある土器は出土しているが、時期が明確な遺物はなく、遺構の重複もないため、詳細な時期は不明である。ただし、他の墳墓と一連のものと思われることから、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と思われる。

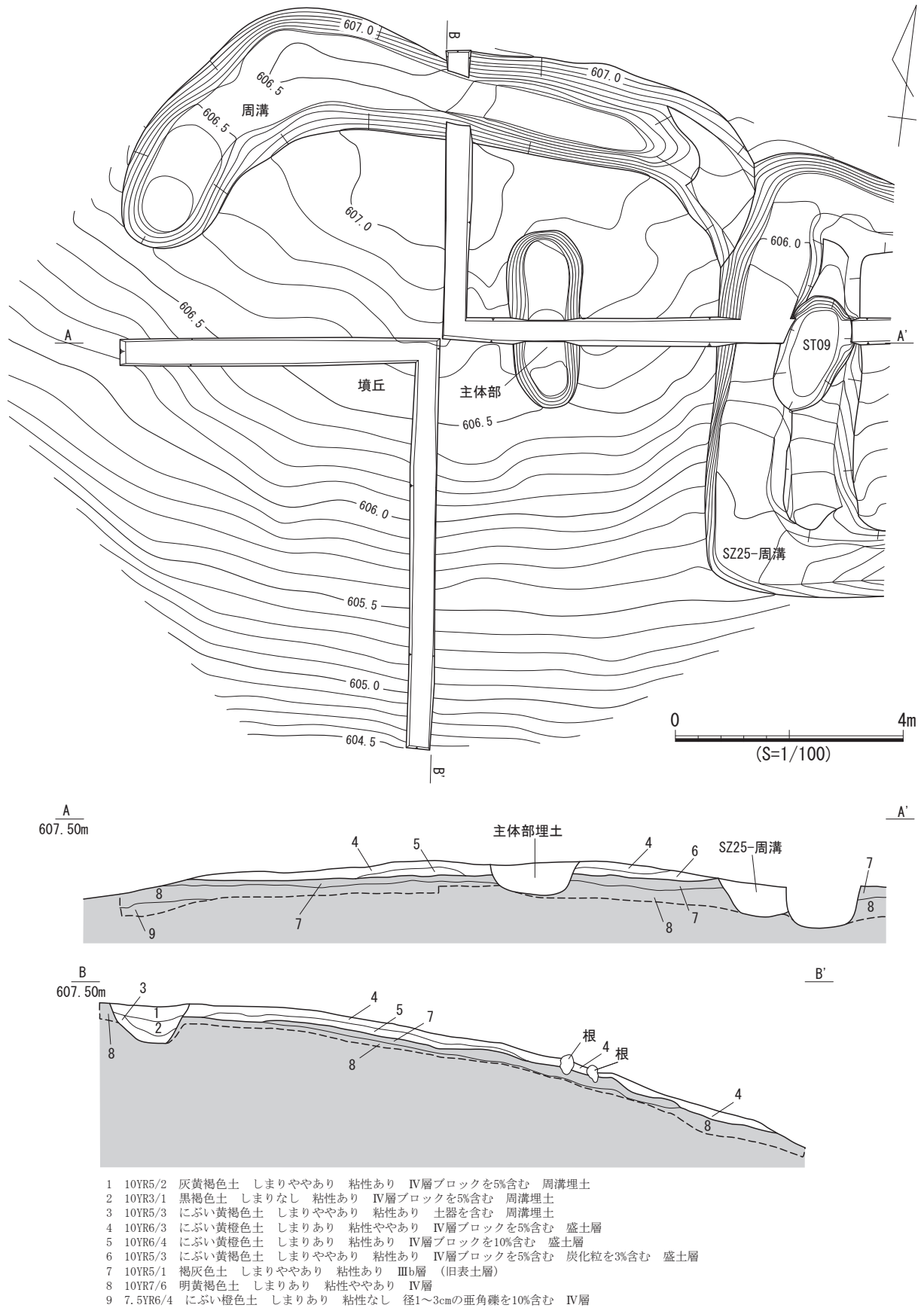
SZ24 (図54～図56)

検出状況 BM8～B010グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の北西部、尾根からやや南へ下がった傾斜面に立地し、現況地形測量において、墳頂部の平坦面と周溝の僅かな落ち込みを確認した。SZ24とSZ25の間に設定したトレンチのA-A'断面で、2箇所落ち込みを確認した。当初は、東側の落ち込みをSZ25の周溝として先行して掘削を進めたが、平面図による確認により西側の落ち込みがSZ25の周溝埋土であることが判明した。また、東側の落ち込みもSZ24とSZ25の周溝が埋没した後に掘削された遺構(ST09)と判明したため、結果的にA-A'断面ではSZ24の東側周溝の埋土を確認することはできていない。SZ25方台部西端及び、ST09と重複する部分で、SZ24の周溝と考えられる落ち込みを確認したことから、SZ24とSZ25に先後関係があるのは確実であるが、新旧についてはこうした経緯のため判断できなかった。しかし、SZ24の出土遺物やSZ25とSZ29の重複関係から、SZ24の方が新しい可能性が高い。

方台部 北辺は直線的で隅部は丸くなる。土層断面の盛土層の状況から南北方向が長い形状と思われるが、墳丘流失土と墳丘盛土が区別できなかった可能性がある。方台部には、北辺に直交する方向を基準にL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。盛土は、Ⅲb層(7層)上にIV層に類似する黄褐色土を積み上げている。SZ24の周溝から判断すると、SZ25の西溝の位置まで盛土されていた可能性が高い。方台部中央から北東方向寄り、方台部の長軸とほぼ平行する南北に長軸をもつ長楕円形の土坑を検出した。Ⅲb層上に盛土した後に掘削し、その後さらに盛土されていることから、SZ24の主体部と考えられる。断面は逆台形に近く、最大の深さは0.60mである。埋土は褐色土や褐灰色土、灰黄褐色土、にぶい黄褐色土である。

周溝 斜面に立地するため、傾斜の下方となる南溝や東溝、西溝の南半は確認できなかった。北溝は直線的で、東西の溝との接合部分は湾曲して丸味がある。断面は逆台形に近い。周溝の幅は1.32m～2.28mで北東隅部が若干狭い。深さは北溝中央部で0.60mある。墳丘北側の堆積は3層に分けられるが、中層にあたる2層には黒褐色土が認められる。その下層である3層は、堆積状況から周溝壁面の流出土と考えられる。周溝の底面は平坦で、埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

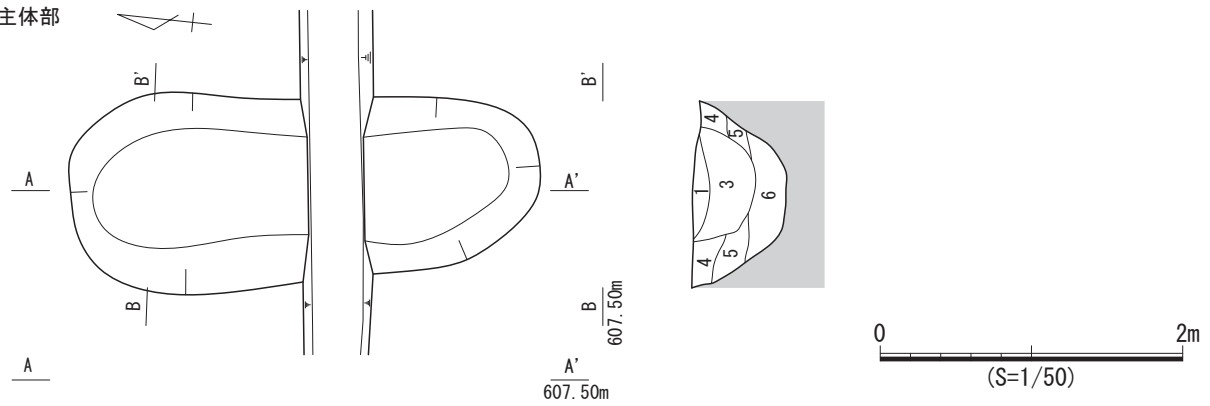
遺物出土状況 縄文土器や弥生土器、須恵器が、墳丘盛土と周溝の埋土から出土した。この内北溝西部では、64・65・68～71が底面付近でまとまって出土した。出土状況図に示した土器の内、西部のものが主に68と71、その東側が71と64・69である。出土位置の測量をした状況から、出土位置図に示したものの以外にも、この範囲から出土した土器の破片は多く、接合したものも多数認められた。器台(74)のみ、北溝中央やや東寄り出土した。このような出土状況から、意図的に周溝内に土器を廃棄した可能性が考えられる。主体部から出土した66・67・72も弥生土器と考えられるが、細片で接合する破片もないため、混入の可能性もある。須恵器(75・76)は方台部上で出土した。甕(76)は、



- 1 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土
- 2 10YR3/1 黒褐色土 しまりなし 粘性あり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 土器を含む 周溝埋土
- 4 10YR6/3 にぶい黄橙色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 盛土層
- 5 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 盛土層
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 炭化粒を3%含む 盛土層
- 7 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IIIb層 (旧表土層)
- 8 10YR7/6 明黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層
- 9 7.5YR6/4 にぶい橙色土 しまりあり 粘性なし 径1~3cmの亜角礫を10%含む IV層

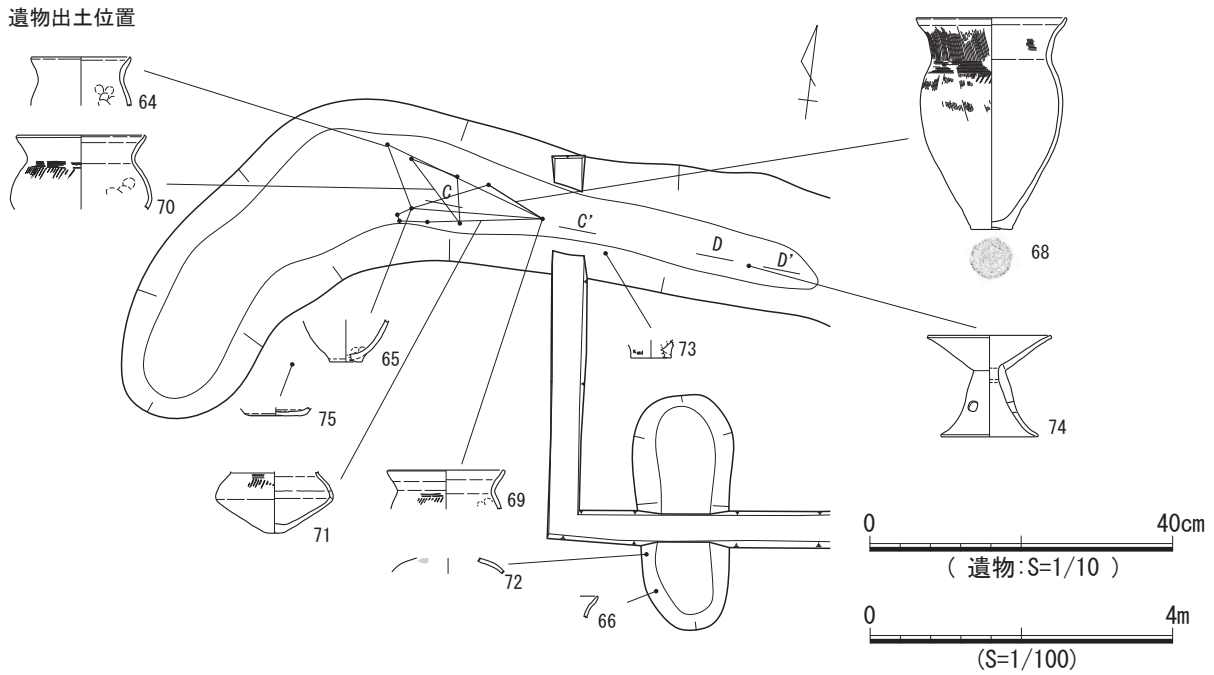
図54 SZ24遺構図(1)

主体部



- 1 7.5YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 2 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cmの炭化粒を1%含む
- 3 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1cmの7.5YR4/6 褐色ブロックを1%含む
- 4 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 径1cmのIV層ブロックを5%含む
- 5 7.5YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 径0.5~1cmの垂角礫を5%含む
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径1cmのIV層ブロックを10%含む

遺物出土位置



遺物出土状況図

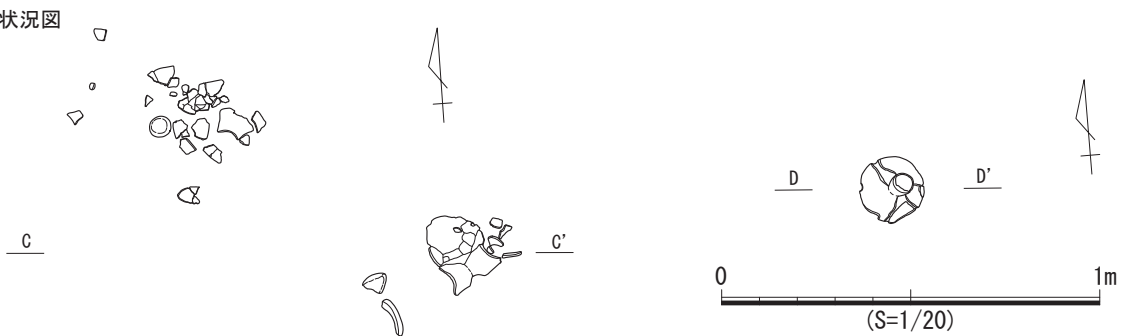


図55 SZ24遺構図(2)

BM7からBM9グリッドにかけて、同一個体と思われる破片の散布が認められる。その他の遺物は埋土中から散在して出土しており、特徴は認められなかった。

出土遺物 64～74は弥生土器である。64～68は甕である。68は口縁部が頸部から外反しながら開き、

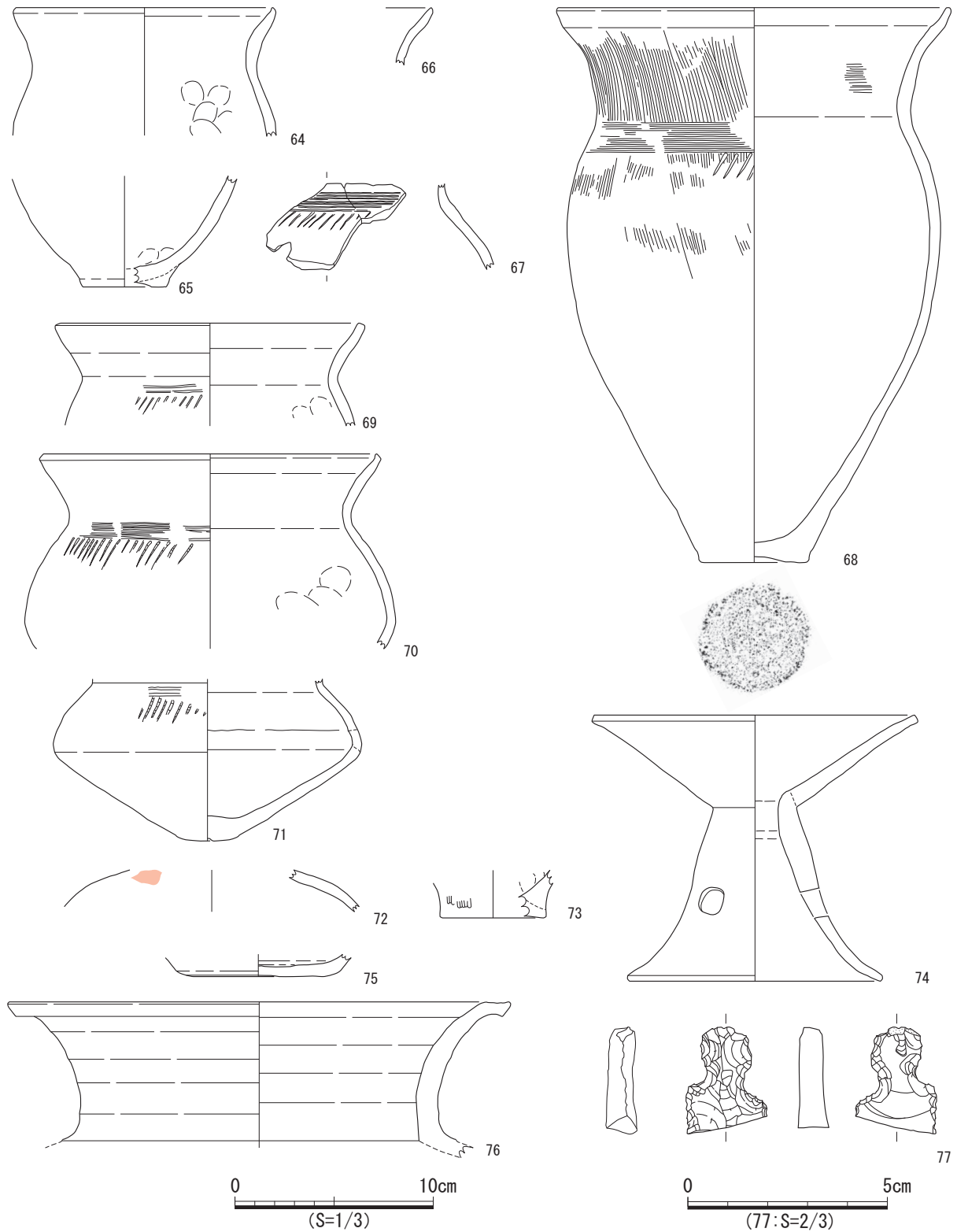


図56 SZ24出土遺物

端部は受口状になる。体部上半に最大径があり、底部は明瞭な凹底で布目圧痕が残る。頸部に縦位のハケ目調整を施した後、体部上半に横位の楕状文、その下に斜位の刻みを施すが、いずれも同じ工具の可能性もある。また、口縁部外面の調整は体部まで及ぶ可能性が高い。口縁部から体部上半外面にはスス、底部内面にはコゲが付着する。64は口縁部が緩やかに外反しながら開き、端部のみ内湾させる。外面にはススが付着する。65は底部であり、64と同一個体の可能性もある。底部外面に粘土紐を付加して凹底状に成形している。66は口縁部の破片である。67は68と同様な加飾が認められる。69～71は鉢である。69と71は、接点がないが同一個体と考えられる。口縁部が直線的に開き、端部のみ内湾させる。頸部は「く」の字状に屈曲し、体部中央が強く張る。底部は狭小な凹底である。頸部下に板状工具による横位の楕描文、その下に同様な工具による斜位の連続刻みを施す。外面にススが付着する。70の口縁部は僅かに外反しながら開き、端部のみ内湾させる。体部残存部の中ほどに最大径がある。体部外面上半には68や69、71とほぼ同じ加飾を施す。また、体部外面にススが付着する。72は壺と考えられる。体部外面に赤彩が認められる。73は壺類の底部と思われる。外面に縦位のミガキ調整が認められる。74は器台である。坏部が直線的に開き、脚部は裾部が緩やかに外反して開く。坏部と脚部の接合部は、脚部上半部より細く括れる。脚部には三方向から円形の透孔があげられている。75と76は須恵器である。75は無台坏の底部である。76は甕の口縁部で、成形時における体部との接合部から剥がれたと考えられる。77は縦長の石匙で、折損した摘み部分である。

時期 68は在地の土器と思われるが、器形や文様などが美濃山間部における甕F類（恩田2004）に類似する。甕F類は、東海地方の山中Ⅱ式から廻間Ⅰ式の段階で出現するとされていることから、弥生時代末から古墳時代初めに位置付けられる。

SZ25（図57）

検出状況 BM10～B012グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の中央西寄りの尾根上に立地する。現況地形測量において、SZ16が立地する尾根上から降る傾斜が、SZ25付近で変化し平坦面にみえたこと、また、平坦面南東側の傾斜が強く平坦面がより強調されたことから墳丘と認識し調査を行った。SZ25の西部でSZ24とその周溝、東部でSZ29の周溝とそれぞれ重複する。またST09とも重複する。検出状況や土層断面からSZ29・ST09より古いと判断した。なお、SZ25とSZ24との重複関係については、SZ24の項で詳述した。なお、本遺構を起点に重複関係が連続して認められ、その構築順はSZ25<SZ29<SZ32<SZ41<SZ42である。

方台部 東部はSZ29の周溝、西部はSZ24の周溝によって削られる。北辺、西辺、南辺が直線的で東辺はSZ29の周溝と重複しているが、平面は東辺が短い台形となる。方台部には、西辺に直交する方向を基準にL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。その結果、盛土は確認できず、精査後にはIV層（15層・16層）が露出した。なお、方台部内では主体部は検出されなかった。

周溝 北溝、西溝、南溝は直線的で、西溝は断面が逆台形、その他は半円形に近い。周溝の幅は1.00m～1.60mで西溝が広い。深さは0.28m～0.56mで北溝が浅い。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 本遺構の土層確認トレンチ掘削時に弥生土器の甕（179）が出土した。出土座標からST09の出土遺物としたが、本遺構のものがST09構築時に混入した可能性が考えられる。

時期 重複関係から弥生時代後期後半のSZ29より古い、周溝の重複状況から大きな時期差はないと

考えられる。

SZ26 (図58・図59)

検出状況 BM14～BN15グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の北部尾根上に立地し、現況地形測量において墳丘が確認できた。同じ尾根上のSZ27や西側傾斜面のSZ29とも重複しない。また、尾根の東に若干空間が認められ、本遺構西側の尾根上に立地するSZ17と立地の状況が類似する。

方台部 平面は、西辺のみ丸みがありそれ以外は直線的な隅丸方形である。方台部には、各辺に直交するようL字形にトレンチを2箇所設定して掘削した。墳丘は、方台部の中央から盛土する。盛土にはIV層ブロックが多く含まれる土を用いる。A-A'断面の西部で墳丘が途切れているが、III b層 (11層)

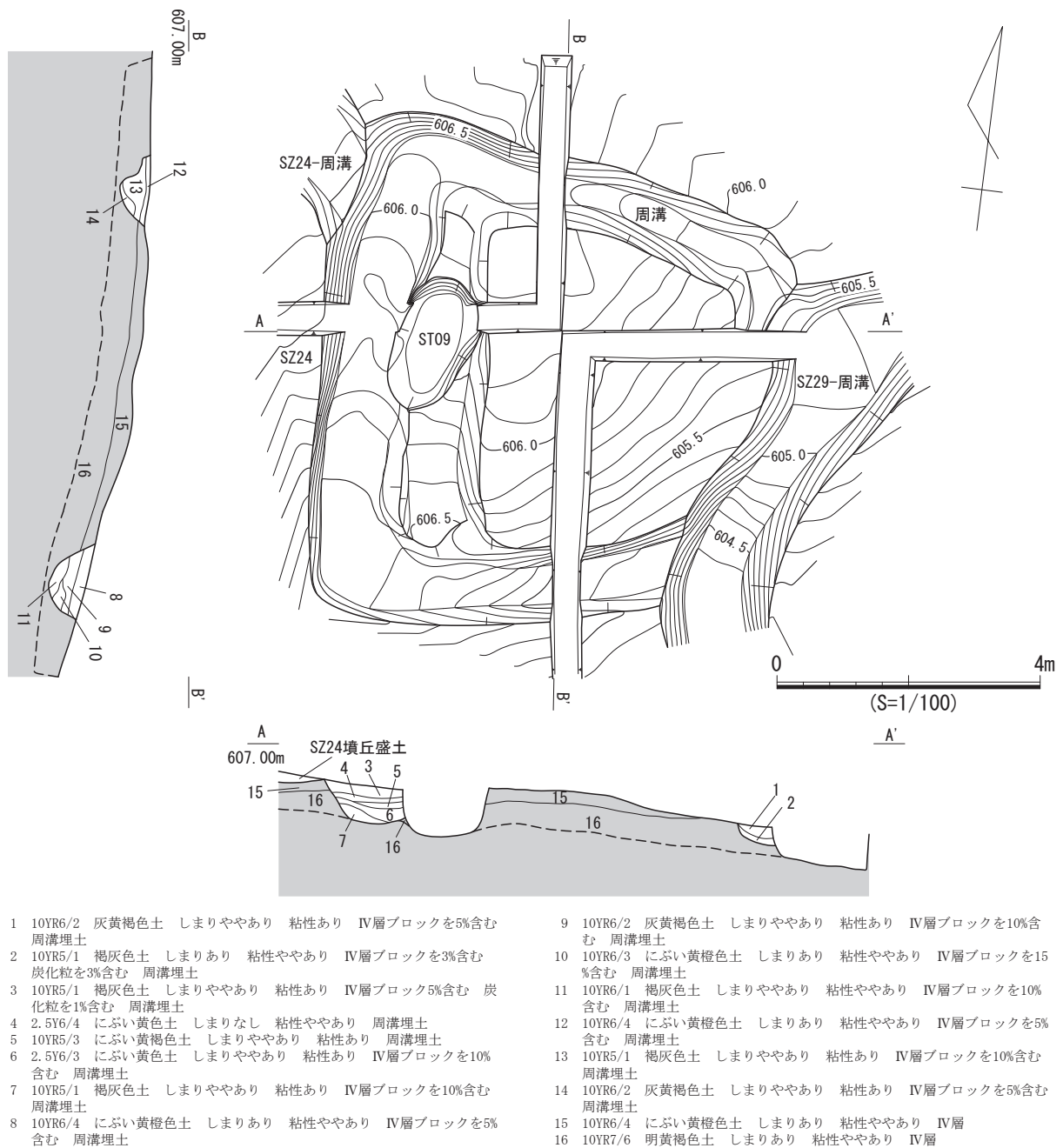
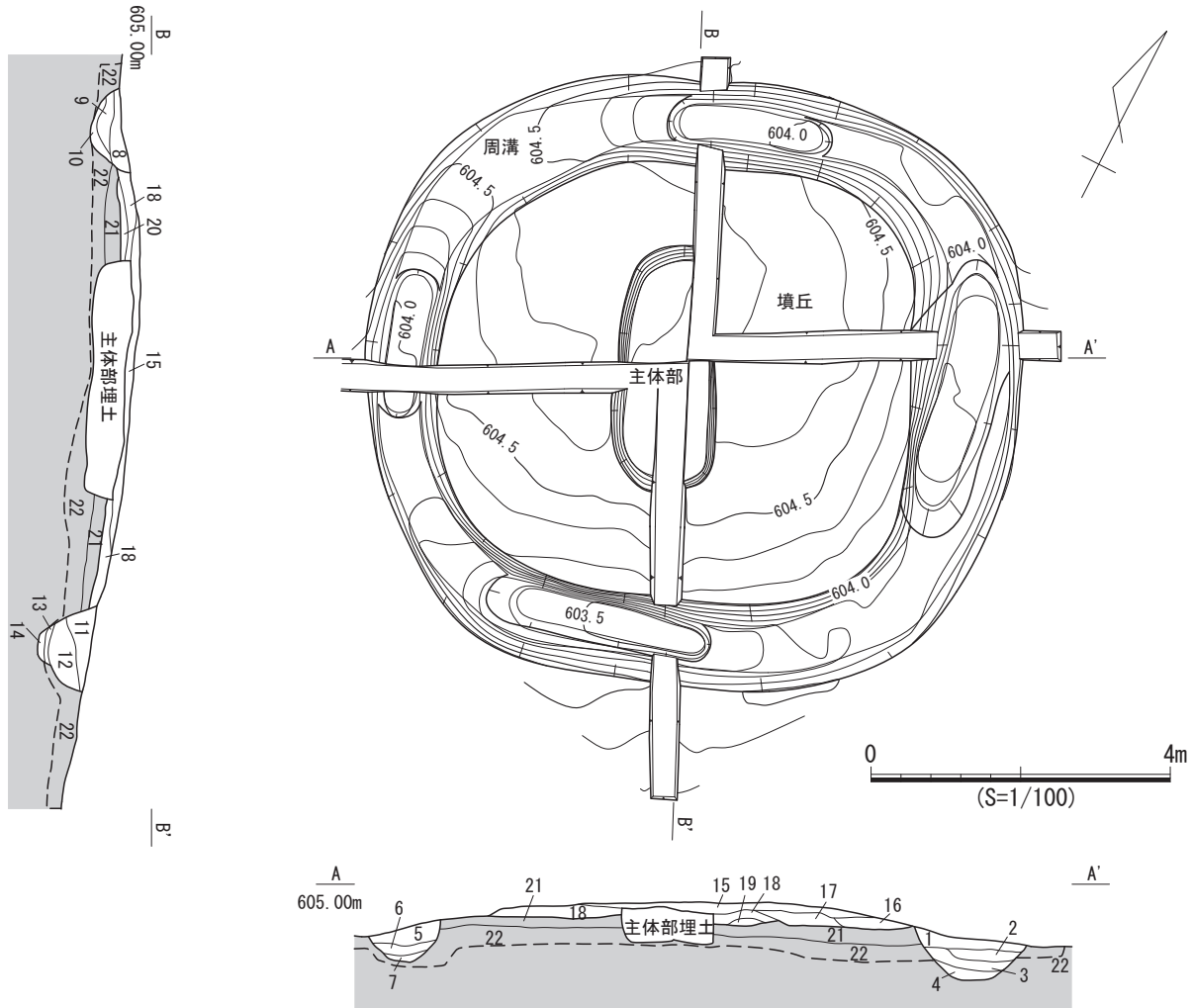


図57 SZ25遺構図

の状況から調査時に下げすぎてしまったと考えられる。方台部の中央で方台部の長軸とほぼ直交する長楕円形の土坑を検出した。Ⅲb層上に最初に盛土した後で掘削し、その後盛土していることから、SZ26の主体部と考えられる。掘方の断面形は長方形若しくは逆台形で、掘方の最大の深さは0.50mである。埋土は、墳丘盛土と同様にⅣ層に類似する土である。

周溝 方台部を全周している。断面は半円形に近い形状をとる。周溝の幅は0.84m～1.46mで東溝が最も広い。深さは段状の深い部分も含めて0.20m～0.56mであり、斜面下方に位置する南溝が最も深い。埋土中にはⅣ層起源のブロックが多く含まれる。なお、各周溝中央の底面でそれぞれ土坑状の窪



- | | |
|--|--|
| 1 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり Ⅳ層ブロックを15%含む 周溝埋土 | 13 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり Ⅳ層ブロックを5%含む 周溝埋土 |
| 2 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土 | 14 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり Ⅳ層ブロックを15%含む 周溝埋土 |
| 3 10YR5/1 褐灰色土 しまりなし 粘性あり 周溝埋土 | 15 10YR6/3 にぶい黄橙色土 しまりややあり 粘性ややあり 木の根が多い 盛土層 |
| 4 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 16 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり Ⅳ層ブロックを5%含む 盛土層 |
| 5 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりなし 粘性あり Ⅳ層ブロックを5%含む 炭化粒を1%含む 周溝埋土 | 17 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり Ⅳ層ブロックを15%含む 盛土層 |
| 6 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりなし 粘性あり Ⅳ層ブロックを5%含む 炭化粒を1%含む 周溝埋土 | 18 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり Ⅳ層ブロックを10%含む 盛土層 |
| 7 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土 | 19 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり Ⅲb層ブロックを10%含む 盛土層 |
| 8 10YR6/3 にぶい黄橙色土 しまりややあり 粘性あり Ⅳ層ブロックを10%含む 周溝埋土 | 20 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 盛土層 |
| 9 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりなし 粘性あり Ⅳ層ブロックを5%含む 炭化粒を1%含む 周溝埋土 | 21 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり Ⅲb層 (旧表土層) |
| 10 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土 | 22 10YR7/6 明黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり Ⅳ層 |
| 11 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土 | |
| 12 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土 | |

図58 SZ26遺構図(1)

みを確認したが、土層断面から周溝の一部と考えられる。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 北溝の底面付近で縄文土器（78）が出土した。

出土遺物 78は縄文土器の深鉢と考えられる。外面に単節の斜縄文を施す。

時期 時期が明確な出土遺物がなく、いずれの遺構とも重複がないため詳細な時期は不明である。ただし、他の墳墓と一連のものと思われることから、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と思われる。

SZ27 (図60)

検出状況 BM16～B017グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の北部中央よりやや東寄りの尾根上に立地し、現況地形測量においてわずかに墳丘が確認できた。SZ27の北東部でSZ20の周溝と重複する。周溝の検出状況から、SZ27はSZ20よりも古いと判断した。さらに、ST05よりも古い。なお、本遺構を起点に重複関係が連続して認められ、その構築順はSZ27<SZ20<SZ21<SZ30<SZ37である。またSZ37から先についても、SZ38やSZ46といった墳墓との重複が連続する。

方台部 北東部はSZ20の周溝によって削られるが、平面は4辺が直線的で北辺がやや開く不整な隅丸方形と思われる。方台部には、東辺と西辺に直交する方向を基準にL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。残存する盛土（12層）は薄く、IV層土のブロックを多く含むにぶい黄橙色土が用いられる。盛土とIV層（14層）の間のⅢb層（13層）は、斜面下方にのみ認められる。主体部の可能性がある遺構として、方台部東寄りで確認した遺構がある。当該位置の根株が除去できなかったため平面は

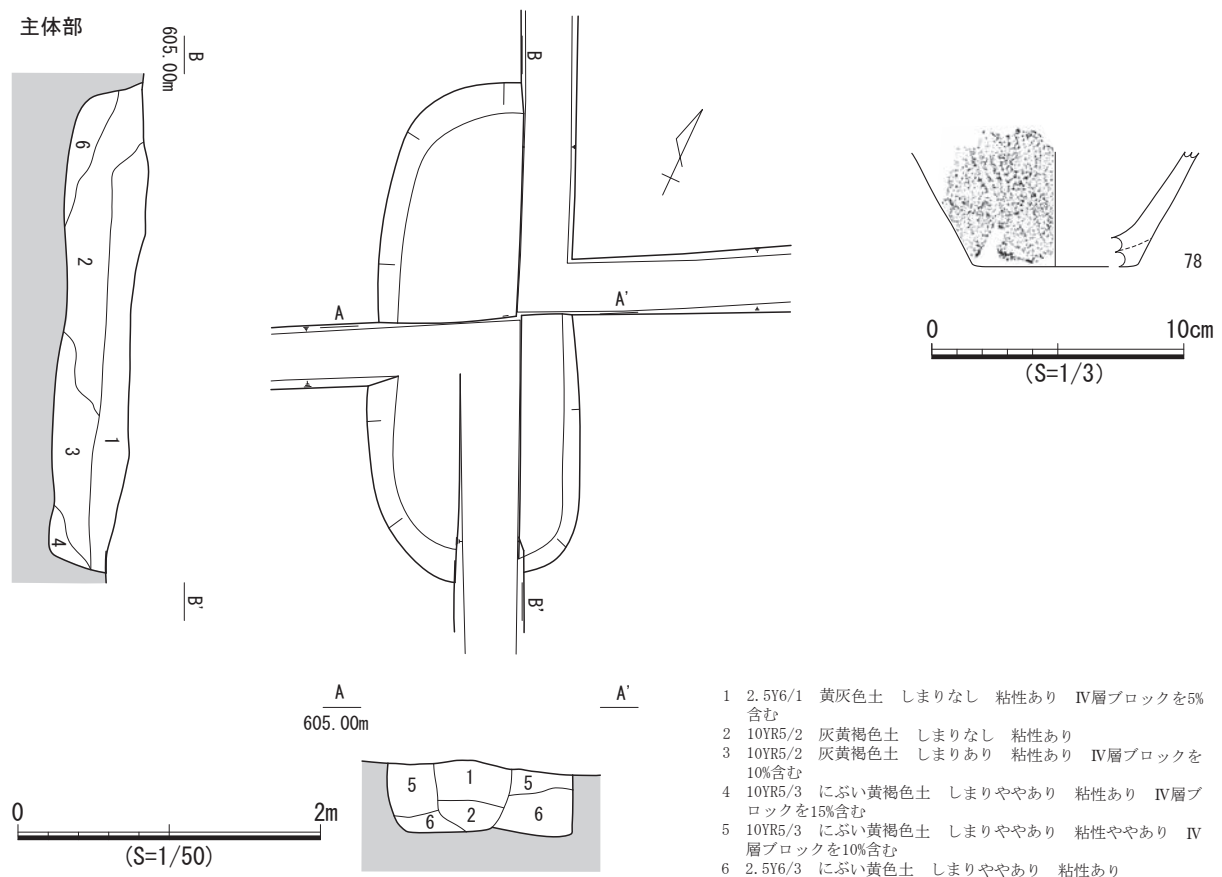
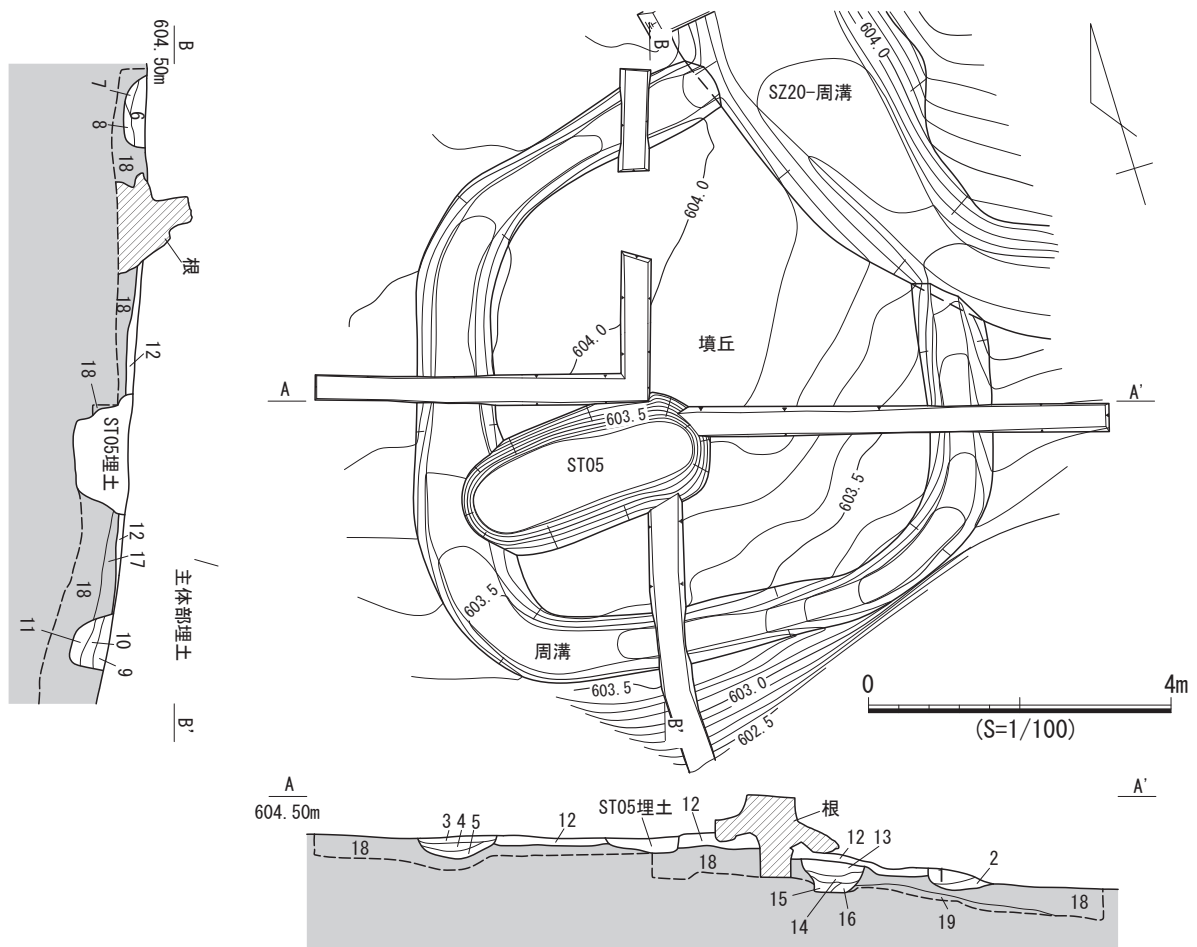


図59 SZ26遺構図（2）、出土遺物

不明で、トレンチの断面で東西方向の掘方断面のみを確認した。盛土前に直接IV層を掘削して設置されている。断面は逆台形に近く、最大の深さは0.40mである。埋土は、14層がIII b層に類似するや褐灰色土であり、15層はIV層と類似するにぶい黄褐色土で、いずれの堆積もIV層土のブロックを多く含む。

周溝 北東部でSZ20と重複し、一部が消失している。方台部に沿って設置されており、四隅には丸味がある。南溝の断面は逆台形であるが、その他は半円形である。周溝の幅は0.60m～1.16mで、西溝の幅が若干広い。深さは0.28m～0.48mであり、原地形が低い南溝が特に深い。埋土はブロックを多く含むIV層に類似する土であるが、西溝の3層や北溝の8層では褐灰色土も認められる。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。



- | | |
|--|---|
| <p>1 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土</p> <p>2 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土</p> <p>3 10YR6/1 褐灰色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土</p> <p>4 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを15%含む 周溝埋土</p> <p>5 2.5Y6/2 灰黄色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを15%含む 周溝埋土</p> <p>6 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土</p> <p>7 2.5Y6/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土</p> <p>8 10YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを15%含む 周溝埋土</p> <p>9 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土</p> | <p>10 2.5Y6/3 にぶい黄色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを15%含む 周溝埋土</p> <p>11 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを15%含む 周溝埋土</p> <p>12 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 盛土層</p> <p>13 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを15%含む</p> <p>14 7.5YR5/4 にぶい褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む</p> <p>15 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む</p> <p>16 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む</p> <p>17 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IIIb層 (旧表土層)</p> <p>18 10YR6/6 明黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層</p> <p>19 7.5YR5/4 にぶい褐色土 しまりあり 粘性なし 径1~3cmの亜角礫を10%含む IV層</p> |
|--|---|

図60 SZ27遺構図

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 重複関係からは弥生時代末～古墳時代初めのSZ38より古い、周溝の重複状況から、大きな時期差はないと考えられる。

SZ28 (図61・図62)

検出状況 BN5～B07グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の西部、尾根から南へ下がった傾斜面に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。SZ28の周溝が東部でSZ31と重複する。周溝の検出状況から、SZ28はSZ31よりも新しいと判断した。

方台部 平面は南側の盛土範囲を把握できなかったため明確ではない。東辺、西辺は直線的であり、北辺は湾曲している。北西側のSZ19と重複関係があると思われるため、SZ19のトレンチをSZ28の方台

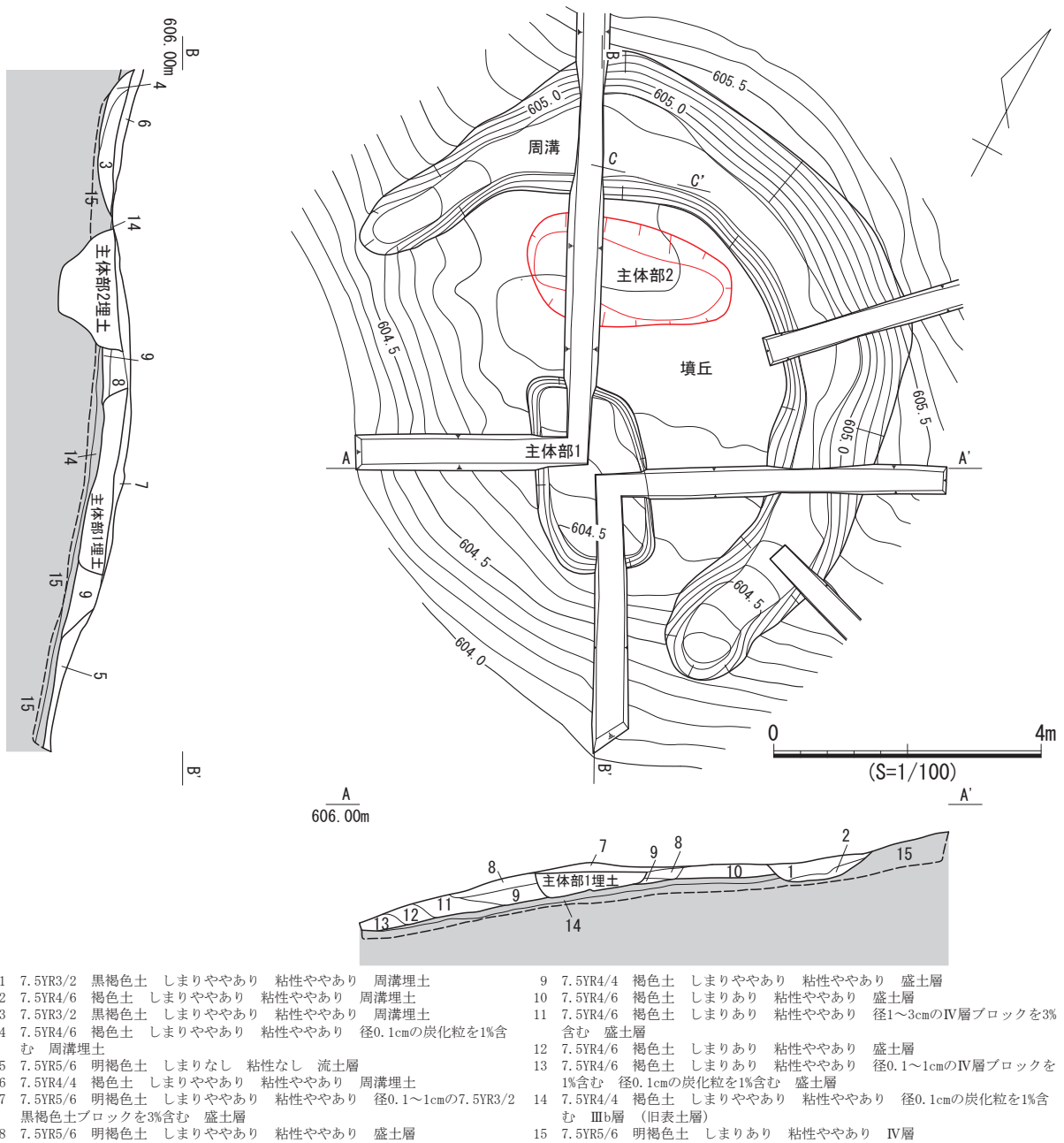
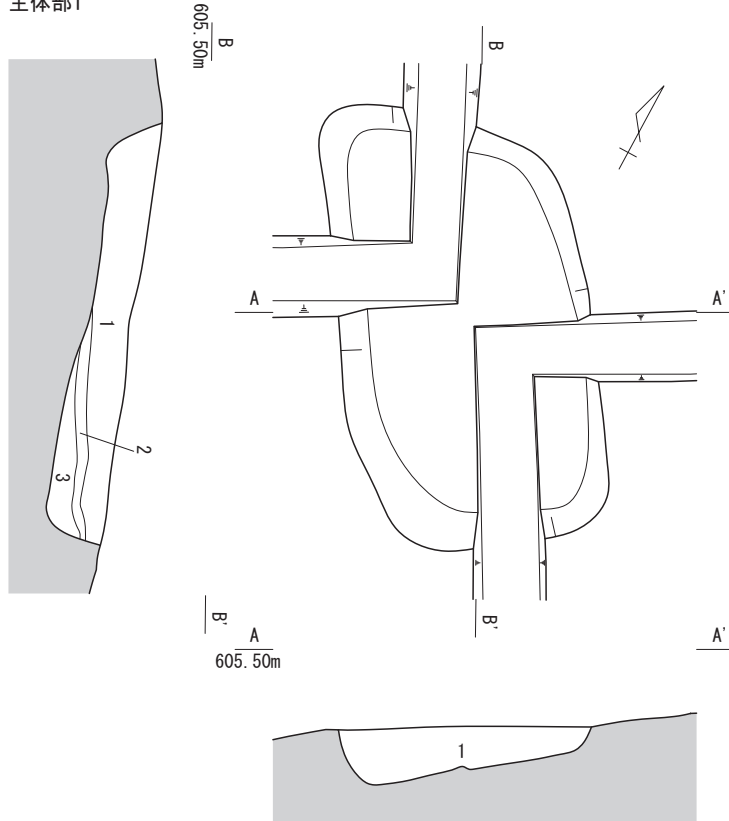


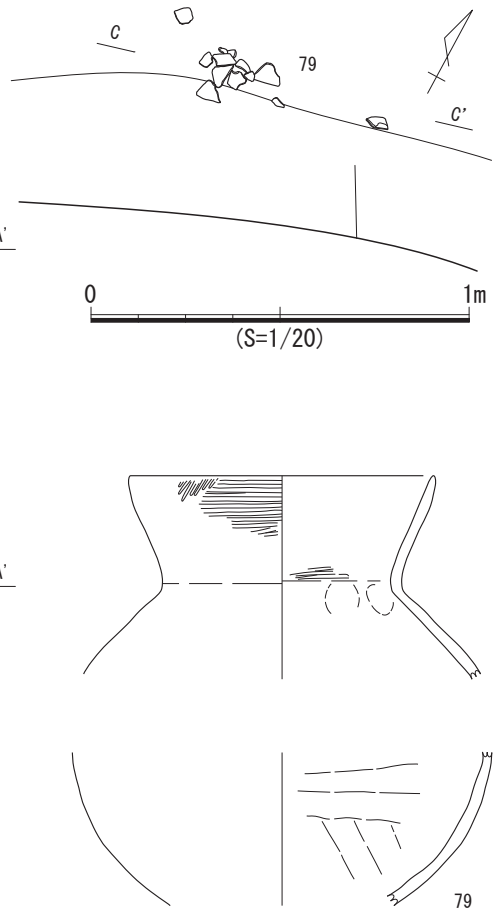
図61 SZ28遺構図 (1)

主体部1

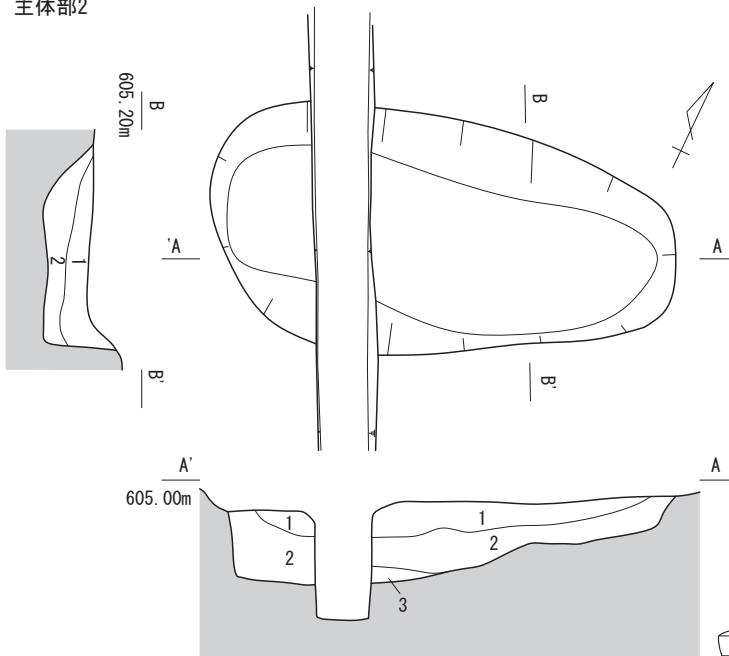


- 1 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 2 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1~0.5cmの炭化粒を1%含む
- 3 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1cm以内のIV層ブロックを3%含む

弥生土器 (79) 出土状況図



主体部2



- 1 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 2 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性ややあり
- 3 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性ややあり

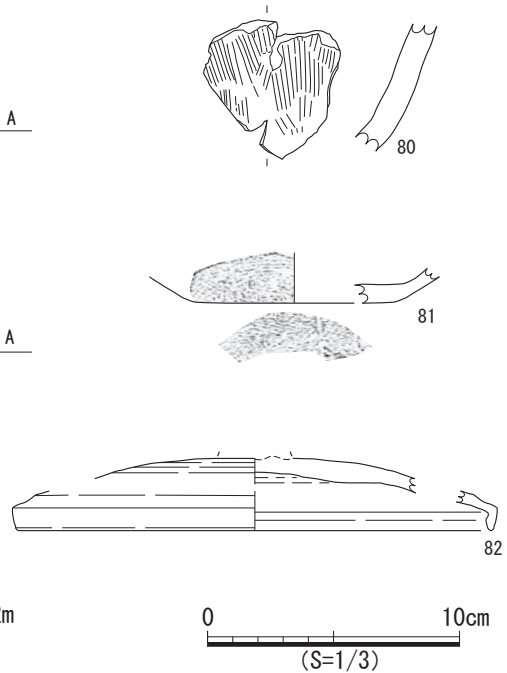


図62 SZ28遺構図(2)、出土遺物

部中央まで伸ばし、それを基準にL字形にトレンチを2箇所設定して掘削した。しかし、結果的にSZ19とSZ28との重複はなかった。墳丘は、まず周溝内側の傾斜が低い南西部に11層～13層を盛土し、その後中央に8層～10層を水平に充填している。これによって、主体部を設置する平坦面を作り出す意図があった可能性がある。盛土の色調は褐色や明褐色で、IV層土に類似する。方台部中央やや南東寄りと北西部で、2基の土坑を検出した。両遺構とも、III b層（14層）上に最初に盛土した後、掘削した後さらに盛土されていることから、SZ28の主体部と考えられる。主体部1は、北西-南東方向に長軸をもち、方台部の長軸から約45°南へ傾く。平面は不整な長方形で、断面は逆台形である。底面が南東方向に向かって低くなる点が主体部2と異なる。最大の深さは、0.36mである。主体部2は東西方向に長軸をもち、主体部1とは逆に31°北へ傾く。平面は不整な長楕円形である。トレンチで確認した断面は逆台形に近いが、平面検出後の掘方断面は不整な形状である。トレンチの断面で盛土上面から掘り込まれていることを把握したが、墳丘盛土下の調査時に平面を確認した。最大の深さは0.53mである。埋土は、主体部1、主体部2いずれも墳丘の盛土と同様のIV層起源のものと考えられ、IV層と類似する褐色土や明褐色土である。

周溝 斜面に設置されたため、傾斜の下方となる南溝は確認できなかった。その他は、方台部を囲むように確認した。北溝と西溝の外周は直線的で、東溝はやや湾曲する。いずれの溝も方台部側の平面に丸みがある。また、断面は半円形に近い。周溝の幅は0.92m～2.24mで、西溝は狭いが、北溝と東溝が広い。深さは0.30m～0.40mで場所による大きな差はない。埋土は主に黒褐色土である。周溝の底面はほぼ平坦で、埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 弥生土器や土師器、須恵器が、墳丘盛土と周溝の埋土から出土した。弥生土器の壺(79)は周溝北西部の墳丘斜面に近い底面付近でまとまって出土した。土師器の甕と考えられる80と81は、墳丘南部の流土と考えられる堆積で出土した。一方、須恵器の蓋(82)は、検出面から0.10m～0.25mの深さから、主体部2付近の断ち割りトレンチ内で出土しており、79とは大きな時期差があるため、82を含む新しい時期の遺構を見落とした可能性が考えられる。その他の遺物は周溝の埋土中から散在して出土しており、特徴は認められなかった。

出土遺物 79は弥生土器の壺である。口縁部は僅かに直線的に開き、頸部は屈曲する。接合しないが、同一個体と考えられる底部付近の破片も出土している。外面にはミガキによる調整痕が残り、特に口縁部外面は顕著に認められる。80と81は土師器の甕と思われる。共に底部付近の破片で、外面に細かいハケ目調整を施す。82は須恵器の蓋である。摘みは剥がれて残存していない。焼成が不良で表面が著しく摩滅する。

時期 79が出土したことや、他の墳墓と一連のものと思われることから、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と思われる。

SZ29 (図63～図65)

検出状況 BM11～BP14グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の中央部の尾根上に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。SZ29の北西部でSZ25とその周溝、南西部でSZ32の周溝、南東部でSZ33の周溝とそれぞれ重複する。トレンチの土層断面と周溝の検出状況から、SZ29はSZ25よりも新しく、SZ33よりも古いと判断した。SZ32については、調査時の所見ではSZ29の方が古いとされていたが、SZ29の方が遺構に伴う出土遺物が古く、重複する部分もわずかであるため、検出時に切り合いを誤認

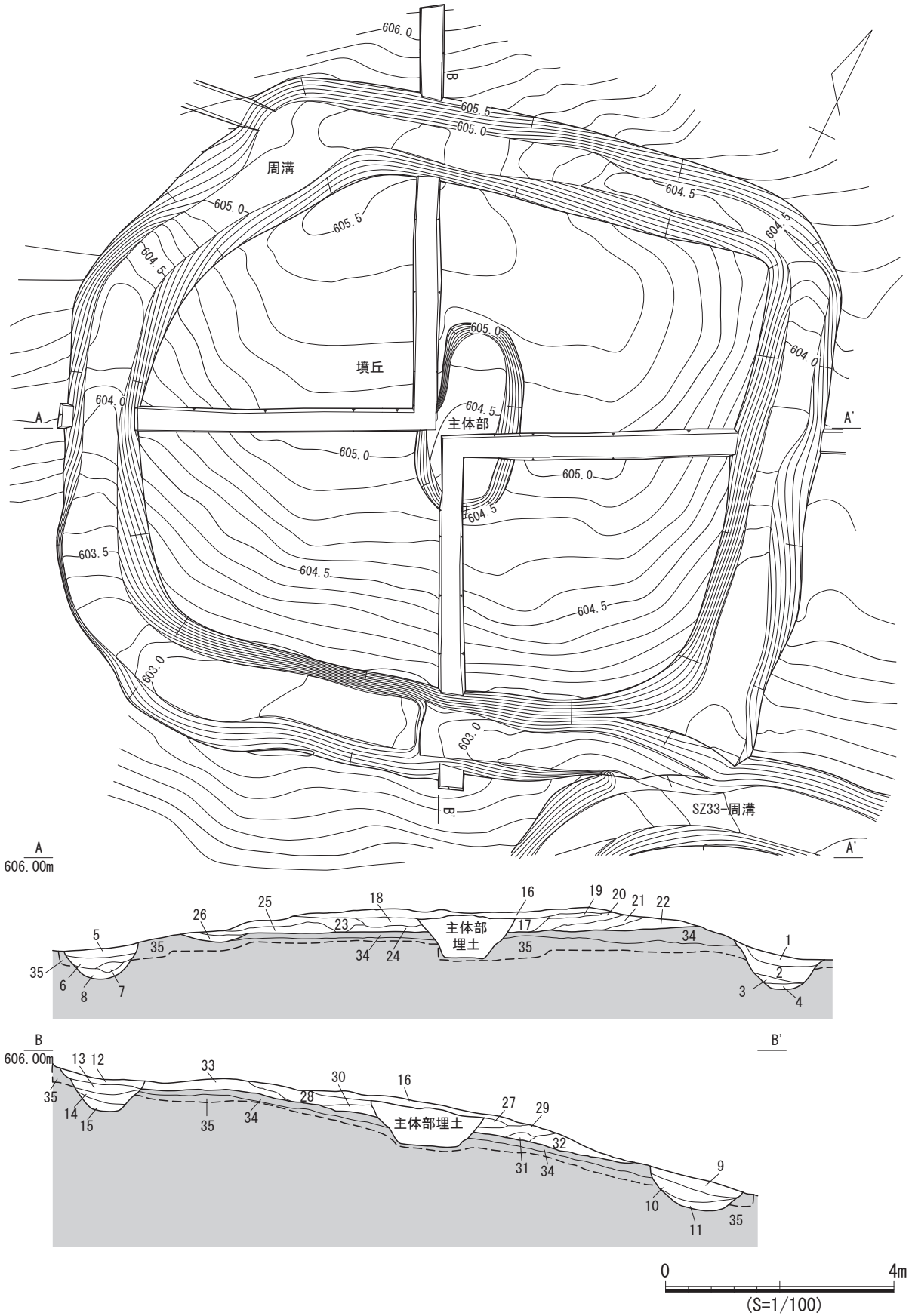


図63 SZ29遺構図(1)

した可能性が高い。したがって、SZ29の方がSZ32より古いと判断した。なお、SZ32はSZ41より古いことから、構築順はSZ25<SZ29<SZ32<SZ41<SZ42である。

方台部 西辺は湾曲するが、北辺と東辺、南辺は直線的であり、平面は不整な長方形である。方台部の方台部には、各辺に直交するようにL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。墳丘は、方台部外側に20層～26層を周堤状に盛土した後、その内側に17層～19層を充填する。各土層にIV層起源のブロックを多く含むことから、墳丘周囲の土を用いて構築していると考えられる。方台部の中央やや東

墳丘土層注記

- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1 10YR5/1 褐灰色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土 2 7.5YR6/3 にぶい褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土 3 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 4 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを15%含む 周溝埋土 5 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 炭化粒を1%含む IV層ブロックを10%含む 周溝埋土 6 2.5YR6/2 灰黄色土 しまりややあり 粘性あり 炭化粒を1%含む 周溝埋土 7 10YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土 8 10YR5/1 褐灰色土 しまりあり 粘性あり IV層ブロックを15%含む 周溝埋土 9 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 径0.5～1.0cmの亜角礫を5%含む 周溝埋土 10 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.5～1.0cmの亜角礫を5%含む IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 11 10YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土 12 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 13 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土 14 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 15 10YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを3%含む 周溝埋土 16 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを3%含む 盛土層 17 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを3%含む 盛土層 | <ol style="list-style-type: none"> 18 10YR6/5 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを3%含む 炭化粒を1%含む 盛土層 19 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 盛土層 20 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 盛土層 21 10YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを15%含む 盛土層 22 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 炭化粒を1%含む 盛土層 23 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 盛土層 24 2.5Y7/3 浅黄色土 しまりややあり 粘性ややあり 盛土層 25 2.5Y6/4 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 盛土層 26 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 盛土層 27 2.5Y5/2 暗灰黄色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.5～1.0cmの亜角礫を1%含む IV層ブロックを10%含む 盛土層 28 10YR6/1 褐灰色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを15%含む 盛土層 29 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 盛土層 30 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを15%含む 盛土層 31 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 径0.5～1.0cmの亜角礫を3%含む 盛土層 32 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 径0.5～1.0cmの亜角礫を1%含む 盛土層 33 10YR5/1 褐灰色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを15%含む 盛土層 34 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IIIb層 (旧表土層) 35 10YR4/1 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層 |
|--|--|

主体部

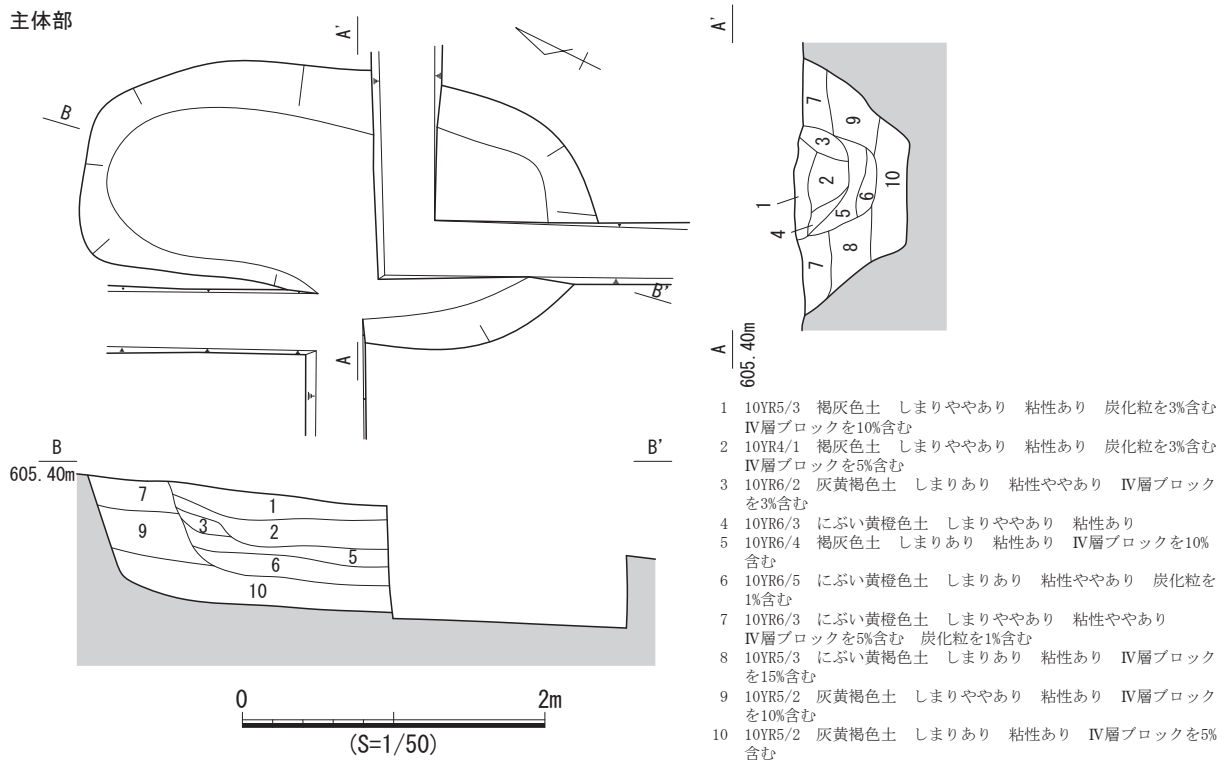


図64 SZ29遺構図(2)

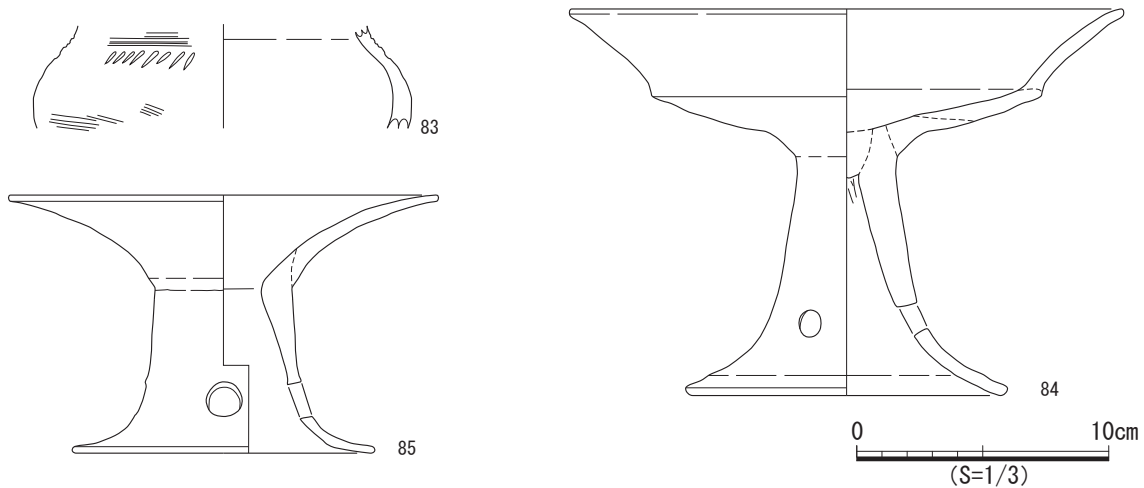


図65 SZ29出土遺物

寄りで、南北方向が長軸となる長楕円形の土坑を検出した。Ⅲ b 層上に盛土した後に掘削された土坑であることから、SZ29の主体部と考えられる。断面は逆台形である。最大の深さは、0.70mである。埋土は墳丘の盛土と同様の起源と考えられ、Ⅳ層と類似する灰黄褐色土やにぶい黄橙色土の他、一部Ⅲ b 層に類似する褐灰色土（1層・2層・5層）も認められる。

周溝 方台部を全周するが、南東部ではSZ33の周溝と重複し、一部が消失している。周溝の北溝と東溝、南溝は直線的であるが、西溝はやや湾曲し、北西と南西の隅は丸みを帯びる。断面は北溝が逆台形に近く、他は半円形に近い。埋土はほぼ水平若しくは中央が窪む堆積で、埋土の下層には褐灰色土が認められる。周溝の幅は1.05m～1.95mで北東隅が特に狭いが、他はほぼ一定である。深さは0.50m～0.60mで、場所による大きな差はない。周溝の底面は比較的平坦であるが、SZ33の周溝との重複部分に性格不明の段が認められる。周溝内に埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 弥生土器が、周溝の主に南溝や西溝の埋土中から出土した。この内、弥生土器の高坏（84）は、脚部の一部が北溝と南溝、坏部が東溝から出土した。また、鉢と思われる83も同一個体と考えられる破片が北溝と南溝に分かれて出土した。一方器台（85）は、南西隅でまとまって出土した。遺物の出土した層位や標高から、周溝底面付近で出土した土器が多い。

出土遺物 83～85は弥生土器である。83はSZ24出土の71と同様な鉢である。内面が二次焼成の影響で荒れている。84は高坏で、坏部の口縁は外反しながら開き、坏底部は広く外面にやや丸みがある。坏部の口縁と底面の境は明瞭な稜となる。坏部と脚部の接合部は若干括れており、脚部は下方に向かって外反しながら広がる。脚部下部に三方向から円形の透孔があげられている。85は器台である。口縁部は外反しながら開き、脚部は接地部のみ大きく外反して開く。坏部と脚部の接合部の括れはほとんど認められない。脚部下部に四方向から円形の透孔があげられている。

時期 84は北陸の法仏式の新しい段階から月影式の古い段階に位置付けられ、85もSZ24出土の74と比較すると時期的に古い特徴をもつため、弥生時代後期後半に位置付けられる。

SZ30（図66・図67）

検出状況 BN20～C02グリッド、Ⅳ層の上面で検出した。D地点の東部、尾根から少し南へ下がった傾斜面に立地する。現況地形測量において墳丘を確認した。SZ21の北部でSZ21の周溝、南部でSZ37の周溝と重複する。トレンチの土層断面と周溝の検出状況から、SZ30はSZ21よりも新しく、SZ37よりも

古いと判断した。なお、SZ21はSZ20より新しいことから、構築順はSZ27<SZ20<SZ21<SZ30<SZ37である。またSZ37から先についても、SZ38やSZ46といった墳墓との重複が連続する。

方台部 北辺は直線的であるが、他の辺は湾曲しており、平面は不整な形状である。南辺はSZ37の周溝によって削られた可能性もある。方台部には、北辺を基準にL字形のトレンチを2箇所設定して掘

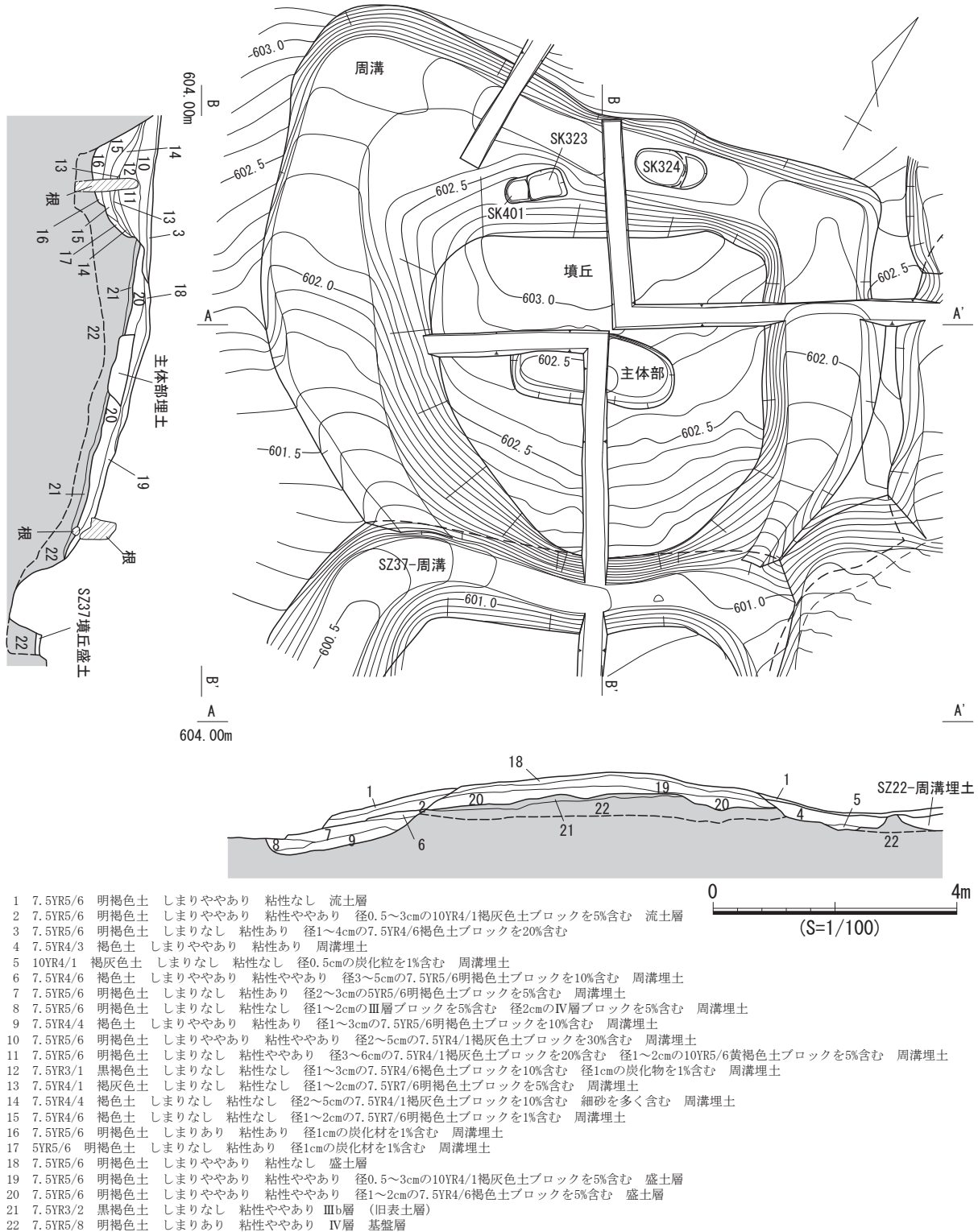


図66 SZ30遺構図(1)

削した。墳丘は、Ⅲb層上（21層）に、まず地表面を水平に整地するような盛土が認められ（20層）、その後水平に18層と19層を積み上げたと思われる。盛土はⅣ層土のブロックを多く含む明褐色土や褐色土であり、墳丘周囲の土を用いて構築していると考えられる。方台部の中央やや北寄りでは、東西方向が長軸となる長楕円形の土坑を検出した。方台部のほぼ中央で検出したためSZ30の主体部としたが、Ⅲb層上面から直接墓坑を掘り込む特徴がある。あるいは、20層による整地後に掘り込んだ可能性もある。断面は逆台形である。本遺構の長軸方位は、方台部の長軸方位とほぼ平行し、最大の深さは0.29mである。埋土は墳丘やⅣ層と類似する褐色土及び明褐色土である。

周溝 南溝はSZ37と重複し不明である。周溝の北溝は直線的であるが、西溝と東溝は南端が湾曲している。断面は、東西溝は半円形に近く、北溝は逆台形である。周溝の幅は0.72m～2.18mで北西隅部から西溝にかけて広く、深さは0.12m～0.52mで東溝に比して北溝が非常に深い。埋土のほとんどがⅣ層起源の褐色土や明褐色土であるが、一部12層のような黒褐色土も認められる。周溝内に埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 重複関係からは弥生時代末～古墳時代初めのSZ38より古いと考えられるが、周溝の重複状況から、大きな時期差はないと考えられる。

SZ31（図68）

検出状況 B07～BP8グリッド、Ⅳ層の上面で検出した。D地点の南西部、尾根からやや南へ下がった傾斜面に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。西部でSZ28と重複する。トレンチの土層断面から、SZ31はSZ28よりも古いと判断した。また、周溝埋没後に構築されたST06より古い。

方台部 全体的に丸みを帯びた不整な円形であるが、南部は盛土範囲を把握できなかったため形状は不明である。方台部には、墳丘の形状を基準にL字形にトレンチを2箇所設定して掘削した。盛土は、Ⅳ層（3層）上にⅣ層と類似する褐色土を積み上げている。方台部の北西寄りで東西方向に長軸をもつ隅丸長方形の土坑1基を検出した。方台部のほぼ中央で検出したためSZ31の主体部としたが、盛土

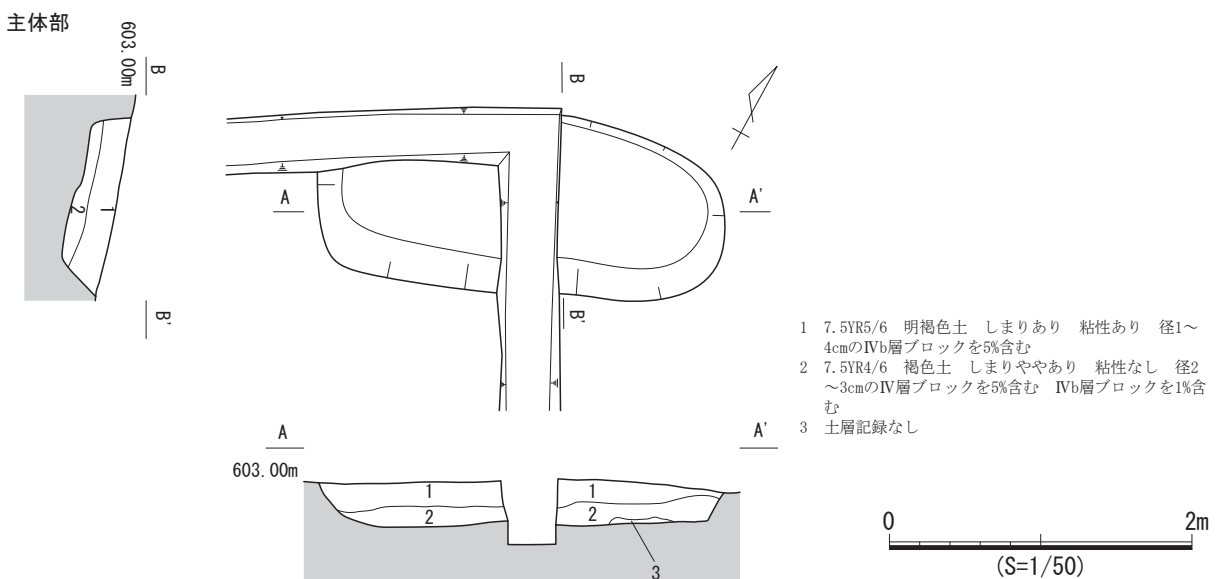


図67 SZ30遺構図（2）

前に直接IV層を掘削して設置されている。主体部の断面は逆台形である。本遺構の長軸方位は、方台部の長軸方位とほぼ平行し、最大の深さは0.25mである。埋土は暗褐色土である。

周溝 斜面に設置されたため、傾斜の下方となる南溝は確認できなかった。方台部北側を半周するように設置されている。断面は浅い窪み状である。周溝の幅は0.76m~1.28mでSZ25と東溝の南端が狭い。最大の深さは0.12mで、埋土は暗褐色土である。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確

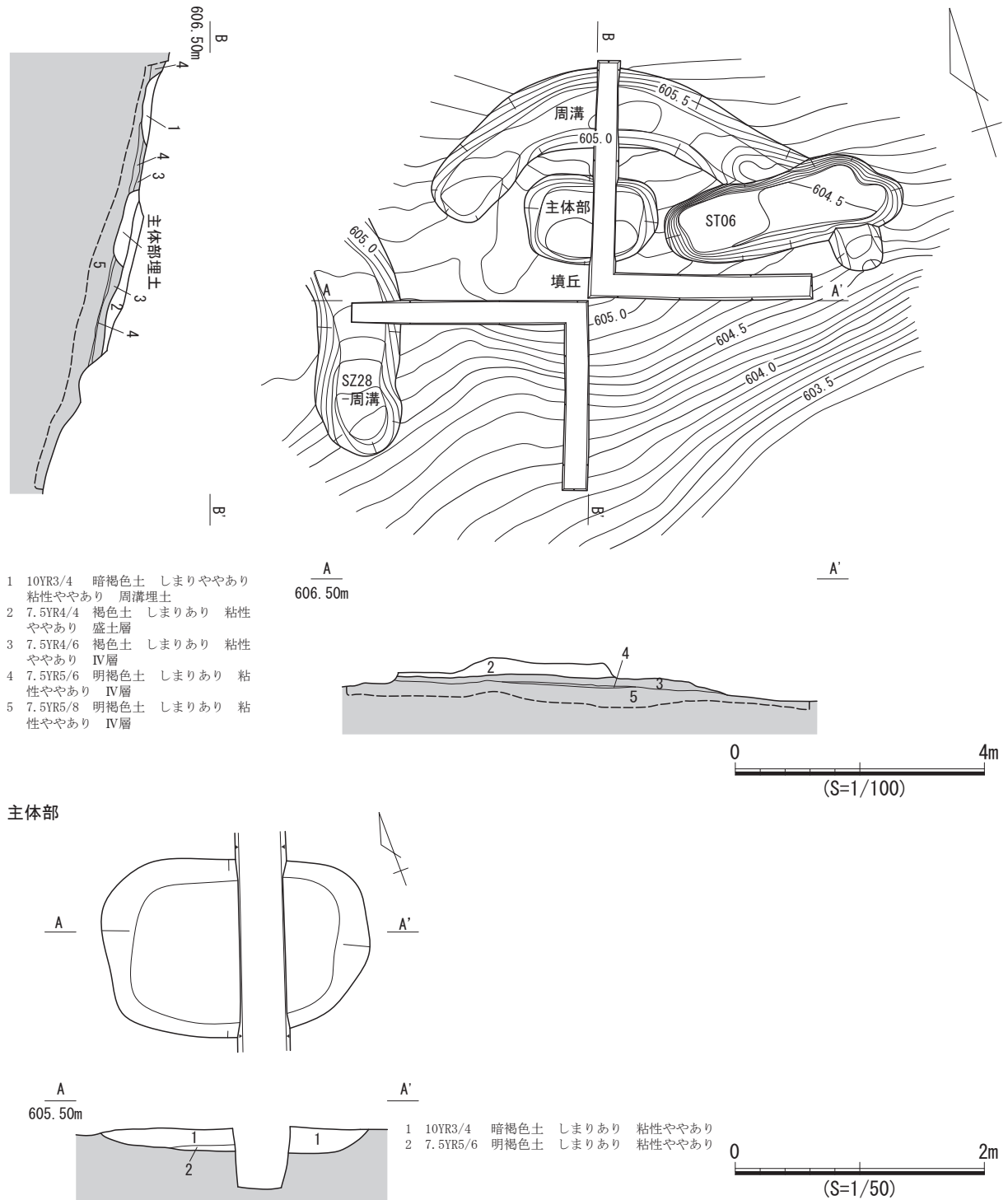


図68 SZ31遺構図

認できなかった。

遺物出土状況 弥生土器や石器が、墳丘上面の流土内や周溝埋土から散在して出土した。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

時期 時期が明確な出土遺物がなく、ST06も時期不明の遺構であることから、詳細な時期は不明である。ただし、他の墳墓と一連のものと思われることから、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と考えられる。

SZ32 (図69～図72)

検出状況 B010～BQ12グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の中央部のやや西寄り、尾根から南へ下がった傾斜面に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。SZ32の北東部でSZ29の周溝、西部でSZ41の周溝と重複する。土層断面と周溝の検出状況から、SZ32はSZ41よりも古いと判断した。SZ29については、調査時の所見ではSZ32の方が古いとされていたが、SZ29の方が遺構に伴う出土遺物が古く、SZ32とSZ29との重複部分がわずかであるため、検出時に重複関係を誤認した可能性が高い。また、SZ29はSZ25より新しく、SZ41はSZ42より古いことから、構築順はSZ25<SZ29<SZ32<SZ41<SZ42である。

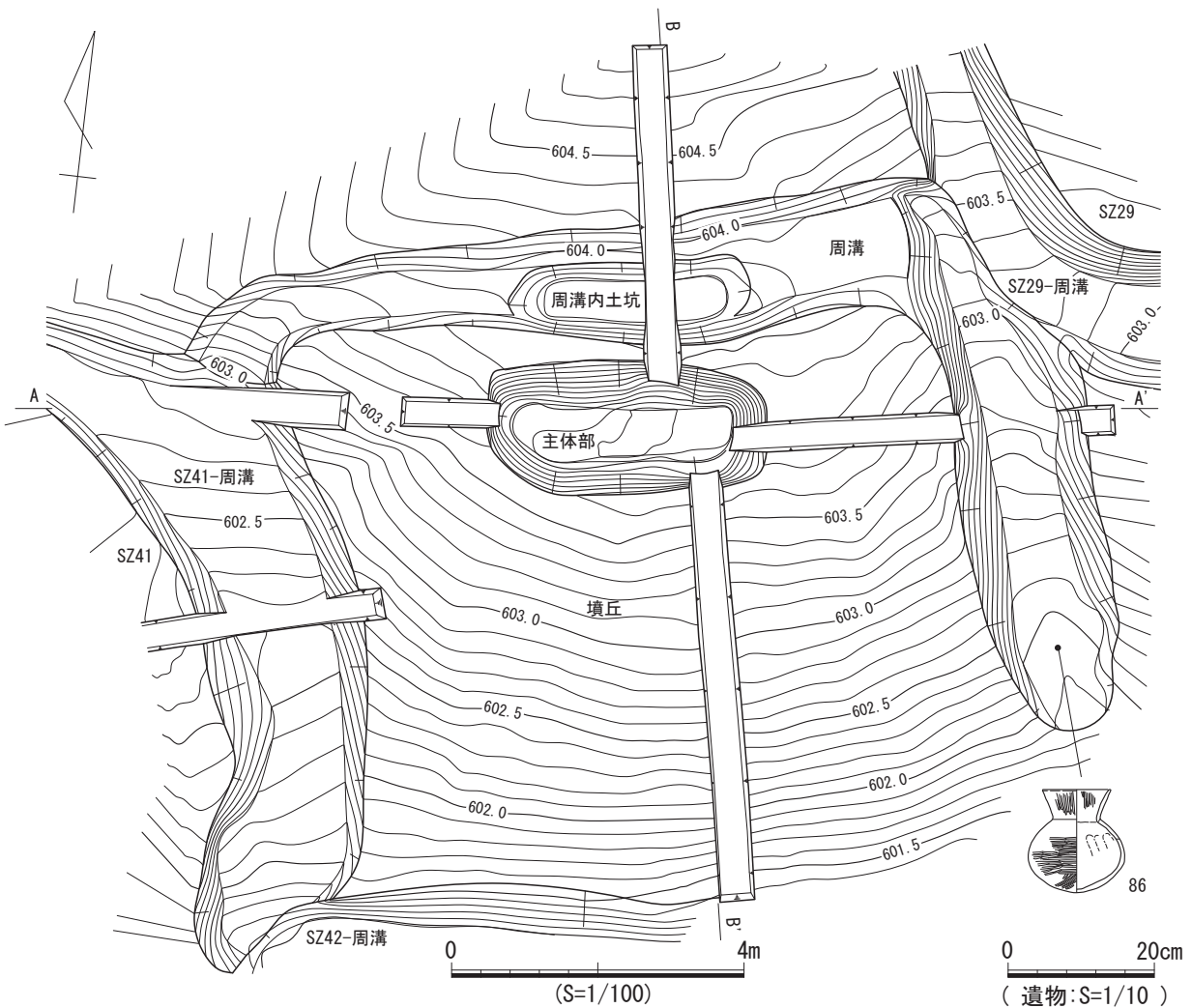
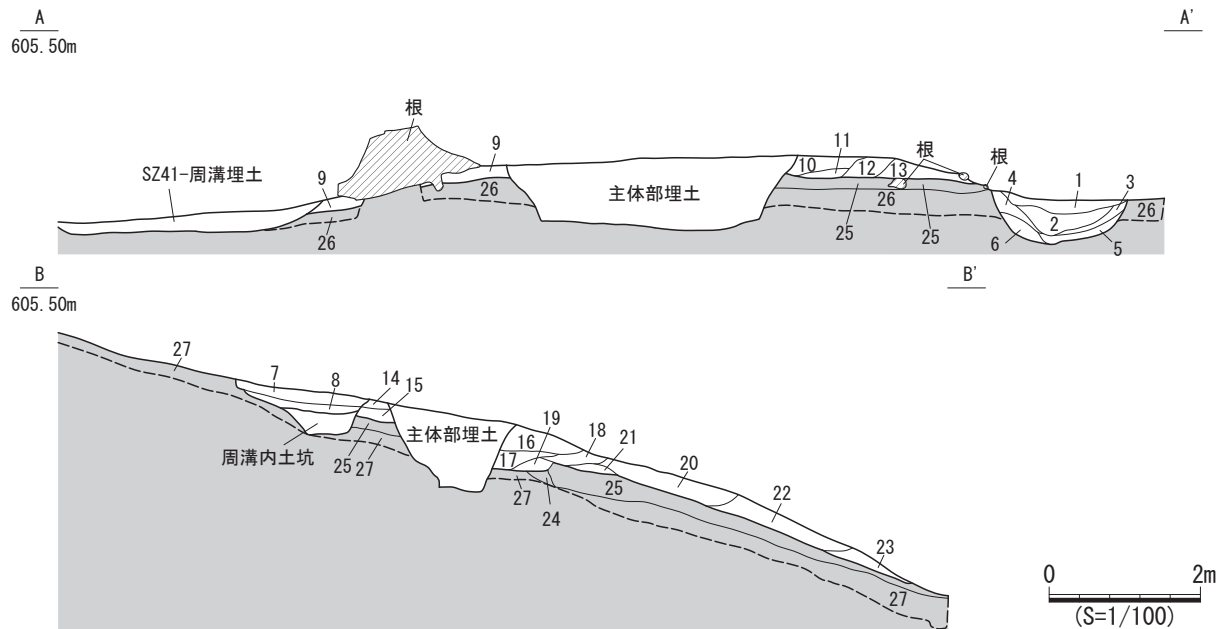


図69 SZ32遺構図(1)

方台部 残存する北辺と東辺はいずれも直線的である。南辺は盛土範囲を把握できなかったため明確でないが、平面は他の辺や墳丘の等高線から隅丸方形と考えられる。方台部には、各辺に直交するようにL字形にトレンチを2箇所設定して掘削した。墳丘は、方台部周縁の東部に12層、斜面下方に20層～23層を盛土し、その後内側を充填する。これによって、主体部を設置する平坦面を作り出す意図があったと思われる。盛土の色調は、褐灰色や灰黄褐色、にぶい黄褐色が多く、Ⅲb層（25層）やⅣ層（26層・27層）に近い。方台部中央北寄り、東西に長軸をもつ長楕円形の土坑1基を検出した。Ⅲb層（25層）上に盛土した後、掘削された土坑であることから、SZ32の主体部と考えられる。主体部の断面は逆台形である。本遺構の長軸は、方台部の長軸とほぼ平行で、最大の深さは0.95mである。埋土は墳丘の盛土とほぼ同様である。

周溝 西部でSZ41の周溝と重複するため、西溝は消失している。また、斜面に設置されたため、傾斜の下方となる南溝は確認できなかった。北溝と東溝はほぼ直交し、断面はいずれも半円形に近い。周溝の幅は0.85m～1.85mで、北溝西部が狭い。深さは0.35m～0.60mで、西溝が一段深くなっている。

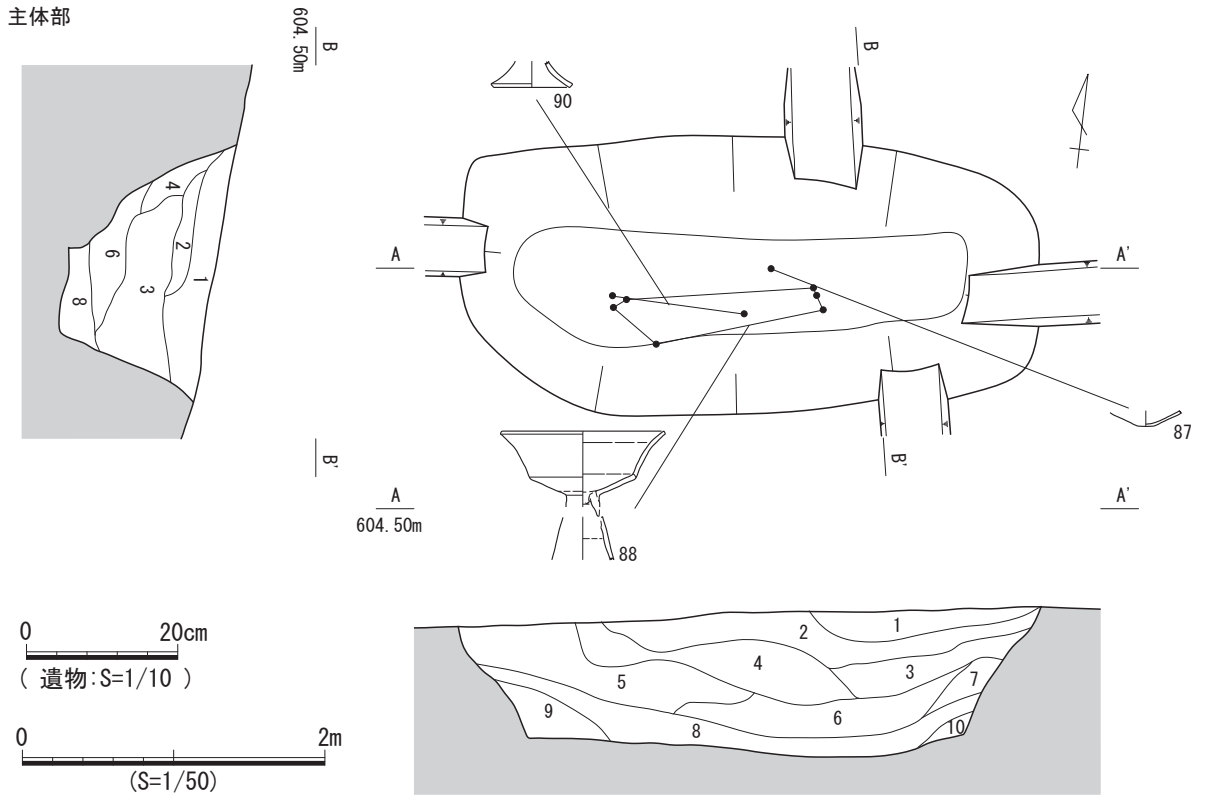


- | | |
|--|---|
| 1 10YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 径1cmのⅣ層ブロックを10%含む 周溝埋土 | 15 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 径1cmの亜角礫を5%含む |
| 2 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 径2～3cmのⅣ層ブロックを5%含む 周溝埋土 | 16 2.5YR6/4 にぶい黄色土 しまりあり 粘性ややあり 径1cmの亜角礫を10%含む 盛土層 |
| 3 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 17 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径1cmのⅣ層ブロックを5%含む 径0.5～1cmの亜角礫を10%含む 盛土層 |
| 4 10YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土 | 18 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1cmの亜角礫を5%含む 盛土層 |
| 5 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 径1～2cmのⅣ層ブロックを3%含む 周溝埋土 | 19 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1～2cmのⅣ層ブロックを10%含む 径1cmの亜角礫を5%含む 盛土層 |
| 6 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1～2cmの亜角礫を5%含む 周溝埋土 | 20 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり Ⅳ層ブロックを5%含む 盛土層 |
| 7 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1～2cmのⅣ層ブロックを5%含む 周溝埋土 | 21 10YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり Ⅳ層ブロックを15%含む 盛土層 |
| 8 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1cmのⅣ層ブロックを10%含む 周溝埋土 | 22 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径1～2cmのⅣ層ブロックを5%含む 径1cmの亜角礫を5%含む 盛土層 |
| 9 土層記録なし | 23 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1cmの亜角礫を5%含む 盛土層 |
| 10 7.5YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性なし Ⅳ層ブロックを10%含む 盛土層 | 24 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 径2～5cmのⅣ層ブロックを10%含む 径1cmの亜角礫を5%含む 植物痕か |
| 11 7.5YR5/2 灰褐色土 しまりあり 粘性ややあり Ⅳ層ブロックを15%含む 盛土層 | 25 10YR4/1 褐灰色土 しまりなし 粘性あり Ⅲb層（旧表土層） |
| 12 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 径1～2cmの亜角礫を5%含む 盛土層 | 26 10YR6/6 明黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり Ⅳ層 |
| 13 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり Ⅳ層ブロックを5%含む 盛土層 | 27 7.5YR5/3 にぶい褐色土 しまりあり 粘性なし 径3～4cmの亜角礫を15%含む Ⅳ層 |
| 14 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径1cmのⅣ層ブロックを5%含む 盛土層 | |

図70 SZ32遺構図（2）

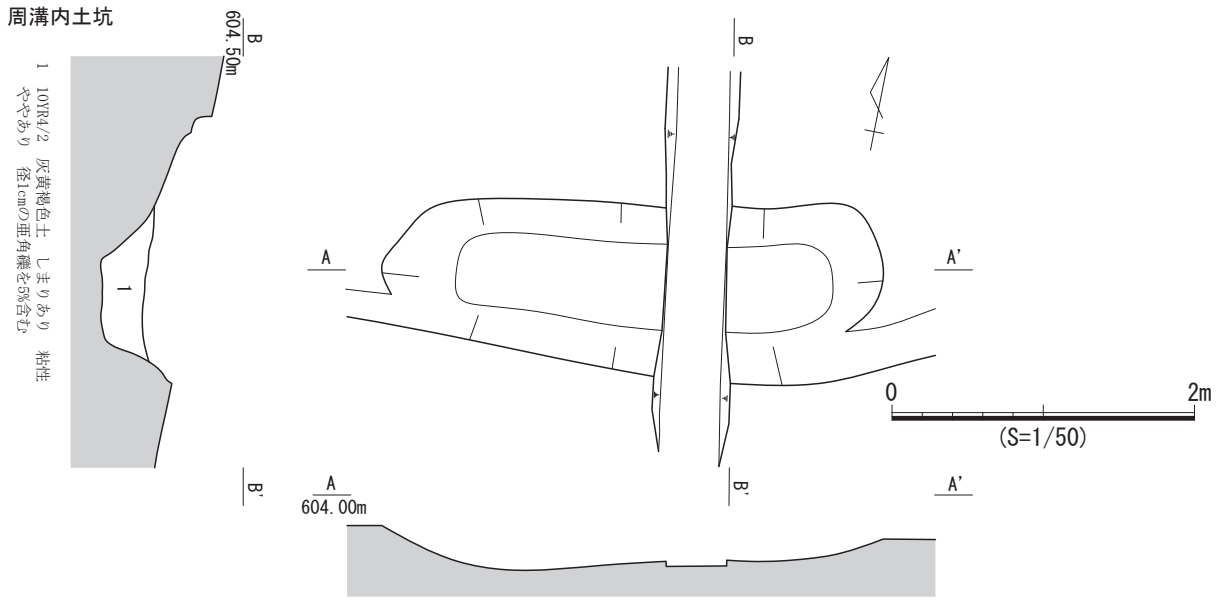
埋土は墳丘やⅢb層から流出したと考えられる堆積が混在している。北溝掘削後、中央部の底面で土坑1基を検出した。周溝の幅におさまる規模であり、北溝と長軸方位が揃うことから、周溝内土坑と

主体部



- | | |
|---|---|
| 1 10YR6/4 にぶい黄橙色土 しまりあり 粘性ややあり 径1~2cmのIV層ブロックを10%含む | 6 7.5YR5/1 褐灰色土 しまりあり 粘性ややあり 径1~2cmのIV層ブロックを10%含む 径1cmの亜角礫を3%含む |
| 2 10YR6/3 にぶい黄橙色土 しまりややあり 粘性ややあり 径2~4cmの2.5Y7/4浅黄色土ブロックを10%含む | 7 10YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 径1~2cmのIV層ブロックを5%含む |
| 3 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 径1~2cmのIV層ブロックを10%含む | 8 10YR4/1 褐灰色土 しまりなし 粘性あり |
| 4 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 径1~3cmのIV層ブロックを5%含む | 9 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを15%含む |
| 5 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1cmの亜角礫を5%含む | 10 10YR6/4 にぶい黄橙色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む |

周溝内土坑



- 1 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径1cmの亜角礫を5%含む

図71 SZ32遺構図(3)

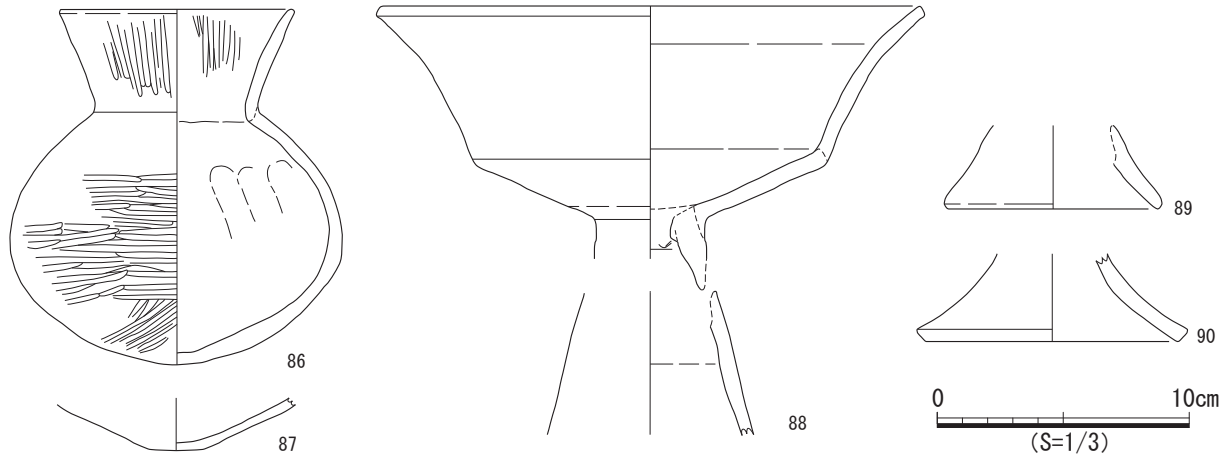


図72 SZ32出土遺物

した。北溝が埋没する前に掘り込まれており、平面は長軸3.40m、短軸1.20mの長楕円形で、断面は逆台形である。

遺物出土状況 弥生土器が、主体部と周溝の埋土から出土した。大半が、以下に述べる土器群の同一個体と考えられる。この内、弥生土器の壺（86）は、東溝南端付近の埋土上面から0.20～0.25m下でまとまって出土した。出土した標高値が602.17mであり、底面から若干浮いた状態と考えられる。また、高坏（88～90）は主体部から出土したが、いずれも散在した状態である。出土層位は3層や4層より上であることから、祭祀で使用した土器を破砕し、主体部を埋め戻す最終段階で散布した可能性がある。この他、弥生土器の破片が周溝の埋土中から散在して出土した。

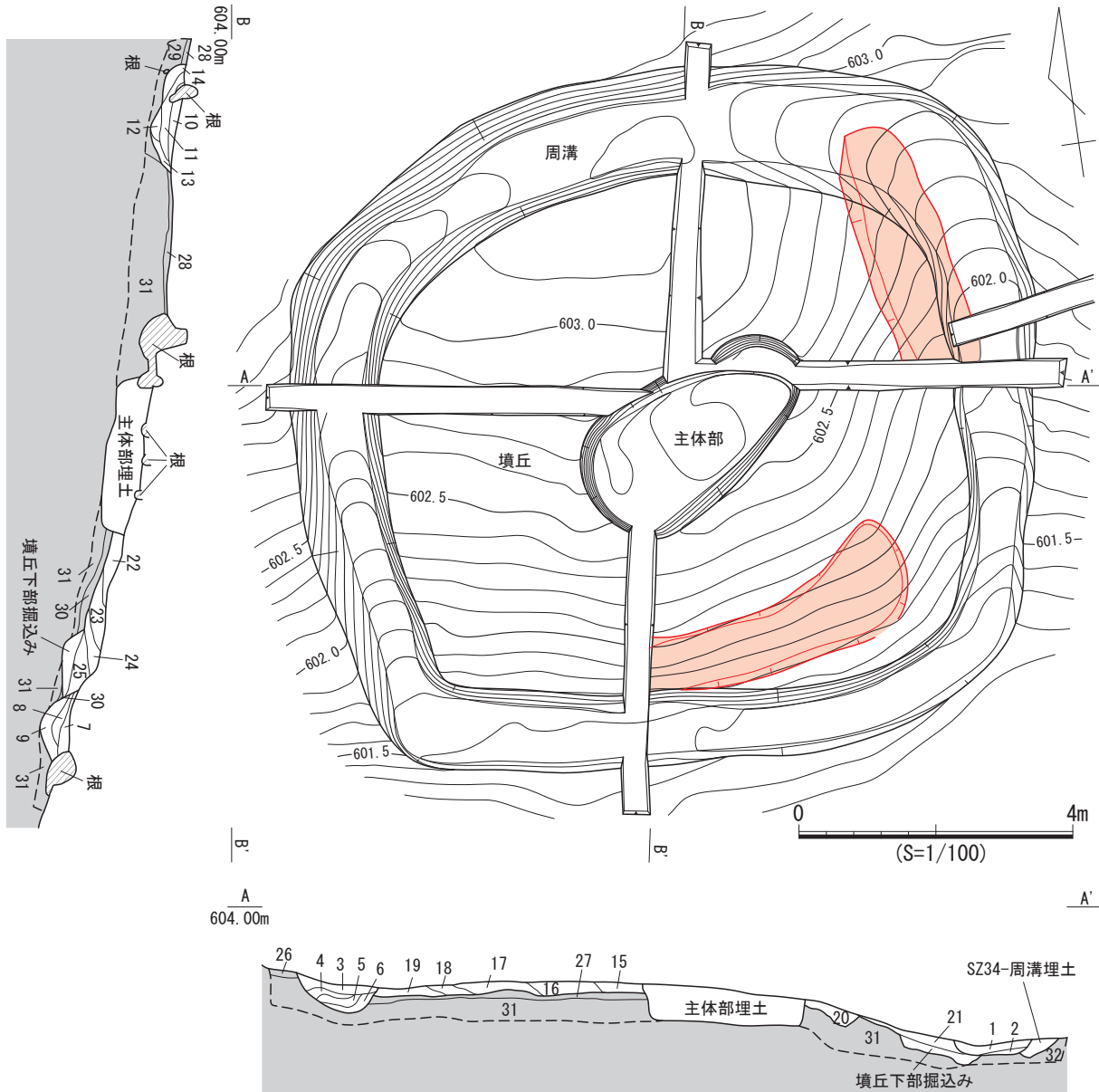
出土遺物 86～90は弥生土器である。86は壺で、口縁は直線的に開き、体部下半に最大径がある。底面は狭小な平底で、口縁部内外面は縦位、体部には横位のミガキ調整を施す。87は壺の底部と考えられる。86と同様の狭小な平底が認められる。88は高坏である。坏部は外反しながら大きく開く。89・90は高坏若しくは器台の脚部である。

時期 88は北陸地方の月影式～白江式に比定できることから、弥生時代末から古墳時代初めに位置付けられる。

SZ33（図73・図74）

検出状況 B013～BQ16グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の中央部、尾根からわずかに南へ下がった傾斜面に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。SZ33の北西部でSZ29の周溝、東部でSZ34の周溝と重複する。土層断面と検出状況から、SZ33はSZ29とSZ34よりも新しいと判断した。

方台部 平面は、北辺のみやや丸みがある不整な方形である。方台部には、各辺に直交するようにL字形にトレンチを2箇所設定して掘削した。墳丘は、方台部の西部と南部から順に盛土している。盛土の色調は褐色や明褐色であり、IV層に類似する。方台部中央で、北東－南西に長軸をもつ長楕円形の土坑1基を検出した。Ⅲb層（30層）上に盛土した後に掘削された土坑であることから、SZ33の主体部と考えられる。断面は長方形に近く、最大の深さは0.80mである。埋土は墳丘の盛土と同様のIV層起源と考えられ、色調が類似する褐色土や明褐色土である。なお、墳丘下部の調査を実施した際、SZ33とは若干長軸方位が直行する2基の掘り込みを確認した（図73赤塗の範囲）。SZ33とは軸が異なるが、SZ34とは類似する。SZ33構築段階の掘削の痕跡であろうか。



- | | |
|--|--|
| <p>1 7.5YR4/4 褐色土 ややしまる 粘性あり 径1~3cmの7.5YR3/2黒褐色土ブロックを10%含む 径0.5cmの炭化材1%含む 周溝埋土</p> <p>2 7.5YR3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性あり 径0.5~2cmのIV層ブロックを10%含む 径0.5cmの角礫1%含む 周溝埋土</p> <p>3 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性あり 径3cmの7.5YR3/1黒褐色土ブロックを1%含む 径0.5~1cmの炭化材1%含む 周溝埋土</p> <p>4 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性あり 径1~2cmのIV層ブロックを20%含む 径0.5cmの炭化材1%含む 周溝埋土</p> <p>5 7.5YR3/1 黒褐色土 しまりなし 粘性あり 径1~2cmのIV層ブロックを1%含む 径0.5~1cmの炭化材1%含む 径3cmの角礫5%含む 周溝埋土</p> <p>6 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性あり 径0.5~1cmのIV層ブロックを10%含む 径0.5cmの炭化材1%含む 周溝埋土</p> <p>7 7.5YR4/3 褐色土 しまりなし 粘性ややあり 周溝埋土</p> <p>8 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性あり 径1cmの角礫1%含む 周溝埋土</p> <p>9 5YR5/6 明赤褐色土 しまりややあり 粘性あり 径1~2cmのIV層ブロックを5%含む 周溝埋土</p> <p>10 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 径0.1~0.2cmの炭化材1%含む 周溝埋土</p> <p>11 7.5YR4/2 灰褐色土 しまりあり 粘性あり 径1~3cmのIV層ブロックを20%含む 径0.5cmの炭化材1%含む 周溝埋土</p> <p>12 7.5YR2/2 黒褐色土 しまりあり 粘性あり 径0.1~2cmのIV層ブロックを5%含む 径1~3cmの7.5YR4/2灰褐色土ブロック10%含む 周溝埋土</p> <p>13 7.5YR4/2 灰褐色土 しまりあり 粘性あり 径0.5~3cmのIV層ブロックを10%含む 周溝埋土</p> <p>14 7.5YR4/3 褐色土 しまりあり 粘性あり 径1~2cmの7.5YR5/8明褐色土ブ</p> | <p>ロック5%含む 周溝埋土</p> <p>15 7.5YR5/8 明褐色土 しまりあり 粘性あり 盛土層</p> <p>16 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 径1cmのIV層ブロック5%含む 盛土層</p> <p>17 7.5YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性あり 盛土層</p> <p>18 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 径0.1~1cmの炭化材1%含む 盛土層</p> <p>19 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり 径0.5cmの角礫1%含む 盛土層</p> <p>20 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり 盛土層</p> <p>21 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 盛土層</p> <p>22 7.5YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性あり 径1~2cmのIV層ブロックを10%含む 盛土層</p> <p>23 7.5YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性あり 径1cmのIV層ブロックを5%含む 盛土層</p> <p>24 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 径1~4cmのIV層ブロックを20%含む 盛土層</p> <p>25 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 径1cmのIV層ブロックを1%含む 盛土層</p> <p>26 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性なし IV層</p> <p>27 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり IV層</p> <p>28 7.5YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層</p> <p>29 5YR5/8 明赤褐色土 しまりあり 粘性あり 径0.5cmの角礫1%含む IV層</p> <p>30 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりあり 粘性あり IIIb層 (旧表土層)</p> <p>31 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり IV層</p> <p>32 5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり 径0.1~3cmの角礫20%含む IV層</p> |
|--|--|

図73 SZ33遺構図(1)

周溝 方台部を全周している。周溝はいずれも直線的であるが、北溝のみ湾曲する。断面はいずれも半円形に近い。埋土の大半はIV層起源の墳丘から流出した堆積と考えられるが、一部III b層起源の黒褐色土も認められる。周溝の幅は0.84m～1.84mであり、北溝の幅が広く、その他の溝の幅がやや狭い。深さは0.20m～0.44mであり、西溝が最も浅い。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

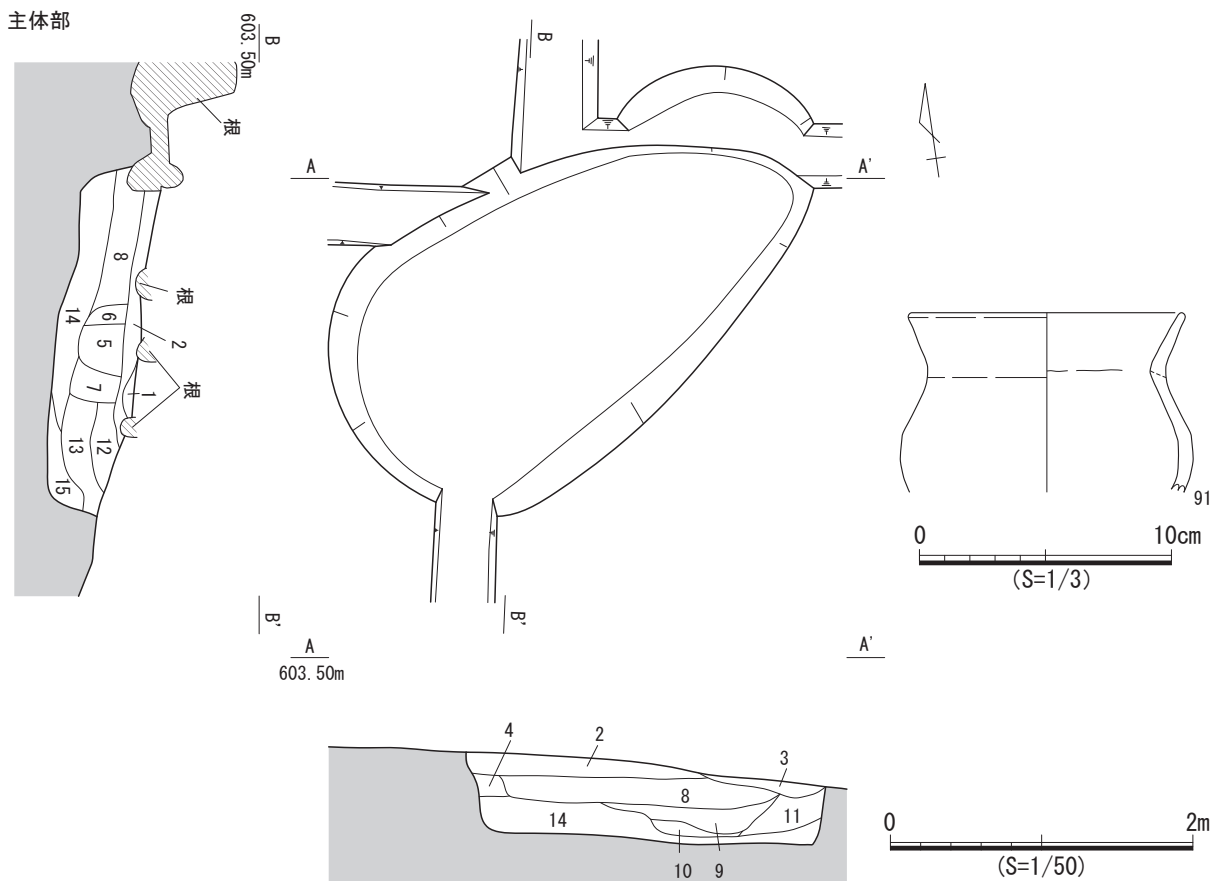
遺物出土状況 土師器の甕(91)が1点、周溝北西部の底面付近で出土した。

出土遺物 91は土師器の甕で、口縁部が直線的に開き、体部に丸味がある。外面は摩滅により調整不明である。

時期 重複関係から弥生時代後期後半のSZ29より新しく、細片ではあるが91が時期的に新しい可能性があるため、古墳時代前期まで時期が降る可能性がある。

SZ34 (図75・図76)

検出状況 B016～BP17グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の中央部、尾根から南へわずかに下

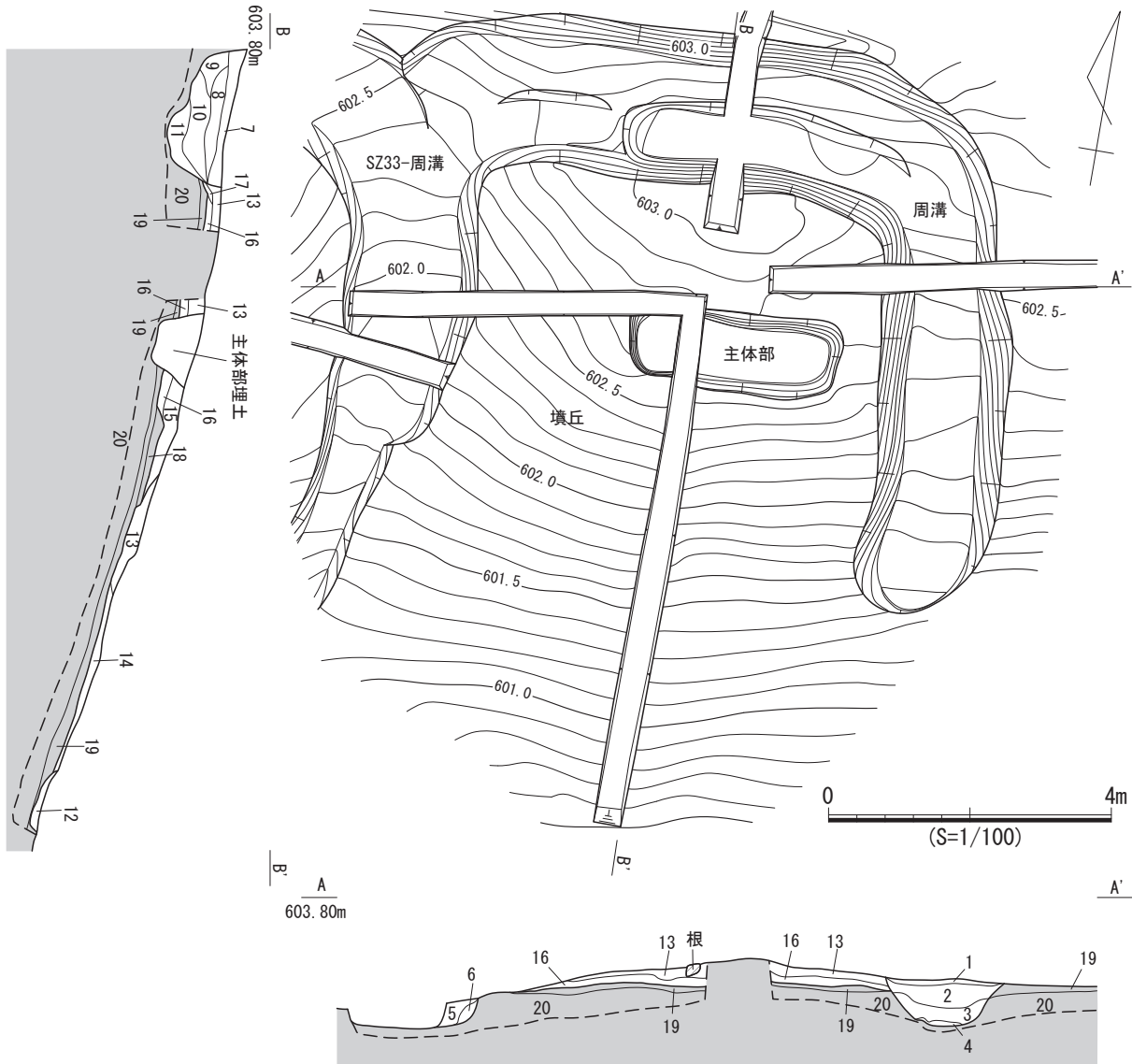


- | | |
|---|---|
| 1 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性なし | 10 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり 径1cmの5YR5/6明褐色土ブロックを5%含む |
| 2 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり | 11 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり |
| 3 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性なし | 12 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり 径1cmのIV層ブロックを1%含む |
| 4 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり | 13 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり |
| 5 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり | 14 7.5YR5/8 明褐色土 しまりあり 粘性あり 径1～2cmの5YR5/6明褐色土ブロック1%含む |
| 6 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 径0.5～1cmのIV層ブロックを1%含む | 15 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性なし |
| 7 7.5YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性あり | |
| 8 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり 径1～4cmの2.5YR5/6明褐色土ブロック10%含む | |
| 9 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり 径2～4cmの2.5YR5/6明褐色土 | |

図74 SZ33遺構図(2)、出土遺物

がった傾斜面に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。SZ34の西部でSZ33の周溝と重複する。土層断面から、SZ34はSZ33よりも古いと判断した。

方台部 北辺及び東西辺は直線的である。南辺は盛土範囲を把握できなかったため明確でないが、14層の堆積範囲から、平面形は南に長い長方形と考えられる。ただし、東西の周溝の南端よりも南へ広がるため、墳丘の流土を誤認した可能性もある。方台部には、各辺に直交するようにL字形にトレン



- | | |
|--|---|
| <p>1 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし 径0.5cmの角礫1%含む 周溝埋土</p> <p>2 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性あり 径0.5~3cmのIV層ブロックを5%含む 周溝埋土</p> <p>3 7.5YR4/2 灰褐色土 しまりややあり 粘性あり 径0.5~5cmのIV層ブロックを20%含む 周溝埋土</p> <p>4 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性あり 径5cmの5YR5/6赤褐色土ブロックを1%含む 周溝埋土</p> <p>5 7.5YR4/3 褐色土 しまりあり 粘性あり 周溝埋土</p> <p>6 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 周溝埋土</p> <p>7 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.1~1cmの角礫5%含む 周溝埋土</p> <p>8 7.5YR4/3 褐色土 しまりあり 粘性あり 径0.5~2cmの2.5YR5/8明赤褐色土ブロック1%含む 周溝埋土</p> <p>9 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性あり 径1~2cmの2.5YR5/8明赤褐色土ブロック1%含む 周溝埋土</p> <p>10 7.5YR4/3 褐色土 しまりなし 粘性あり 径1~6cmの2.5YR5/8明赤褐色土</p> | <p>ブロック5%含む 径1~3cmのIV層ブロック1%含む 周溝埋土</p> <p>11 7.5YR4/6 褐色土 しまりなし 粘性あり 径1~3cmの2.5YR5/8明赤褐色土ブロック1%含む 周溝埋土</p> <p>12 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし</p> <p>13 7.5YR5/8 明褐色土 しまりあり 粘性なし 径0.1~0.5cmの角礫1%含む 盛土層</p> <p>14 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし 径1~5cmの7.5YR5/8明褐色土ブロック10%含む 径0.1~1cmの角礫1%含む 盛土層</p> <p>15 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし 径2~4cmの7.5YR6/8橙色土ブロック10%含む 径0.1~13cmの角礫1%含む 盛土層</p> <p>16 7.5YR4/3 明褐色土 しまりあり 粘性なし 径1~3cmのIV層ブロックを5%含む 盛土層</p> <p>17 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり 径2cmの2.5YR5/8明赤褐色土ブロック5%含む 盛土層</p> <p>18 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり</p> <p>19 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層</p> <p>20 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり IV層</p> |
|--|---|

図75 SZ34遺構図(1)

チを2箇所設定して掘削した。盛土は、Ⅲb層の漸移層と考えられる19層上にⅣ層に類似する褐色土や明褐色土を水平に積み上げているが、方台部南部の12層～14層についてはこの構築過程から考えて流土の可能性がある。方台部北東部で東西方向に長軸をもつ隅丸長方形の土坑を検出した。盛土した後に掘削された土坑であることから、SZ34の主体部と考えられる。主体部の断面は東西方向が長方形、南北方向が逆台形である。最大の深さは0.50mである。埋土は墳丘の盛土と同様のⅣ層起源のものと考えられ、色調が類似する褐色土や明褐色土である。

周溝 SZ33の周溝と重複するため、西溝の大半は消失している。また、斜面に設置されたため、傾斜の下方となる南溝は確認できなかった。検出した北溝と東西溝は直行して接続するが、接合部にはやや丸味がある。北溝は11層部分が2段に掘り込まれるが、断面は全体的に逆台形に近い。周溝の幅は1.60m～2.20mで、北溝より東溝が狭い。深さは0.64m～0.80mで、北溝の2段の掘り込みを除けば、大きな差はない。埋土は、3層と4層のみⅢb層起源と思われる灰褐色土や黒褐色土が認められるが、その他は墳丘から流出した堆積と考えられる。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 弥生土器が1点、周溝北東角の底面付近で出土した。

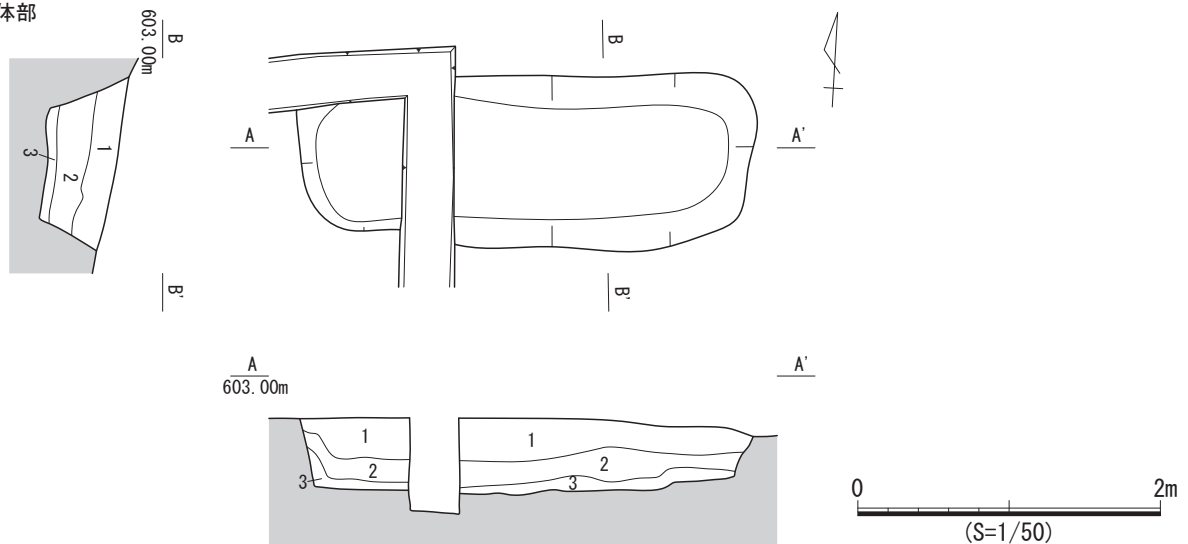
出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

時期 重複関係がSZ33より古いですが、SZ33の構築当初の周溝と長軸方位がほぼ同じであるため、同時期の可能性がある。

SZ35 (図77・図78)

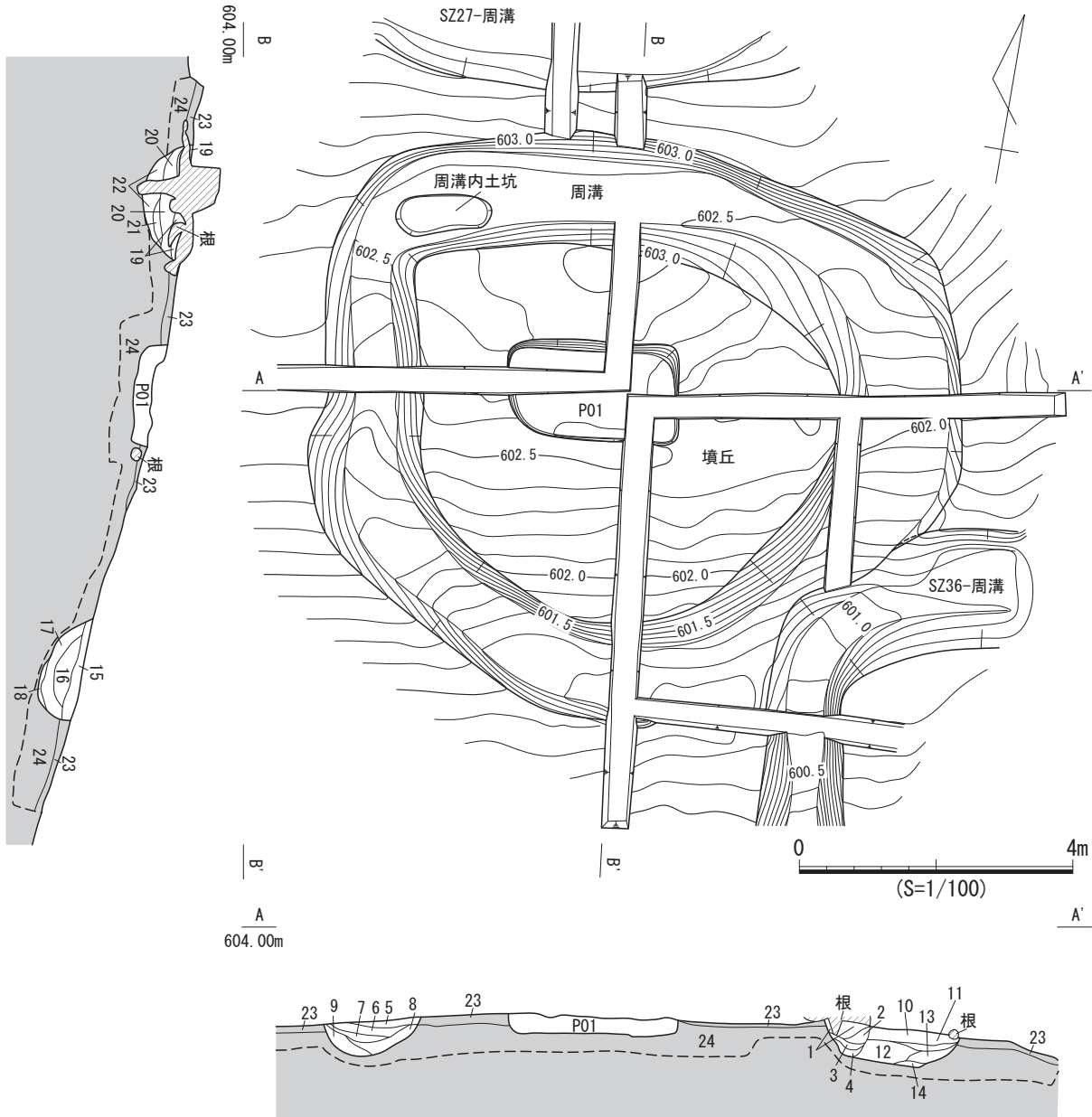
検出状況 B018～BP19グリッド、Ⅳ層の上面で検出した。D地点の東部、尾根からわずかに南へ下がった傾斜面に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。SZ35の南東部でSZ36の周溝と重複する。トレンチの土層断面と周溝の検出状況から、SZ35はSZ36よりも古いと判断した。なお、本遺構を起点として重複関係が連続して認められ、その構築順はSZ35<SZ36<SZ37である。また、SZ37より新しい

主体部



- 1 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.1～1cmの角礫を5%含む
- 2 7.5YR4/3 褐色土 しまりあり 粘性あり 径0.5～2cmの2.5YR5/8明赤褐色土ブロック1%含む 径0.5～1.5cmの角礫を1%含む
- 3 7.5YR4/6 褐色土 しまりなし 粘性あり 径1～3cmの2.5YR5/8明赤褐色土ブロックを1%含む

図76 SZ34遺構図(2)



- 1 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.5~1cmのIV層ブロックを1%含む 径0.5~1cmの炭化粒を1%含む 植物痕
- 2 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりあり 粘性なし 径0.5~2cmのIV層ブロックを5%含む 径4cmの角礫を5%含む 植物痕
- 3 7.5YR3/1 黒褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.5cmのIV層ブロックを1%含む 植物痕
- 4 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性なし 径0.5~1cmのIV層ブロックを5%含む 植物痕
- 5 7.5YR4/3 褐色土 しまりあり 粘性あり 径0.5~1cmの炭化粒を1%含む 周溝埋土
- 6 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性あり 径0.5cmのIV層ブロックを1%含む 周溝埋土
- 7 7.5YR3/1 黒褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土
- 8 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性あり 径1~3cmのIV層ブロックを5%含む 周溝埋土
- 9 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性あり 径0.5~1cmのIV層ブロックを5%含む 周溝埋土
- 10 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし 周溝埋土
- 11 7.5YR5/8 明褐色土 しまりあり 粘性なし 周溝埋土
- 12 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり 径2~4cmのIV層ブロックを1%含む 周溝埋土
- 13 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土
- 14 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 径1~3cmの7.5YR3/1黒褐色土ブロックを5%含む 周溝埋土
- 15 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 径0.5~2cmの炭化材1%含む 周溝埋土
- 16 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 径1~2cmのIV層ブロック5%含む 周溝埋土
- 17 7.5YR4/3 褐色土 しまりあり 粘性あり 周溝埋土
- 18 7.5YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性なし 径1cmのIV層ブロック1%含む 周溝埋土
- 19 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり 径1cmの炭化粒を1%含む 周溝埋土
- 20 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性あり 径1~5cmのIV層ブロックを10%含む 周溝埋土
- 21 7.5YR3/1 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径0.5~2cmの7.5YR4/4褐色土ブロックを5%含む 周溝埋土
- 22 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性なし 径0.5~1cmのIV層ブロックを5%含む 周溝埋土
- 23 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし IV層
- 24 7.5YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性なし IV層

図77 SZ35遺構図(1)

SZ38やSZ46といった墳墓とも重複が連続する。

方台部 方台部の北辺西半部は直線的であるが、他の辺は湾曲して不整形となる。方台部には、各辺に直交するようにL字形にトレンチを2箇所設定して掘削した。なお、断面は図示していないが、SZ35とSZ36の周溝の新旧関係を確認するためのトレンチも併せて設定した。その結果、盛土は確認できずIV層（23層）が露出した。しかし、現況地形測量の段階から方台部の検出面が約0.4m下がっているため、表土掘削の段階で墳丘を掘削してしまった可能性が高い。方台部の中央やや北寄りで、東西方向が長軸となる長楕円形の土坑1基を検出した。方台部のほぼ中央で検出したが、墳丘が残存しておらずSZ35との関係が不明なこと、埋土上層から灰釉陶器が出土していることなど主体部としては不自然な点がある。ただし、放射性炭素年代測定の結果からは年代的に整合する可能性があるため、P01とした。掘削の過程で炭化材がまとまって出土したが、これは4層や5層、9層といった赤褐色土に対応した位置で出土している。なお、この炭化材の樹種はサワラで、放射性炭素年代測定（AMS法）により弥生時代中期後葉～後期前葉の年代が得られた（第4章第2節）。掘方の最大の深さは0.40mである。

周溝 方台部を全周している。北溝のみ直線的で、その他は方台部に沿って湾曲している。断面はいずれも半円形である。周溝の幅は1.20m～2.20mで西溝の北半が狭い。深さは0.50m～0.60mで場所による大きな差はない。埋土の大半はIV層起源の褐色土や明褐色土であるが、西溝と北溝の中層（7

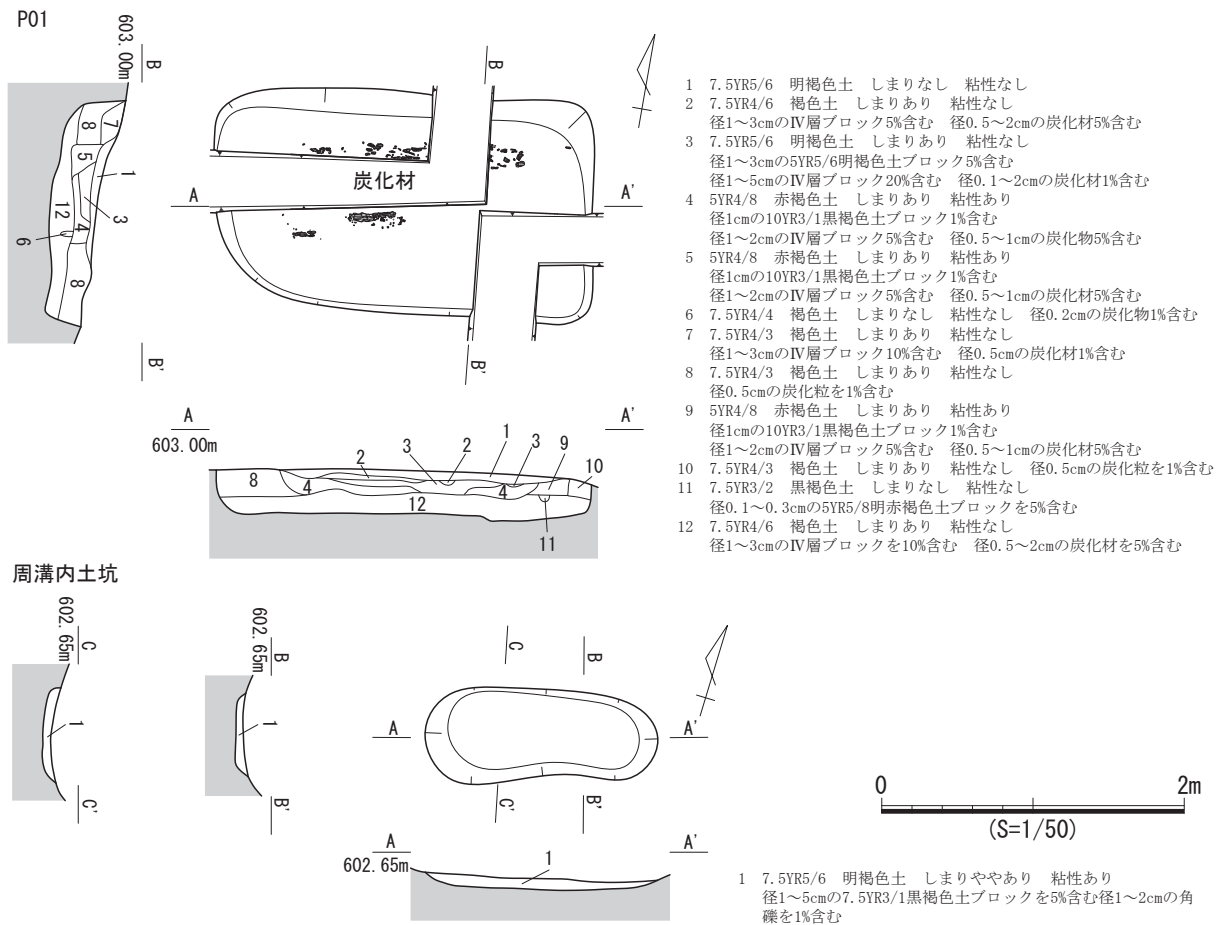


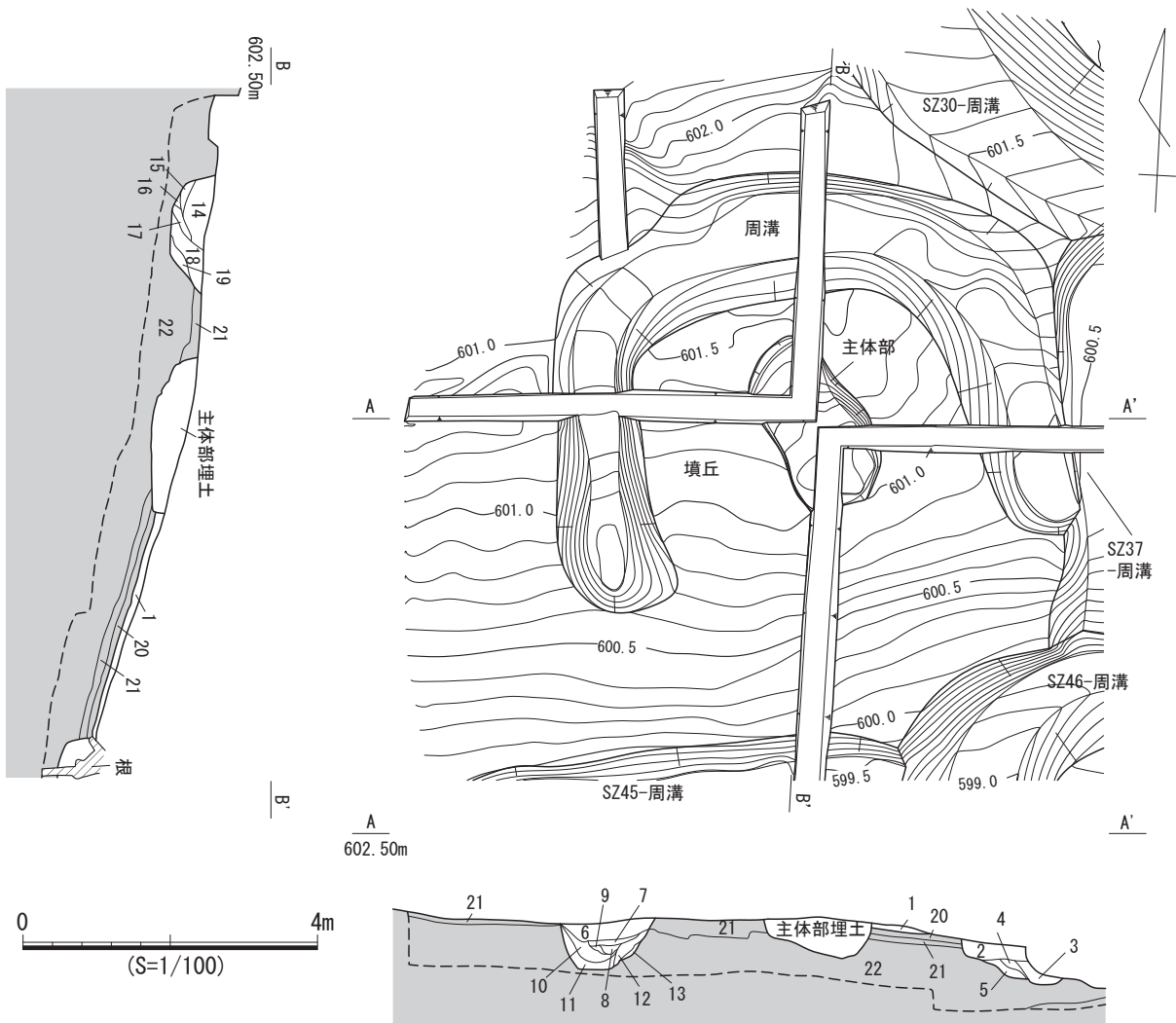
図78 SZ35遺構図（2）

層・8層・21層)には黒褐色土も認められる。北溝掘削後、西部の底面で平面が長楕円形の土坑を検出した。周溝の幅におさまる規模であり、北溝と長軸方位が揃うことから、周溝内土坑とした。深さは0.08mしかないので、周溝埋土の埋没過程で掘削されたと考えられる。

遺物出土状況 P01埋土中から、縄文土器や弥生土器、灰釉陶器が散在して出土した。灰釉陶器は1層で出土しており、混入若しくは1層が別の掘り込みの可能性も考えられる。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

時期 重複関係からは弥生時代末～古墳時代初めのSZ38より古いと考えられる。なお、P01について



- | | |
|--|--|
| 1 7.5YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性あり 盛土層 | 13 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり 周溝埋土 |
| 2 7.5YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性なし 周溝埋土 | 14 7.5YR3/1 黒褐色土 しまりなし 粘性なし 径2~5cmの10YR5/6黄褐色土ブロックを20%含む 長さ0.5~2cmの炭化材を5%含む 周溝埋土 |
| 3 7.5YR4/6 褐色土 しまりなし 粘性ややあり 周溝埋土 | 15 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし 径4cmの7.5YR3/1黒褐色土ブロックを30%含む 長さ0.5cmの炭化材を1%含む 周溝埋土 |
| 4 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性なし 周溝埋土 | 16 7.5YR4/6 褐色土 しまりなし 粘性なし 径2~3cmの7.5YR3/1黒褐色土ブロックを1%含む 周溝埋土 |
| 5 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 17 7.5YR4/6 褐色土 しまりなし 粘性なし 周溝埋土 |
| 6 7.5YR4/3 褐色土 しまりあり 粘性なし 周溝埋土 | 18 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし 径0.5cmの角礫を1%含む 周溝埋土 |
| 7 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性なし 径1~2cmのIV層ブロックを30%含む 周溝埋土 | 19 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性なし 周溝埋土 |
| 8 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性なし 周溝埋土 | 20 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり IIIb層 (旧表土層) |
| 9 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性なし 径1cmのIV層ブロックを5%含む 周溝埋土 | 21 10YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性なし 漸移層 |
| 10 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径10cmの7.5YR3/1黒褐色土ブロックを5%含む 周溝埋土 | 22 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり IV層 |
| 11 10YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 23 5YR5/6 明赤褐色土 しまりあり 粘性あり IV層 |
| 12 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし 径0.5cmの角礫を1%含む 周溝埋土 | |

図79 SZ36遺構図(1)

は、放射性炭素年代測定の結果からSZ35に伴うことも考えられるが、埋土から灰釉陶器が出土していることから、古代以降の別遺構の可能性もある。

SZ36 (図79・図80)

検出状況 B019～CQ1グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の東部、尾根から南へ下がった傾斜面に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。SZ34の北西部でSZ35の周溝、東部でSZ37の周溝と重複する。土層断面と周溝の検出状況から、SZ36はSZ35よりも新しく、SZ37よりも古いと判断した。そのため、構築順はSZ35<SZ36<SZ37である。またSZ37から先についても、SZ38やSZ46といった墳墓との重複が連続する。

方台部 北辺及び東西辺は直線的である。南辺は盛土範囲を把握できなかったため明確でないが、1層の堆積範囲から、平面は南に長い長方形と考えられる。ただし、東西の周溝の南端よりも南へ広がるため、墳丘の流土を誤認した可能性がある。方台部には、各辺に直交するようにL字形にトレンチを設定して掘削した。盛土は、ほとんど残存しておらず標高の低い北西部のⅢb層(20層)上にIV層に類似する1層とした褐色土を積み上げている。しかし、SZ35と同様に、現況地形測量の段階から方台部の検出面が0.40m下がっているため、表土掘削段階で墳丘を掘削してしまった可能性が高い。方台部中央で、南北方向に長軸をもつ不整な長方形の土坑を検出した。Ⅲb層上に盛土した後に掘削された土坑であることから、SZ36の主体部と考えられる。南北方向の底面は平坦であるが、断面は全体に不整な形状である。最大の深さは0.50mである。埋土は墳丘の盛土と同様のIV層起源のものと考えられ、色調が類似する褐色土や明褐色土である。

周溝 斜面に設置されたため、傾斜の下方となる南溝は確認できなかった。その他は、方台部を囲むように周溝を確認した。東西溝は直線的であるが、北溝は湾曲する。断面は逆台形に近い形状である。

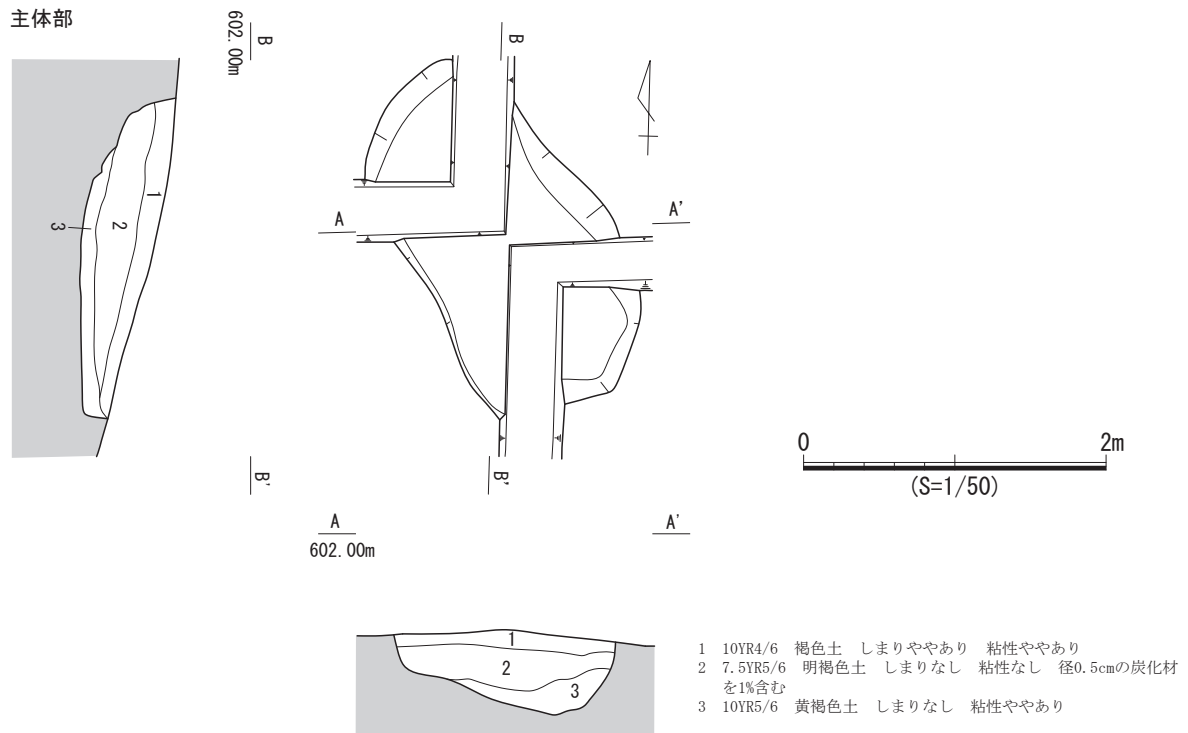


図80 SZ36遺構図(2)

周溝の幅は1.10m～1.80mで、西溝が狭い。深さは0.50m～0.60mで場所による大きな差はない。埋土は西溝の7層～9層や北溝の14層にⅢb層起源と思われる黒褐色土・暗褐色土が認められるが、その他は墳丘から流出した堆積と考えられる。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 重複関係からは弥生時代末～古墳時代初めのSZ38より古いと考えられるが、周溝の重複状況から、大きな時期差はないと考えられる。

SZ37 (図81)

検出状況 C01～CQ2グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の東部、尾根からわずかに南へ下がった傾斜面に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。SZ37の北部でSZ30の周溝、東部でSZ38の周溝、南西部でSZ46の周溝と重複する。トレンチの土層断面と周溝の検出状況から、SZ37はSZ30とSZ36よりも新しく、SZ38とSZ46より古いと判断した。なおSZ37は、斜面上方から連続して重複する一群 (SZ27<SZ20<SZ21<SZ30) と、西側の一群 (SZ35<SZ36) の両者の重複が交差する遺構であり、さらに西側のSZ38と南西側のSZ46にも重複関係が連続する。

方台部 北東部と南西部は、それぞれSZ38とSZ46の周溝によって削られている。北辺と西辺は直線的であることから、平面は方形又は長方形である可能性が高い。方台部には、北辺を基準にL字形のトレンチを設定して掘削した。墳丘は、方台部内に盛土を水平に施したと考えられるが、残存状態は悪い。しかし、現況地形測量の段階では比較的明瞭な墳丘が確認できており、現況地形測量の地表面から検出面まで場所によっては0.30m程度下がっているため、検出過程で墳丘を部分的に掘削してしまった可能性が高い。残存する盛土はIV層に類似する明褐色土である。方台部内では主体部は検出されなかった。また、方台部内南西部で9基の土坑を検出したが、いずれも墳丘の盛土が存在しない範囲でⅢb層上面から検出しており、SZ37との関係は不明である。

周溝 本来は方台部を全周していたと考えられるが、東溝と南溝の一部は重複により消失している。残存するいずれの周溝も直線的であるが、西溝は北から南に向かってやや開く。断面は半円形若しくは逆台形で、いずれも明瞭である。周溝の幅は1.20m～1.94mで北溝より西溝・南溝が広い。深さは0.40m～0.60mで北溝の深さが目立つ。埋土は西溝の中層 (3層～5層) や北溝の14層にⅢb層起源と思われる黒褐色土・暗褐色土が認められるが、その他は墳丘から流出した堆積と考えられる。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

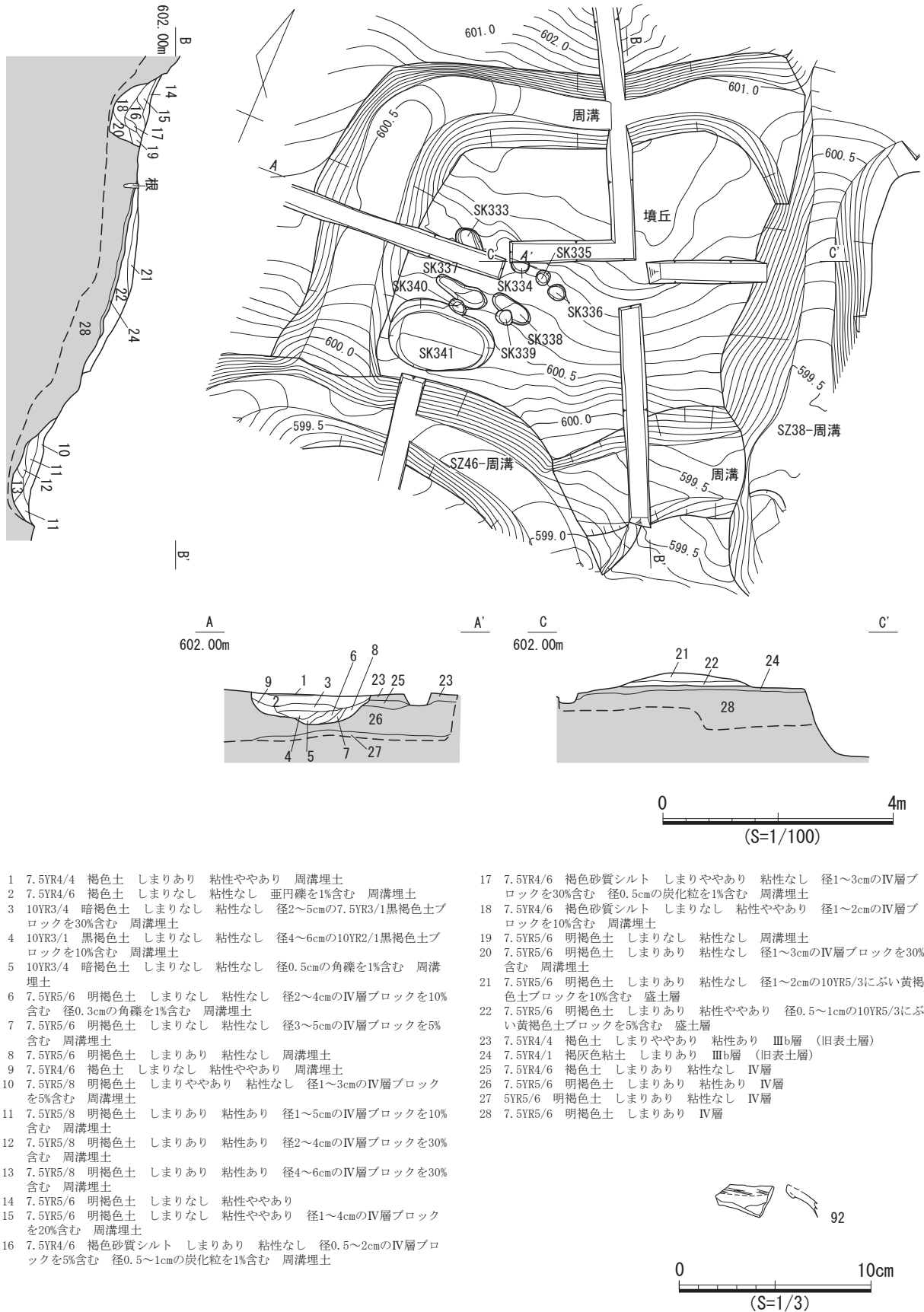
遺物出土状況 弥生土器が、周溝西溝の埋土から散在して出土した。92も含めいずれも細片であるが、出土位置は周溝の底面付近のものが多い。

出土遺物 92は弥生土器の壺と思われる。頸部から体部上半付近の破片と考えられ、粘土の折り返しや剥がれが認められる。

時期 重複関係からは弥生時代末～古墳時代初めのSZ38より古いと考えられるが、周溝の重複状況から、大きな時期差はないと考えられる。

SZ38 (図82・図83)

検出状況 C02～CP4グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の東端、SZ22の位置から向きを変えて南東方向に延びる尾根上に立地する。現況地形測量において比較的明瞭な墳丘を確認した。SZ38の北



- | | |
|---|--|
| <p>1 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性ややあり 周溝埋土</p> <p>2 7.5YR4/6 褐色土 しまりなし 粘性なし 亜円礫を1%含む 周溝埋土</p> <p>3 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性なし 径2~5cmの7.5YR3/1黒褐色土ブロックを30%含む 周溝埋土</p> <p>4 10YR3/1 黒褐色土 しまりなし 粘性なし 径4~6cmの10YR2/1黒褐色土ブロックを10%含む 周溝埋土</p> <p>5 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性なし 径0.5cmの角礫を1%含む 周溝埋土</p> <p>6 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性なし 径2~4cmのIV層ブロックを10%含む 径0.3cmの角礫を1%含む 周溝埋土</p> <p>7 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性なし 径3~5cmのIV層ブロックを5%含む 周溝埋土</p> <p>8 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし 周溝埋土</p> <p>9 7.5YR4/6 褐色土 しまりなし 粘性ややあり 周溝埋土</p> <p>10 7.5YR5/8 明褐色土 しまりややあり 粘性なし 径1~3cmのIV層ブロックを5%含む 周溝埋土</p> <p>11 7.5YR5/8 明褐色土 しまりあり 粘性あり 径1~5cmのIV層ブロックを10%含む 周溝埋土</p> <p>12 7.5YR5/8 明褐色土 しまりあり 粘性あり 径2~4cmのIV層ブロックを30%含む 周溝埋土</p> <p>13 7.5YR5/8 明褐色土 しまりあり 粘性あり 径4~6cmのIV層ブロックを30%含む 周溝埋土</p> <p>14 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性ややあり</p> <p>15 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径1~4cmのIV層ブロックを20%含む 周溝埋土</p> <p>16 7.5YR4/6 褐色砂質シルト しまりあり 粘性なし 径0.5~2cmのIV層ブロックを5%含む 径0.5~1cmの炭化粒を1%含む 周溝埋土</p> | <p>17 7.5YR4/6 褐色砂質シルト しまりややあり 粘性なし 径1~3cmのIV層ブロックを30%含む 径0.5cmの炭化粒を1%含む 周溝埋土</p> <p>18 7.5YR4/6 褐色砂質シルト しまりなし 粘性ややあり 径1~2cmのIV層ブロックを10%含む 周溝埋土</p> <p>19 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性なし 周溝埋土</p> <p>20 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし 径1~3cmのIV層ブロックを30%含む 周溝埋土</p> <p>21 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし 径1~2cmの10YR5/3にぶい黄褐色土ブロックを10%含む 盛土層</p> <p>22 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.5~1cmの10YR5/3にぶい黄褐色土ブロックを5%含む 盛土層</p> <p>23 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性あり IIIb層 (旧表土層)</p> <p>24 7.5YR4/1 褐灰色粘土 しまりあり IIIb層 (旧表土層)</p> <p>25 7.5YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性なし IV層</p> <p>26 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり IV層</p> <p>27 5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし IV層</p> <p>28 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり IV層</p> |
|---|--|

図81 SZ37遺構図、出土遺物

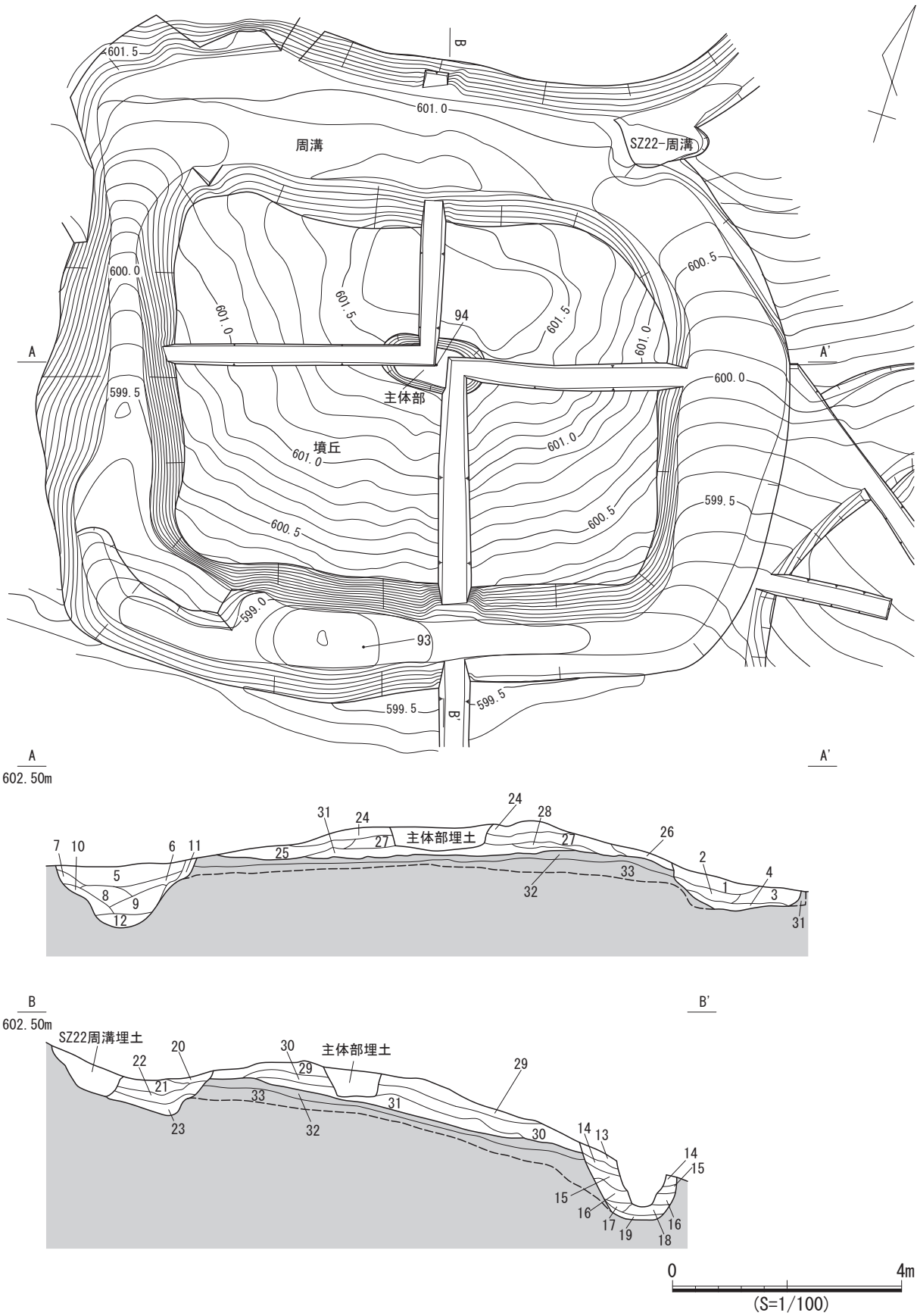


図82 SZ38遺構図(1)

部でSZ22の周溝、東部でSZ40の周溝、南部でSZ47の周溝、西部でSZ37の周溝と重複する。また、南溝の埋土正面から、ST10が掘り込まれる。土層断面からSZ38は、SZ22、SZ37、SZ47より新しく、SZ40、ST10より古いと判断した。重複関係は複雑であるが、SZ38はSZ37まで連続して重複するものより新しいため、SZ38より新しいSZ40やSZ39、SZ22は、これらより新しいことになる。

墳丘土層注記

- | | |
|---|---|
| 1 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 | 17 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 しまりなし 粘性なし IV層ブロックを3%含む 周溝埋土 |
| 2 10YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを3%含む 周溝埋土 | 18 10YR6/4 にぶい黄橙色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 |
| 3 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土 | 19 10YR5/4 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 |
| 4 7.5YR5/4 にぶい褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを15%含む 周溝埋土 | 20 10YR6/4 にぶい黄橙色土 しまりあり 粘性ややあり 周溝埋土 |
| 5 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 炭化粒を5%含む 周溝埋土 | 21 10YR5/4 にぶい黄橙色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 |
| 6 10YR5/1 褐灰色砂質土 しまりなし 粘性なし IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 | 22 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土 |
| 7 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土 | 23 10YR6/3 にぶい黄橙色砂質土 しまりなし 粘性なし IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 |
| 8 10YR4/1 褐灰色土 しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土 | 24 7.5YR5/4 にぶい褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 径0.5~1.0cmの亜角礫を3%含む 盛土層 |
| 9 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 | 25 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 盛土層 |
| 10 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 | 26 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 盛土層 |
| 11 10YR5/1 褐灰色砂質土 しまりなし 粘性なし IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 | 27 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 盛土層 |
| 12 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 | 28 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性あり IV層ブロックを15%含む 盛土層 |
| 13 10YR5/6 黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 炭化粒を3%含む 周溝埋土 | 29 7.5YR6/6 橙色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 盛土層 |
| 14 10YR5/3 にぶい黄褐色 しまりなし 粘性ややあり 周溝埋土 | 30 10YR6/4 にぶい黄橙色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 盛土層 |
| 15 10YR6/3 にぶい黄橙色砂質土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 31 10YR6/4 にぶい黄橙色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 盛土層 |
| 16 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 しまりなし 粘性なし IV層ブロックを3%含む 周溝埋土 | 32 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IIIb層 (旧表土層) |
| | 33 7.5YR6/4 にぶい黄色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層 |

主体部

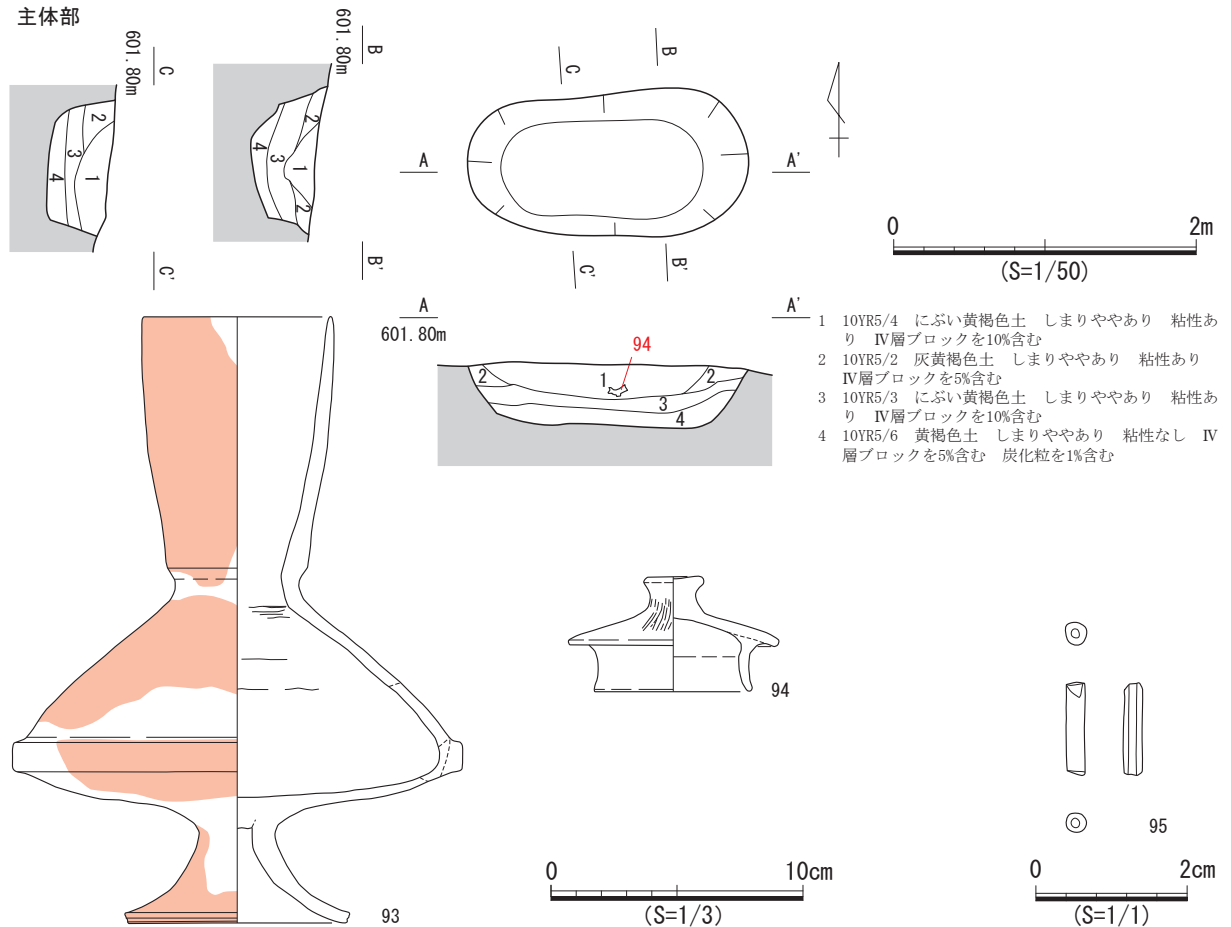


図83 SZ38遺構図(2)、出土遺物

方台部 平面はいずれの辺も直線的で、東西に長い長方形である。方台部には、各辺に直交するようにL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。盛土は、Ⅲb層（32層）上に方台部中央から順に積み上げている。盛土の25層～28層は、24層や31層より暗い色調の土である。方台部の中央やや北寄り、東西方向が長軸となる長楕円形の土坑1基を検出した。Ⅲb層上に盛土した後に掘削された土坑であることから、SZ38の主体部と考えられる。掘方の断面は逆台形に近い。最大の深さは0.50mである。埋土は墳丘と色調が類似するにぶい黄褐色土等である。

周溝 方台部を全周しているが、北溝の北側の立ち上がりは重複により消失している。なお、東溝の東側の立ち上がりも、調査時における重複の誤認による掘削で消失したため、図示した遺構の形状は残存部分である。東溝は湾曲するが、それ以外は直線的である。断面は半円形や逆台形で、いずれも明瞭に掘り込まれている。周溝の幅は1.70m～2.50mで、西溝北半と南溝の東半に幅の狭い部分が認められる。深さは0.50m～1.00mであり、南溝の深さが目立つ。図面上東溝が浅いように見えるが、これは誤認により上面を掘り下げてしまったためである。埋土は中層や下層に褐灰色や灰黄褐色といった暗い色調の堆積が認められるが、その他は墳丘から流出した堆積と考えられる。なお、東溝の1層～3層も暗い色調の堆積であるが、先述の誤認による掘削によって本来の中層が表面に露出したものである。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 出土した遺物は図示した3点のみである。弥生土器の台付装飾壺（93）は南溝の底面付近で出土した。93は脚部を南東方向に向けた横倒しの状態で出土しており、墳頂部から転落、若しくは廃棄された可能性もある。蓋（94）は主体部中央の1層内から出土した。93とはセット関係にある可能性が高いが、94のみ主体部に埋納されていた。管玉（95）は主体部埋土の篩い作業によって確認した遺物で、主体部の南部中央の検出面から0.30m～0.35m下から出土しており、底面近くに副葬されていたものと思われる。

出土遺物 93と94は弥生土器である。94は蓋、93は台付装飾壺で、口径からセット関係にある可能性が高い。94は全体的に丁寧なつくりで、ミガキやナデによって器面調整する。SZ51出土の105（図105）とは異なり、明瞭な返りを有する。93は、緩やかに内湾しながらわずかに開く筒状の口縁部と、下半が鋭角に屈曲する体部をもち、その下に小型の脚部が付される。体部下半の屈曲部は装飾のない突帯が巡る。また、脚部の端部には凹線も認められる。外面はミガキ調整と思われるが、単位は不明である。また、外面全体に赤彩の痕跡も認められる。95は石製品の管玉である。ほぼ完形であるが、穿孔に際して一部欠損している。

時期 出土した土器が北陸地方の月影式に比定できることから、弥生時代末から古墳時代初めに位置付けられる。

SZ39（図84）

検出状況 CQ4～CQ5グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の東端、SZ22の位置から向きを変えて南東方向に延びる尾根上に立地する。現況地形測量において墳丘を確認した。南東部は発掘区外である。SZ39の北西部でSZ47、北東部でSZ40の各周溝と重複する。トレンチの土層断面等から、SZ39はSZ40とSZ47よりも新しいと判断した。そのため、周囲の墳墓の中では最も新しい。

方台部 検出範囲では丸味を帯びる。方台部には、北辺と直交するようにトレンチを1箇所設定して掘削した。盛土は、IV層（5層）上面にIV層に類似するにぶい黄褐色土（4層）を積み上げているが、

Ⅲ b層は認められない。なお、方台部内では主体部は検出されなかった。

周溝 北溝と東溝の一部を検出した。検出した範囲ではいずれも直線的で、北溝と東溝は直交する。残存する周溝の幅は0.78m～1.16mで発掘区外へ延びる付近の東溝がやや狭い。断面は半円形に近い。深さは0.20mである。埋土は2層と3層に暗い色調の堆積が認められ、1層は墳丘から流出した堆積と考えられる。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 重複関係からは弥生時代末から古墳時代初め以降のSZ38より新しいが、周溝の重複状況から大きな時期差はないと考えられる。

SZ40 (図85・図86)

検出状況 C05～CP6グリッド、Ⅳ層の上面で検出した。D地点東端の尾根上に立地し、現況地形測量において明瞭な墳丘を確認した。SZ40の西部でSZ38の周溝と南西部でSZ39の周溝、SZ47の周溝と重複する。土層断面から、SZ40はSZ38とSZ47より新しく、SZ39よりも古いと判断した。

方台部 南東部は発掘区外であるが、検出した各辺の状況から平面は隅丸方形と思われる。方台部には、各辺に直交するようにL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。墳丘は、方台部中央から外側に盛土している。盛土は、15層と16層にはやや暗い色調の灰黄褐色土もみられるが、その他はⅣ層に類似する。方台部の中央南西側で北西－南東方向が長軸となる長楕円形の土坑1基を検出した。Ⅲ b層(24層)上に盛土した後に掘削し、その後さらに盛土されていることから、SZ40の主体部と考えられる。短軸の断面は逆台形に近く、最大の深さは0.40mである。埋土は1層がⅣ層と類似するにぶい黄橙色土であるが、その下層(2層・3層)にはやや暗い色調の堆積が認められる。

周溝 調査時にSZ38との重複を誤認して掘削してしまったため、西溝については本来の形状を記録できなかった。南溝もSZ39との重複で大部分が失われているが、一部底面が残る。南東部は発掘区外で不明であるが、他の尾根上の墳墓と同様墳丘を全周していた可能性が高い。残存する外周は丸味を帯びて円形に近い印象を受ける。北部中央の周溝が切れる部分は尾根のほぼ中央に当たり、斜面上方に

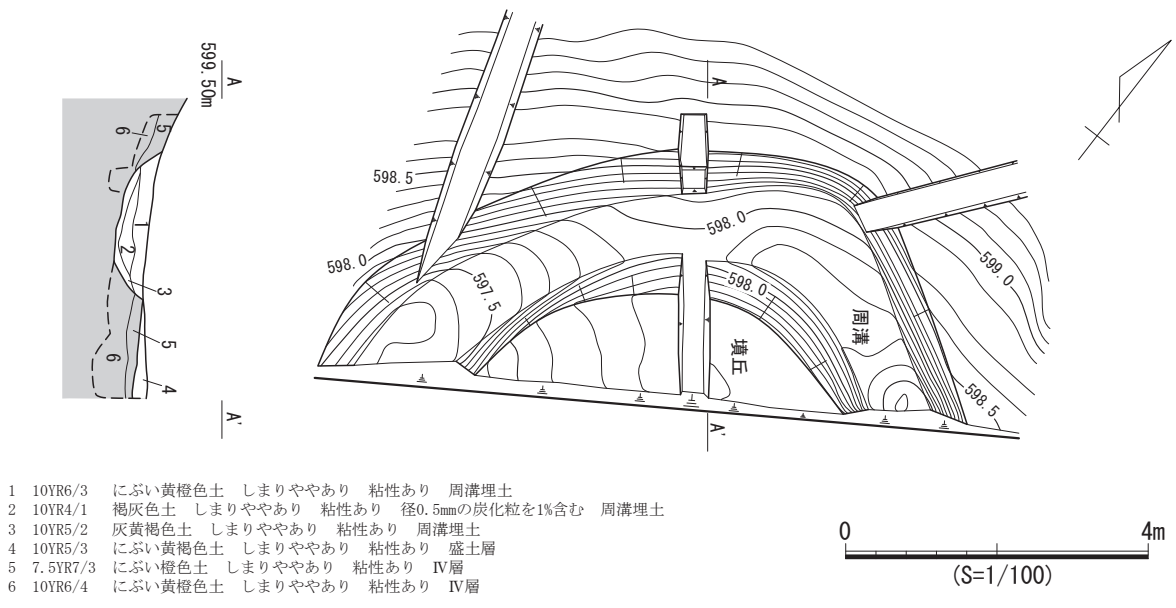
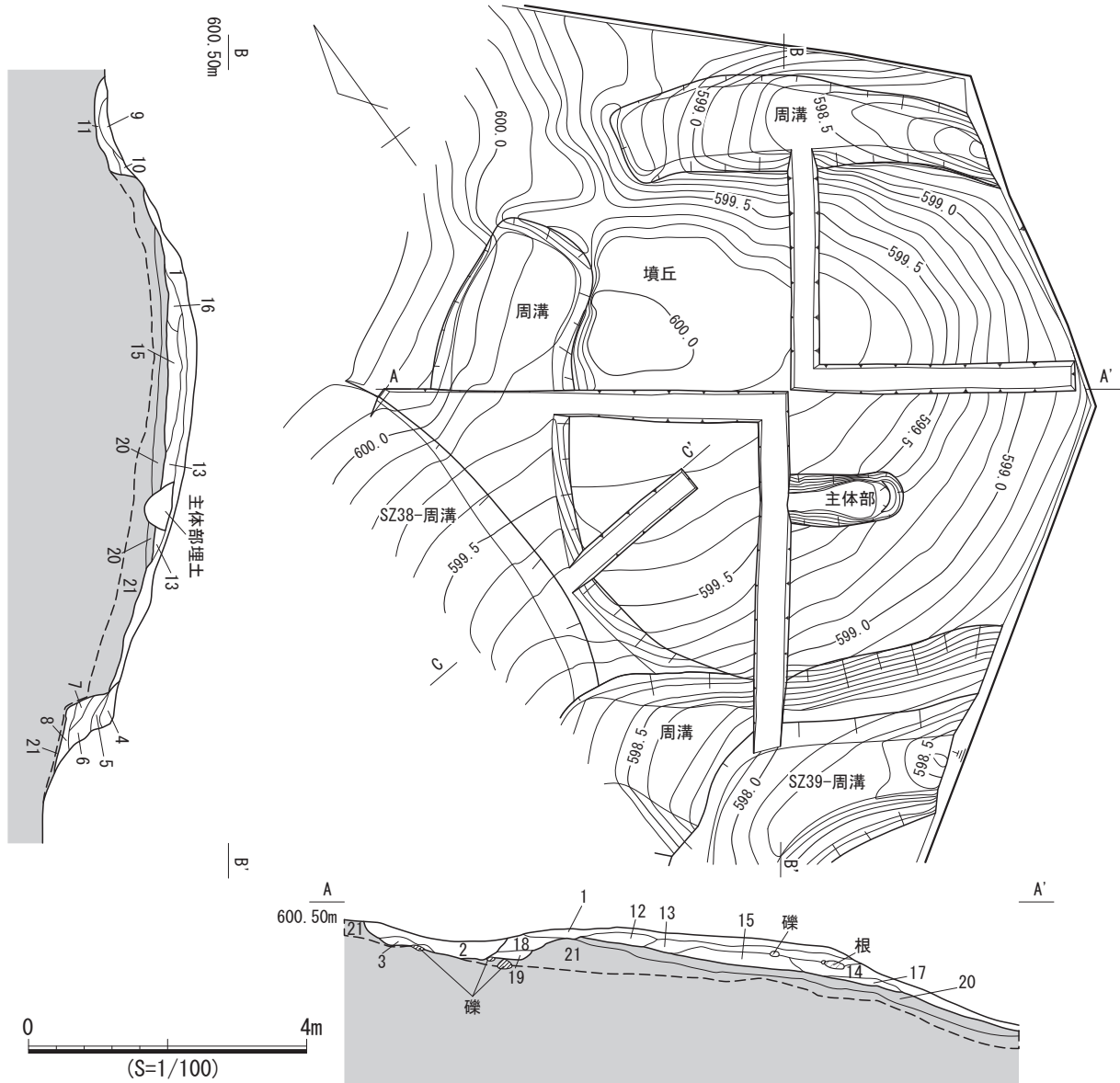


図84 SZ39遺構図



- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.5~1.5cmの亜角礫を5%含む 周溝埋土
- 2 7.5YR5/3 にぶい褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 周溝埋土
- 4 7.5YR6/4 にぶい橙色 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土
- 5 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土
- 6 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりなし 粘性なし 周溝埋土
- 7 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土
- 8 10YR5/1 褐灰色土 しまりなし 粘性ややあり 径0.1~5.0cmの亜角礫を5%含む 周溝埋土
- 9 7.5YR5/3 にぶい褐色土 しまりややあり 粘性あり周溝埋土
- 10 7.5YR5/4 にぶい褐色土 しまりややあり 粘性あり径1.0~5.0cmの亜角礫を5%含む 周溝埋土
- 11 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりなし 粘性あり 周溝埋土
- 12 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.5cmの亜角礫を5%含む 周溝埋土
- 13 7.5YR6/3 にぶい褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 10YR5/1褐灰色土ブロックを5%含む 周溝埋土
- 14 7.5YR6/4 にぶい橙色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 径0.5~1.0cmの亜角礫を5%含む 盛土
- 15 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 径0.5cmの亜角礫を10%含む 盛土層
- 16 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 径0.5~1.5cmの亜角礫を15%含む 盛土層
- 17 7.5YR5/3 にぶい褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを15%含む

- 18 7.5YR5/6 にぶい褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.4~1.0cmの亜角礫を10%含む IV層ブロックを5%含む 盛土層
- 19 7.5YR7/6 橙色土 しまりあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 径1.0~5.0cmの亜角礫を10%含む 盛土層
- 20 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 盛土層
- 21 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 盛土層
- 22 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.5~1.0cmの亜角礫を5%含む 盛土層
- 23 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.5~1.0cmの亜角礫を10%含む 盛土層
- 24 10YR5/1 褐灰色土 しまりなし 粘性あり IIIb層 (旧表土層)
- 25 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性なし IV層

図85 SZ40遺構図(1)

向かって撥形に開く形状をもつ。周溝の幅は残存状態の良い部分で0.90m～2.00mで東溝が狭いが、平面図の等高線から考えると、埋没部分のみを周溝としたことで本来の幅を記録できなかった可能性が高い。深さは0.20m～0.70mで斜面下方の南溝が深いが、前述の理由により北溝も同程度の深さがあると考えられる。埋土は17層のみⅢb層に類似する堆積が認められるが、その他は墳丘からの流土と考えられる。なお、A-A'断面の22層と23層は、SZ33と同様に墳丘構築当初に掘削された可能性があるが、墳丘下面の調査ではSZ33のような溝状の平面形は確認できなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 重複関係からは弥生時代末から古墳時代初め以降のSZ38より新しいが、周溝の重複状況から大きな時期差はないと考えられる。

SZ41 (図87～図89)

検出状況 BP7～BR10グリッド、Ⅳ層の上面で検出した。D地点の南西部、尾根から南へ下がった傾斜面に立地し、現況地形測量において明瞭な墳丘を確認した。SZ41の周溝が、東部でSZ32の周溝、南東部でSZ42の周溝と重複する。周溝の検出状況から、SZ41はSZ32より新しく、SZ42よりも古いと判断した。SZ32はSZ25やSZ29とも重複関係があるため、構築順はSZ25<SZ29<SZ32<SZ41<SZ42である。

方台部 北辺には丸味があり、東辺と西辺は南に向かって直線的に開く。南辺は盛土範囲を把握できなかったため明確でないが、等高線の状況から、周溝の南端をつなぐ湾曲した形状だったと考えられる。そのため、平面は不整な円形である。方台部には、検出した周溝を基準にL字形にトレンチを2箇所設定して掘削した。この軸が旧地形の傾きと水平・垂直でないため、A-A'断面で確認した旧地形は西へ向かって低くなっている。墳丘は、Ⅲb層(68層)上に方台部周縁の標高が低い部分に盛土(13層～33層・40層～67層)した後、窪地状に残った墳丘頂部に充填する(11層・12層・34層～39層)。これによって、主体部を設置する平坦面を作り出す意図があった可能性がある。盛土は、Ⅳ層に類似する褐色土や明褐色土などが多いが、ブロック状に褐灰色土や灰黄褐色土といったⅢb層に類似する土も使用されている。墳頂部付近では、A-A'断面がⅣ層に類似、B-B'断面がⅢb層に類似する土であり、場所や構築過程による規則性は認められない。方台部中央やや北寄り、東西に主軸をもつ長楕円形の土坑1基を検出した。Ⅲb層上に盛土した後に掘削された土坑であることから、SZ41

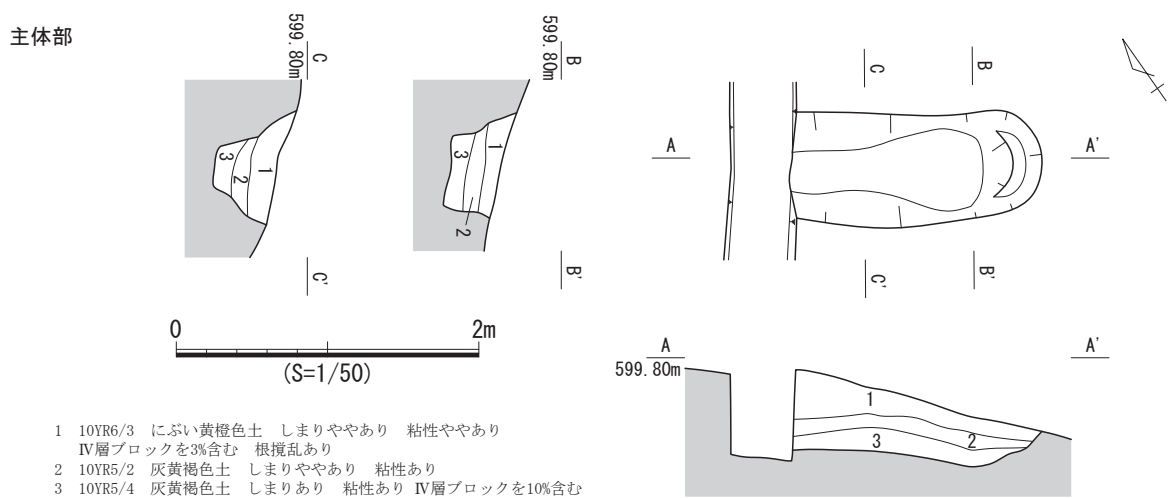


図86 SZ40遺構図(2)

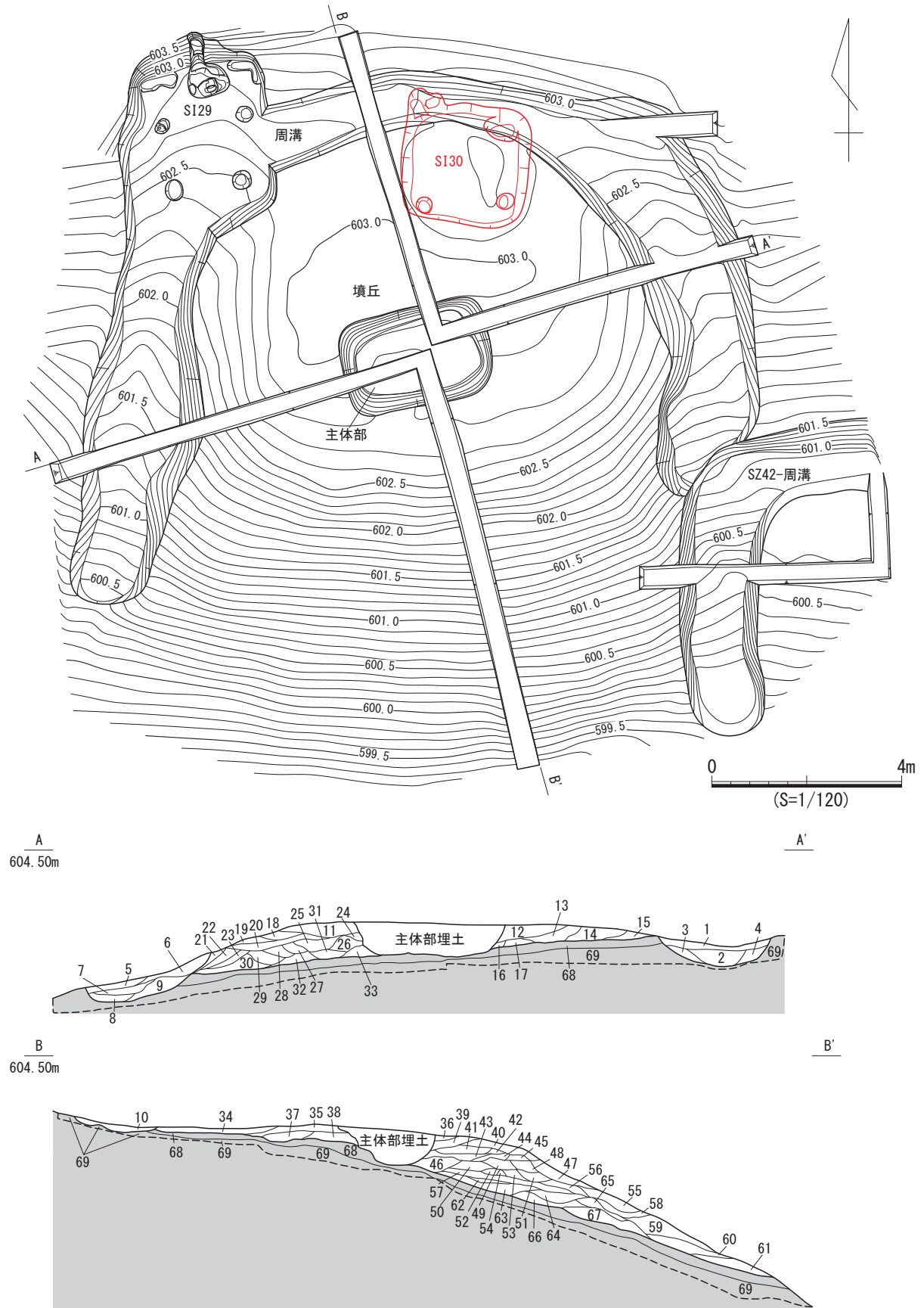


図87 SZ41遺構図(1)

の主体部と考えられる。主体部の断面は、東西は逆台形、南北は半円形に近い。埋土は暗い色調の暗褐色土や褐配色土が層状に認められる。なお、墳丘下面の調査において、主体部北側で竪穴建物SI30を検出した。出土遺物から明らかに墳墓より新しい遺構であるため、墳丘検出時に見落とされたと考えられる。原因としては、墳丘盛土を掘り込んでSI30が構築され、廃絶後にSZ41の墳丘盛土が流れ込み、判別できなくなったことが考えられる。ただし、図面では主体部北東部が窪み状になっていることが確認できることから、この部分がSI30と推定される。

周溝 斜面に設置されたため、傾斜の下方となる南溝は確認できなかった。西溝は直線的であるが、北溝・東溝は一体となって湾曲する。西溝と比較して東溝が短く墳丘裾に達していないため、SZ42と重複する部分に続いていたと考えられる。断面は半円形に近い。周溝の幅は0.9m～2.5mで北溝が狭

墳丘土層注記

- | | | | | | | | | | | |
|----|-----------------|---------|--------|----------------------------|------------|----|-----------------|---------|------------|----------------------|
| 1 | 10YR6/2 灰黄褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径1～52cmのIV層ブロックを10%含む | 周溝埋土 | 5 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 周溝埋土 |
| 2 | 10YR4/1 褐灰色土 | しまりなし | 粘性あり | 周溝埋土 | | 6 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径1～2cmのIV層ブロックを5%含む |
| 3 | 10YR6/1 褐灰色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径1～2cmのIV層ブロックを7%含む | 周溝埋土 | 7 | 10YR4/1 褐灰色土 | しまりなし | 粘性あり | 径1～2cmのIV層ブロックを10%含む |
| 4 | 10YR5/2 灰黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 炭化粒を3%含む | 周溝埋土 | 8 | 10YR6/2 灰黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径3～4cmのIV層ブロックを15%含む |
| 5 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 周溝埋土 | | 9 | 10YR5/2 灰黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 周溝埋土 |
| 6 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径1～2cmのIV層ブロックを5%含む | 周溝埋土 | 10 | 10YR5/2 灰黄褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径2～3cmのIV層ブロックを5%含む |
| 7 | 10YR4/1 褐灰色土 | しまりなし | 粘性あり | 径1～2cmのIV層ブロックを10%含む | 周溝埋土 | 11 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 | しまりあり | 粘性なし | 径1cmの亜角礫を5%含む |
| 8 | 10YR6/2 灰黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径3～4cmのIV層ブロックを15%含む | 周溝埋土 | 12 | 7.5YR4/3 褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径1cmのIV層ブロックを10%含む |
| 9 | 10YR5/2 灰黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 周溝埋土 | | 13 | 7.5YR5/3 にぶい褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径1cmのIV層ブロックを15%含む |
| 10 | 10YR5/2 灰黄褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径2～3cmのIV層ブロックを5%含む | 周溝埋土 | 14 | 10YR4/4 褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径1cmの亜角礫を15%含む |
| 11 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 | しまりあり | 粘性なし | 径1cmの亜角礫を5%含む | 盛土層 | 15 | 7.5YR4/6 褐色土 | しまりあり | 粘性あり | 径2～3cmのIV層ブロックを10%含む |
| 12 | 7.5YR4/3 褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径1cmのIV層ブロックを10%含む | 盛土層 | 16 | 10YR6/4 にぶい黄褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 径1～2cmの亜角礫を3%含む |
| 13 | 7.5YR5/3 にぶい褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径1cmのIV層ブロックを15%含む | 盛土層 | 17 | 10YR6/3 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径2～3cmのIV層ブロックを5%含む |
| 14 | 10YR4/4 褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径1cmの亜角礫を15%含む | 盛土層 | 18 | 10YR6/4 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径1～2cmのIV層ブロックを5%含む |
| 15 | 7.5YR4/6 褐色土 | しまりあり | 粘性あり | 径2～3cmのIV層ブロックを10%含む | 盛土層 | 19 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 径1～2cmの亜角礫を10%含む |
| 16 | 10YR6/4 にぶい黄褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 径1～2cmの亜角礫を3%含む | 盛土層 | 20 | 10YR5/1 褐灰色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径2～3cmのIV層ブロックを5%含む |
| 17 | 10YR6/3 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径2～3cmのIV層ブロックを5%含む | 盛土層 | 21 | 10YR4/4 褐灰色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径1～2cmのIV層ブロックを5%含む |
| 18 | 10YR6/4 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径1～2cmのIV層ブロックを5%含む | 盛土層 | 22 | 7.5YR4/4 にぶい褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径1～2cmのIV層ブロックを5%含む |
| 19 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 径1～2cmの亜角礫を10%含む | 盛土層 | 23 | 10YR4/6 褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径1～2cmの亜角礫を1%含む |
| 20 | 10YR5/1 褐灰色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径2～3cmのIV層ブロックを5%含む | 盛土層 | 24 | 10YR5/1 褐灰色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径3～4cmのIV層ブロックを15%含む |
| 21 | 10YR4/4 褐灰色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径1～2cmのIV層ブロックを5%含む | 盛土層 | 25 | 10YR6/4 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径3～4cmのIV層ブロックを10%含む |
| 22 | 7.5YR4/4 にぶい褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径1～2cmのIV層ブロックを5%含む | 盛土層 | 26 | 7.5YR5/3 にぶい褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径3～4cmのIV層ブロックを10%含む |
| 23 | 10YR4/6 褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径1～2cmの亜角礫を1%含む | 盛土層 | 27 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 | しまりなし | 粘性ややあり | 径1～2cmのIV層ブロックを10%含む |
| 24 | 10YR5/1 褐灰色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径3～4cmのIV層ブロックを15%含む | 盛土層 | 28 | 7.5YR4/6 褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径2～3cmのIV層ブロックを10%含む |
| 25 | 10YR6/4 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径3～4cmのIV層ブロックを10%含む | 盛土層 | 29 | 10YR5/2 灰黄褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径3～4cmのIV層ブロックを10%含む |
| 26 | 7.5YR5/3 にぶい褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径3～4cmのIV層ブロックを10%含む | 盛土層 | 30 | 10YR5/1 褐灰色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 盛土層 |
| 27 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 | しまりなし | 粘性ややあり | 径1～2cmのIV層ブロックを10%含む | 盛土層 | 31 | 10YR6/3 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径2～3cmのIV層ブロックを15%含む |
| 28 | 7.5YR4/6 褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径2～3cmのIV層ブロックを10%含む | 盛土層 | 32 | 7.5YR5/2 灰褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径3～4cmのIV層ブロックを5%含む |
| 29 | 10YR5/2 灰黄褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径3～4cmのIV層ブロックを10%含む | 盛土層 | 33 | 7.5YR5/6 明褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 径1～2cmの亜角礫を5%含む |
| 30 | 10YR5/1 褐灰色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 盛土層 | | 34 | 10YR6/1 褐灰色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径1～2cmのIV層ブロックを5%含む |
| 31 | 10YR6/3 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径2～3cmのIV層ブロックを15%含む | 盛土層 | 35 | 2.5Y6/3 にぶい黄色土 | しまりあり | 粘性あり | 盛土層65 |
| 32 | 7.5YR5/2 灰褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径3～4cmのIV層ブロックを5%含む | 盛土層 | | | | 10YR4/1 褐灰 | |
| 33 | 7.5YR5/6 明褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 径1～2cmの亜角礫を5%含む | 盛土層 | | | | | |
| 34 | 10YR6/1 褐灰色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径1～2cmのIV層ブロックを5%含む | 盛土層 | | | | | |
| 35 | 2.5Y6/3 にぶい黄色土 | しまりあり | 粘性あり | 盛土層65 | 10YR4/1 褐灰 | | | | | |
| 36 | 7.5YR6/2 灰褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 径1～2cmの亜角礫を5%含む | 盛土層 | | | | | |
| 37 | 7.5YR6/2 灰褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径2～3cmの亜角礫を10%含む | 盛土層 | | | | | |
| 38 | 7.5YR6/1 褐灰色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 径1～2cmの亜角礫を10%含む | 盛土層 | | | | | |
| 39 | 10YR4/1 褐灰色土 | しまりなし | 粘性あり | 盛土層 | | | | | | |
| 40 | 7.5YR5/6 明褐色土 | しまりややあり | 粘性なし | 径1～2cmの亜角礫を5%含む | 盛土層 | | | | | |
| 41 | 7.5YR5/8 明褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径2～3cmのIV層ブロックを10%含む | 盛土層 | | | | | |
| 42 | 7.5YR4/6 褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 径3cmの10YR5/1褐灰色土ブロックを10%含む | 盛土層 | | | | | |
| 43 | 7.5YR5/6 明褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径2～3cmのIV層ブロックを5%含む | 盛土層 | | | | | |
| 44 | 10YR5/6 黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径1～2cmのIV層ブロックを7%含む | 盛土層 | | | | | |
| 45 | 7.5YR6/3 にぶい褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径1～2cmの亜角礫を5%含む | 盛土層 | | | | | |
| 46 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径1～2cmのIV層ブロックを15%含む | 盛土層 | | | | | |
| 47 | 10YR6/3 にぶい黄褐色土 | しまりあり | 粘性あり | 径1～2cmの亜角礫を5%含む | 盛土層 | | | | | |
| 48 | 10YR5/4 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径2～3cmのIV層ブロックを7%含む | 盛土層 | | | | | |
| 49 | 10YR5/4 にぶい黄褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 径1～2cmのIV層ブロックを5%含む | 盛土層 | | | | | |
| 50 | 10YR5/6 黄褐色土 | しまりあり | 粘性あり | 径2～3cmのIV層ブロックを10%含む | 盛土層 | | | | | |
| 51 | 10YR4/4 褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径1～2cmの亜角礫を3%含む | 盛土層 | | | | | |
| 52 | 10YR5/4 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径2～3cmのIV層ブロックを5%含む | 盛土層 | | | | | |
| 53 | 10YR4/2 灰黄褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径2～3cmのIV層ブロックを7%含む | 盛土層 | | | | | |
| 54 | 10YR5/4 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径2～3cmのIV層ブロックを20%含む | 盛土層 | | | | | |
| 55 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径2～3cmのIV層ブロックを10%含む | 盛土層 | | | | | |
| 56 | 10YR6/1 褐灰色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径1～2cmのIV層ブロックを3%含む | 盛土層 | | | | | |
| 57 | 10YR5/6 黄褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径2～3cmのIV層ブロックを3%含む | 盛土層 | | | | | |
| 58 | 10YR5/6 黄褐色土 | しまりあり | 粘性あり | 径3～4cmのIV層ブロックを10%含む | 炭化粒を1%含む | | | | | |
| 59 | 10YR5/2 灰黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 盛土層 | | | | | | |
| 60 | 10YR6/2 灰黄褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 径2～3cmのIV層ブロックを5%含む | 盛土層 | | | | | |
| 61 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 盛土層 | | | | | | |
| 62 | 10YR5/8 黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径2～3cmのIV層ブロックを15%含む | 盛土層 | | | | | |
| 63 | 10YR5/6 黄褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 径2～3cmのIV層ブロックを20%含む | 盛土層 | | | | | |
| 64 | 10YR5/8 黄褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径2～3cmのIV層ブロックを10%含む | 盛土層 | | | | | |
| 65 | 10YR5/6 黄褐色土 | しまりややあり | 粘性ややあり | 径2～3cmのIV層ブロックを5%含む | 盛土層 | | | | | |
| 66 | 10YR4/4 褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | 径3～4cmのIV層ブロックを5%含む | 盛土層 | | | | | |
| 67 | 10YR5/3 にぶい黄褐色土 | しまりややあり | 粘性あり | 径2～3cmのIV層ブロックを5%含む | 盛土層 | | | | | |
| 68 | 10YR4/1 褐灰色土 | しまりなし | 粘性あり | Ⅲb層 (旧表土層) | | | | | | |
| 69 | 10YR6/6 明黄褐色土 | しまりあり | 粘性ややあり | IV層 | | | | | | |

図88 SZ41遺構図(2)

く、深さも0.1m~0.4mで北溝が浅い。埋土は比較的斜面上方の東溝や北溝はⅢb層に類似する褐灰色土や灰黄褐色土が堆積し、標高の低い西溝は上層にⅣ層に類似する褐色土等、下層に東溝や北溝と同様な土が堆積している。東溝や北溝は北側に別の墳丘が存在しないため、墳丘の流出土が堆積しなかったと考えられる。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。なお、周溝の北西部でSI29と重複しているが、検出作業時に確認できず、周溝掘削後にSI29が存在することを壁面で確認した。出土遺物からSI30同様、SZ41より新しい遺構と考えられる。

遺物出土状況 弥生土器と須恵器が、墳丘や周溝の埋土から出土した。須恵器の鉢(96)は東溝の南端付近で底面から浮いた状態で出土した。周溝の浅い部分であることから、後世に流入したと考えられる。その他、SI29と周溝の重複部分で出土した須恵器は、SI29出土遺物として扱った。弥生土器は墳丘上面で散在して出土した。

出土遺物 96は須恵器の鉢である。口縁部は直線的に開き、体部上半に最大径がある。最大径の部分には横位の沈線を施す。底部外面は、静止ヘラ削りする。胎土から、美濃須衛窯の製品である可能性がある。

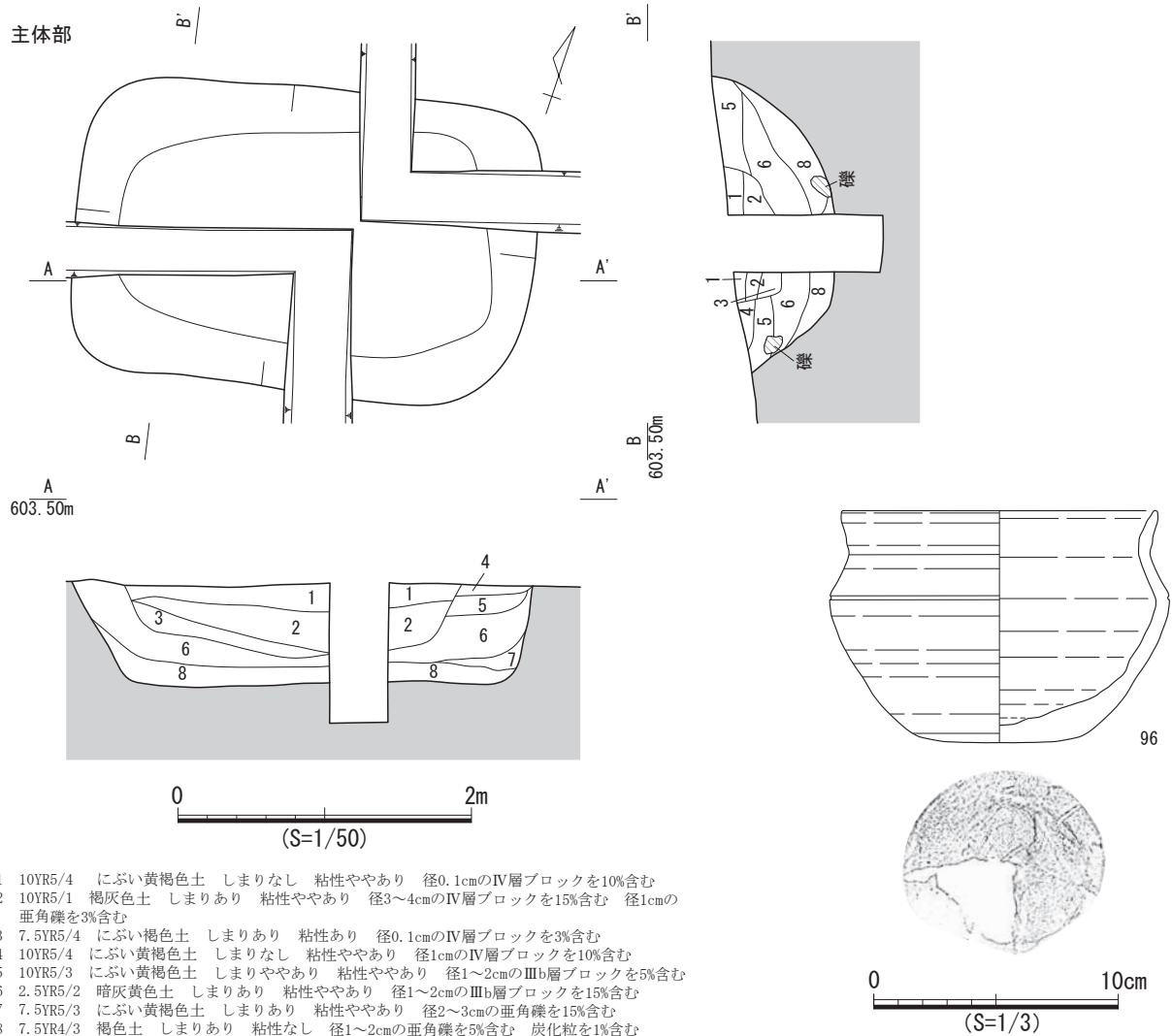


図89 SZ41遺構図(3)、出土遺物

時期 重複関係からは弥生時代末～古墳時代初めのSZ32より新しいが、周溝の重複状況から、大きな時期差はないと考えられる。

SZ42 (図90・図91)

検出状況 BQ10～BR12グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の南部中央、尾根から南へ下がった傾斜面に立地し、現況地形測量においてわずかではあるが墳丘を確認した。SZ42の北西部でSZ41の周溝と重複する。土層断面から、SZ42はSZ41よりも新しいと判断した。SZ41は、SZ32より新しいため、構築順はSZ25<SZ29<SZ32<SZ41<SZ42である。

方台部 北辺と東辺、西辺が直線的で、隅部は丸くなる。南辺は盛土範囲を把握できなかったため明確でないが、12層の南端と等高線の状況から、平面は方形と考えられる。方台部には、各辺に直交するようにL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。墳丘は、方台部南側から盛土を施したと考え

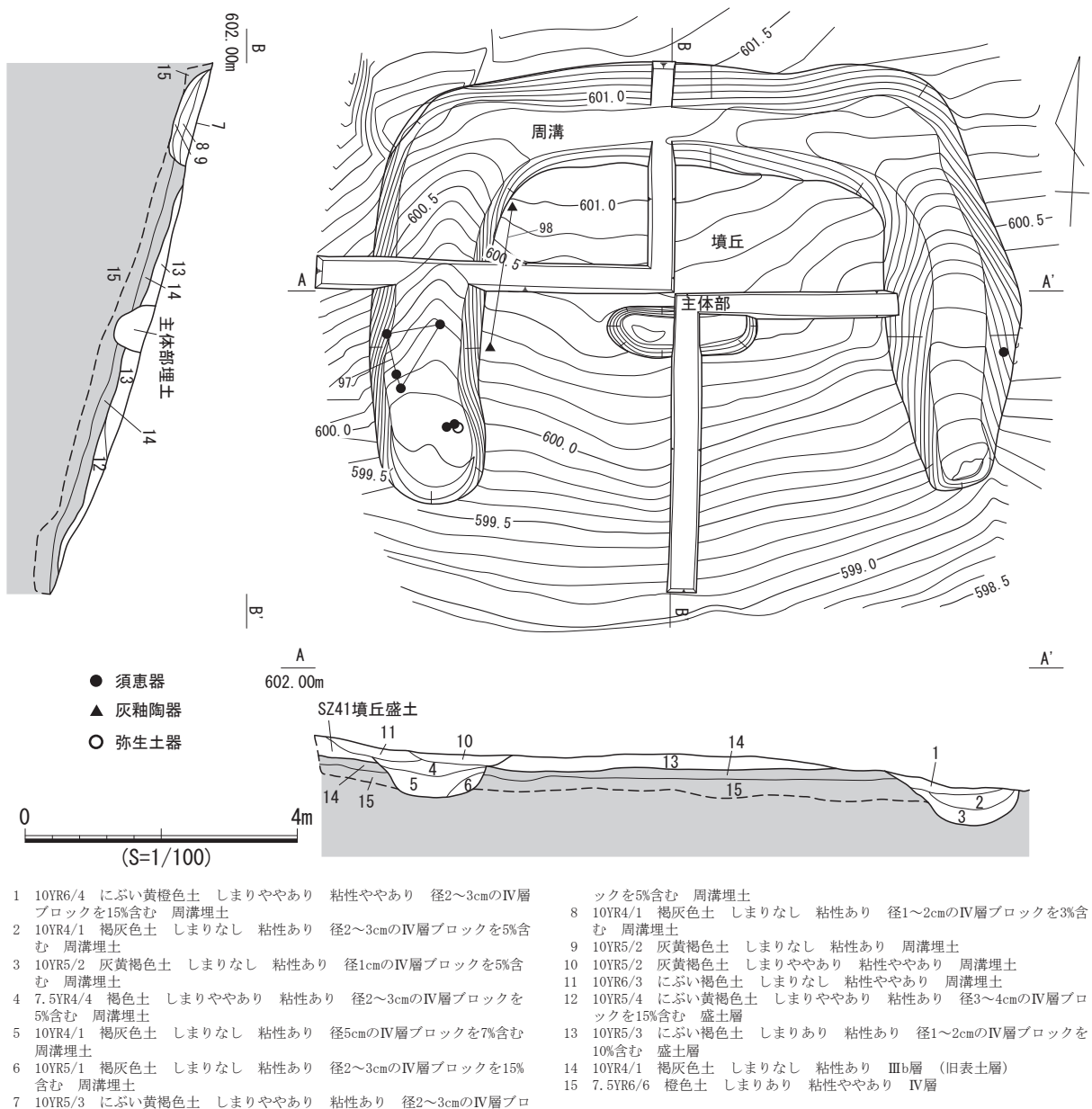


図90 SZ42遺構図(1)

られる。盛土の色調はにぶい黄褐色土等で、IV層に類似する。方台部中央で、方台部の東西方向が長軸となる長楕円形の土坑1基を検出した。III b層上に盛土した後に掘削された土坑であることから、SZ42の主体部と考えられる。断面は逆台形に近く、最大の深さは0.50mである。埋土は、IV層と比較すると若干暗めの色調で、ほぼ水平に堆積している。

周溝 斜面に設置されたため、傾斜の下方となる南溝は確認できなかった。その他は方台部を囲むように検出した。いずれの溝も直線的で、接合部もほぼ直交する。断面は半円形に近い。周溝の幅は最大で1.96mで、東溝の南端が狭い。深さは0.36m～0.52mで場所による大きな差はない。埋土の大半は、褐灰色土や灰黄色土等のIII b層に近い色調の堆積である。周溝の底面はほぼ平坦で、埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 弥生土器や須恵器、灰釉陶器が墳丘や周溝の埋土から散在して出土した。特に遺構の南西部に多い。大半は表土層に近い高さで出土していることから、後世に何らかの理由で持ち込まれたと推定されるが、接合するものは少ない。

出土遺物 97は須恵器の広口壺である。短い口縁部が直線的に開く。98は灰釉陶器の皿である。口縁端部が外反し、高台は低い。内面には自然釉が付着するが、灰釉は認められない。

時期 重複関係からは弥生時代末～古墳時代初めのSZ32より新しいが、周溝の重複状況から、大きな時期差はないと考えられる。

SZ43 (図92・図93)

検出状況 BQ12～BQ13グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の南部中央、尾根から南へ下がった傾斜面に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。北西のSZ32や北東のSZ33と位置的に近いが、重複はしない。

方台部 北辺と東辺、西辺が直線的で、南辺は盛土が残存しないため不明である。周溝の状況から平

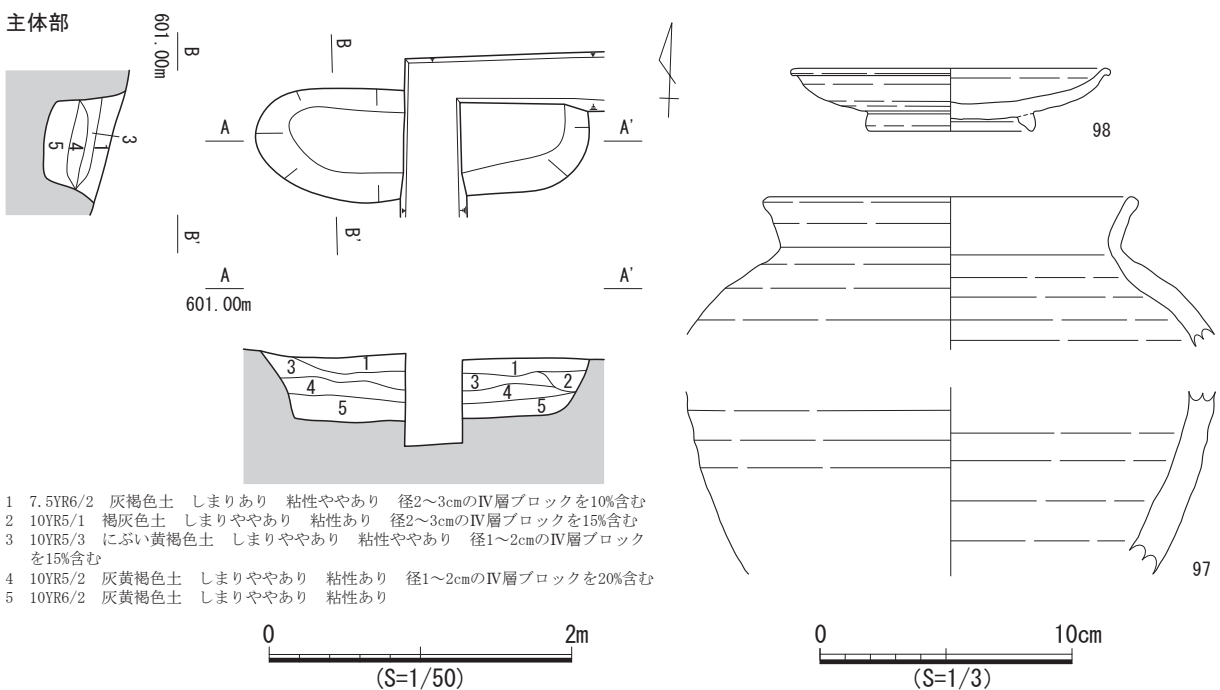


図91 SZ42遺構図(2)、出土遺物

面は東西に長い長方形と思われる。方台部には、各辺に直交するようにL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。盛土は、ほとんど残存しておらず、方台部西部のⅢb層（13層）上に褐灰色土を積み上げている（12層）。しかし、SZ35と同様に、現況地形測量の段階から方台部の検出面が0.25m下がっているため、流土と盛土の違いが認識できず、検出過程で墳丘を掘削してしまった可能性が高い。方台部中央で、方台部の長軸方向とほぼ平行な東西方向が長軸となる長楕円形の土坑1基を検出した。Ⅲb層上に盛土した後に掘削された土坑であることから、SZ43の主体部と考えられる。断面は逆台形に近いが、南壁は前述の経緯により掘削してしまったと考えられる。最大の深さは0.60mである。埋土は比較的暗い色調の褐灰色土が目立つ。

周溝 斜面に設置されたためか、傾斜の下方となる南溝は確認できなかった。その他は方台部を囲むように検出した。いずれの溝も直線的であるが、北溝と東溝の接合部には丸味がある。北溝の中央とは西溝は1段深くっており、東西溝の断面が窪み状であるのに対し、北溝は逆台形で明瞭である。

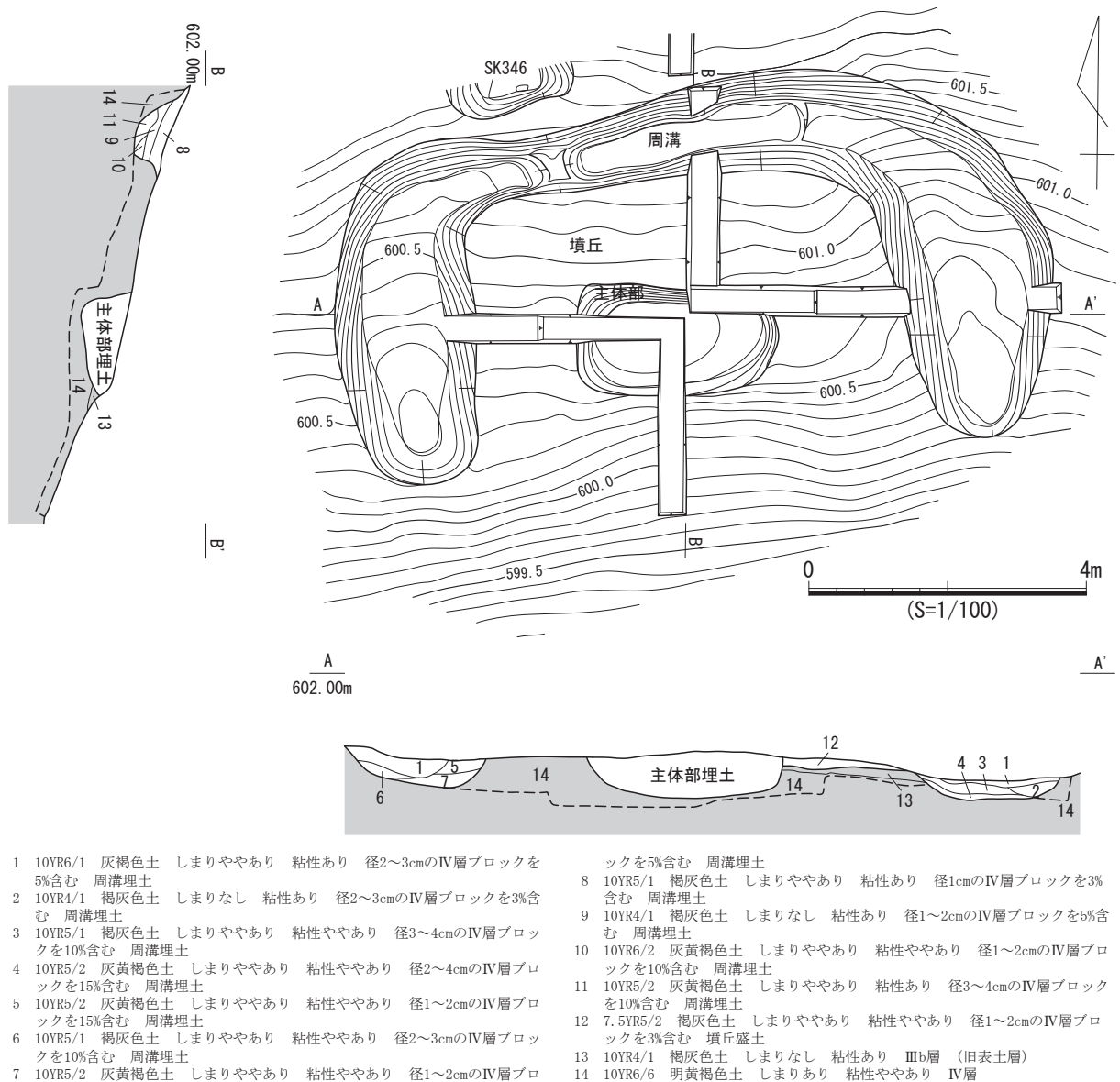


図92 SZ43遺構図（1）

周溝の幅は0.84m～2.32mで、北溝の一部が狭くなっている。深さは0.28m～0.52mで、北溝が深い。埋土は、主体部と同様にやや暗い色調の褐灰色土や灰黄褐色土が多く、中にはⅢb層と類似する堆積も認められる（3層・9層）。埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

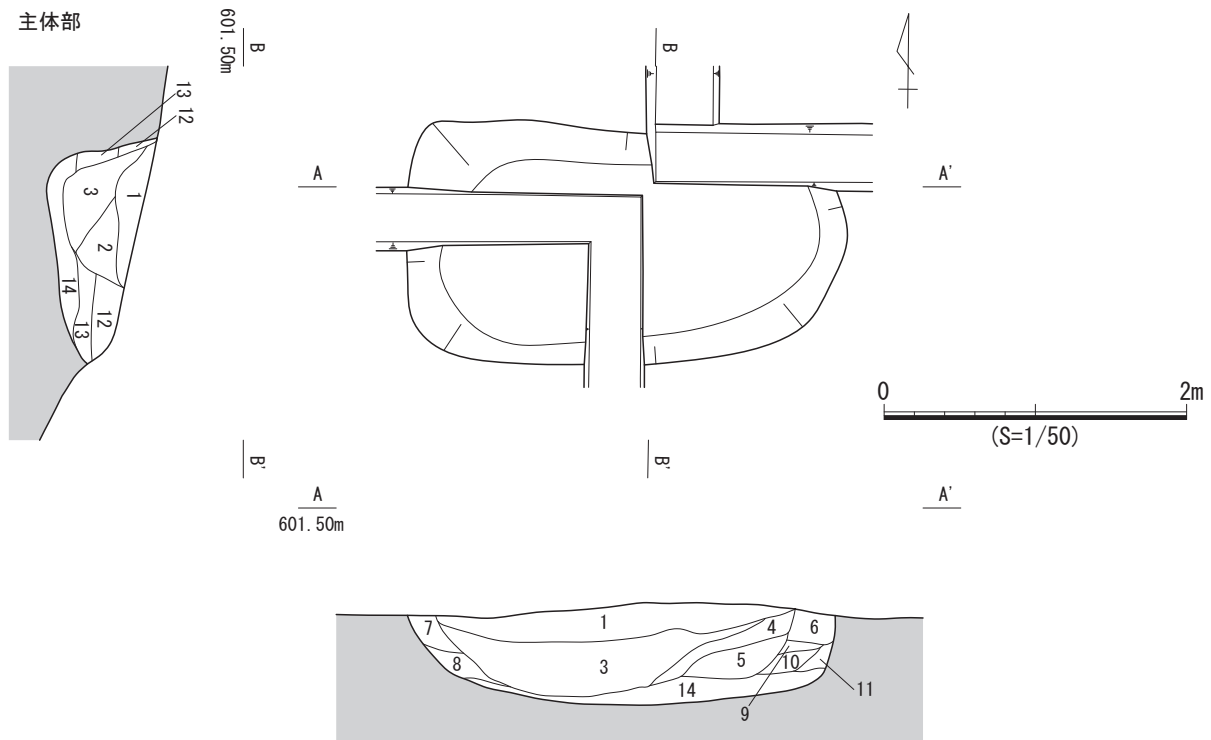
遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 出土遺物がなく、遺構の重複もないため、詳細な時期は不明である。ただし、他の墳墓と一連のものと思われることから、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と思われる。

SZ44 (図94・図95)

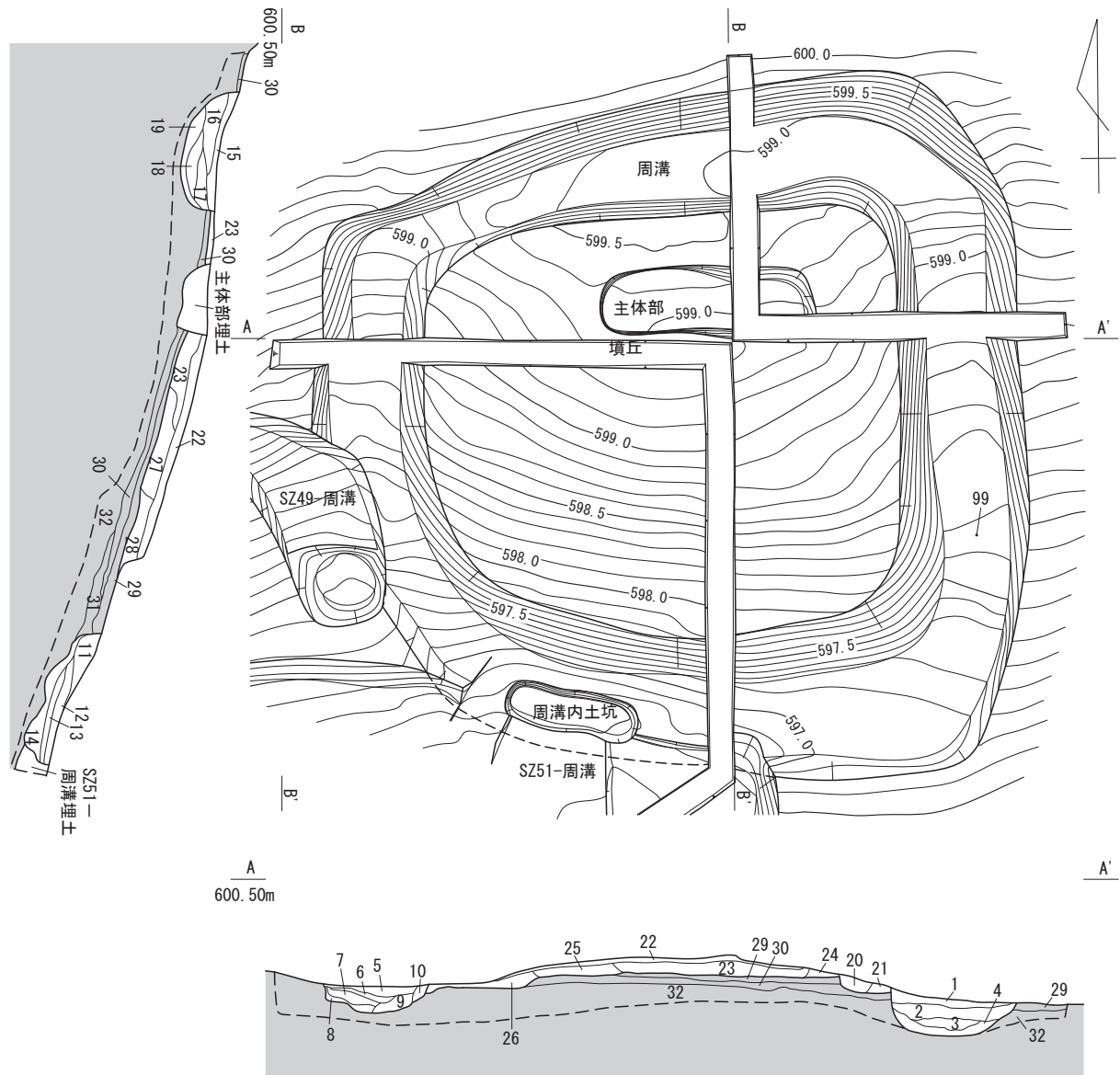
検出状況 BQ17～BQ18グリッド、Ⅳ層の上面で検出した。D地点の南東部、尾根から南へ下がった傾斜面に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。SZ44の西部でSZ49の周溝、南西部でSZ51の周溝と重複する。土層断面から、SZ44はSZ51よりも新しく、SZ49より古いと判断した。構築順は、SZ51<SZ44<SZ49である。

方台部 南西隅のみ丸味があるが、その他の辺は直線的であり、平面は正方形に近い。方台部には、各辺に直交するようにL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。墳丘は、Ⅲb層（29層）上に、方台部の東西や斜面の下方に当たる南部から盛土された可能性はあるが判然としない。20層や21層、



- | | |
|---|---|
| 1 10YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり 径2～3cmのⅣ層ブロックを5%含む | 8 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 径2～3cmのⅣ層ブロックを15%含む |
| 2 10YR6/3 にぶい黄橙色土 しまりややあり 粘性ややあり 径2～3cmのⅣ層ブロックを5%含む | 9 7.5YR6/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1～2cmのⅣ層ブロックを3%含む |
| 3 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 径3～4cmのⅣ層ブロックを10%含む | 10 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 径1～2cmのⅣ層ブロックを5%含む |
| 4 10YR6/3 にぶい黄橙色土 しまりややあり 粘性ややあり 径2～3cmのⅣ層ブロックを5%含む | 11 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 径1～2cmのⅣ層ブロックを10%含む |
| 5 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 径3～4cmのⅣ層ブロックを10%含む | 12 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1～2cmのⅣ層ブロックを15%含む |
| 6 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1～2cmのⅣ層ブロックを15%含む | 13 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 径2～3cmのⅣ層ブロックを15%含む |
| 7 10YR6/3 にぶい黄橙色土 しまりややあり 粘性あり 径2～3cmのⅣ層ブロックを10%含む | 14 10YR6/3 にぶい黄橙色土 しまりややあり 粘性あり |

図93 SZ43遺構図(2)



- 1 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり
- 2 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~4cmのIV層ブロックを5%含む
- 3 7.5YR3/1 黒褐色土 しまりややあり 粘性あり 径0.5~1cmのIV層ブロックを5%含む
- 4 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性あり 径0.5~1cmの7.5YR3/1黒褐色土ブロックを10%含む
- 5 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性あり 径0.5cmの炭化材1%含む 周溝埋土
- 6 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性なし 径1~3cmのIV層ブロック5%含む 周溝埋土
- 7 7.5YR3/1 黒褐色土 しまりなし 粘性なし 径0.1~1cmのIV層ブロック5%含む 周溝埋土
- 8 7.5YR3/3 暗褐色土 しまりなし 粘性なし 径0.1~1cmのIV層ブロック5%含む 径1.0cmの角礫1%含む 周溝埋土
- 9 7.5YR4/6 褐色土 しまりなし 粘性なし 周溝埋土
- 10 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性なし 周溝埋土
- 11 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性なし 径0.5~1cmの角礫を1%含む 周溝埋土
- 12 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性なし 周溝埋土
- 13 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性なし 径0.5~1cmのIV層ブロックを5%含む 周溝埋土
- 14 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性なし 径0.5~3cmのIV層ブロックを10%含む 周溝埋土
- 15 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 16 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性あり 径0.5~1cmのIV層ブロックを1%含む
- 17 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性あり 径0.5cmのIV層ブロックを

- 1%含む
- 18 7.5YR3/1 黒褐色土 しまりなし 粘性あり 径0.5~5cmのIV層ブロックを5%含む
- 19 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性あり 径2~5cmの10YR3/1黒褐色土ブロックを5%含む
- 20 7.5YR4/3 褐色土 しまりあり 粘性なし 盛土層
- 21 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性なし 盛土層
- 22 7.5YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性なし 盛土層
- 23 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.5~3cmのIV層ブロックを5%含む 盛土層
- 24 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 径0.5cmのIV層ブロックを5%含む 径1cmの炭化物を1%含む 盛土層
- 25 7.5YR4/3 褐色土 しまりあり 粘性なし 盛土層
- 26 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 盛土層
- 27 7.5YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性あり 径0.5~1cmのIV層ブロックを1%含む 7.5YR3/2黒褐色土ブロックを1%含む 盛土層
- 28 7.5YR4/3 褐色土 しまりあり 粘性あり 径0.5~5cmのIV層ブロックを30%含む 盛土層
- 29 7.5YR3/1 黒褐色土 しまりあり 粘性あり III層 (旧表土層)
- 30 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性あり 漸移層
- 31 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 径0.1~2cmのIV層ブロックを1%含む 径1cmの炭化物を1%含む IV層
- 32 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり IV層

0 4m
(S=1/100)

図94 SZ44遺構図(1)

26層の部分にはSZ33に類似する落ち込みが認められるが、墳丘下面の調査ではその痕跡は確認できなかった。盛土は褐色土で、IV層に類似する。方台部の北東寄り、東西方向が長軸となる長楕円形の土坑1基を検出した。Ⅲb層上に盛土した後に掘削された土坑であることから、SZ44の主体部と考えられる。断面は長方形に近く、最大の深さは、0.38mである。埋土は墳丘の盛土とほぼ同質である。

周溝 方台部を全周している。方台部を全周する周溝をもつ墳墓の中では、最も斜面の下方に位置する。周溝の北溝と東溝は直線的であるが、西溝と南溝の接合部は丸味がある。断面は半円形である。幅は1.60m～2.85mで北西の隅が特に狭い。深さは0.36m～0.52mで、西溝が若干浅い。埋土は東溝の中層（2層・3層）や西溝の西部（7層・8層）、北溝の中層（16層～18層）でⅢb層に類似する黒褐色土や暗褐色土が認められるが、南溝にはみられない。その他は墳丘からの流土と考えられる。南西部の底面で、平面形が長楕円形の土坑を1基検出した。周溝の幅におさまる規模であり、南溝と長軸方位が揃うことから、周溝内土坑とした。平面形が長楕円形で、断面の形状は長方形に近い。長

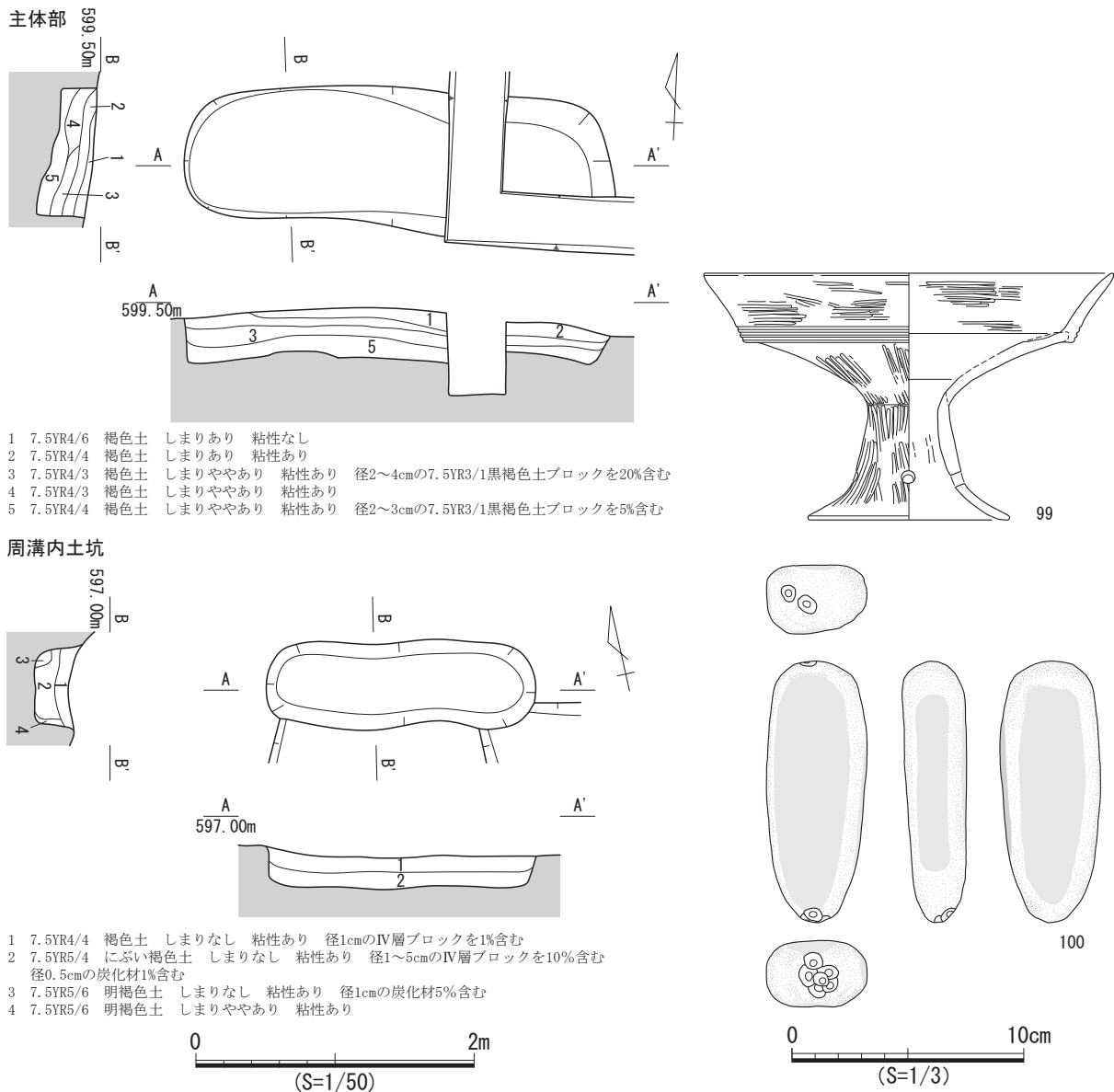


図95 SZ44遺構図(2)、出土遺物

軸1.90m、短軸0.60mで深さは0.24mあるが、掘り込み面は不明である。埋土はいずれもIV層に類似する。

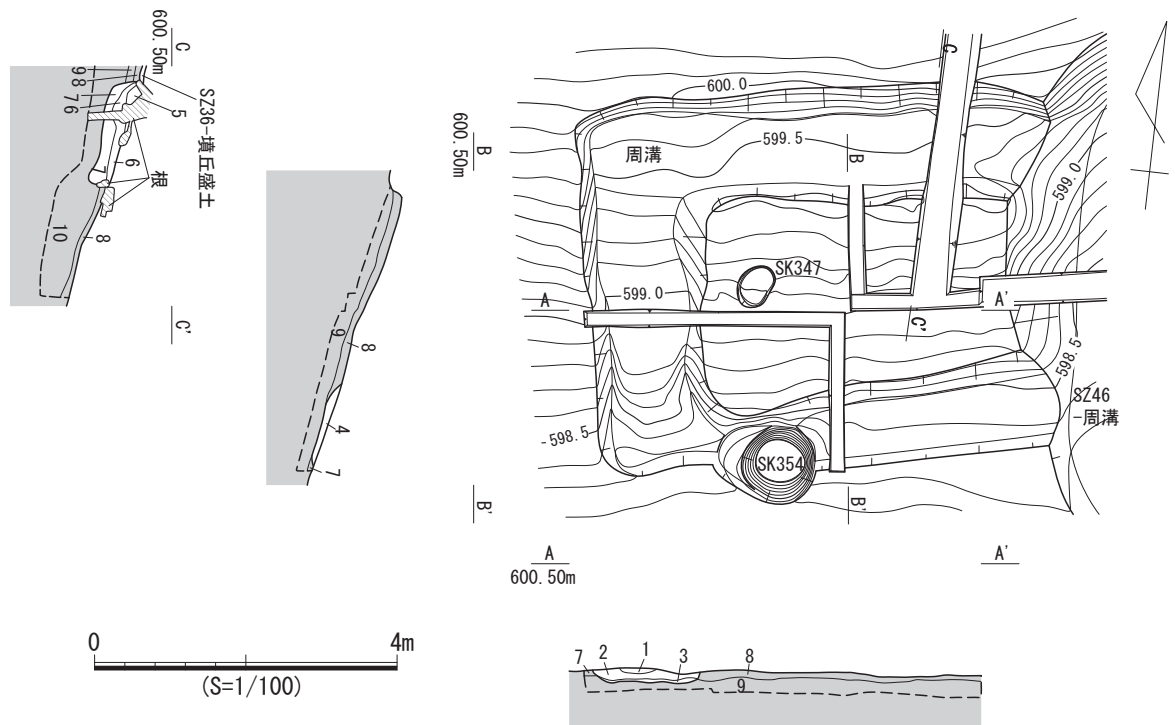
遺物出土状況 弥生土器と石器が周溝埋土から出土した。弥生土器の器台（99）はほぼ完形品で、東溝南部の埋土中、遺構検出面から0.30～0.35m下で出土した。その他、99の南西側のほぼ同じ高さから、磨石・敲石（100）が出土した。

出土遺物 99は弥生土器の器台である。坏部の口縁部は外反しながら開き、底部と口縁部の境は明瞭な段になる。坏部の底部は直線的に閉じて脚部と接合し、脚部は接地部が大きく開く。坏部の口縁部と底部の境に擬凹線が回り、脚部には四方向から円形の透孔があげられている。外面及び坏部内面にミガキ調整を施す。100は磨石・敲石である。縦長で扁平な長楕円礫の両端に敲打痕、平坦面と側面に3箇所の磨面が残る。

時期 99は北陸地方の月影式に比定できることから、弥生時代末から古墳時代初めに位置付けられる。なお、重複関係からは当遺構より新しいSZ49及び古いSZ51もほぼ同時期と考えられ、大きな時期差はないと思われる。

SZ45（図96）

検出状況 BQ19～BR20グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の東部、尾根から南へ下がった傾斜面に立地し、現況地形測量では墳丘を確認できなかった。SZ45の東部でSZ46の周溝と重複する。土層断面から、SZ45はSZ46よりも古いと判断した。また、南溝と重複するSK354より古い。



- 1 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性あり 周溝埋土
- 2 7.5YR4/3 褐色土 しまりなし 粘性あり 径0.5cmの炭化粒を1%含む 周溝埋土
- 3 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性あり 径0.5cmの炭化粒を1%含む 周溝埋土
- 4 7.5YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性あり 径0.5～1cmのIV層ブロックを5%含む 径0.5～1cmの炭化粒を1%含む 周溝埋土
- 5 7.5YR4/3 褐色土 しまりなし 粘性なし 径3～8cmの7.5YR3/2黒褐色土

- 6 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 径1～3cmのIV層ブロックを5%含む 周溝埋土
- 7 7.5YR4/3 褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径1～3cmのIV層ブロックを5%含む 周溝埋土
- 8 7.5YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層
- 9 10YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性なし IV層
- 10 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層

図96 SZ45遺構図

方台部 東部ではSZ46の周溝によって削られているが残りの辺は直線的で、平面は東西に長い長方形である可能性が高い。方台部には、北辺と西辺に直交するL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。その結果、盛土は確認できず、精査後にはIV層（16層）が露出した。なお、方台部内では主体部は検出されなかった。以上のような状況や遺構の規模は、SZ25と類似する。この他、方台部内でSK347を検出したが、SZ45との関係は不明である。

周溝 東部でSZ46の周溝と重複して東溝はほぼ消失しているが、本来は方台部を全周していたと考えられる。いずれの溝も直線的で、それぞれ直交している。断面は逆台形に近い。周溝の幅は0.80m～2.12mで北溝が広く、深さは0.12m～0.28mで全体的に浅い。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 縄文土器が1点、周溝西溝の底面付近で出土した。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

時期 墳墓に伴うと考えられる遺物がなく、重複する意向も時期が明確ではないため、詳細な時期は不明である。ただし、他の墳墓と一連のものと思われることから、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と思われる。

SZ46 (図97)

検出状況 BQ20～CR2グリッド、IV層の上面で検出した。D地点東端の尾根上に立地し、現況地形測量において明瞭な墳丘を確認した。北東部でSZ37の周溝、西部でSZ45の周溝と重複する。土層断面から、SZ46はSZ37とSZ45よりも新しいと判断した。

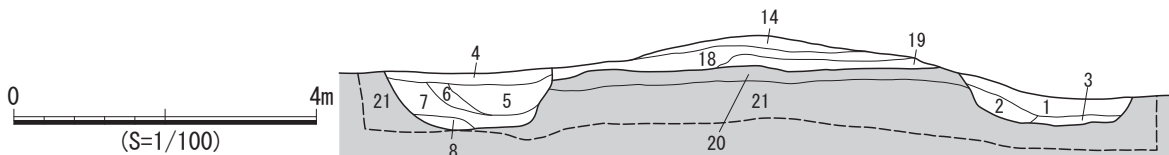
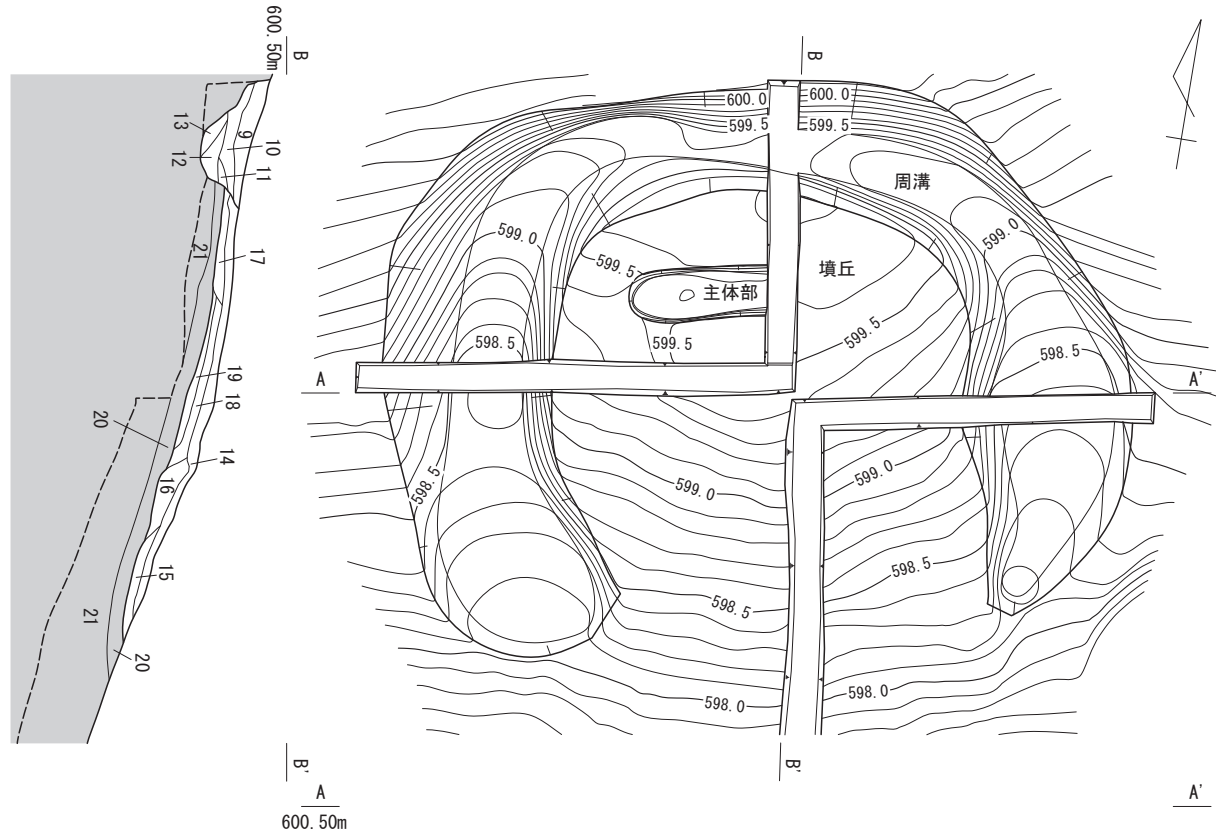
方台部 北辺は比較的直線的であるが、東西辺は湾曲する。南辺は盛土範囲を把握できなかったため明確でないが、土層断面や等高線から全体の平面は不整な方形と考えられる。方台部には、東辺と西辺に直交するようにL字形のトレンチを2箇所設定して掘削した。墳丘は、方台部中央から順に盛土しており、盛土には、IV層に類似するにぶい黄橙色土が用いられている。方台部の北西部で、東西方向が長軸となる長楕円形の土坑を1基検出した。Ⅲb層（20層）上に盛土した後、掘削された土坑であることから、SZ46の主体部と考えられる。なお、トレンチ掘削時には把握できなかったため、土層図では主体部埋土を示すことができていないが、墳丘盛土の14層を除去した後に主体部は検出することができた。断面形は逆台形に近く、最大の深さは0.40mである。

周溝 斜面に設置されたため、傾斜の下方となる南溝は確認できなかった。その他は、方台部を囲むように周溝を確認した。北溝がやや直線的であるが、その他は接合部を含めて曲線的である。断面は北溝が半円形、東溝と西溝は逆台形である。周溝の幅は1.35m～2.35mで、北溝から東溝の北半が狭い。深さは0.40m～0.75mで、西溝が最も深い。西溝や北溝の下層の埋土は色調の暗いⅢb層に類似する褐灰色土や灰黄褐色土であり、その上層は墳丘からの流土と考えられるIV層に類似する堆積が認められる。周溝の底面は平坦で、埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 須恵器1点（101）が、西溝の埋土上層から出土した。

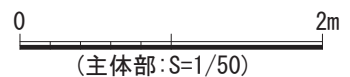
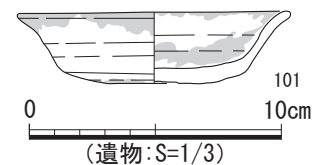
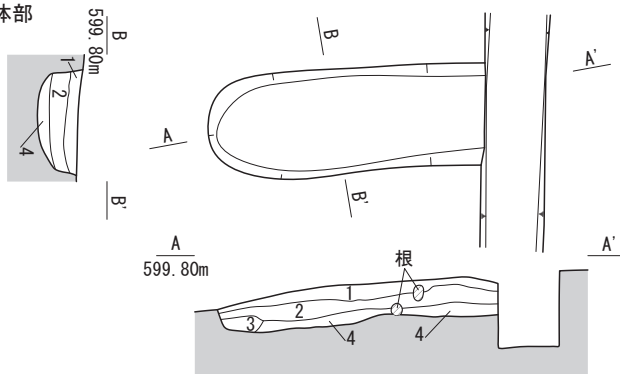
出土遺物 101は須恵器の無台坏である。口縁部は外反しながら開く。底部外面はヘラ切り痕がナデ消されている。内面と口縁端部外面にタール状の付着物が認められる。

時期 墳墓に伴うと考えられる遺物がなく、重複する意向も時期が明確ではないため、詳細な時期は不明である。ただし、他の墳墓と一連のものと思われることから、弥生時代後期から古墳時代前期の



- | | |
|---|--|
| 1 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 炭化粒を5%含む IV層ブロック10%含む 周溝埋土 | 10 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 周溝埋土 |
| 2 10YR6/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 | 11 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 周溝埋土 |
| 3 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土 | 12 10YR5/1 褐灰色砂質土 しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 炭化粒を3%含む 周溝埋土 |
| 4 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土 | 13 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 |
| 5 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 炭化粒を5%含む 周溝埋土 | 14 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 盛土層 |
| 6 10YR4/1 褐灰色土 しまりなし 粘性あり IV層ブロックを5%含む 炭化粒を10%含む 周溝埋土 | 15 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロック10%含む 盛土層 |
| 7 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 周溝埋土 | 16 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 盛土層 |
| 8 10YR5/1 褐灰色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む 周溝埋土 | 17 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 盛土層 |
| 9 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 炭化粒を1%含む 周溝埋土 | 18 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む 盛土層 |
| | 19 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを15%含む 盛土層 |
| | 20 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり III層 (旧表土層) |
| | 21 10YR6/6 明黄褐色土 しまりあり 粘性なし IV層 |

主体部



- | |
|----------------------------------|
| 1 10YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性ややあり |
| 2 10YR3/4 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり |
| 3 10YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性あり |
| 4 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり |

図97 SZ46遺構図、出土遺物

遺構と思われる。

SZ47 (図98)

検出状況 CQ3～CQ5グリッド、IV層の上面で検出した。D地点東端の尾根上に立地する。現況地形測量の段階では北側のSZ38と一体の墳丘と考えていた。SZ47の北部でSZ38の周溝、東部でSZ40の周溝、南東部でSZ39の周溝、南西部でSZ50の周溝と重複する。検出状況と土層断面から、いずれの遺構よりも古いと判断した。構築順は、SZ47<SZ38<SZ40<SZ39である。

方台部 北辺と西辺は直線的であるが、北辺はSZ38の周溝によって削られている可能性がある。東辺と南東部をSZ39とSZ40に削られるが、SZ39の墳丘下面ではSZ47の周溝は確認できなかったことから、平面は東西に若干長い長方形と考えられる。当初SZ38と同じ墳丘と考えていたため、南北方向のトレ

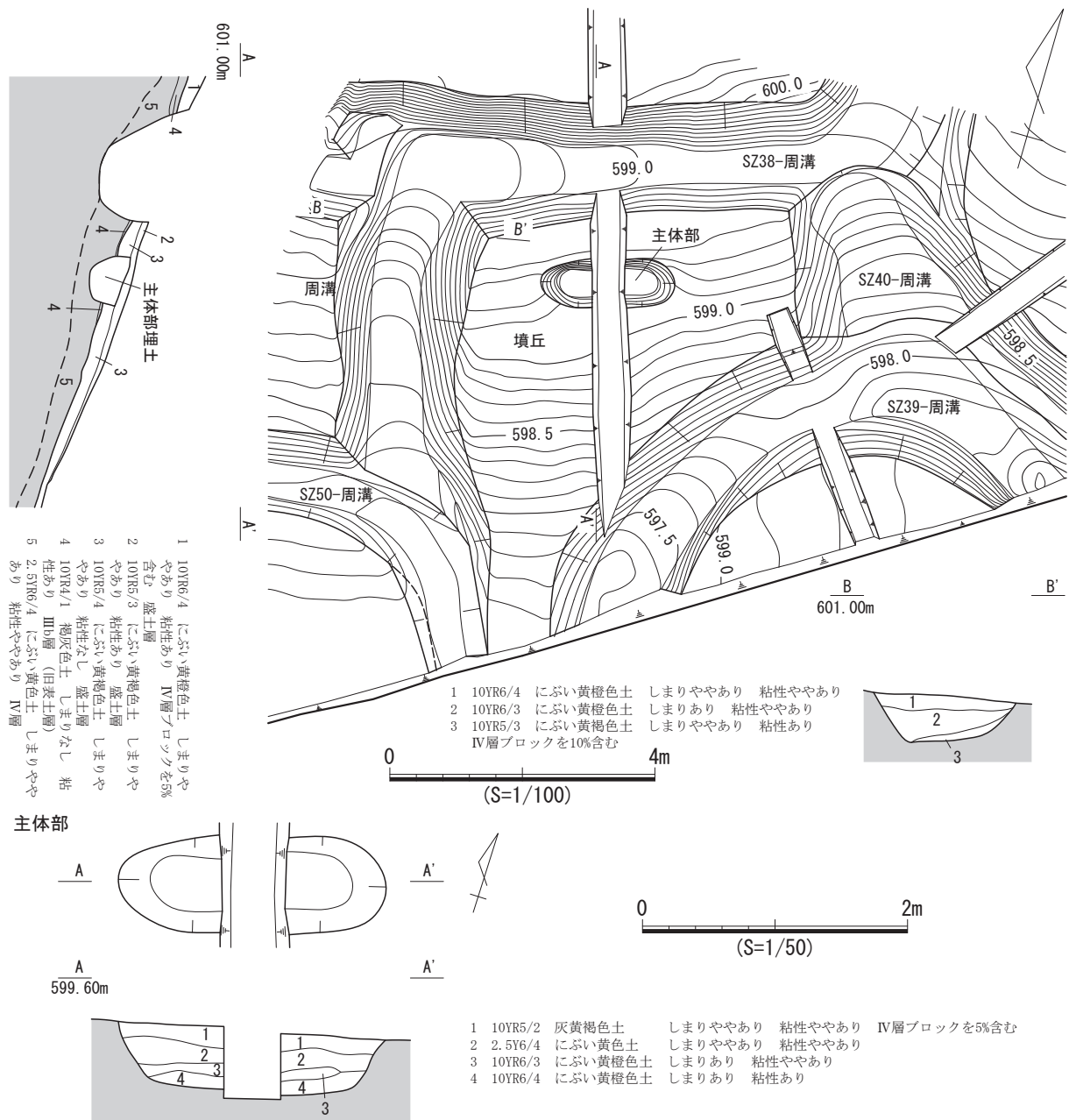


図98 SZ47遺構図

ンチを1箇所設定して掘削した。盛土は、Ⅲb層（4層）上にⅣ層に類似するにぶい黄橙色土を積み上げている。方台部の北西寄り、東西方向が長軸となる長楕円形の土坑1基を検出した。Ⅲb層上に盛土した後に掘削された土坑であり、その後さらに盛土されていることから、SZ47の主体部と考えられる。断面は東西方向が逆台形、南北方向が半円形である。本遺構の長軸は、方台部の長軸とほぼ平行で、最大の深さは0.50mである。埋土は墳丘と色調が類似するにぶい黄褐色土であるが、1層のみやや色調の暗い灰黄褐色土が認められる。

周溝 残存しているのは西溝のみである。ただし、SZ38の周溝底面と東溝が重複する部分が直交する段になっており、SZ38の周溝埋土として一括して掘削してしまった可能性がある。前述のようにSZ39の下面にSZ47の東溝が続かないため、南溝は存在しない可能性が高い。西溝の断面は逆台形で、幅は1.70m、深さは0.70mである。埋土はにぶい黄褐色土であり、Ⅳ層に類似する。周溝の底面はほぼ平坦で、埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 重複関係からは弥生時代末～古墳時代初めのSZ38より古いと考えられるが、周溝の重複状況から、大きな時期差はないと考えられる。

SZ48（図99・図100）

検出状況 BR12～BS14グリッド、Ⅳ層の上面で検出した。D地点南部の中央、尾根から南へ下がった傾斜面に立地し、現況地形測量において墳丘を確認した。SZ48の南東部でSZ05の周溝と重複する。土層断面から、SZ48はSZ05よりも古いと判断した。

方台部 南辺がSZ05によって削られているが、その他の辺は直線的であり、平面は方形に近い。方台部には、各辺に直交するようにL字形にトレンチを2箇所設定して掘削した。墳丘は、周溝内側の傾斜が低い南部に堤状に28層～31層を盛土し、その後斜面上方側を地形に合わせて水平に盛土している。墳丘最上層の24層のみ、堤状の盛土の南側にも認められる。墳丘盛土は、堤状盛土内側の最下層に当たる27層のみ、Ⅲb層に類似する暗褐色土であり、その他はⅣ層に類似する褐色土が用いられる。方台部の中央やや北寄り、東西方向が長軸となる不整な隅丸長方形の土坑1基を検出した。Ⅲb層上に盛土した後、掘削された土坑であることから、SZ48の主体部と考えられる。断面は長方形で、最大の深さは0.65mである。埋土はⅣ層と類似する褐色土や明褐色土であるが、最下層の9層のみ暗褐色土である。

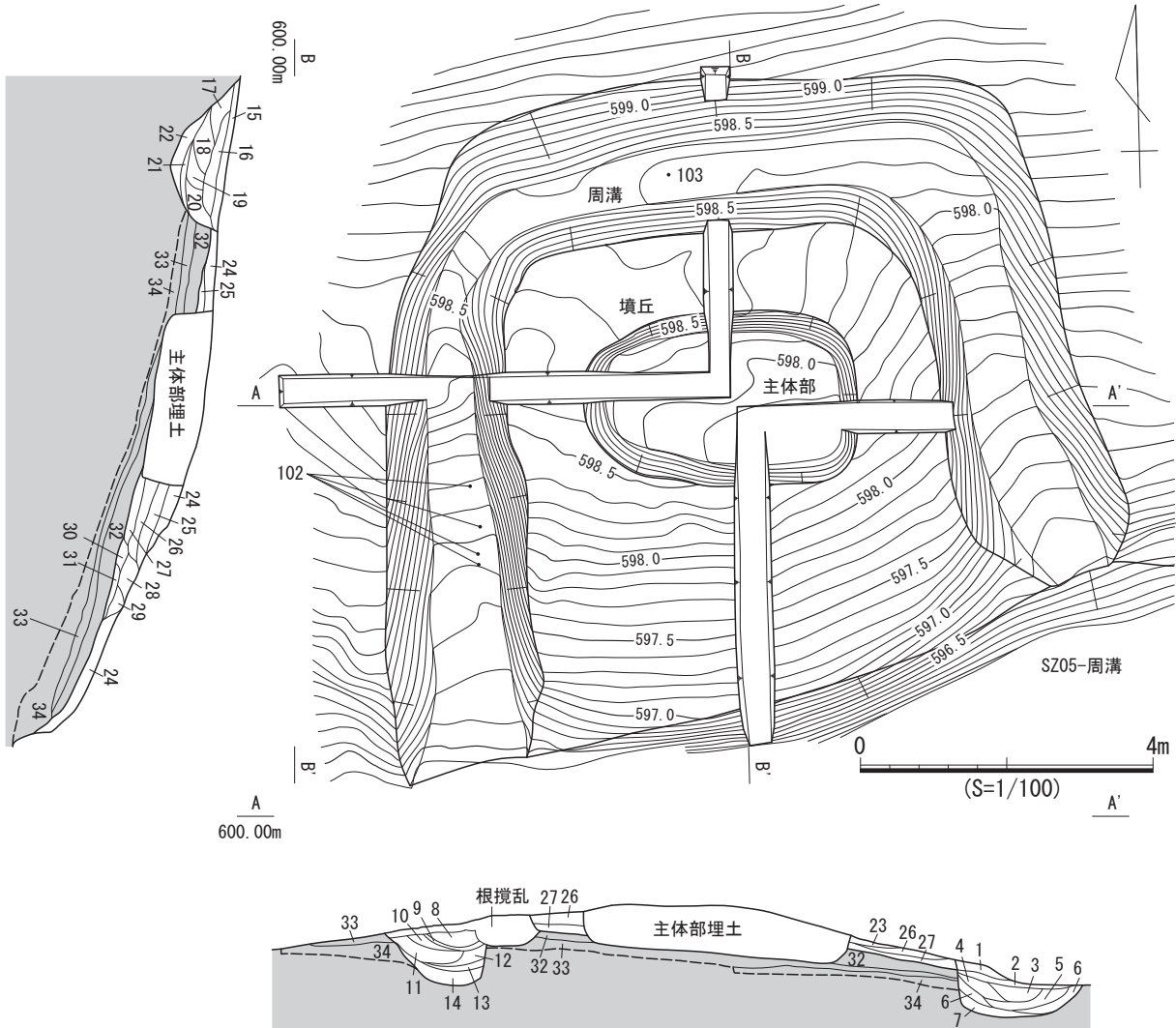
周溝 南溝はSZ05によって確認できなかった。その他は方台部を囲むように周溝を確認し、いずれも直線的で、それぞれが直交する。断面は北溝が半円形に近く、東溝と西溝は逆台形に近い。周溝の幅は1.40m～2.60mで、北西の隅が特に狭い。深さは0.65m～0.75mで場所による大きな差はない。埋土は、褐色土と黒褐色土が層状に繰り返し堆積しており、経年で自然堆積により埋没したと考えられる。埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 弥生土器、須恵器、灰釉陶器が周溝の埋土から出土した。弥生土器の大半は西溝中央部の12層から散在して出土した。弥生土器の壺（102）もその中に含まれる。須恵器も西溝から出土したが埋土の最上層からである。灰釉陶器の碗（103）も、北溝の埋土上層から出土した。

出土遺物 102は弥生土器の壺で、同一個体と思われる破片を図上で復元した。口縁部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部を内傾するように面取りする。体部はやや下部で最大径となる、丸味のある

器形と考えられる。外面はミガキ調整を施す。103は灰釉陶器の碗と思われる。回転糸切りした底面に、高く直線的に開く高台を付す。

時期 102は、出土位置からSZ48の構築に直接関係する遺物とは考えにくい。他の遺構との重複関係からSZ05より古いため、弥生時代末～古墳時代初め以前の遺構と考えられるが、周溝の重複状況から、大きな時期差はないと考えられる。



- | | |
|--|--|
| 1 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 18 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 |
| 2 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 19 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径3~5cmのIV層ブロックを7%含む 周溝埋土 |
| 3 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 20 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 |
| 4 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 21 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 |
| 5 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1~0.5cmの炭化粒を1%含む 周溝埋土 | 22 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 |
| 6 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 23 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1~1cmのIV層ブロックを3%含む |
| 7 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 24 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり |
| 8 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性ややあり 周溝埋土 | 25 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cmの炭化粒を1%含む |
| 9 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 26 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり |
| 10 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを3%含む 周溝埋土 | 27 7.5YR3/3 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり |
| 11 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 28 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを3%含む |
| 12 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径3~5cmのIV層ブロックを7%含む 周溝埋土 | 29 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり |
| 13 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 30 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり |
| 14 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 31 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性なし 17層よりも赤みがある |
| 15 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性ややあり 周溝埋土 | 32 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IIIb層 (旧表土層) |
| 16 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 周溝埋土 | 33 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層 |
| 17 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを3%含む 周溝埋土 | 34 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層 |

図99 SZ48遺構図(1)

SZ49 (図101)

検出状況 BR15～BR16グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の南部中央、尾根から南へ下がった傾斜面に立地し、現況地形測量では墳丘を確認できなかった。SZ49の東部でSZ44の周溝と重複する。南側のSZ51とは重複しない。検出状況から、SZ49はSZ44よりも新しいと判断した。SZ44がSZ51より新しいため、構築順はSZ51<SZ44<SZ49である。

方台部 方台部は北辺が直線的で、東辺と西辺は南に向かって開く。南辺は墳丘がないため不明である。方台部には、南北方向にトレンチを2箇所設定して掘削した他、墳丘中央にもL字形にトレンチを2箇所設定して掘削したが、墳丘盛土は確認できなかった。また、主体部も検出できなかった。方台部の北東部で検出した2つの土坑（SK352・SK353）は周溝埋土を掘り込んでいるため、後世の遺構と考えられる。

周溝 斜面に立地するため、傾斜の下方となる南溝は確認できなかった。その他は方台部を囲むよう

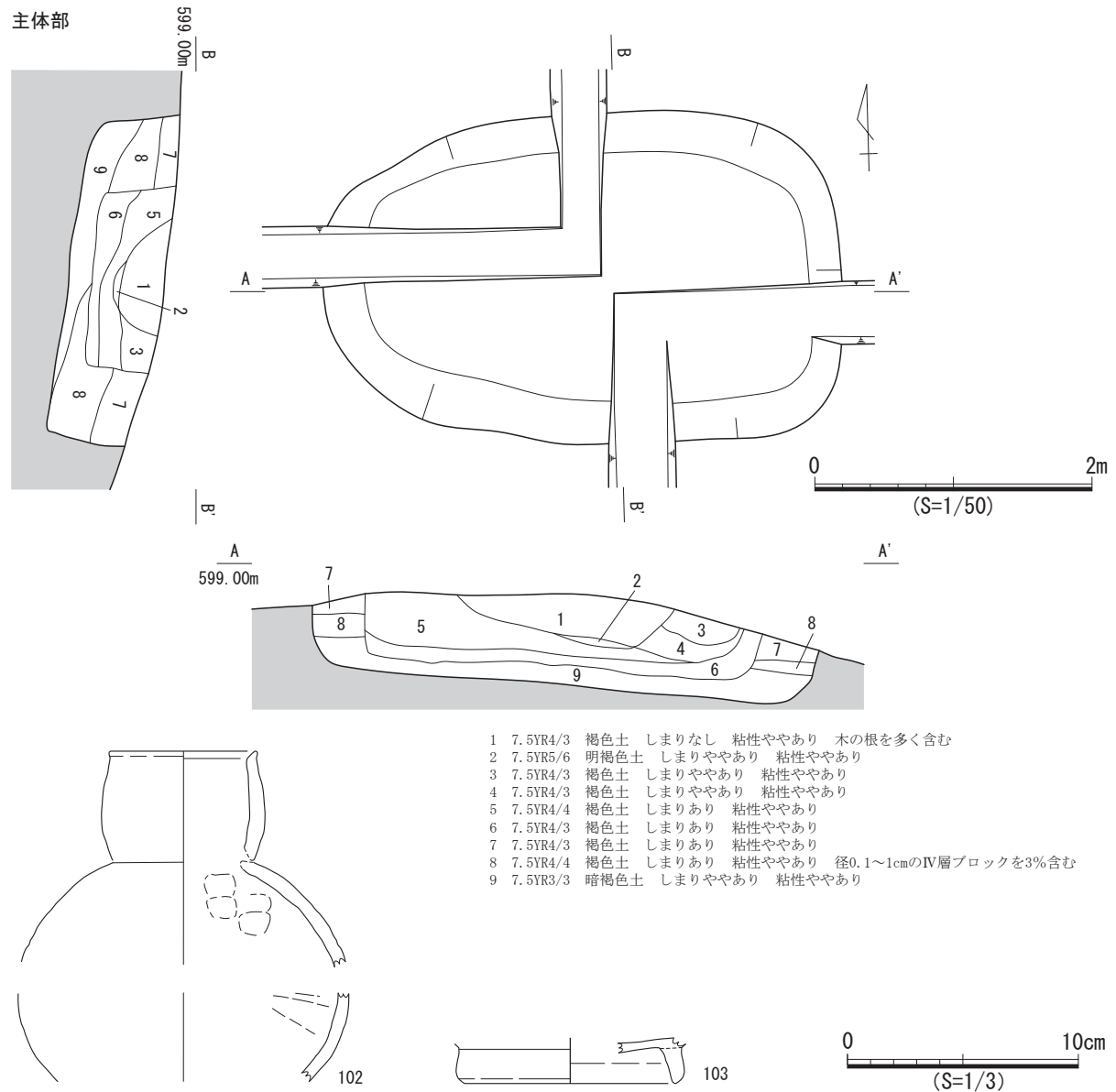


図100 SZ48遺構図(2)、出土遺物

に検出した。北溝と西溝は直線的であるが、西溝は南に向かって開く。東溝はやや湾曲する。断面は逆台形に近いが、北溝は斜面上方側の壁面の立ち上がりが緩い。周溝の幅は0.88m~2.30mで、北溝

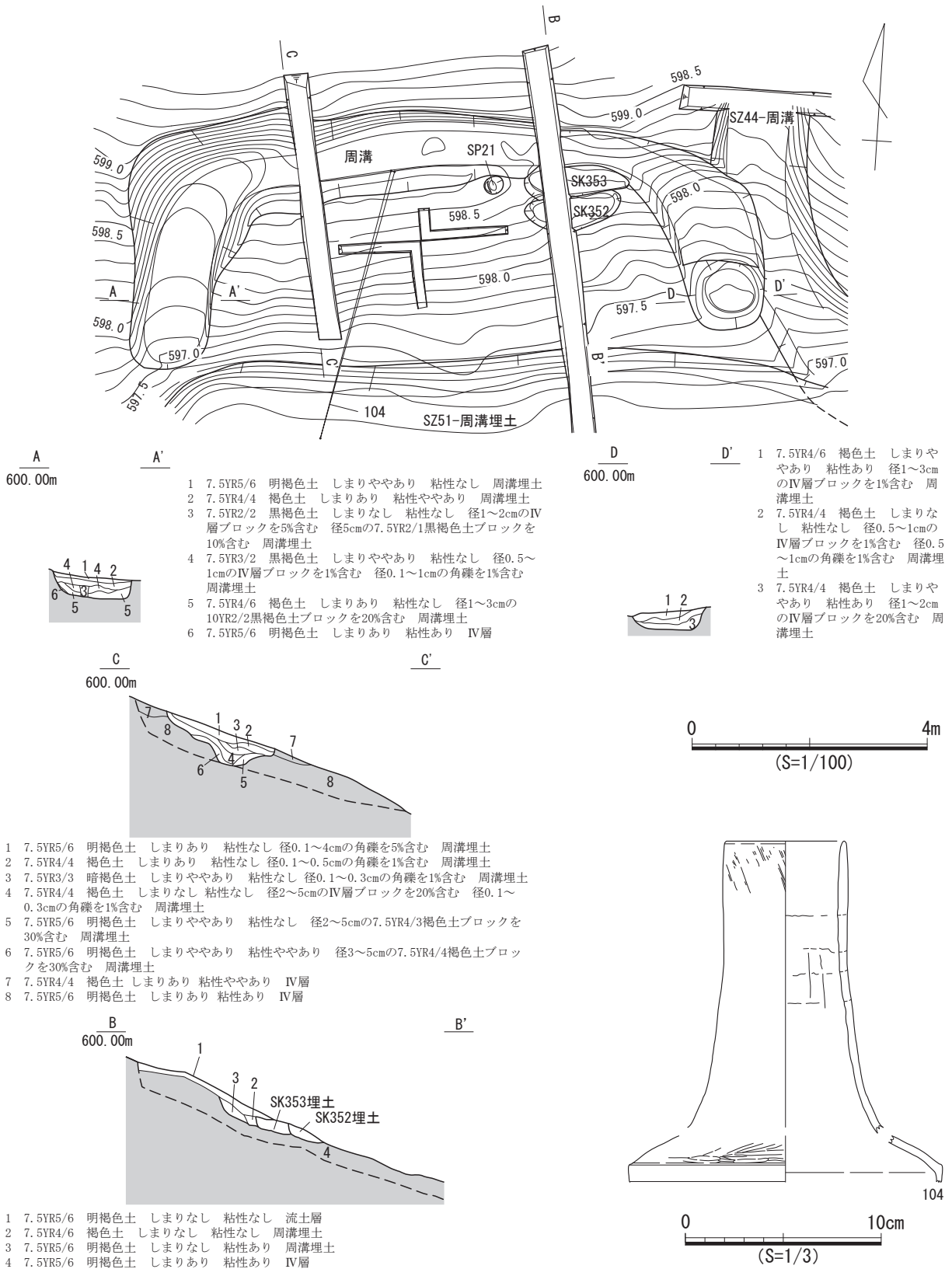


図101 SZ49遺構図、出土遺物

と東溝の接合部が特に狭い。深さは0.06m～0.26mで、他の墳墓と比較すると全体的に浅い。ただし、北西隅は斜面上方から見ると1m近く掘り込まれている。埋土は、IV層に類似する褐色土や明褐色土であるが、北溝や西溝の埋土の一部に黒褐色土も認められる。埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 弥生土器が、北溝中央の方台部に寄った位置の底面付近でまとまって出土した。それらはすべて台付装飾壺(104)の同一個体であるが、詳細な出土状況は不明である。なお、SZ51周溝の北溝から出土した破片が、1点だけであるが104と接合した。

出土遺物 104は弥生土器の台付装飾壺である。SZ38の93(図83)とは異なるタイプで、頸部に段がない。しかし、体部には93と同様の突帯が巡る。

時期 104は北陸地方の月影式期に類例があることから、弥生時代末から古墳時代初めに位置付けられる。重複関係のあるSZ44やSZ51も、出土遺物から大きな時期差はないと思われる。

SZ50(図102)

検出状況 CR2～CR3グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の東部、尾根から南へ下がった傾斜面に立地し、検出作業において周溝と主体部を確認した。南部は発掘区外である。SZ50の北東部でSZ47の周溝と重複する。検出状況から、SZ50はSZ47よりも新しいと判断した。

方台部 いずれの辺も直線的で、方形若しくは長方形の可能性がある。方台部には盛土が確認できず、検出時にIV層が露出した。現況地形測量図では微妙な起伏が確認できることから、II層との判別が困難な低い墳丘が残存していた可能性もある。方台部中央で、主体部を確認するための断ち割りトレンチを掘削した結果、東西方向が長軸となる長楕円形の土坑1基を検出した。方台部中央で検出したことから、SZ50の主体部と判断した。断面の東西は半円形で、南北も底面からの立ち上がりに丸味がある。最大の深さは0.30mである。埋土はIV層と類似するにぶい黄橙色土である。

周溝 南溝と東溝の一部は発掘区外である。周溝の北溝と東溝は直線的であるが、西溝は南半が屈曲する。断面は半円形に近い。周溝の幅は0.34m～0.80mで東溝が狭い。深さは0.22m～0.34mで西溝がやや深い。北溝の埋土は、3層を除き暗い色調の褐灰色土や灰黄褐色土であり、北側に別の墳丘が存在しないために、IV層に類似する堆積が少ないと考えられる。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 出土遺物がなく、遺構の重複からも推定できないため、詳細な時期は不明である。ただし、他の墳墓と一連のものと思われることから、弥生時代後期から古墳時前期の遺構と思われる。

SZ51(図103～図105)

検出状況 BS15～EA18グリッド、IV層の上面で検出した。D地点の中央部、尾根から南へ下がった傾斜面に立地し、現況地形測量において明瞭な墳丘を確認した。SZ51の南西部でSZ05の周溝、北東部でSZ44の周溝と重複する。土層堆積状況から、SZ51はSZ05やSZ44よりも古いと判断した。SZ44はSZ49より古いため、構築順はSZ51<SZ44<SZ49である。

方台部 方台部は北辺が蛇行するような歪な形状であるが、東辺、西辺が直線的で、隅部は丸くなる。南辺は平成27年度の調査の際に掘削してしまっており、盛土の端部は不明である。平面はその他の辺と等高線の状況から不整な隅丸長方形と考えられる。方台部には、各辺に直交するようにL字形にト

レンチを2箇所設定して掘削した。墳丘は、Ⅲb層（31層）上にまず周溝内側に斜面上方側を除いて周堤状に17層～28層を盛土し、その後その周堤内側が水平になるよう11層まで充填している。これによって、主体部を設置する面を平坦にする意図があったと考えられる。盛土は大半がⅣ層に類似する褐色土であるが、周堤部分には暗褐色土も用いられる。方台部中央北寄り、東西方向が長軸となる不整な長楕円形の土坑1基を検出した。Ⅲb層上に最初に盛土した後で掘削し、その後盛土していることから、SZ51の主体部と考えられる。なお、土層堆積状況からは、内部に別の掘り込みが存在するような堆積であるが、埋土は各土層とも非常に類似しており、棺痕跡と考えるべきか否か不明である。主体部の深さは、最大で0.90mである。埋土は、墳丘の盛土と同様にⅣ層と類似する褐色土である。なお、方台部の上面でSK363、SK364、SK365を検出したが、墳丘盛土上面から掘り込まれていることや遺構の規模から、SZ51に関連しない遺構と思われる。

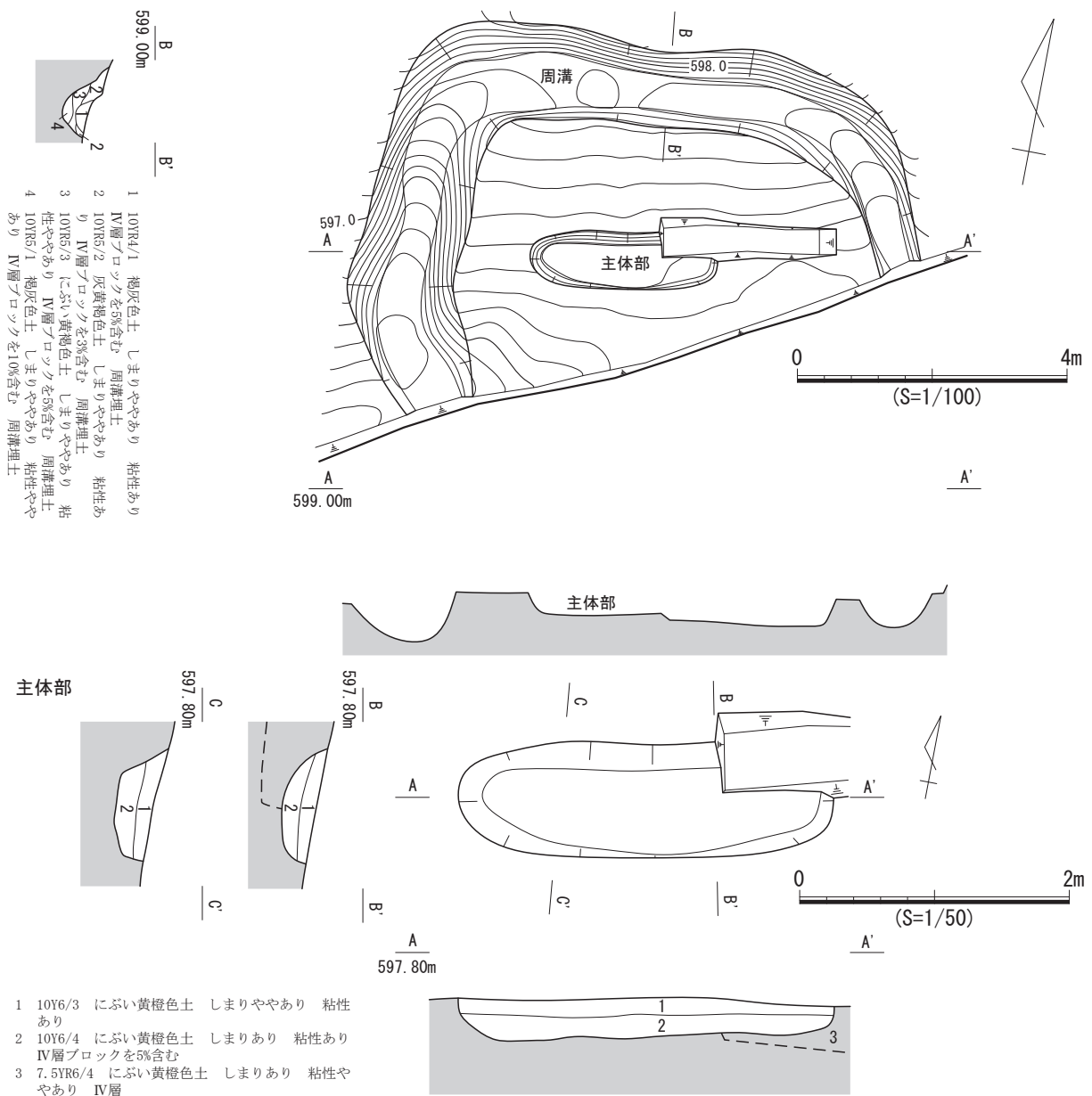


図102 SZ50遺構図

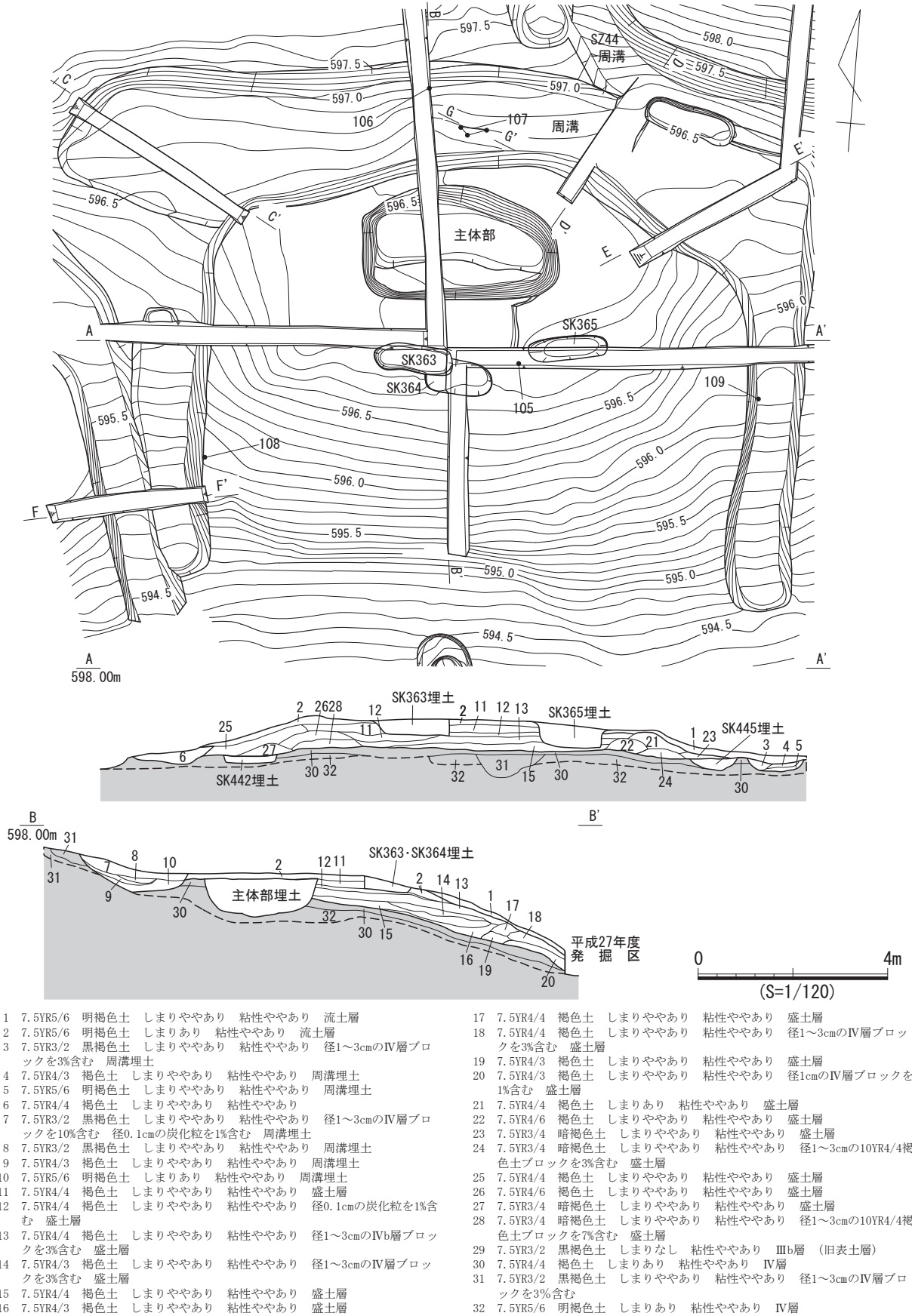


図103 SZ51遺構図(1)

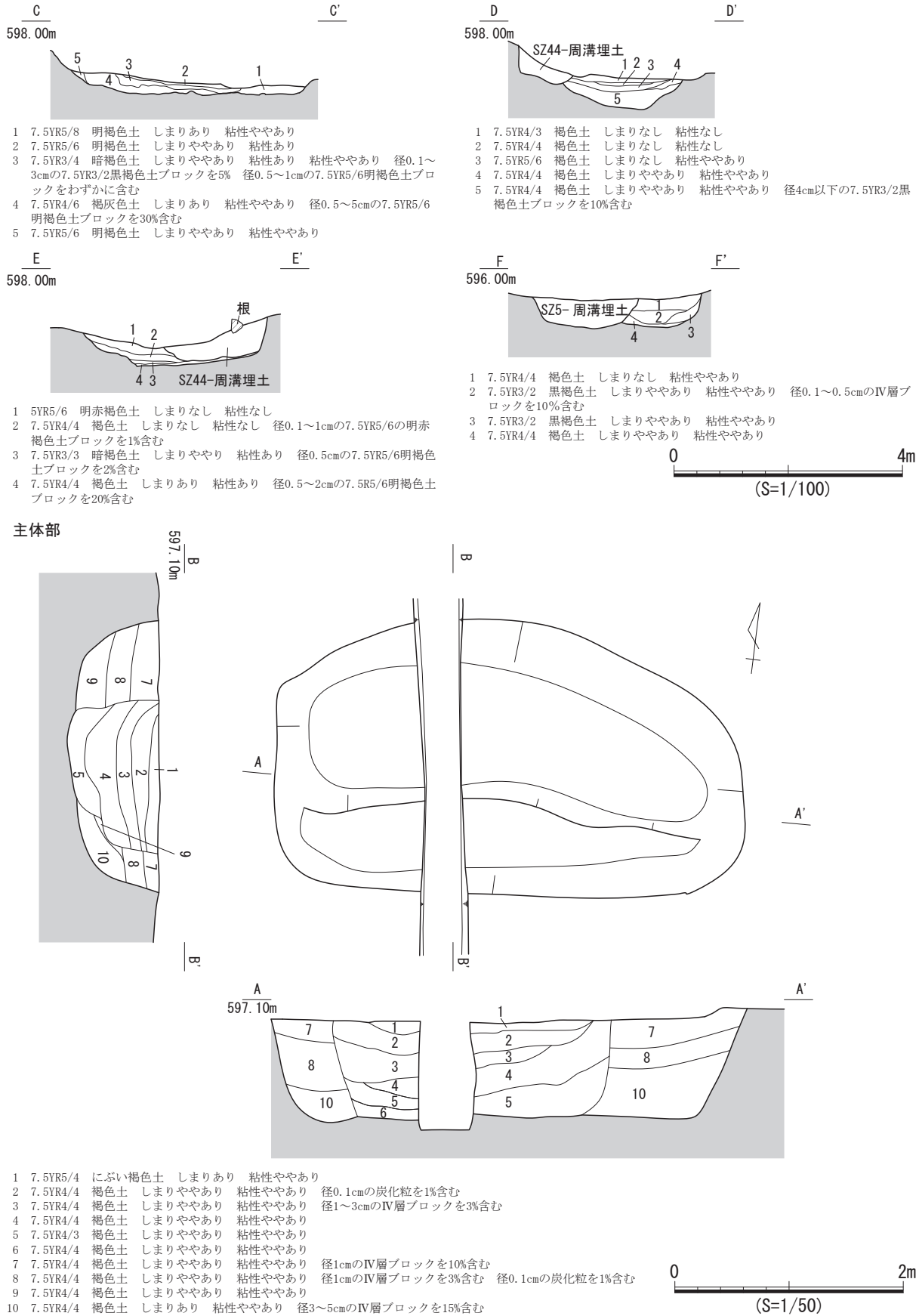


図104 SZ51遺構図(2)

周溝 斜面に設置されたため、傾斜の下方となる南溝は確認できなかった。その他は方台部を囲むように検出した。いずれも直線的で北溝と東溝は直交するが、西溝は斜面下方側に離れているため、北溝と東溝でL字形を形成する。また、北溝は西溝の位置より西に大きく張り出している。断面はいずれも不整な形状で明確でない。周溝の幅は1.15m～4.20mで、北溝に比べ西溝や東溝が極端に狭い。深さは、0.10m～0.50mで北溝がやや深い。埋土は、上層がIV層土と類似する褐色土や明褐色土、下層に色調の暗い暗褐色土や黒褐色土が堆積する。埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

遺物出土状況 縄文土器1点と、弥生土器が周溝の埋土から出土した。弥生土器の鉢(107)は、北溝ほぼ中央の埋土上層にまとまっており、同一個体と思われる破片は北溝の西部からも出土した。その破片と近接した位置では、SZ49の104と接合する破片が出土した。高坏等の脚部である(108)は西溝の埋土上層から出土した。107と類似する106は、周溝の西溝の遺物と考えられるが、遺構掘削排土中で確認したため、出土状況は不明である。蓋(105)は、墳丘中央部のトレンチ内から出土したが、記録した出土座標の標高が低すぎることから、墳丘盛土に含まれていた105がトレンチ底面に落下し、それを誤って記録した可能性が高い。高坏又は器台(109)は東溝の底面から出土した。

出土遺物 105～109は弥生土器である。105は装飾壺の蓋で、SZ38主体部から出土した94(図83)とは異なり、内面に返りが付かない。天井部に中央が凹む摘みを付け、やや外反して口縁部が開く器形で、口縁端部に斜方向の沈線列を巡らす。摘み部外面から、天井部から口縁部外面、口縁部内面に丁

周溝内遺物出土状況

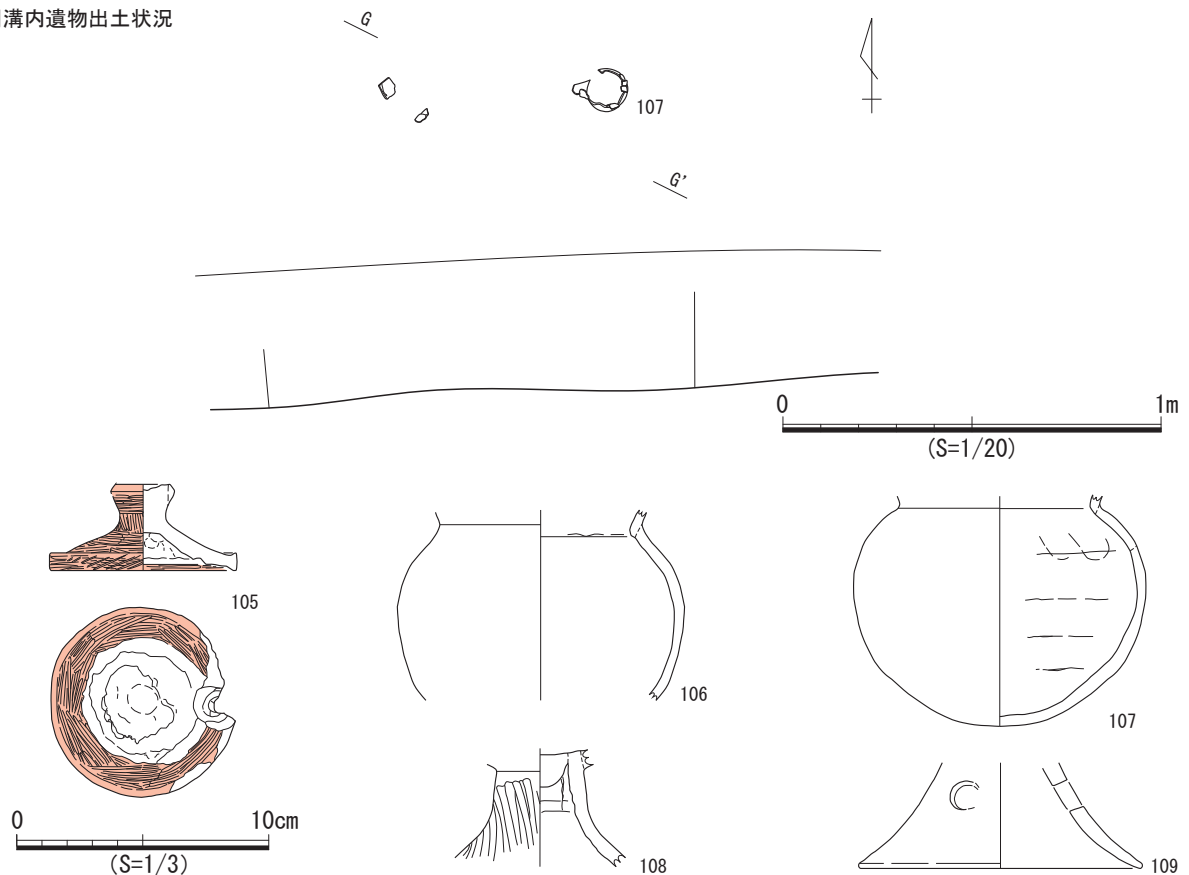


図105 SZ51遺構図(3)、出土遺物

寧なミガキ調整を施し、同じ部分に赤彩が残る。天井部内面は未調整である。106・107は鉢であるが、いずれも口縁部を欠き、107の底面は丸底で、外面にミガキ調整を施す。108は器形の詳細が不明で、高坏の脚部と思われ、外面にミガキ調整を施す。109は高坏か器台の脚部で、三方向から円形の透孔を開けている。

時期 SZ49の周溝で出土した104と接合する破片がSZ51の周溝埋土上層で出土したことは、SZ44より新しいSZ49が、SZ51より古い遺構であることと整合する。周溝上層の出土遺物は時期的に新しいが、SZ51の墳丘下面の調査で確認したSK445で、北陸地方の月影式と思われる有段口縁甕の口縁部（図117：135）が出土していることから、SZ51も弥生時代末～古墳時代初め以降に位置付けられる。ただし、SZ44より古いことから、重複する遺構と大きな時期差はないと考えられる。

第5節 縄文時代から弥生時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構としては、竪穴建物2軒、煙道付炉穴2基、土坑13基、弥生時代の遺構としては土坑1基を報告する。縄文時代の竪穴建物は、墳墓が展開する丘陵上に1軒、緩やかな斜面に1軒検出している。土坑は丘陵上から斜面や緩斜面で検出し、一部比較的狭い範囲にまとまることもある。煙道付炉穴はそれらの土坑とは離れた緩斜面で検出した。

1 竪穴建物

SI31 (図106・図107)

検出状況 BJ6～BK6グリッドの傾斜地に位置し、IV層の上面で検出した4.00m×3.80mの竪穴建物で、SZ12の墳丘除去後に確認した。SZ12の周溝の完掘時に、SZ12西部の周溝東壁で炭化物を伴う掘り込みを確認し、墳丘除去後の調査において範囲を確定した。墳墓の周溝との重複により南西部が失われているが、南辺が開くことや後述する壁際溝2から平面形は五角形となる可能性があり、建物の長軸はN-8°-Wである。

埋土 埋土は4層に分層した。褐色土と黒褐色土が交互に堆積している。1層はSZ12構築時に存在したSI31の窪みに落ち込んだ墳丘盛土の可能性もある。4層は炭化物や炭化材、焼土ブロックを多量に含んでおり、焼失建物と考えられる。

壁 壁面は底面から直線的に開き、壁の残存高は最大で0.58mである。

床面 ほぼ平坦で、硬化した貼床層はない。4層内で炭化材や炭化物の広がりを検出したが、炭化材は特に壁際で多く認められた。床面で検出した遺構は、柱穴4基、壁際溝2条、炉1基、土坑2基である。竪穴建物内の四隅に近い位置に、台形に配置されたP01～P04を柱穴とした。いずれもそれほど深さはないが、断面が長方形となり掘方が類似する。壁際溝は、西側の壁際と南東壁近くで検出した。南東壁に近いものは壁からやや離れた位置にある。炉は床面の中央で確認した。炉の底面は床面から若干窪む。炉の底面に被熱による変色が認められるが、炉石の抜取穴は確認できなかったため、地床炉と思われる。またP03とP04の間で、直径0.58m、深さ0.70mある土坑を検出した。建物の施設と考えられるが、性格は不明である。

床下 整地層は確認できなかった。

遺物出土状況 縄文土器や石器が、埋土中から散在して出土した。埋土の4層から出土したものが多く、図示した遺物も大半はこの層付近で出土している。P02、P04、P05の埋土中からも1点ずつ縄文土器が出土しており、深鉢(110)はP02から出土、深鉢(113)はP04と掘方埋土で出土したものが接合した。

出土遺物 110～113は縄文土器で、いずれも深鉢と思われる。110は口縁部片で、外面に2条の半隆起線文を施し、その間を半截竹管状工具で連続刻みする。口縁部外面には縄文のような痕跡が残る。111も口縁部片で、単節斜縄文と思われる地紋と半隆起線による区画文が認められる。SZ12の盛土で出土した37(図31)は文様や胎土の類似性から同一個体と思われる。112は体部破片で、外面に半截竹管状工具による平行沈線文を施す。113は体部下半から底部にかけての破片で、底面を欠く。体部外面には明瞭でないが、単節斜縄文の痕跡が残る。また、底部外面にはわずかに網代状圧痕が認められる。114は凝灰岩製であるが、側縁に刃部のような剥離が連続して認められることからスクレイパ

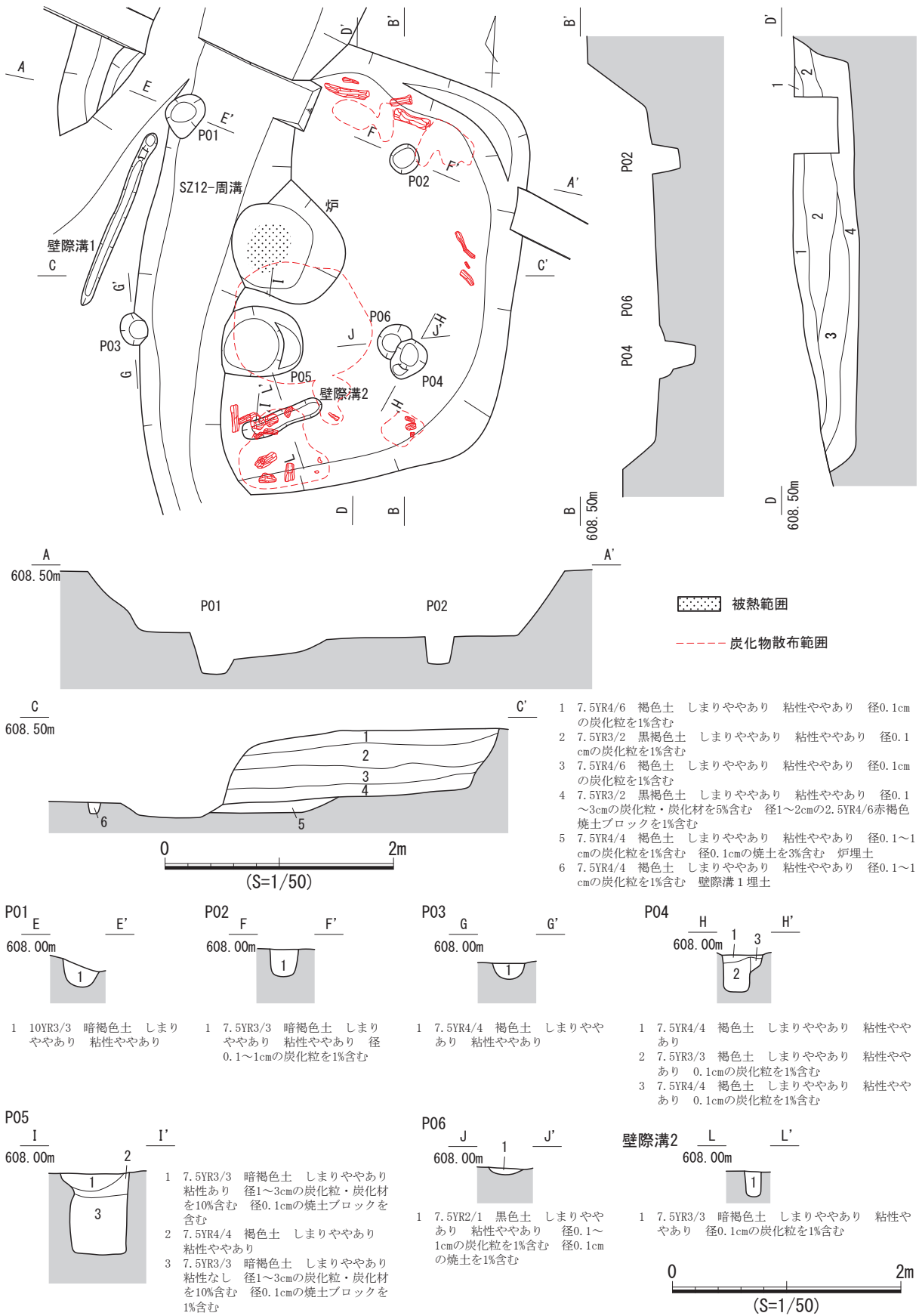


図 106 SI31 遺構図

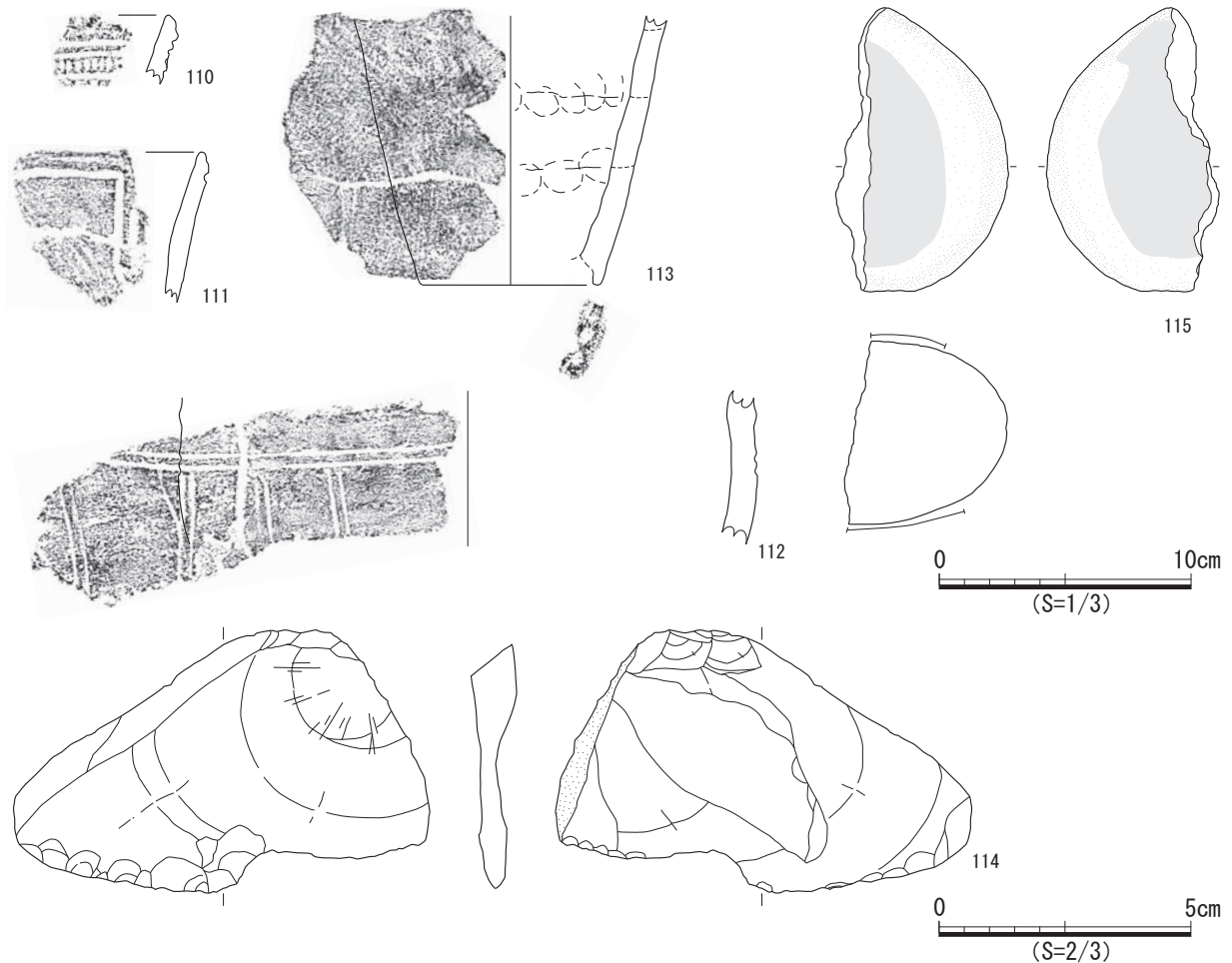


図 107 SI31 出土遺物

一とした。また、刃部と同じ側縁に微細で連続する剥離痕も認められる。115 は磨石である。扁平な円礫の平坦な両面に磨面が認められる。

時期 出土遺物から、縄文時代中期後葉の遺構と考えられる。

SI38 (図 108～図 110)

検出状況 E02～E03 グリッド、IV層の上面で検出した竪穴建物である。他の遺構との重複が著しいことや、現代の耕作等による削平のため、掘方を明瞭に検出できなかった。しかし、埋土若しくは掘方整地層と思われる堆積や石囲炉を検出したこと、石囲炉をほぼ中心として柱穴と思われる4基の遺構の配置状況から、竪穴建物と判断した。一部確認できた掘方の形状から平面形は方形の可能性があり、石囲炉や4基の柱穴と思われる遺構の位置関係から、建物の長軸はN-40° -W である。

埋土 他の遺構との重複や現代の耕作等により、埋土は削平されていた可能性も考えられる。埋土として確認した堆積は単層で締まりがあるため、床面構築土の可能性もある。石囲炉から北部の部分的に深くなる場所は、掘方として掘削されたのち、床面構築時に整地され埋め戻された可能性があるが、分層できなかった。

壁 確認できた掘方は非常に浅く、壁面の立ち上がり等は不明瞭である。掘方の深さは最大で0.13mである。

床面 ほぼ平坦で、硬化した貼床と判断できた堆積は確認できなかった。石囲炉の北側が一段深くな

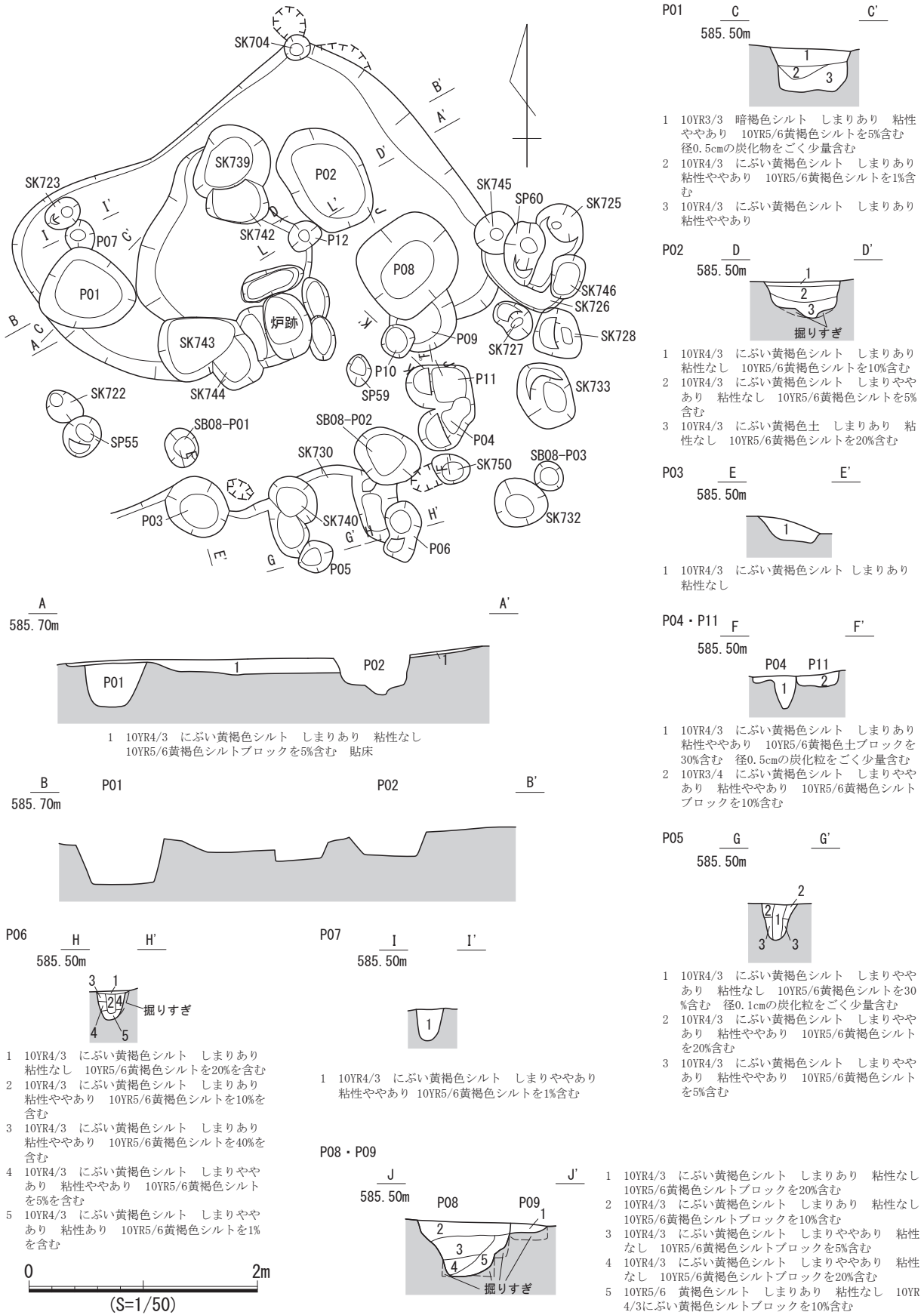


図 108 SI38 遺構図 (1)

るが、他の遺構との重複により不明瞭である。床面で検出した遺構は柱穴4基、炉1基、入口施設に関わる可能性がある柱穴2基、土坑6基である。これらは古代以降と考えられる遺構との重複関係や、出土遺物から SI38 に関連するものと判断した。柱穴は石囲炉との位置関係から、P01～P04 と考えたが、掘方の形状や深さが異なる。なお、P05 と P06 の位置は、P03 と P04 を結ぶラインの中央からやや南側であり、入口にあたる部分が想定できることから、入口施設に関連する可能性が考えられる。P08 からは縄文土器は多く出土したことから、SI38 に関連するものと考えたが、須恵器が1点出土しているため、古代以降の遺構である可能性もある。石囲炉は床面の中央で確認した。炉の中央に焼土が残存し、北側に長楕円形の円礫が残存する。東側と西側で炉石の抜取穴を確認したため、石囲炉と考えられる。

石囲炉 北側に長楕円形の円礫が残存していただいただけであるが、東側及び西側には石材を据え付けた掘方を検出した。埋土は3層に分層したが、焼土ブロックを含み、底面や円礫は被熱した痕跡が認められた。

床下 整地層の可能性のある堆積を除去した後に P08 を検出したが、須恵器が1点出土しており、上部から掘り込まれた遺構の可能性はある。

遺物出土状況 整地層とした堆積からは主に縄文土器が出土し、他に石器や灰釉陶器が少量出土した。

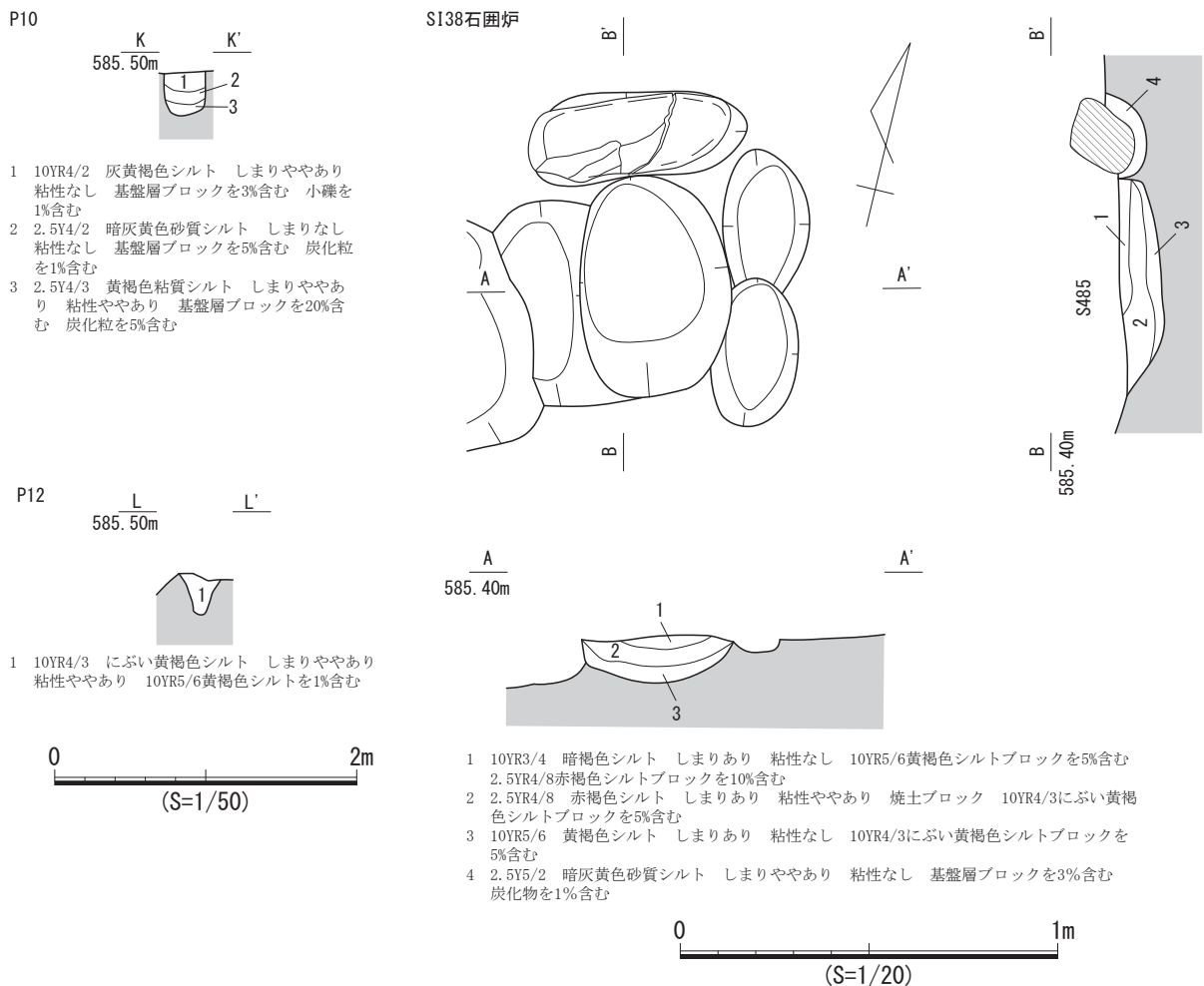


図 109 SI38 遺構図 (2)

P08 から縄文土器が多く出土したが、前述のように須恵器片も1点含まれる。また、P01 や P09、P10、P12 から縄文土器片や石器などが出土した。須恵器片や灰釉陶器片が少量出土したことから、遺構の重複関係の誤認や見落としの可能性はある。

出土遺物 整地層から出土した縄文土器2点(116・117)、P01 から出土した打製石斧1点(118)、P08 から出土した縄文土器2点(119・120)を図示した。116 と 117 は縄文土器の深鉢で、器面に RL 縄文を施すだけである。118 は打製石斧で、基部を欠損している。119 は北陸系の縄文時代中期前葉の深鉢で、三角印刻や沈線による文様が施される。120 は縄文土器の深鉢で、器面に LR 縄文を施すだけである。

時期 出土した縄文土器や、石囲炉の形状から縄文時代中期後葉のものと思われる。

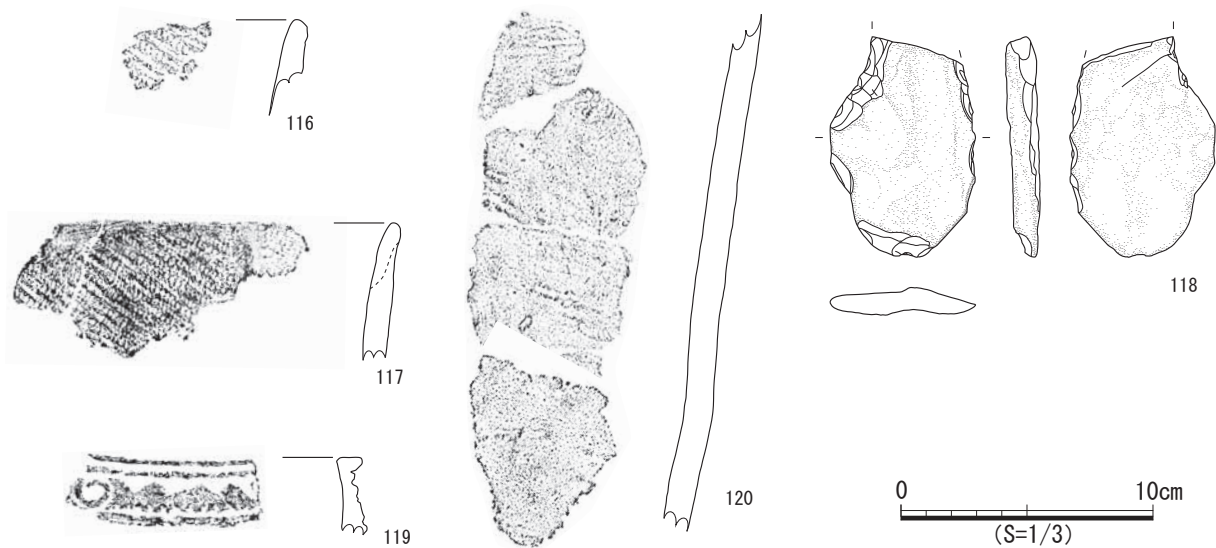


図 110 SI38 出土遺物

2 煙道付炉穴

SL02 (図 111)

検出状況 EM4 グリッド、IV層の上面で検出した焼土を伴う遺構で、その形状から煙道付炉穴と思われる。長軸方位はN-34° -Eである。

形状 燃焼坑の平面形は南端部がやや幅が広く、北に向かって幅が狭くなる。北部でトンネル状の煙道があり、やや屈曲して煙出坑が付く。底面は燃焼坑の南部から煙道部に向かって緩やかに傾斜し、煙出坑に至って急に壁面が立ち上がる。側面の壁は立ち上がりが急で、煙道部近くに被熱面を確認した。煙出坑は煙道部からやや屈曲し、煙道部よりも深くなっており、別の遺構が重複した可能性がある。

埋土 燃焼坑では3層に、煙出坑では2層に分層した。なお、煙道部の底面から円礫が出土した。

遺物出土状況 埋土中から、小片ではあるが縄文土器や石器が散在して出土した。

出土遺物 4点図示したが、121 と 122 は外面に撚糸文を施す。123 も外面に縄文又は撚糸文を施す。124 は円礫の平坦面の両面を使用面とした磨石である。

時期 出土した縄文土器から、縄文時代早期と思われる。

SL03 (図 112)

検出状況 EN5 グリッド、IV層の上面で検出した焼土を伴う遺構で、その形状から煙道付炉穴と思われる。長軸方位はN-37° -Wである。

形状 煙道の天井部は残存していないため、平面形は長楕円形となる。底面は北部が深く、南に向かって浅くなり、深い部分の壁面に焼土面が確認できることから、南側が燃烧坑、北端部が煙出坑にあたる。側面の壁は比較的立ち上がりが急で、煙出坑の上部は開く。

埋土 4層に分層したが、3層と4層には焼土ブロックを含む。

遺物出土状況 埋土中から小片であるが、縄文土器が2点出土した。

出土遺物 2点図示した。125は格子目文を施す押型文土器で、126は外面にLR縄文を施す。

時期 出土した縄文土器から、縄文時代早期と思われる。

3 土坑

SK110 (図 113)

検出状況 ED07 グリッド、IV層の上面で検出した土坑である。SZ10の周溝に1/2以上を削平されていることから、全形は不明である。2基の遺構が重複している可能性が高いが、明確な区分ができず、

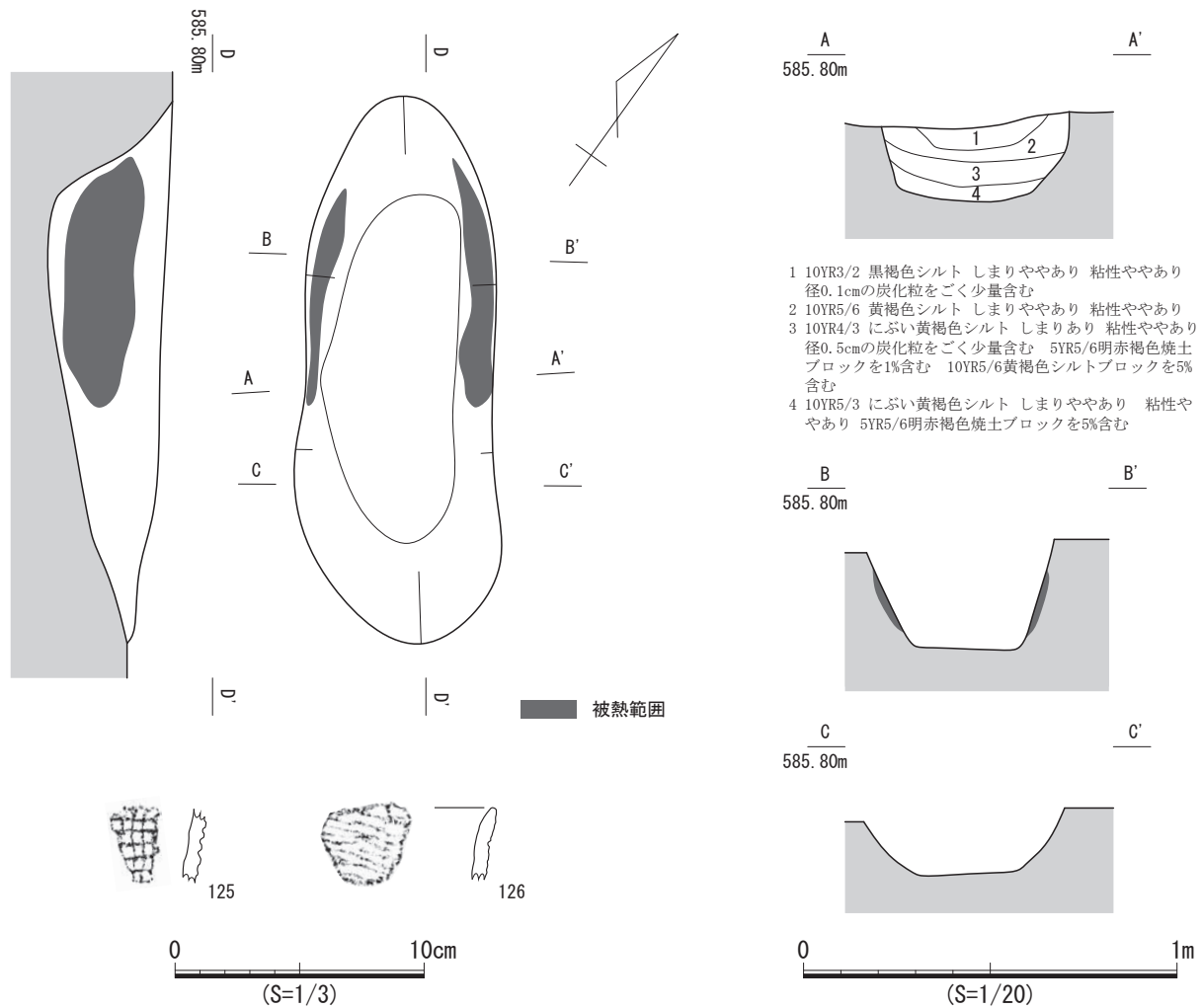


図 112 SL03 遺構図、出土遺物

性格不明である。

埋土 6層に分層した。1層から4層は5層を掘削するような堆積をしており、5層及び6層とは異なる遺構となる可能性があるが、調査時には明確に異なる遺構として確認できなかった。なお、底面の凹み部分に堆積した1層～4層は、底面で検出したSK111の直上にあたることから、同一遺構の可能性も考えられ、その場合の先後関係はSK111がSK110よりも新しくなる。一部ブロック土を含むことから人為堆積と思われる。

壁 壁面はやや開き、壁の残存高は最大で0.39mである。

遺物出土状況 縄文土器がSK111上面からのみ出土したが、図示できる遺物はなかった。

時期 遺物は混入したものである可能性があるが、SZ10よりも古いこともあり縄文時代中期と思われる。

SK111 (図113)

検出状況 ED07グリッド、IV層の上面で検出した土坑である。SZ10の周溝とSK110に削平されている

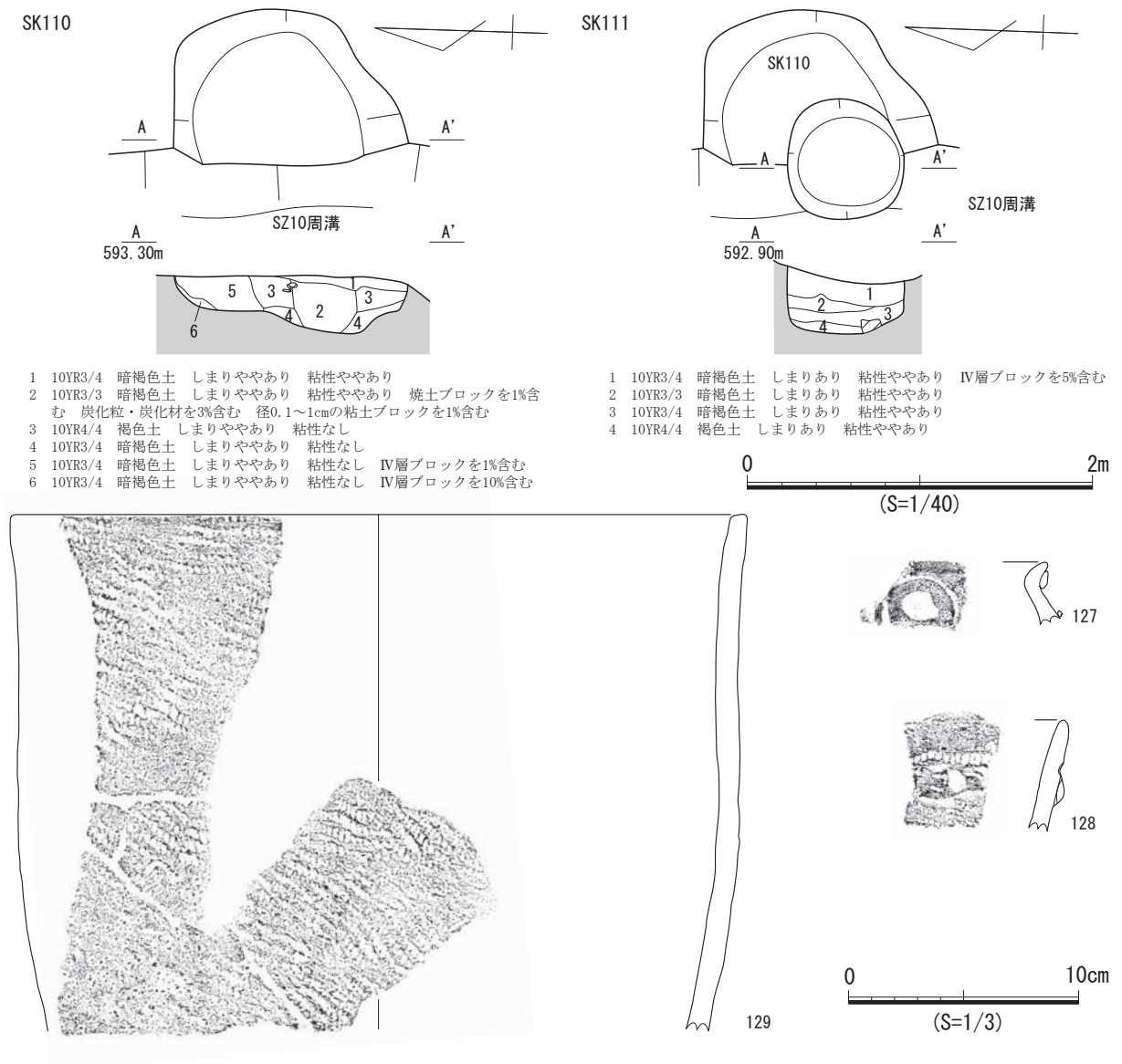


図113 SK110・SK111 遺構図、SK111 出土遺物

ことからこれらの遺構よりも古い。平面形はほぼ円形で、底面はほぼ平坦で、性格は不明である。

埋土 4層に分層したが、ほぼ水平堆積で堆積状況は不明である。土層断面図の対比では、SK110の1層から4層がこれらに連続する堆積とは考えにくい。

壁 壁面はほぼ垂直で、壁の残存高は最大で0.42mである。

遺物出土状況 縄文土器（127～129）が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 127は口縁端部が強く外反し、外面に円形の貼付文を施す。128は、直線的に開く口縁部外面に突帯を貼り付けて押圧し、その上に押し引き沈線を施す。129は、胴部から口縁部が直線的な深鉢で、外面にRL縄文を横若しくは斜めに施文する。いずれも縄文時代中期のものと思われる。

時期 出土遺物から縄文時代中期の遺構と考えられる。

SK133 (図 114)

検出状況 EC14グリッド、IV層の上面で検出した土坑である。平面形は円形で、底面は平坦である。北東部の壁面がオーバーハングする。土坑の形状から貯蔵穴の可能性が考えられるが、ほぼ完形の土器が底面から出土していることから、墓の可能性若しくは墓に転用されたことが考えられる。

埋土 2層に分層したが、2層の中央が凹み、そこに1層が堆積する。

壁 壁面はほぼ垂直で、壁の残存高は最大で0.53mである。

遺物出土状況 底面の北壁際で縄文土器深鉢（130）が、口縁部を東向きにして横位で出土した。

出土遺物 130は縄文時代中期の小型深鉢で、外面にはRL縄文が横若しくは斜め方向に施される。

時期 出土した土器から縄文時代中期と思われる。

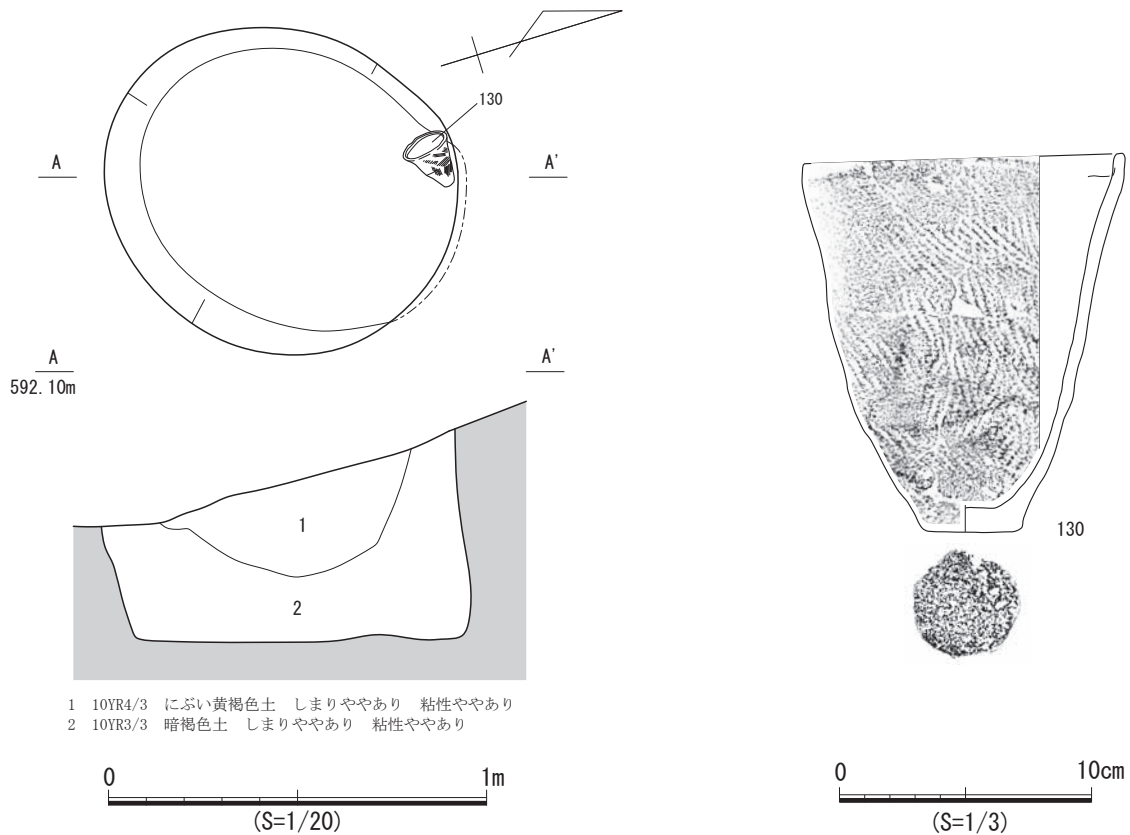


図 114 SK133 遺構図、出土遺物

SK357 (図 115)

検出状況 BS18 グリッド、IV層の上面で検出した土坑である。重複の状況から、SZ44 の周溝及び SK358 によって、0.5m程度上面を削平されていると推定される。平面はほぼ円形で、掘方底面中央近くには小穴が認められる。同様な遺構として、東側の近接した位置に SK360、約 10m南西に SZ51 墳丘下面で検出した SK444 が所在する。また、残存状態が悪いため図示しなかったが、SK368 も類似する遺構であり、当遺構の南側約 9 mに位置する。本遺構と SK360 はほぼ同じ位置にあり、SK371、SK444 とほぼ等間隔で一列に並んでいることから、落とし穴のような性格を持つ可能性も考えられるが、明確にすることはできなかった。なお、SK368 は遺構の形状は類似するが、立地する位置が離れるため、本遺構と関連づけることは難しい。

埋土 8層に分層した。6層～8層が掘方壁面の周囲に堆積した後、1層～5層が順に埋没している。4層と7層を除き、IV層と類似する色調の土で埋没している。5層は底面中央の小穴の埋土である。土層の状況から6層～8層は自然堆積と考えられるが、4層はIV層起源のブロック土を多く含むため、人為的に埋め戻した可能性がある。SZ44 の周溝と重複することから、SZ44 の構築時まで SK357 が窪みとして残っており、4層以上をその際に埋め戻したことも考えられる。

壁 壁面は底面から直線的に立ち上がる。壁の残存高は最大で 0.58mである。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 墳墓より古く、類似した掘方をもつ遺構から縄文時代の遺物が出土していることから、縄文時代に属する可能性が高い。

SK360 (図 115)

検出状況 BS19 グリッド、IV層の上面で検出した土坑である。SK357 と同様に、SK358 の底面で確認した。上端の平面は円形に近いが、底面は方形である。掘方底面中央には小穴が認められるが、他の類似した土坑底面の小穴と比較してかなり深い。同様な遺構として、西側の近接した位置に SK357、約 11m南西に SZ51 墳丘下面で検出した SK444 が所在する。

埋土 10層に分層した。埋土の堆積経過は不明であるが、1層と3層を除き、IV層に類似する褐色土や明褐色土で埋没している。10層は小穴の埋土であり、IV層に類似する。

壁 壁面は底面から直線的に開く。壁の残存高は最大で 1.24mである。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 類似した掘方をもつ遺構から縄文時代の遺物が出土していることから、縄文時代に属する可能性が高い。

SK371 (図 115)

検出状況 EA15 グリッド、IV層の上面で検出した土坑である。SZ05 の墳丘下面の調査で確認した。平面は円形に近い。掘方底面中央には小穴が認められる。同様な遺構として、約 10m北東に SZ51 墳丘下面で検出した SK444 が所在する。

埋土 10層に分層した。埋土の堆積経過は不明であるが、いずれも色調が暗いⅢb層に類似した土で埋没している。10層は小穴の埋土であり、IV層に類似する。

壁 壁面は底面から直線的に開く。壁の残存高は最大で 0.68mである。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 墳墓より古く、類似した掘方をもつ遺構から縄文時代の遺物が出土していることから、縄文時代に属する可能性が高い。

SK376 (図 115)

検出状況 BK9 グリッド、IV層の上面で検出した土坑で、尾根上に立地する。SZ16 の墳丘下面の調査で確認した。平面は円形に近い。掘方底面は平坦である。同様な遺構として、約3m南東にSK376と同様SZ16の墳丘下面の調査で検出したSK382、約6m南西にSZ15 墳丘下面で検出したSK381が所在する。なお、SK376とSK381、SK382は、遺構の形状が類似することや尾根上に連続して配置されることから、何らかの関連性が考えられる。ただし、いずれの遺構もSK357等とは異なり、底面の小穴は確認できなかった。

埋土 3層に分層した。いずれも褐色土で埋没する。

壁 壁面は底面から直線的に立ち上がる。壁の残存高は最大で0.39mである。

遺物出土状況 埋土中から、縄文土器が散在して出土した。

出土遺物 131と132は縄文土器の深鉢である。131は口縁部が緩やかに開き、口縁端部の内外面に指押さえの痕跡が巡る。132は器面に断面台形の隆帯を貼り付け、その上を棒状工具によって連続して押圧する。

時期 出土遺物から、縄文時代中期後葉の遺構と考えられる。

SK381 (図 115)

検出状況 BL7~BL8 グリッド、IV層の上面で検出した土坑で、尾根上に立地する。SZ15 の墳丘下面の調査で確認した。平面は円形に近い。底面は平坦である。同様な遺構として、約6m北東にSZ16 墳丘下面で検出したSK376が所在する。また本遺構の約10m西の同じ尾根上に縄文時代の竪穴建物であるSI31が立地する。

埋土 7層に分層した。上層である1層と2層はⅢb層に類似した暗褐色土、3層以下はIV層に類似する褐色土で埋没する。

壁 壁面は底面から垂直に立ち上がり、中程で直線的に開く。壁の残存高は最大で0.88mである。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 墳墓より古く、同様な掘方をもつ遺構から縄文時代の遺物が出土していることから、縄文時代に属する可能性が高い。

SK382 (図 115)

検出状況 BL9 グリッド、IV層の上面で検出した土坑で、尾根上に立地する。SZ16 の墳丘下面の調査で確認した。平面は円形に近い。底面は平坦である。同様な遺構として、約3m北西にSK382と同様SZ16の墳丘下面の調査で検出したSK376が所在する。

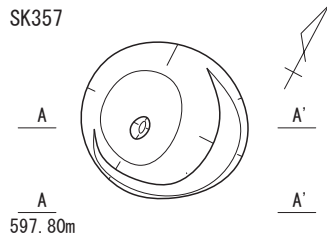
埋土 4層に分層した。1層~3層はIV層に類似する褐色土、4層のみ暗褐色土で埋没する。

壁 壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁の残存高は最大で0.59mである。

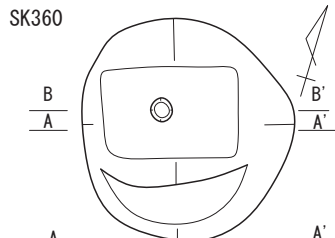
遺物出土状況 埋土中から、縄文土器1点と石器が散在して出土した。

出土遺物 133は磨石・敲石類である。棒状の川原石の先端部に敲打痕、尖り気味の長軸側面に磨痕が認められる。

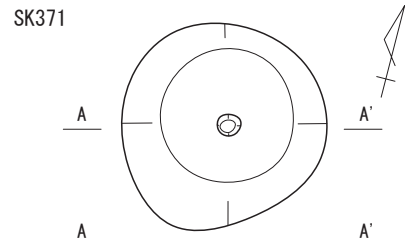
時期 出土遺物から、縄文時代の遺構と考えられる。



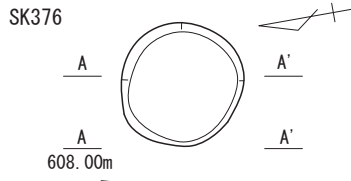
- 1 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性あり 径0.1~3cmの炭化材1%含む
- 2 7.5YR5/6 明褐色土 しまりあり 粘性あり
- 3 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性あり 径0.1~4cmのIV層ブロックを5%含む
- 4 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性あり 径1~6cmのIV層ブロックを20%含む
- 5 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 径2cmの炭化材を5%含む
- 6 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり
- 7 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりあり 粘性あり 径3cmの炭化材を1%含む
- 8 7.5YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 径0.1~2cmの炭化材を5%含む



- 1 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性あり 径2~8cmの7.5YR4/3褐色土ブロックを10%含む
- 2 7.5YR4/3 褐色土 しまりなし 粘性あり
- 3 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性あり 径3~10cmの7.5YR4/3褐色土ブロックを20%含む
- 4 7.5YR4/3 褐色土 しまりなし 粘性あり 径1~2cmのIV層ブロックを5%含む 径2~5cmの炭化粒を1%含む
- 5 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性あり
- 6 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性あり 径1~5cmの7.5YR4/3褐色土ブロックを10%含む
- 7 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性あり
- 8 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性あり 7.5YR5/6明褐色土ブロックを10%含む
- 9 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性あり
- 10 7.5YR4/4褐色土ブロックを20%含む
- 11 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性あり

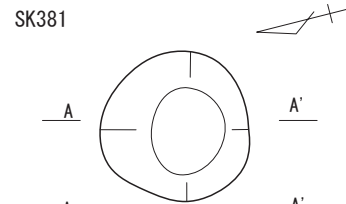


- 1 10YR3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性あり 径4~5cmの10YR5/3にぶい黄褐色ブロックを10%含む
- 2 10YR3/1 黒褐色土 しまりややあり 粘性あり 径2~3cmの炭化粒を5%含む
- 3 10YR5/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり
- 4 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 径3~4cmのIV層ブロックを15%含む
- 5 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性あり
- 6 10YR6/1 褐灰色土 しまりあり 粘性ややあり 径3~4cmのIV層ブロックを15%含む
- 7 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性あり
- 8 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり 径1~3cmの炭化材を20%含む
- 9 10YR5/1 褐灰色土 しまりなし 粘性あり 径3~4cmのIV層ブロックを10%含む
- 10 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり

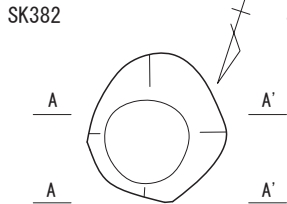


- 1 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1~1cmの炭化粒を1%含む
- 2 10YR5/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 3 10YR5/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1cmの炭化粒を1%含む

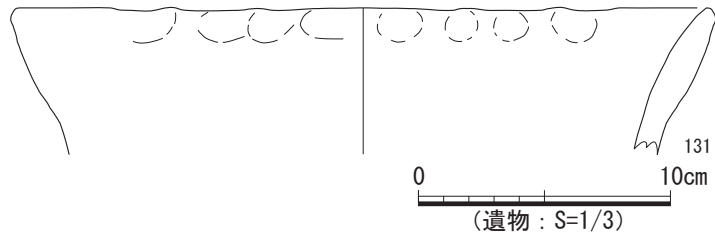
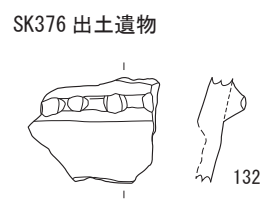
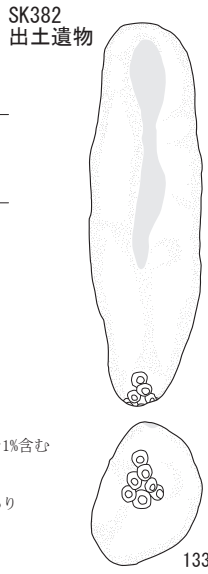
- 1 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性あり 径2~8cmの7.5YR4/3褐色土ブロックを10%含む
- 2 7.5YR4/3 褐色土 しまりなし 粘性あり
- 3 7.5YR3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性あり 径3~10cmの7.5YR4/3褐色土ブロックを20%含む
- 4 7.5YR4/3 褐色土 しまりなし 粘性あり 径1~2cmのIV層ブロックを5%含む 径2~5cmの炭化粒を1%含む
- 5 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性あり
- 6 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性あり 径1~5cmの7.5YR4/3褐色土ブロックを10%含む
- 7 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性あり
- 8 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性あり 7.5YR5/6明褐色土ブロックを10%含む
- 9 7.5YR5/6 明褐色土 しまりなし 粘性あり
- 10 7.5YR4/4褐色土ブロックを20%含む
- 11 7.5YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性あり



- 1 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 2 7.5YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cmの炭化粒を1%含む
- 3 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 4 7.5YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 5 7.5YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cmの炭化粒を1%含む
- 6 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 7 7.5YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり



- 1 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 2 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cmの炭化粒を1%含む
- 3 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 4 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり



0 2m (遺構 : S=1/50)

0 10cm (遺物 : S=1/3)

図 115 SK357・SK360・SK371・SK376・SK381・SK382 遺構図、SK376・SK382 出土遺物

SK387 (図 116)

検出状況 BM6 グリッド、SZ19 墳丘除去後にIV層の上面で検出した。平面形は南北方向に長い楕円形である。底面は平坦で2段に掘り込まれ、壁面は緩やかに開く。壁の残存高は最大で0.31mである。

埋土 3層に分層した。中央が窪む堆積であり、1層と2層は暗い色調で、3層はIV層に似た明るい色調である。

遺物出土状況 1層から石器が1点出土した。

出土遺物 134は鍬身が長い凹基石鍬で、先端と脚部の片側が欠損している。

時期 SZ19 墳丘盛土及び旧表土除去後に検出した遺構であることから、縄文時代と思われる。

SK410 (図 116)

検出状況 EP16~BP17 グリッド、IV層の上面で検出した土坑である。SZ34の墳丘下面の調査で確認した。平面は円形に近い。掘方底面中央とやや北寄りの位置に小穴が認められる。同様な遺構は、約18m南南東にSK357とSK360が所在する。

埋土 掘削時に底面を誤認し記録を残さないまま完掘したため、5層以下については土層の確認ができなかった。1層~5層は灰黄褐色土と褐色土・にぶい黄褐色土が交互に堆積している。

壁 壁面は底面から直線的に開く。壁の残存高は最大で1.40mである。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 墳墓より古く、同様な掘方をもつ遺構から縄文時代の遺物が出土していることから、縄文時代に属する可能性が高い。

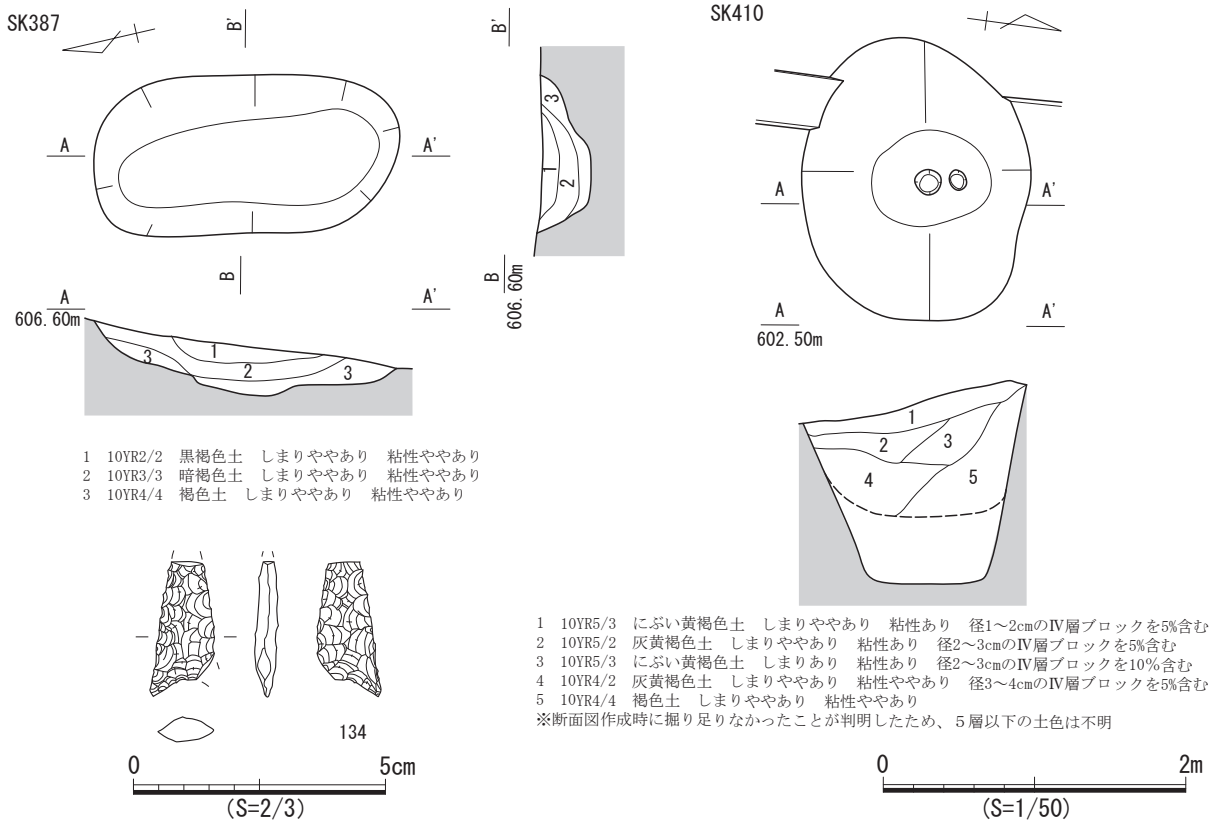


図 116 SK387・SK410 遺構図、SK387 出土遺物

SK444 (図 117)

検出状況 BT16～17 グリッド、IV層の上面で検出した土坑である。SZ51 の墳丘下面の調査で確認した。平面は円形に近いが、南部に僅かな張り出しがある。掘方底面中央には小穴が認められる。同様な遺構として、10～11m北東に SK357 と SK360、約 10m南西に SZ05 墳丘下面で検出した SK371 が所在する。そのため、SK357・SK360 と SK444、SK371 はほぼ等間隔で直線的に並んでいることになる。ただし、等高線には平行しない。

埋土 掘削時に土層断面の設定位置を誤り、そのまま完掘したため、4層以下については土層の確認ができなかった。1層と2層は色調が暗いⅢb層に類似した土、3層と4層はIV層に類似する土で埋没する。

壁 壁面は底面から直線的に開く。壁の残存高は最大で 1.30mである。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 墳墓より古く、同様な掘方をもつ遺構から縄文時代の遺物が出土していることから、縄文時代に属する可能性が高い。

SK445 (図 117)

検出状況 BT17 グリッド、IV層の上面で検出した土坑である。SZ51 の墳丘下面の調査で確認した。SZ51 主体部の東に位置する。平面は円形に近い。底面は丸味を帯びる。

埋土 2層に分層した。いずれもIV層に類似するにぶい黄褐色土で埋没している。

壁 壁面は底面から緩やかに立ち上がり、断面は半円形に近い。壁の残存高は最大で 0.30mである。

遺物出土状況 1層から弥生土器が1点出土した。

出土遺物 135 は弥生土器の有段口縁甕である。頸部外面に明瞭な段があり、口縁部外面には擬凹線文が巡る。口縁部内面には横位のハケのような調整が認められる。

時期 135 が北陸地方の月影式に比定できることや、SZ51 より古いことから弥生時代末～古墳時代初めに位置付けられる。

SK574 (図 117)

検出状況 EK3～EL3 グリッド、IV層の上面で検出した。平面形は南北方向に長い楕円形である。底面は平坦で、壁面は底面から緩やかに開く。壁の残存高は最大で 0.14mである。埋土中から焼土ブロックが出土したことや、底面の形状などから炉穴の可能性も考えられたが、被熱面が確認できなかったことから土坑とした。

埋土 2層に分層したが、含有物の違いにより区分した。上層には焼土ブロックの混入が顕著で、炭化物は全体に少量含まれる。

遺物出土状況 埋土上部から縄文土器片が1点出土した。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

時期 出土した縄文土器から、縄文時代早期と思われる。

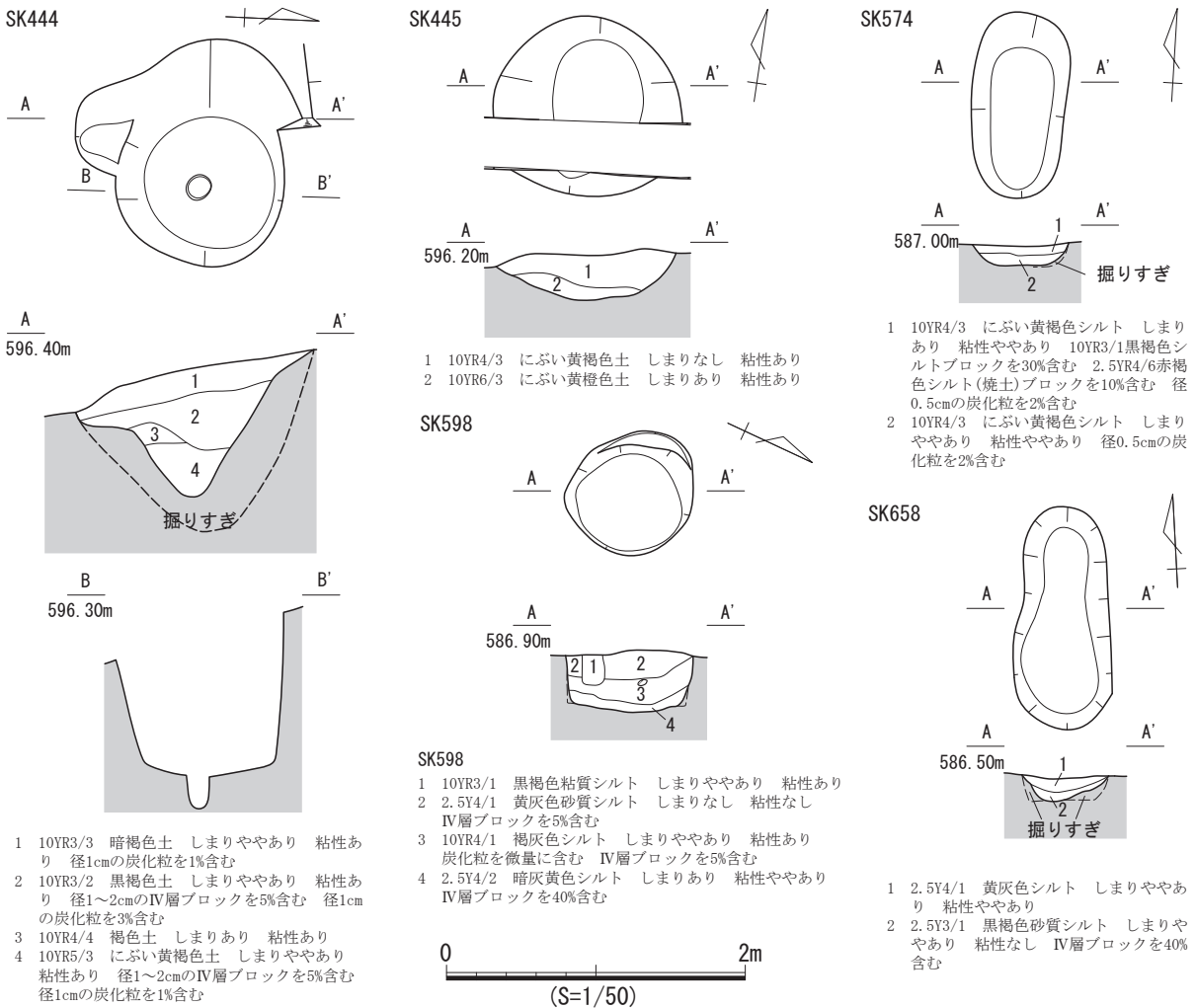
SK598 (図 117)

検出状況 EL4 グリッド、IV層の上面で検出した。平面形は不整円形で、西壁側の浅い位置にテラス状の平坦面がある。底面は比較的平坦で、壁面は立ち上がり、断面形は円筒状の形状である。壁の残存高は最大で 0.41mである。

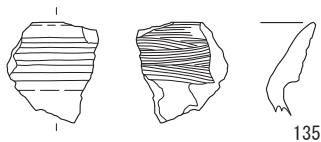
埋土 4層に分層したが、1層は別の遺構を見落とした可能性がある。2層から4層には、IV層起源のブロック土が混入しており、人為的に埋め戻した可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から縄文土器片が8点、石器が1点散在した状態で出土した。

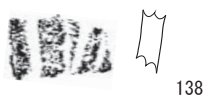
出土遺物 縄文土器1点、石器1点を図示した。136は口縁部がやや外反する器形で、外面及び口縁端部に捺糸文を施す。137は扁平な楕円形の自然礫を利用した打欠石錘で、長軸の両端に打ち欠きによる抉りを作り出している。



SK445 出土遺物



SK658 出土遺物



SK598 出土遺物

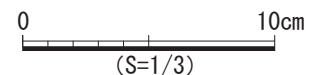
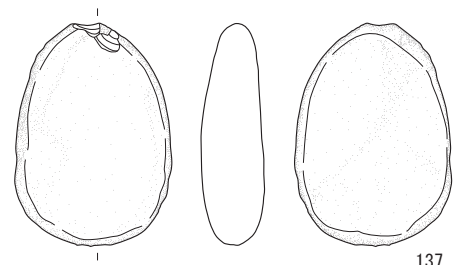
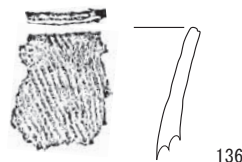


図 117 SK444・SK445・SK574・SK598・SK658 遺構図、SK445・SK598・SK658 出土遺物

時期 出土した縄文土器から縄文時代中期と思われる。

SK658 (図 117)

検出状況 EM4 グリッド、IV層の上面で検出した。平面は南北方向に長いやや不整の楕円形である。底面は丸みをもつ。壁面は底面から緩やかに開く。壁の残存高は最大で0.15mである。

埋土 2層に分層したが、中央が窪む堆積である。

遺物出土状況 埋土中から縄文土器の深鉢、弥生土器の高坏の脚部、剥片石器が散在して出土した。

出土遺物 138は縄文時代中期後葉の深鉢で、沈線により縦位に区画され、斜行沈線で埋める。

時期 出土した弥生土器から、弥生時代の遺構と考えられる。

4 遺構外出土遺物 (図 118~図 121)

139~154は縄文土器である。139は縄文時代早期前半の押型文土器で、外面にネガティブな楕円文を施す。140は縄文時代早期後葉の深鉢口縁部片で、口縁端部や外面に連続刺突による文様を施す。141は縄文時代前期と思われる深鉢の胴部片である。142は縄文時代中期の波状口縁となる深鉢の口縁部片である。143は縄文時代中期前葉の深鉢口縁部で、口縁部外面に蓮華文を施す北陸系の土器である。144は縄文時代中期後葉の深鉢口縁部片である。145~147は縄文時代中期後葉の深鉢胴部片である。145は隆帯による半円形の区画内に櫛歯状工具による縦位沈線を施し、146は頸部と胴部の境に連続押圧を施す隆帯を、147は半截竹管状工具による連続刺突を施した隆帯を巡らせる。148は縄文時代中期の深鉢胴部片と思われる。149と150は縄文時代中期の深鉢胴部片であるが、底部近くのものと思われる。151は縄文時代中期の深鉢底部片で、底部外面に網代痕が認められる。152は縄文時代中期の深鉢胴部片と思われる。153は縄文時代中期の浅鉢と思われる口縁部片で、口縁部が屈曲する。154は縄文時代後期と思われる深鉢口縁部片で、外面に矢羽根状の沈線文を施す。

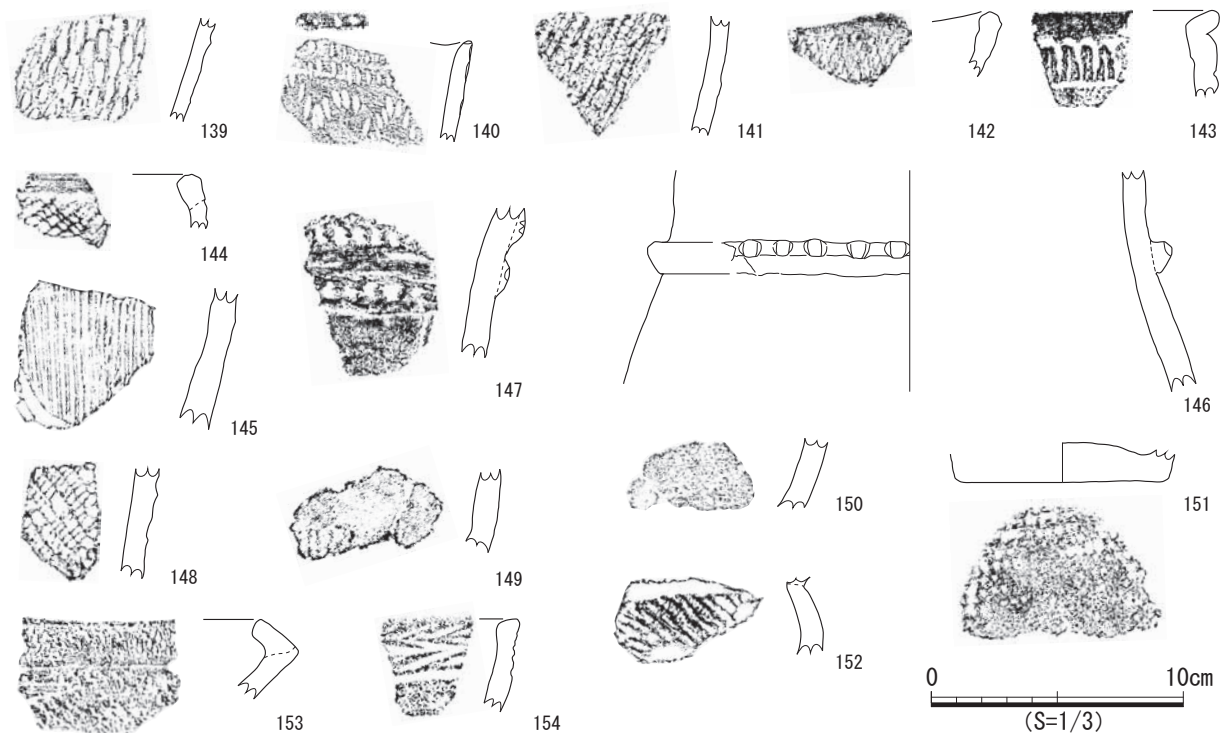


図 118 遺構外出土縄文土器

155～170は縄文時代の石器である。155と156は無茎の石鏃で、基部の挟りが浅く、側辺にやや膨らみがある。157は縦長剥片の側辺に連続した剥離を施し、刃部を作り出したスクレイパーで、刃部に丸みがある。158は縦長の剥片の両側辺に連続した剥離を施し、刃部を作り出したスクレイパーで、刃部は直線的である。159と160はやや撥形となる打製石斧で、刃部幅が最大幅となる。159の側辺はやや膨らみを持ち、160の側辺はやや挟れる。161は磨製石斧で、刃部を研磨により作り出しているが、

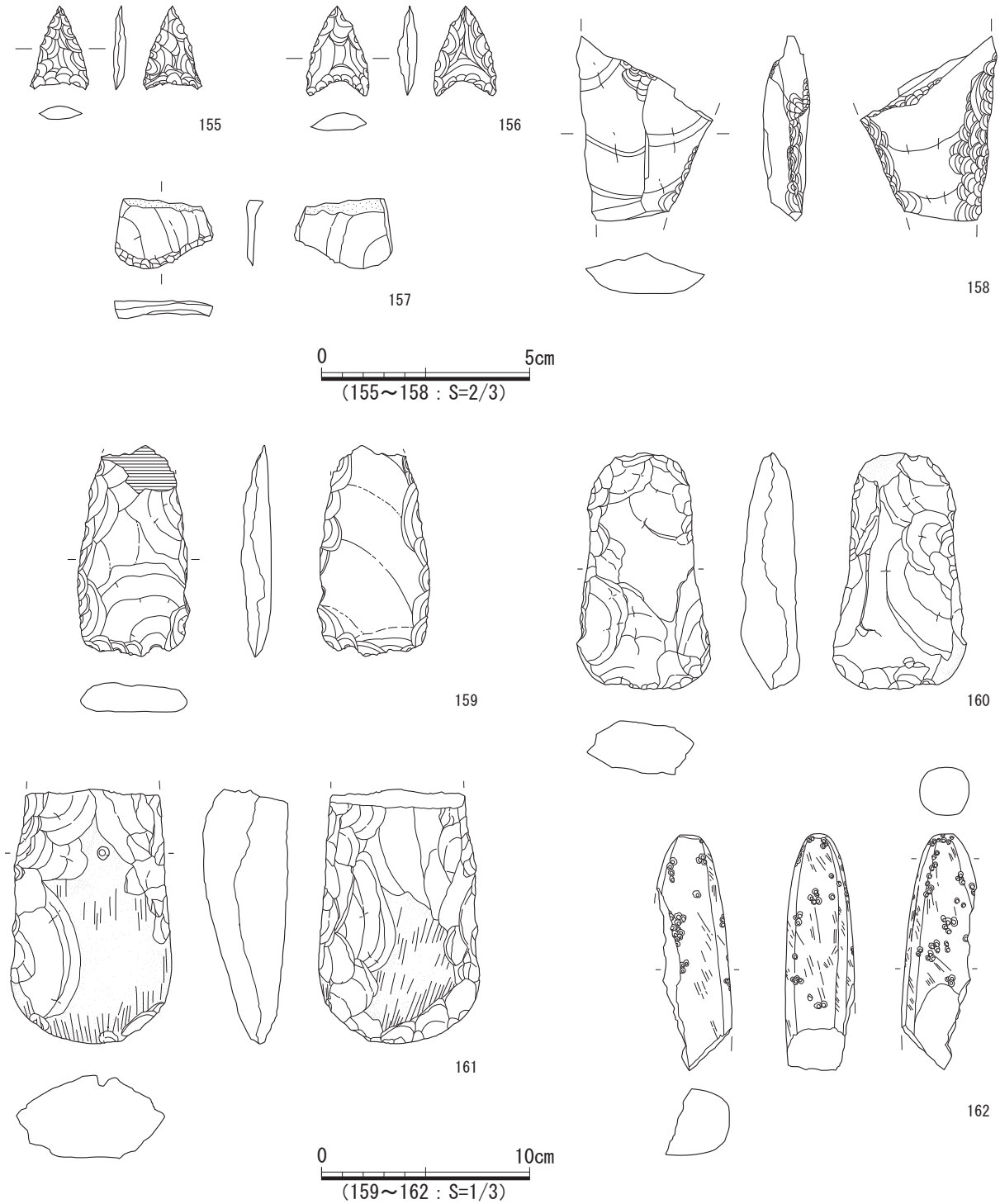


図119 遺構外出土石器(1)

基部を欠く。162は刃部を欠くが磨製石斧と思われ、研磨により成形している。163は横長の石核で、表裏面を打面としている。164と165は打欠石錘で、楕円形で小型の自然礫の両端を打ち欠いている。166は細長い剥片の両側辺に、連続した剥離を施すが、明確な刃部とはならないことからRFである。

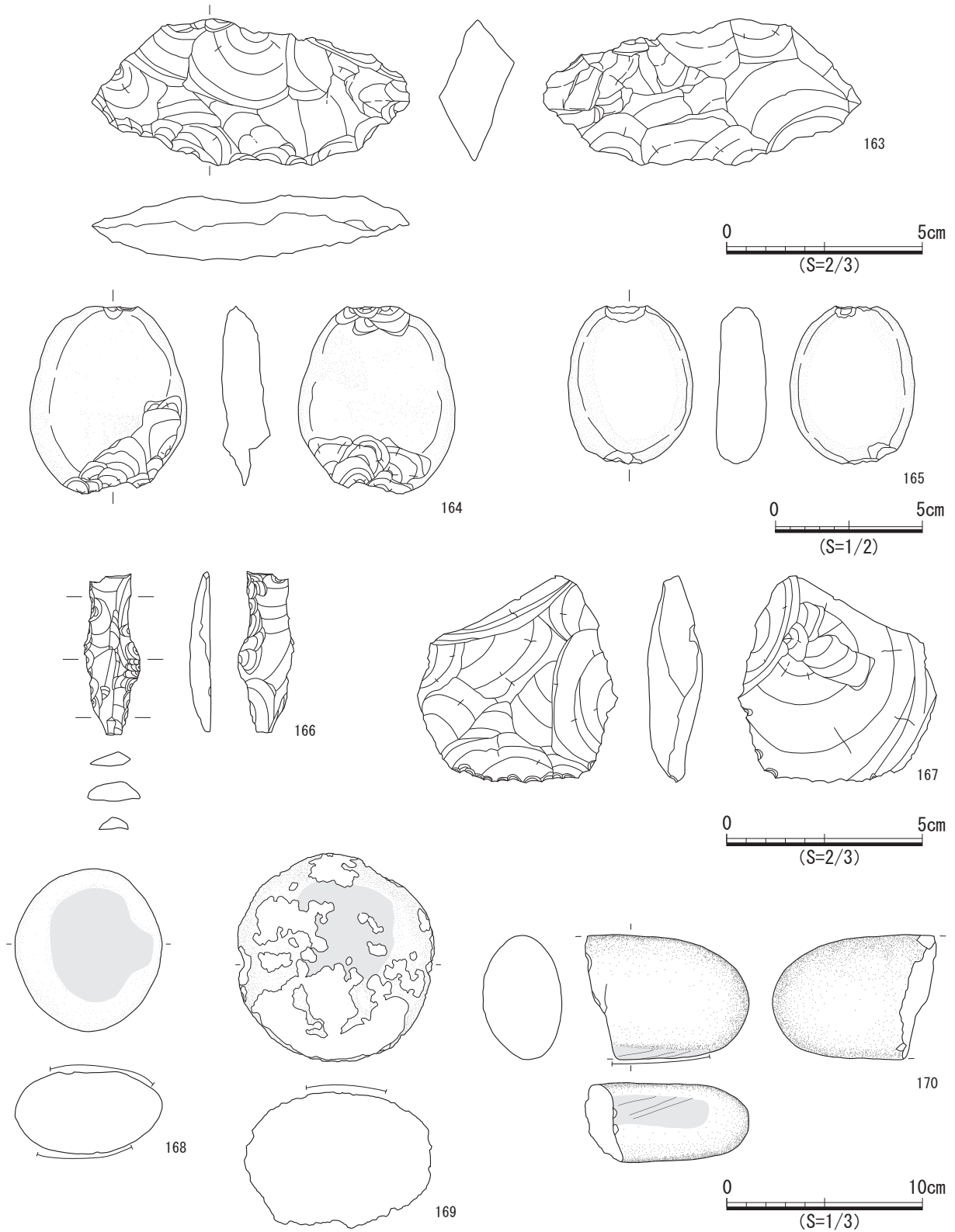


図120 遺構外出土石器(2)

167は不定形の剥片の側辺に微細な剥離痕を持つMFである。168と169は拳大の円礫を用いた磨石で、平坦な面に磨痕が認められる。170は長楕円形の円礫を用いた磨石で、側辺に磨痕が認められる。

171～174は弥生時代後期から古墳時代初頭の土器である。171はSZ20近くで出土した、台付裝飾壺の胴部と思われ、胴部に擬凹線文を施した突帯が巡る。172はSZ09近くで出土した、裝飾壺の脚台部でハ字状に開き、内外面に赤採が施されている。173は高坏で、脚部は短く開き、坏部は椀形となる。脚裾部には歪みが認められる。174は高坏脚部で、脚柱部が長く円形の透し孔を3方向からあけている。

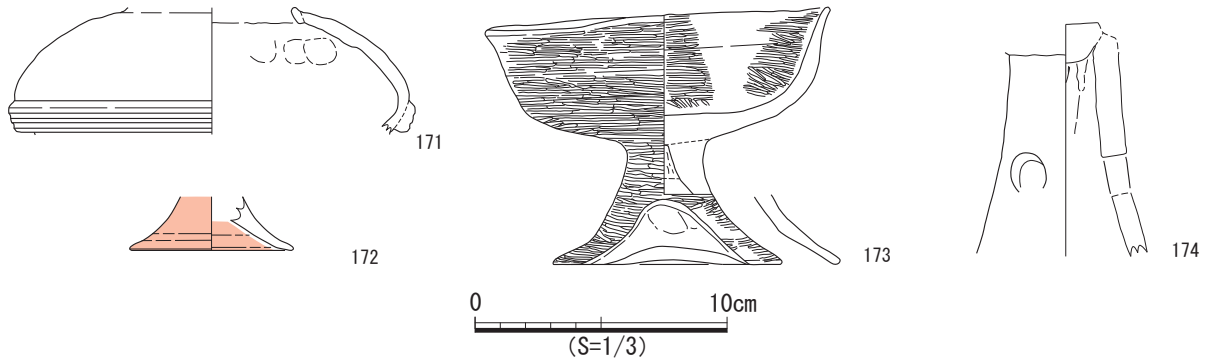


図 121 遺構外出土弥生土器

第6節 古代の遺構と遺物

この遺跡において、最も遺構数が多くなる7世紀から11世紀のものを古代としてまとめた。検出した遺構の中から、土坑墓10基、竪穴建物36軒、掘立柱建物・礎石建物9棟、柵4条、遺物集積1基、集石遺構2基、単独柱穴7基、溝状遺構4条、土坑50基を報告する。

1 土坑墓

墳墓の近く若しくは、墳墓に重複して検出したものが多いが、丘陵裾部の緩斜面にも土坑墓と思われるものがある。

ST01 (図 122)

検出状況 BT12 グリッド、IV層の上面で検出した。尾根からの斜面地でSZ04の東周溝から約1m東に位置する。墳墓の主体部や、他の土坑墓との形状や長軸方位の類似性から、土坑墓とした。墳墓間に長軸方位を墳墓に合わせて設置されたと思われるような位置にあるが、これらの墳墓とは時期が異なるため、地形的な制約を受けて、このような位置に掘削されたと思われる。平面形はやや丸みを持つ長方形で、長軸方位はN-10°-Wである。壁面は直立するが、底面の北側3分の1程度は傾斜し、中央から南側は比較的平坦となる。

埋土 4層に分層したが、IV層ブロックを含む土層があり、人為的に埋め戻されたと思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 遺物は出土しなかったが、近接する位置で検出したST02と長軸方位が類似することから、ST02と近い時期のものであると考え、7世紀頃の可能性が高いと思われる。

ST02 (図 122)

検出状況 EA12 グリッド、IV層の上面で検出した。尾根からの緩斜面地で、ST01から南南東約5mに位置する。墳墓の主体部や、他の土坑墓との形状や長軸方位の類似性から、土坑墓とした。平面形はやや丸みを持つ長方形で、長軸方位はN-2°-Wである。壁面は比較的直立するが、深さは最大0.18mと浅く、底面はやや傾斜する。

埋土 5層に分層したが、1層～3層が4層と5層を掘削するように堆積しており、1層～3層が棺痕跡のような堆積となる。埋土にはIV層ブロックを含む堆積があることから、人為的に埋め戻されたと思われる。

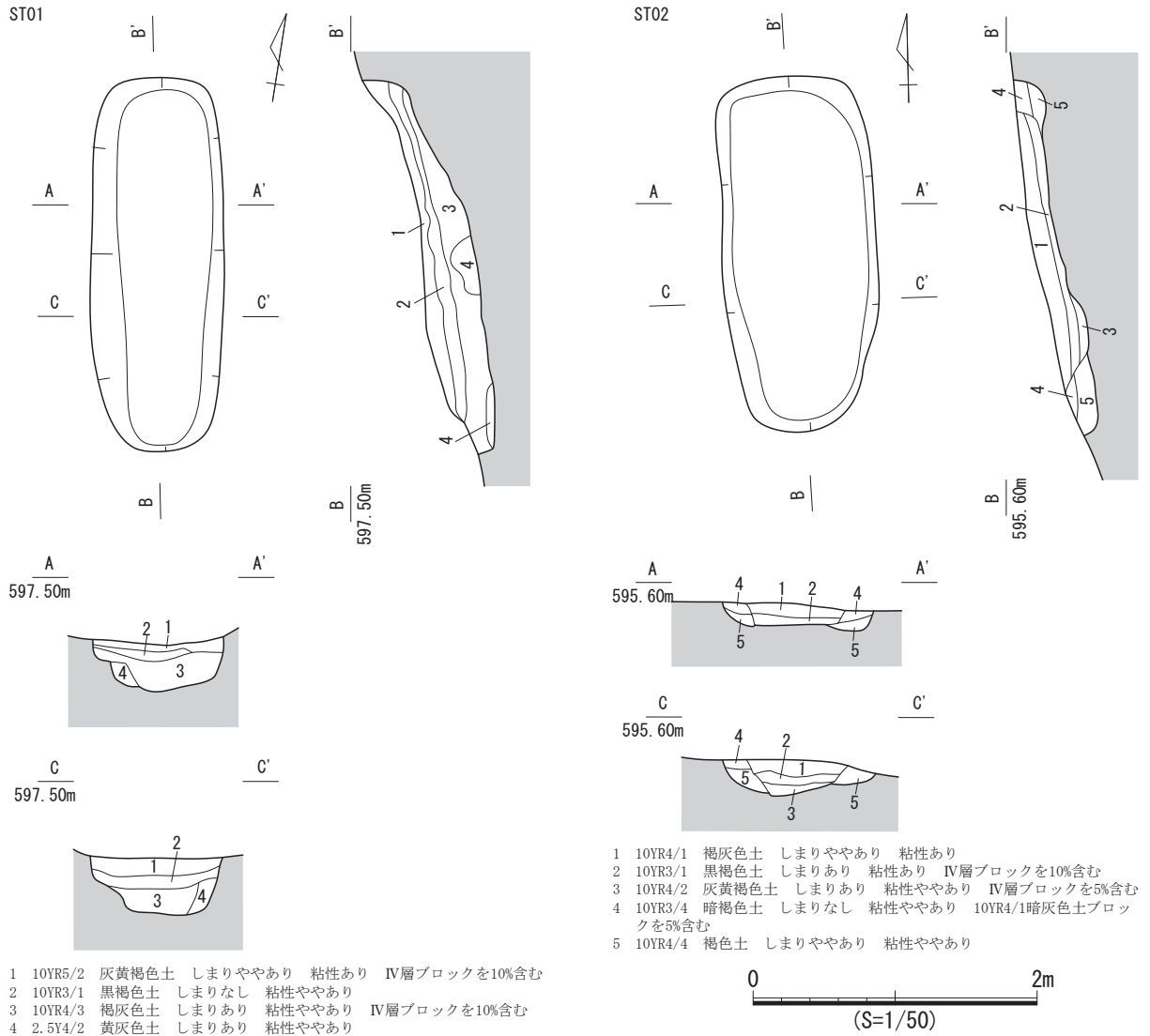
遺物出土状況 須恵器横瓶が5点に割れて、遺構内中央付近の埋土1層から、口縁部を西へ向けた状態で出土した。

出土遺物 175は須恵器の横瓶で、口縁部から胴部上半にかけて残存する。口縁部は短く、胴部との境から屈曲しつつ外反する。口唇部付近の外側は直立して内側に小さく窪む。胴部内面には同心円の当て具痕が残り、外面には格子目叩きの後のハケ目調整が確認できる。

時期 出土した遺物から7世紀中葉と考えられる。

ST03 (図 123)

検出状況 EA16～EB17 グリッド、IV層の上面で検出した。尾根からの緩斜面地で、SZ51の約1m南に位置する。墳墓の主体部や、他の土坑墓との形状や長軸方位の類似性から、土坑墓とした。平面形はやや歪んだ長楕円形で、長辺及び南側の壁面は段を持って比較的立ち上がるが、北側壁面は傾斜し、



ST02 出土遺物

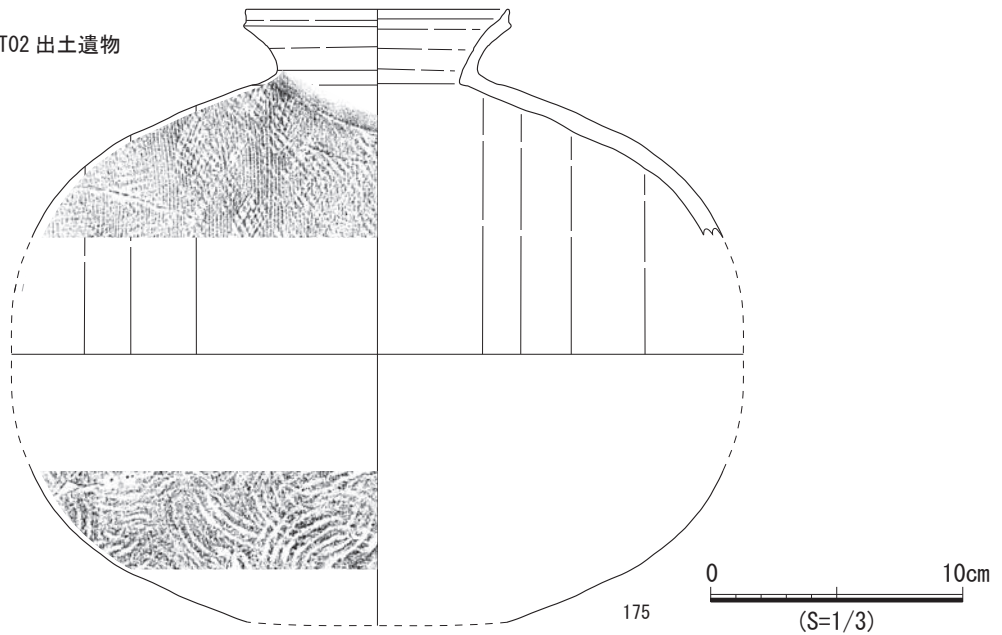


図 122 ST01・ST02 遺構図、ST02 出土遺物

深さは最大0.60mある。底面の中央から南半部は平坦であるが、北側は傾斜する。長軸方位はN-5°-Wで、ST01やST02と類似する。

埋土 7層に分層したが、3層以外はほぼ水平堆積で、壁面の段差位置で土層が丁度分かれる。埋土にはIV層ブロックや黒褐色土ブロックなどを含むことから、人為的に埋め戻されたと思われる。

遺物出土状況 埋土1層から土師器(176)や石匙(177)、5層付近から磨石の小破片が出土した。また、遺構埋土を篩いにかけてところ、土師器の小破片が2点出土した。

出土遺物 176は土師器の甕底部片で、内面はハケ目調整である。177は縦型の石匙の基部である。

時期 出土した遺物からは判断できないが、ST01やST02と長軸方位が類似し、掘削された位置も墳墓に近接する斜面であることから7世紀頃のものと思われる。

ST04 (図124)

検出状況 ED12グリッド、IV層の上面で検出した。ST01~ST03は斜面の等高線に直交するように設けられたのに対し、それよりも南側の斜面の等高線に平行して設けられている。SZ11周溝と重複し、検

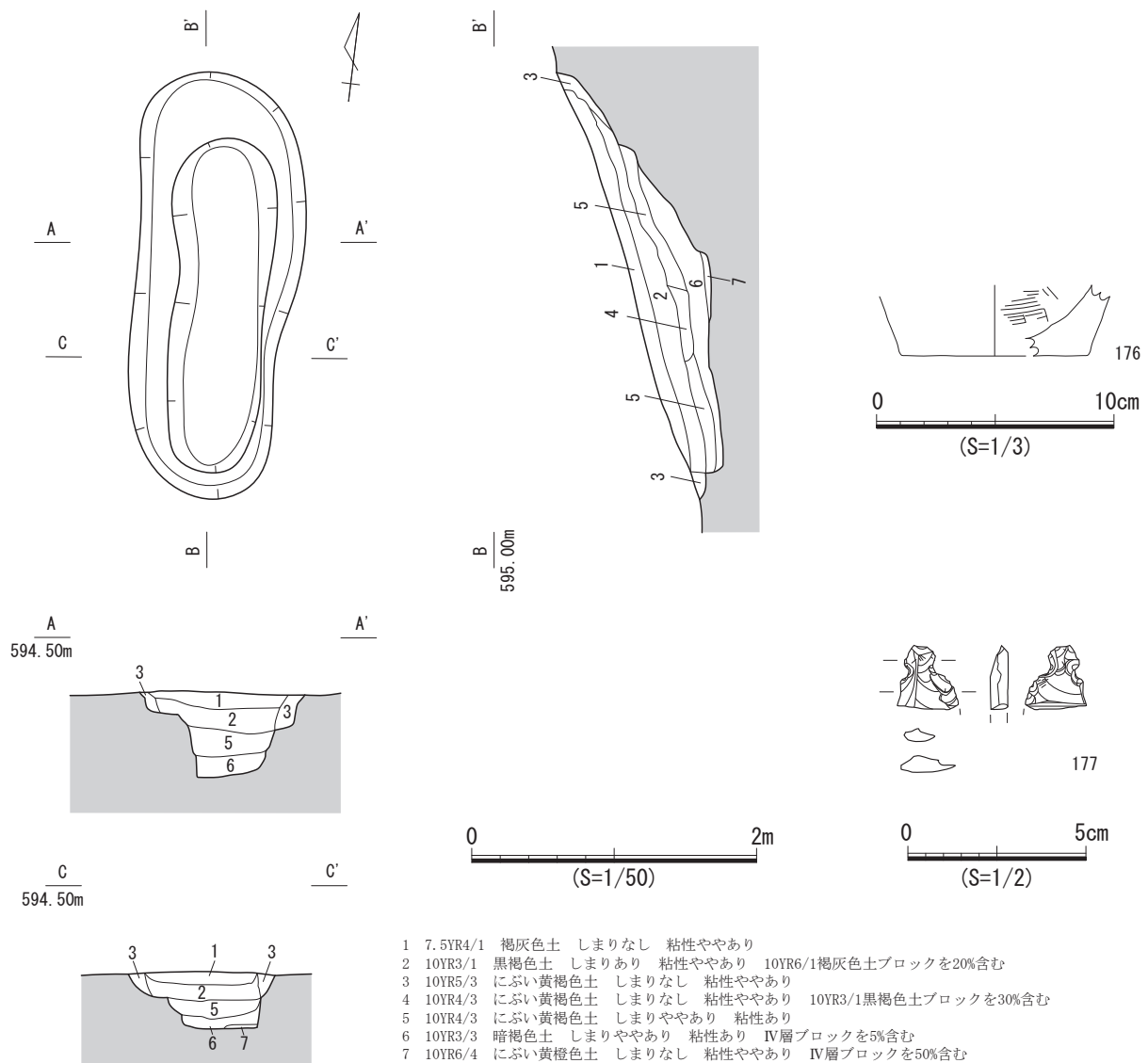


図123 ST03 遺構図、出土遺物

出状況からSZ11より新しい。墳墓の主体部や、他の土坑墓との形状や長軸方位の類似性から、土坑墓とした。平面形は長楕円形で、長軸方位はN-82°-Eとなり、ST01~ST03とは約90°異なる方位となる。壁面は立ち上がり、深さは最大0.54mある。底面は比較的平坦であるが、段を持つ。

埋土 14層に分層したが、2層以外にIV層起源のブロック土を含むことから人為的に埋め戻されたとされる。

遺物出土状況 西端近くの3層から、正位の状態で土師器鉢(178)が出土したほかは、出土した遺物はない。

出土遺物 178は、口縁部が底面からわずかに外反しつつ直線的に立ち上がる。底面には木葉痕、胴部内面は板ナデ、胴部内面上部と胴部外面はハケ目調整が確認できる。出土位置から見て、東側の口縁部から胴部の半分以上が欠損している。両端の破損部分の角度がほぼ同じで割れ目は整い、欠損部分の破片が出土しなかったことから、意図的に割り取ったと考えられる。

時期 SZ11の周溝から出土した坏蓋から、SZ11の周溝は7世紀後半頃埋没し、その後の近い時期に掘削されたと考えられる。

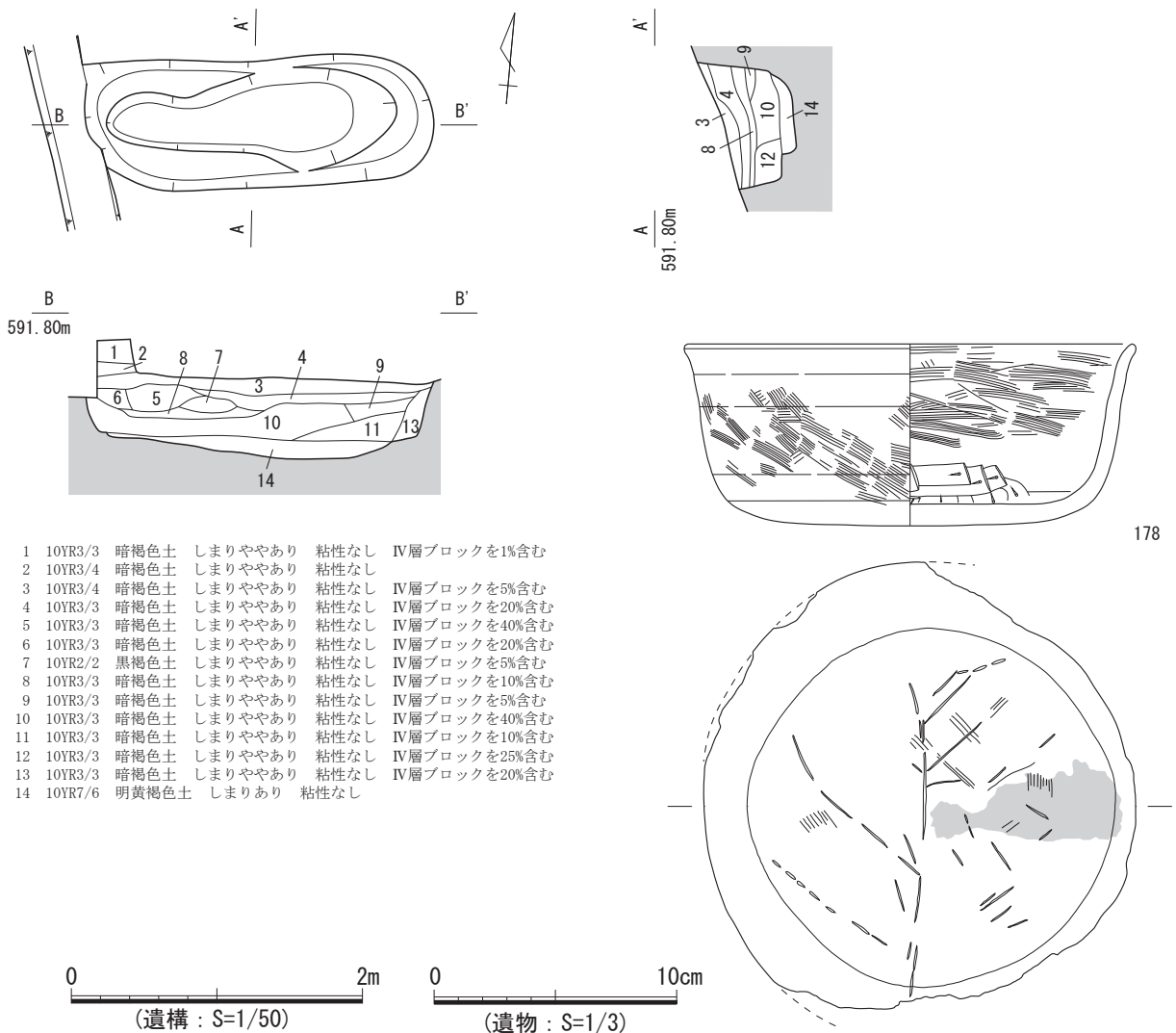


図124 ST04遺構図、出土遺物

ST05 (図 125)

検出状況 BN16～17 グリッド、IV層の上面で検出した。尾根上に立地する SZ27 の墳丘上に位置し、SZ27 の周溝とも一部重複する。検出状況から、ST05 は SZ27 より新しいと判断した。墳墓の主体部や、他の土坑墓との形状や長軸方位の類似性から、土坑墓とした。平面は長楕円形で、長軸方位はN-90° - Wである。壁面は底面から直線的に開き、深さは最大 0.76mである。底面はほぼ水平である。

埋土 13層に分層した。6層と8層、11層を除き、褐灰色土や暗灰黄色土などの比較的暗い色調の埋土が目立つが、IV層ブロックを含む堆積が多いことから、人為的に埋め戻されたと思われる。また、1層～7層は8層～13層の堆積を掘削するような堆積であり、棺痕跡のような堆積となる。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 重複関係から SZ27 より新しい遺構であり、他の土坑墓が7世紀代であることから、ほぼ同時期のものと思われる。

ST06 (図 126)

検出状況 B08～9 グリッド、IV層の上面で検出した。尾根から下がった傾斜地に立地する SZ31 の墳丘から周溝と重複する。SZ31 周溝の埋土掘削後に、その底面で周囲より若干暗い色調の ST06 の埋土（2層）を確認したため再検出した結果、SZ31 の墳丘上でも平面を確認した。断面図で示した遺構上面の窪みは、SZ31 の周溝と誤認した部分である。墳墓の主体部や、他の土坑墓との形状や長軸方位の

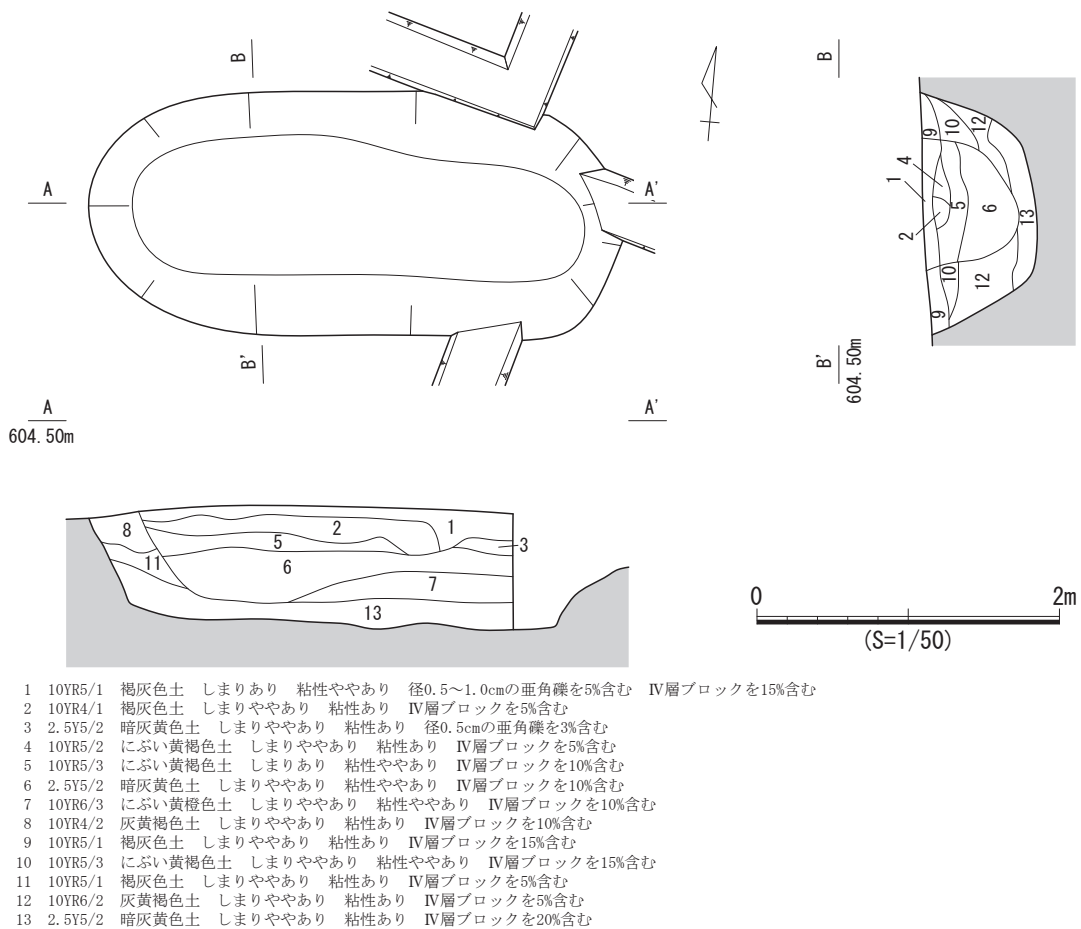


図 125 ST05 遺構図

類似性から土坑墓とした。平面形は不整な長楕円形で、長軸方位はN-87°-Wである。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは最大0.62mである。底面は中央がやや窪むが、ほぼ水平である。

埋土 6層に分層した。いずれも褐色土や明褐色土など、IV層に類似する土であり、掘削土により埋め戻された可能性が考えられる。なお、4層には炭化物を少量含む。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 重複関係からSZ31より新しい遺構であり、他の土坑墓が7世紀代であることから、ほぼ同時期のものと思われる。

ST07 (図 126)

検出状況 EM4 グリッド、IV層の上面で検出した。丘陵裾部の緩斜面に位置する。長方形で長軸方位がN-90°-Wとなり、他の土坑墓との形状や長軸方位の類似性から、土坑墓に含めた。壁面は緩やかに広がるが、浅いため上部が削平されている可能性が高い。

埋土 単層でIV層ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土上部から土師器と灰釉陶器の小破片が1点ずつ出土したが、混入の可能性はある。

出土遺物 図示可能な遺物はなかった。

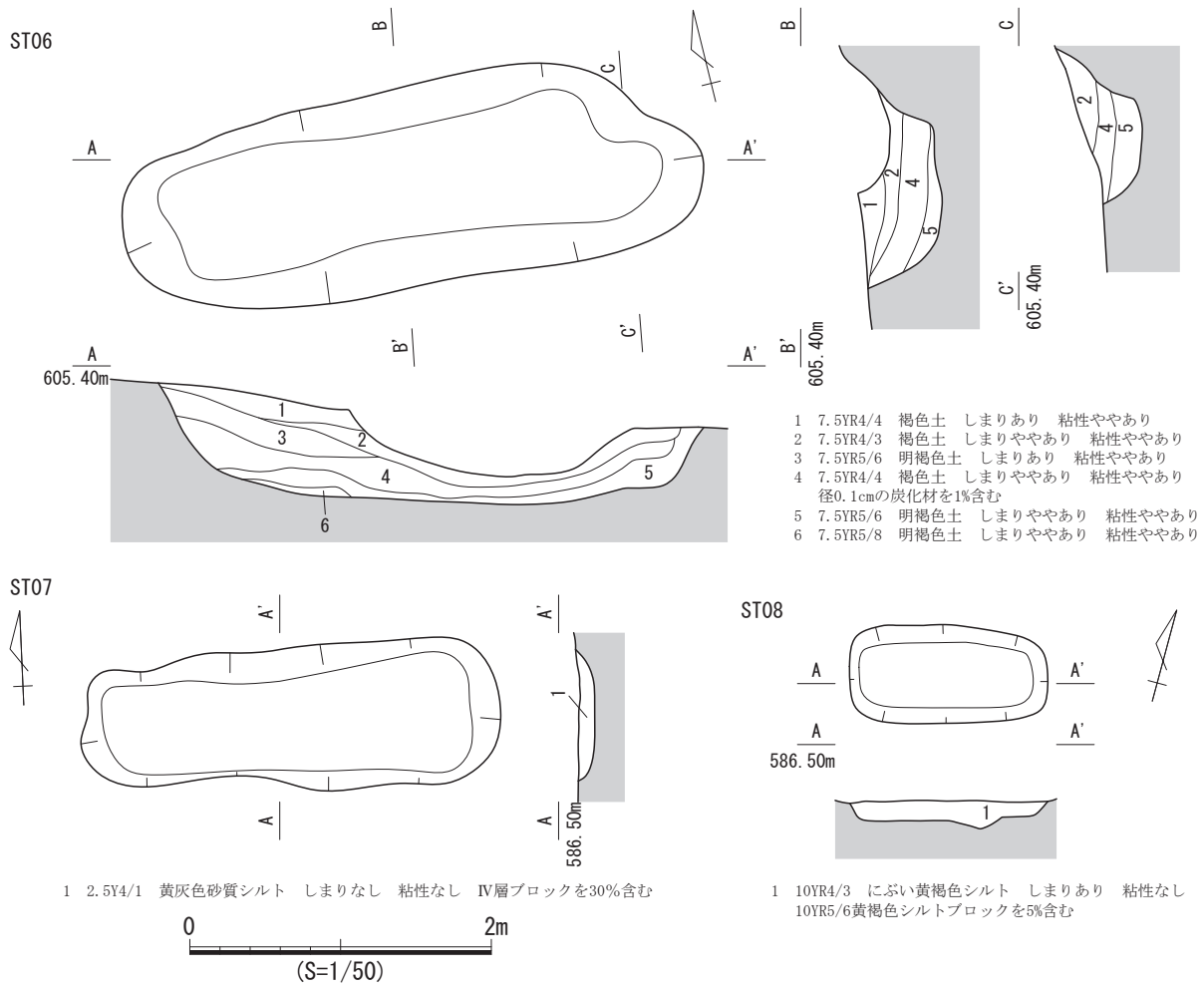


図 126 ST06～ST08 遺構図

時期 他の土坑墓との類似性から7世紀頃の可能性がある。

ST08 (図 126)

検出状況 EP3 グリッド、IV層の上面で検出した。丘陵裾部の緩斜面に位置する。小規模ではあるが、長方形で長軸方位がN-80° -Wとなり、他の土坑墓との形状や長軸方位の類似性から、土坑墓に含めた。壁面は緩やかに広がるが、浅いため上部が削平されている可能性が高い。

埋土 単層でIV層ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から須恵器の小破片が1点出土したが、混入の可能性がある。

出土遺物 図示可能な遺物はなかった。

時期 他の土坑墓との類似性から7世紀頃の可能性がある。

ST09 (図 127)

検出状況 BN10~11 グリッド、IV層の上面で検出した。尾根から少し下がった傾斜地に立地するSZ24とSZ25の間に位置し、SZ24の周溝とSZ25の墳丘と周溝に重複する。断ち割りトレンチで本遺構の断面を確認した際にSZ25の周溝と判断したが、SZ24とSZ25の周溝を掘削する中で、本遺構部分が土坑状となったため、SZ24・SZ25の周溝とは別の掘り込みと判明した。SZ24・SZ25の周溝が完全に埋没した後に掘り込まれた土坑で、墳墓の主体部や、他の土坑墓との形状や長軸方位の類似性から、土坑墓とした。平面形は不整な長楕円形で、長軸方位はN-12° -Eである。壁面は底面から緩やかに立ち上がり、掘方上部は垂直に近くなる。深さは最大0.7mである。底面はほぼ水平である。

埋土 5層に分層した。2層を除き褐灰色土や灰黄褐色土で埋没しており、ST05と類似する。

遺物出土状況 断ち割りトレンチを掘削した際に弥生土器が出土したが、出土位置の記録から本遺構

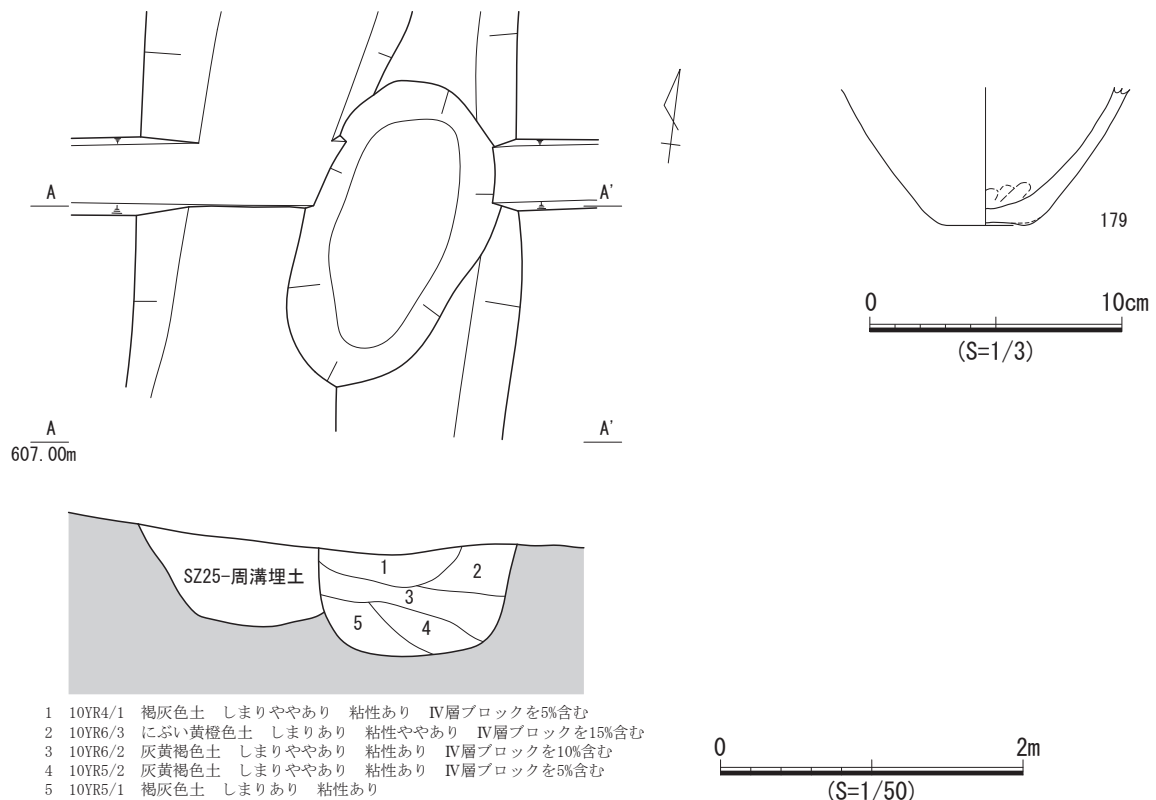


図 127 ST09 遺構図、出土遺物

の埋土に含まれていたものと判断した。しかし、遺物の時期から、SZ24 若しくは SZ25 の周溝埋土に含まれていたものが、混入したと考えられる。

出土遺物 179 は弥生土器の甕で、底部外面周縁に粘土を貼付けて凹み底にしている。外面にススが付着する。

時期 重複関係から SZ24 や SZ25 より新しい遺構であり、他の土坑墓が 7 世紀代であることから、ほぼ同時期のものと思われる。

ST10 (図 128)

検出状況 BP3~BQ4 グリッド、IV層の上面で検出した。尾根から僅かに下がった傾斜地に立地する SZ38 の周溝上に位置する。調査当初は周溝内土坑と判断していたが、SZ38 の周溝が完全に埋没した後に掘り込まれており、周溝内土坑とするより SZ38 周溝埋没後の新しい時期の遺構とした。墳墓の主体部や、他の土坑墓との形状や長軸方位の類似性から、土坑墓とした。平面形は長楕円形で、長軸方位は N-67° -E である。東西の壁面は底面から直線的に開き、南北の断面は半円形に近い。深さは最大 0.70m である。底面は緩やかに東から西へ傾斜している。

埋土 7層に分層したが、埋土中にはIV層ブロックを含む堆積があることから、人為的に埋め戻されたと思われる。なお、3層を除き褐灰色土や灰黄褐色土で埋め戻されており、ST05 と類似する。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 重複関係から SZ38 より新しい遺構であり、他の土坑墓が 7 世紀代であることから、ほぼ同時期のものと思われる。

2 竪穴建物

墳墓が展開する丘陵の斜面下半部から緩斜面にかけて、36 軒の竪穴建物を検出した。調査前地形測量において、墳丘や斜面が削平・造成された平坦面を確認しているが、その平坦面の多くで竪穴建物を確認した。墳丘を削平し、斜面を切り盛り造成して平坦面を作り出した上で、竪穴建物や掘立柱建物を構築している。軒数としては、緩斜面よりも墳墓が造られた斜面下半部に竪穴建物は集中している。また、平坦面③や平坦面⑤には大型の建物跡があり、平坦面⑤の竪穴建物埋没後に造られた礎石建物の存在など、平坦面を造り出した理由を検討する必要がある。

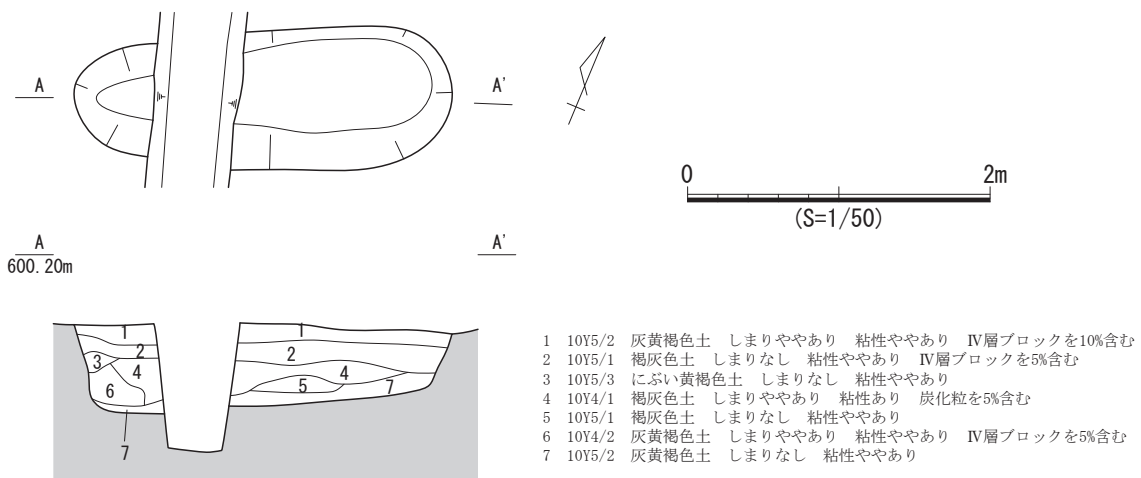


図 128 ST10 遺構図

SI01 (図129・図130)

検出状況 AS20～BS1 グリッド、IV層の上面で検出した竪穴建物である。南西側で SI02 と重複し、SI02 が新しい。南西側の建物掘方が浅いため壁面が途切れるが、残存する辺から平面形は長方形となる。長軸の方位はN-88° -Eである。

埋土 IV層起源のブロック土が混じる1層と3層は、東側壁面にのみ確認でき、主体は2層の暗褐色土である。

壁 壁面はやや開き、残存高は最大で0.36mである。

床面 ほぼ平坦であるが、掘り過ぎのため図上は南西側に向かって傾斜する。貼床は確認できなかつ

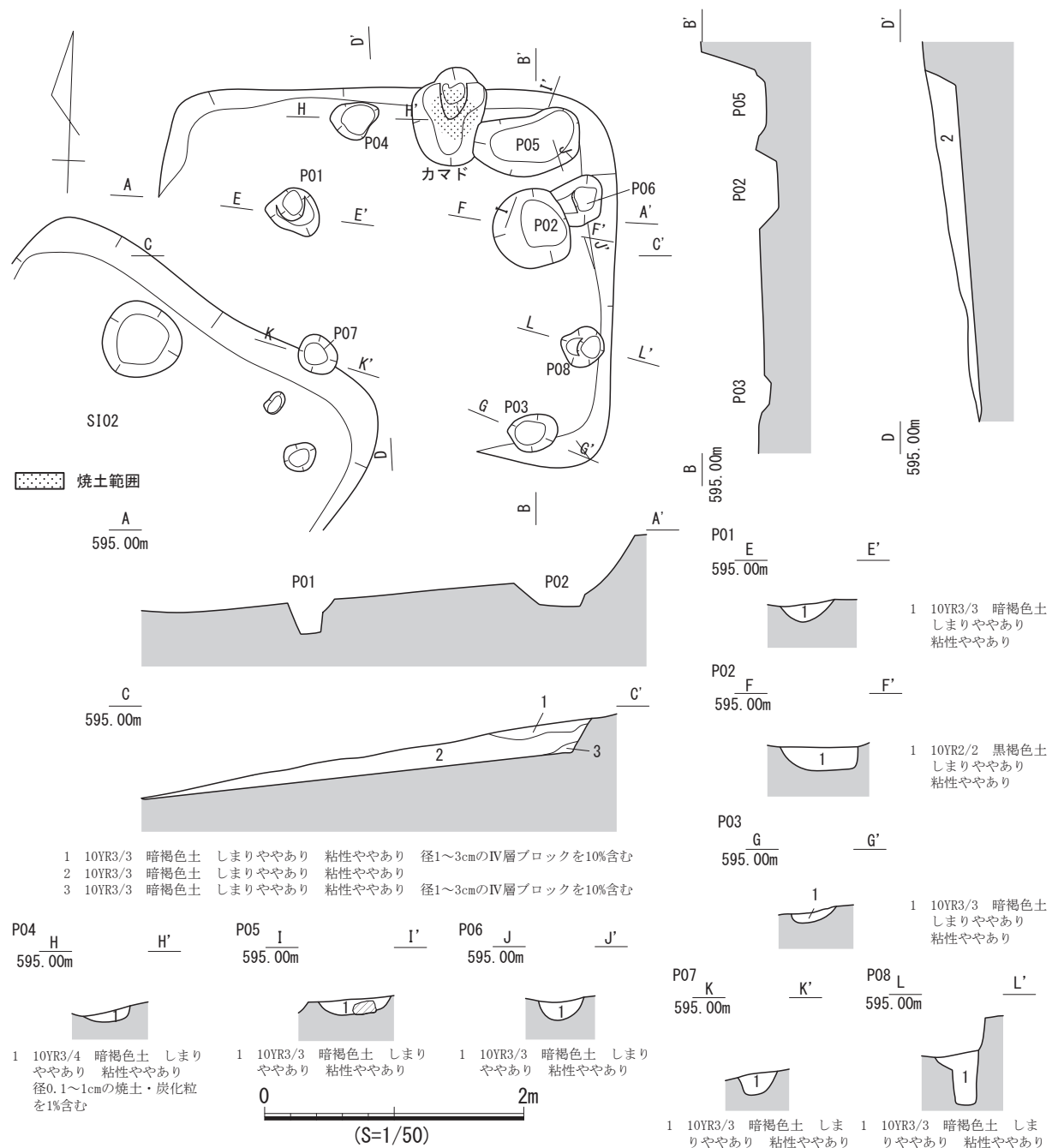


図129 SI01 遺構図(1)

た。床面で検出した遺構は柱穴3基、性格不明の土坑5基、カマド1基である。壁際溝は確認できなかった。堅穴内の位置関係から P01・P02・P03 を柱穴と判断した。

カマド 建物の北壁やや東寄りで検出したが、煙道部は確認できなかった。カマド本体では、袖部芯材と思われる板状の川原石と、支脚柱と思われる角柱状の立石を確認した。袖石掘方は確認できなかったが、壁面から床面にかけて皿状に窪ませたカマド掘方を確認した。被熱した3層は燃烧面で、カマドの前部の袖石下部から内側に見られる。3層が4層上面にも及ぶため、4層が堆積した小穴状部分は、カマド使用時には埋没していたものと考えられる。なお、1層と2層は、堅穴建物埋土2層と類似しており、天井部構築材と思われる堆積が確認できなかったことから、堅穴建物を遺棄する際にカマドの一部を除去した可能性が考えられる。

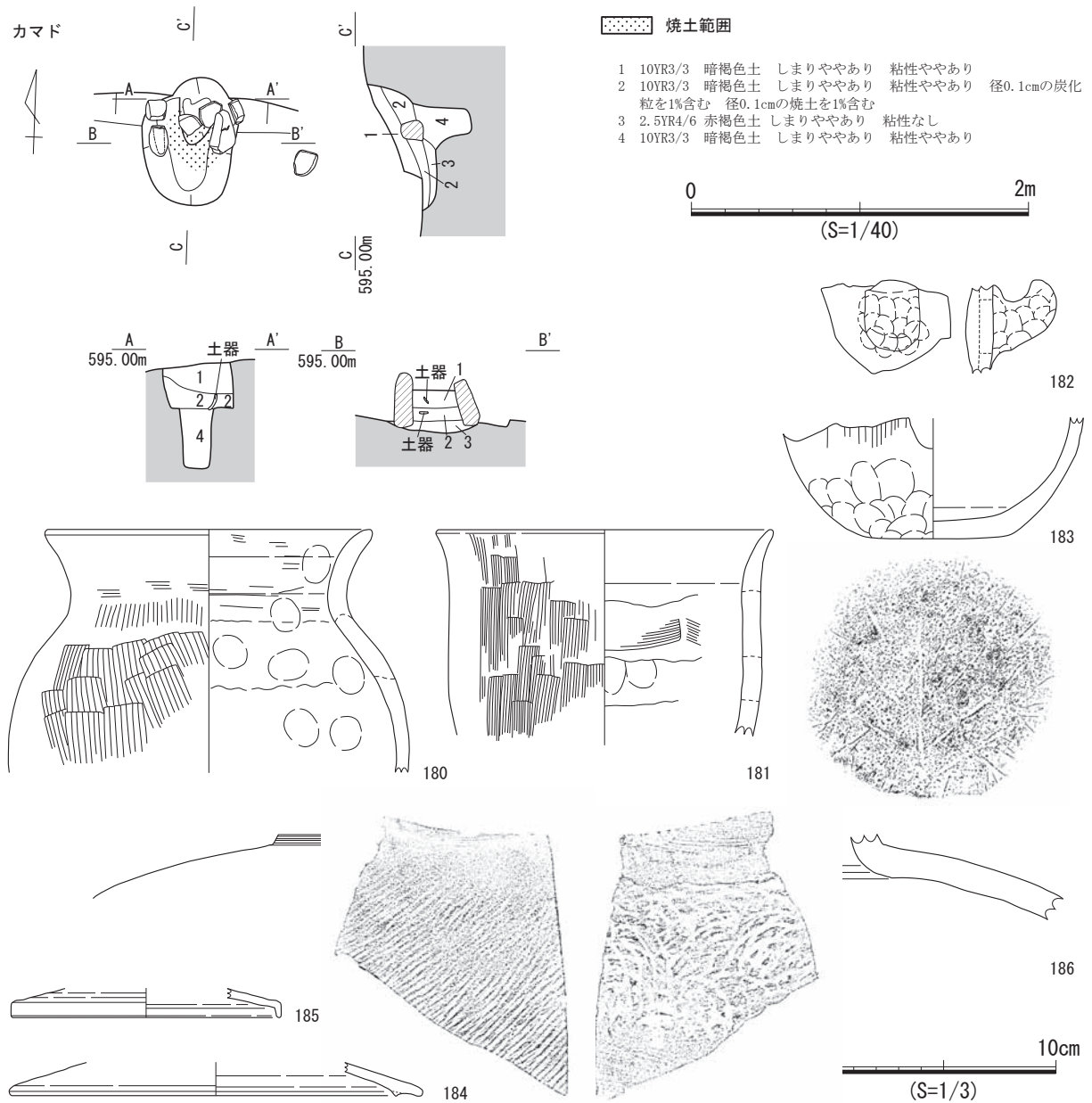


図130 SI01 遺構図(2)、出土遺物

床下 貼床層や掘方整地層は確認できなかつたため、床下面としては遺構を検出してない。

遺物出土状況 土器類は埋土中及び P02・カマドから、土師器甕や須恵器の坏・蓋・甕がまとめて出土した。

出土遺物 180 は口縁部から頸部が外反する土師器甕で、胴部も張る。181 は口縁部が僅かに外反する土師器甕で、胴部が張らない。182 は土師器甕若しくは甑の把手である。183 は土師器甕で底部外面に木葉痕が付く。184 は須恵器蓋で口縁部内面に返りを持つ。185 は須恵器蓋で口縁端部が屈曲する。186 は須恵器甕の胴部上半の破片で、内面に同心円の当て具痕、外面に平行タタキ目が残る。

時期 支柱穴やカマドから出土した 184 や 185 から 7 世紀後葉と思われる。

SI02 (図 131・図 132)

検出状況 AS20～BT1 グリッド、IV層の上面で検出した竪穴建物である。北側で SI01 と重複し、SI01 が古い。南辺は発掘区外のため不明であるが、残存部分から平面形は長方形となる。長軸の方位は N-28° -W である。

埋土 暗褐色土を主とした埋土である。炭化粒やIV層ブロックを包含する 4 層と 5 層の黒褐色土は、カマド構築材の可能性が考えられる。北側に堆積した 1 層ではIV層ブロックが混じるが、2 層や 3 層にはIV層ブロックが含まれてない。

壁 壁面は直線的で比較的急勾配で立ち上がり、残存高は最大で 0.50m である。

床面 ほぼ平坦で、褐色でしまりがある 7 層が全体にわたって残存しており、貼床層と判断した。床

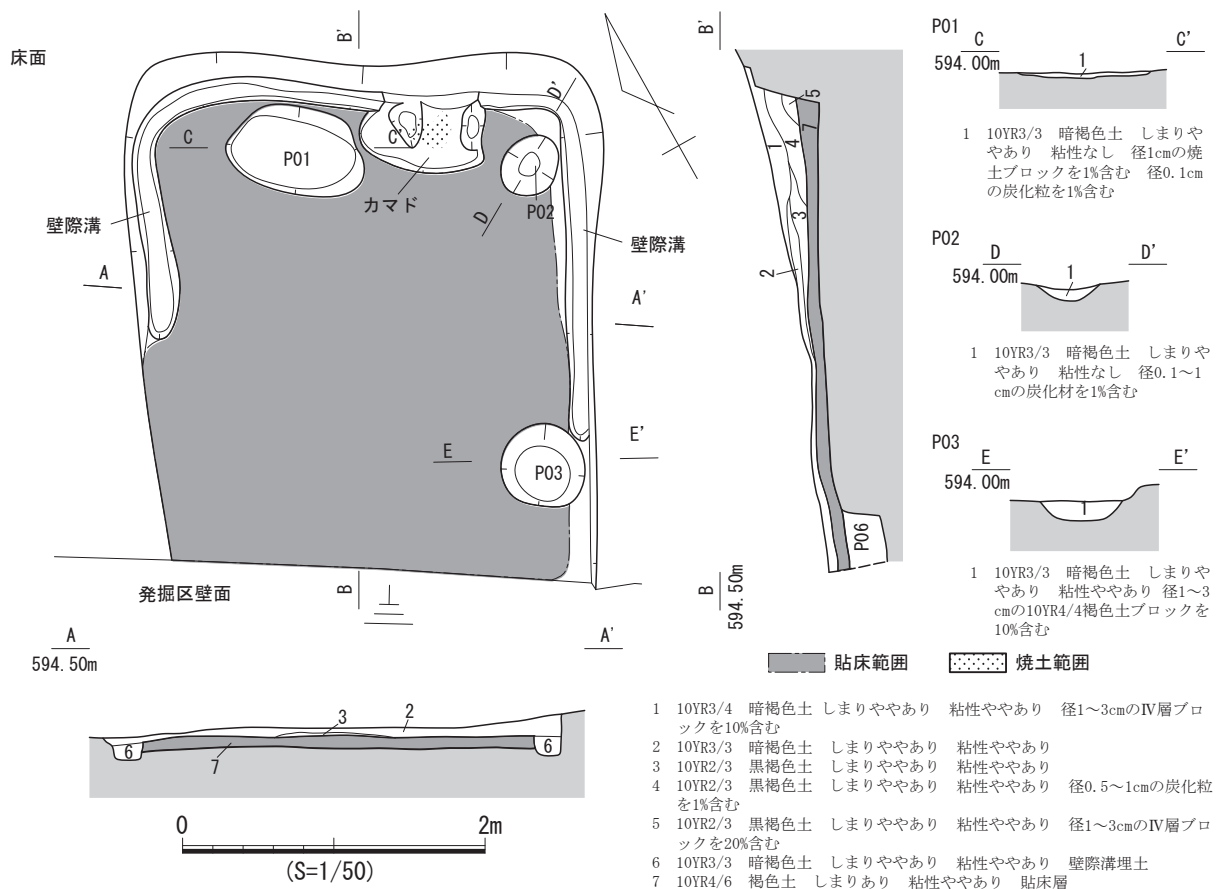


図 131 SI02 遺構図 (1)

面で検出した遺構は柱穴3基、壁際溝1条、カマド1基である。竪穴内の位置関係からP01・P02・P03を柱穴と判断した。また、貼床層下面で検出したが、P05もその位置関係から柱穴の可能性が考えられる。壁際溝は、南西側から南側以外の壁際で検出した。

カマド 竪穴北壁東寄りで検出したが、煙道部は確認できなかった。カマド掘方と袖部掘方、板状に加工した袖部芯材と思われる礫を確認した。カマド掘方には、IV層ブロックや炭化物を含む暗褐色土（2層）が堆積し、その上面は被熱していた（1層）。カマド東側で出土した礫は、形状と大きさから、カマド西側に据えていた袖石が抜き取られたものの可能性が考えられる。なお、袖石を覆う土も天井部構造材も確認できなかったことから、竪穴建物廃棄の際にカマドを解体した可能性が考えられる。

床下 貼床除去後に土坑3基を検出したが、このうちP05は他の柱穴等との位置関係から、柱穴となる可能性が考えられる。この場合、P05に柱を立て埋め戻した後、貼床を形成したことが考えられる。

遺物出土状況 カマド周辺と南側から土師器と須恵器が少量出土した。カマドの東脇で出土した土師

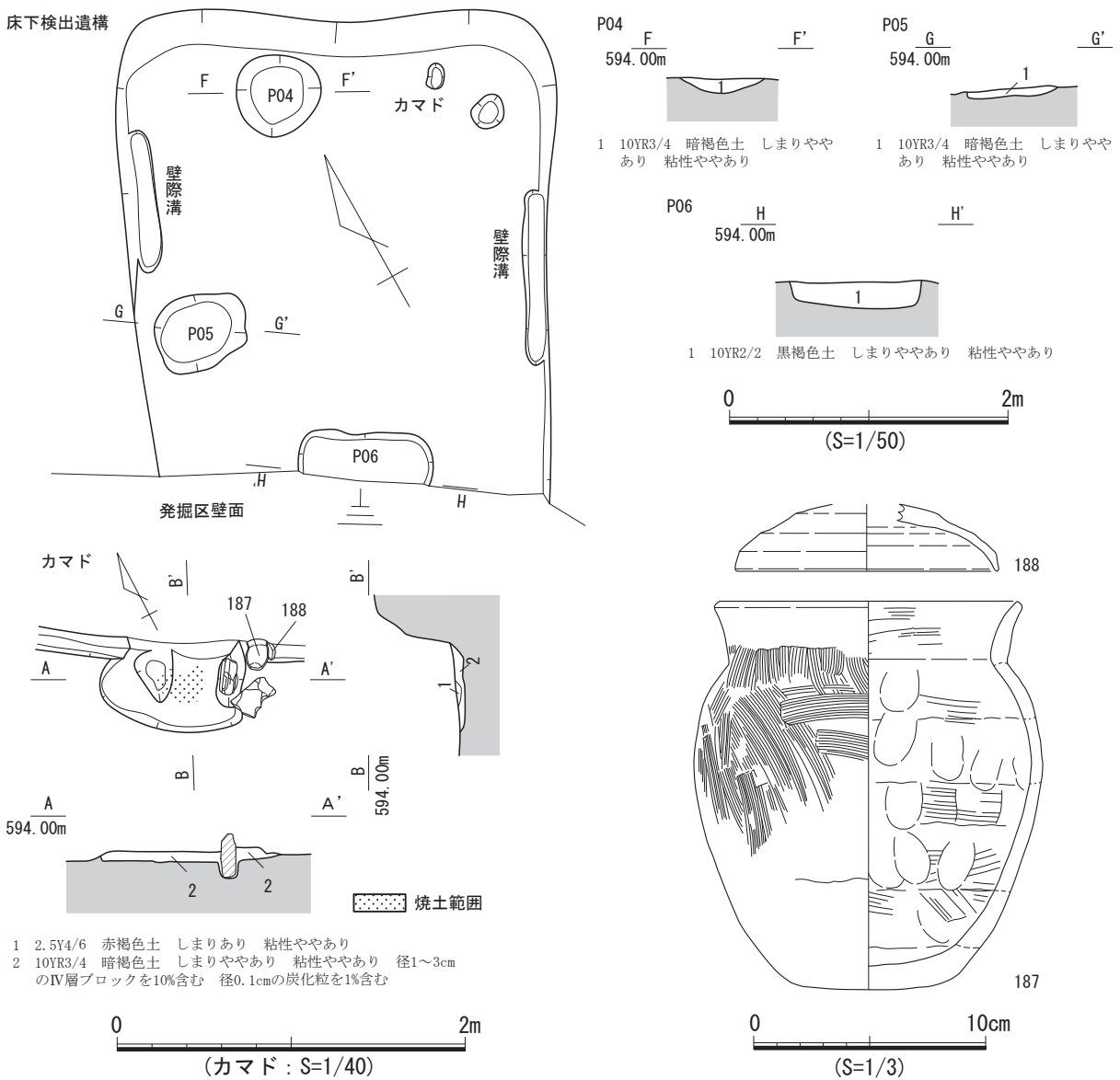


図 132 S102 遺構図（2）、出土遺物

器甕(187)は、縦に半截されており、口縁部を北壁面に向けて内面を上にした状態で出土した。須恵器坏蓋(188)も縦に半截され、甕の東脇の下に挟み込まれた状態で出土した。竪穴建物の廃棄儀礼によるものと思われる。

出土遺物 187は土師器の長胴甕で、SI01出土の180に比べて胴部の張りが小さく、頸部が屈曲する。188は美濃須衛産の坏蓋で、頂部の器厚が厚く、口縁端部は僅かな屈曲が見られる。

時期 カマド解体後に甕と共に置かれた須恵器の坏蓋(188)から、7世紀後葉と思われる。

SI03 (図133～図135)

検出状況 EA2～EB3グリッド、IV層の上面で検出した竪穴建物である。SB01と重複し、SB01が古い。平面形は長方形で、長軸の方位はN-72°-Wである。

埋土 3層以外は褐色土と暗褐色土で、5層から9層までの下層は、壁際を除いてほぼ水平に堆積する。上層の1層から4層には炭化粒やIV層起源のブロック土が含まれる。カマドに添って堆積している3層は、カマドの焼土又はカマド構築材の可能性が考えられる。

壁 IV層を掘り込み、東・西壁は緩やかに、北壁は直線的に立ち上がる。壁の残存高は最大で0.46mである。

床面 ほぼ平坦で、貼床層は確認できなかった。床面で検出した遺構は柱穴8基、土坑12基、カマド1基である。また、カマドの前部からP14までの間に、底面が平坦で浅い窪地を確認した。竪穴内の位置関係からP01・P02・P03北東部・P04を柱穴と判断した。同様にP05・P06・P03南東部・P07も柱穴と考えられることから、建て替えが行われた可能性がある。この場合、P04とP07の重複関係から、後者の柱配置が新しい段階の柱穴であると判断した。

カマド 北壁西寄りで確認したが、煙道部は確認できなかった。また、明確な燃焼部も確認できなかったが、北壁から床面にかけて浅い掘り込みとその埋土内に炭や焼土を含むことからカマドと判断した。カマド構築土及び構築材と推定される礫は確認できなかった。

床下 貼床層や掘方整地層は確認できなかったため、床下面としては遺構を検出していない。

遺物出土状況 土師器甕、須恵器坏・蓋・高坏・甕・横瓶、石包丁などが埋土中から散在した状況で出土した。また、竪穴内のP02・P06・P08・P20・カマドの埋土からも土器類が出土したが、特徴的な出土状況を示すものはなかった。

出土遺物 189と190は土師器甕で、189は口縁部が大きく外反し、190は頸部に明瞭な段を持つ。191は須恵器坏で底部から直線的に開く。192と193は須恵器蓋で、SI01の184や185と同様に内面の返しや口縁端部の屈曲が小さい。194は須恵器横瓶の胴部で内面はナデ、外面には並行タタキ目が見られる。195は厚みが均一の板状の金属製品。196は石包丁で、中央の小穴は穿孔途中で裏面が剥離したため、位置をずらして再穿孔している。

時期 カマドから出土した須恵器から7世紀後葉と思われる。

SI04 (図136・図137)

検出状況 EB4～EB5グリッド、IV層の上面で検出した竪穴建物である。SZ01の周溝埋土を掘削していることからSZ01が古いと判断した。平面形は、南西隅が不明であるが、東西北の三辺がほぼ直線状になることから方形と思われる。南辺は弧を描くような形状となっているが、南西側が削平されたことによるものと思われる。長軸の方位はN-7°-Wである。

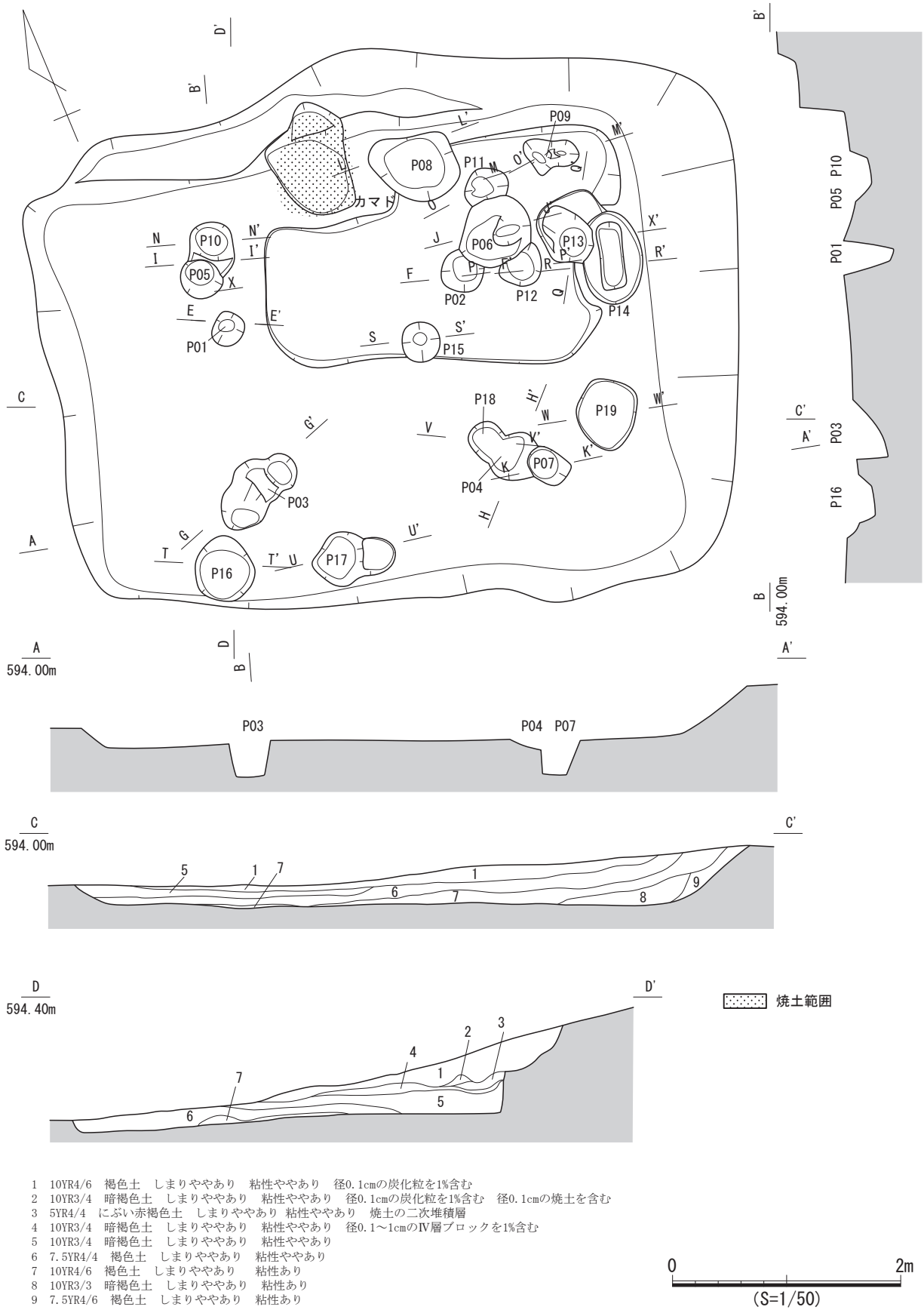


図 133 SI03 遺構図 (1)

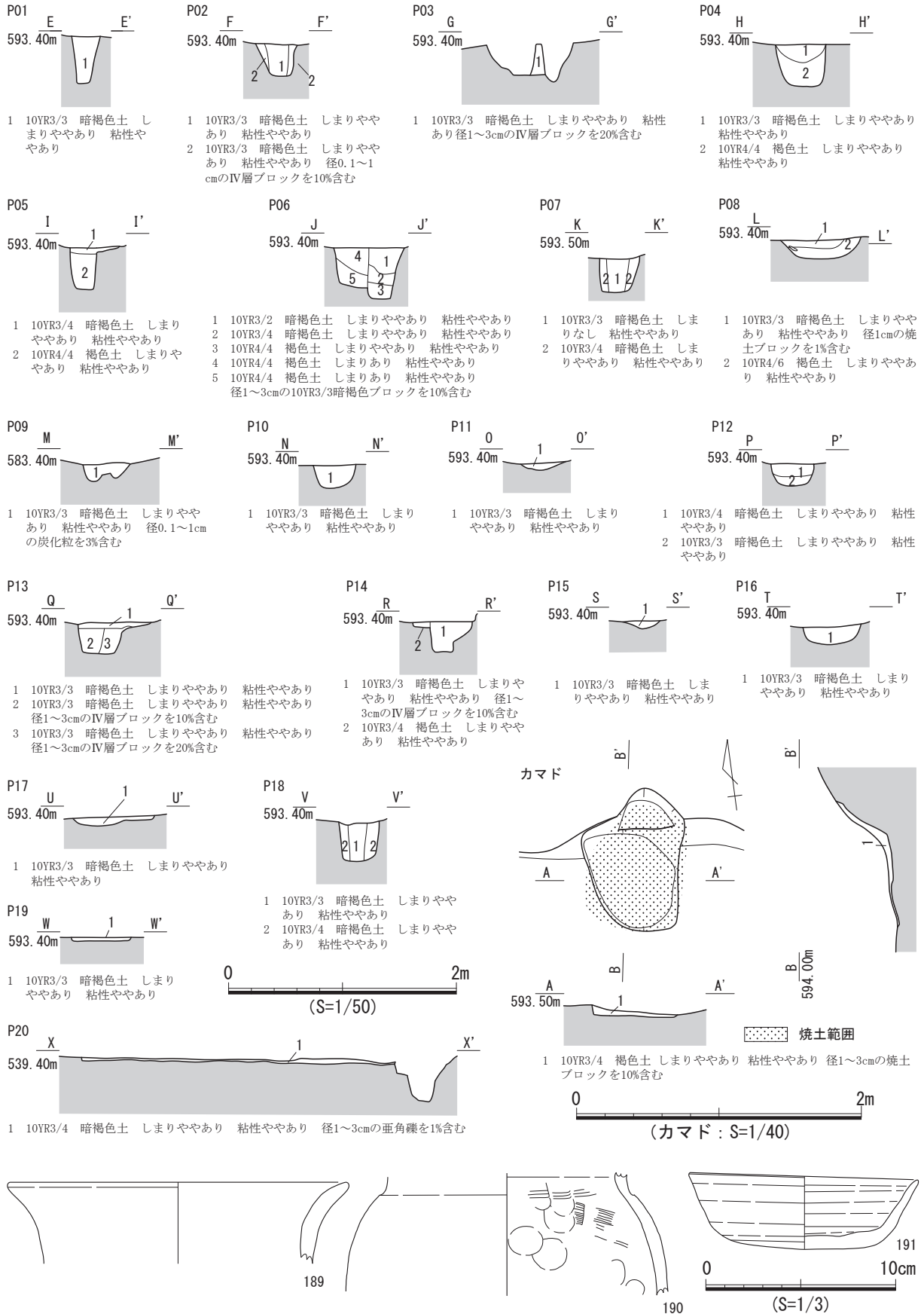


図 134 SI03 遺構図 (2)、出土遺物 (1)

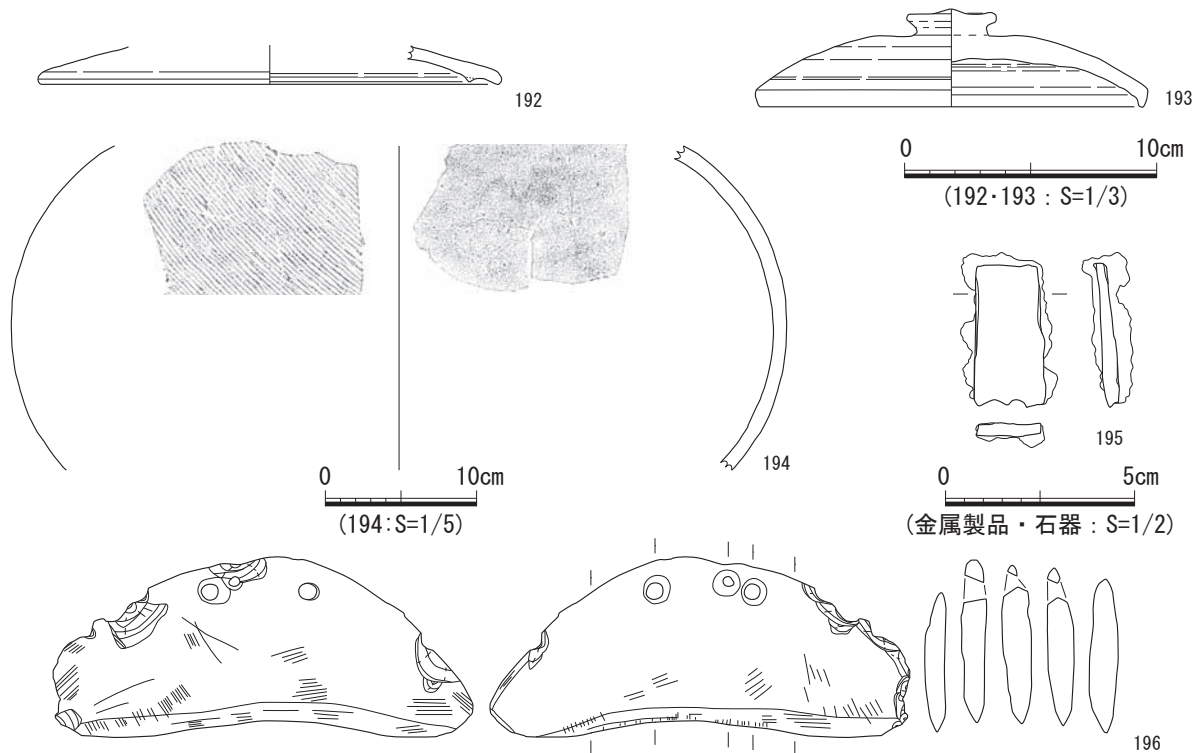


図 135 SI03 出土遺物 (2)

埋土 褐色土と暗褐色土がほぼ水平に堆積する。褐色土の8層は、南東隅部分の床面にある円形の凹みの埋土であり、明確に確認できなかつたが、別の遺構となる可能性もある。埋土にはIV層ブロック土が含まれることから、人為堆積の可能性が高い。

壁 壁面は直線的に立ち上がり、残存高は最大で0.52mである。

床面 ほぼ平坦で、検出した遺構は柱穴4基、土坑5基、カマド1基である。貼床層や壁際溝は確認できなかつたが、南東隅部分で円形の硬化した凹みを確認した。竪穴内の位置関係や土層観察から、P01・P02・P03を柱穴と判断した。

カマド 東壁中央寄りで検出したが、煙道部や袖部等は確認できなかつた。床面に浅い掘り込みと被熱痕跡を確認したため、これをカマドと判断した。カマド上面では散在した礫が出土したが、カマドに伴うものとは考えられなかつた。

床下 貼床層や掘方整地層は確認できなかつたため、床下面としては遺構を検出していない。

遺物出土状況 土師器甕、須恵器坏・蓋・甕、磨石などが、埋土中から散在した状況で出土した。カマド内からは中世陶器2点が出土したが、遺構上面で確認された攪乱による混入物と思われる。なお、P06の南東脇のg層からは土師器甕(198)がまとまって出土した。

出土遺物 197と198は土師器甕で、197は胴部の張りや頸部の屈曲は小さく、口縁部は小さく外反する。198は口縁部のみで内面に煤状の炭化物が付着する。199は須恵器蓋で摘みを持つと思われる。200は須恵器甕の胴部で、内面に同心円の当て具痕と外面に格子のタタキ目痕が見られる。201は磨石で、両平坦面の長軸方向に擦痕が確認できる。

時期 遺構埋土から出土した土師器からは7世紀と思われる。

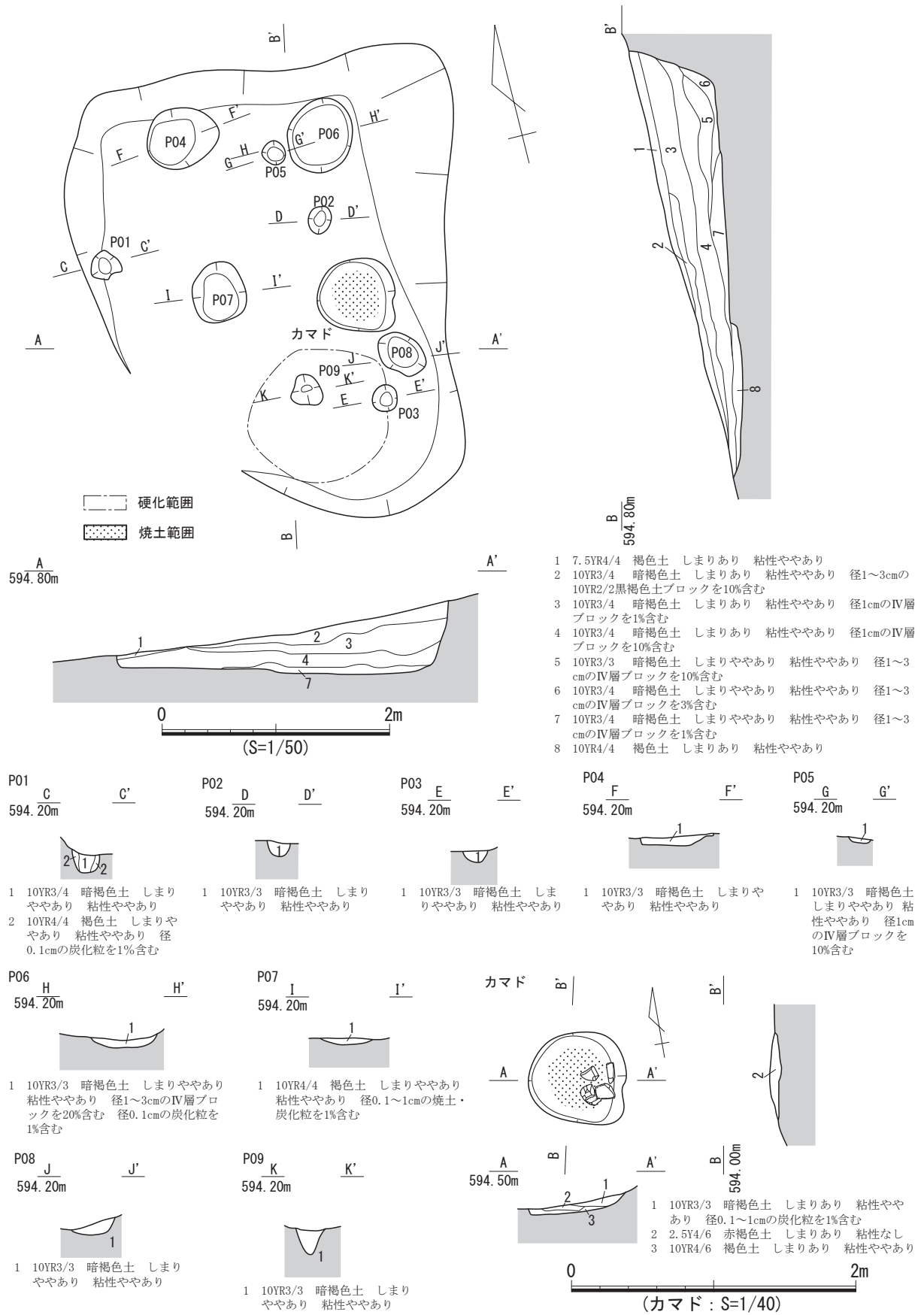


図 136 SI04 遺構図

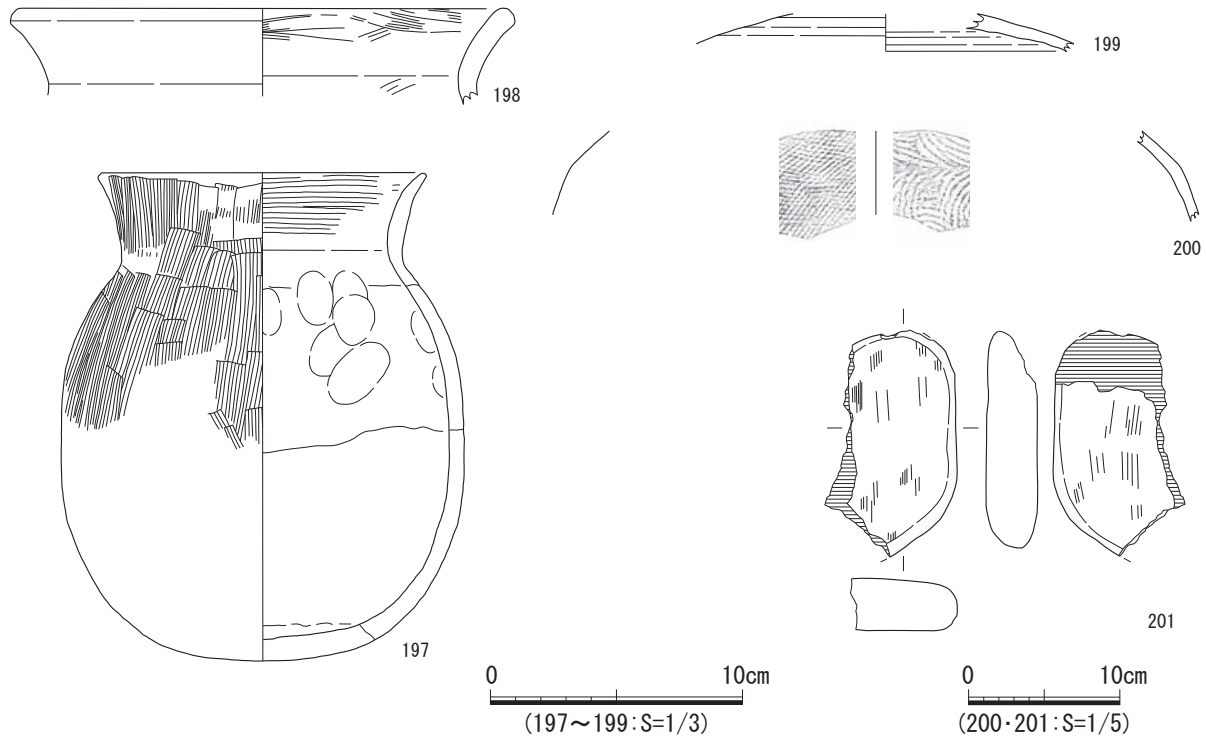


図 137 SI04 出土遺物

SI05 (図 138・図 139)

検出状況 EB2~EC3 グリッド、IV層の上面で検出した一辺約 3.1mの小型の竪穴建物である。北側に位置する SI03 との間隔は、約 0.2mと狭い。建物の南側は削平を受けており壁面が途切れるが、残存する辺から方形に近い形状と考える。長軸の方位はN-7°-Eである。

埋土 炭化粒やIV層起源のブロック土が混じる暗褐色土の単層である。このことから人為堆積と考えられる。

壁 壁面は東・西壁はやや開き、北壁は直線的に立ち上がる。壁の残存高は最大で 0.16mである。

床面 ほぼ平坦であるが、掘り過ぎのため図上は南西に向かって傾斜する。貼床は確認できなかった。床面で検出した遺構は柱穴 1 基、土坑 3 基、カマド 1 基である。柱穴と考えられるものはないが、P01~P03 は柱穴の可能性はある。

カマド 建物の東壁中央で検出したが、残存状況が悪く煙道部や袖部は確認できなかった。床面で浅い皿状の掘方を確認し、その上面で焼土面があったことからカマドと判断した。

床下 貼床層や掘方整地層は確認できなかったため、床下面としては遺構を検出していない。

遺物出土状況 埋土中のカマド部から竪穴内北西部を中心に土師器甕、須恵器の坏・蓋・甕が埋土中から散在した状態で出土した。また、竪穴建物内の P01 埋土中から土師器甕が 1 点出土した。

出土遺物 202~204 は土師器甕で、202 は口縁部が外反する。203 は胴部の張りが弱く、口縁部が強く外反する。204 は頸部に 1 条の沈線を巡らし、長胴甕の胴部と思われる。205 は須恵器有台坏で底部が窪み、底面端部より内側に高台が付く。口縁部は直線的でわずかに開く。内面には煤状の付着物が認められる。206 は須恵器坏で、胴部から口縁部へ直線的に開く。207 は須恵器甕胴部片で、内面に同心円の当て具痕と外面に格子のタタキ目痕が見られる。

時期 埋土中から出土した須恵器から、8世紀前葉頃と思われる。

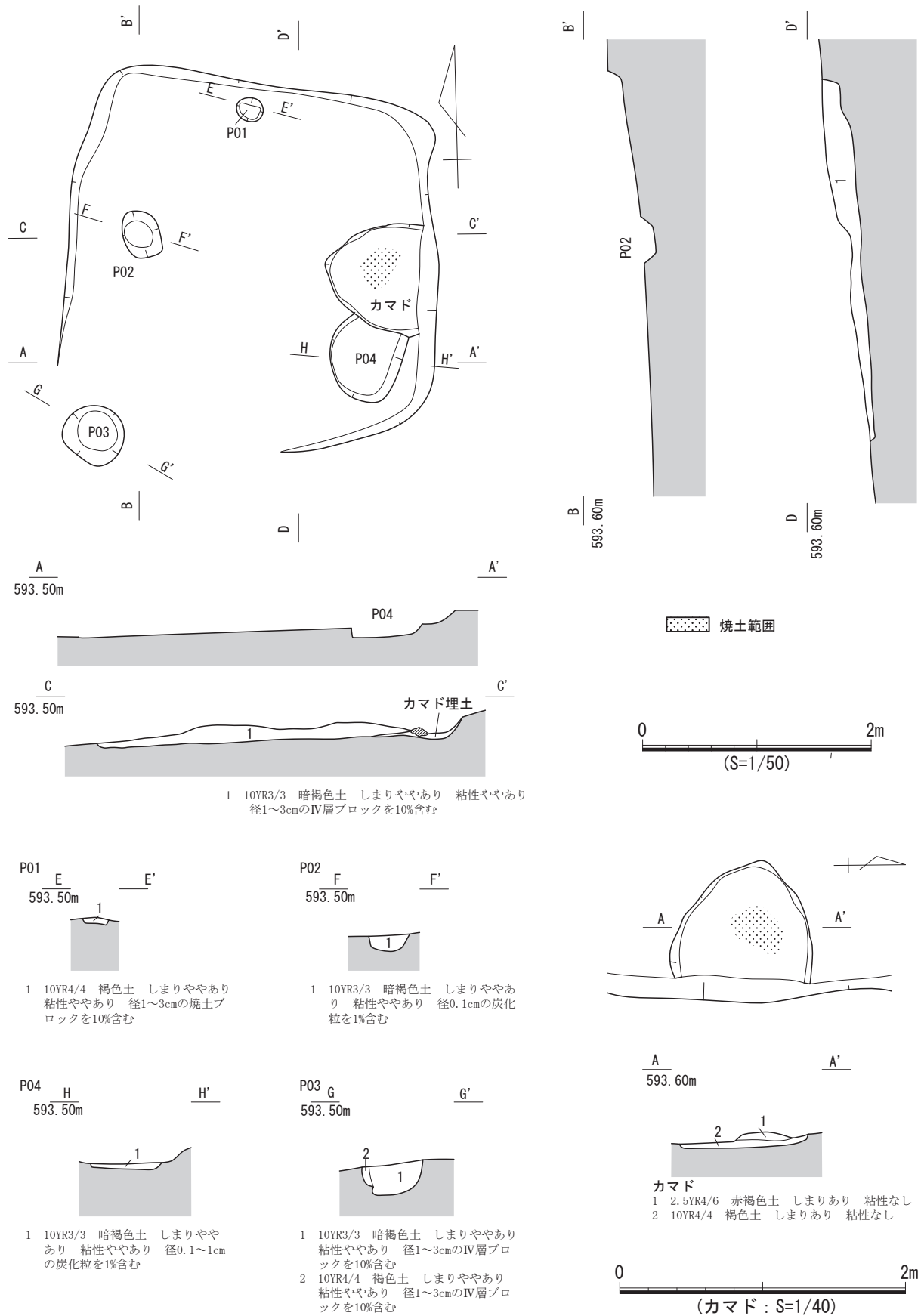


図 138 SI05 遺構図

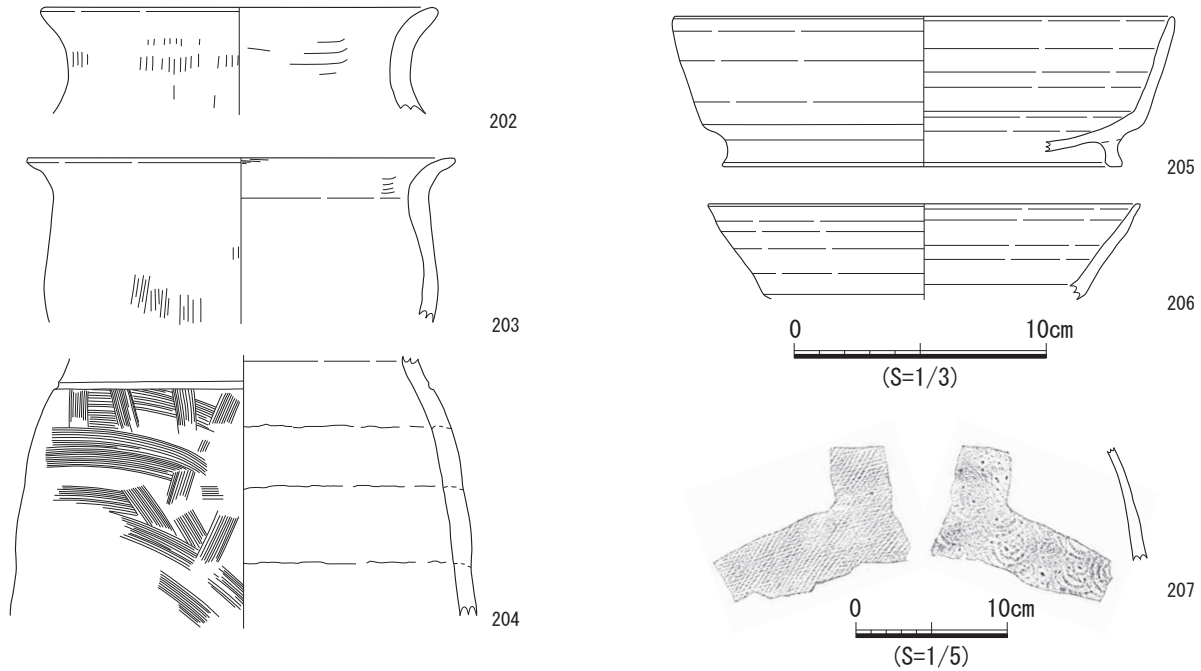


図 139 SI05 出土遺物

SI06 (図 140・図 141)

検出状況 EC3～ED4 グリッド、IV層の上面で検出した一辺約 3.2mの小型の竪穴建物である。当初は、SI07 や SI08 と区別することが出来ず、一つの遺構と判断し四分割して掘削を開始した。しかし、掘削する過程で複数の遺構が重複していることが判明し、土層観察結果や掘削途中におけるプランの確認、床面の違い、それぞれのカマド若しくはその痕跡の存在から、SI06、SI07、SI08 の 3 棟の竪穴建物であると判断した。これら 3 棟の時期的な前後関係は、SI06 が最も新しく、次いで SI07、最も古いのが SI08 と土層堆積状況の観察により判断した。平面形は、やや歪むものの概ね隅丸方形で、長軸の方位はN-14° -Wである。なお、建物北東側は後世の攪乱を受けている。

埋土 IV層起源のブロック土が混じる褐色土の 2 層と 3 層、褐色土の 1 層と 4 層がほぼ水平に堆積する。2 層と 3 層は、人為堆積の可能性が考えられる。

壁 壁面はやや開き、壁の残存高は最大で 0.58mで、先行する SI07、SI08 よりも深い。

床面 ほぼ平坦で、貼床層は確認できなかった。床面で検出した遺構は、壁際溝 1 条、土坑 3 基、カマド 1 基である。竪穴内の位置関係から P01～P03 が柱穴と考えられ、やや大型の土坑となる P02 の南北の凹みが柱穴の痕跡となれば、4 本柱の配置となる。壁際溝は西辺のみで確認した。

カマド 建物の北壁中央で検出したが、煙道部は確認できなかった。カマド本体では、袖部心材とした円礫と周囲に板状の角礫を確認した。また、カマド構築材と考えられる礫がカマド周辺に散在していた。カマド構築に伴う掘方は確認できなかったが、2～5層はカマド構築材で、燃烧部内に炭化粒を含む 1 層が堆積していた。燃烧部の壁側上部で天井部が残存している可能性がある。

床下 貼床層や掘方整地層は確認できなかったため、床下面としては遺構を検出していない。

遺物出土状況 埋土中のカマド部から P02 を中心に土師器甕、須恵器坏身・坏蓋・甕、敲石、剥片が散在した状況で出土した。

出土遺物 208 と 209 は土師器長胴甕で、208 は胴部の張りが弱く、頸部が直線的に立ち上がり、口縁

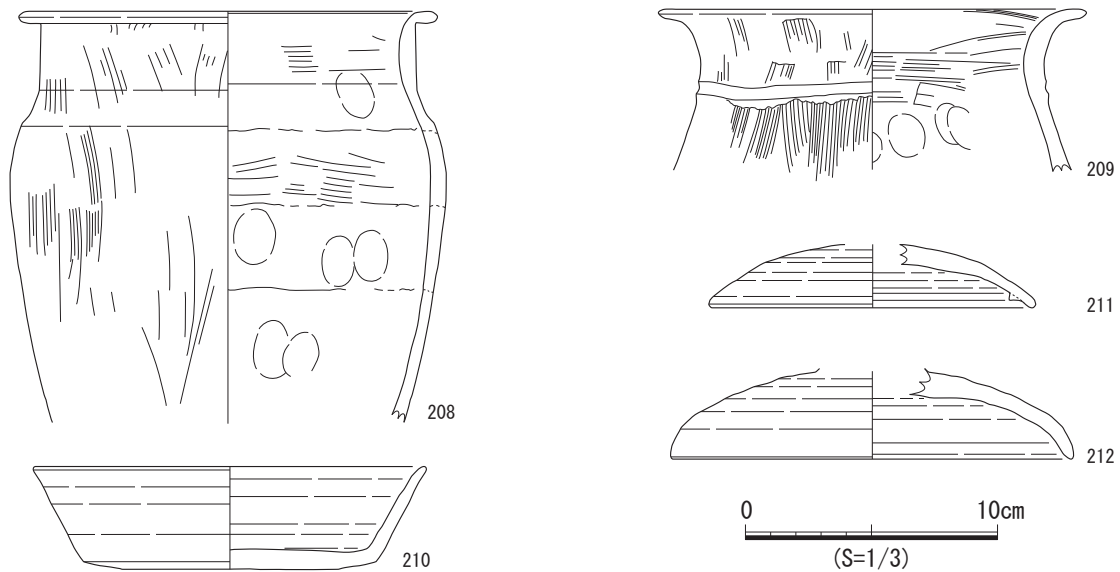


図 141 SI06 出土遺物

部は屈曲して開く。209 は、頸部から口縁部が大きく外反する。頸部には 1 条の沈線が巡る。210 は須恵器無台坏で、底部は広く平坦で、口縁部は直線的に開く。211 と 212 は須恵器蓋で、211 は口縁部内面の返りが小さく、212 は口縁部が内湾する。

時期 遺構埋土及びカマド付近から出土した須恵器から 8 世紀前葉頃と思われる。

SI07 (図 142・図 143)

検出状況 EC3～EC4 グリッド、IV層の上面で検出した東西約 4.0m、南北約 3.5mの竪穴建物である。多くが SI06 により削平されているが、北辺と西辺が直線的となるのに対し、東辺が弧状となる。SI06 で述べたように、当初は SI06 や SI08 と区別することができず、一つの遺構として掘削した。その過程において、SI06 がまず区別でき、その後 SI07 と SI08 の 2 棟の竪穴建物を認識することができた。土層堆積状況の観察から、SI07 は北東側にある SI08 よりも新しい。長軸の方位は N-10° -W である。

埋土 SI06 との重複により北辺と東辺のみ残存する。1 層～5 層まで全てで IV 層起源のブロック土が混入し、ほぼ水平に堆積することから人為堆積の可能性がある。

壁 壁面はやや直線的に立ち上がる。壁の残存高は最大で 0.36m である。

床面 残存する部分はほぼ平坦であるが、床面上では柱穴を検出できなかった。検出した遺構はカマド 1 基のみである。カマド掘方の状況から、床面は 5 層上面の可能性が考えられるが、貼床層や硬化面は確認できなかった。SI08 調査後に行った SZ02 周溝掘削時に検出した柱穴状の穴 2 基 (P01 と P02) が、SI07 との位置関係から、SI07 の柱穴を見落としたものである可能性が考えられる。このため図 142 では、2 基の柱穴状の穴を SI07 平面図に合成して図示した。他に柱穴状の穴は検出できなかったが、SI06 により削平された可能性が考えられる。

カマド 北壁やや東寄りで見出したが、煙道部は確認できなかった。カマド本体では、西側で袖石心材とした円礫と沿うように板状の角礫を確認した。東側では、カマド構築材の可能性のある角礫が散在していた。壁面から床面にかけて浅く皿状に窪ませたカマド掘方を確認した。カマド内の埋土を除去後の底面にて焼土面を確認した。

床下 掘方整地層と思われる 5 層を除去したが、遺構は確認できなかった。

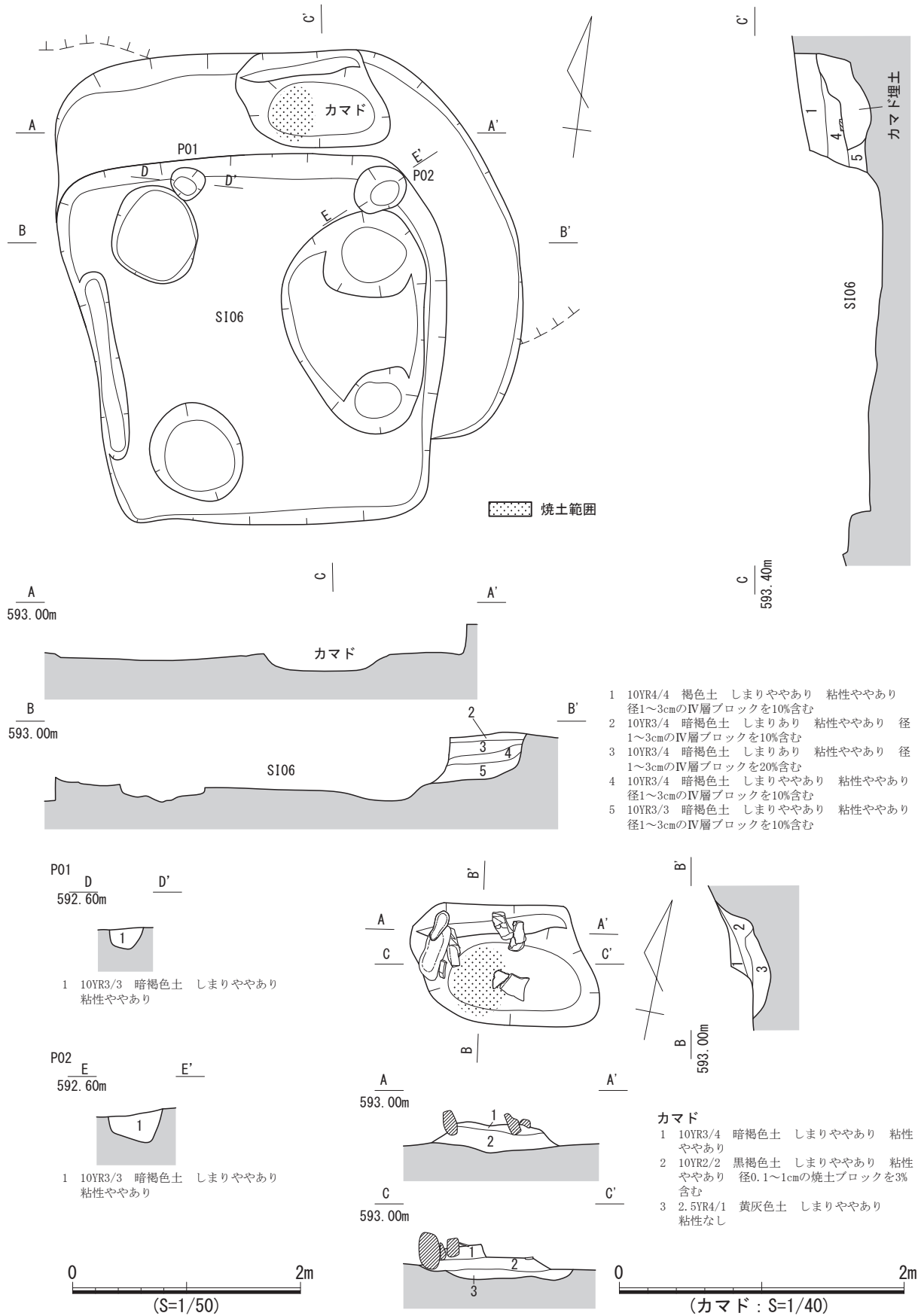


図 142 S107 遺構図

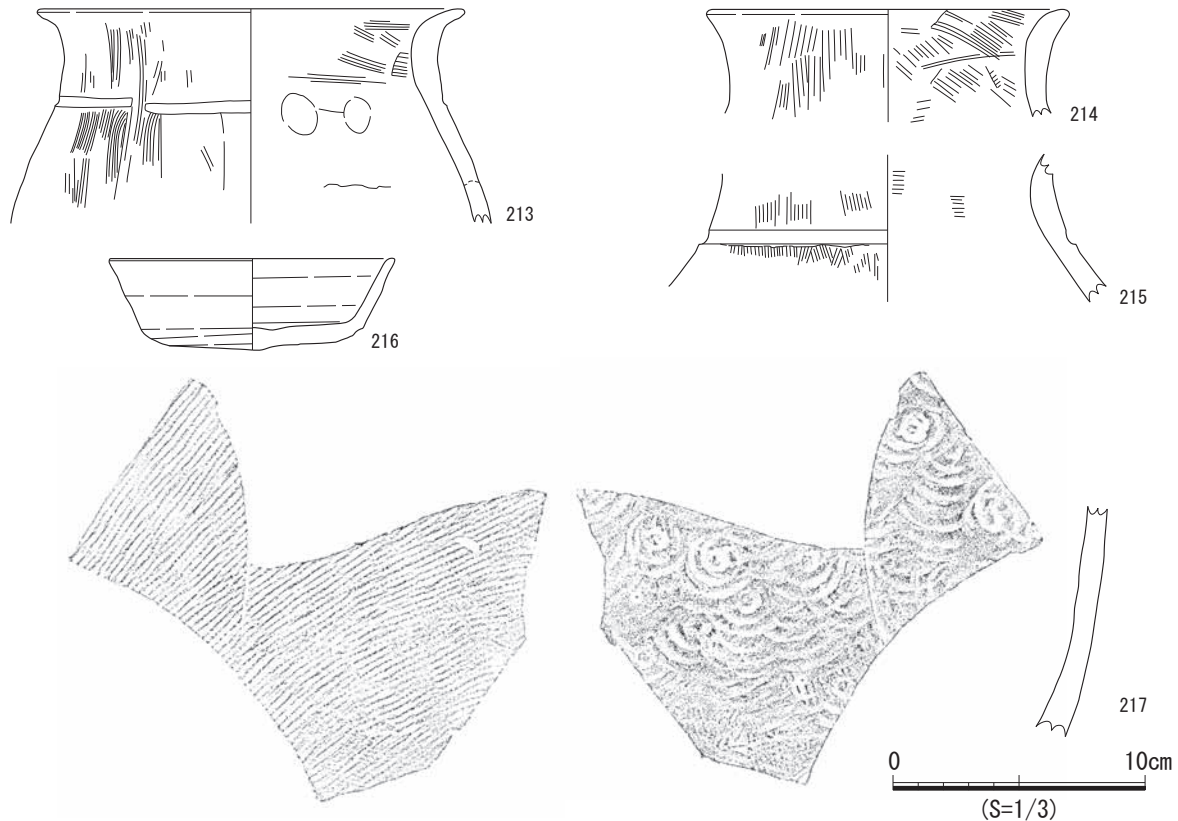


図 143 SI07 出土遺物

遺物出土状況 埋土中のカマド部を中心に土師器甕とその外周から須恵器坏身・坏蓋・甕、石材の剥片が散在した状況で出土した。

出土遺物 213～215 は土師器甕で、213 は頸部が直線的に立ち上がり、口縁部が強く外反する。214 は口縁部の外反が弱い。215 は頸部片で、213 と同様に胴部との境に1条の沈線が巡る。216 は須恵器無台坏で、口縁部は直線的に開き、7世紀後葉のものと思われる。217 は須恵器甕で、内面に同心円の当て具痕と外面に平行タタキ目が見られる。

時期 カマドや埋土中から出土した須恵器や、SI08 と SI06 との関係から8世紀前葉頃と思われる。

SI08 (図 144・図 145)

検出状況 EC3～ED4 グリッド、IV層の上面で検出した東西約4.8m、南北約4.2mの堅穴建物である。SI06 と SI07 により多くが削平されているが、確認できる北辺と東辺は概ね直線的で、長軸の方位はN-12° -Wである。SI06 で述べたように、当初はSI06 や SI07 と区別することができず、一つの遺構として掘削した。土層堆積状況の観察から、SI08 は中央から南西部にある SI07 よりも古く、大半が削平されている。

埋土 SI07 の削平により北辺と東辺のみ残存している。埋土は3層に分層できたが、その下層では4層として貼床層を確認した。

壁 壁面は北壁が特に傾斜するが、他は緩やかに立ち上がる。壁の残存高は最大で0.18m。重複するSI06 と SI07 よりも浅い。

床面 残存する部分は、ほぼ平坦である。床面で検出した遺構はなく、北壁面で小土坑1基、焼土ブロックを埋土に含む土坑1基である。このため、床面では柱穴と考えられるような穴を確認していな

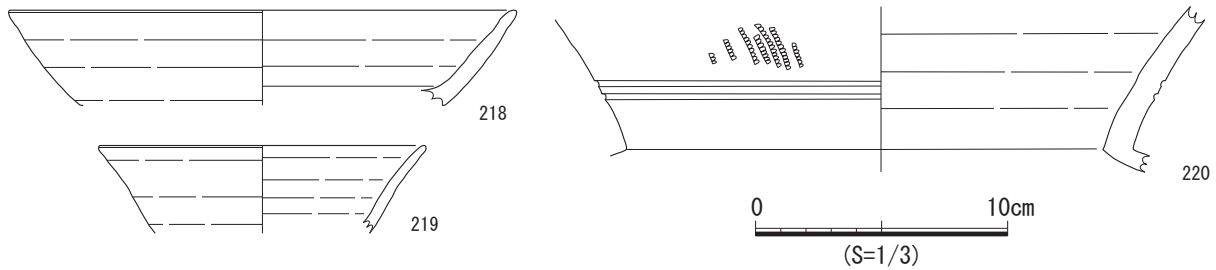


図 145 SI08 出土遺物

いが、竪穴外部の北辺から東辺にかけて、小穴 P01～P03 の 3 基を検出した。これが上屋に関連する遺構となる可能性を考え、焼土ブロックを多く含む皿状の土坑の存在と合わせて竪穴建物と判断した。

カマド 東壁中央で確認した、浅い皿状の土坑である。袖や天井部、その構造材を検出したものではないが、埋土に焼土ブロックが含まれることから、カマドの痕跡の可能性があると考えた。

床下 貼床層を除去したが、遺構は検出できなかった。

遺物出土状況 埋土中とカマド部から、土師器の甕と須恵器の坏・甕が散在した状況で出土した。

出土遺物 218 と 219 は焼成の甘い須恵器坏の口縁部片で、直線的に開く。220 は須恵器甕の頸部片で、頸部に 2 条の沈線と楕状工具による刺突列を巡らせる。

時期 カマド内や埋土中から出土した須恵器と SI07 と SI06 との関係から 7 世紀後葉と思われる。

SI09 (図 146・図 147)

検出状況 ED4～ED5 グリッド、IV 層の上面で検出した竪穴建物である。検出時に SZ02 の周溝や SK050 との区別ができず、一つの遺構と判断して掘削を開始した。しかし、掘削する過程で SZ02 や SK050 とは別の遺構であることが判明し、土層観察結果や掘削途中におけるプランの確認などから、これらの遺構と区別することができた。これらの遺構との時期的な前後関係は、土層観察結果から SZ02 < SI09 < SK050 の順に新しい。不定形の平面形であるが、床面上で柱穴と思われる小穴や、カマドの可能性のある焼土を伴う土坑の存在から、竪穴建物と判断した。緩斜地であるため南側の掘方壁面が非常に浅く、長軸の方位は N-7° -W である。

埋土 5 層に分層したが、2 層～5 層が北から東壁側に堆積し、その後 1 層によって埋没する。埋土中には IV 層起源のブロック土が混じることから、人為堆積の可能性が高い。

壁 壁面は比較的立ち上がり、壁の残存高は最大で 0.38m である。

床面 ほぼ平坦であるが、貼床層は確認できなかった。床面で検出した遺構は柱穴 5 基、土坑 4 基、焼土を伴う土坑 1 基である。竪穴内の位置関係から P01～P04 を柱穴と判断した。P06 には柱痕跡が確認できるため、他の建物遺構となる可能性があるものの、対応する柱穴は不明であるため、SI09 床面遺構として扱った。

カマド 東壁南寄り焼土と伴う浅い土坑を確認した。カマドの可能性はあるが、煙道部や袖部となるようなものを確認することができなかった。

床下 掘方整地層は確認できなかった。

遺物出土状況 カマド周辺を中心に埋土中から土師器甕と高坏、須恵器坏・蓋・碗・甕・平瓶、縄文土器深鉢、凹石、金属製品が散在した状態で出土した。また、カマド及び支柱穴の P02・P05・P04 と土坑の P07・P09 から土師器甕、須恵器坏が出土した。SK050 下面の同一地点から出土した金属製品 3

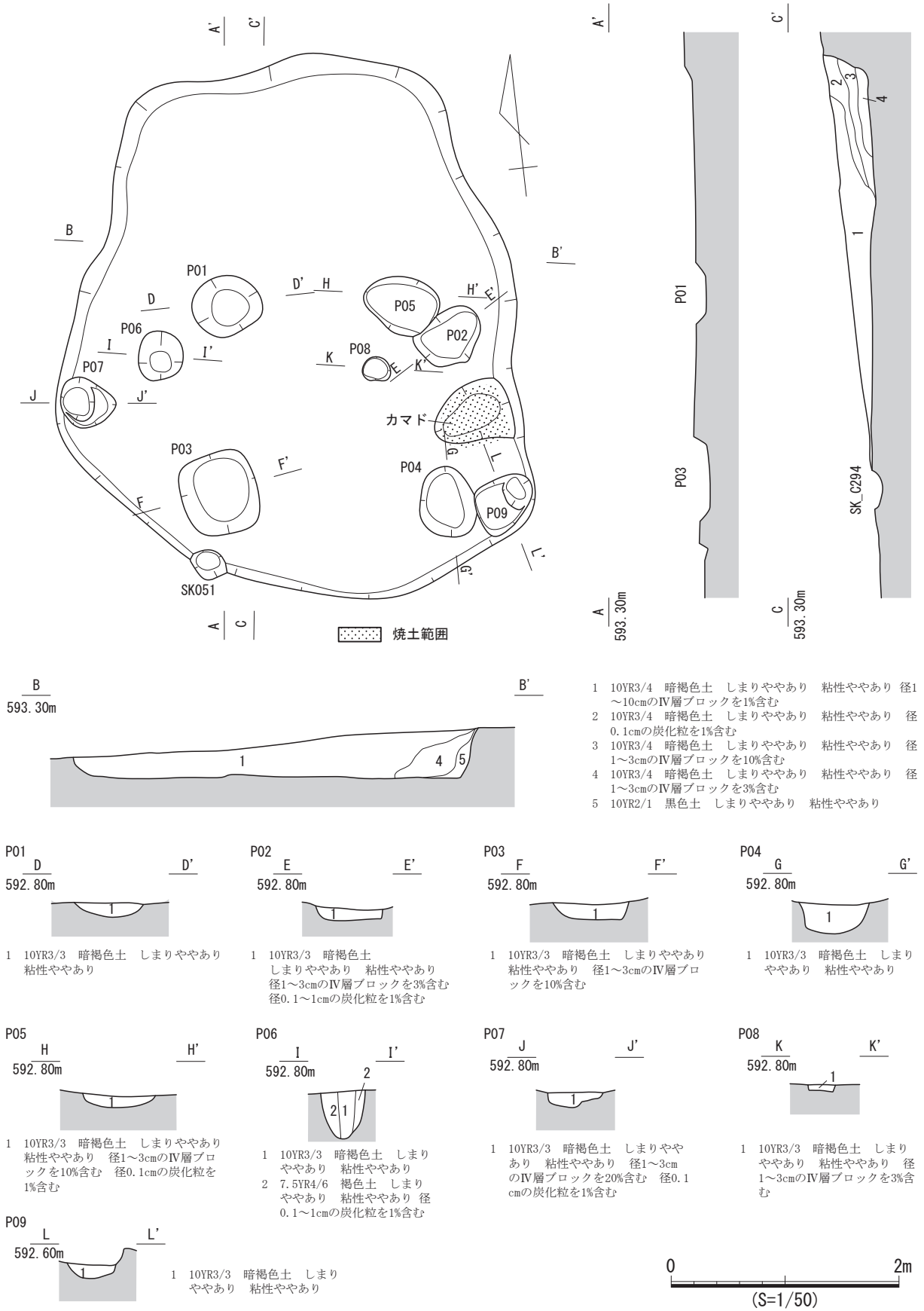


図 146 SI09 遺構図 (1)

点 (232) は同一個体であった。

出土遺物 221 は土師器甕で、口縁部が外反する。222 は土師器甌の把手と思われる。223 は土師器高坏脚部で裾部が屈曲して開く。224 は無台の須恵器坏で底部が平坦で、口縁部は直線的に大きく開く。225 は宝珠形の摘みを持つ須恵器蓋で、口縁部内面の返りは形骸化している。隣接する SI06・SI07 出

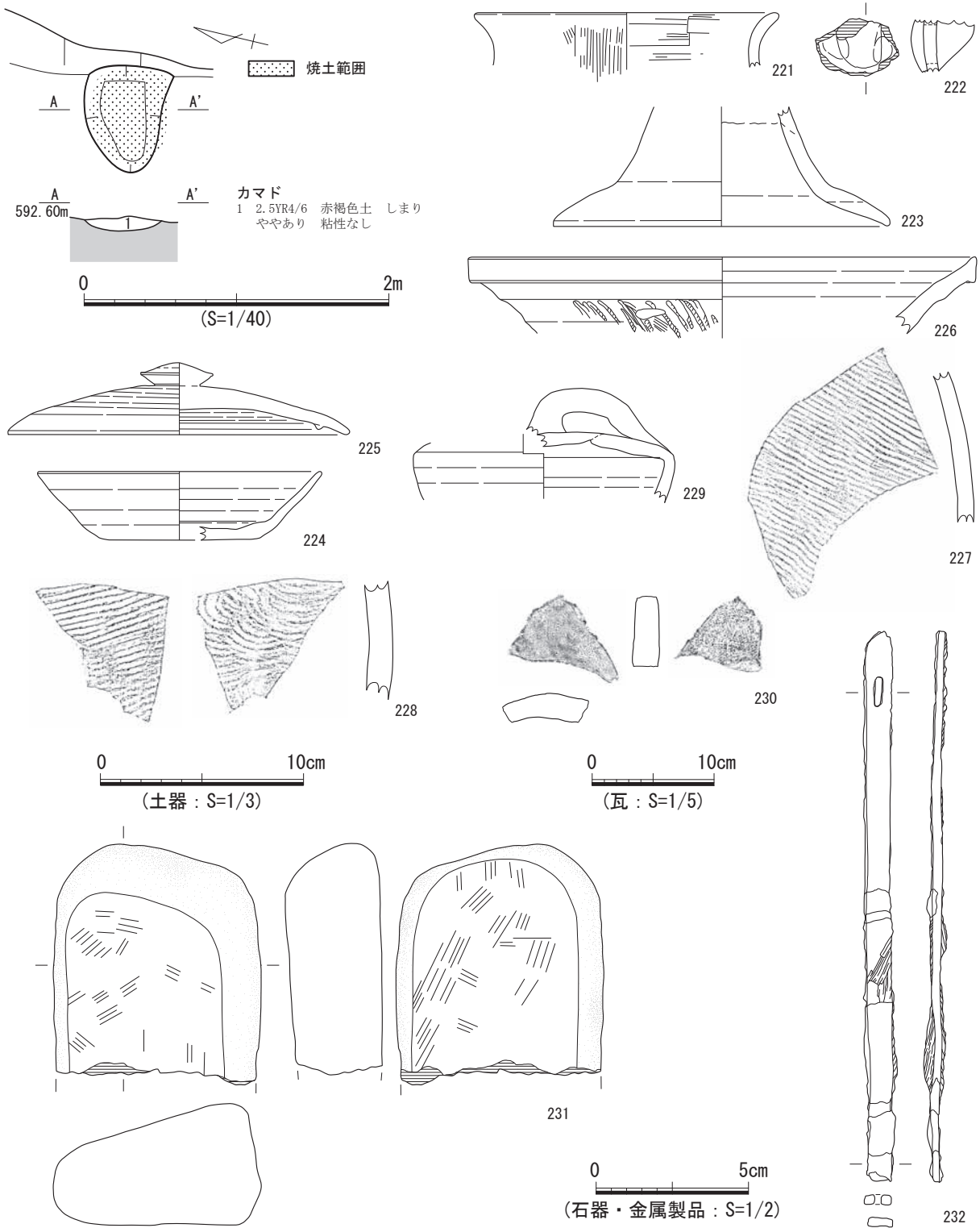


図 147 SI09 遺構図 (2)、出土遺物

土遺物と接合した。226～228は須恵器甕である。226はSI03の遺物と接合した口縁部片で、1条の隆帯の下に櫛状工具による刺突列を施す。227と228は胴部片で、外面には平行タタキ目が残る。227は猿投産と思われる内面は当て具痕をナデ消し、228は美濃須衛産で同心円の当て具痕がそのまま残る。229は須恵器平瓶の胴部から把手部分で、把手は仕上げ時に上面から貼り付ける。230は淡黄色の丸瓦で凹面に布目痕が残る。231は扁平な川原石を用いた磨石で、両面に不規則な擦痕が残る。232は基部に楕円形の穴を設けた板状の金属製品で、先端部は欠け、中央から半分は木質が残る。

時期 出土した須恵器から8世紀前葉と思われる。

SI10 (図148・図149)

検出状況 平坦面①にあたるBS7～BT8グリッド、IV層の上面で検出した。北東部でSZ03周溝と重複するが、SI10が新しい。床面で柱穴及び焼土面を確認したことから竪穴建物と判断した。3.9m×3.2mの小型の竪穴建物で、平面形は長方形に近いが、東辺部は弧状となり、その内側に段があって壁が直立し、その部分での長さが3.5mとなることから、本来は方形に近い形状のものと思われる。長軸の方位はN-81°-Wである。

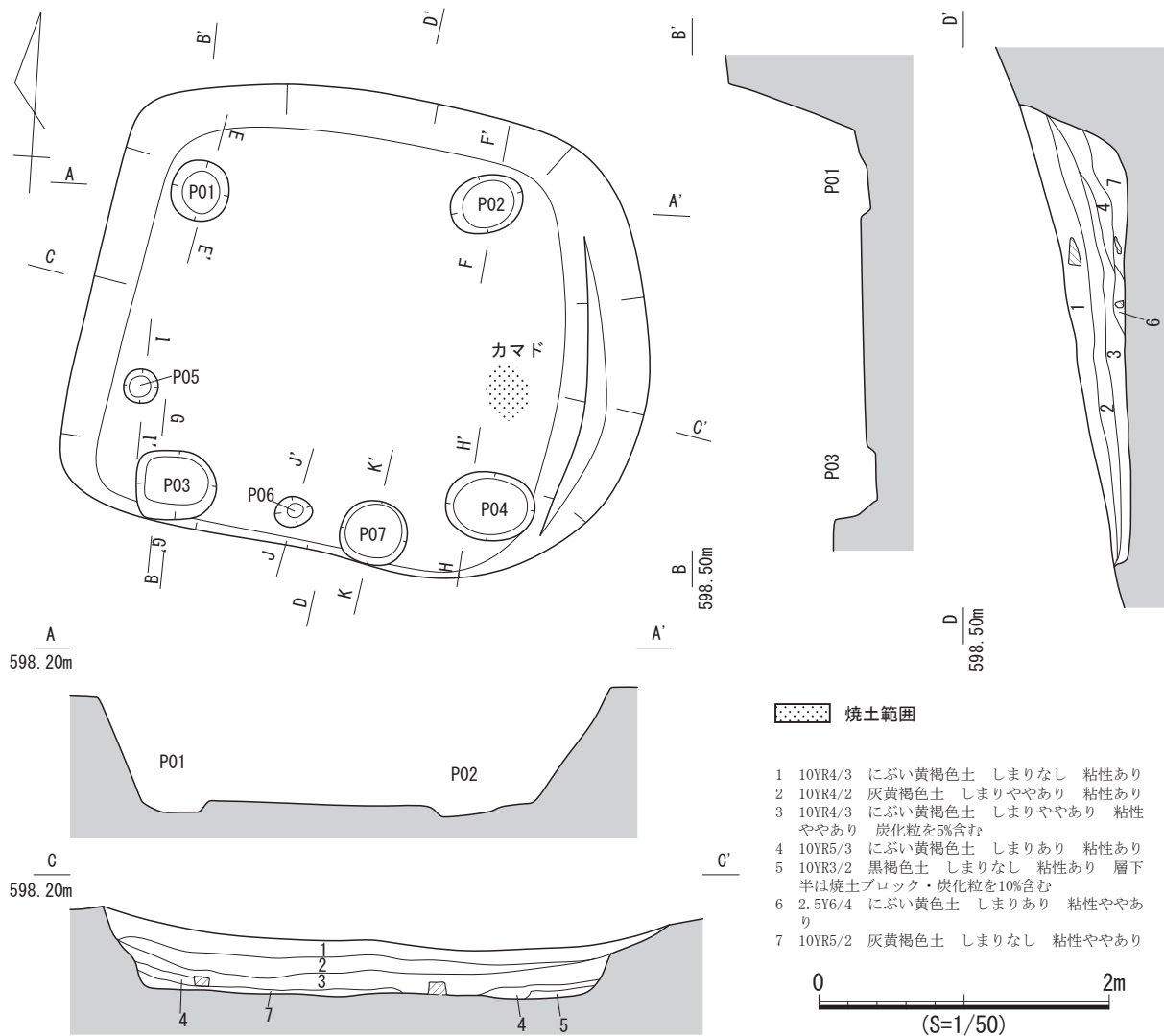


図148 SI10遺構図(1)

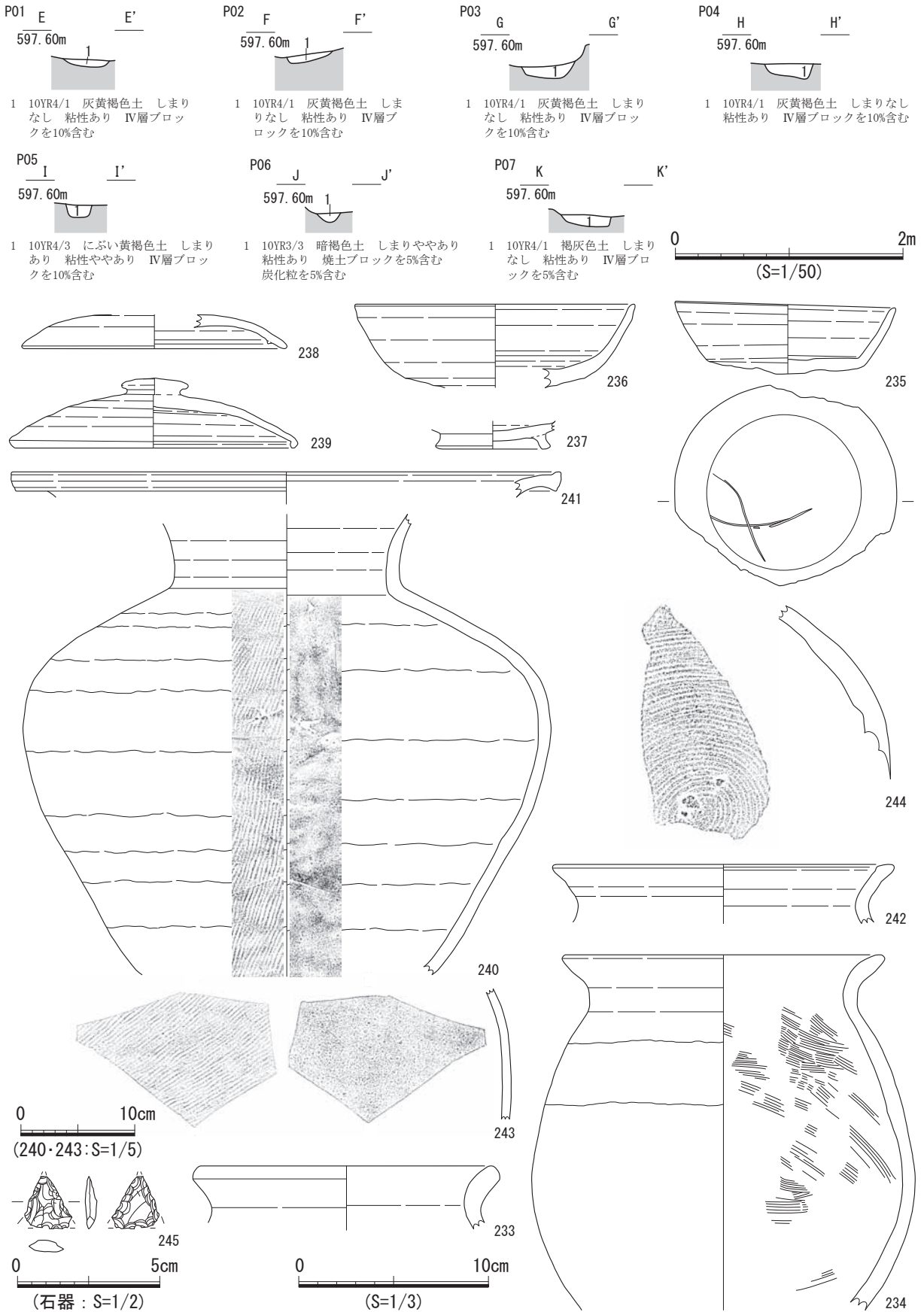


図 149 S110 遺構図 (2)、出土遺物

埋土 7層に分層したが、7層は壁際から床面中央にかけて薄く堆積し、その上に壁面近くで4層・5層が堆積する。5層は焼土面を検出した上部にあたり、焼土ブロックや炭化物を多く含む。1層～3層はレンズ状の堆積で、IV層ブロック土も含まないことから、自然堆積の可能性が考えられる。

壁 壁は土層観察部分では比較的立ち上がり、残存高は最大0.50mである。

床面 ほぼ平坦で、貼床層は確認できなかった。床面で検出した遺構は柱穴4基、土坑3基、焼土面1基である。堅穴内の位置関係からP01・P02・P03・P04を柱穴と判断した。

カマド カマド袖部や煙道部と考えられるものは検出できなかったが、東壁際で焼土面を確認しており、カマドの痕跡である可能性が考えられる。

床下 掘方整地層は確認できなかった。

遺物出土状況 遺構中央付近で須恵器坏・蓋・碗・甕、カマド周辺と西端付近では土師器甕が散在して出土した。また、カマドの南西部分では大型の須恵器甕、焼土面付近から須恵器碗、中央北寄りでは須恵器横瓶、P03の北寄りから金属片2点、P03上層から石鏃が出土した。

出土遺物 233は口縁部が肥厚した土師器甕で、234は胴部が強く張り、頸部が外反する土師器甕である。235は美濃須衛産と思わる須恵器無台坏で、底面には「×」状のヘラ記号がある。236は在地系と思われる須恵器無台坏である。237は佐波里碗を模倣したと思われる須恵器碗で、口縁部は直線的に開く。238と239は在地系の須恵器蓋で、238は口縁部内面の返りが小さい。239は口縁端部が屈曲し、ボタン状の摘みを付ける。240は美濃須衛産の大型の須恵器甕で、内面に無文の当て具を使用する。241と242は猿投産と美濃須衛産の須恵器甕で、T字状の口唇部と口縁端部内面を平坦にする違いがある。243は須恵器甕胴部片で、外面にタタキ目が残る。244は横瓶の胴部片である。245は平基の石鏃で、チャート製である。

時期 出土した須恵器から7世紀後葉と思われる。

SI11 (図150・図151)

検出状況 平坦面②にあたるEAS～EB8グリッド、IV層の上面で検出した。南辺から東辺にかけてSZ07の周溝と重複するが、SI11が新しい。当初は堅穴建物のような遺構とは認識できておらず、古墳周溝の一部が張り出すようなものを想定したため、埋土の堆積状況は南北断面しか確認していない。掘削途中でカマドの存在が確認できたことから、堅穴建物の可能性を考えて掘り下げた。床面では柱穴や北辺中央にカマドを検出したことから、堅穴建物と判断した。4.00m×3.02mの平面形がやや歪んだ長方形で、東辺がやや弧状となる。SZ07との重複によりプランを誤認した可能性もある。長軸の方位はN-82°-Eである。

埋土 埋土は4層に分層したが、1層と2層は別の掘り込みのように北側壁面際に堆積し、3層と4層は全体的に水平堆積する。床面は貼床(5層)されるが、その下層に整地層となるような堆積は確認できなかった。

壁 壁は比較的直立し、残存高は最大0.25mである。

床面 ほぼ平坦である。貼床層(5層)は全体にわたって残存し、よく締まった土である。床面上で検出した遺構は、柱穴4基、土坑3基、カマド1基で、堅穴内の位置関係からP01～P04を柱穴と判断した。掘方が浅い性格不明の土坑を、カマドの両脇(P05・P06)と南側中央(P07)で検出した。

カマド 北壁中央で検出したが、煙道部は確認できなかった。壁面から床面にかけて貼床した後に構

築したと考えられ、袖部及び燃焼部を確認した。燃焼部には焼土面があり、やや浅く窪んでいる。袖部には心材となるようなものは確認できなかった。燃焼部の奥には北壁際で、深さ0.18mの小穴を確認した。小穴は焼土面からやや離れているため、支柱石のようなものを据えた痕跡とは考え難い。袖部は一部が残存していたものの、カマド埋土には焼土ブロックが含まれ、天井部が残存していないことから堅穴建物廃棄時にカマドも解体した可能性が考えられる。

床下 貼床除去後に掘方底面を精査したが、遺構は確認できなかった。

遺物出土状況 遺構の北側半面の埋土から、土師器甕、須恵器坏・甕が散在して出土した。またカマ

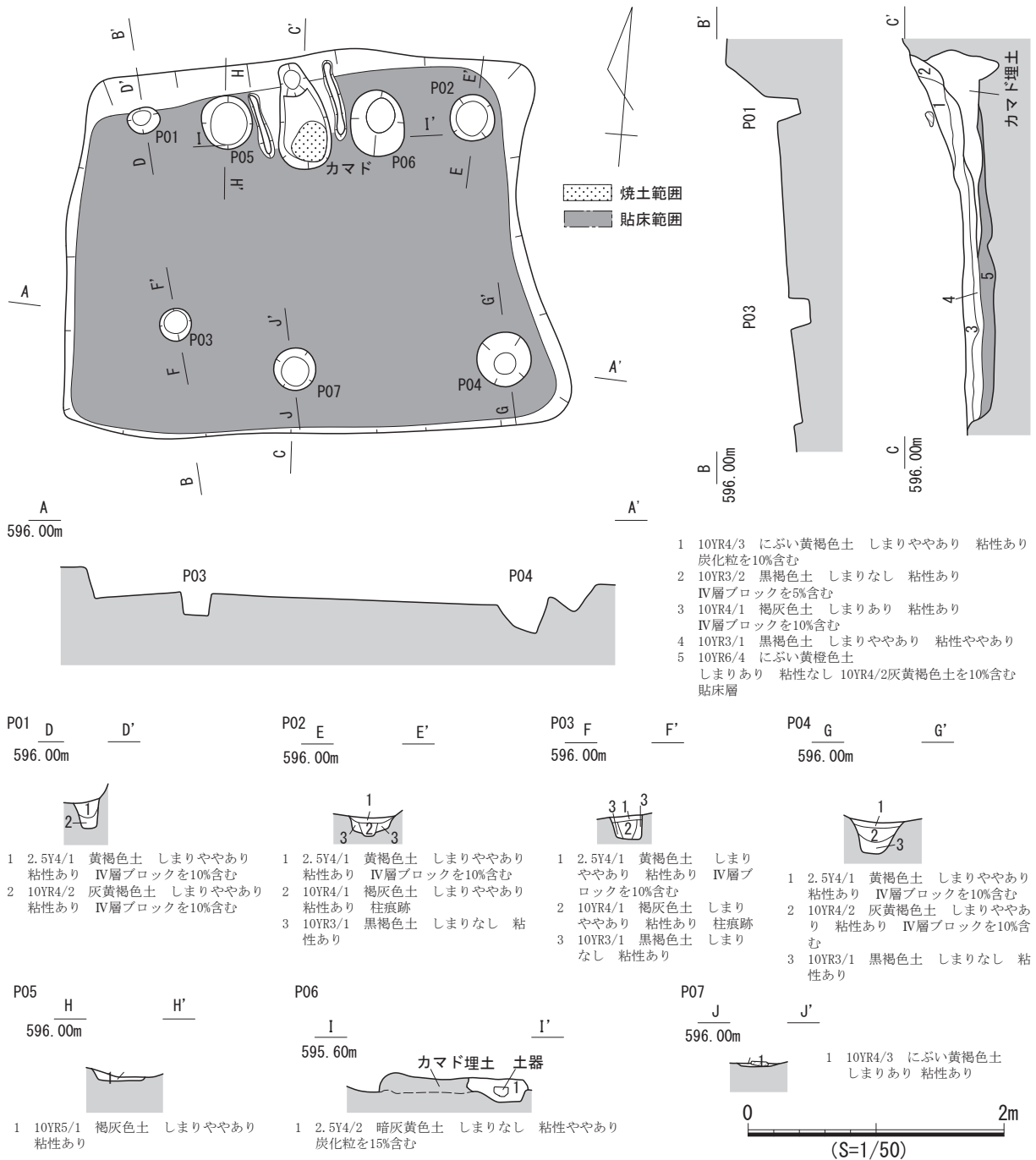


図 150 SI11 遺構図 (1)

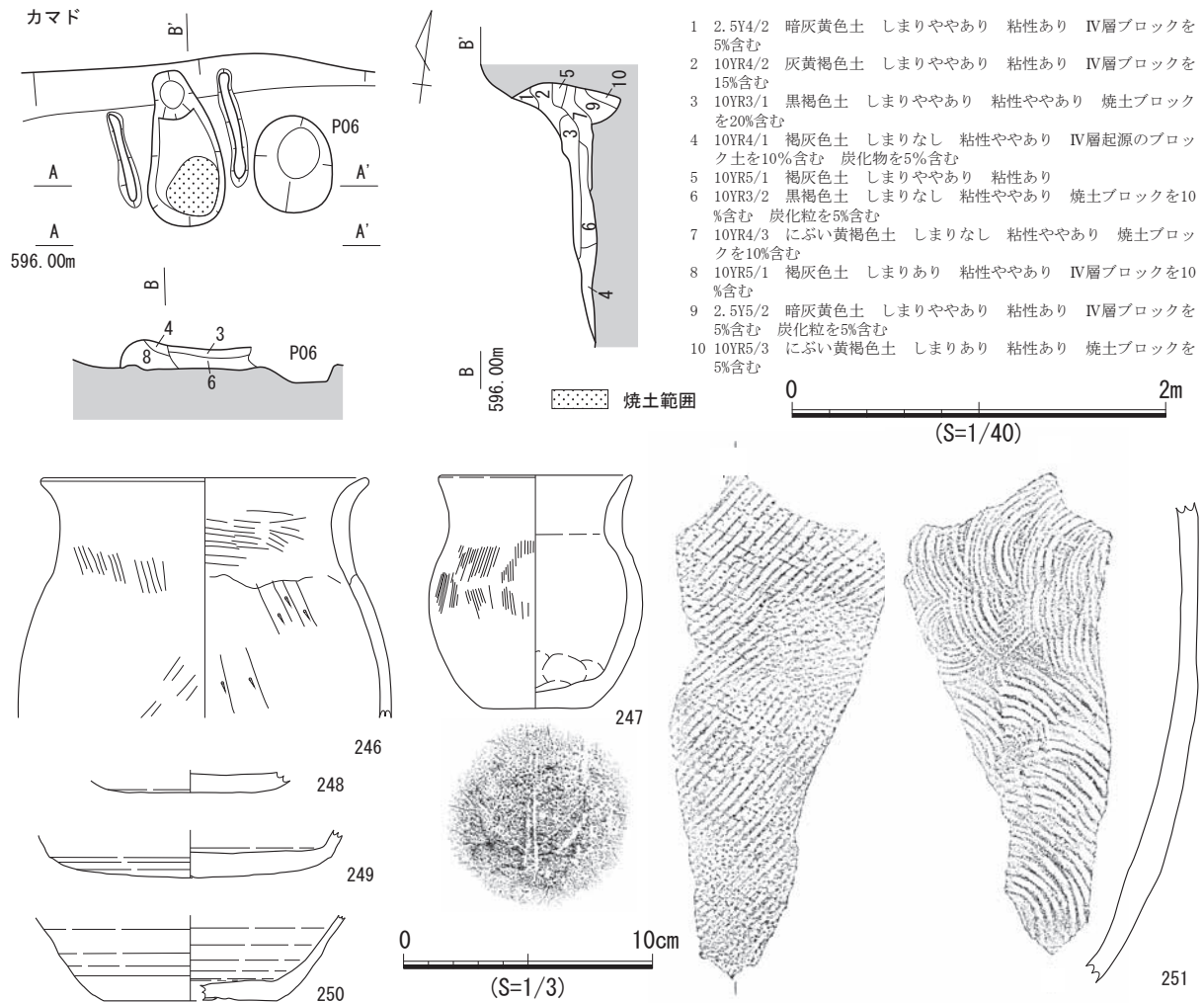


図 151 SI11 遺構図 (2)、出土遺物

ドから土師器甕・壺と須恵器甕、P06 から土師器甕と須恵器坏・壺が出土した。

出土遺物 246 は土師器長胴甕で、胴部下半部から底部を欠く。口縁部は緩やかに外反する。247 は頸部から口縁部が少し外反する小型の土師器甕で、底部外面に木葉痕が残る。248～250 は無台の須恵器坏で、250 は口縁部が直線的に開く。251 は美濃須衛産の須恵器甕の胴部片で、内面に2種類の当て具痕と外面に格子状のタタキ目が付く。

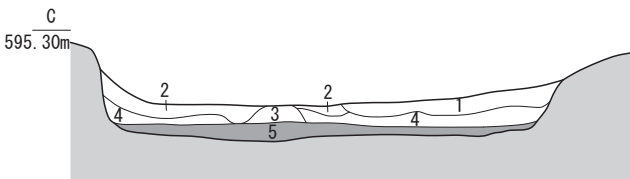
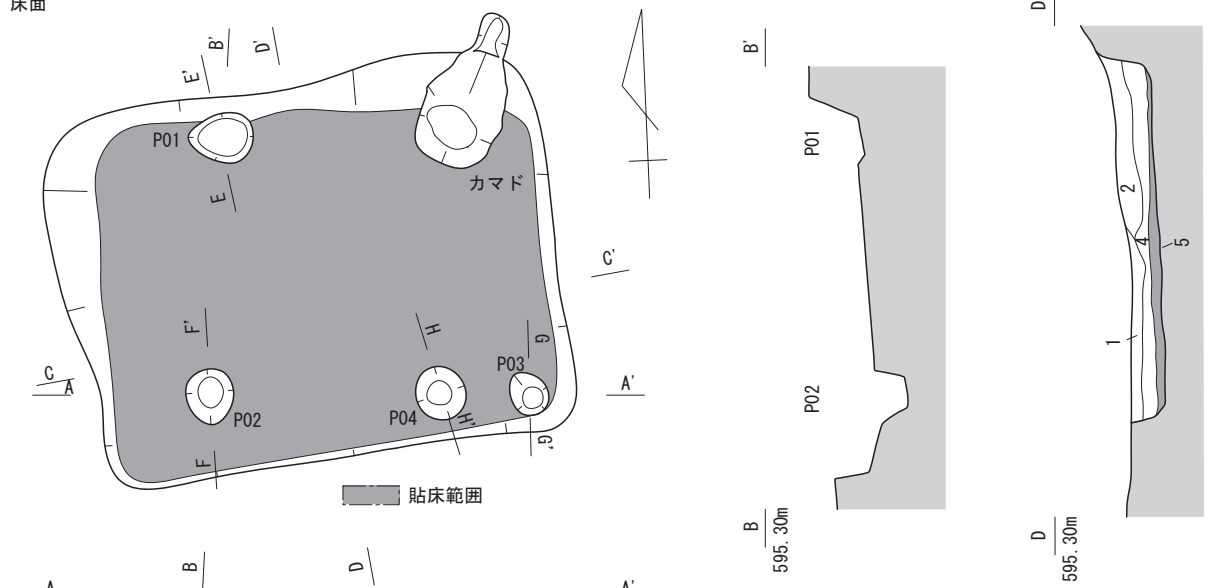
時期 出土した須恵器から7世紀後葉と思われる。

SI12 (図 152・図 153)

検出状況 平坦面②にあたるEB7グリッド、IV層の上面で検出した。SI11の南西に位置する。ほぼ遺構全体がSZ06とSZ07の周溝と重複しており、SI12が新しい。当初は、複数の遺構が重複していることがわからず、プランを確認するために検出時に掘り下げ過ぎた部分がある。床面で柱穴と思われる小穴や北東隅でカマドを検出したことから、竪穴建物と判断した。3.34m×2.58mの小型で、平面形は長方形である。長軸の方位はN-80°-Wである。

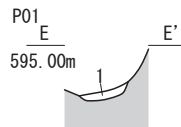
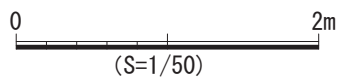
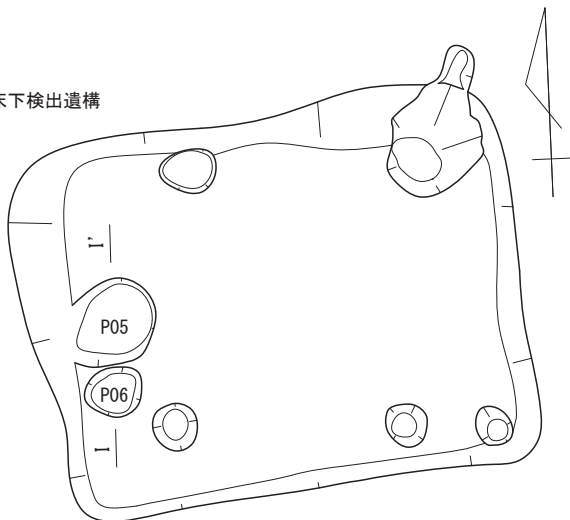
埋土 埋土は4層に分層したが、最上部は掘り下げ過ぎているため、さらに堆積があったと思われる。埋土にはIV層ブロックを含むことから、人為堆積の可能性が考えられる。なお、貼床層(5層)の下層には整地層になるような堆積は確認できなかった。

床面

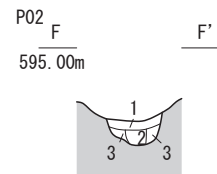


- 1 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 炭化粒を1%含む
- 2 5Y7/6明黄褐色土ブロックを10%含む
- 2 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり 2.5Y7/6明黄褐色土ブロックを10%含む
- 3 10YR5/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを40%含む
- 4 2.5Y5/2 暗灰黄色土 しまりなし 粘性あり IV層ブロックを5%含む
- 5 10YR6/4 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性なし 貼床層

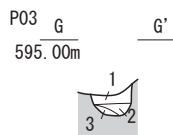
床下検出遺構



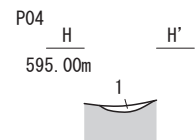
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを15%含む



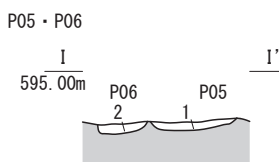
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを15%含む
- 2 10YR5/1 褐灰色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む
- 3 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む



- 1 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを15%含む
- 2 10YR4/1 褐灰色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む
- 3 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む



- 1 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを15%含む



- 1 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを15%含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり

図 152 SI12 遺構図 (1)

壁 概ね直線的に立ち上がるが、部分的にやや開き気味となる。残存高は最大0.25mである。

床面 ほぼ平坦で、貼床層（5層）がほぼ全体にわたって残存している。床面で検出した遺構は、柱穴3基、土坑1基、カマド1基である。堅穴内の位置関係からP01・P02・P03を柱穴と判断したが、P01は非常に浅く、柱穴とするべきではないかもしれない。なお、P04は掘方も浅く、遺物も出土していないため性格は不明である。

カマド 北東隅で、建物掘方外側まで伸びる煙道部を検出したが、明瞭な焼土面は確認できなかった。カマド掘方は、床面から壁面までを浅く皿状に窪ませているが、堅穴外部分のテラス状の平坦面から上部が煙道部と考えられる。カマドの埋土内では、焼土ブロックが1層～3層及び5層と7層に含まれていた。検出時に扁平な礫3点がカマドの東側前面で出土したが、原位置を保っていないためカマド構築材か否かは判断できなかった。袖部や天井部は確認することができなかったが、堅穴建物廃棄の際に解体した可能性が考えられる。

床下 貼床層除去後に、西壁際で土坑2基を検出したが掘方が浅い。こうした土坑は、堅穴建物建築儀礼に伴うものである事例があるが、遺物も伴わなかったことから、そうした性格の有無については

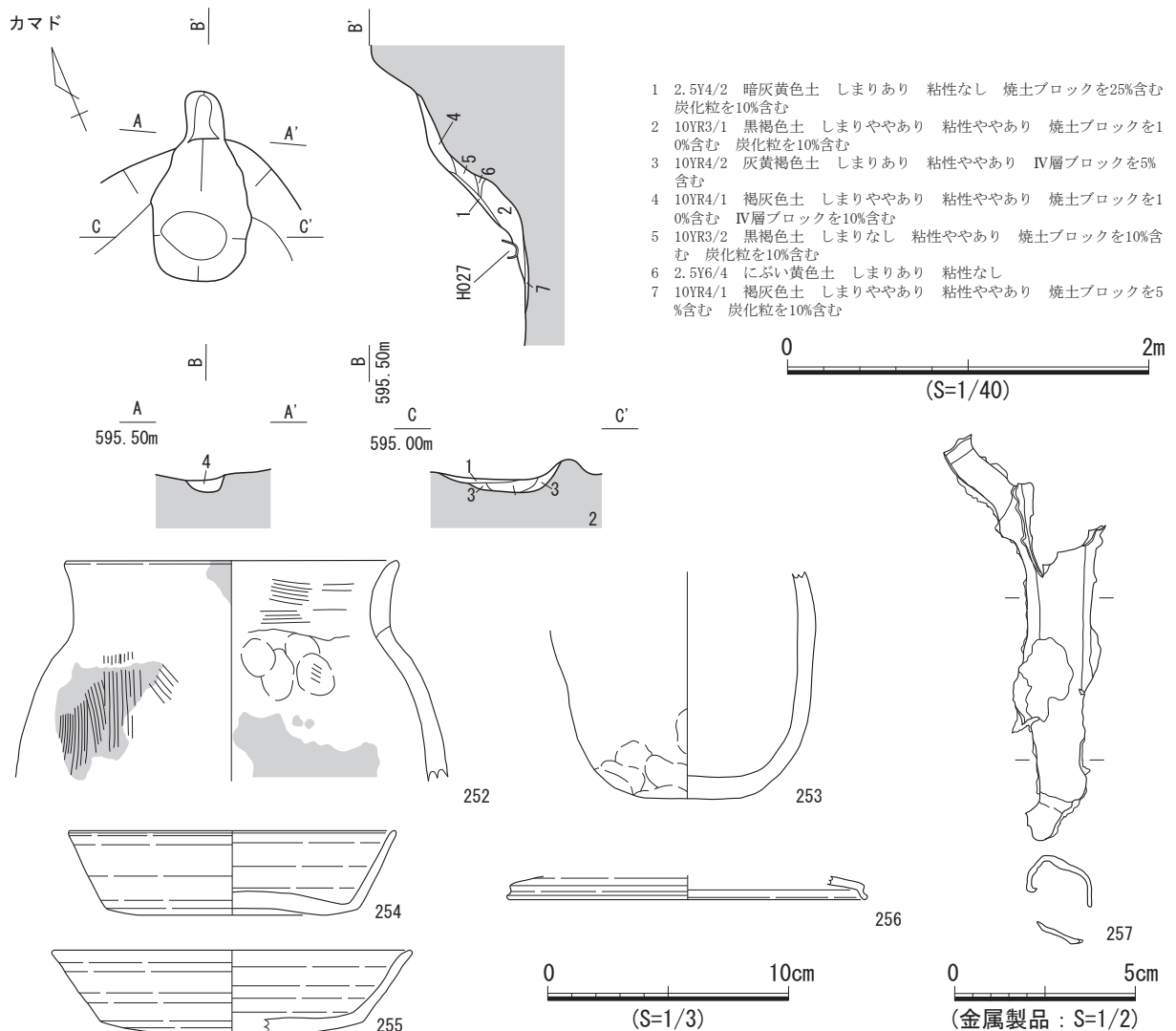


図 153 SI12 遺構図（2）、出土遺物

不明である。

遺物出土状況 遺構の東側半面の埋土から、土師器甕、須恵器坏身・坏蓋・甕、金属製品、縄文土器が散在して出土した。またカマド内からは土師器小型甕が出土した。

出土遺物 252 は土師器長胴甕で、口縁部の外反は弱い。253 は土師器小型甕の底部から胴部片で、胴部の張りが弱い。254 と 255 は美濃須衛産と猿投産の須恵器無台坏で、口縁部が直線的に開く。256 は須恵器蓋で、口縁端部を屈曲させて、強く外反させる。257 は断面形状が筒状となる金属製品で、形状が大きく変容しているため、種類等は不明である。

時期 出土した須恵器の年代から 7 世紀後葉と思われる。

SI13・SL01 (図 154～図 156)

検出状況 平坦面③にあたる EC7～ED8 グリッド、IV層の上面で検出した 5.0m×4.7mの竪穴建物である。緩斜面を掘削しているため、南側の掘方が浅い。遺構検出時に平面形が不明瞭であったため、結果的に SK107、SL01、SI16 を同一の遺構と判断し、SK107 から SI13 間では東西方向と南北方向に、SI13 から SI16 間では南北方向に土層観察用畔を残して掘削した。SI13 北西側にある SK107 と SL01 との関係は、明らかにすることができなかったが、B-B' 土層断面図では、SI13 埋土が北壁外部にまで堆積しており、これが丁度 SK107 の北壁に該当する位置まで確認できることから、SK107 が SI13 北西側のテラス状の段である可能性もある。SI16 との関係は、土層観察から SI13 が古いと判断した。平面形は、四辺がほぼ直線状の方形で、長軸の方位は N-7° -W である。

埋土 埋土は 10 層に分層したが、IV層ブロックを含む堆積が多く、人為的に埋め戻された可能性がある。

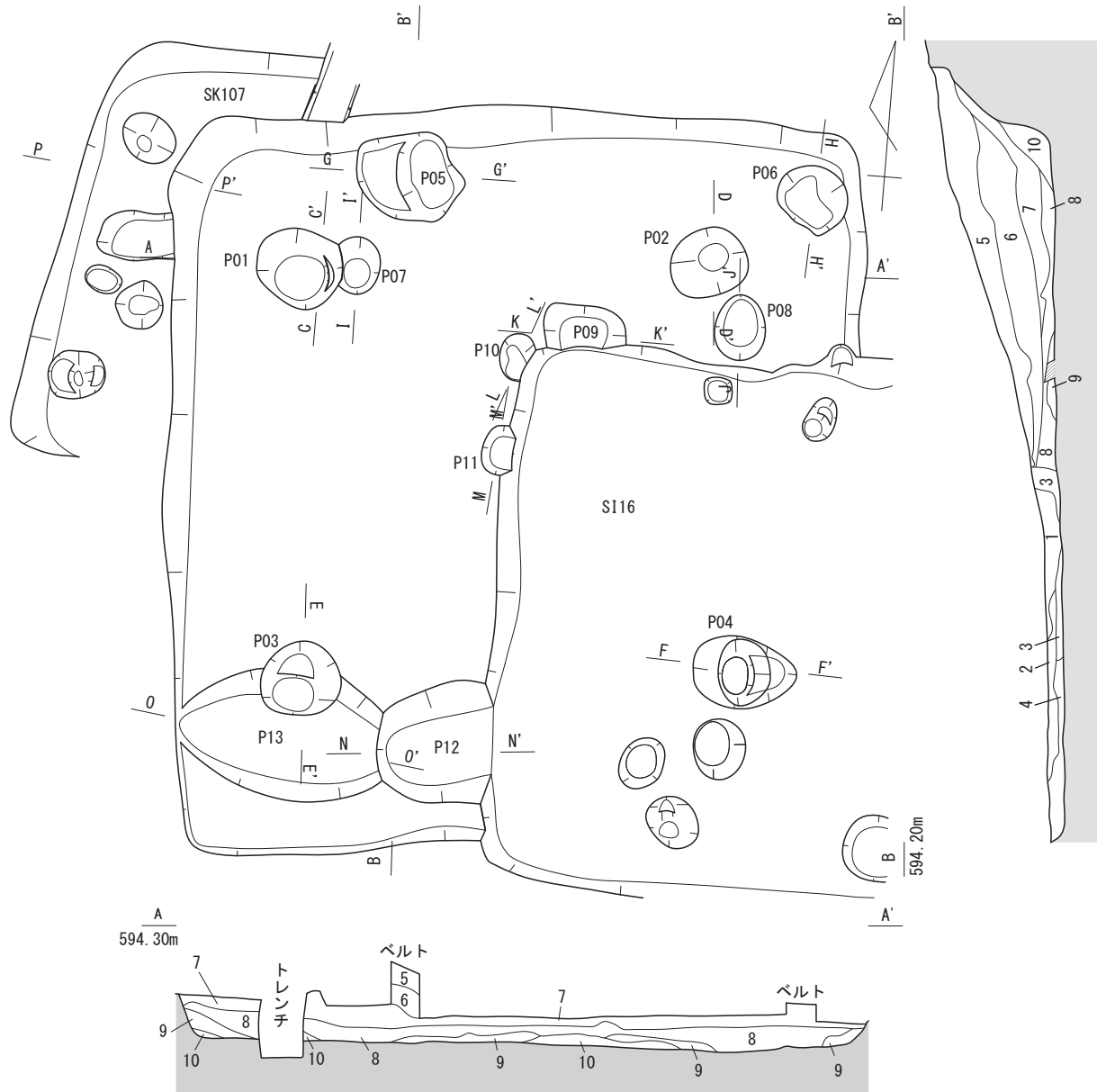
壁 北壁側で大きく開くが、他は比較的立ち上がり、残存高は最大で 0.72m である。

床面 平坦で、貼床は確認できなかった。床面で検出した遺構は柱穴 4 基、土坑 11 基である。竪穴内の位置関係から P01・P02・P03・P04 を柱穴と判断した。P04 は SI16 の貼床上で検出したものであるが、土層断面観察からは、SI16 の貼床層が掘方内にやや落ち込むように凹んだため、貼床層上面から掘り込まれたように見えたものであり、SI13 の柱穴と判断した。P07 も土層堆積状況から柱穴の可能性が考えられるが、P01 と重複することから SI13 のものとは考え難い。その他、床面全体で掘方の浅い性格不明の土坑を 11 基検出した。

カマド (SL01) EC7～ED7 にかけて南北方向に設定したトレンチで焼土ブロックを含む土坑状のものを確認し、SI13 を検出した際にカマド状の遺構として調査した。当初は、SL01 南側で竪穴建物床面のような硬化した範囲を確認したため、SI13 とは別の遺構と考えたが、硬化した範囲に伴う柱穴や竪穴掘方は確認できなかった。しかし、整理作業時に図面上で SL01 と SI13 の位置関係を確認したところ、SL01 が SI13 西壁中央に位置すること、SL01 の掘削状況から袖部状の高まりがあること。底面で検出した焼土が、ほぼ SI13 床面レベルに相当することなどから、SL01 が SI13 のカマドである可能性が高いものと思われる。なお、調査上は別々の遺構として調査しており、図面上の合成結果からその可能性があるものと考えたことから、とりあえず SL01 として別の遺構番号を付与しておく。

床下 掘方整地層は確認できなかった。しかし、柱穴と重複する浅い土坑などは、SI13 よりも古い時期である可能性が高い。

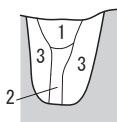
遺物出土状況 埋土中で土師器の甕、須恵器の坏身・坏蓋・甕、金属製品、縄文土器が散在した状況



- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む
- 2 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを20%含む
- 3 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む
- 4 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを40%含む
- 5 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 6 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを1%含む

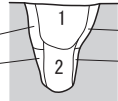
- 炭化粒を1%含む
- 7 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを20%含む 炭化粒を1%含む
- 8 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを1%含む
- 9 10YR3/3 黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む
- 10 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む

P01 C C' 593.40m



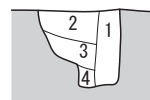
- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを40%含む
- 2 10YR3/3 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 3 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり

P02 D D' 593.30m



- 1 10YR3/3 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 2 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 3 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む
- 4 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを20%含む

P03 E E' 593.30m



- 1 10YR3/3 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 2 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む
- 3 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを40%含む
- 4 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを20%含む

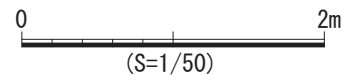


図 154 SI13 遺構図 (1)

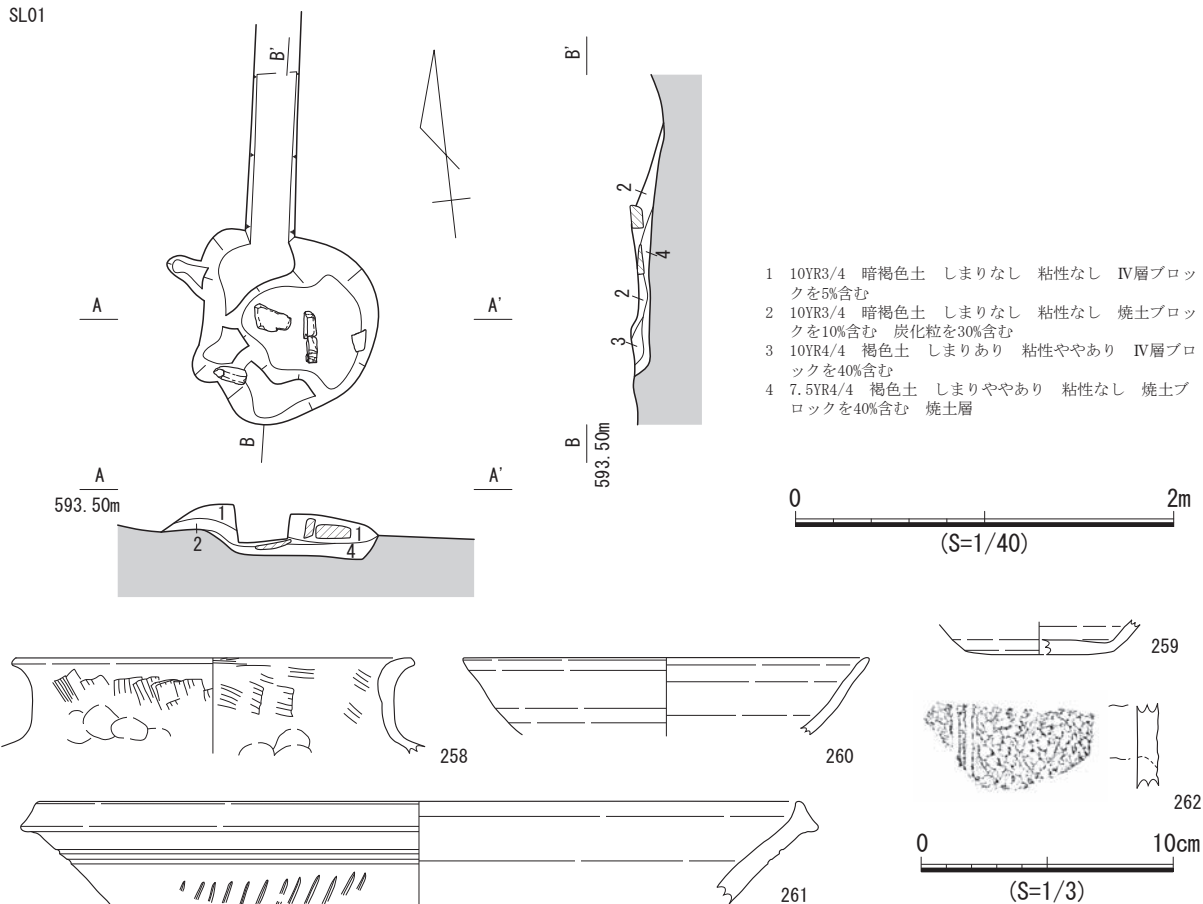
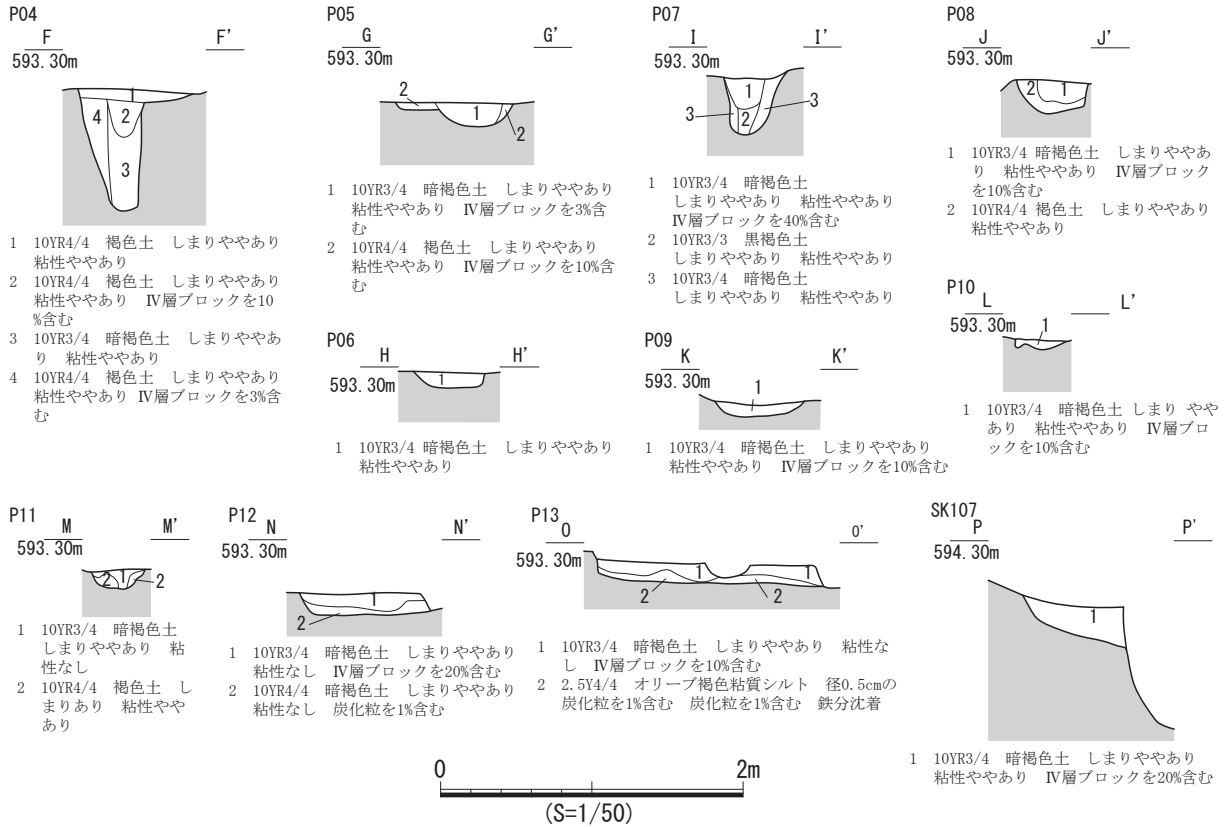


図 155 SI13 遺構図 (2)、出土遺物

で出土した。また、P03・P12・P13・P14 と SL01 からは土師器の高坏・甕、須恵器の坏身が出土した。
出土遺物 258 は土師器の甕で、口縁部が外反する。259 は須恵器無台坏の底部である。260 は SL01 から出土した須恵器坏の口縁部片で、7世紀後葉の美濃須衛産と思われる。261 は須恵器甕の口縁部片で、7世紀代の猿投産と思われる。262 は縄文時代中期後葉の深鉢胴部片で、沈線により縦位区画

床下検出遺構

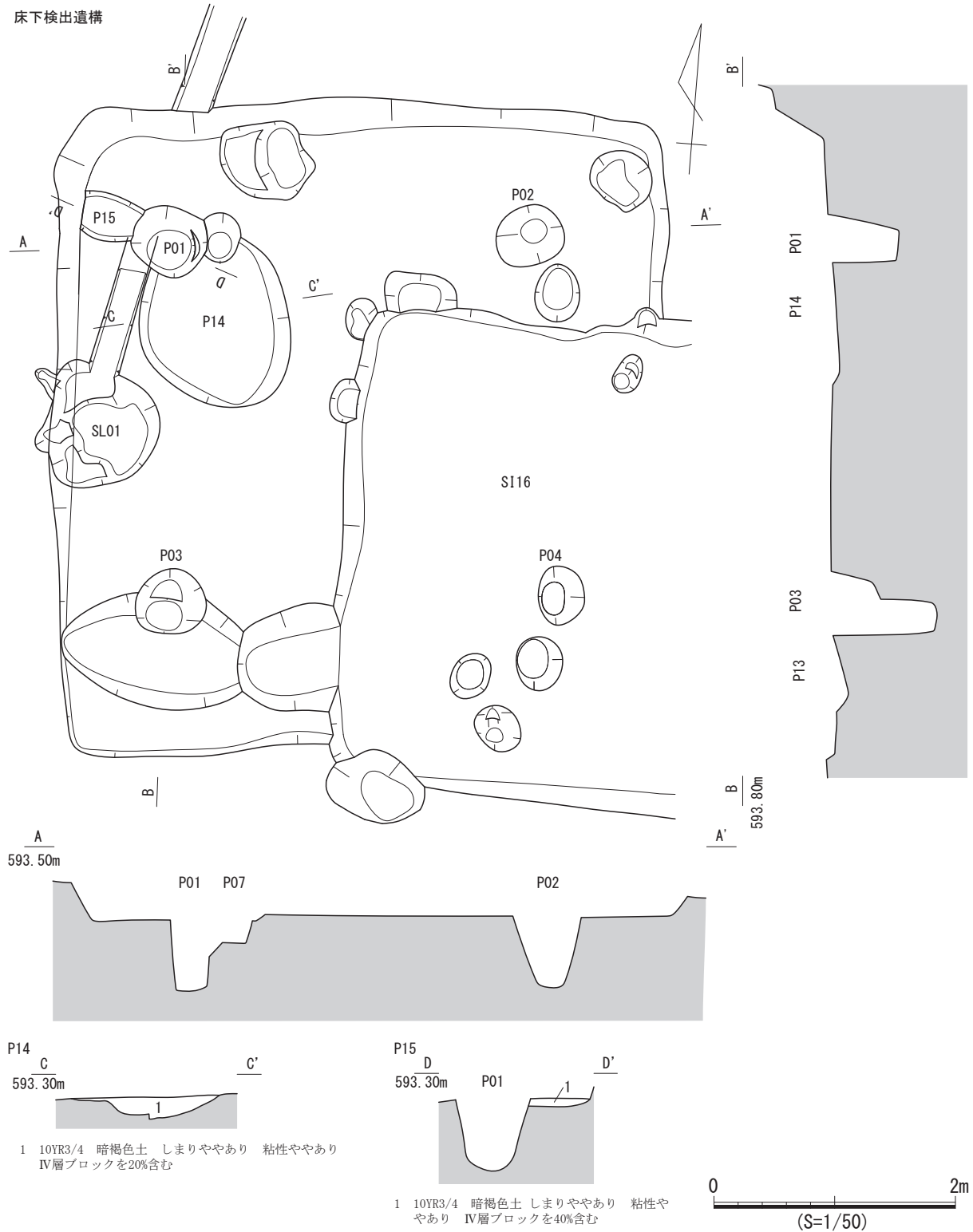


図 156 SI13 遺構図 (3)

され、区画内にLR縄文を施す。

時期 出土遺物は細片が多いが、時期が判明するものから8世紀前葉頃と考えられる。

SI14 (図157~図160)

検出状況 EC5~ED6グリッド、IV層の上面で検出した5.01m×3.54mの竪穴建物である。SK092、SK095、SK091、SP05と重複し、検出状況からSI14よりSK091が新しく、SK092・SK095・SP05が古い。平面形は長方形で、西辺がやや膨らむ。長軸の方位はN-9°-Eである。

埋土 6層に分層したが、その下には貼床層と判断した8層と9層がある。貼床層上の竪穴内中央部に6層が堆積したのち、北壁側に3層~5層が堆積しているが、この土層は他では確認できないため、

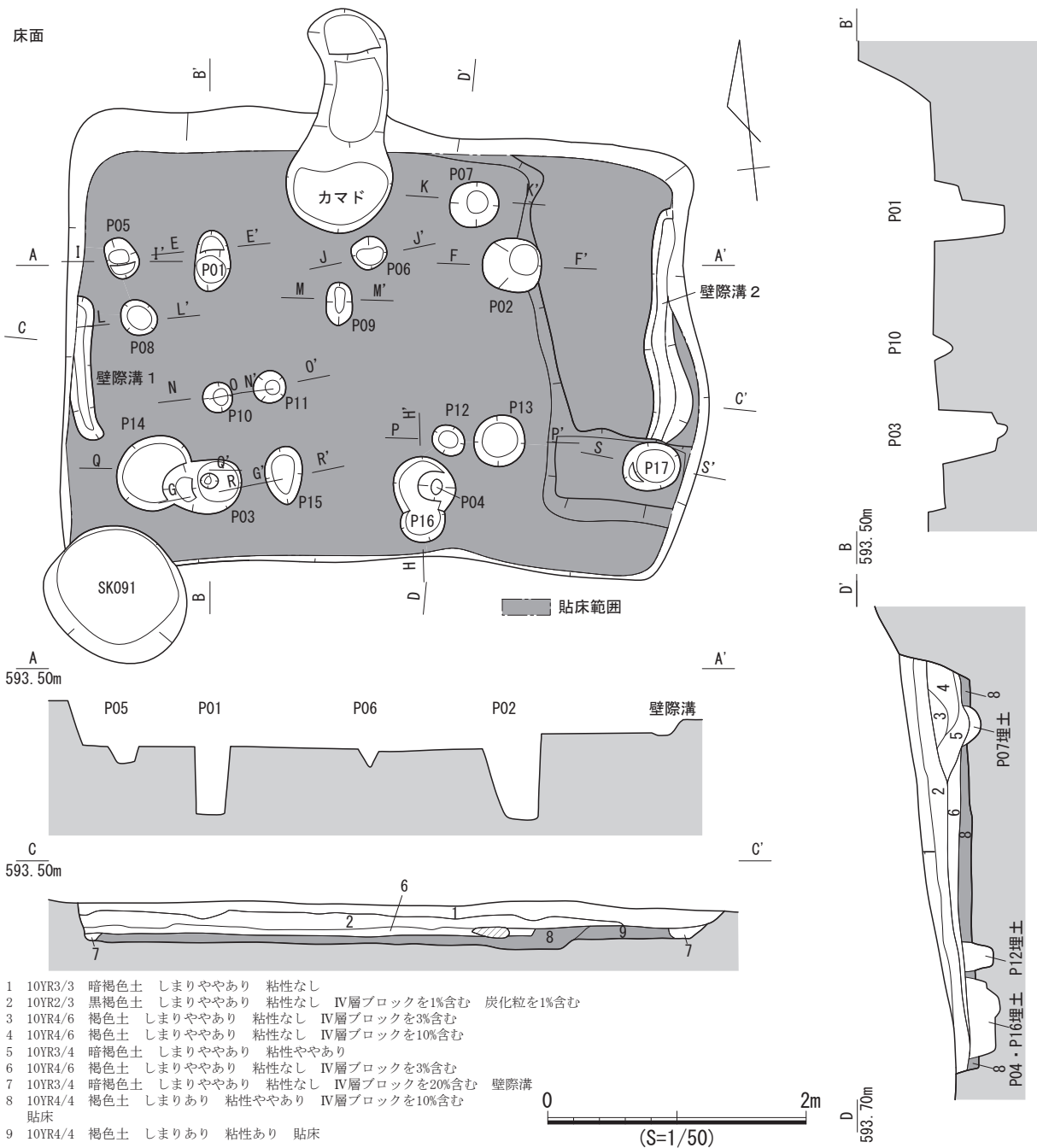


図157 SI14遺構図(1)

局部的に堆積したものと考えられる。上部の1層と2層はほぼ水平に堆積する。

壁 膨らみを持つ西辺では緩やかに開くが、他は比較的立ち上がり、残存高は最大で0.32mである。

床面 東辺でベッド状に高くなるが、東側柱筋から西壁までは平坦となる。褐色でIV層起源のブロック土を含んだ8層と9層を貼床と判断した。西側のベッド状の段は、掘方掘削段階で高く残されており、さらに8層と9層を置く。床面で検出した遺構は柱穴4基、壁際溝2条、土坑15基、カマド1基である。竪穴内の位置関係からは、P01とP02、P03、貼床除去後に検出したP19が柱穴となる可能性が高い。P19については、貼床が柱穴配置後に行われる例があることから、貼床層上面で見落とした可能性が高い。ただし、P19を柱穴としない場合は、床面上で検出したP04を柱穴の可能性のあるものと考えたい。他に掘方が浅い性格不明の土坑(P05~P18)を床面全体で検出した。壁際溝は貼床設置後に掘削され、東辺と西辺の一部で確認した。

カマド 北壁中央で確認した。床面から壁面に浅い掘込みと建物掘方外側まで伸びる煙道部、カマド掘方内で両袖部の芯材と考えられる扁平な角礫と外面に袖部構築土、中央奥で支柱石を確認した。カマドと煙道の天井部と被熱面は確認できなかった。カマド埋土の煙道部1層と4層、袖部外面の2層

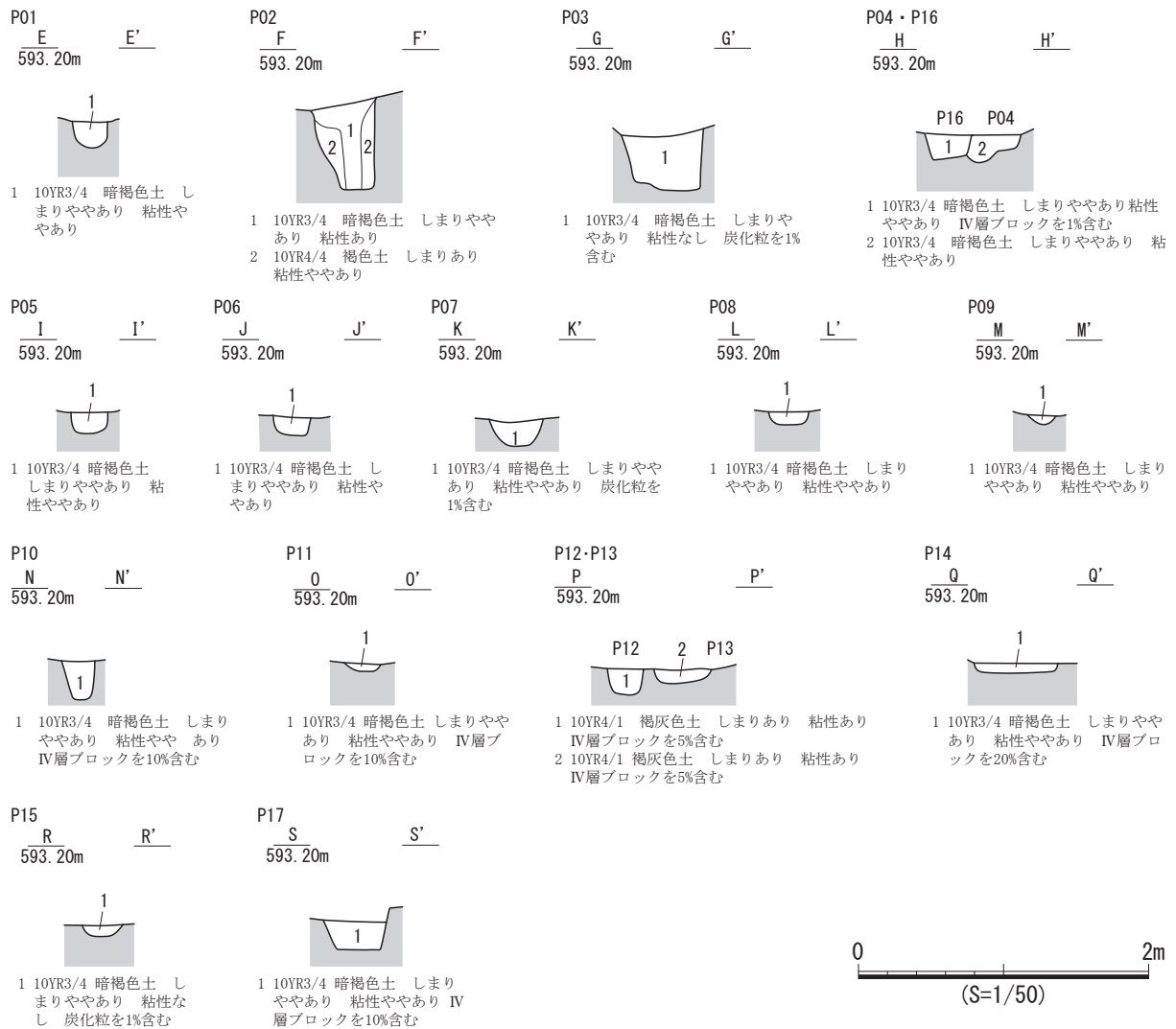
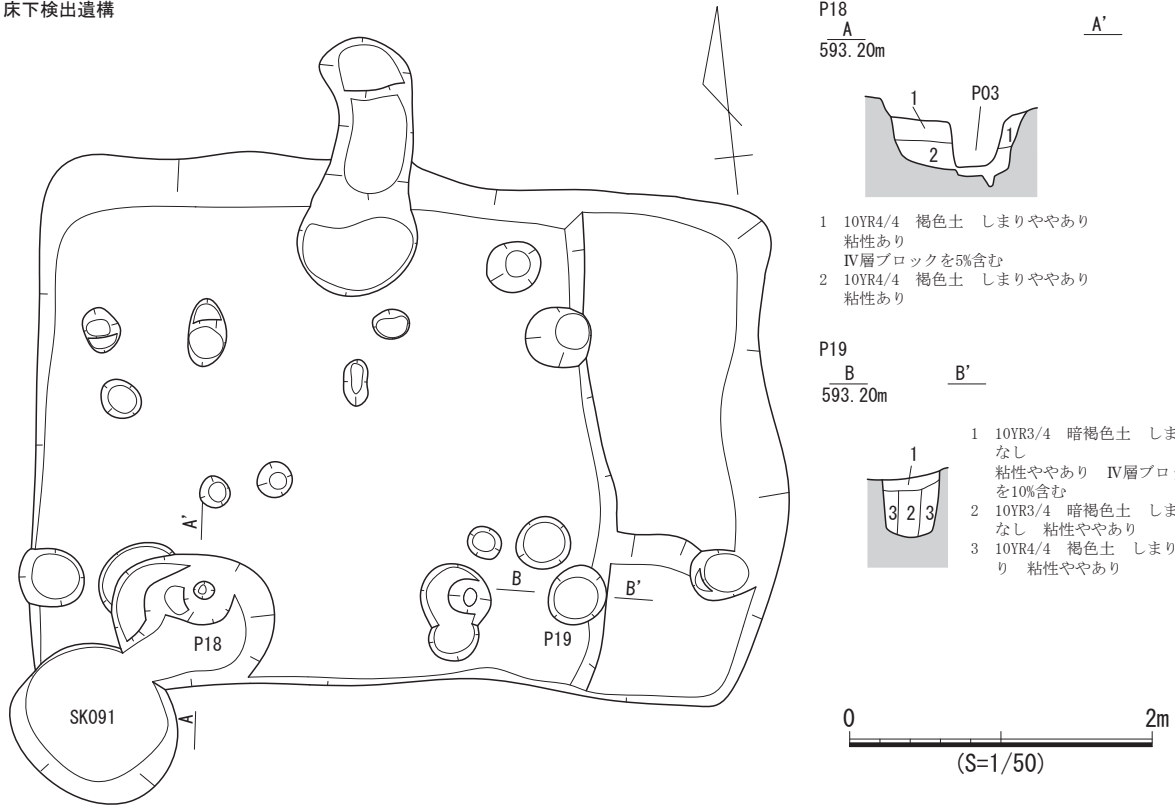


図 158 SI14 遺構図 (2)

床下検出遺構



カマド

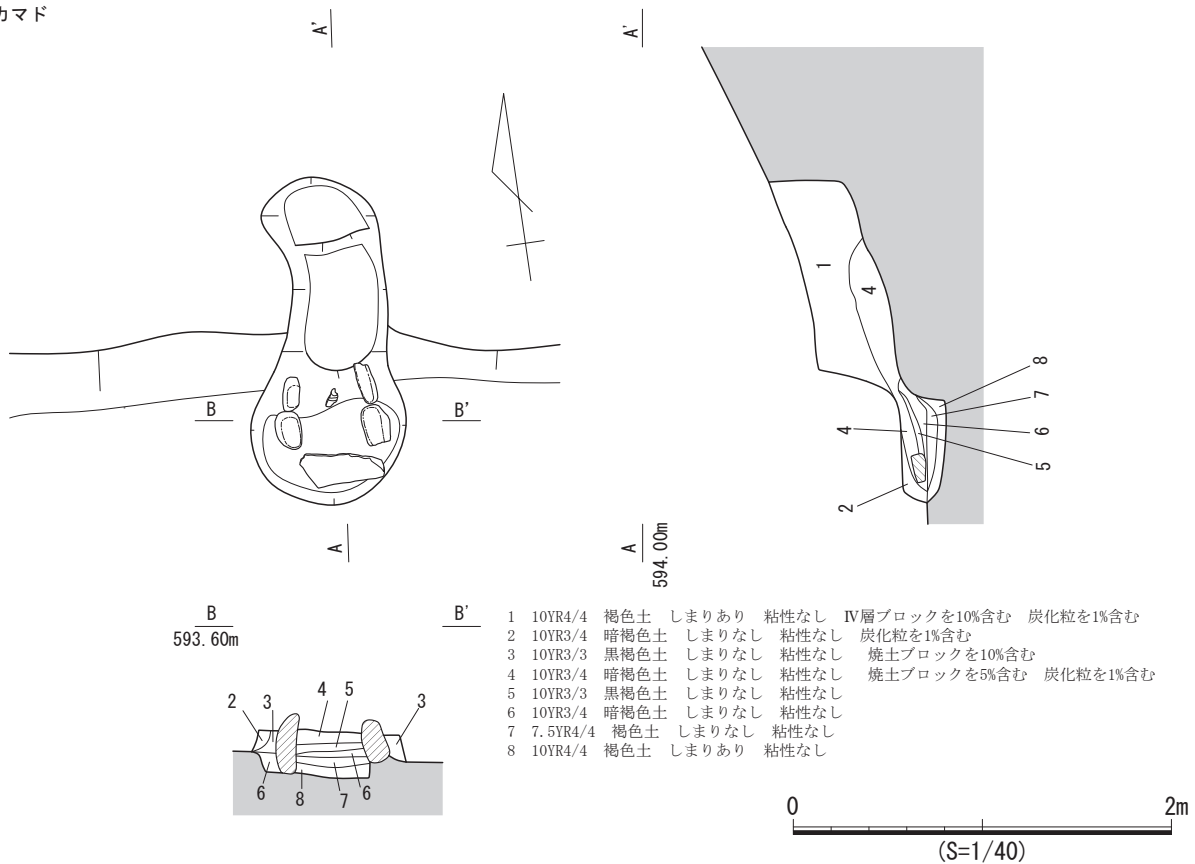


図 159 SI14 遺構図 (3)

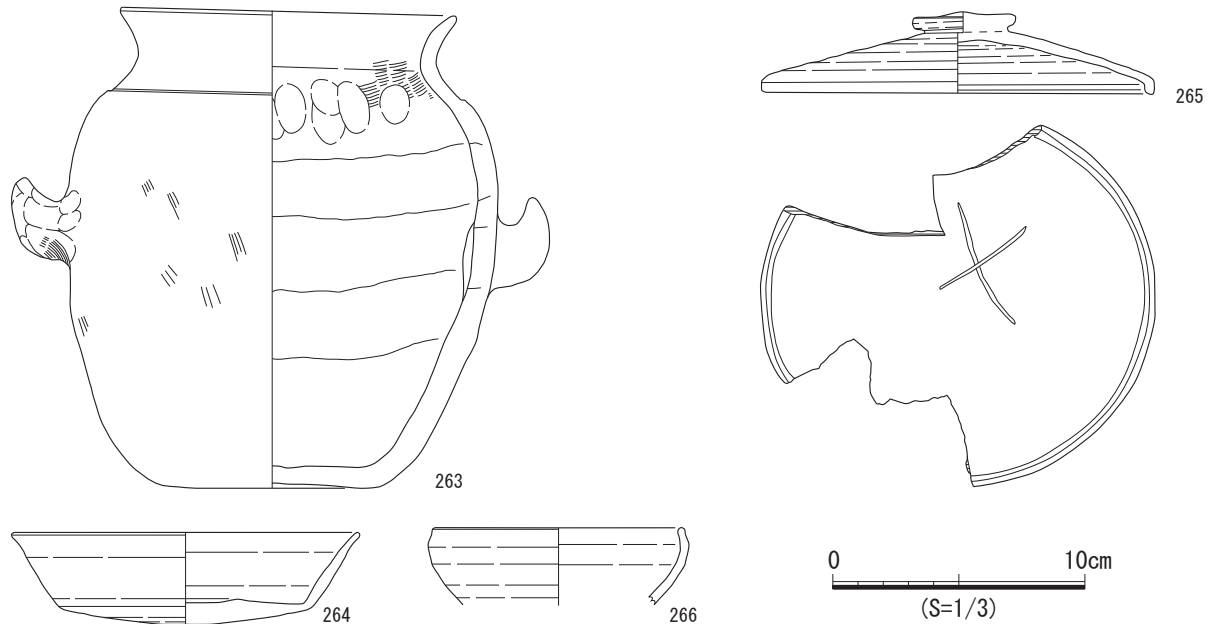


図 160 SI14 出土遺物

と3層には炭化粒や焼土ブロックが含まれる。7層と8層はSI14貼床層に相当すると思われる。また、カマド前面の扁平な角礫は、天井部芯材の可能性が考えられることから、堅穴建物廃棄の際に解体したと考えられる。

床下 貼床除去後に柱穴1基と土坑1基を検出した。P19は、P01とP02、P03との位置関係から前述のように柱穴と考えられる。

遺物出土状況 埋土中で土師器の甕、須恵器の坏・蓋・鉄鉢形土器が散在して出土した。また、カマド内とP02・P07・P15・P17から土師器の甕、須恵器の坏・甕が出土した。

出土遺物 263は土師器把手付甕で、平らな底部から全体的にふくらみを持つ胴部が立ち上がり、肩部に段を付けて頸部が外反する。264は須恵器無台坏で、265はボタン状のつまみを持つ須恵器蓋で、8世紀前葉の美濃須衛産と考えられる。内面には「×」印のヘラ記号を確認した。266は7世紀後葉から8世紀前葉の小型の鉄鉢形土器である。

時期 出土した須恵器の年代から、8世紀前葉頃と考えられる。

SI15 (図 161～図 163)

検出状況 平坦面③にあたるEC7～ED8グリッド、IV層の上面で検出した、4.09m×4.08mの堅穴建物である。遺構検出時に平面形が不明瞭であったため、結果的にSK107、SI13、SI16を同一の遺構と判断し、SK107からSI13間では東西方向と南北方向に、SI13からSI15間では南北方向に土層観察用畔を残して掘削した。その結果、SI15がSI13埋土を掘り込むようにして掘削されていることが確認され、合わせて平面形を確認した後、四分割して掘削した。その他、SK112やSZ08周溝と重複し、これらよりもSI15が新しいことをトレンチ等により確認した。平面形は東西方向にやや長い長方形で、長軸の方位はN-1°-Eである。

埋土 3層に分層したが、埋土下には貼床層を確認した。埋土の3層は堅穴南側の床面上に薄く堆積し、その上に1層と2層がほぼ水平に堆積する。貼床層の4層は、IV層起源のブロック土を含む褐色土でほぼ均一な堆積である。

壁 東壁が直立気味に立ちあがるが、他の壁面はやや開き、壁の残存高は最大で0.24mである。

床面 ほぼ平坦で、貼床層がほぼ全体にわたって認められる。床面上で検出した遺構は、柱穴2基、壁際溝1条、土坑2基、カマド1基であるが、このうち1基は検討の結果、SI13-P04と判断した。残りの柱穴と思われるP02もまた、検討の結果SI15の柱穴とは考えにくい。柱穴と判断したのは、貼床層除去後に検出した、P04・P05・P09・P12である。これらは、竪穴内の位置関係と土層断面の形状や

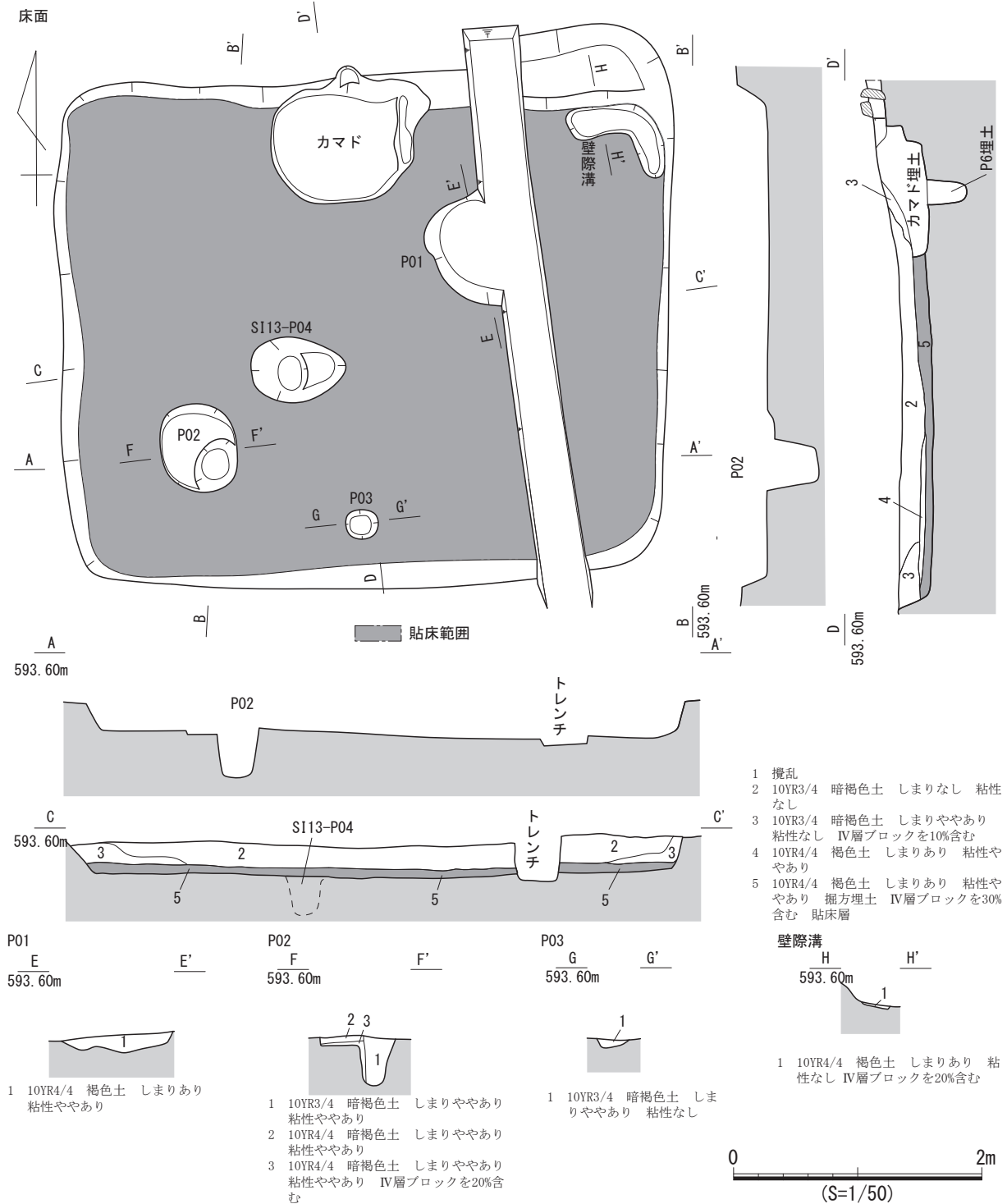
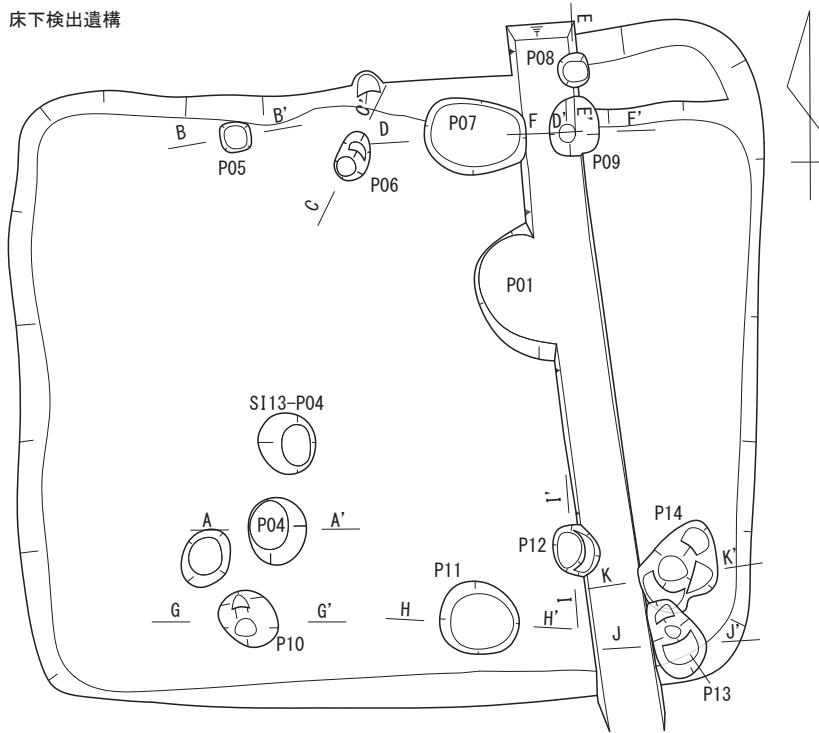


図 161 SI15 遺構図 (1)

床下検出遺構



P04

A A' 593.30m



- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり
- 2 10YR3/3 黒褐色土 しまりあり 粘性ややあり
- 3 10YR3/4 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む
- 4 10YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性ややあり

P05

B B' 593.30m



- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性あり
- 2 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性あり IV層ブロックを10%含む

P06

C C' 593.30m



- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性あり

P08

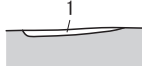
E E' 593.50m



- 1 10YR3/2 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり

P07

D D' 593.30m



- 1 10YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性ややあり

P09

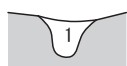
F F' 593.30m



- 1 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む

P10

G G' 593.30m



- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり

P11

H H' 593.30m



- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりあり 粘性あり 炭化粒を1%含む

P12

I I' 593.30m



- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり
- 2 10YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性ややあり
- 3 10YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む

P13

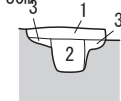
J J' 593.30m



- 1 10YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり
- 2 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり

P14

K K' 598.30m

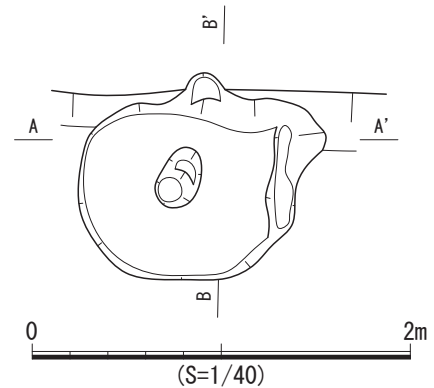
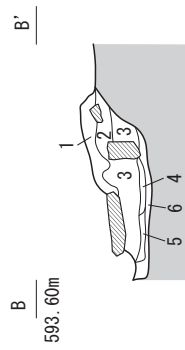
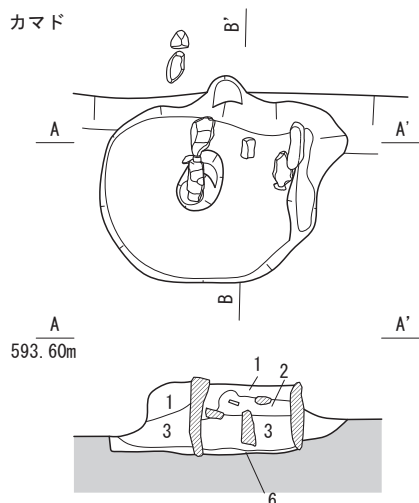


- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを40%含む
- 2 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 3 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを20%含む

0 2m

(S=1/50)

カマド



- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性なし 焼土ブロックを1%含む
- 2 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性なし カマド破壊土を20%含む
- 3 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性なし IV層ブロックを20%含む
- 4 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性なし 焼土ブロックを20%含む
- 5 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性なし 焼土ブロックを20%含む
- 6 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性なし IV層ブロックを5%含む

図 162 SI15 遺構図 (2)

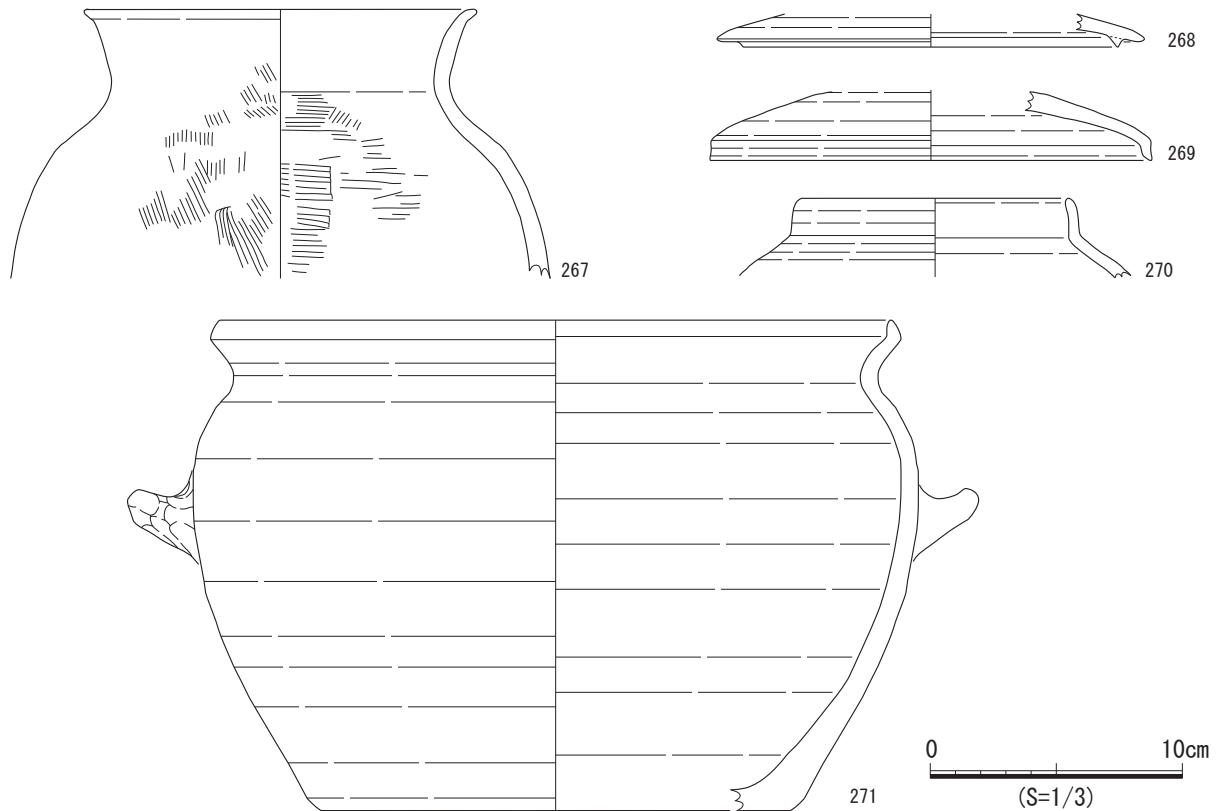


図 163 SI15 出土遺物

土層観察から柱穴の可能性が高いと思われる。床面上で確認できなかったのは、柱穴設置後に貼床層を形成した場合、その掘方を確認することはできないため見落とししたものと思われる。北西角のやや突出したテラス状の平坦面は、土層堆積状況から別の遺構が存在していたものである。

カマド 北壁中央で確認したが、煙道部は壁面で痕跡状の凹みを確認した。カマド掘方内で中央奥に支柱石、両袖芯材と考えられる板平な角礫を確認した。3層上面に水平に置かれた板状の石は天井部芯材の可能性がある。カマド掘方では、床面から壁面に浅い掘込みと建物掘方外側に煙道部の痕跡と思われる凹みがある。カマド埋土2層は天井部付近が崩れた土と思われ、竪穴建物廃棄時にカマドの解体が行われた可能性がある。

床下 貼床除去後に柱穴4基と土坑7基を検出した。前述のようにP04・P05・P09・P12をSI16の柱穴と考えたい。掘方が浅い性格不明の土坑は、竪穴北壁及び南壁に近い場所で検出した。

遺物出土状況 埋土中から土師器甕、須恵器坏・蓋・甕・壺、石核が散在して出土した。また、カマド内とP01・P04から土師器甕、須恵器甕・壺が出土した。

出土遺物 267は土師器甕で、口縁部から頸部が外反する。268と269は在地産の須恵器蓋で、268は口縁部内面に返りを持ち、269は口縁端部が屈曲する。270は美濃須衛産の須恵器短頸壺で、口縁部をやや内湾させることから7世紀後葉と思われる。271は7世紀後葉の美濃須衛産の須恵器鉢で、頸部が強く括れ、胴上部に把手が付く。

時期 出土遺物から8世紀前葉頃と思われる。

SI16 (図 164～図 166)

検出状況 平坦面③にあたるEC9～ED10グリッド、IV層の上面で検出した4.58m×4.14mの竪穴建物

である。SB02・SB03とSZ08の周溝、SK123、SK124、SK125と重複する。SB02・SB03との前後関係は明瞭ではなく、検出時は掘立柱建物建築のための平坦地造成が、SI16より新しいと判断したが、SI16埋土上面ではSB02やSB03の柱穴が確認できず、SI16が新しいことも考えられた。埋土から出土した遺物では、SI16から出土したものに古い土器が多いことから、一応SI16がSB02やSB03よりも古いものとする。平面形は、四辺がほぼ直線的で概ね方形となる。長軸の方位はN-3°-Wである。

埋土 5層に分層したが、暗褐色土を主体とし、IV層を起源とするブロック土が含まれる。埋土下には締まりのある貼床層（8層）があり、西壁及び東壁側のみ掘方がやや深く、掘方整地層（9層）を

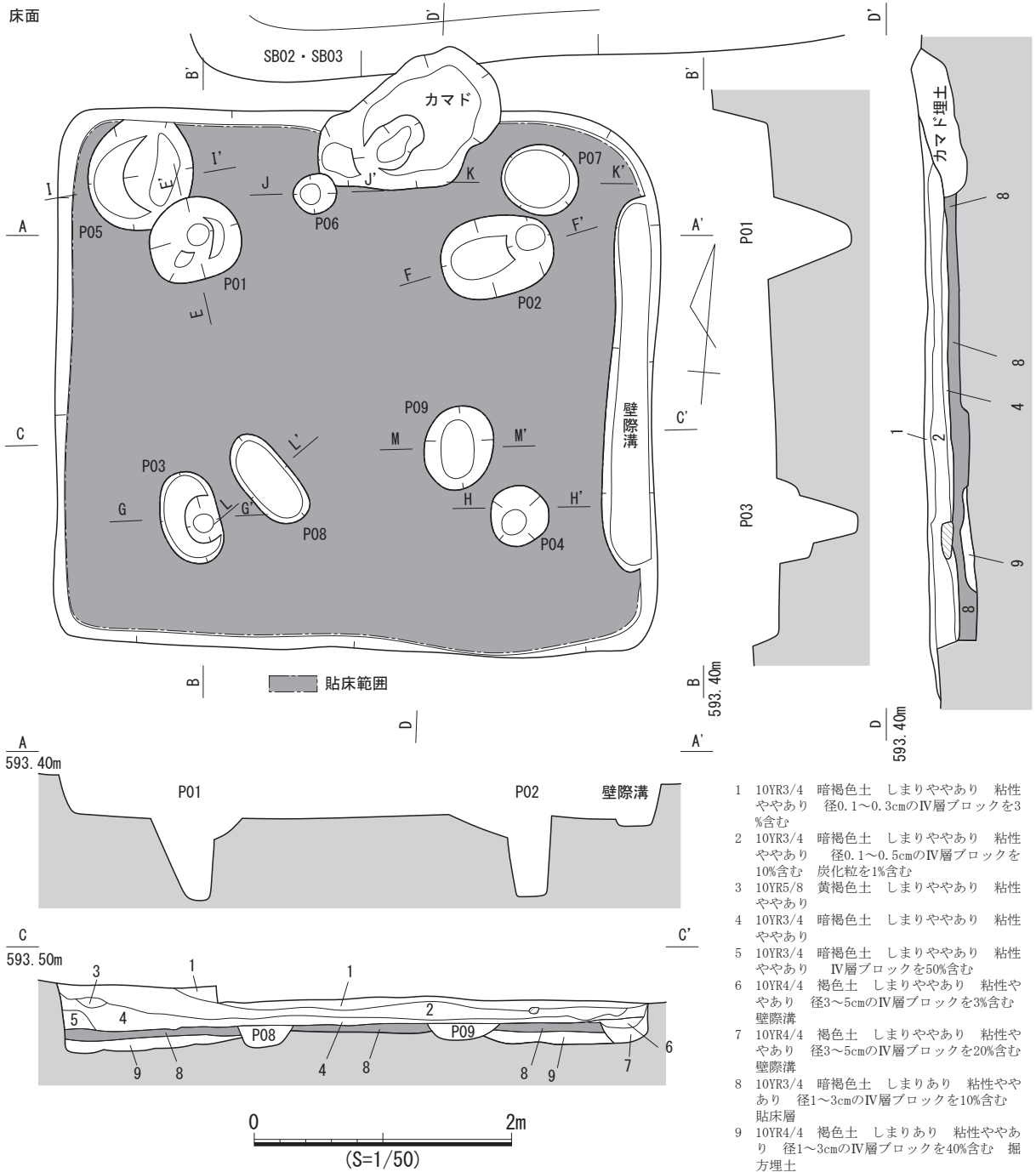


図 164 SI16 遺構図 (1)

確認した。

壁 壁面は直線的に立ち上がり、残存高は最大で0.52mである。

床面 ほぼ平坦であるが、掘方の形状のためか中央がわずかに高まりを持つ。貼床層は全体にわたって残存する。床面上で検出した遺構は、柱穴4基、壁際溝1条、土坑5基、カマド1基である。竪穴内の位置関係からP01～P04を柱穴と判断した。掘方が浅い性格不明な土坑をカマドの両脇(P05・P07)と前面(P06)、南側柱穴の脇(P08・P09)で検出した。壁際溝は東壁側にのみ検出した。

カマド 北壁中央で検出したが、煙道部は確認できなかった。しかし、北壁外側に広がっており、煙道部の痕跡と考えられる。カマドは、壁面から床面にかけて、貼床した後に浅く掘り窪められて造ら

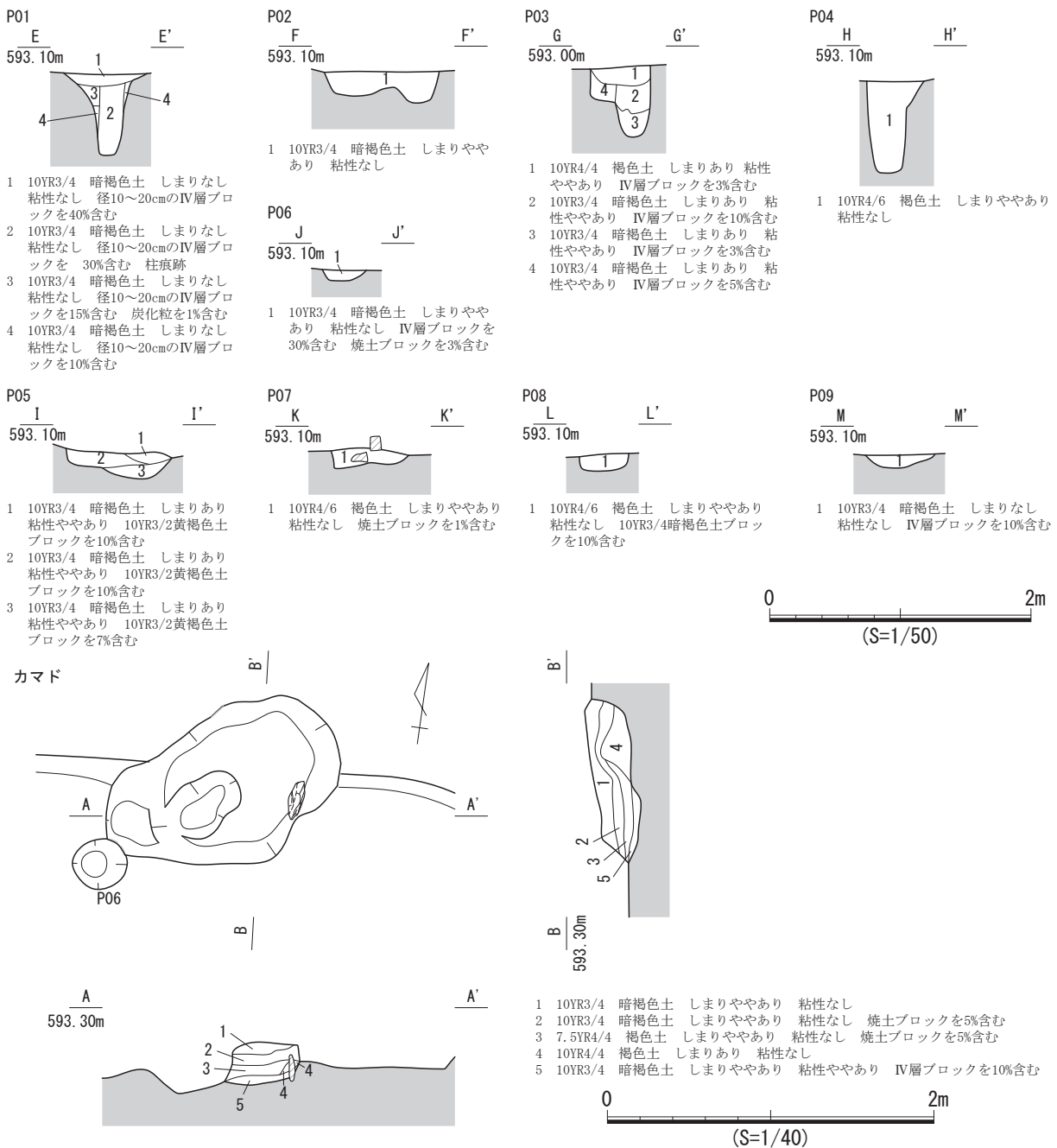
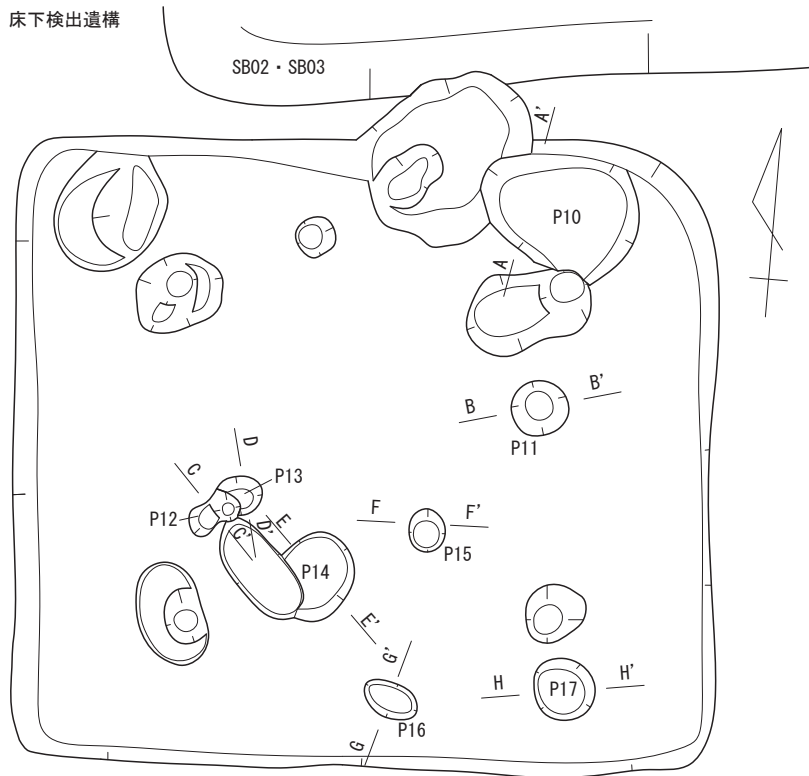


図 165 S116 遺構図 (2)

床下検出遺構



P10
A A'
593.20m



1 10YR3/4 暗褐色土
しまりややあり 粘
性ややあり

P11
B B'
593.20m



1 10YR4/4 褐色土 し
まりなし 粘性なし

P12
C C'
593.20m



1 10YR4/4 褐色土 し
まりややあり 粘
性なし

P13
D D'
593.10m



1 10YR3/4 暗褐色土
しまりややあり 粘
性ややあり IV層ブ
ロックを10%含む

P14
E E'
583.10m



1 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性なし
IV層ブロックを40%含む
2 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性なし
IV層ブロックを20%含む
3 10YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性なし

P15
F F'
593.10m



1 10YR4/4 褐色土 し
まりあり 粘性ややあ
り

P16
G G'
593.00m

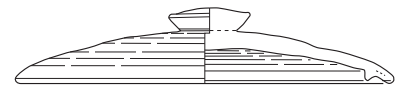
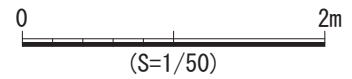


1 10YR4/4 暗褐色土 し
まりなし 粘性ややあり
IV層ブロックを3%含む

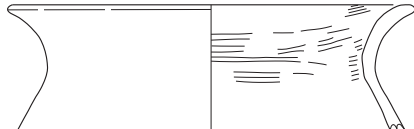
P17
H H'
592.90m



1 10YR4/4 暗褐色土 しまり
なし 粘性ややあり IV層
ブロックを40%含む



274



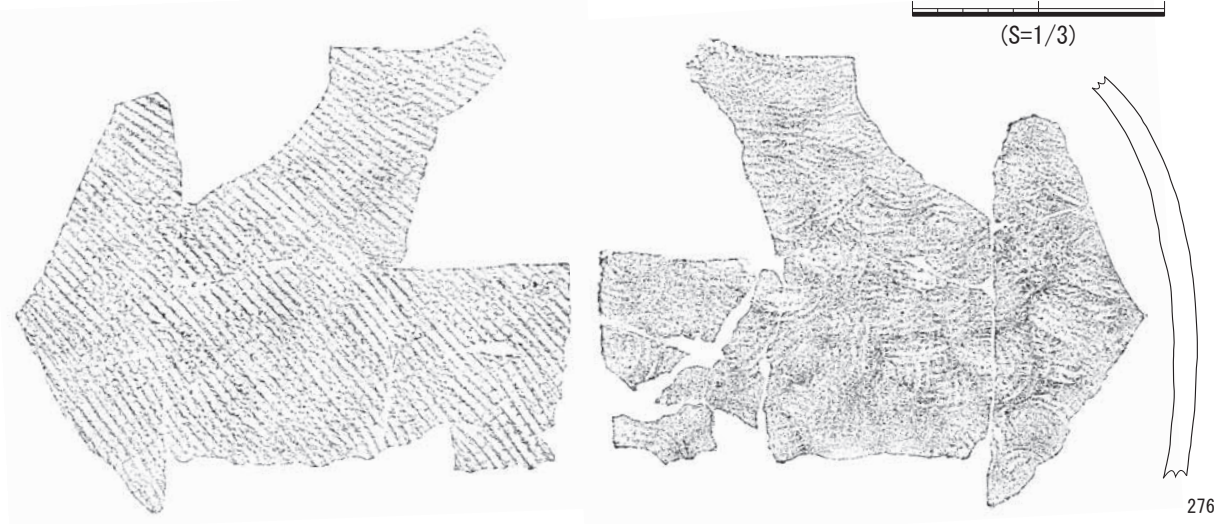
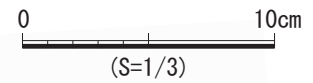
272



273



275



276

図 166 S116 遺構図 (3)、出土遺物

れており、埋土を5層に分層した。しかし、カマドB-B'土層断面における4層は基盤層の可能性があり、A-A'土層断面における4層は袖部で、そこに含まれる礫は、芯材として使用されたと考えることができる。この袖部との位置関係も含めて、カマド掘方前面の浅い窪みでは被熱面は確認できなかったが、この部分が燃焼部と考えられる。なお、他に板状の角礫が出土したが、カマド構築材の可能性はある。カマド埋土の2層と3層には焼土ブロックが含まれ、カマド全体に堆積している。カマドの袖部や天井部が一部しか確認できないことから、建物廃棄の際にカマドを解体した可能性が考えられる。

床下 貼床除去後に土坑8基を検出したが、SI16との関係は不明である。P15は小穴であるが、深さが0.26mある。他の7基は、掘方が浅く性格不明の土坑である。

遺物出土状況 埋土から土師器高坏・甕、須恵器坏・蓋・甕・壺が散在して出土した。また、カマド内とP03・P05・P07から土師器甕、須恵器坏・蓋・甕が出土した。

出土遺物 272は土師器甕で口縁部から頸部にかけて外反する。273は無台の須恵器坏で、口縁部が大きく開き7世紀後葉と思われる。274と275は、須恵器蓋で胎土がマーブル状となる在地産のものと思われる。宝珠様の摘みを持ち、口縁部内面に返りを持つものと、口縁端部が屈曲するものである。276は猿投産の須恵器甕で内面の当て具痕跡をナデ消している。

時期 出土遺物から7世紀後葉と思われる。

SI17 (図167～図170)

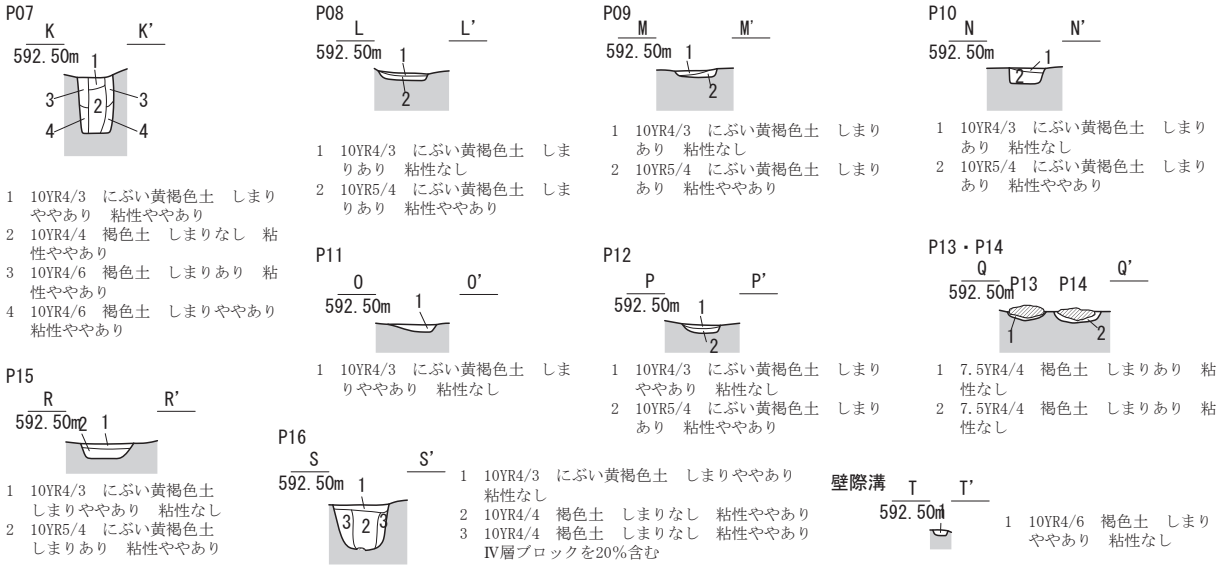
検出状況 平坦面③にあたるEC11～EC12グリッド、SI18床面で検出した3.99m×3.82mの小型堅穴建物である。当初は大型堅穴建物であるSI18として掘削していたが、その床面においてSI17のプランを確認した。このため、サブトレンチを掘削して土層堆積状況を確認したところ、SI18貼床層を掘削してSI17が造られていることが判明した。このことから、SI18よりもSI17が新しいと判断した。平面形は、四辺がほぼ直線状の方形で、長軸の方位はN-82°-Eである。

埋土 土層図の3層～6層が埋土で、1層と2層はSI18からSI17を覆う堆積である。このため、SI18が埋没することなく、その床面からSI17が掘削されたと思われる。8層と9層は締まりがあり貼床層と判断した。埋土は褐色土やにぶい黄褐色土が主体となり、人為堆積の可能性はある。

壁 東壁から北壁は、比較的直立的に立ち上がるが、西壁から南壁は緩やかに開く。壁の残存高は最大で0.38mである。

床面 ほぼ平坦で、床面で検出した遺構は、柱穴4基、壁際溝2条、土坑12基、カマド1基である。堅穴内の位置関係や柱痕跡状の堆積が認められることからP01・P02・P03・P04を柱穴と判断した。壁際溝は西壁と南壁の一部を巡る。南壁際で検出したP16でも柱痕跡状の堆積があるが、位置的にSI17とは異なる遺構の柱穴となる可能性がある。P03とP04の間に、扁平な礫を埋設したP13とP14を確認したが、その性格は不明である。その他、掘方が浅い性格不明の土坑を7基検出した。

カマド 北壁中央で確認したが、煙道部は確認できなかった。カマド掘方は貼床層を掘り込んでいる。掘方底面には褐色土(6層)が全面にあり、袖石の芯材と思われる礫がここに固定され、袖部である7層で覆う。袖部芯材の角礫は両袖部で検出したが、東袖部中央では確認できなかった。カマド西側前面で確認した角礫2点は袖部芯材の可能性はあるが、位置的に原位置を保っていない可能性が高いと判断した。焼土ブロックや炭化粒は、カマド前面の窪みに堆積した5層と燃焼部の3層や1層で確



床下検出遺構

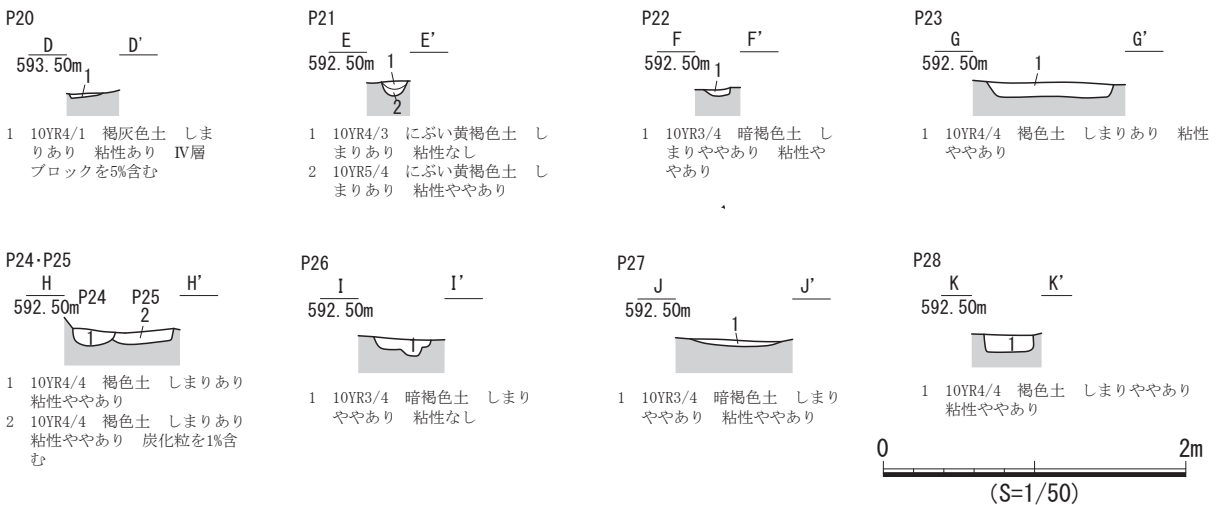
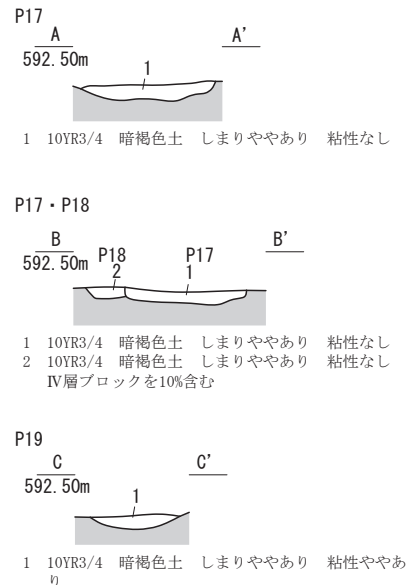
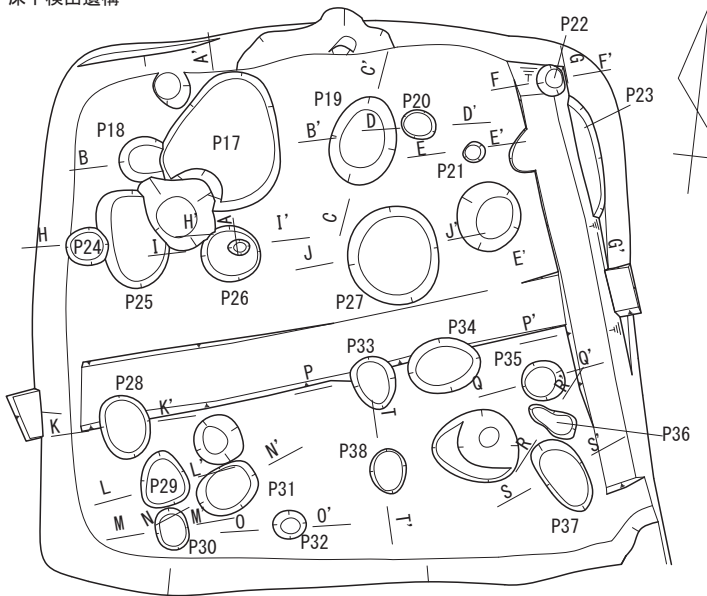


図 168 SI17 遺構図 (2)

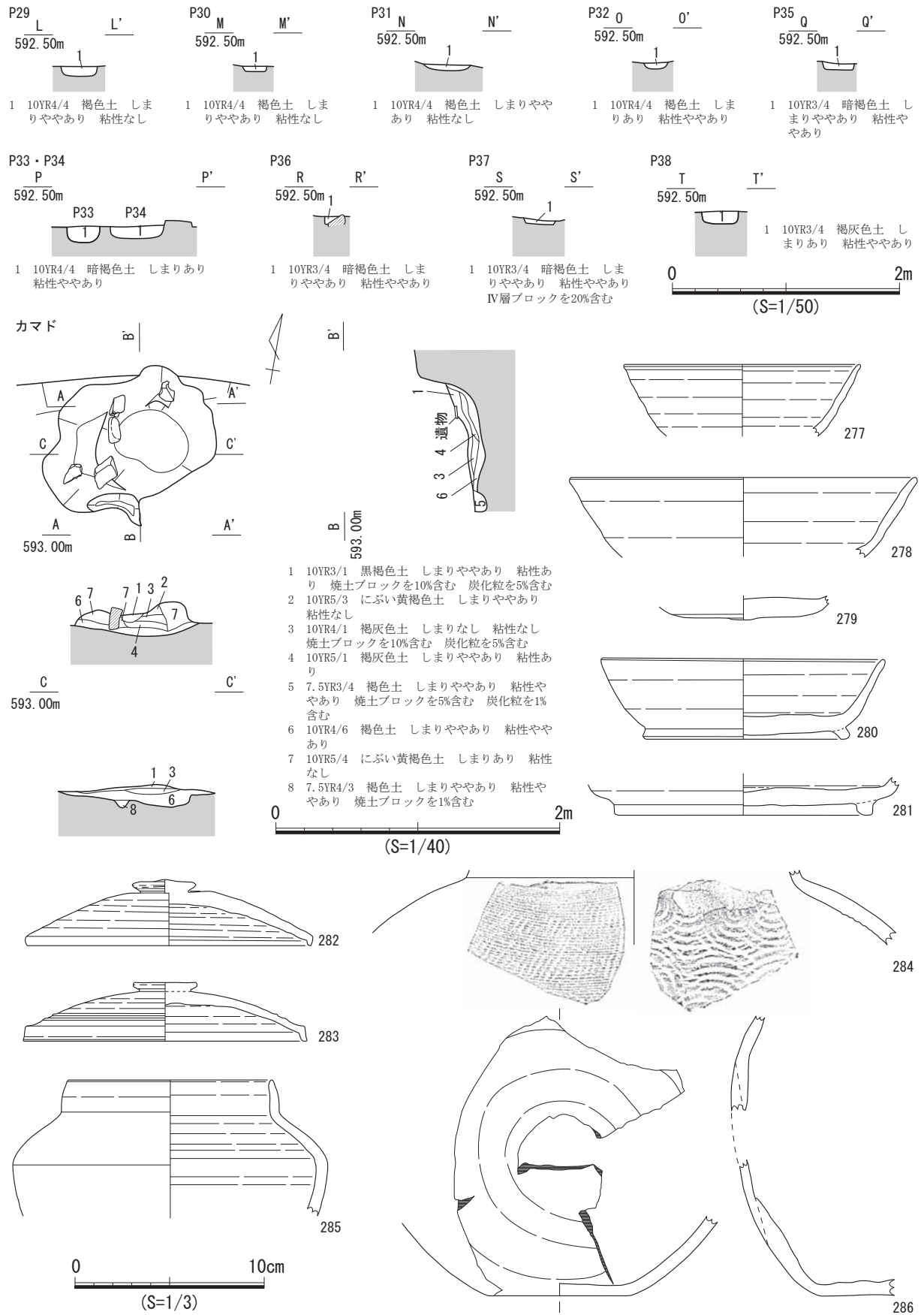


図 169 S117 遺構図 (3)、出土遺物

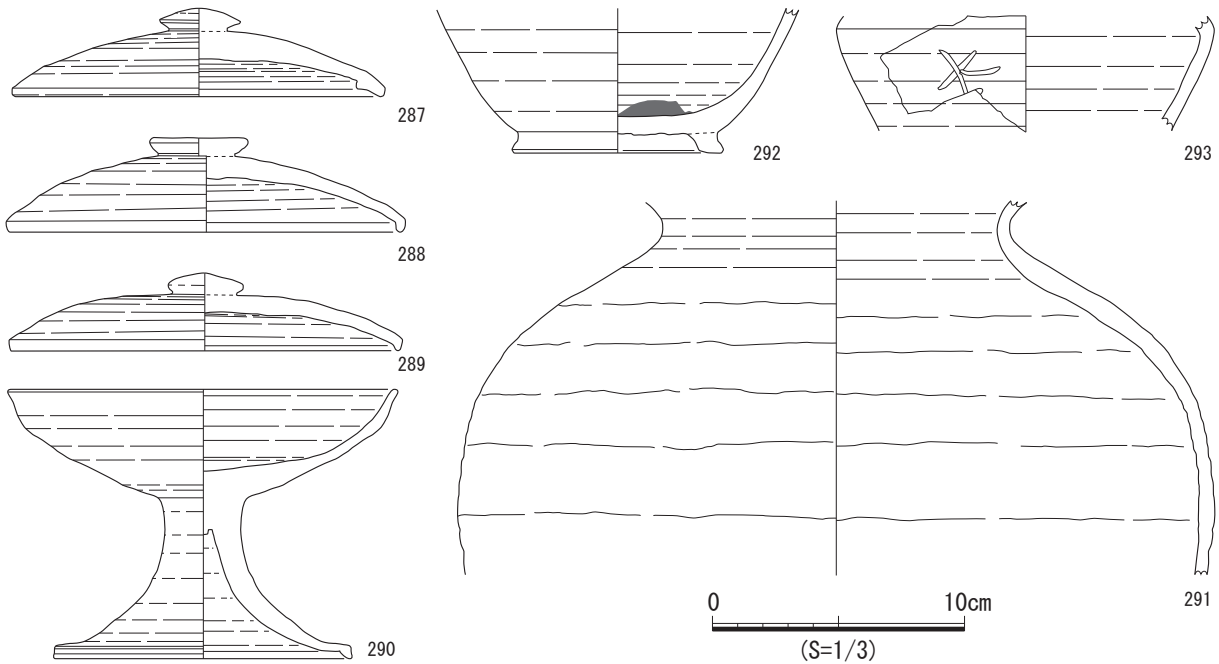


図 170 SI17・SI18 上層出土遺物

認したが、焼土面は確認できなかった。カマド天井部や袖石芯材の一部が確認できなかったことから、竪穴建物廃棄の際に解体した可能性が考えられる。

床下 貼床除去後に竪穴掘方全体で性格不明な土坑を 22 基確認した。いずれも貼床層除去後に検出しており、SI17 よりも古い遺構であれば本来は 0.4m 以上の深さを持つ遺構となるが、SI17 や SI18 との関係は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土師器甕と須恵器坏・蓋・甕・壺が散在した状況で出土した。また、カマド・P16・P17・P19 の埋土から須恵器坏・蓋・壺が出土した。

出土遺物 277 と 278 は在産の須恵器坏で 7 世紀後葉と思われる。279 は焼成の甘い無台の須恵器坏で、周囲が打ち欠かれたような痕跡がある。280 と 281 は在産の須恵器坏で 8 世紀前葉と思われる。282 と 283 は美濃須衛産の須恵器蓋で、ボタン状の摘みを持つ。口縁端部が屈曲し、7 世紀後葉と思われる。284 は須恵器甕で、外面は格子のタタキの後、楯状工具による平行沈線を施す。285 は猿投産の須恵器短頸壺で、口縁部が僅かに内湾し、7 世紀後葉と思われる。286 は美濃須衛産の須恵器提瓶で、7 世紀後葉と思われる。

SI17・SI18 上層（1層～2層）出土遺物 SI17 と SI18 を同一遺構として掘削した際に出土した遺物である。どちらの遺構に属するのか明確でないため、ここで紹介する。

287 は口縁部内面に返りを持つ須恵器蓋である。288 と 289 は口縁端部が短く屈曲する須恵器蓋で、7 世紀後葉と思われる。290 は須恵器高坏で、脚部は短く脚裾部が屈曲する。坏部は口縁部がやや内湾しながら立ちあがる。7 世紀後葉と思われる。291 は美濃須衛産の須恵器甕で頸部が強く外反する。292 は在産の壺で、外に開く高台を付ける。293 は須恵器壺の胴部片で、外面に「太」の刻書がある。

時期 出土遺物は 7 世紀後葉から 8 世紀前葉のものがあることから、8 世紀前葉と思われる。

SI18 (図 171～図 174)

検出状況 平坦面③にあたる EB10～ED12 グリッド、IV層の上面で検出した 7.92m×7.28m の大型竪

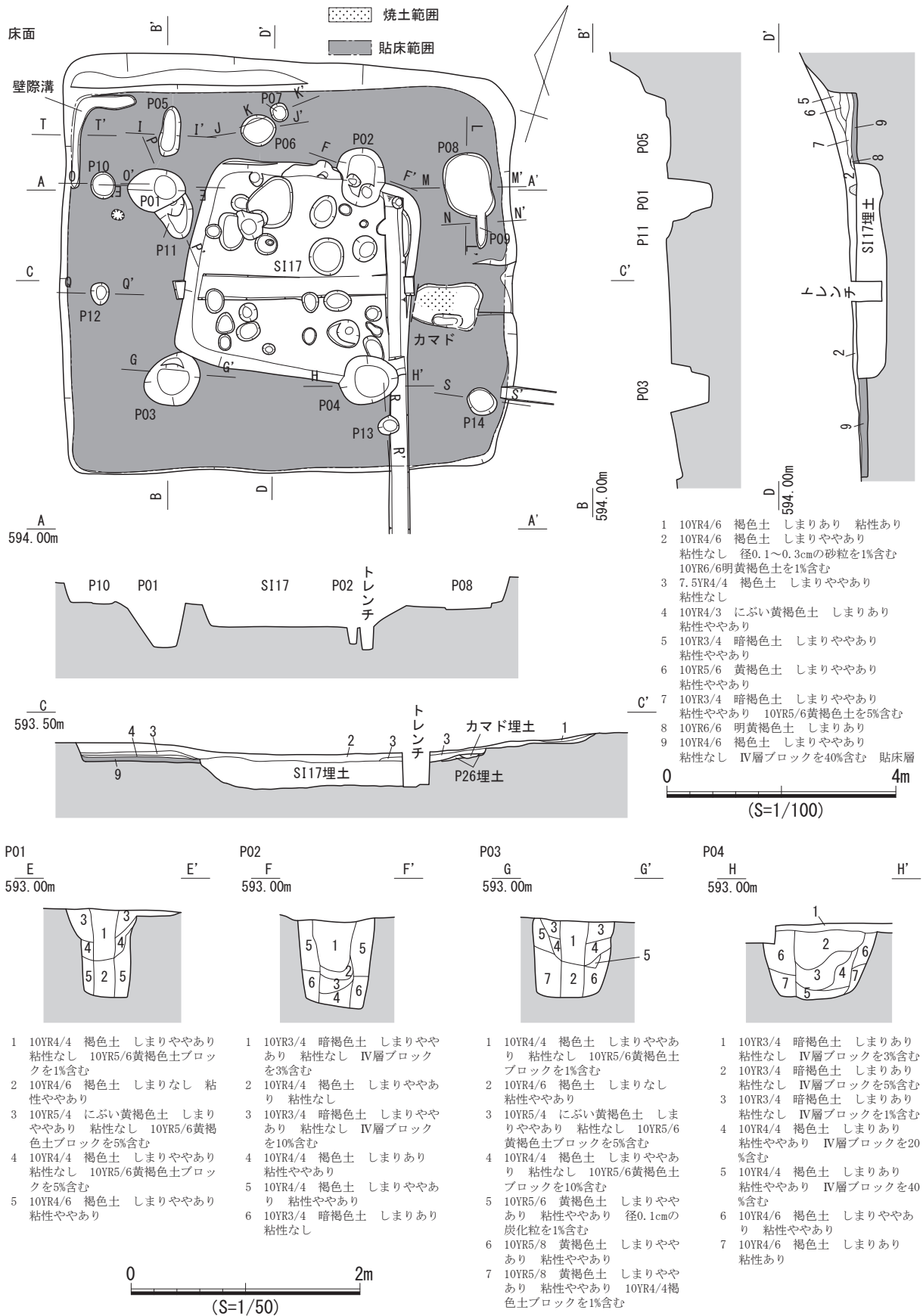


図 171 SI18 遺構図 (1)

穴建物である。検出時にはプランが不明瞭で、東西方向 14m、南北方向 20m (SI23・SI28 まで) の十字トレンチの土層観察によりその存在を確認し、全体の平面形状は再度行った検出作業により確認した。しかし、攪乱等の影響により表土層や段切造成による整地層を十分に除去できなかったため、当初は SI17 を認識することができず、SI18 を掘削し床面を検出した際に、中央付近で貼床層を削平

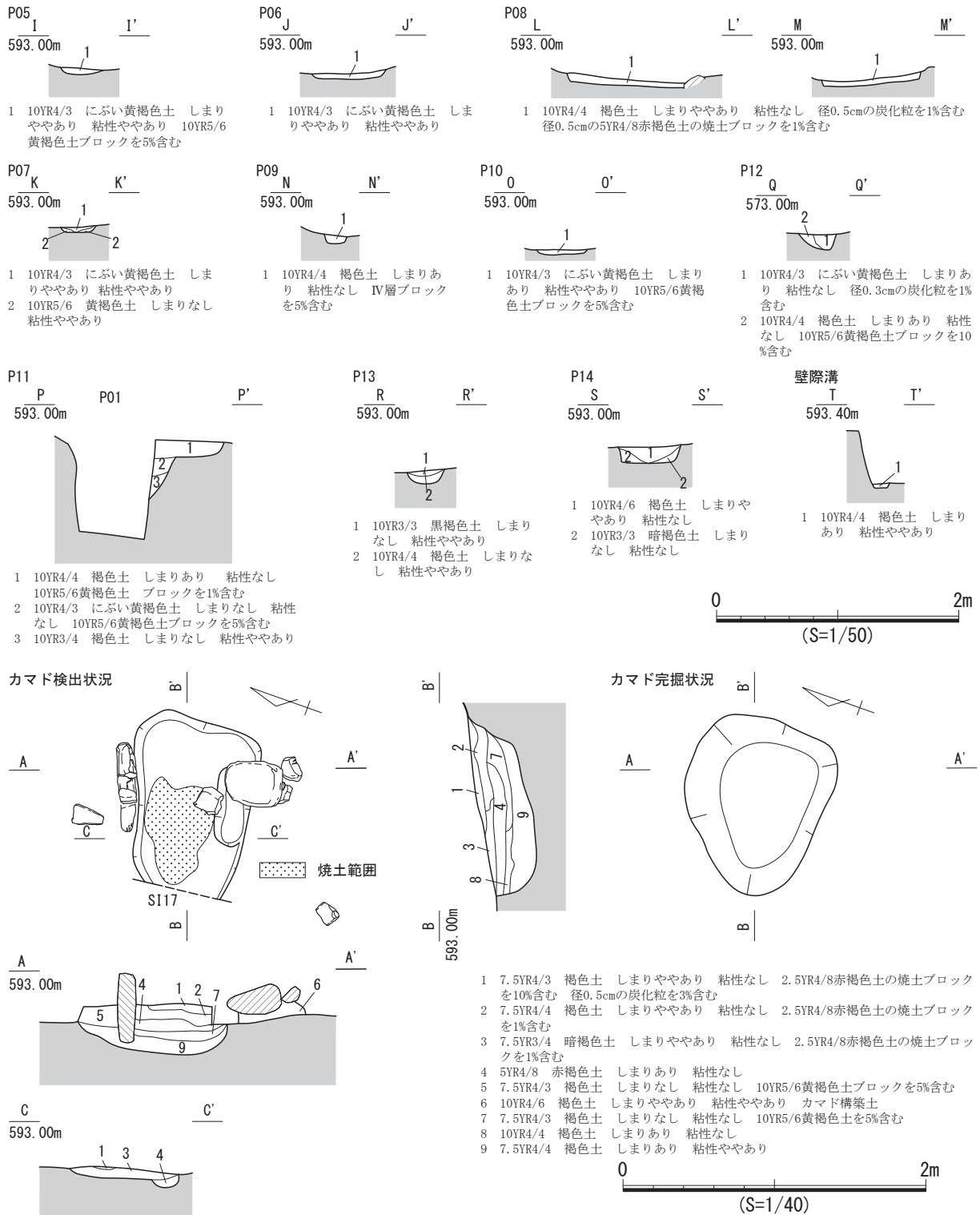


図 172 SI18 遺構図 (2)

床下検出遺構

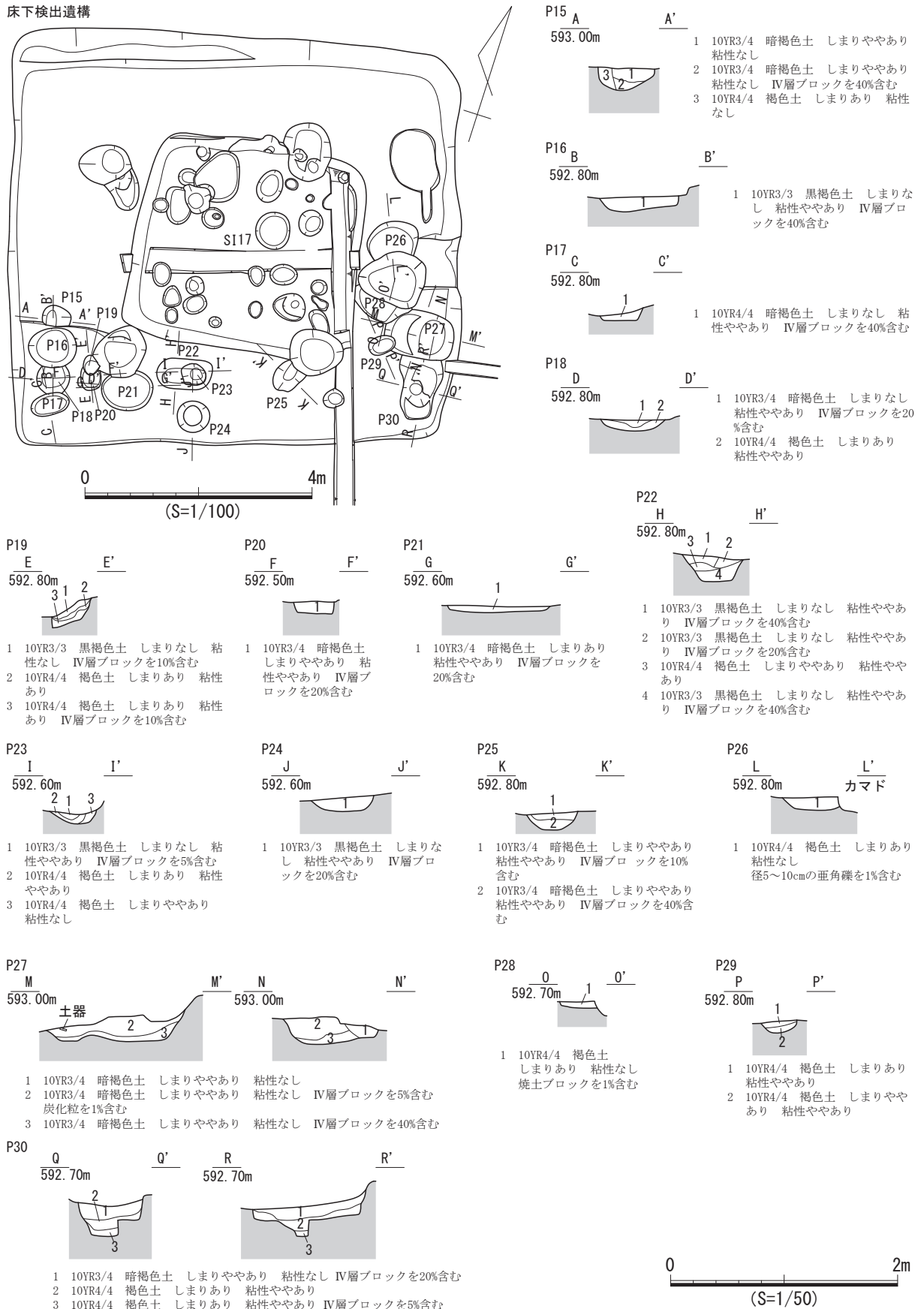


図 173 SI18 遺構図 (3)

する SI17 を確認した状態であった。SI17 は、P02 と P04 埋没後に掘削して造られていることも判明したため、SI17 が SI18 よりも新しいと判断した。南東側の建物の掘方が浅いが僅かに残る壁面から、平面形は四辺がほぼ直線状の方形であるが、東辺がやや短い。長軸の方位はN-73° -Eである。

なお、この竪穴建物は、他の竪穴建物と比較して SI25 同様に大型で柱穴規模が大きいことから、居住のための施設ではなく宗教的な性格を持つ施設である可能性が考えられる。

埋土 検出時に SI17 を確認できなかった原因として、表土掘削時に SI18 の西半部において攪乱を確認し除去したが、それを十分に取り除くことができず、段切造成による整地層の確認も不十分であったため、SI18 を覆うように堆積していた表土層や整地層が残存していた可能性が考えられる。このため、土層図の1層～3層、5層～8層は SI17 埋没後に堆積したものであり、SI18 埋土は4層のみとなる。こうした土層堆積状況からは、SI17 掘方の掘削は SI18 の床面から行われたことが考えられ、SI18 の機能喪失後あまり間を置かずに、SI17 が造られた可能性が考えられる。

壁 壁面は直線的でやや開く。壁の残存高は、北壁側で最大 0.60m である。

床面 ほぼ平坦である。締まりがあり IV 層ブロックを含む 9 層を貼床層と判断した。床面で検出した遺構は、柱穴 4 基、土坑 10 基、カマド 1 基である。竪穴内の位置関係から P01・P02・P03・P04 を柱穴と判断した。土坑は浅く性格不明である。壁際溝は北西隅で確認した。なお、P09 とした小穴もその形状からは壁際溝の可能性はある。

カマド 東辺の中央で確認したが、東壁には接していない。これは、SI18 掘削に先行して行ったサブトレンチの掘削により削平したためである可能性がある。ただし、P09 を壁際溝と考えた場合の位置や、東西方向のサブトレンチ土層図(C-C')の掘方の位置からは、最終的に東辺部を掘り過ぎた可能性がある。カマド検出時に西側で検出した角礫は北側の袖部芯材と考えられ、南側では袖部芯材の痕跡とカマド構築材の可能性のある礫が散在していた。カマド掘方は 0.32m の深さがあり、4 層が焼土層である。袖部が一部しか残存していないことや、天井部が確認できなかったことから、竪穴建物廃棄の際に解体した可能性が考えられる。

床下 貼床除去後に検出した土坑は、ほぼ建物南部に集中する。貼床層除去後に検出したことから、SI18 よりも古い段階で存在していた可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中及びカマド・P01・P04・P08・P27 から土師器甕と須恵器杯・蓋・甕が出土した。

出土遺物 294 と 295 はカマド北側で出土した土師器甕で、294 は頸部が厚く外反が弱く、295 は口縁部から頸部が外反する。296 は無台の須恵器杯で、底面は丸みを持つ。297 は、カマド南側で出土した

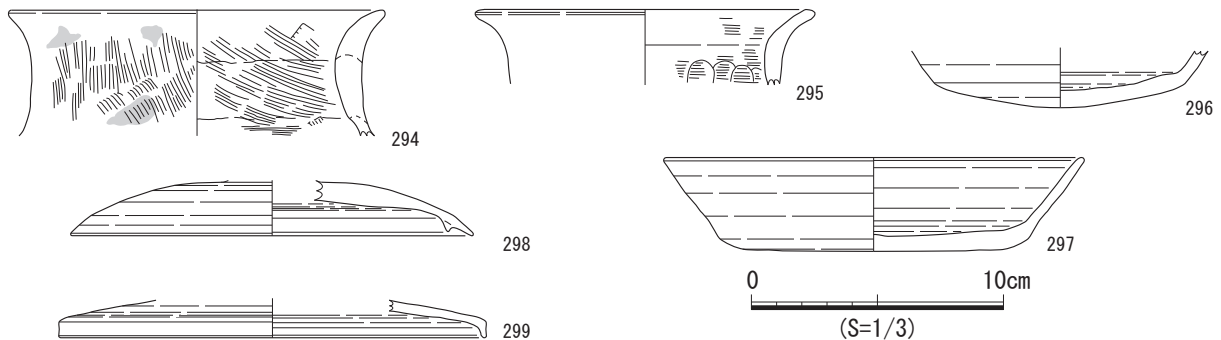


図 174 SI18 出土遺物

美濃須衛産の無台の須恵器坏で、口縁部が大きく開く。298 と 299 は在産の須恵器蓋で、298 は口縁部内面に返りを持ち、299 は口縁端部が屈曲する。いずれも 7 世紀後葉のものと思われる。

時期 出土した遺物から 7 世紀後葉のものと思われる。

SI19 (図 175～図 177)

検出状況 平坦面③の南西にあたる ED6～EE7 グリッド、IV層の上面で検出した約 4.00m×3.82mの堅穴建物である。西辺から南辺にかけては、緩斜面の下側にあたり掘方を検出することができなかった。東辺には幅が狭いテラス状の段があってやや張り出すようになるが、北辺の形状から方形に近い平面形であったと思われる。SZ08 の周溝と重複するが、検出状況から SI19 が新しい。長軸の方位は N-85° -E である。

埋土 埋土は 4 層に分層したが、2 層と 3 層に IV 層起源のブロック土を含み、水平に堆積する。東壁面の付近に堆積する 4 層には、赤褐色土ブロックや炭化粒が含まれることからカマド内の埋土である。

壁 壁面は比較的直線的に立ち上がり、壁の残存高は最大で 0.42m である。

床面 ほぼ平坦であるが、貼床層は確認できなかった。床面で検出した遺構は柱穴 3 基、土坑 8 基、カマド 1 基である。堅穴内の位置関係から P01・P02・P03 を柱穴と判断した。P04 は P01～P03 と比較

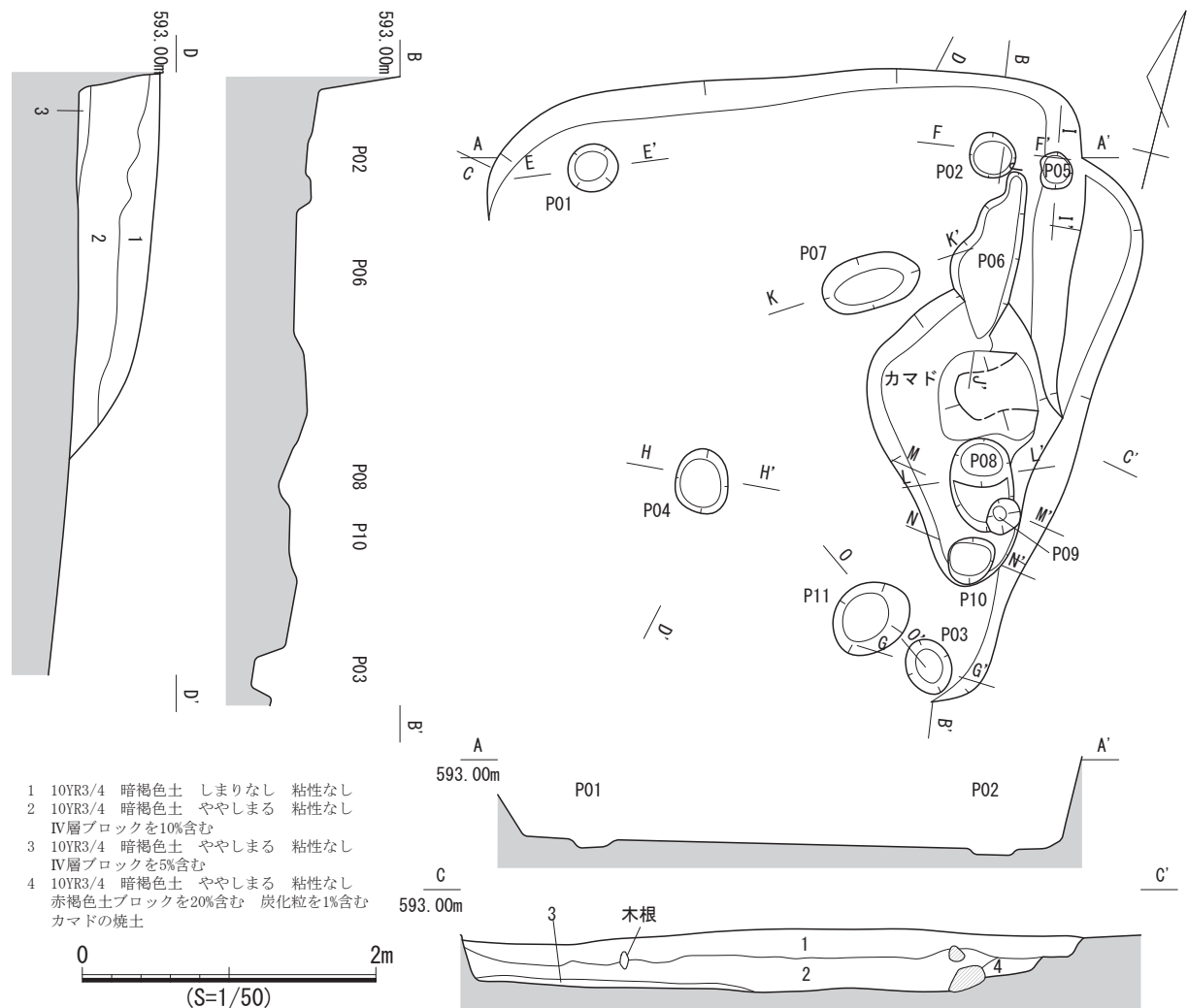


図 175 SI19 遺構図 (1)

すると内側に入り込む位置にあるが、その深さから柱穴の可能性はある。他の小穴は掘方が浅く性格不明である。

カマド 東壁中央部で検出したが、煙道部は確認できなかった。両袖部の芯材と思われる礫を確認したが、天井部は残存していない。焼土面は確認できなかったが、埋土には焼土ブロックや炭化物を含む。

床下 掘方整地層は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土師器高杯・甕・壺、須恵器杯・蓋・甕・壺が散在して出土した。また、カマド内と P08 から、土師器甕と須恵器杯が出土した。

出土遺物 300 は土師器甕で口縁部から頸部にかけて外反する。301 は土師器長胴甕の胴部である。

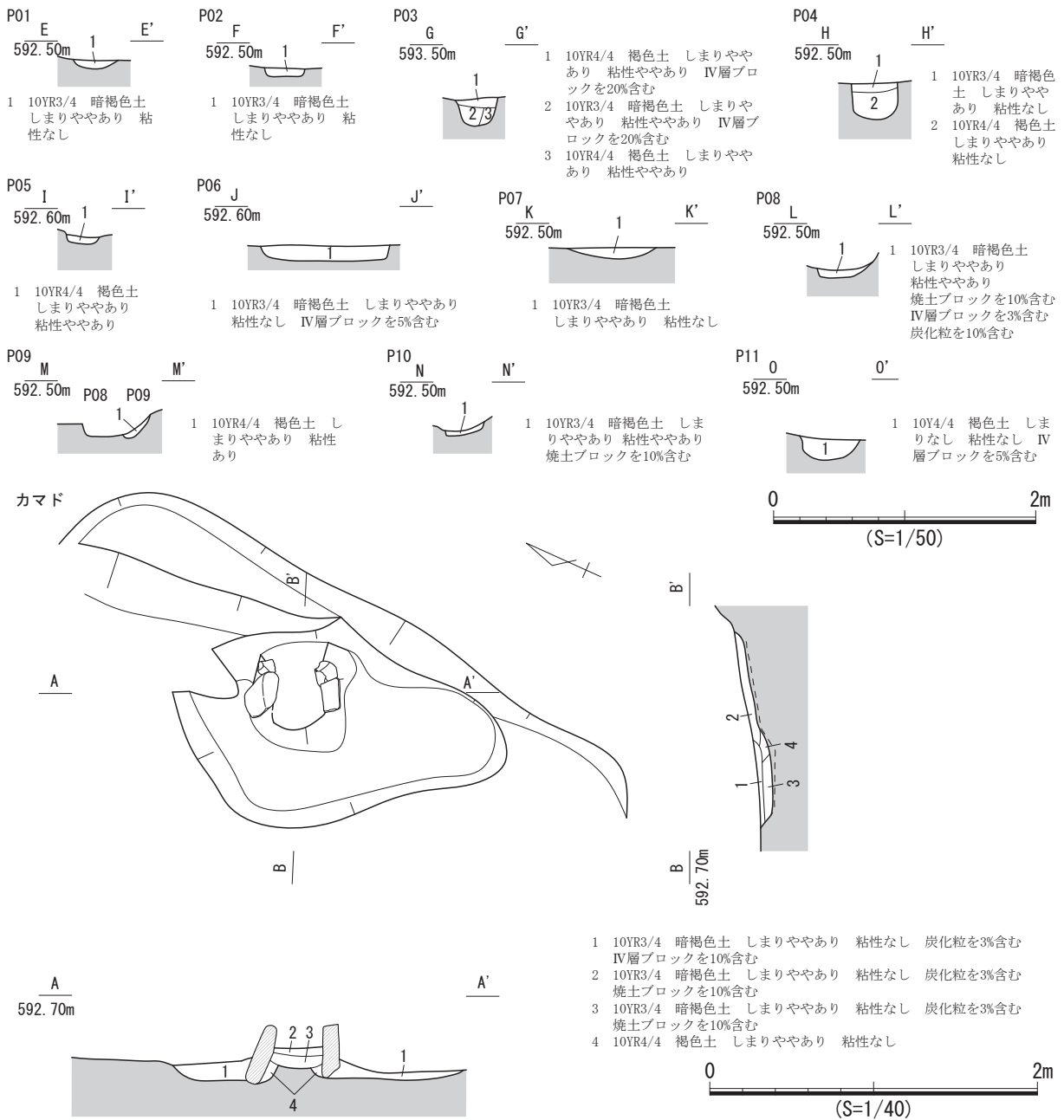


図 176 SI19 遺構図 (2)

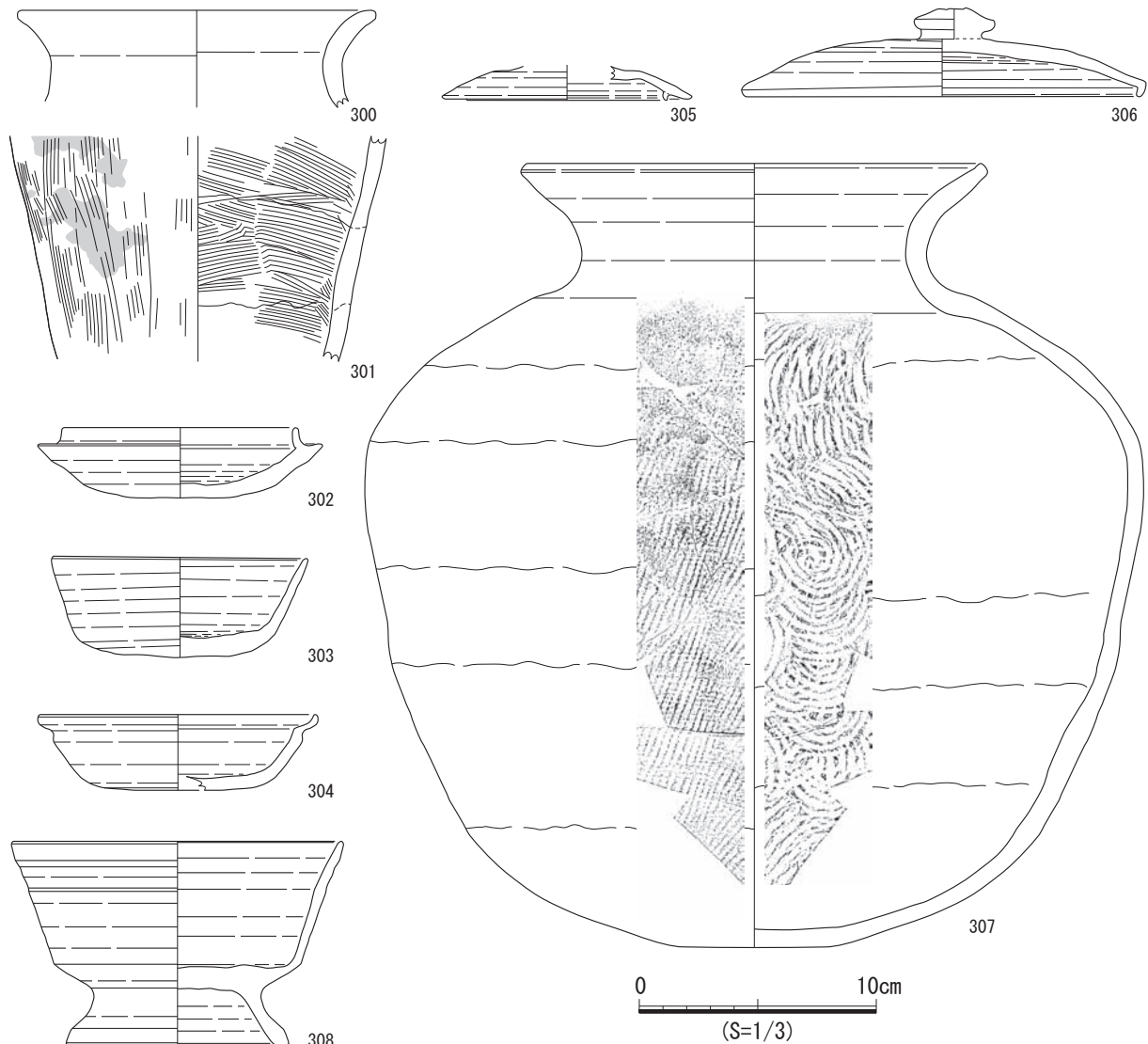


図 177 SI19 出土遺物

302 は須恵器坏身で、口縁部に蓋受けを持つ 7 世紀前葉のものである。303 は無台の須恵器坏で、器高に対して口径が小さく、口縁部が直線的に立ちあがることから 7 世紀後葉と思われる。304 は須恵器鉢であるが、頸部が屈曲し口縁部が内湾して開く特殊な器形である。305 は口縁部内面に返りを持つ須恵器蓋で、7 世紀中葉のものと思われる。306 は美濃須衛産の須恵器蓋で口縁端部が屈曲し、7 世紀後葉と思われる。307 は美濃須衛産の須恵器甕で、7 世紀後葉と思われる。内面には渦巻き状の当て具痕がある。308 は金属器模倣の須恵器香炉である。口縁部は直線的で、ハの字形に開く長い高台を付ける。なお、307 と 308 は北西に位置する SI14 の b 層と e 層出土遺物と接合した。

時期 出土遺物したから 7 世紀後葉のものと思われる。

SI20 (図 178～図 181)

検出状況 平坦面④の西側にあたる EE8～EF9 グリッド、IV層の上面で検出した 4.43m×4.28m の堅穴建物である。検出状況は不明瞭で、SI15 から SI20 の間に設定したトレンチにおいて確認し、再度平面的に精査して確認した。平面形はほぼ方形で、三辺が直線的である。建物の南辺は平成 27 年度調査では発掘区外であり、平成 28 年度調査の発掘区に含まれるが、南西隅は明瞭に把握できず、全体図



図 178 SI20 遺構図 (1)



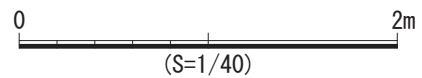
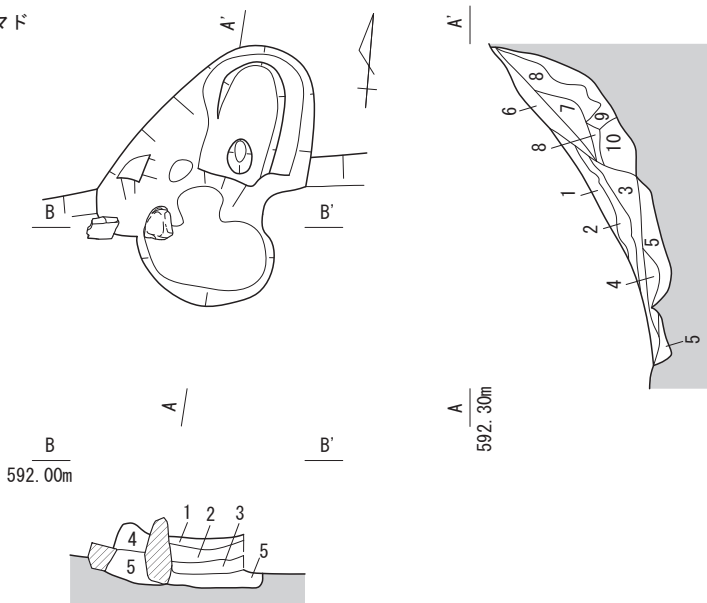
図 179 S120 遺構図 (2)

上は平成27年度検出範囲を南辺として平面図を作成した。長軸の方位はN-80°-Eである。

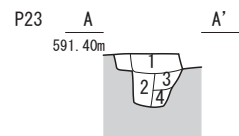
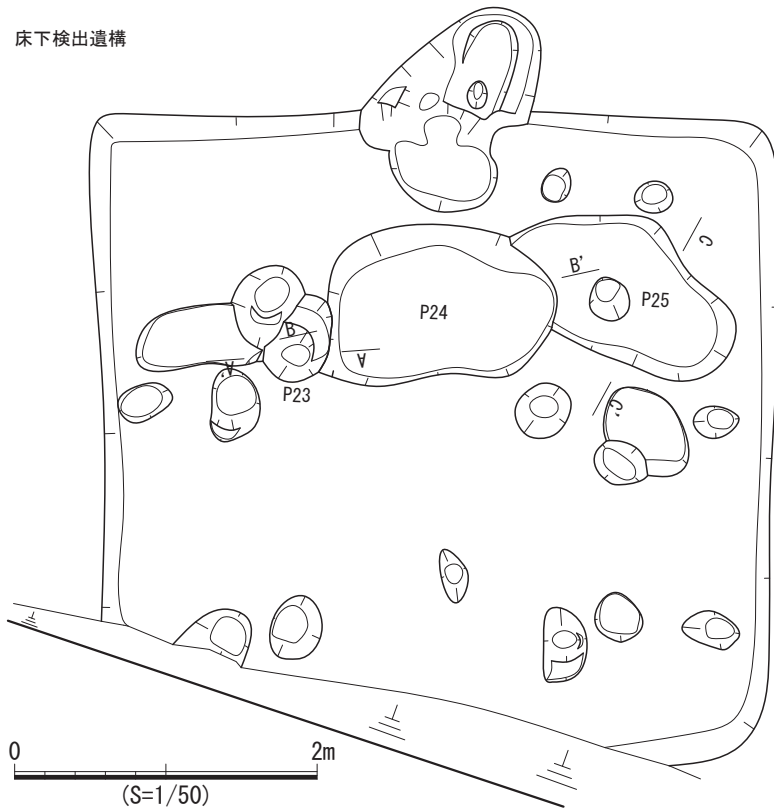
埋土 埋土は7層に分層したが、その下には貼床層と考えられる堆積が認められた。5層～7層はカマドの崩落に関する堆積の可能性がある。IV層起源のブロック土が含まれる堆積が多いことから人為堆積の可能性がある。

壁 東壁・北壁・西壁はあまり開かず立ち上がり、南壁は不明である。壁の残存高は最大で0.26mである。

カマド



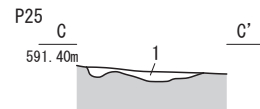
床下検出遺構



- 1 10YR3/3 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを40%含む
- 2 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む
- 3 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 4 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを20%含む



- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを20%含む



- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを40%含む

図 180 S120 遺構図 (3)

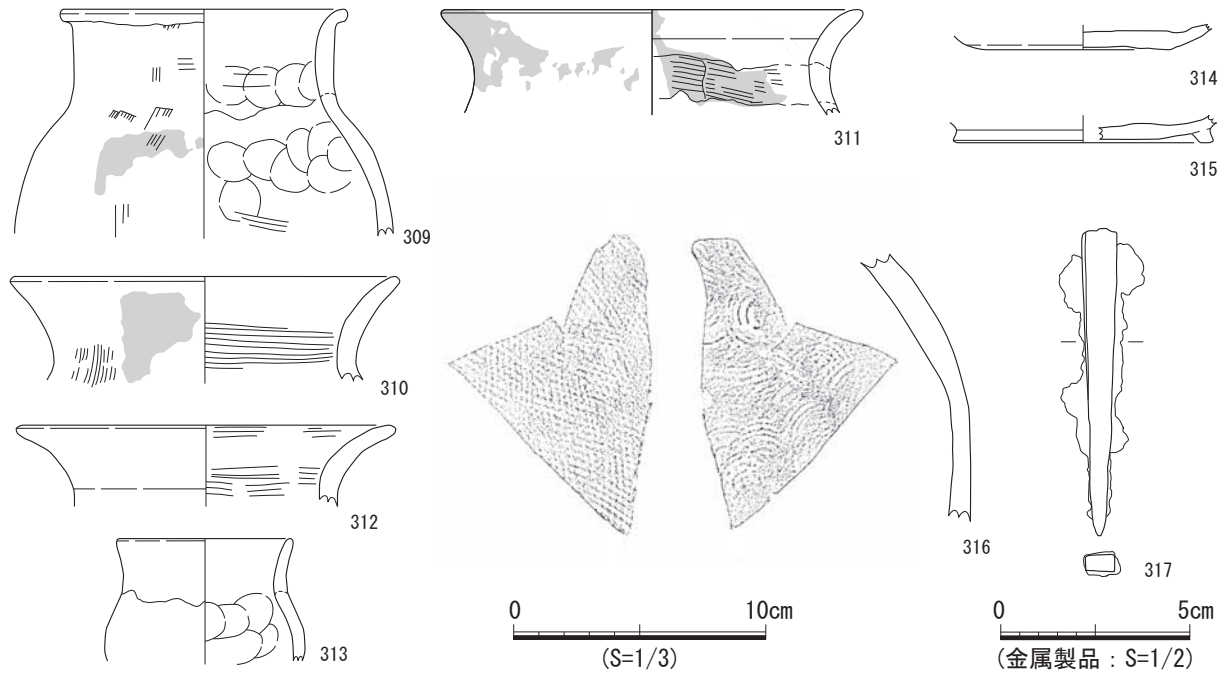


図 181 SI20 出土遺物

床面 土層断面からは西辺から南辺にかけてやや低くなり、北東部が一段高くなっている。褐色土でしまりのある8層を貼床層と判断した。床面で検出した遺構は柱穴8基、土坑14基、カマド1基である。竪穴内の位置関係から柱穴の可能性があるのは、P01～P04とP05～P08の4基ずつ計8基である。前者はSI20の平面形と方向性が合うため、この柱穴と考えられる。後者はわずかに方向がずれるがSI20と重複するような他の竪穴建物は確認できていないため、SI20に建替えの可能性が考えられ、その古い段階の柱穴となる。他に、床面全体で掘方が浅い性格不明の土坑を14基確認した。

カマド 建物北側中央で検出した。カマド掘方は8層貼床から掘り込まれ、しまりのある黄褐色土を充填している。カマド北西部で突き立つように置かれた楕円形の礫1点と、西脇で角礫が1点検出した。これら礫の基底部は黄褐色土で埋め、位置関係からカマド袖石芯材と思われる。燃焼面はカマド中央で確認した。また、燃焼面東西の窪みは袖石芯材、カマド掘方の燃焼面の北寄りの小穴は支柱石の抜き取り痕跡の可能性が考えられる。竪穴北壁外部に掘り窪められた部分は、煙道部となると思われる。袖部や天井部等の構造材が一部しか残存しておらず、竪穴建物廃棄の際に解体した可能性が考えられる。

床下 貼床除去後に柱穴状の穴1基(P23)と土坑2基を検出した。P23は上面で柱穴(P01)と重複しているが、他に対応する柱穴は確認できていない。カマド前面から東面にかけて検出した掘方が浅い大型土坑(P24・P25)は、位置的な関連性も認められないため、遺構の性格は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土師器高坏・甕、須恵器坏・蓋・甕・壺が散在して出土した。また、カマド内とP01・P04・P06・P07・P08・P09・P13・P17・P23・P24から、土師器甕と須恵器坏・蓋・甕、金属製品が出土した。

出土遺物 309は頸部が直線的に立ち上がり、口縁端部が外反する土師器甕である。310～312は、頸部が外反する土師器甕である。313は小型の土師器甕で口縁部は直線的である。314は、無台の須恵器坏、315は高台を持つ須恵器坏で、7世紀後葉から8世紀前葉頃のものと思われる。316は須恵器甕の

胴部で、内外面に格子のタタキ目と同心円の当て具痕がある。317 は釘で、頭部は欠損して不明であるが、断面形が扁平で先端が尖る。

時期 出土遺物から8世紀前葉と考えられる。

SI21 (図 182～図 184)

検出状況 平坦面④にあたる EF9～EF10 グリッド、IV層の上面で検出した 3.96m×3.96mの竪穴建物である。SI20 の東側に位置するが、1.5mほどしか離れておらず、同時期に存在したとは考えにくい。SZ09 の周溝と重複するが、検出状況から SI21 が新しい。平面形は東辺がやや短いがほぼ方形で、各辺は直線的である。長軸の方位はN-10° -Wである。

埋土 埋土は18層に分層したが、IV層ブロックを含む土層があることから、人為的埋土の可能性があり。埋土の下には貼床層が認められた。

壁 やや開く南壁面以外は直線的に立ち上がる。壁の残存高は最大で0.62mである。

床面 ほぼ平坦で、貼床層がほぼ全体にわたって残存する。床面で検出した遺構は柱穴4基、壁際溝2条、土坑6基、カマド1基である。竪穴内の位置関係から P01～P04 を柱穴と判断したが、P04 以外は掘方が浅い。他の土坑は、建物となるような対応関係が不明な柱穴状の穴や、性格不明な浅い穴である。壁際溝は、カマドを挟んで北辺及び西辺と東辺で確認した。

カマド 建物北壁中央で検出した。カマドの平面形は南北方向に長い楕円形となり、北壁の外側に広がる。カマド掘方の燃焼部は床面をやや浅い皿状に窪ませ、煙道部の壁面を掘削して構築する。カマド掘方で検出した板状の角礫は、燃焼部分はカマド袖石芯材で、煙道部の礫は煙道の天井を支える芯材と考えられる。袖石間に残る2層の赤褐色土が被熱した燃焼面と思われる。天井部分が確認できなかったことから、竪穴建物廃棄の際に解体した可能性が考えられる。

床下 貼床除去後に土坑5基を検出した。カマド西脇と竪穴南西部で検出した土坑は、掘方が浅く遺物も出土していないことから性格は不明である。また、カマド東脇の北壁で検出した土坑は、掘方が壁面を横に掘り込んでいるが、性格は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土師器高坏・甕・壺、須恵器坏・蓋・高坏・甕・壺が散在して出土した。また、カマド内と P04・P05・P10・P11・P12・P15 から、土師器甕と須恵器坏・蓋が出土した。

出土遺物 318 は頸部が直線的で口縁端部が外反する土師器甕で、胴部も直線的である。胴部と頸部の境に段を持つ。319 も頸部が直線的な土師器甕であるが、胴部にふくらみを持つ。320 と 321 は頸部から口縁部が弱く外反する土師器甕である。322 は土師器高坏で、坏部内面に放射状の暗文を施す。323 は在地産と思われる無台の須恵器坏で、7世紀末から8世紀初頭頃と思われる。324 は低い高台を持つ須恵器坏で、8世紀初頭頃と思われる。325 は無台の須恵器坏であるが、口縁部外面に沈線が1条めぐり、金属器を模倣したと思われる。326 は在地産と思われる須恵器蓋で、口縁部内面に短い返りを持ち、7世紀後葉と思われる。327 は口縁端部が屈曲し、天井部にボタン状の摘みを付けた美濃須恵産の須恵器蓋で、7世紀後葉から8世紀前葉のものと思われる。328 は須恵器甕で7世紀後葉と思われる。329 は須恵器壺か瓶の口縁部と思われる。330 は須恵器長頸壺で、胴部に2条の沈線が巡る。331 は須恵器短頸壺である。332 は須恵器壺の底部で、底面に平行する2本線のヘラ記号が刻まれている。

時期 出土した遺物から8世紀前葉と思われる。

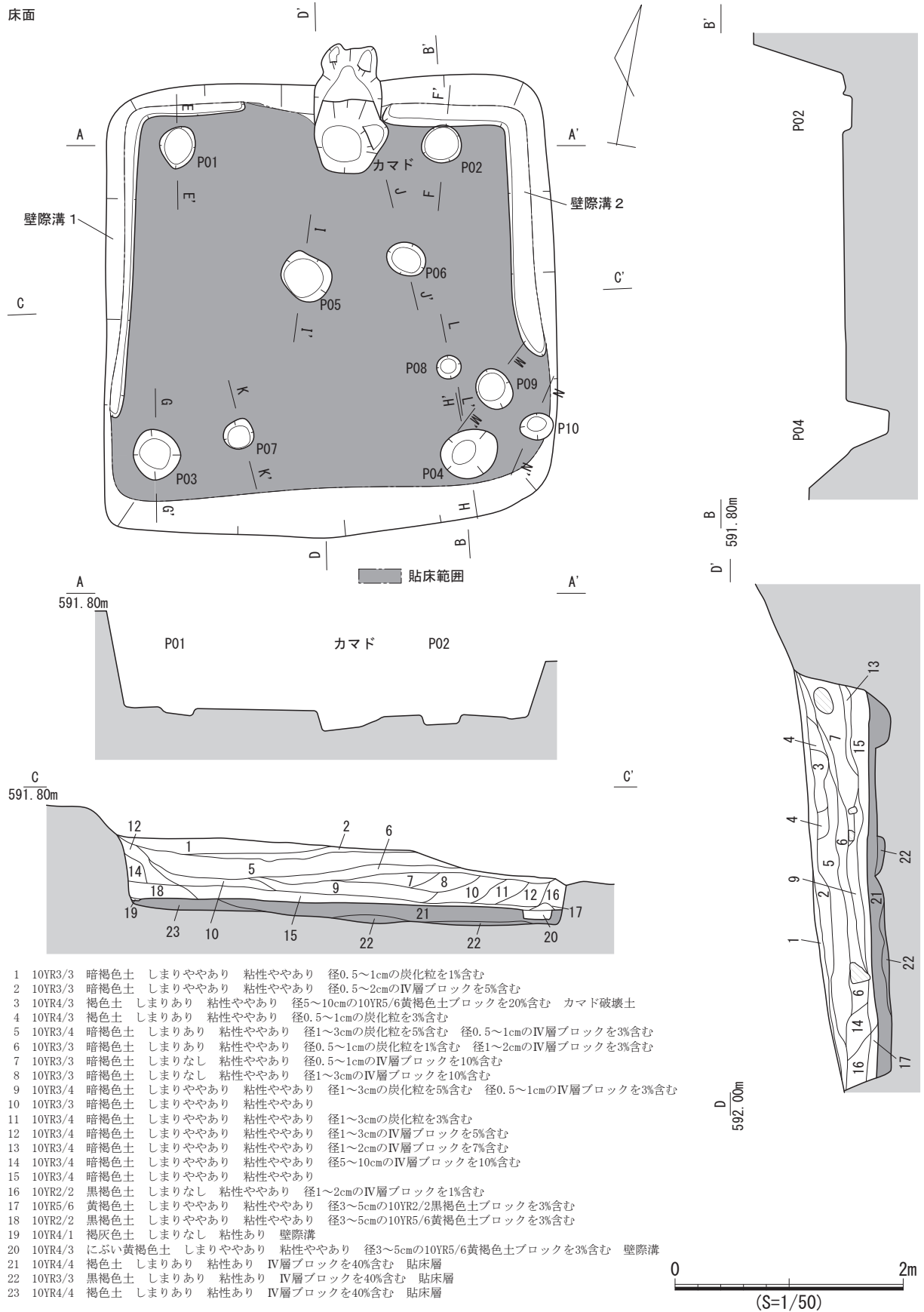
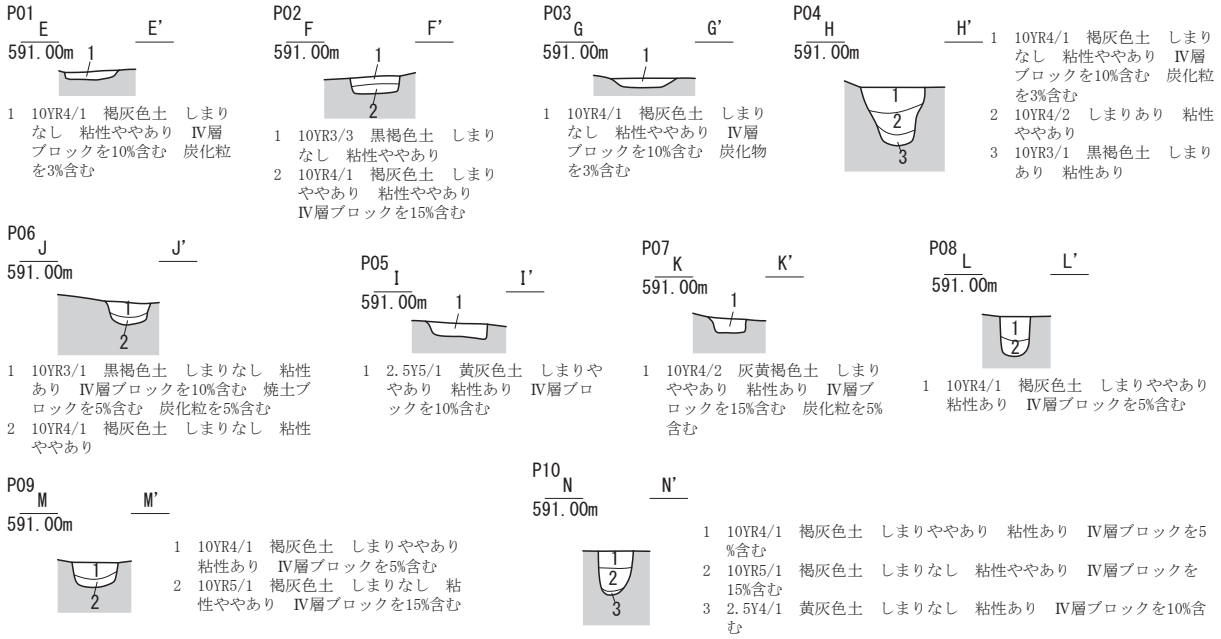
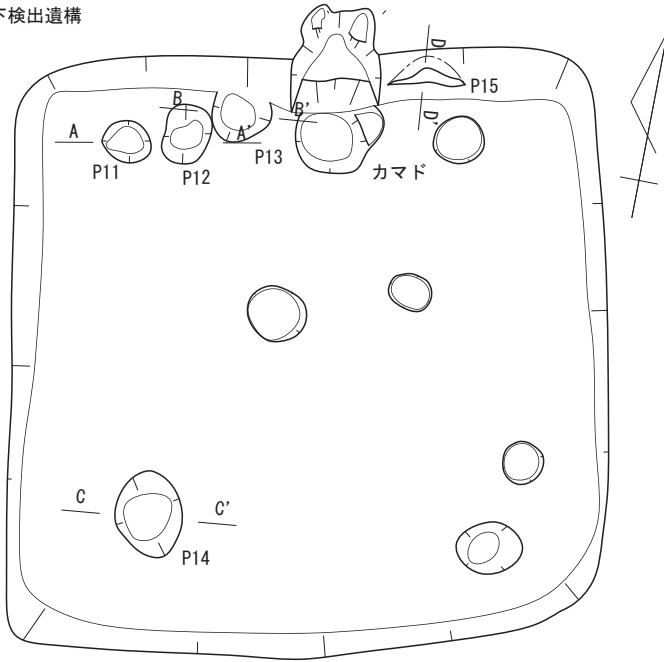


図 182 SI21 遺構図 (1)



床下検出遺構



P11・P12

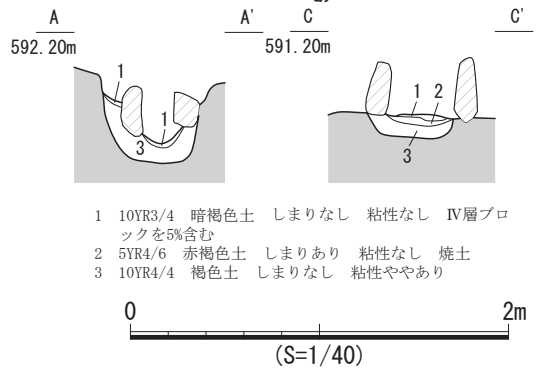
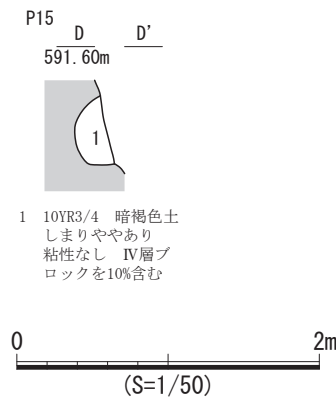
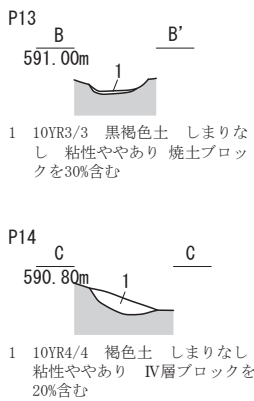
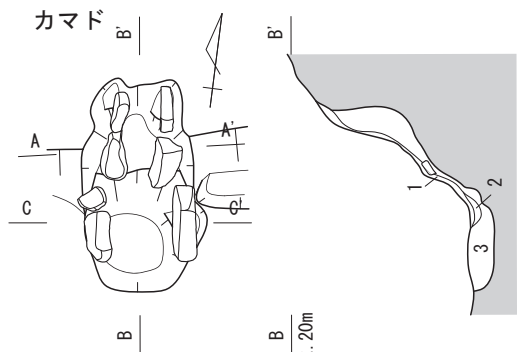
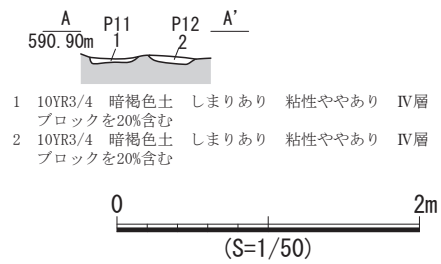


図 183 SI21 遺構図 (2)

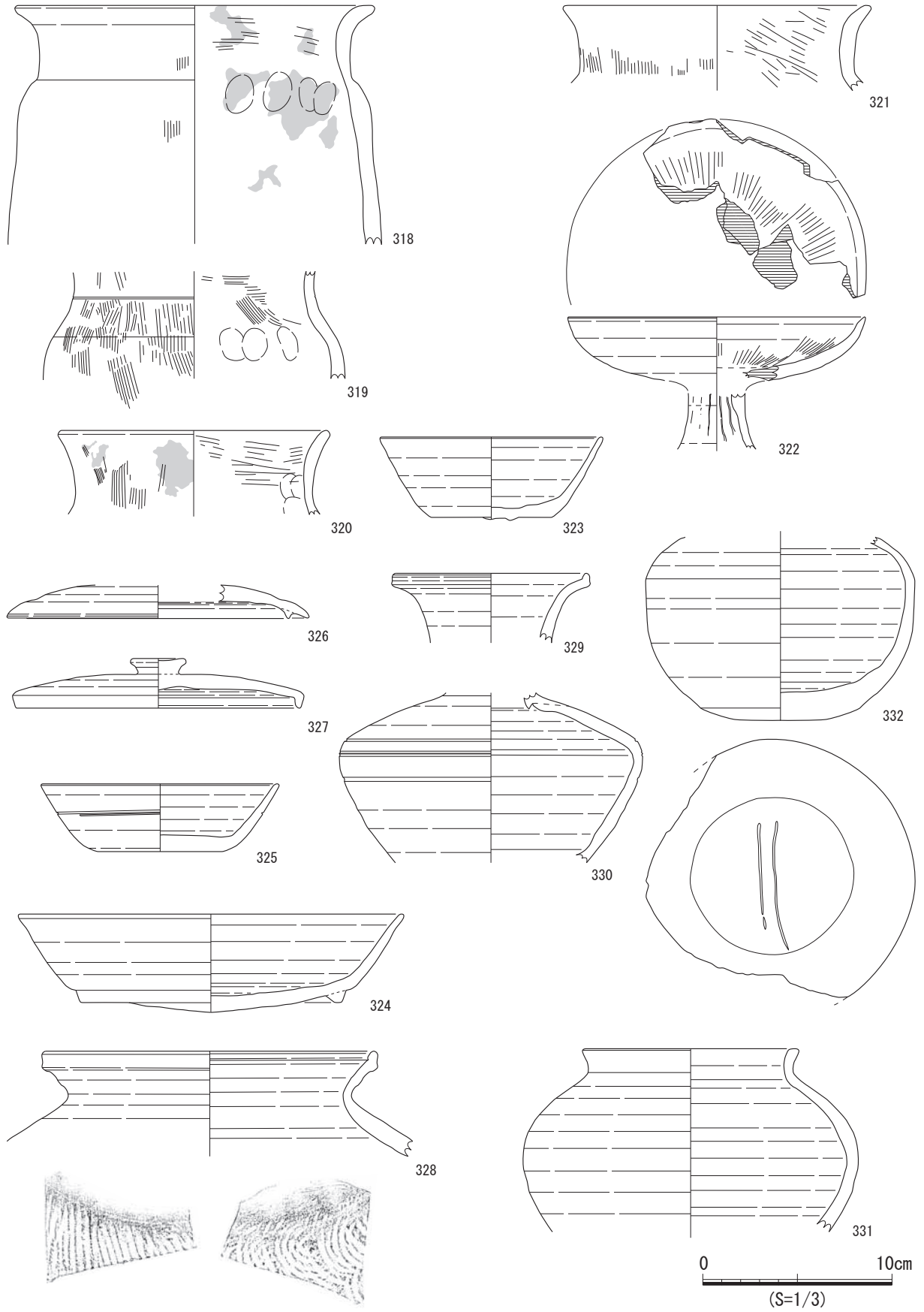


图 184 S121 出土遺物

SI22 (図 185・図 186)

検出状況 平坦面④にあたる EE11~EF11 グリッド、IV層の上面で検出した 3.62m×3.21mの竪穴建物である。SD13・SP19・SP20・SK177・SK178 と重複するが、検出状況から SK177 より SI22 が古く、他は SI22 が新しい。SK177 により南西部分を削平されているが、平面形はほぼ方形で、長軸の方位は

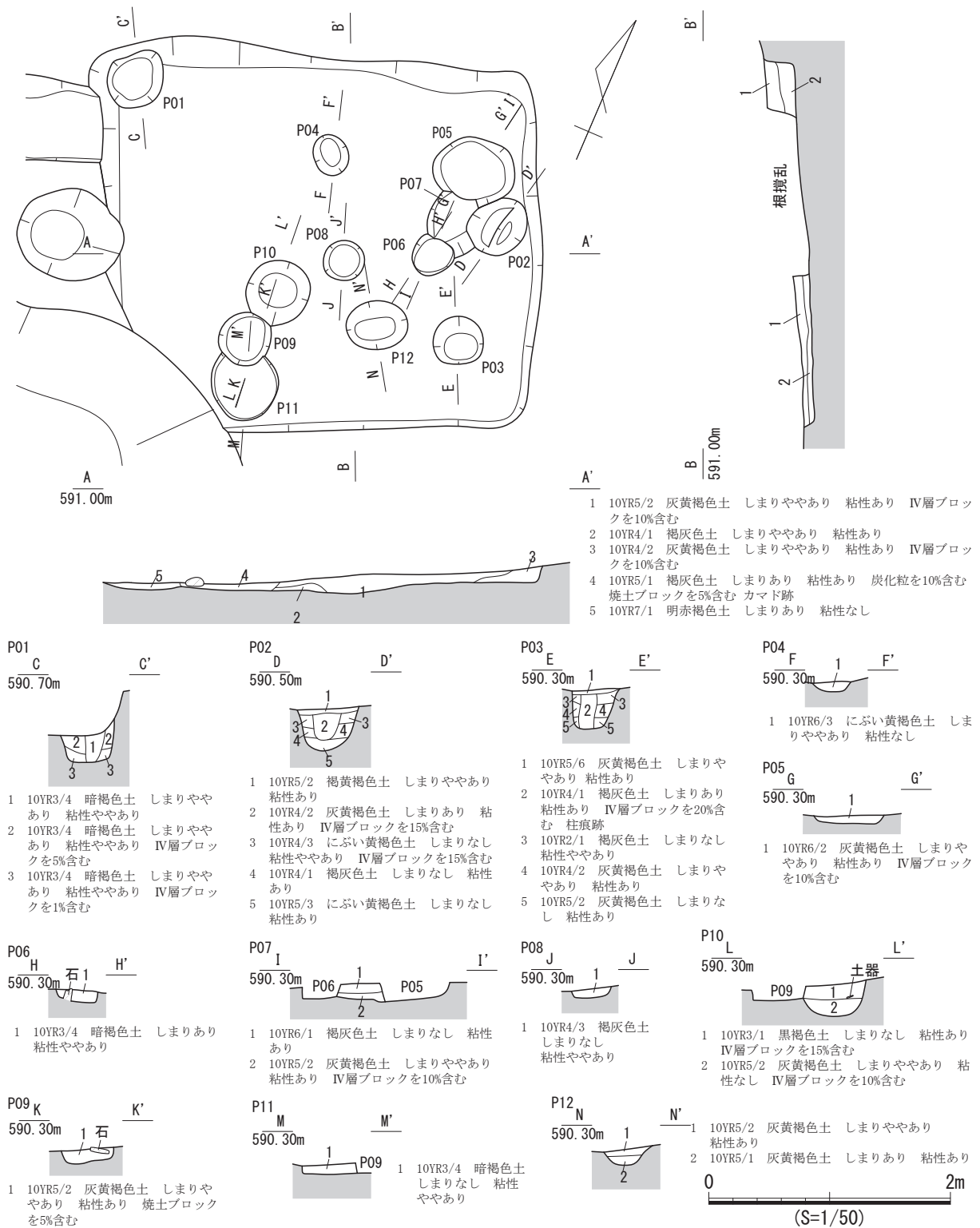


図 185 SI22 遺構図

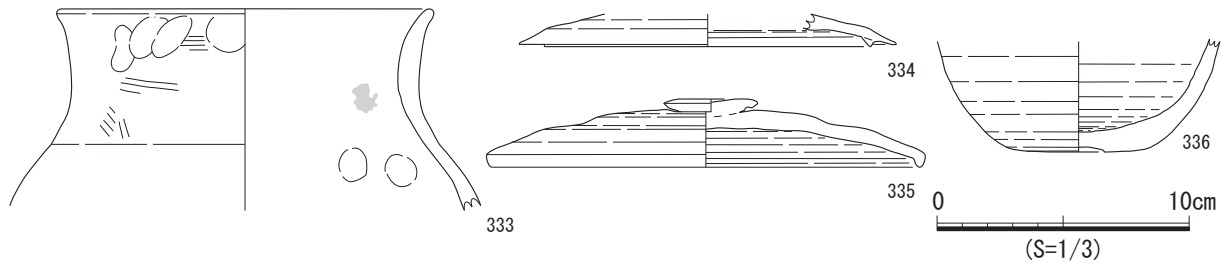


図 186 SI22 出土遺物

N-69° -Eである。

埋土 埋土は5層に分層したが、削平が激しく残存状態は他の堅穴建物と比較して悪い。1層と3層にIV層ブロック土が混入することから、人為堆積の可能性が高い。なお、4層とした堆積は西壁近くにも部分的に堆積するもので、焼土ブロックを含むことから、カマドの痕跡の可能性が考えられる。また、5層は西壁外側にも広がっており、カマドの一部である可能性がある。

壁 壁面は比較的直線的に立ち上がり、壁の残存高は最大で0.20mである。

床面 ほぼ平坦であるが、貼床層は確認できなかった。床面で検出した遺構は柱穴3基、土坑9基である。堅穴内の位置関係からは柱穴を判断できないが、埋土に柱痕跡状の堆積が認められるものが、P01・P02・P03の3基である。このうちP01とP03は対角線上に位置することから、柱穴となる可能性が高い。他には掘方が浅い性格不明の土坑を検出した。

カマド 掘方や構造物等は確認できなかったが、埋土4層・5層とした堆積は、カマドの痕跡である可能性が考えられる。

床下 掘方整地層は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土師器甕、須恵器坏・蓋・甕・壺が散在して出土した。また、P01・P10から土師器甕、須恵器坏・蓋が出土した。

出土遺物 333は頸部が直線的で口縁端部が外反する土師器甕で、胴部にふくらみを持つ。334は口縁部内面に返りを持つ須恵器蓋で、7世紀後葉のものと思われる。335は口縁端部が短く屈曲する須恵器蓋で、天井部にボタン状の摘みを付ける。7世紀後葉のものと思われる。336は須恵器壺の底部である。

時期 出土遺物から7世紀後葉であると考えられる。

SI23 (図 187～図 189)

検出状況 平坦面④にあたるEE12～EF13グリッドの緩斜面に位置し、IV層の上面で検出した4.68m×4.34mの堅穴建物である。SZ09墳丘部を削平し、SI24やSI28、SK152と重複する。当初の検出状況では、SI23、SI24、SI28、SK152の4つの遺構を同一の遺構と判断し、四分割して掘削を開始した。掘り下げるに従い底面に段差が生じ、同一の遺構とは考えられない状態となったため、土層堆積状況を精査したところ、4基の遺構が重複しているものと判断した。この土層観察によりSI28が最も新しく、次にSK152、SI23、SI24の順に古くなることを確認した。なお、SZ09は墳丘をこれらの遺構により削平されていることや、周溝との重複状況からさらに古いものと判断した。SI23は、北壁にカマドが付属することや4本の支柱穴を検出したことから堅穴建物と判断した。平面形状は方形で、建物の長軸はN-12° -Wである。なお、複数の遺構を同一のものとして掘削したことにより、壁面は掘

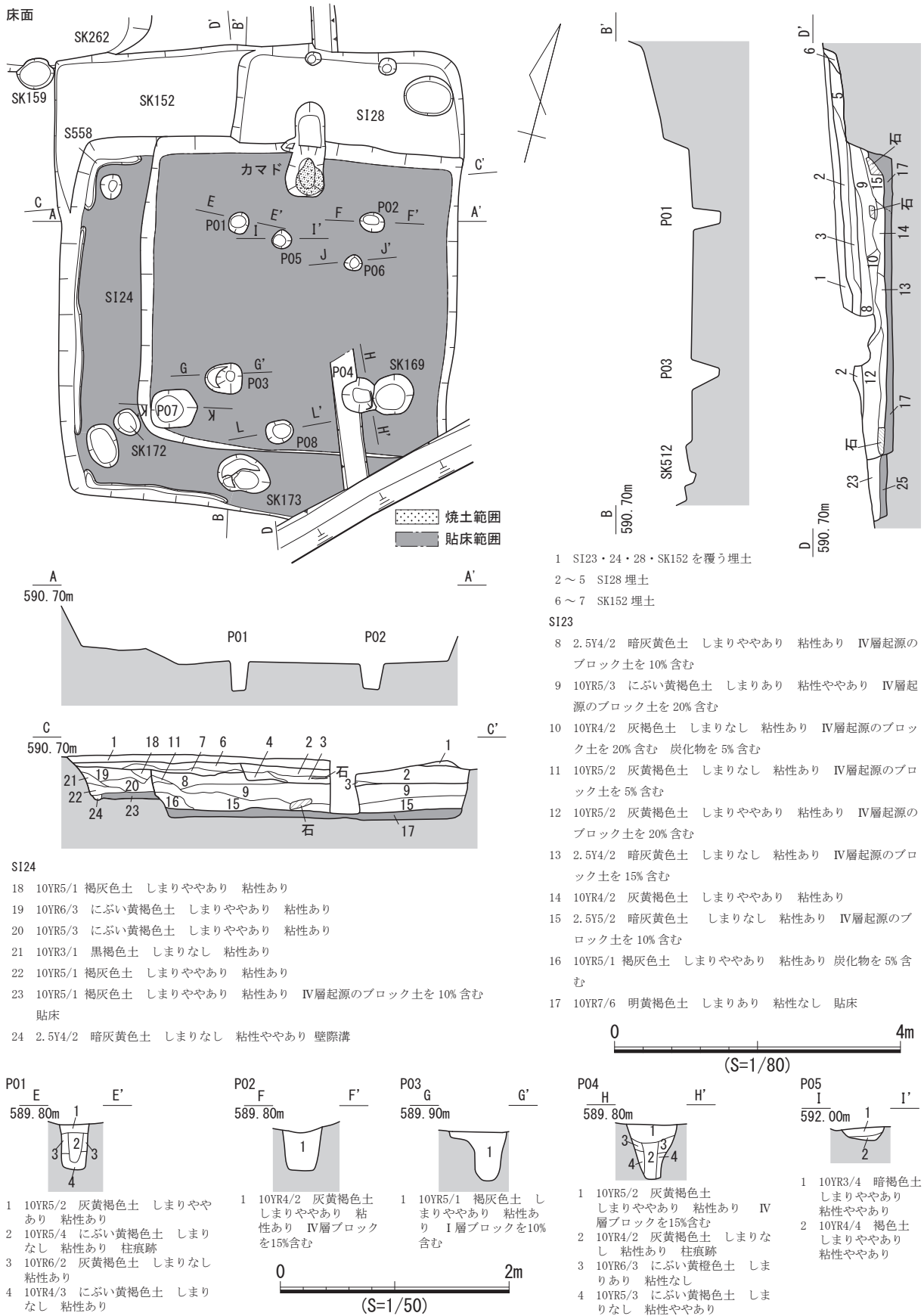


図 187 SI23 遺構図 (1)

掘り過ぎてしまっている。

埋土 埋土は9層に分層した（土層図8層～16層）。掘方底面は比較的平坦で、最下層の17層はしまりがあり、貼床層と思われる。15層と16層は北壁際に堆積した土層で、内部にまで広がらず、中央から南側は、13層と14層が17層上に堆積する。その後、南側から中央、そして北側へ順に土層が堆積しており、これら埋土中には、IV層起源のブロック土が多く含まれることから、人為堆積の可能性

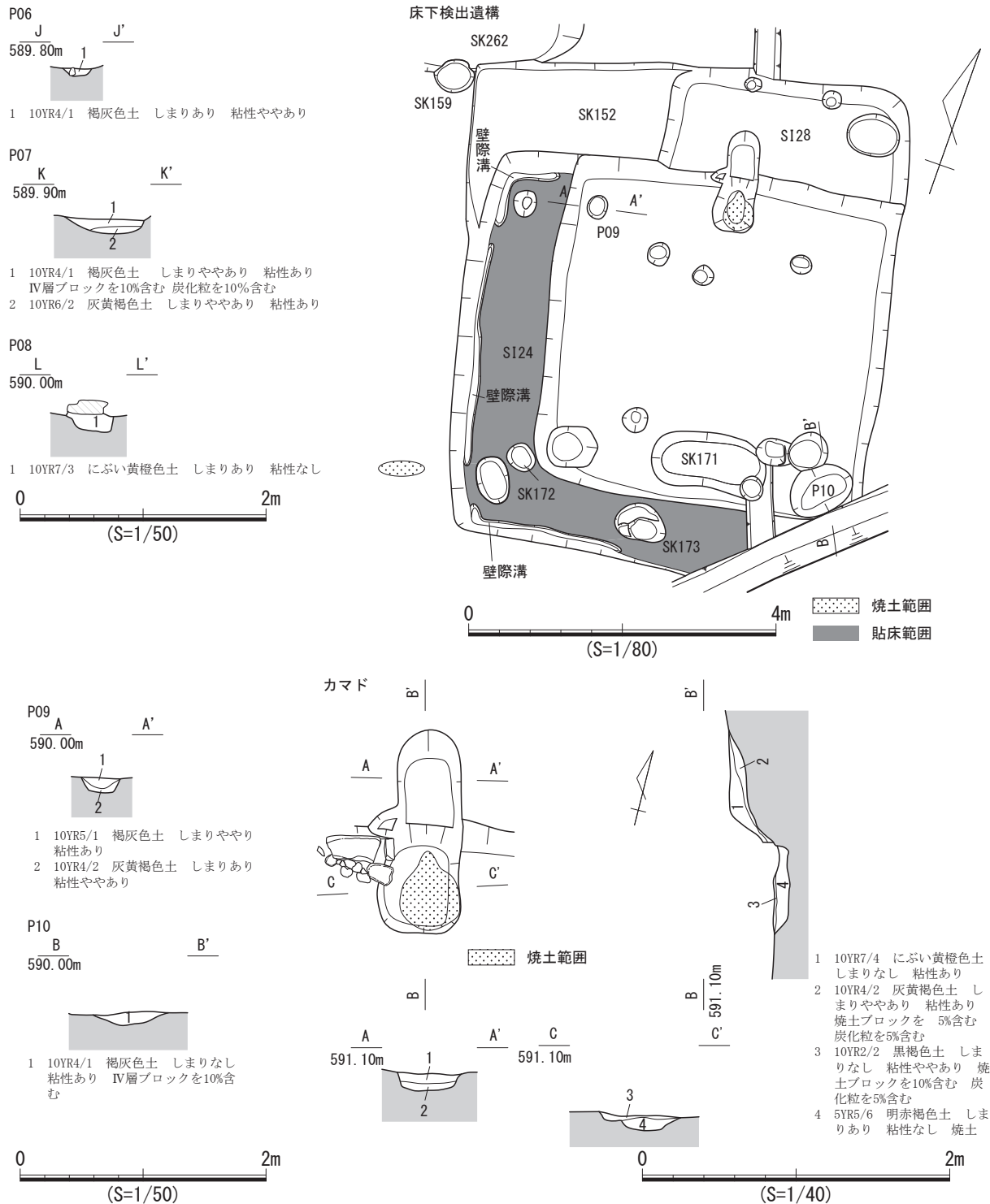


図 188 S123 遺構図 (2)

が高い。図示した土層断面図では、SI24 や SI28、SK152 も合わせて示したが、SI24 埋土にはIV層起源のブロック土が含まれていないが、ほかの遺構の埋土には多く含まれている。なお、最終的に堆積した1層は、これら4基の遺構を覆うように堆積していた。

壁 ほぼ直線的に立ち上がり、壁の残存高は最大で 0.52m である。西壁及び南壁は SI24 との重複関係の把握が遅れたため、一部掘り下げてしまっている。

床面 ほぼ平坦で、貼床層が全体にわたって残存する。床面で検出した遺構は柱穴4基、カマド1基、土坑4基である。竪穴建物内の四隅に、方形に配置された P01～P04 を柱穴とした。いずれも貼床層上面で検出したものであるが、P04 は SK169 の削平を受けており、SK169 は SI23 埋没後に掘削された可能性がある。P05～P08 は、浅い性格不明な土坑である。

カマド 北壁中央で検出したが、北側に浅く煙道部が残存する。袖部や天井部は確認できず、カマドの平面形は南北に長い楕円形に残存していた。カマドの掘方は、燃烧部分を浅い皿状に窪ませ、燃烧部の西側に袖部芯材と思われる板状の角礫が出土した。また、煙道部上面は SI28 による削平で確認で

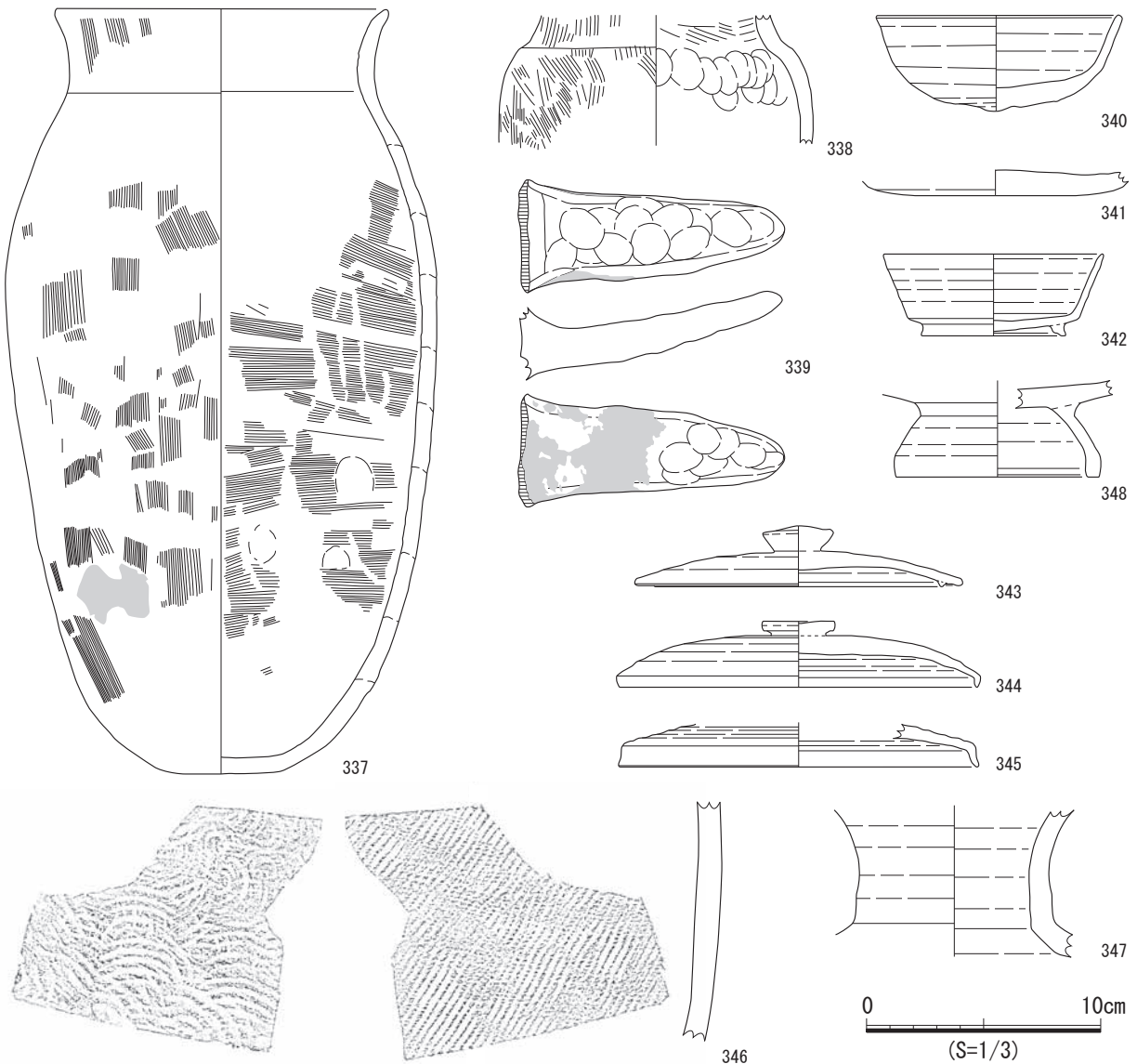


図 189 SI23 出土遺物

きなかったが、竪穴掘方外部に延びていた。カマド袖部、天井部などの構築材は確認できなかったことから、竪穴建物廃棄の際に解体した可能性が考えられる。

床下 貼床を除去後に土坑2基を検出したが性格不明である。なお、他にもSI24の柱穴3基、SI24の柱穴よりも古い土坑1基を検出した。

遺物出土状況 カマド東脇から土師器長胴甕(337)、カマド内から土師器把手(339)が出土したほか、土師器甕や甗、須恵器坏・蓋・甕・壺などが埋土中から散在した状態で出土した。

出土遺物 337は土師器長胴甕で、胴部の張りが弱く頸部から口縁部がやや外反する。口縁部から胴部上半の二分の一ほどを欠損している。338は土師器甕で、頸部と胴部の境に段を持つ。339は土師器甕の把手部分。胴部接合部分から全体の約半分にタール状のものが付着している。340と341は無台の須恵器坏で、340は7世紀後葉の在地系で、厚みのある底部から緩やかに開き直線的な口縁部に至る。341は底面のヘラ削り痕が確認できる。342は高台を持つ須恵器坏である。底面から口縁部にかけて直線的に開く。高台は内面側を窪ませ、外面端部を尖らせる。343は須恵器蓋で、摘み宝珠形に近い摘みと口縁部内面に返りが付く。344は須恵器蓋で、ボタン状の摘みが付き、口縁端部は短く屈曲する。345は須恵器蓋で、口縁端部を屈曲させてやや外反する。表面にロクロ目状の複数の浅い段が見られる。346は須恵器甕の胴部で、外面に格子のタタキ目と、内面に同心円の当て具痕が残る。347は須恵器壺の頸部で外面に自然釉が付く。348は須恵器の盤と思われるが、平坦な底部に長く内湾する高台を付ける。

時期 出土遺物から7世紀後葉から8世紀初め頃と考えられる。

SI24 (図190)

検出状況 平坦面④にあたるEE11～EF13グリッドの緩斜面に位置し、IV層の上面で検出した5.10m×4.76mの竪穴建物である。当初の検出状況はSI23で述べたとおりであるが、SI23やSI28、SK152よりも古いと判断した。大半をSI23により削平されているが、貼床層と思われる堆積や柱穴を検出したことから、竪穴建物と判断した。平面形状は方形で、建物の主軸はN-9°-Wである。

埋土 SI23により大半が削平され、西部と南部の堆積状況が確認できただけである。埋土は7層に分層したほか、貼床層や壁際溝埋土を確認した。

壁 やや開きながら直線的に立ち上がり、壁の残存高は最大で0.44mである。北壁及び東壁はSI23により削平されていると思われるが、平面形状からはほぼ同じ位置に壁面が存在していた可能性があると思われる。

床面 ほぼ平坦で、貼床層が残存する。床面で検出した遺構は、柱穴1基、土坑3基であるが、SI23貼床層除去後に配置状況からSI24の柱穴と考えられる遺構を3基検出した。これらの柱穴(P01～P04)は、竪穴建物内の四隅に方形に配置される。P05～P07は性格不明の浅い土坑である。

カマド 掘方や構造物は確認できなかった。

床下 貼床を除去後あらたな遺構は検出しなかった。

遺物出土状況 土師器甕と須恵器坏・蓋・高坏・甕・壺、紡錘車が、埋土中から散在した状態で出土した。

出土遺物 349は土師器甕の胴部片で、中位が張る。350は須恵器高坏の脚部で、脚裾部は外反して開き、端部は下方に屈曲する。351は凝灰岩製の紡錘車で中央に穿孔があり、表裏面に擦り跡と側面に

ケズリ痕が見られる。

時期 出土遺物から7世紀後葉から8世紀初めと考えられる。

SI25 (図 191~図 195)

検出状況 平坦面⑤にあたる EG8~EI10 グリッド、IV層の上面で検出した一辺 9.60m×8.84mの大型
 竪穴建物である。礎石建物 (SB04) の基壇下に位置する。当初はC-C' とD-D' を中心軸とした隅
 丸長方形のプランを検出し、土層観察用畦を設定した。埋土を掘削し床面を検出している途中で、SI26
 がSI25の貼床を掘削していると判断し、新たに確認したSI26がSI25よりも新しいと考えた。SI27

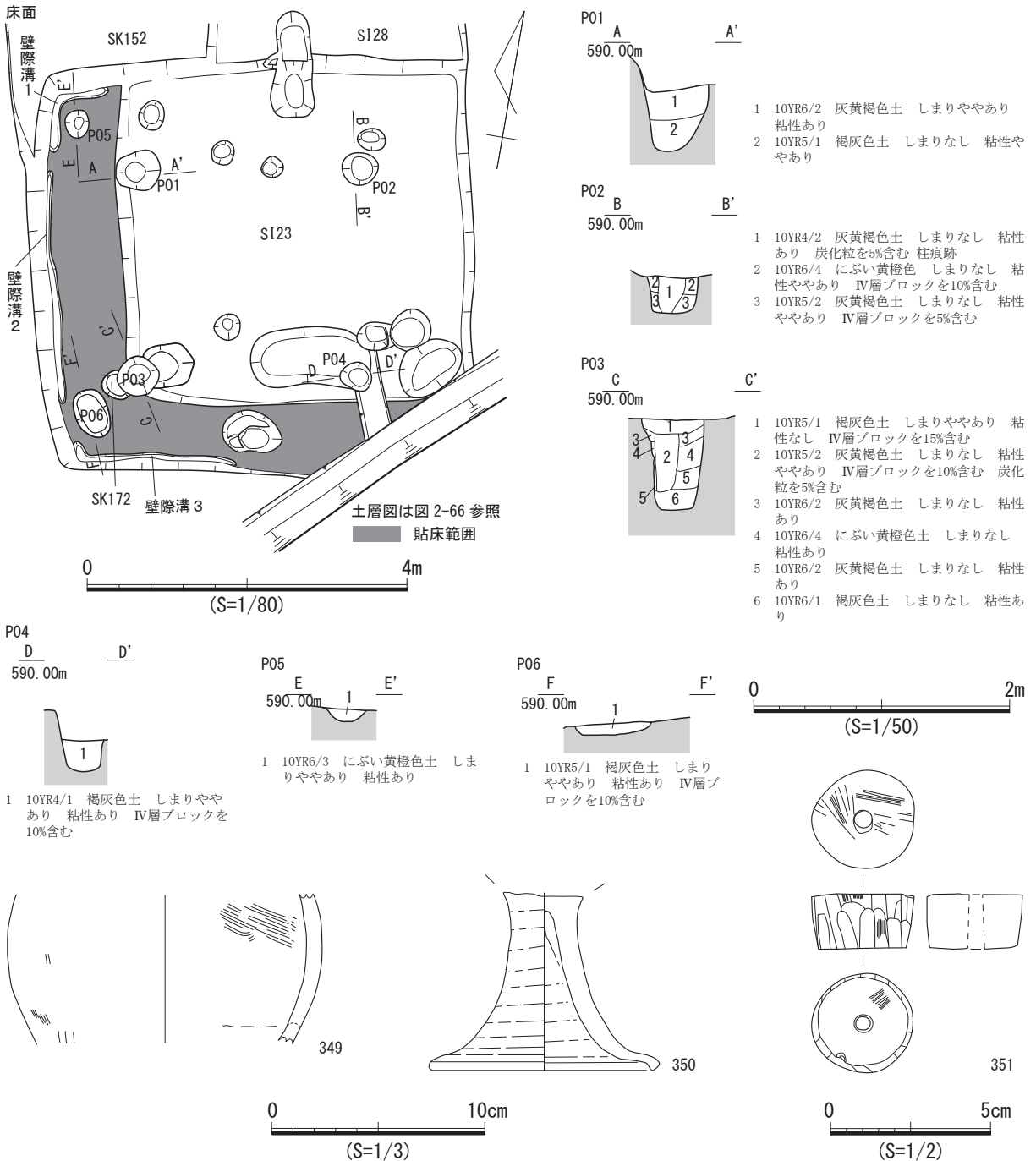
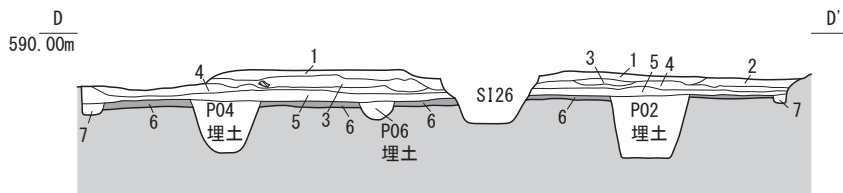
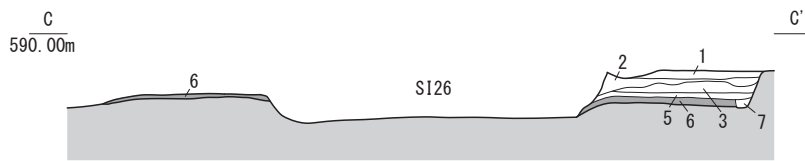
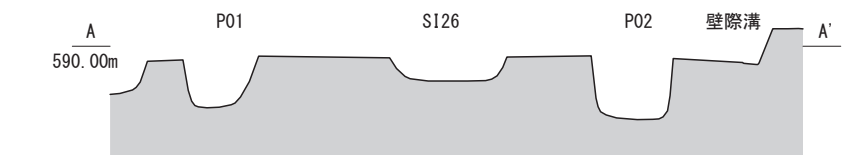
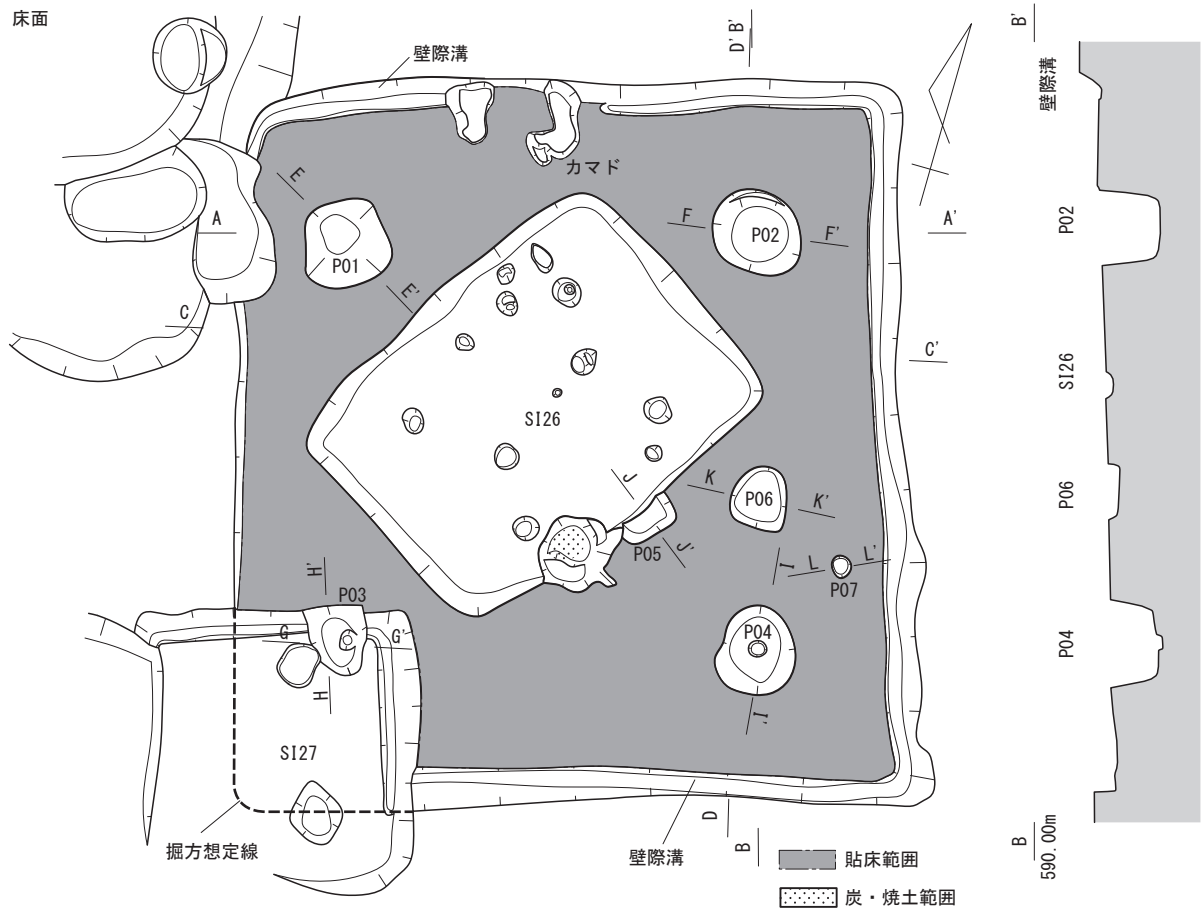


図 190 SI24 遺構図、出土遺物



- 1 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 2 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1cmのIV層ブロックを3%含む
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを3%含む
- 5 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 6 10YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 貼床層
- 7 10YR3/3 暗褐色土 しまりややあり 粘性なし 壁際溝

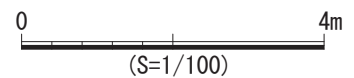


図 191 SI25 遺構図 (1)

はSI25との重複関係を見誤り、SI27を先行して掘削したが、SI25の南西隅に位置するP06がSI27埋土を掘削していることが判明したため、最終的にSI25が新しいと判断した。平面形は、四辺がほぼ直線状の方形で、長軸の方位はN-15°-Wである。

なお、この竪穴建物は、SI25と同様に大型で柱穴規模が大きい。また、埋土中からではあるが、瓦や螺髪など仏堂に関連するような遺物が出土していることから、居住のための施設ではなく宗教的な性格を持つ施設である可能性が考えられる。

埋土 埋土は5層に分層し、その下層には貼床層と判断した6層が床面全体で確認できた。埋土の上部と下部には褐色土、その中間部ににぶい黄褐色土がほぼ水平に堆積し、部分的にIV層ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

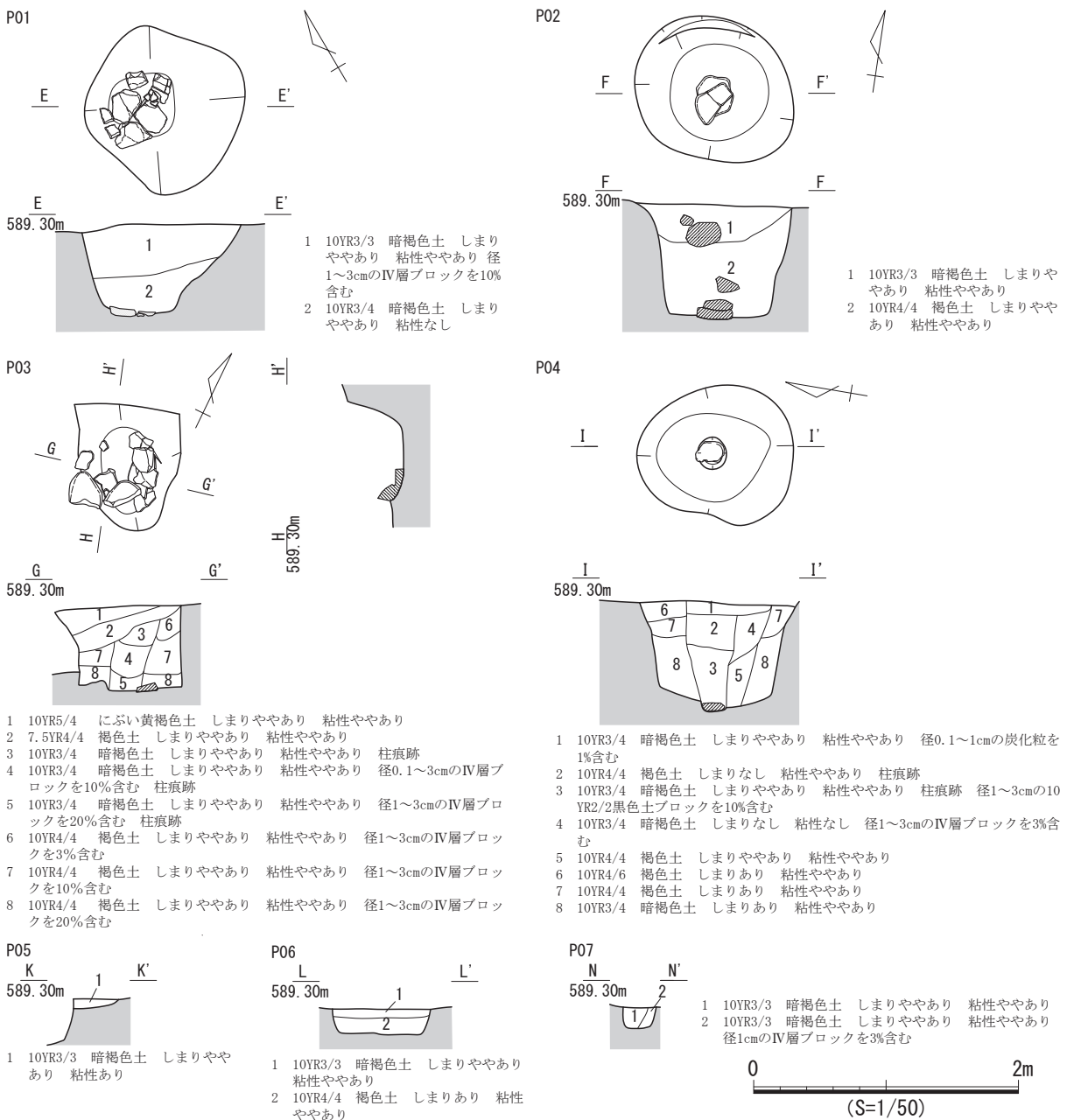


図 192 SI25 遺構図 (2)

壁 壁面は概ねやや開くが、一部直立する。壁の残存高は最大で 0.48mである。なお、西辺を除き、床面の壁際では壁際溝を検出した。

床面 平坦である。床面で検出した遺構は柱穴 4 基、土坑 3 基、壁際溝 1 条、カマド 1 基である。竪穴内の位置関係と底面に礎板状の礫が置かれていたことから P01～P04 を柱穴と判断した。礎板状の礫は、P01 では 10 個程の角礫の平坦面を上にして底面を覆うように設置し、P02 では扁平な円礫を 2 枚重ねて設置し、P03 では角礫を底面外周に柱を囲むように設置し、P04 では柱穴底面中央に扁平な小角礫 1 個を設置している。柱穴内から出土した角礫はそれぞれ異なる状況を示し、柱痕跡が確認できるものとできないものがある。他に性格不明の浅い土坑を南東部で 3 基 (P05～P07) 検出した。

カマド 北壁中央のやや西寄りで見出した。袖部は床面上に構築しているが、煙道部は北壁に若干の

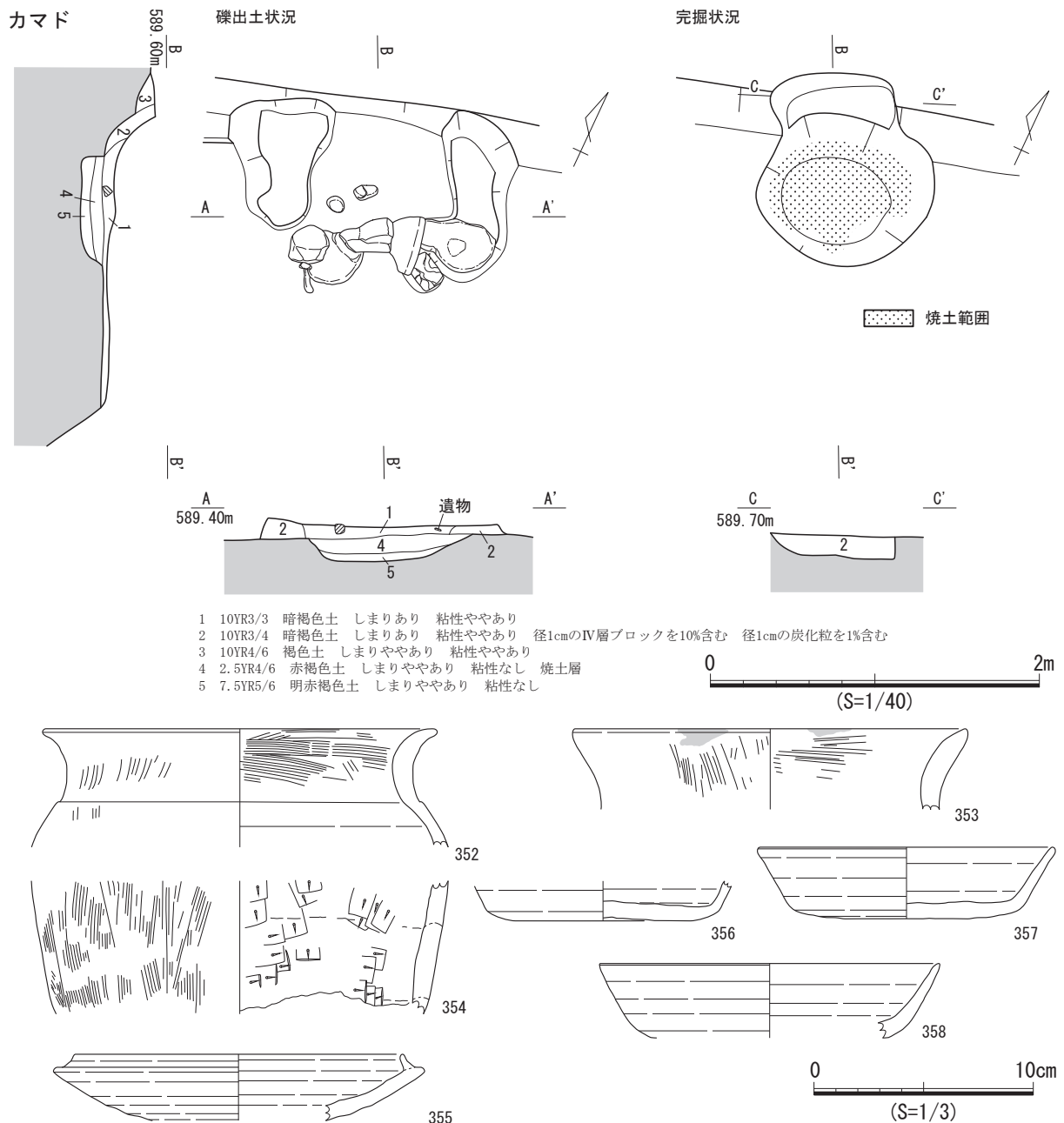


図 193 SI25 遺構図 (3)、出土遺物 (1)

凹みを検出したものの、それ以上は確認できなかった。カマド内は袖部を除き3層に分層したが、このうち4層が燃焼部の焼土と考えられる。袖部は、上部から天井部が確認できなかった。カマド前面の焚口付近に集積する礫は、これら天井部や袖部の芯材と考えられ、建物破棄時に解体したと考えられる。

床下 掘方貼床除去後に掘方底面を精査したが、遺構は確認できなかった。

遺物出土状況 カマド周辺と東面を中心に土師器高坏、甕、壺、須恵器坏・蓋・甕・壺、土製品、金属製品、石器が散在した状況で出土した。また、P01で須恵器坏・蓋、P02で坏、カマドでは土師器甕、須恵器坏・蓋・甕が出土した。

出土遺物 352～354は土師器甕である。352は頸部と胴部の境に段を持ち、口縁部が強く外反する。353は頸部が外反し、354は胴部の張りが弱い。355は須恵器坏身で、口縁部は短く内傾し、受け部は短い。356と357は無台の須恵器坏で、直線的な口縁部が開く。358は須恵器坏で直線的な口縁部が開く。359と360は口径が小さい無台の須恵器坏で、口縁部は直線的に開く。361～363は須恵器蓋で、口縁部内面に返りを持ち、361と362はボタン状の摘みを持つ。363は口縁端部が屈曲する須恵器蓋である。364は須恵器甕の口縁部で、口縁端部が下方に拡張される。365は猿投産の須恵器甕で、外面に格子状のタタキ目が残る。366は須恵器甕で、外面に平行タタキ目残り、内面をナデ調整している。367と368は須恵器壺の底部、369は須恵器壺の肩部と思われる。370は平瓦片で、凸面は格子のタタキ目、凹面には布目痕が付き、SB04-P02出土瓦と同じ系譜のものと思われる。371は焼成の甘い

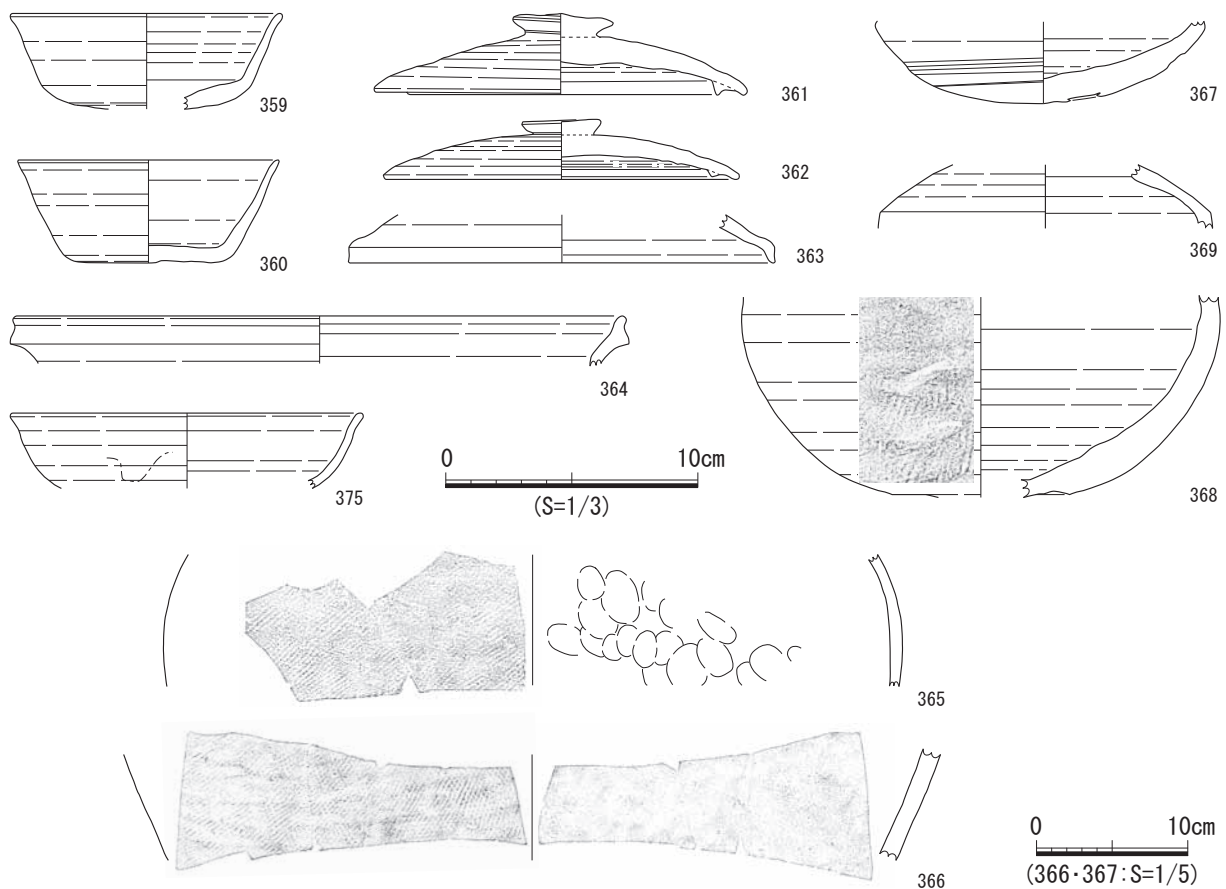


図 194 SI25 出土遺物 (2)

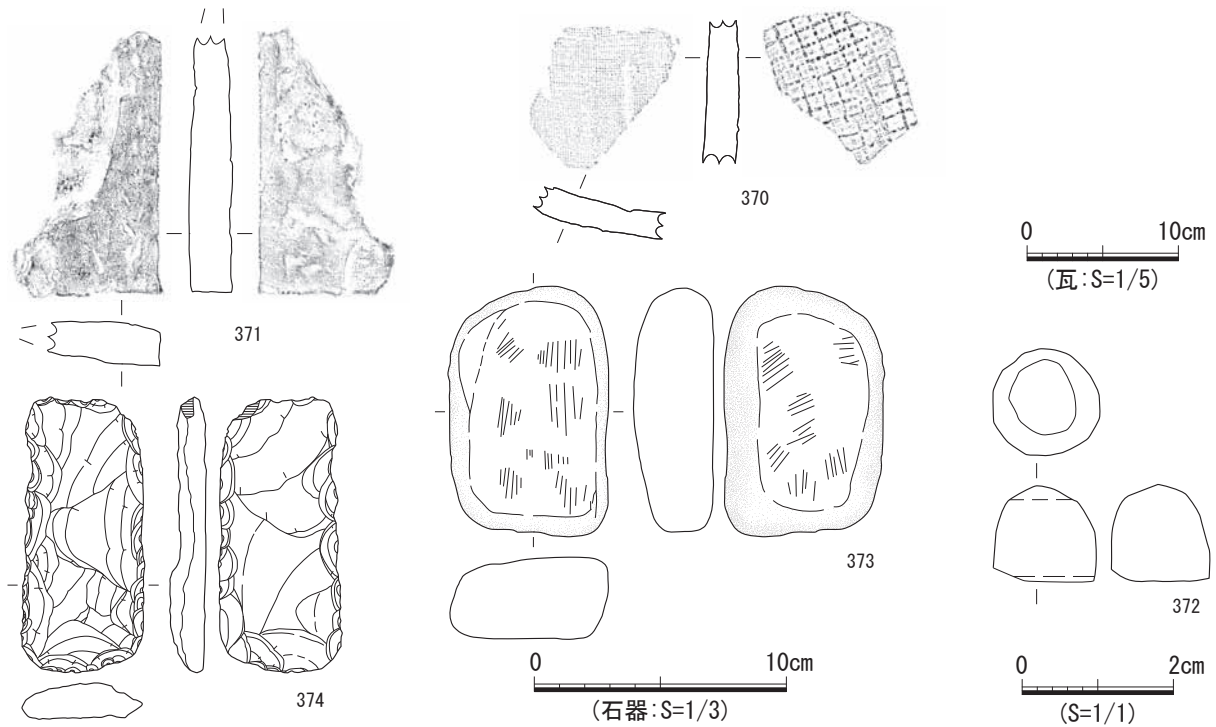


図 195 SI25 出土遺物 (3)

熨斗瓦で、出土した瓦では最も多く出土した種類である。甘い桶巻き技法により製作され、切り離した後側面と凹面をへら削りで丁寧仕上げている。372 は埋土1層から出土した螺髪で、包含層出土の512とあわせて2点出土した。螺髪を特徴とする仏像は「阿弥陀如来」か「薬師如来」に限定され、いずれかの仏像のものと考えられる。373 は砥石で、一方の平坦面は擦痕が長軸方向に付き、もう一方の面は不規則に付く。374 は短冊形の打製石斧である。375 は灰釉陶器の小碗で、b層から出土したが混入の可能性はある。

時期 SI26 との重複関係や、遺構埋土から出土した須恵器から8世紀前葉頃と思われる。

SI26 (図 196～図 199)

検出状況 平坦面⑤にあたるEG8～EH9グリッド、SI25床面で検出した5.20m×4.06mの竪穴建物である。SI25の床面で主軸の方向が異なる方形プランを検出し、SI25の貼床を削平していること、SI25土層観察用畦でSI25埋没後に掘削されたSI26を確認したことから、SI26はSI25より新しいと判断した。本来ならば平面的に検出した段階で、SI26の土層観察用畔を新たに設置して掘削するべきであったがそれを行わず、SI25の土層観察用畔のみで堆積状況を観察したため、不十分な記録となっている。平面形は、四辺がほぼ直線状の長方形で、長軸の方位はN-36°-Wである。

埋土 SI26上面の埋土は誤ってSI25埋土と共に掘削したため記録できなかった。SI25床面で検出したSI26埋土を5層に分層したが、IV層起源のブロック土を含む土層があることから人為的に埋め戻された可能性が考えられる。6層は壁際溝埋土、7層は貼床層である。

壁 壁面はやや開き気味に立ち上がる。壁の残存高は最大で0.74mである。

床面 ほぼ平坦で、7層は全体にわたって残存しており貼床と判断した。床面で検出した遺構は柱穴4基、土坑9基、カマド1基である。竪穴内の位置関係からP01～P04を柱穴と判断した。建物内の柱穴の中心に位置する土坑(P09)は掘方が浅く、埋土内に角礫1点と焼土と炭化粒を僅かに含んでいた

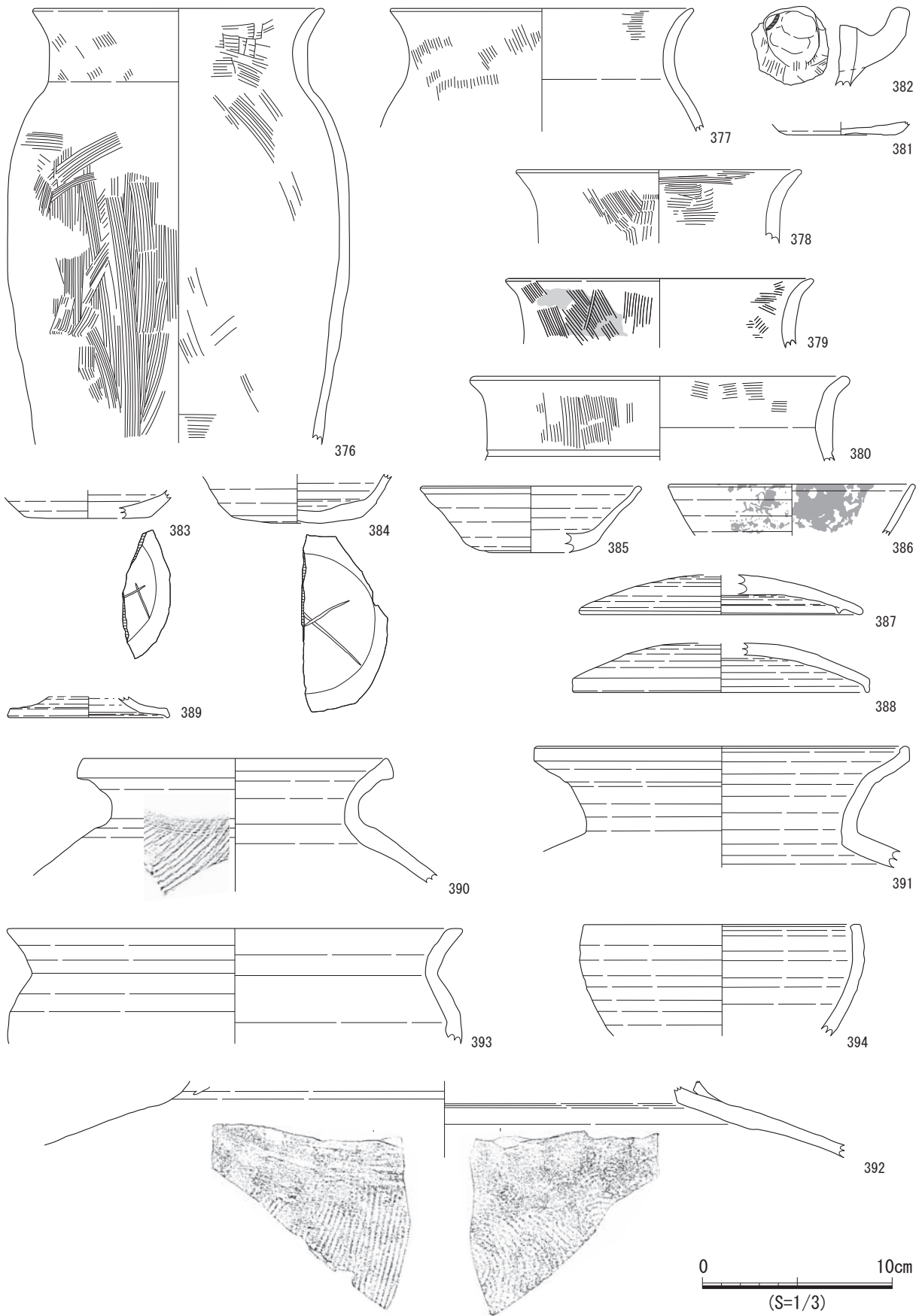


图 198 SI26 出土遺物 (1)

認できなかったことから、建物廃棄の際に解体した可能性が考えられる。

床下 貼床除去後に建物北側で土坑4基を検出した。このうち1基については、床面で検出した柱穴P02と同位置にあることから、掘り足りずに床面除去後に再度同じ柱穴を確認したものと判断し、同じ番号を付けた。北側中央の土坑2基(P14・P15)は掘方が浅く位置的な関連性も認められない性格不明の土坑である。

遺物出土状況 埋土中から土師器甕、須恵器坏・蓋・甕・壺、瓦、金属製品、石器が散在した状況で出土した。また、堅穴内のP09・P10・カマドから土師器甕(377)、須恵器坏・蓋が出土した。

出土遺物 376~380は土師器甕である。376は上胴部の張りが弱く、頸部が直立した後、口縁部が外反する。377は頸部から口縁部が外反する。378~380は、口縁部が緩やかに外反し、380の頸部には1条の沈線が巡る。381はロクロ土師器の底部片である。382は土師器甕の把手である。383~385は7世紀後葉の無台の須恵器坏で、383と384には底部外面に「×」状のヘラ記号が刻まれている。385は底面が厚く口縁部が大きく開く。386は須恵器坏で直線的な口縁部がやや大きく開く。内外面に漆と思われる付着物がある。387と388は須恵器蓋で、387は口縁部内面に返りを持ち、388は口縁端部が屈曲する。389は小型の須恵器高坏の脚部で、脚裾部が大きく開き、端部が屈曲する。390は須恵器甕で頸部がく字状に屈曲して口縁端部が肥厚する。391は頸部が屈曲して口縁部は外反して開き、口縁端部が上方に屈曲する。392は須恵器甕である。393は須恵器甕で頸部がく字状に屈曲するが、口縁部が短く鉢状の器形と思われる。394は須恵器の鉄鉢形土器で、外面のロクロ調整痕が際立つ。395と

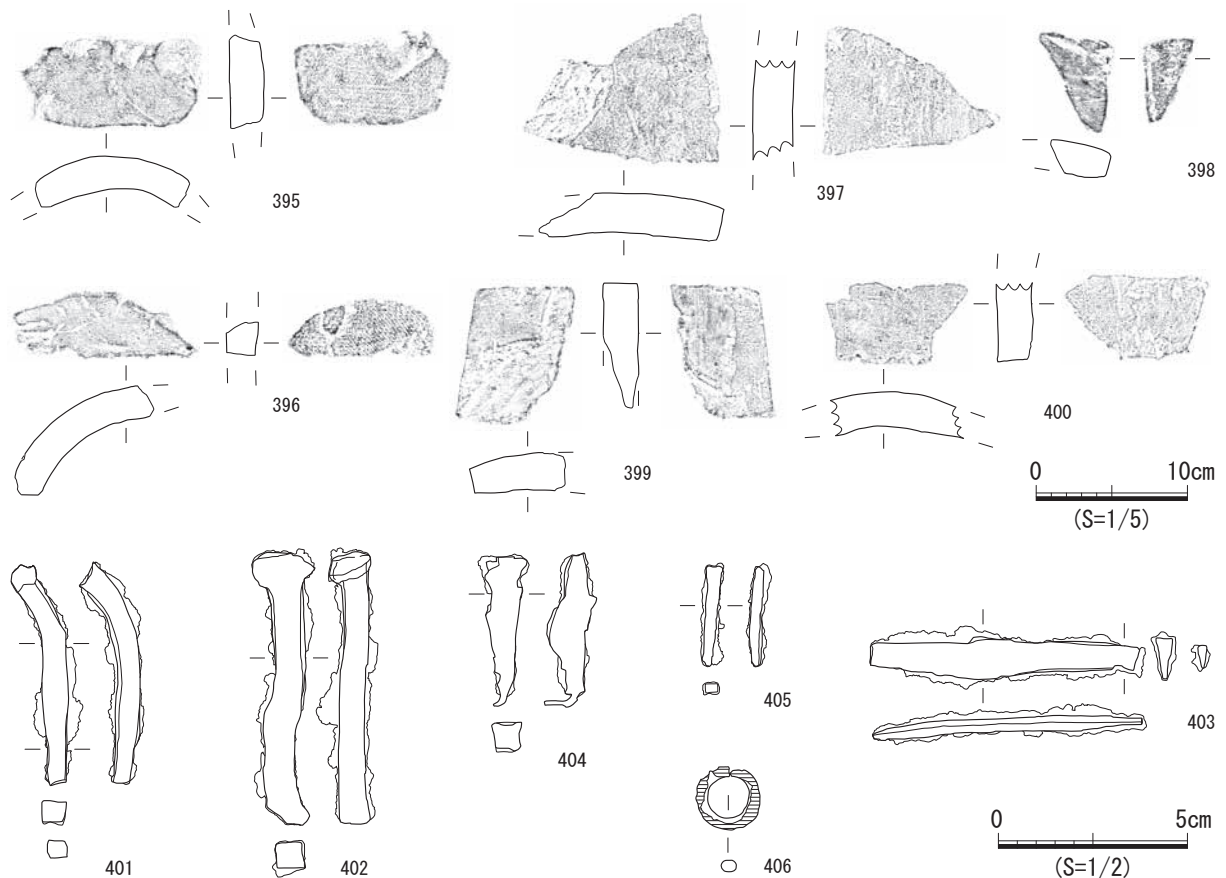


図199 SI26出土遺物(2)

396 は丸瓦で、凹面に布目痕が残る。397~400 は熨斗瓦である。401 は切釘で先端部が欠損している。402 はT字形を意識した犬釘である。403 は刀子で両端が欠損している。404 は頭頂部がT字形の釘の可能性があり、全体に木片が付着する。405 は釘の先端部の可能性が考えられる。406 は小型の耳環である。

時期 遺構埋土から出土した遺物から8世紀前葉と思われる。

SI27 (図200・図「201)

検出状況 平坦面⑤にあたるEH8~EI9グリッド、IV層上面で検出した3.54m×3.40mの竪穴建物である。礎石建物の基壇下に位置する。SI25掘削時に床面を見誤って先行して掘削したが、北東角に位置する遺構がSI25の柱穴であり、当遺構を掘削することが判明したため、SI25が新しいと判断した。平面形は、西辺から南辺にかけて後世の削平等によりなくなっているが、残存する辺から方形と思われる。長軸の方位はN-76°-Eである。

埋土 3層に分層したが、ほぼ水平に堆積する。3層にIV層起源のブロック土が混じることから人為的

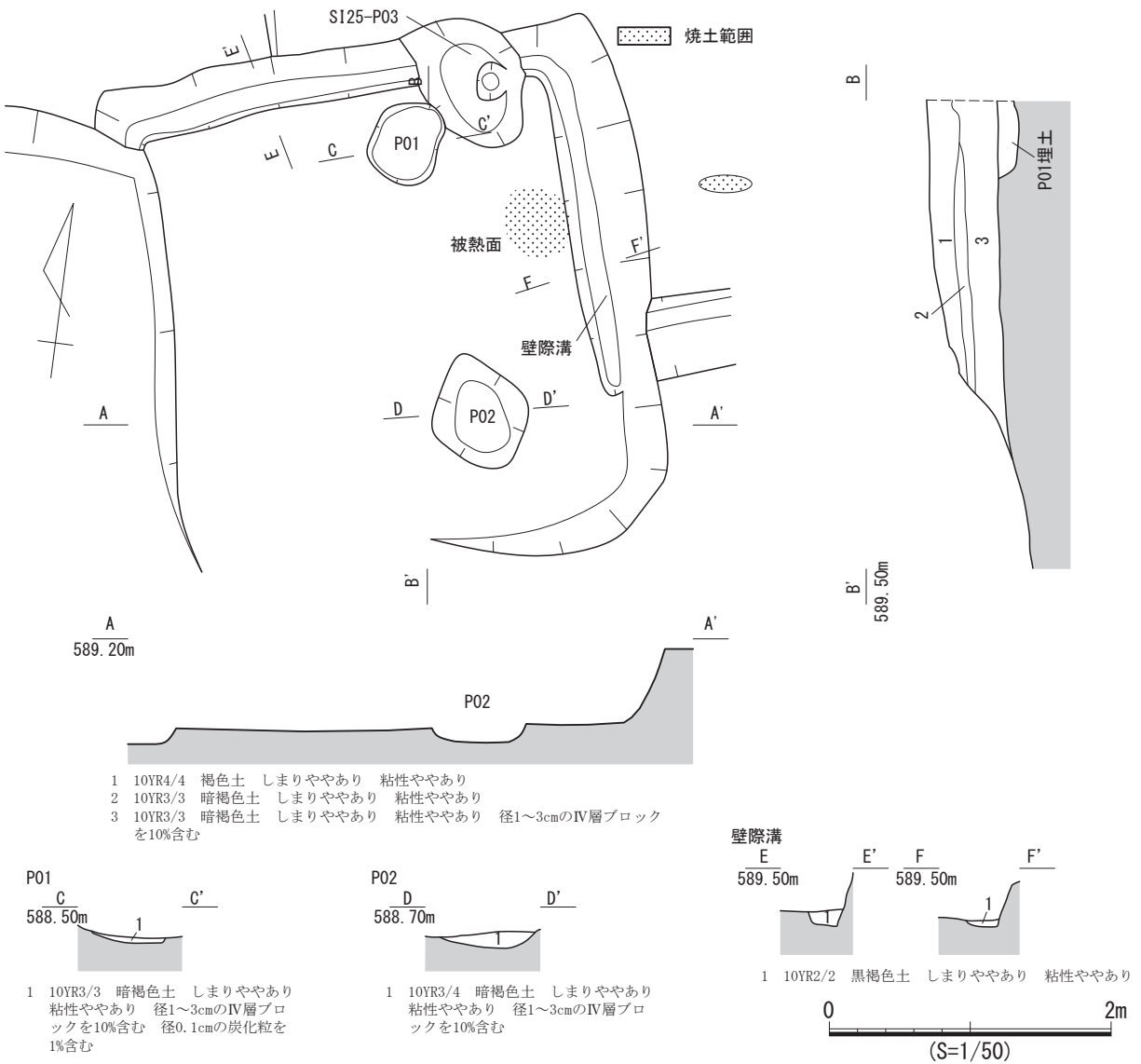


図200 SI27遺構図

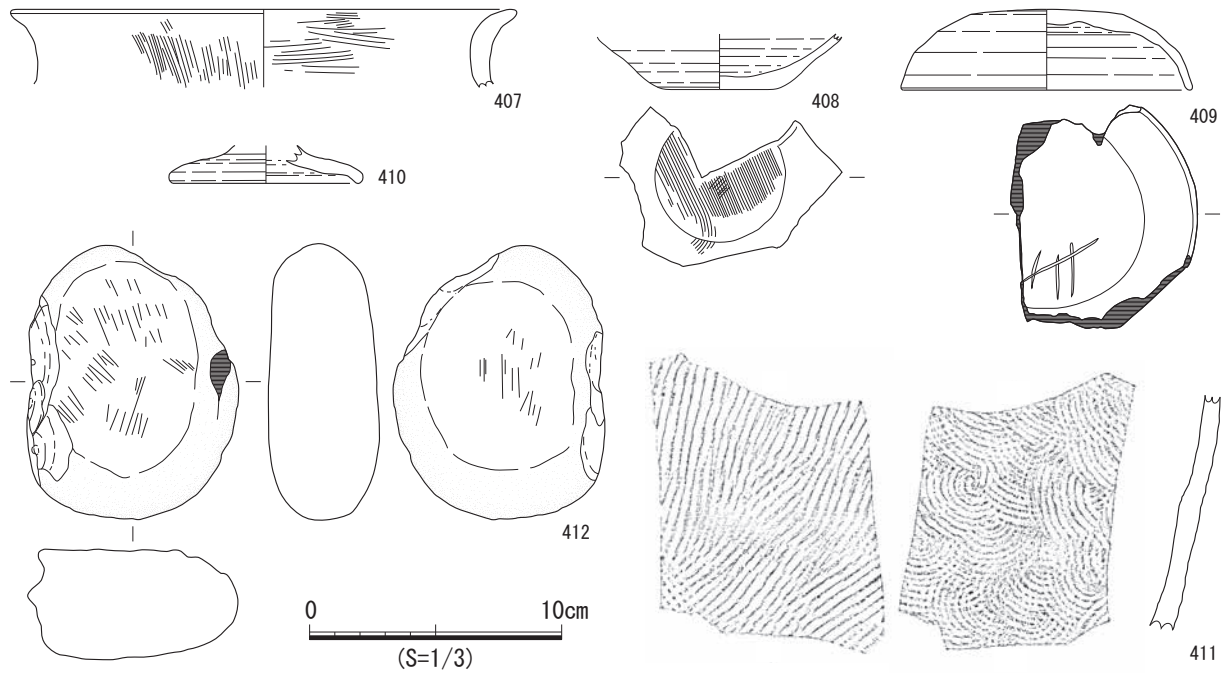


図 201 SI27 出土遺物

に埋め戻された可能性がある。

壁 壁面はほぼ直立する。壁の残存高は最大で0.48mである。

床面 ほぼ平坦であるが、貼床は確認できなかった。床面で検出した遺構は土坑2基、壁際溝1条である。床面で検出したP01・P02は非常に浅く、床面での位置も柱穴とするのは難しい。壁際溝は北辺と東辺の壁際にある。

カマド 東壁中央やや北寄りでは被熱面を確認したが、カマド掘方や構築材等は確認できなかった。壁際溝の存在からカマドのような施設ではなく、地床炉のようなものと思われる。

遺物出土状況 土師器甕、須恵器坏・蓋・高坏・甕・壺が埋土中から散在した状況で出土した。また、東側の中央から砥石1点が出土した。

出土遺物 407は土師器甕で、口縁部が外反する。408は無台の須恵器坏で、底面外面にハケ目が残る。409は須恵器坏蓋で、天井部内面に「卅」に類似したヘラ記号が刻まれている。410は小型の須恵器高坏の脚部で、脚裾部が大きく開く。411は須恵器甕で、内面に当て具が残る。412は扁平な円礫を用いた砥石で、平坦な2面に擦痕が不規則に付く。

時期 出土した遺物から7世紀後葉と思われる。

SI28 (図 202・図 203)

検出状況 平坦面④にあたるEE12～EF13グリッドの緩斜面に位置し、IV層の上面で検出した3.20m×5.28mの堅穴建物である。当初の検出状況はSI23で述べたとおりであるが、SI23やSI24、SK152よりも新しいと判断した。四分割して掘り下げる過程で複数の遺構の存在を認識したため、SI23やSI24よりも新しい時期の遺構と判断したものの、遺構の全形は確認できなかった。南北方向の土層観察用畦からは、SI23埋土上部に埋土の堆積が確認できたことから、形状が南北方向に長い長方形となることが考えられる。土層図から考えられる床面はやや傾斜しており、SK152のような土坑とも考えられるが、北壁際で検出したP01とP02を柱穴と考え、堅穴建物として報告する。建物の長軸方向

はN-13° -Wである。

埋土 3層に分層したが、これらの上部に1層とした堆積がある。この堆積はSK152 上部にまで及んでおり、窪地状となった部分に堆積した土層と考えた。

壁 北面は急勾配で、西側が緩やかに立ち上がる。

床面 やや南に向かって傾斜する。床面では北壁際で柱穴と思われるP01とP02を検出した。対応する柱穴は、SI23埋土を調査の過程で掘削してしまったため、確認していない。また、性格不明の浅い土坑(P03)も検出した。

遺物出土状況 灰釉陶器碗・甕、ロクロ土師器、瓦が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 413~415はロクロ土師器の碗か皿で、413以外の見込み部分は窪み、413のみ内外面に漆

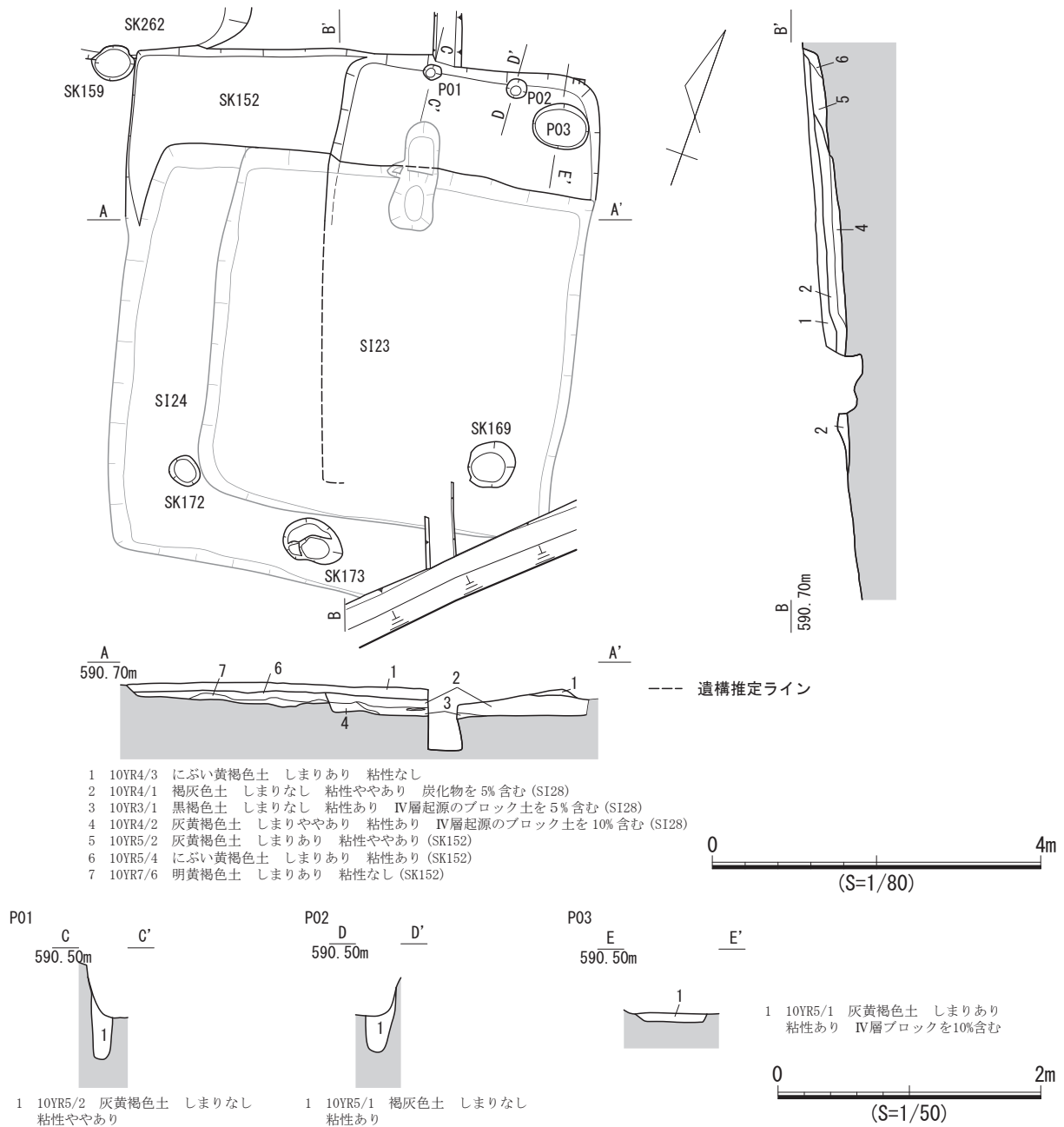


図202 SI28遺構図

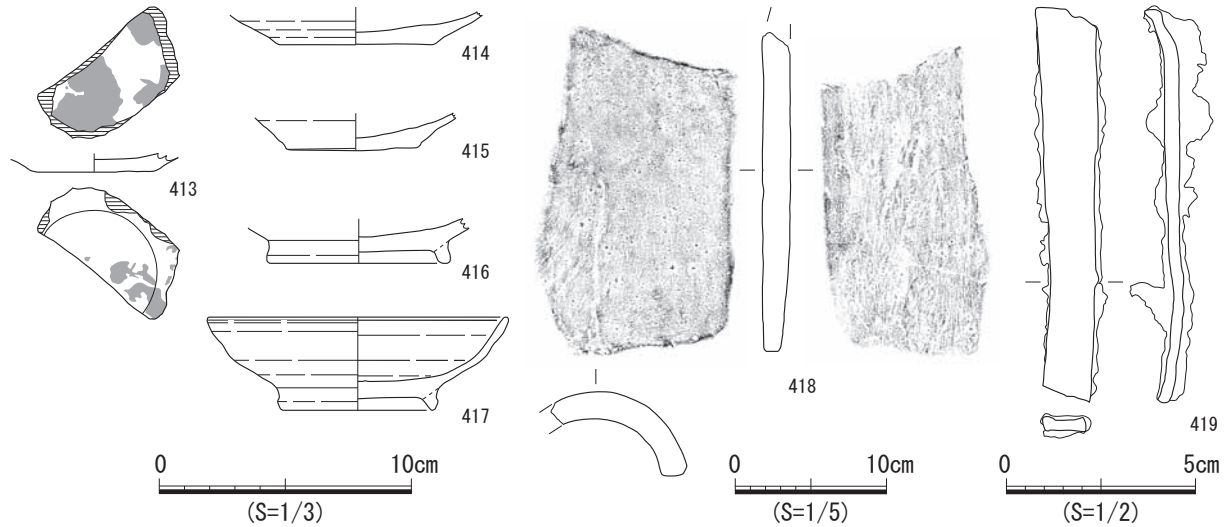


図 203 SI28 出土遺物

と考えられる付着物が認められる。底部外面には回転糸切り痕が残る。416 はロクロ土師器碗で、ハ字状に開く高台を付ける。内面と高台に薄く黒色の付着物が確認できる。417 は灰釉陶器小碗で、内面が直線的で外面に稜を持つ高台を付ける。体部にやや膨らみがあり、口縁部は直線的に開く。底部外面には回転糸切り痕が残る。418 は灰白色の焼成の甘い丸瓦で、凹面は磨耗が激しいため布目などの痕跡は見られない。筒状の型に粘土を貼り付け、切り離し後に凸面をナデ調整し、側面をヘラ切りする。SK183 や SK239 出土の丸瓦と同系である。419 は用途不明の板状の鉄製品である。

時期 出土した遺物から 10 世紀頃と思われる。

SI29 (図 204・図 205)

検出状況 BP8 グリッドの傾斜地に位置し、IV層の上面で検出した 4.26m×2.92mの竪穴建物である。SZ41 の周溝と重複し、出土遺物から SI29 が新しいと考えられるが、検出作業時には SI29 として把握することができず、周溝埋土の一部として掘削した。その後周溝の壁面で掘り込みを確認したため、再検出して範囲を確定した。以上のような経緯から、平面や土層記録の一部を残すことができなかった。平面形は南北辺が長い長方形で、建物の長軸はN-8°-Wである。

埋土 埋土は5層に分層した。いずれもIV層に類似する土で、1層～3層は基盤の傾斜とほぼ平行して堆積する。4層と5層は整地層の可能性もあるが、上記の経緯により残存状態が悪いため詳細は不明である。

壁 壁面は緩やかに立ち上がり、壁の残存高は最大で0.76mである。

床面 ほぼ平坦で、貼床は確認できなかった。床面で検出した遺構は柱穴4基、カマド1基、壁際溝1条である。断面は浅い窪み状であるが、竪穴建物内の四隅に方形に配置されたP01～P04を柱穴とした。埋土はP01のみ暗褐色土が認められ、他はIV層と類似する。壁際溝は北東隅と北辺西部で検出した。

カマド 北壁中央やや東寄りで検出した。斜面上方に当たる北側に煙道部が延びる。カマドの袖部や被熱は確認できなかった。

床下 整地層は確認できなかった。

遺物出土状況 須恵器1点・土師器1点が、埋土中に散在して出土した。横瓶(420)は、SZ41の周

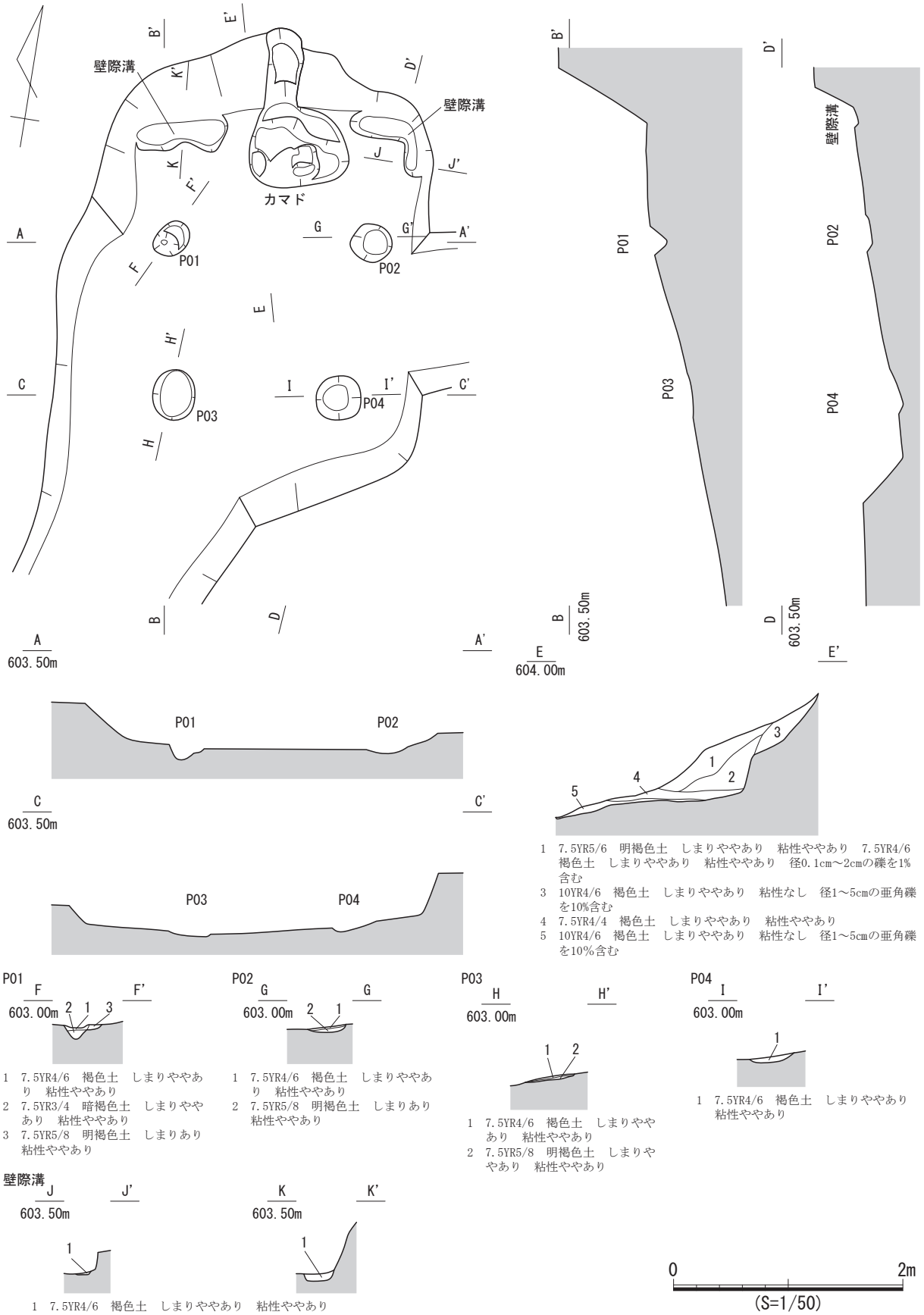


図 204 SI29 遺構図 (1)

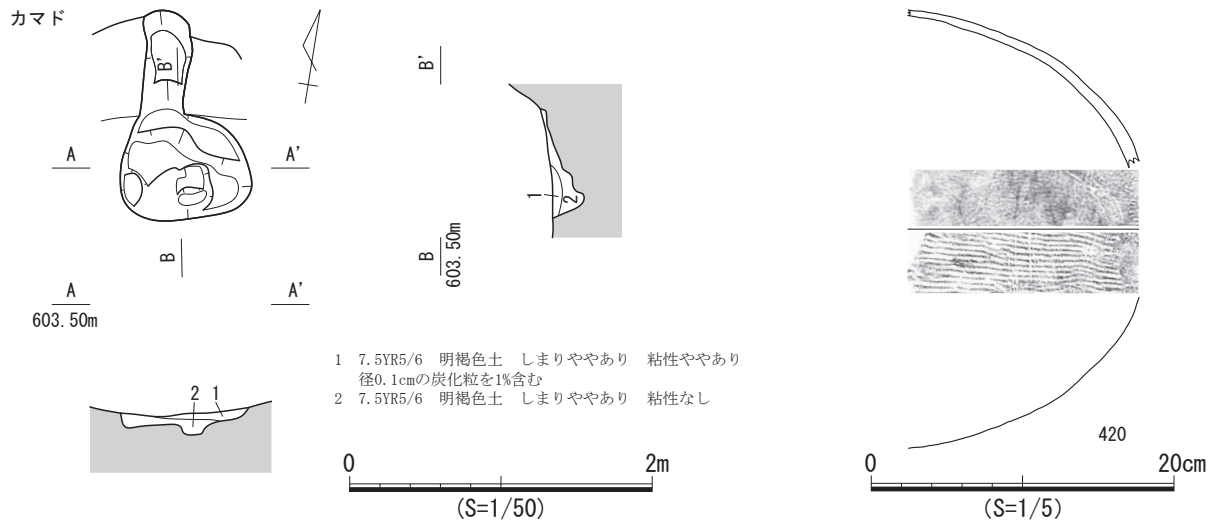


図 205 SI29 遺構図 (2)、出土遺物

溝の出土遺物として取り上げられたものと接合した。

出土遺物 420 は須恵器横瓶の体部破片である。外面を敲き調整した後、数条の平行な沈線を回らせており、カキ目を模した可能性がある。

時期 詳細な時期は不明であるが、出土遺物から斜面下の集落と同じ7世紀～8世紀の遺構と考えられる。

SI30 (図 206・図 207)

検出状況 BP9 グリッドの傾斜地に位置し、IV層の上面で検出した2.70m×2.54mの竪穴建物である。SZ41の墳丘下面の調査で確認したが、出土遺物はSZ41のものよりも新しいことから、本遺構の上層埋土がSZ41の墳丘盛土と類似するため、検出作業時に見落としたと考えられる。なお、SZ41の平面図(図87)では、本遺構を検出した位置の墳丘が窪んでいることが確認できる。平面形は正方形で、建物の長軸はN-5°-Eである。

埋土 竪穴掘方内の埋土は9層に分層したが、いずれの堆積もIV層に類似する。1層は非常に浅いが、除去後の2層上面で壁際溝や柱穴(P01～P04)を確認したことから、この面を床面と判断した。3層～6層は壁際溝の埋土、2層及び7層、8層は整地層と思われる。9層も整地層と思われるが、壁面際に堆積するだけであり、IV層を誤認した可能性もある。

壁 掘方の壁面は底面から緩やかに立ち上がる。壁の残存高は最大で0.24mである。

床面 ほぼ平坦で、硬化した貼床層はない。床面で検出した遺構は柱穴3基、壁際溝1条、性格不明の土坑1基である。竪穴建物内の隅に配置されたP01～P03を柱穴と考えた。壁際溝と重複しており、竪穴建物の機能時には壁際溝が埋まっていたと考えられる。壁際溝は竪穴内を全周しているが、北西隅が外側に張り出す。この部分では柱穴が確認できなかった。北西側は斜面上方にあたり、壁際溝が張り出すように掘削された理由は不明である。P04は壁際溝より古い遺構であるが、整地層より新しいため、本遺構と何らかの関係がある遺構と考えられる。

カマド 焼土面や構造物は確認できなかった。

床下 整地層を除去後、新たな遺構は検出できなかった。

遺物出土状況 縄文土器や土師器、須恵器が、壁際溝北西部を中心に散在した状態で出土した。図示

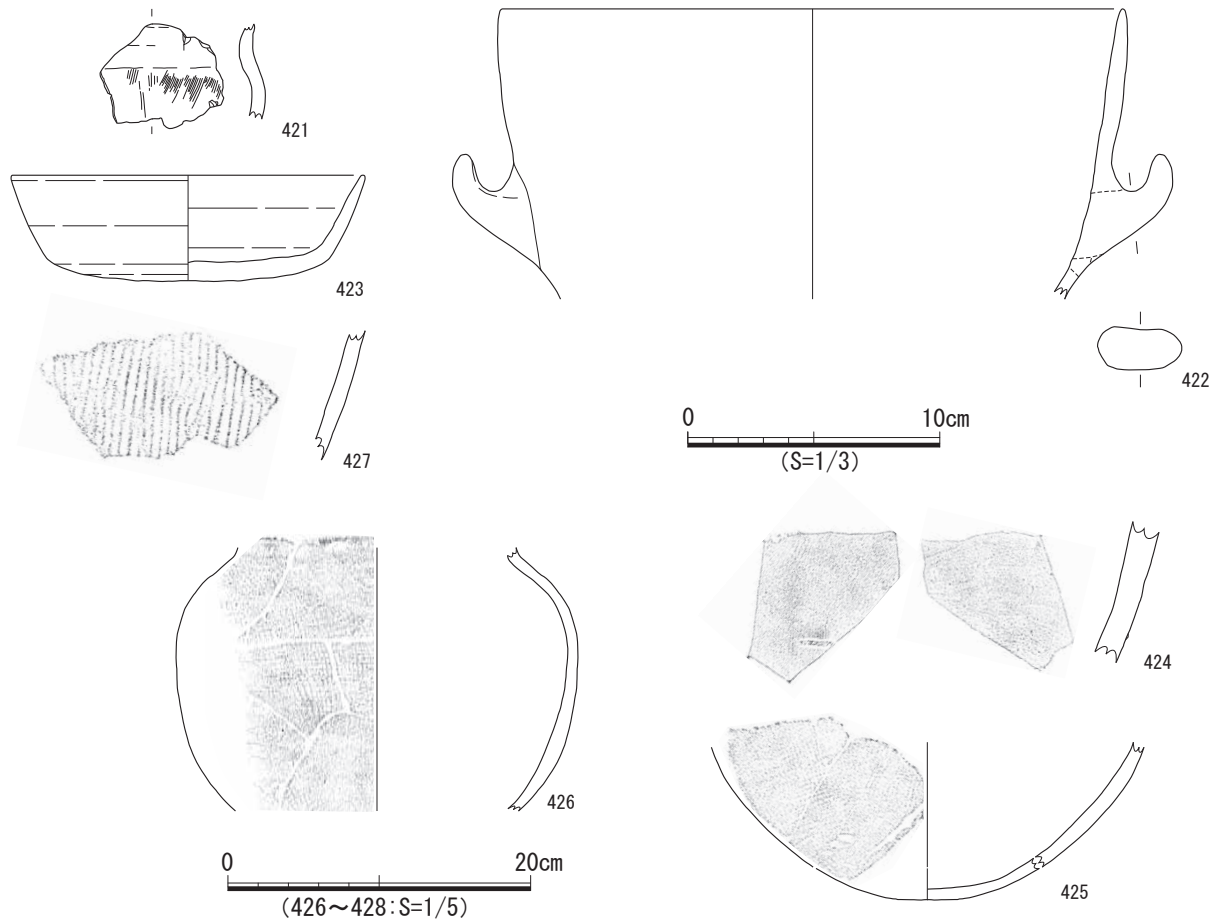


図 207 SI30 出土遺物

した中では、土師器甗（422）や須恵器坏（423）・甗（424～427）、が壁際溝北西部から出土した遺物である。

出土遺物 421 は土師器甗の体部で、外面に細かい斜位のハケ調整が認められる。422 は甗の口縁から体部にかけての破片で、把手が残存するが摩耗のため調整は不明である。423 は無台の須恵器坏で、底部外面は回転ヘラケズリ調整され丸味がある。底部内面は使用による摩耗が認められる。424～427 は須恵器甗で、424 は内面の当て具痕や外面のタタキ目がナゲ消されており、わずかに痕跡が残る。425 は底部片、426 は体部片で、ともに外面に格子状のタタキ目が残る。427 も体部片で、外面に平行タタキ目が認められる。

時期 出土した遺物から、7世紀後半から8世紀前半の遺構と考えられる。

SI33（図 208）

検出状況 EK5～EL6 グリッド、IV層の上面で検出した竪穴建物である。西半部を平成 27 年度（日焼遺跡A地点）、東半部を平成 28 年度（日焼遺跡C地点）に調査したが、A地点の調査では竪穴建物として確認できなかった。C地点の調査で検出した竪穴掘方や壁際溝、柱穴の存在から竪穴建物と判断したが、他の遺構との重複や、現代の耕作等による削平のため、一部の掘方しか確認できなかった。北東側でSI36と重複し、SI33が新しい。P05をA地点で、P01～P04、壁際溝をC地点で検出した。壁際溝の位置関係から、建物の長軸はN-9°-Wである。

埋土 確認できた埋土は単層で締まりがある。

床下 整地層は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から土師器、石器が散在して出土した。

出土遺物 428 はチャートの石鏃で、基部がわずかに凹む。

時期 土師器が出土しているが、時期を特定できない。SI34 との先後関係から、7世紀後葉以降の遺構と考えられる。

SI34 (図 209)

検出状況 EK6~EL6 グリッド、IV層の上面で検出した竪穴建物である。北西側で SI35 や SI36 と重複

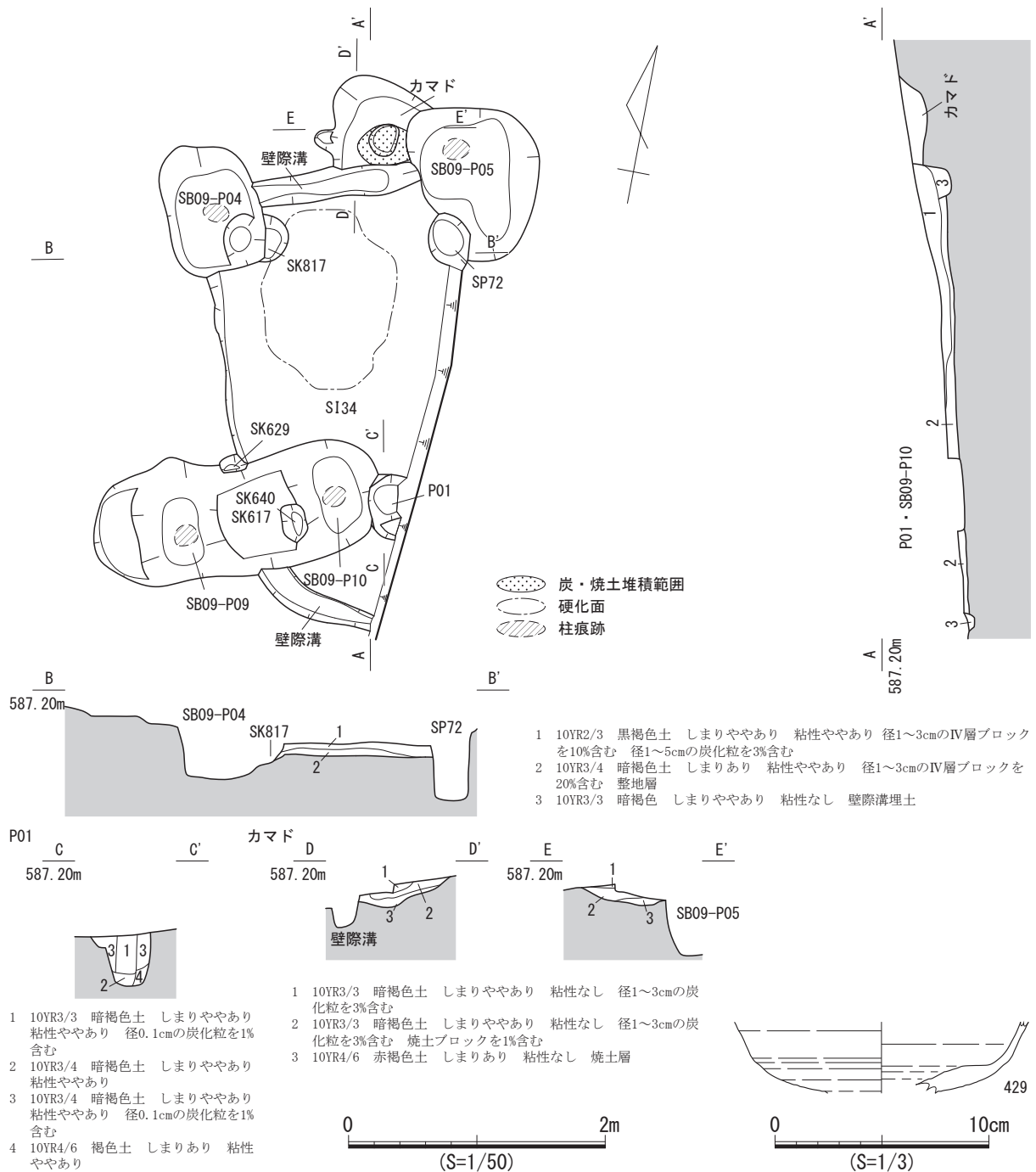


図 209 SI34 遺構図、出土遺物

し、SI34 が新しい。東側は発掘区外のため不明であるが、西側の平面形は東西辺が長い長方形である。建物の長軸はN-18° -Wである。

埋土 埋土は単層で、Ⅲ a 層に類似している。

壁 北側の壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がり、掘方の深さは最大で0.14mである。

床面 若干の凹凸があり、貼床は確認できなかったが、北西部に一部硬化面がある。床面で検出した遺構は柱穴1基、壁際溝1条、土坑1基である。柱穴は竪穴建物内の南部に位置する P01 と考えた。壁際溝は、北西側と南側の壁際で検出した。

カマド 竪穴北壁で検出したが、竪穴掘方外部に被熱面が認められた。北辺の壁外側に浅い掘り込みと、その底面で被熱痕跡を確認したため、カマドと判断した。カマド構築土及び構築材と推定される礫は確認できなかった。

床下 貼床層は確認できなかったが、掘方整地層が認められた。整地層除去後には遺構は確認できなかった。

遺物出土状況 壁際溝から須恵器1点が出土した。

出土遺物 429 は須恵器の高坏の坏部で、底部外面に脚部の痕跡がある。

時期 須恵器が出土したことから、7世紀後葉の遺構と考えられる。

SI35 (図 210)

検出状況 EK6 グリッド、IV層の上面で検出した竪穴建物である。南側で SI34、北西側で SI36 と重複し、SI34 より古く、SI36 より新しい。南東側は SI34 と重複しているため不明であるが、確認できた各辺は直線状であるため方形であると考え。建物の長軸はN-1° -Wである。

埋土 埋土は単層で、IV層ブロックを含む。

壁 壁面の立ち上がりは緩やかで、検出できた掘方の深さは最大で0.04mである。

床面 ほぼ平坦で、硬化した貼床と判断できた堆積は確認できなかった。床面で検出した遺構は柱穴2基、壁際溝1条である。柱穴は竪穴建物内の隅に近い位置に P01~P02 があるが、SI34 に切られるため不明である。壁際溝は、北側の壁際で検出した。

カマド 掘方や構造物は確認できなかった。

床下 整地層は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から須恵器の坏身が出土した。P02 の1層から出土した。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

時期 須恵器が出土したことや SI34 との先後関係から7世紀後葉以前の遺構と考えられる。

SI36 (図 211・212)

検出状況 EK6~EL6 グリッド、IV層の上面で検出した竪穴建物である。南東側で SI34 や SI35 と重複し、SI36 が古い。南東側は SI34 と重複しているため不明であるが、確認できた各辺は直線状であるため方形であるが、検出した隅部は丸みを持つ。建物の長軸はN-2° -Wである。

埋土 埋土は単層で、IV層ブロックを含む。

壁 壁面は底面から直線的に立ち上がり、壁の残存高は最大で0.16mである。

床面 ほぼ平坦で、北端部に硬化した貼床を確認した。床面で検出した遺構は柱穴3基である。竪穴建物内の隅部に近い位置にあることと、断面の柱痕跡から P01~P03 を柱穴と判断した。他に土坑を3

基検出した。

カマド 確認できなかった。

床下 整地層は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、石器、銭貨が散在して出土した。

出土遺物 430 と 431 は縄文土器の深鉢である。430 はRL 縄文を施し、外面に煤が付着している。431

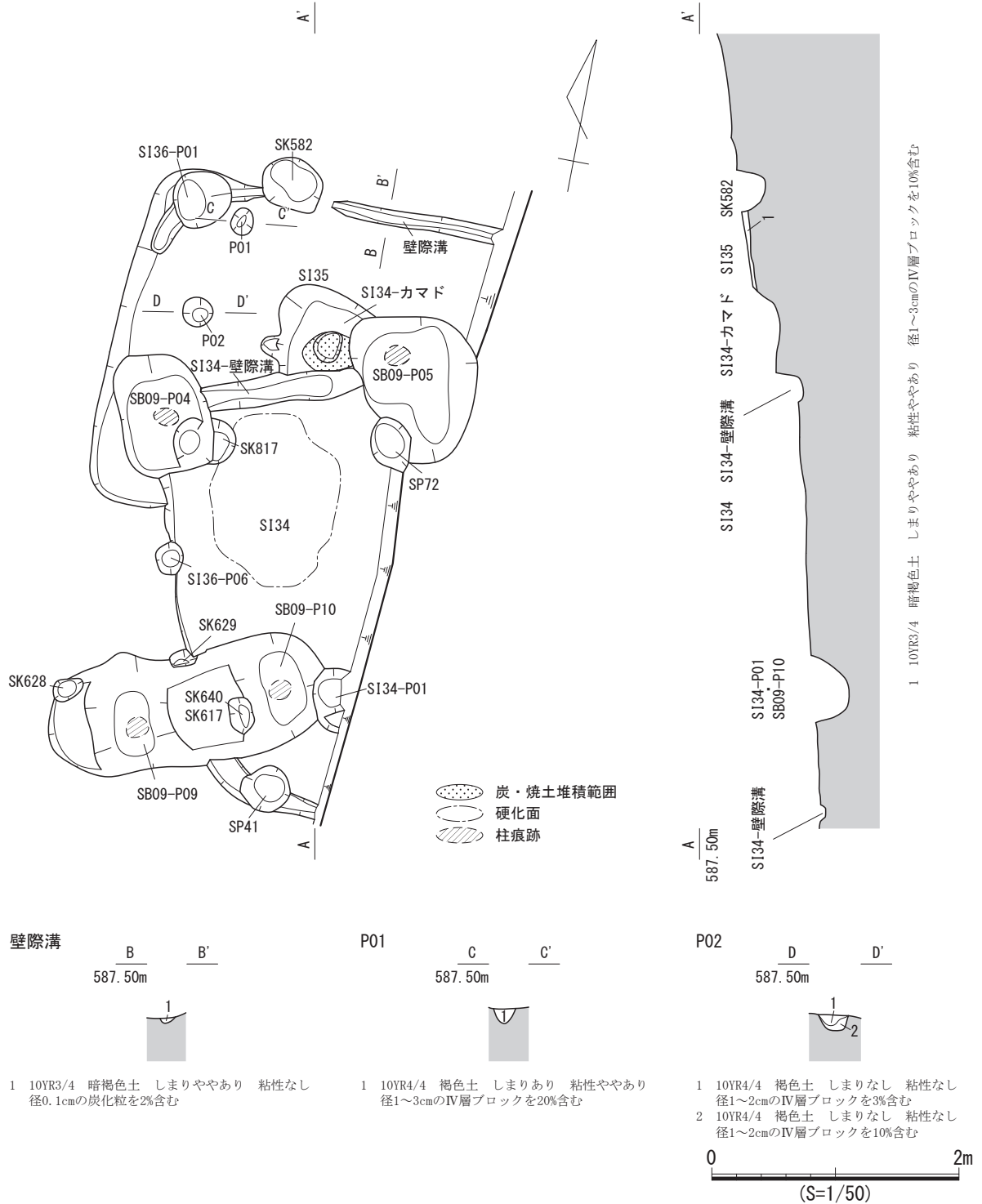


図 210 S135 遺構図

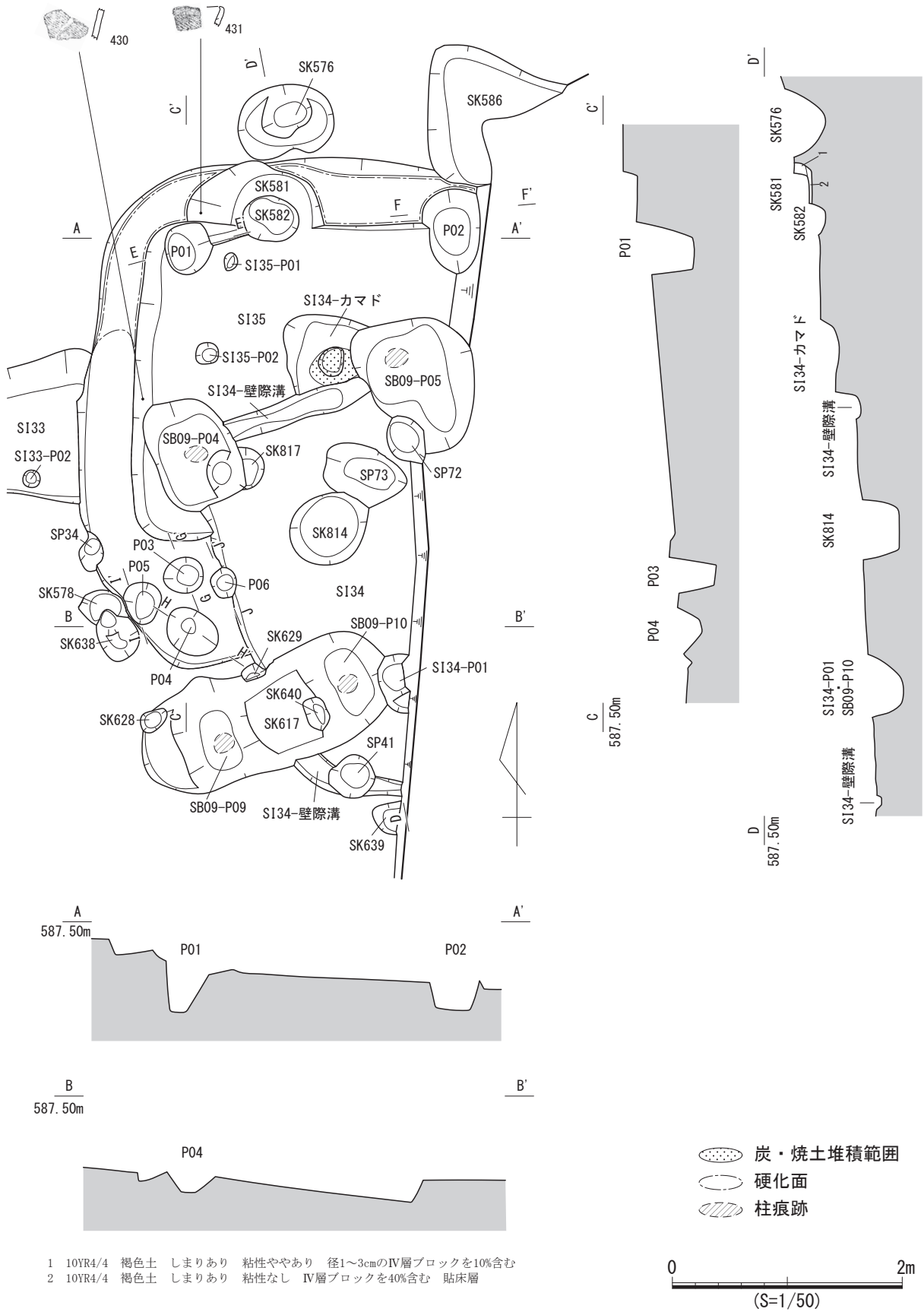


図 211 S136 遺構図 (1)

RL 縄文を施し、口縁端部は無文となる。432 は 1368 年に初鑄された洪武通寶で、背面には「一銭」の文字が認められる。

時期 灰釉陶器、銭貨が埋土上層から出土しているが、遺構の重複関係が激しい場所のため、混入したものと考えられる。遺構の重複関係から 7 世紀後葉以前の遺構と考えられる。

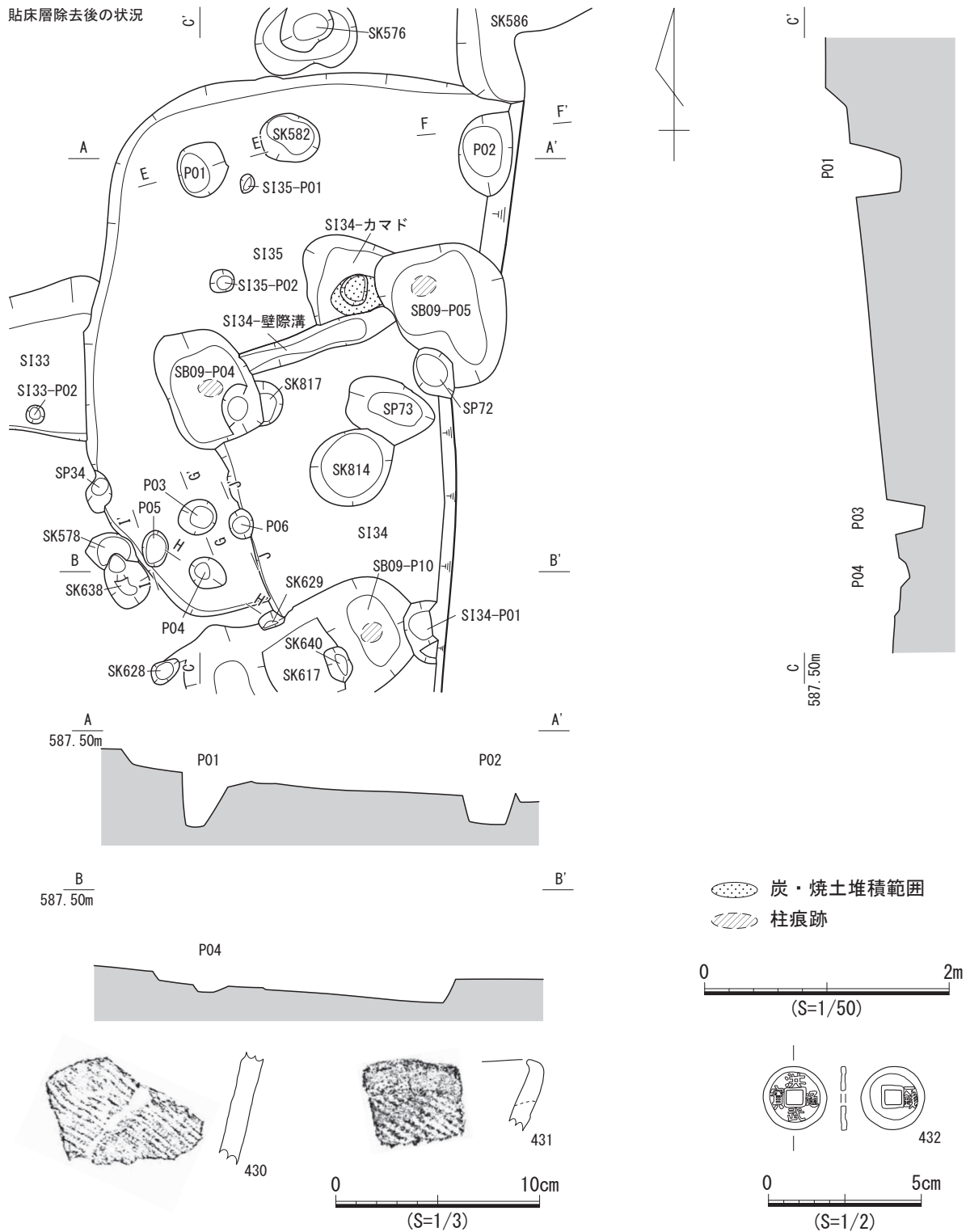


図 212 SI36 遺構図 (2)、出土遺物

S137 (図 213~216)

検出状況 EL5~EM5 グリッド、IV層の上面で検出した竪穴建物である。平面形はやや南北辺が長い長方形で、建物の長軸は真北を向く。

埋土 埋土は2層に分層した。ほぼ水平に堆積し、IV層ブロックが含まれている。

壁 壁面は底面からわずかに開く逆台形であり、壁の残存高は最大で0.37mである。

床面 ほぼ平坦で、貼床層(3層)が全体に渡り、IV層に似た黄褐色土でよく締まる。床面で検出した遺構は柱穴4基、カマド1基、土坑9基である。竪穴建物内の四隅に近い位置にあることからP01

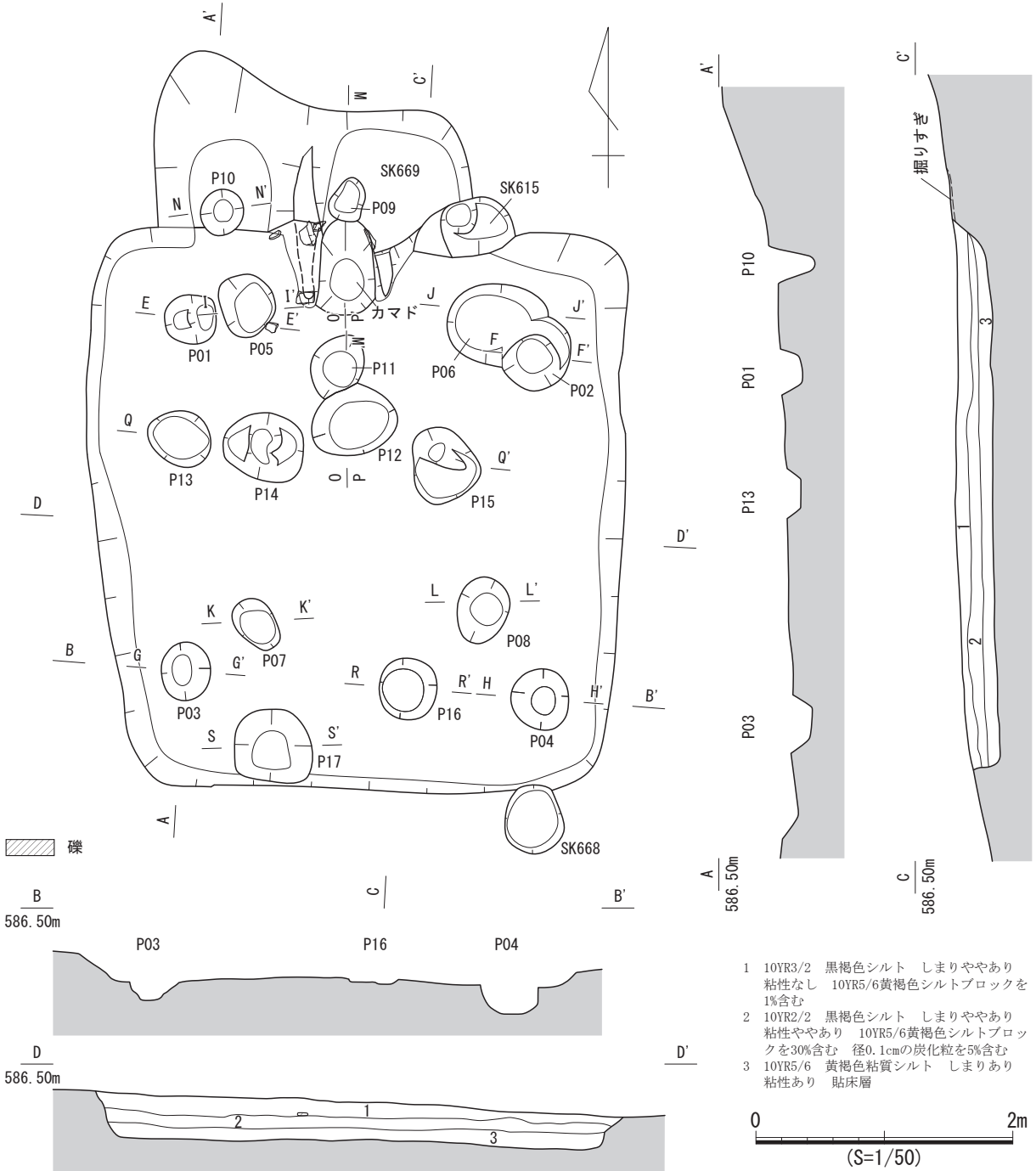


図 213 S137 遺構図 (1)

～P04 を柱穴と判断した。土坑とした中には柱痕跡状の堆積が認められるものがあり、この竪穴建物には付属しない遺構の可能性が考えられる。壁際溝は検出できなかった。

カマド 天井部や煙道部は残っておらず、袖部の一部と焚口の焼土痕が残るのみであった。また、北側にはカマドの焼土を含む埋土を切るようにしてやや不定形の土坑が掘り込まれていることから、建物廃棄時にカマドを一部壊すようにして掘り込んだ土坑である可能性がある。

床下 貼床層を除去した後、土坑を4基（P6・P7・P11・P12）検出した。

遺物出土状況 埋土中から縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、陶磁器、石器が散在して出土した。

出土遺物 433 は縄文時代早期前葉の深鉢で、山形文を施す。434 は縄文時代前期後葉の諸磯式系の深

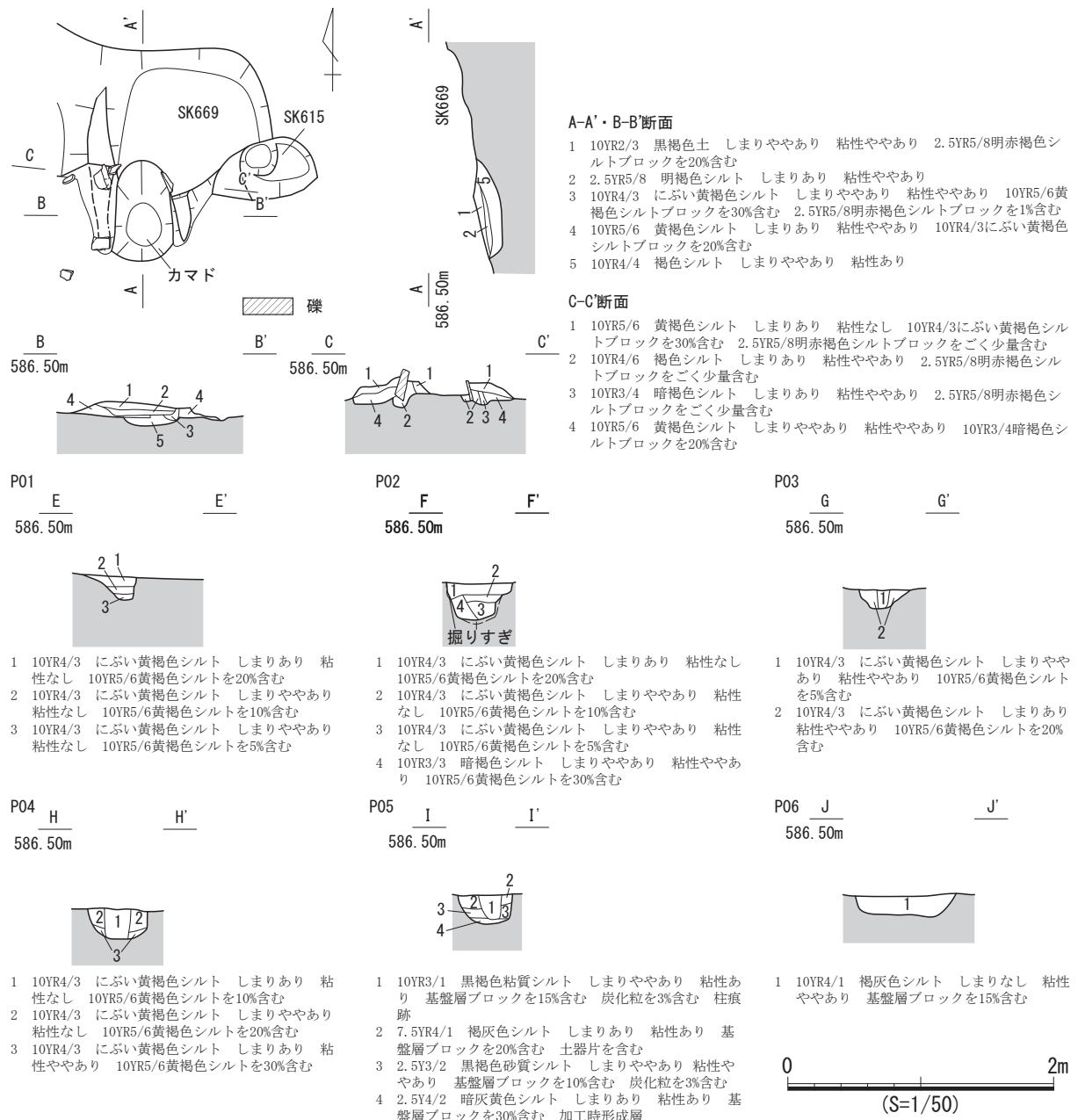


図 214 S137 遺構図 (2)

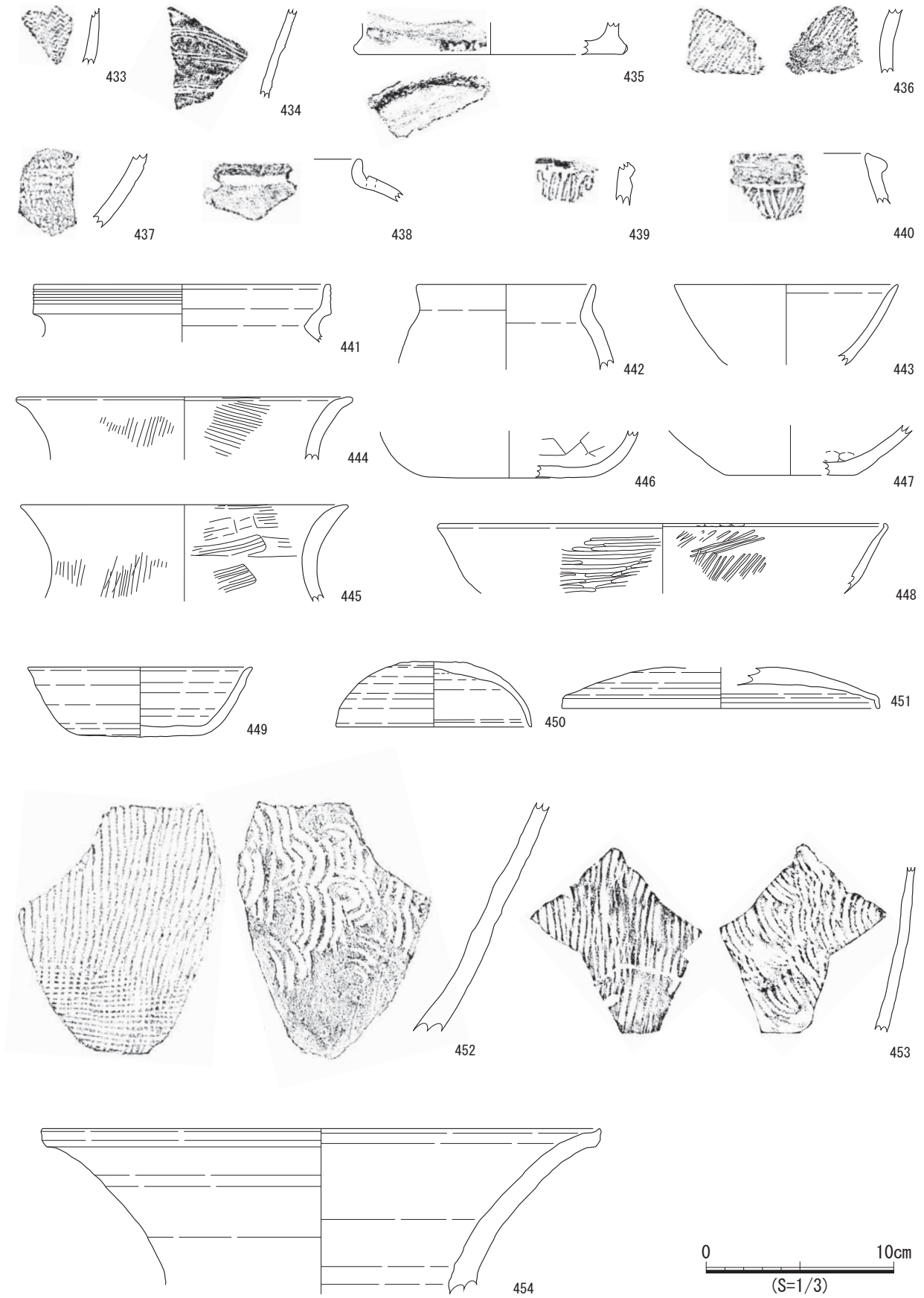


図 215 SI37 出土遺物 (1)

鉢で、体部に沈線文を施す。435 は北白川下層Ⅱc式～Ⅲ式の深鉢で、底部外面に刻みを施す。436 はLR縄文を施し、外面に煤が付着する。437 は縄文時代前期と思われる深鉢で、LR縄文を施す。438 は縄文時代前期後葉の列孔文浅鉢で、口縁部に沈線を巡らせ、円孔を穿つ。439 は新保・新崎式の深鉢で体部に沈線文を施す。440 は縄文時代中期後葉の深鉢である。441～443 は弥生土器と思われる。441 は月影式の有段口縁甕で、疑凹線が施され外面に煤が付着する。442 は短い口縁部が少し開く小型の甕で、443 は鉢若しくは高坏の坏部であろうか。444～448 は土師器で、444 と 445 は口縁部が外反する甕、446 は底部と思われる。447 は鉢と思われる底部片で外面に煤が付着する。448 は坏と思われる口縁部片で、暗文が施される。449～454 は須恵器である。449 は美濃須恵産の無台の坏で8世紀前半と思われる。450 美濃須恵産の坏蓋で、7世紀後半と思われる。451 も美濃須恵産の口縁端部が屈曲する蓋で、8世紀前半と思われる。内面に漆状の付着物があり、別の用途に転用された可能性がある。452 と 453 は外面に平行タタキ目、内面に当て具痕が残る。454 は口縁部が大きく外反する甕である。455～458 は凹基の石鏃で、457 は側辺が突出し五角形となる。459 は、剥片の側辺に調整を加えて錐部を作り出した石錐である。460 は、剥片の側辺及び末端辺に刃部を作り出したスクレイパーである。461 は、微細な剥離痕を持つ剥片である。

時期 9世紀以降の遺物は少量のため混入した可能性が考えられ、比較的まとまって出土した須恵器から、8世紀前葉の遺構と考えられる。

SI39 (図 217)

検出状況 EN4～EN5 グリッド、IV層の上面で検出した竪穴建物である。南側の1/2以上は発掘区外のため不明であるが、確認できた各辺は直線状であるため方形と思われる。建物の長軸はN-58° -Eで

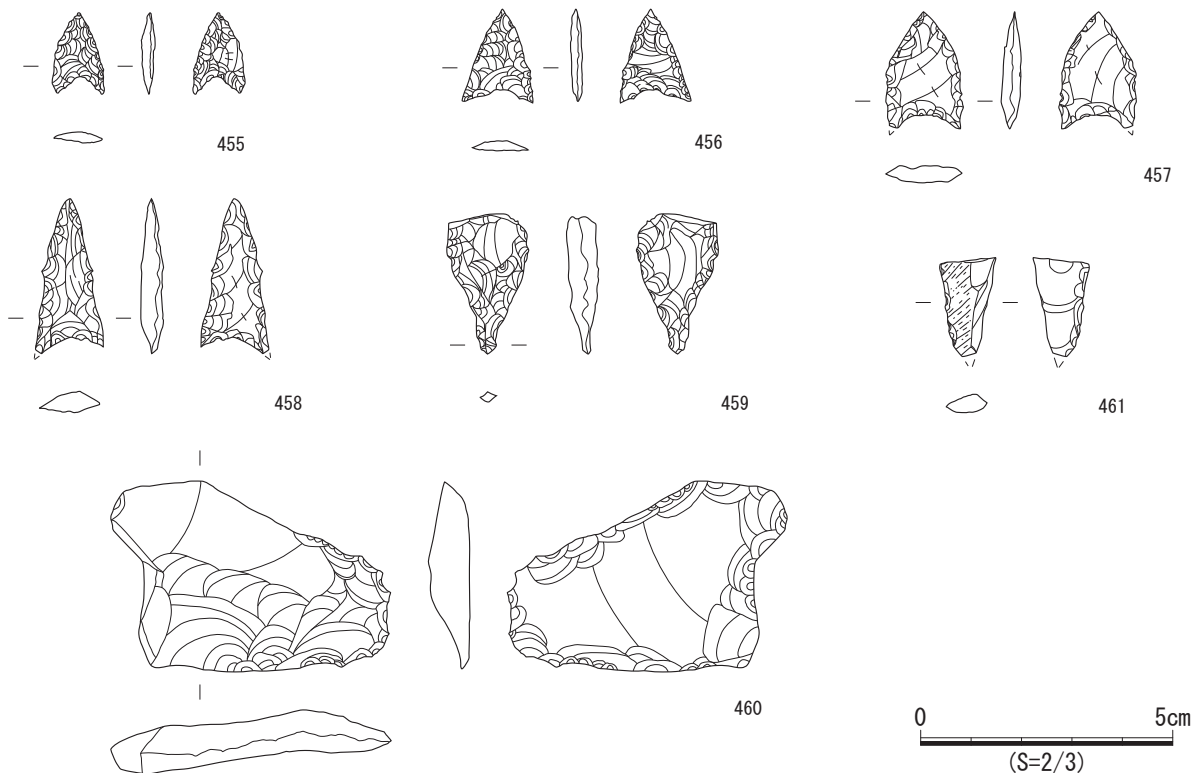


図 216 SI37 出土遺物 (2)

ある。

埋土 埋土は単層で、IV層ブロックを含む。

壁 確認できた掘方は非常に浅く、壁面の立ち上がり等は不明瞭である。壁の残存高は最大で0.11mである。

床面 ほぼ平坦で、硬化した貼床層はない。床面で検出した遺構は柱穴1基、壁際溝2条、カマド1基である。検出したP01を柱穴と考えたが、掘方は浅い。壁際溝は、カマド以外の箇所壁面に沿って検出した。

カマド 竪穴北西壁西寄りで検出したが、煙道部は確認できなかった。床面に浅い掘り込みを確認したため、カマドと判断した。カマド構築土及び構築材と推定される礫は確認できなかった。

床下 IV層ブロックを多く含む整地層を部分的に確認し、整地層を除去したが遺構は確認できなかった。

遺物出土状況 埋土中から縄文土器、土師器、須恵器、石器が散在して出土した。

出土遺物 462は縄文時代早期の深鉢で、貝殻条痕により器面調整が施され、胎土に繊維を含む。463は土師器の甕で、外面に煤が付着する。464は土師器の壺又は甕で、内外面に煤が付着する。465は土師器の壺で、内外面に煤が付着する。466は須恵器の坏身であり、7世紀後半の遺物である。

時期 出土した須恵器から、7世紀後半の遺構と考えられる。

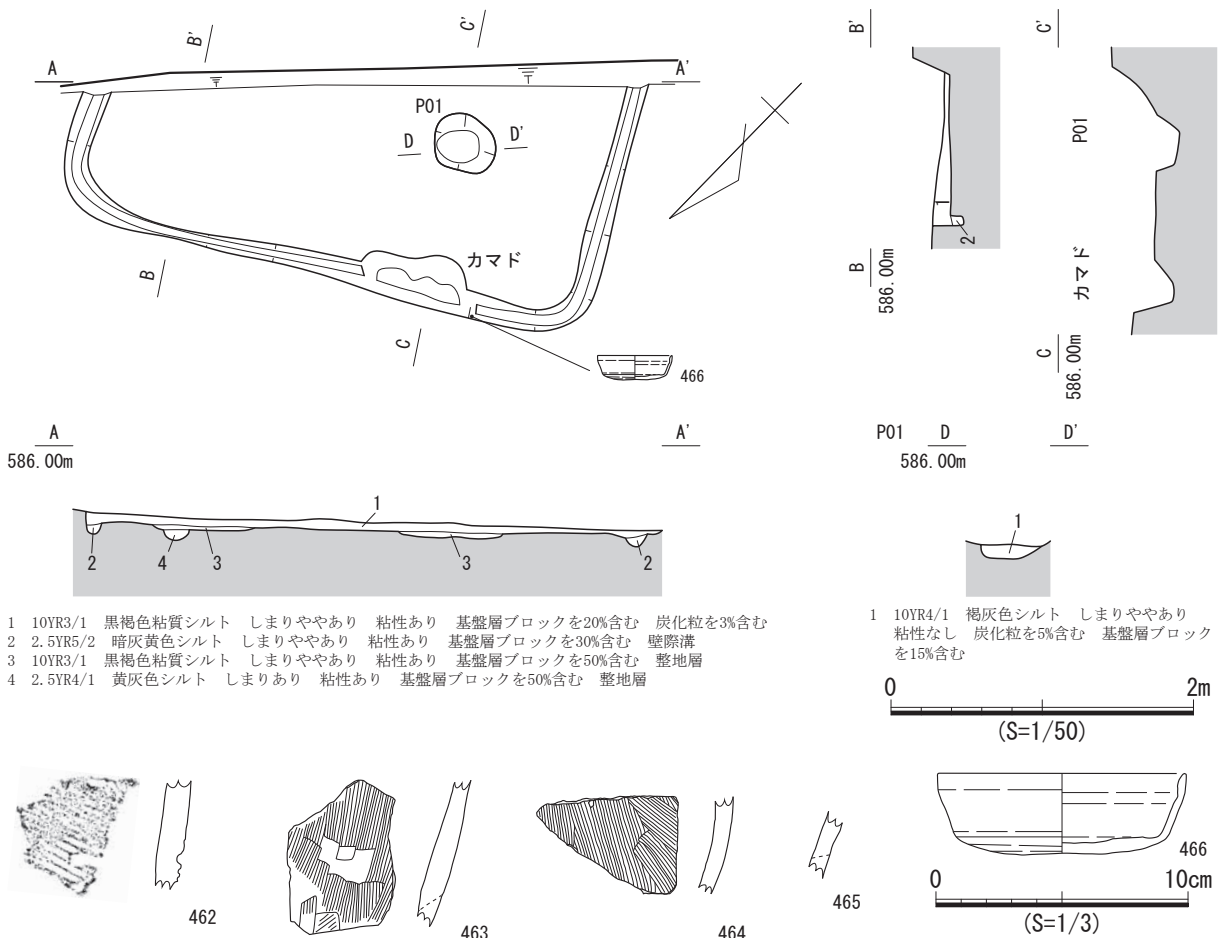


図 217 S139 遺構図、出土遺物

3 掘立柱建物・礎石建物

SB01 ほか (図 218・219)

検出状況 EA2~EA3 グリッドの緩斜面に位置する。耕作地として利用するため段切り造成された場所であり、南西側が削平されている。IV層上面で検出したが、緩斜面を削平して平場を作り出し、その

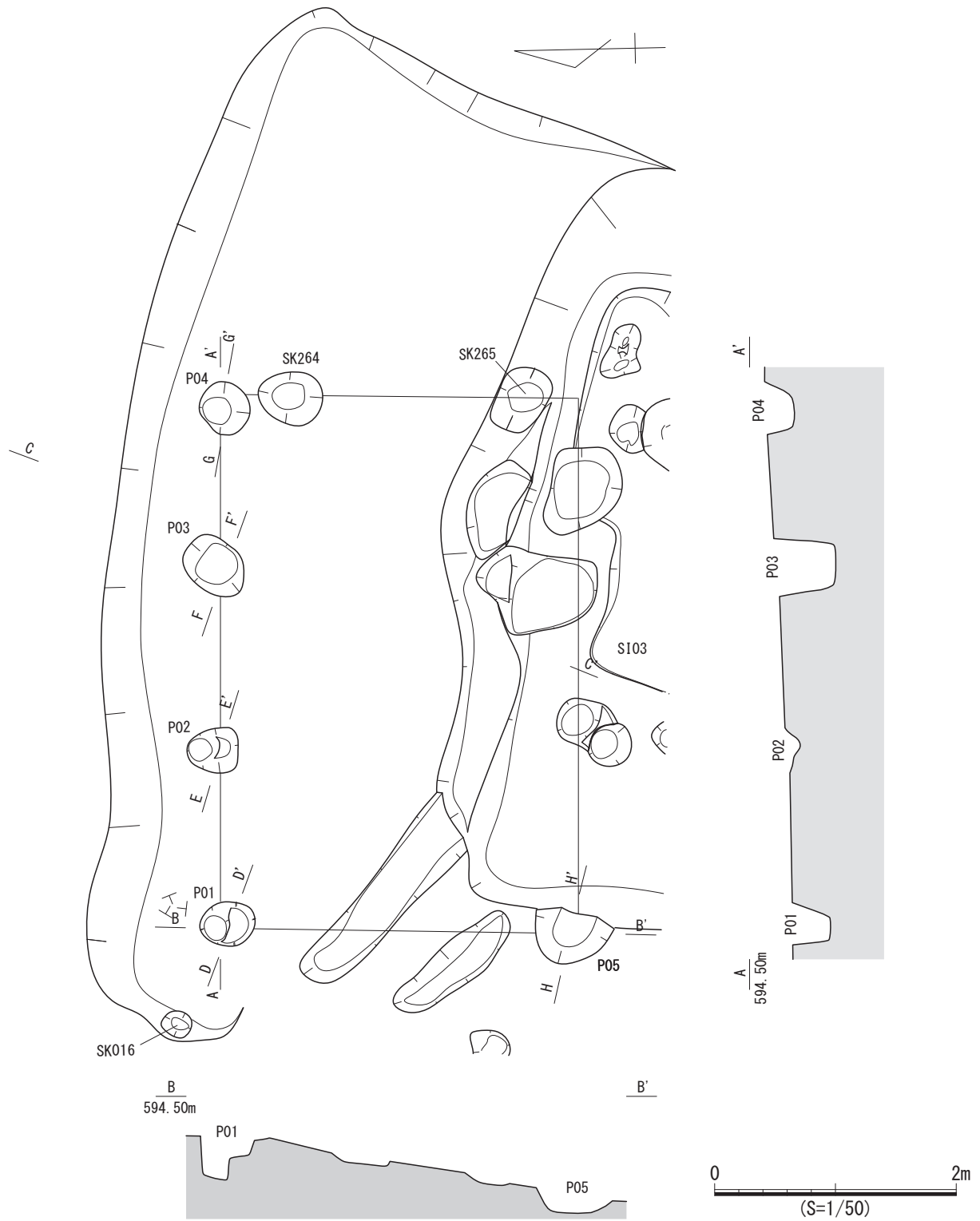


図 218 SB01 遺構図 (1)

上に建物を構築している。SB01 掘方の平面形は、南西側は後世の攪乱で削平されているが、各辺が直線状で隅丸の長方形と想定できる。当初は SI03 と SB01 の東辺の検出ラインが揃っていたため1つの遺構と考えて掘削したが、土層断面にて SB01 掘方埋土が SI03 に掘削されていることが判明したため、SB01 が古いと判断した。なお、この遺構は竪穴建物ではなく、斜面に平坦面を作り出した上で、掘立柱建物を構築したと判断した。掘立柱建物の柱穴は SB01 底面と SI03 にて検出した。平面形は長方形で、桁行3間 (3.00m) × 梁行1間 (1.35m) の側柱建物である。長軸の方位は N-88° -W である。

埋土 褐色土と暗褐色土が堆積する。褐色土の5層は基盤層と考えられる。底面に2~4層の暗褐色土が全体を覆うように堆積し、その上に褐色土の1層が堆積する。3~4層内にIV層起源のブロック土や炭化粒を含み、層間が乱れていることから、人為堆積であると考えられる。

壁 平場の作り出しはIV層を掘り込み、壁面は緩やかに立ち上がる。壁の残存高は最大で0.64mである。

柱穴 SB01底面で柱穴4基と土坑1基 (SK264)、SI03の西端と北東壁で柱穴1基、土坑1基 (SK265)

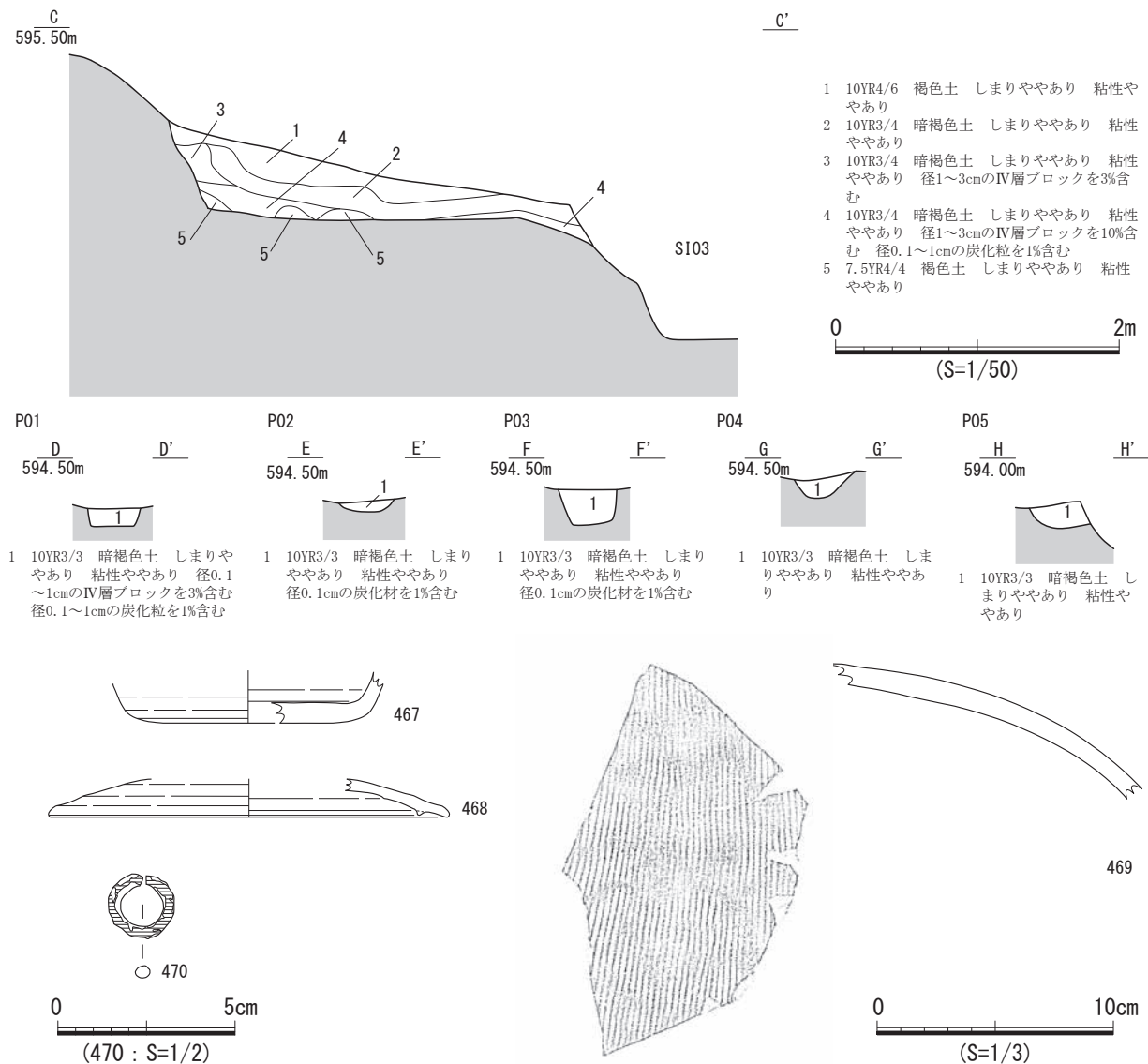


図 219 SB01 遺構図 (2)、出土遺物

を確認した。直径は0.43～0.56m、深さ0.06～0.26mを測る。柱穴の規模はどれも小さい。明瞭な柱痕跡が残るものはなく、掘方の壁が立つものもあれば浅い土坑状になるものもある。柱間はP01-P05で約3.00m、P01-P04で約4.2mである。

遺物出土状況 平場に堆積した埋土から須恵器が出土し、柱穴内からは遺物は出土しなかった。遺物点数は少なく、須恵器坏と蓋、甕、金属製品がある。

出土遺物 467は無台の須恵器坏で、底面にヘラ削り痕が残る。468は返りの付いた須恵器蓋で、返り部分は極めて小さい。469は猿投産の須恵器甕の胴部片で、外面を平行タタキ目、内面の当て具痕をナゲ消ししている。470は耳環である。

時期 図示した遺物は7世紀後葉から8世紀初めの遺物で、平場の埋土中に含まれていることから、遺構の存続時期を直接示すものではないが、7世紀後半頃のものと思われる。

SB02 (図 220～221)

検出状況 EC9～EC10 グリッドの緩斜面に位置し、IV層の上面で検出した掘立柱建物である。現況地形測量ではやや平坦な平場があり、SI13・SI15からSI18を検出したことから緩斜面を造成した可能性が考えられる。当初は長さ約6.7m、幅約2.8mの長方形の堅穴状土坑として掘り下げたが、底面において柱穴を確認したものの、他の堅穴建物とは異なり、壁面の傾斜が緩く、カマドや壁際溝、貼床状の土層がないことから、掘立柱建物と考えた。なお、この堅穴状の掘り込みは、緩斜面に掘立柱建物を建てるための造成に伴うものと考えたが、SB02設置後に掘削された土坑である可能性も考えられる。SI16のカマドがSB02の堅穴状の土坑を削平しているため、SB02が古いと判断した。柱穴を5基検出したが、南東隅の柱穴は検出することが出来なかった。柱配置は長方形で、桁行2間(4.94m、柱間2.70m-2.24m)×梁行1間(1.65m)の側柱建物である。長軸の方位はN-83°-Eで、SI18などとほぼ同じ方位となる。

柱穴 5基の柱穴はP01～P05の番号を付した。直径は0.3m8～0.47m、深さ0.03m～0.47mで、不整形円形若しくは不整楕円形である。P01、P03、P05は比較的深い、P04は非常に浅い。

堅穴状土坑 当初確認した長方形の土坑は、埋土を5層に分層したが、土層図の6層と7層は基盤層を掘り過ぎた可能性が高い。壁面の傾斜は緩やかで、底面から壁面にかけて、SB02やSB03の柱穴及び6基の土坑を検出した。深さは、検出面から埋土4層の下面まで0.2mほどであるが、調査では掘り過ぎており0.3mほどの深さとなった。

遺物出土状況 SB02柱穴からは遺物が出土しなかった。なお、堅穴状土坑埋土からは土師器片と須恵器の坏身・坏蓋・高坏・壺・甕が散在した状態で出土した。なお、P05と重複し新しいSK121から須恵器坏身が1点出土したが、小破片であるため時期を特定できなかった。

出土遺物 以下は、堅穴状土坑から出土した遺物である。471と472は7世紀後葉の無台の須恵器坏で、471は底部からの立ち上がりが緩やかなのに対して、472は直立気味に開く。ともに底面にヘラ切り痕が確認できる。473は7世紀後葉～8世紀初頭のボタン状の摘みを持つ須恵器蓋で、口縁端部が屈曲する。474は7世紀後葉の須恵器高坏で猿投産と思われる。475は7世紀中葉の須恵器短頸壺で、口縁部が短く立ち上がり、肩部が強く張る。SI14カマドから出土した破片と接合した。476は475と同一地点で出土した7世紀中葉の須恵器小壺で、肩部の稜が明瞭である。

時期 柱穴内から出土した遺物がないが、堅穴状の土坑内から出土した遺物や隣接するSI18(7世紀

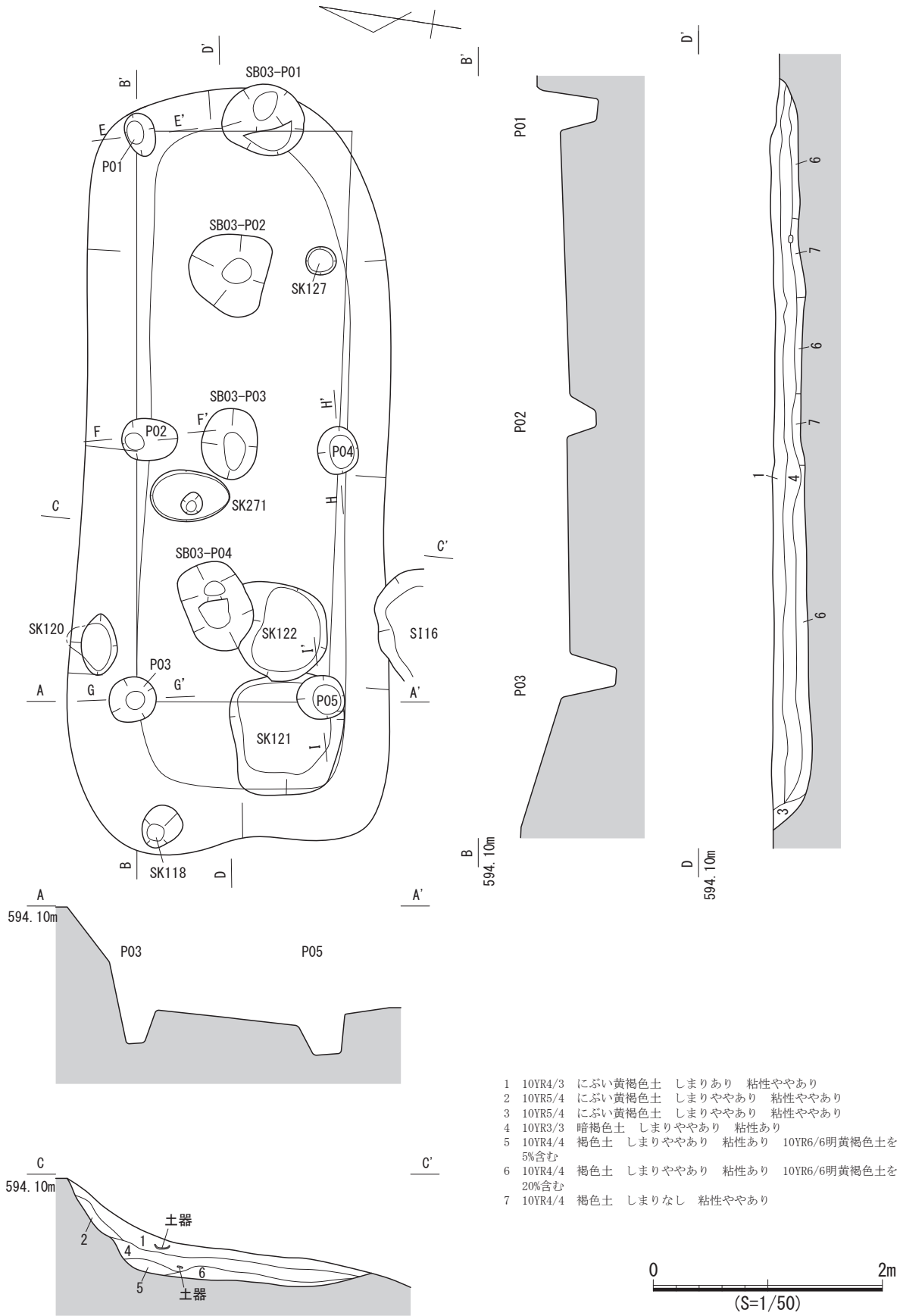


図 220 SB02 遺構図 (1)

後葉)、重複するSB03 (7世紀後葉) やSI16 (8世紀初頭) との関係から、7世紀中葉頃のものである可能性が考えられる。

SB03 ほか (図 222・223)

検出状況 EC9~EC10 グリッドの緩斜面に位置し、IV層の上面で検出した掘立柱建物である。現況地形測量ではやや平坦な平場があり、SI13・SI15 からSI18 を検出したことから緩斜面を造成した可能性が考えられる。SB02 と同様にSB02 堅穴状土坑の底面やその南側で6基の柱穴を検出したが、南西側の柱穴はSI16により削平されたため不明である。柱配置は長方形で、桁行3間(4.30m、柱間1.40m-1.50m-1.40m)×梁行2間(2.90m、柱間1.30m-1.60m)の側柱建物である。長軸の方位はN-85°-Eで、SB02やSI18などとほぼ同じ方位となる。

柱穴 確認した7基の柱穴にはP01~P07の番号を付した。直径は0.38m~0.47m、深さ0.24~0.68で、不整形円形若しくは不整楕円形である。P01~P05とP07は柱痕跡が認められ、その大きさから柱の太さは20cm前後のものと思われる。

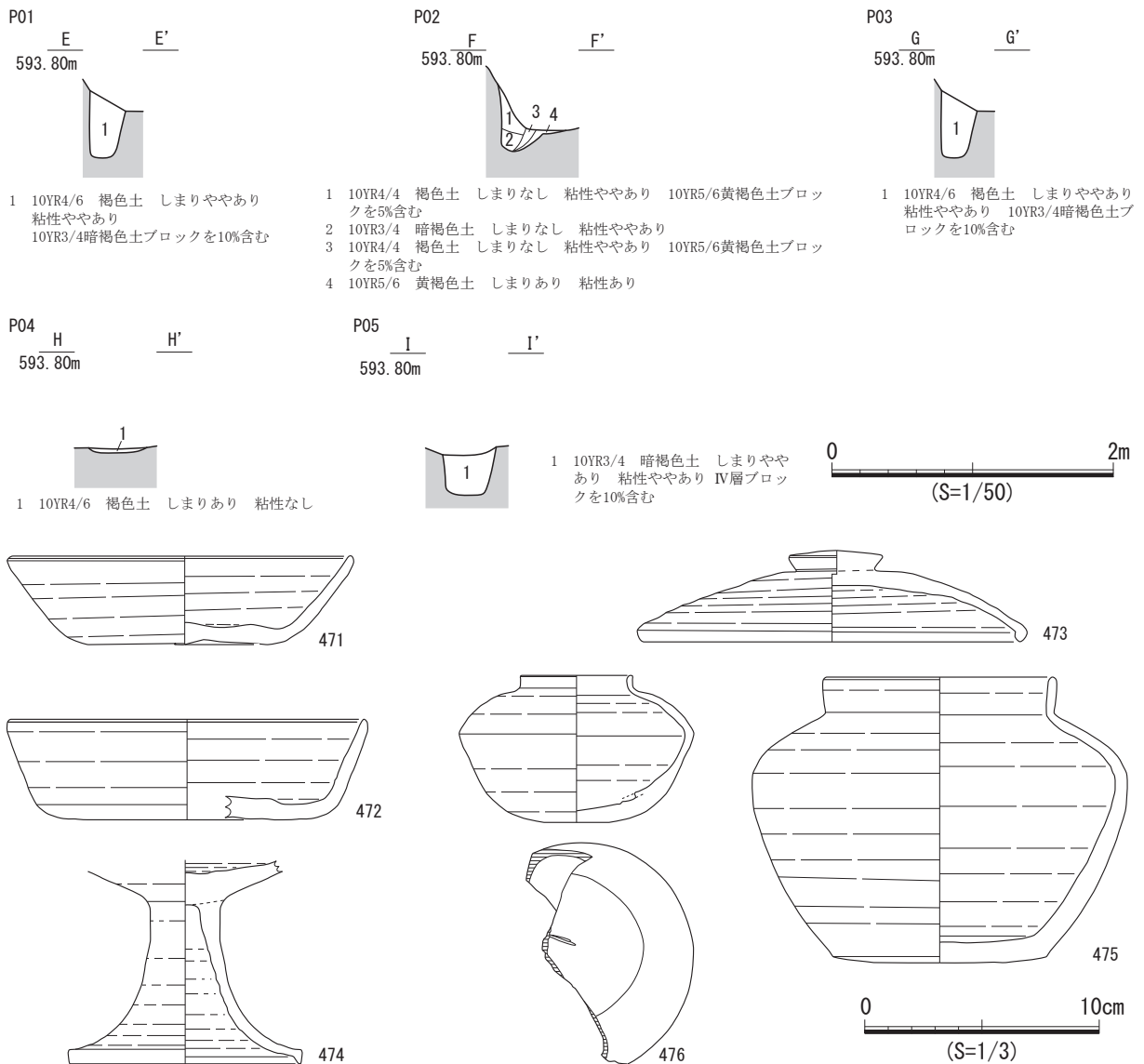


図 221 SB02 遺構図 (2)、出土遺物

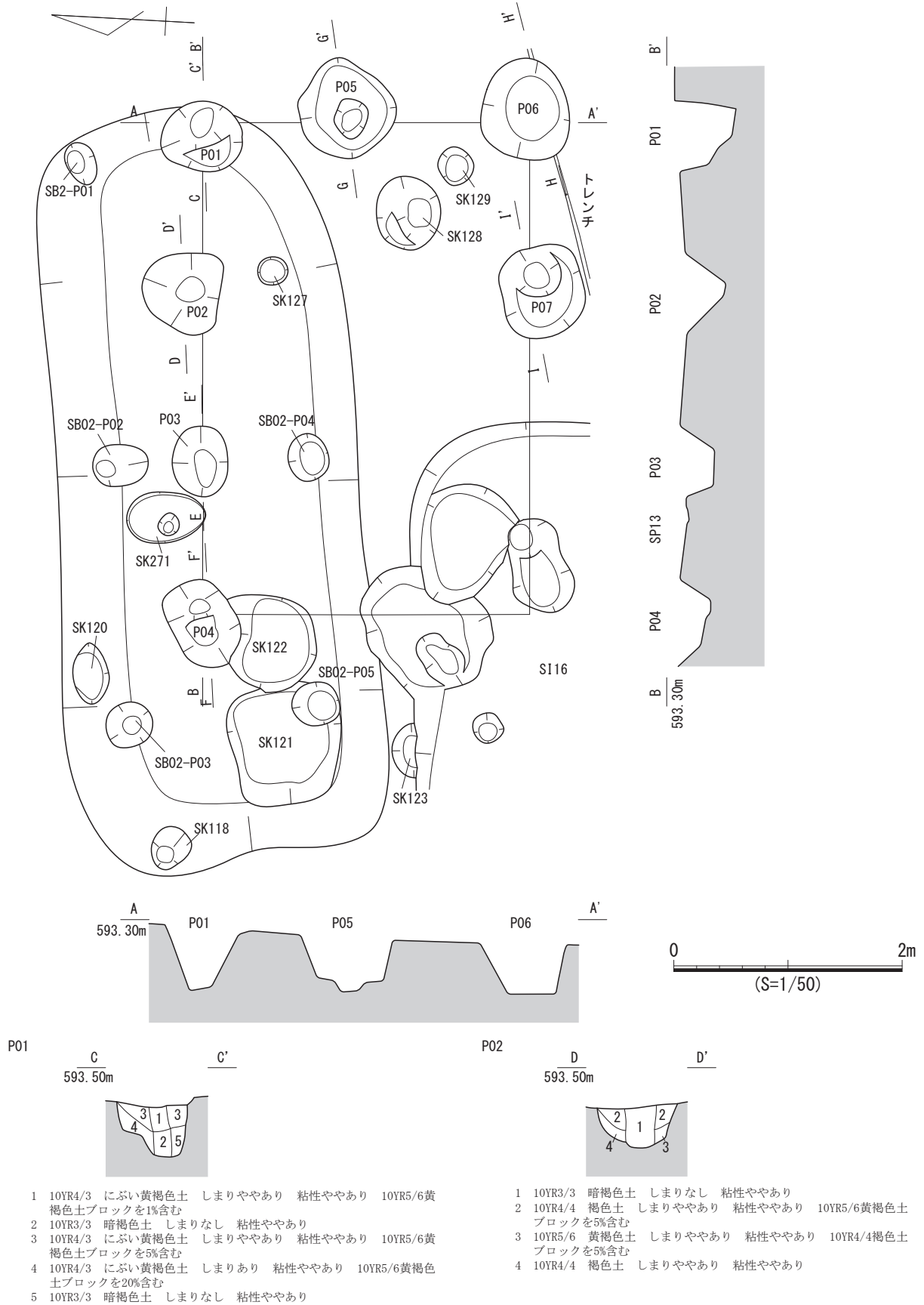


図 222 SB03 遺構図 (1)

遺物出土状況 P01埋土の1層(478)と3層(477)から須恵器が出土した。

出土遺物 477は7世紀後葉の須恵器坏身の胴部から口縁部片である。478も477と同時期と思われる須恵器坏蓋の口縁部片で、端部を屈曲させる。

時期 柱穴から出土した遺物の時期や、隣接するSI18やSB03を削平すると判断したSI17との関係から7世紀後葉と思われる。

SB04 (図224~図236) 1)

検出状況 EF8~EI10グリッドの斜面裾部に位置する。現況地形測量ではやや平坦な平場に盛土状の高まりが認められた。当初は古墳の存在を想定していたため、盛土の堆積状況を確認するため十字にトレンチを設定した。このため、図224のA-A'土層図の7層を周溝埋土、8層と9層を墳丘盛土との認識を持ち、それよりも上部に堆積した土層を、斜面上方からの流土(II層)と理解していたことから、II層の除去を開始したが、大型の礫が見え始め、それが一定間隔で並ぶことから古墳ではなく礎石建物であることが判明した。これにより、7層~9層は礎石建物造営のための整地層と判断した。

なお、この場所は初めSZ10とSZ11が構築されていたが、後に古墳の墳丘を削平してSI27・SI25・SI26の竪穴建物が建てられており、さらにその後、基壇の造成などの整地を行い、礎石建物を造営したと考えられ、建物の長軸の方位はN-88°-Eで、真北方向を意識して造営している。

建物規模 桁行5間(10.5m、柱間2.5m-1.5m-2.5m-1.5m-2.5m)×梁行3間(7.3m、柱間

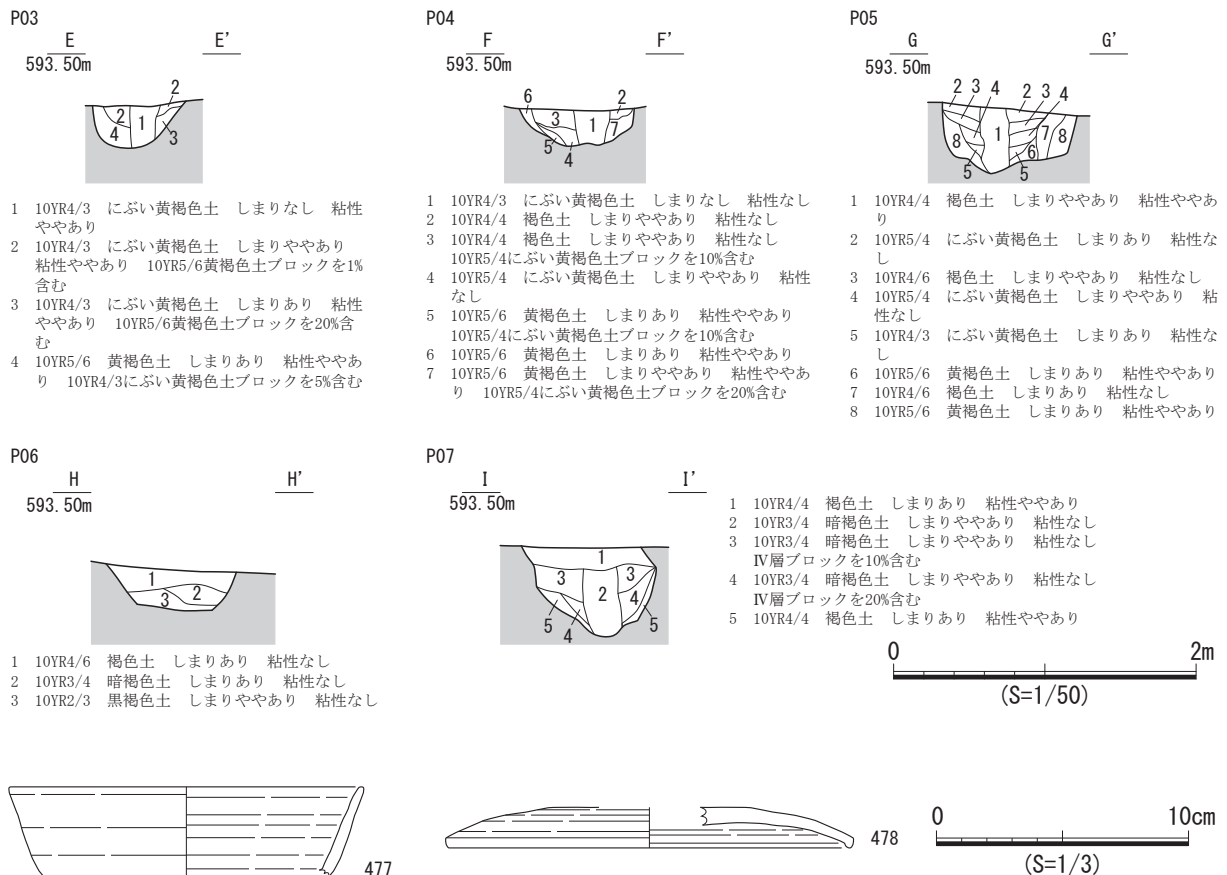


図223 SB03遺構図(2)、出土遺物

2.4m-2.5m-2.4m)の南面建物である。なお、須弥壇となる中央部は、2間(5.5m、柱間2.75m)×1間(2.5m)となり、中央の柱筋が通らない。南面を除いて建物の周囲には縁石が部分的に残存し、犬走りが設けられ、北側には雨落ち溝が残る。犬走りは北側礎石列の中心から約0.9m、西及び東側礎石列の中心から約1.2mの幅がある。

基壇 雨落ち溝から約0.50m北の位置から斜面を削り、その痕跡が建物北側の斜面に段差となって残る。礎石建物造営以前に古墳や竪穴建物により、斜面裾部が平坦地化されていたが、さらに0.12mほどの盛土(図224A-A'土層図7層~9層)を行い整地する。建物西側は、基壇西面の高さを強調させるようにSD12が掘削されている。南側は平坦面が崩れ、明確な基壇の範囲は不明であるが、東西の縁石の幅は約13.2m、北側の縁石から南側に残る平坦部までが約10.5mである。雨落ち溝や礎石据付穴、SK223は基壇上面で確認したが、縁石を据え付ける掘方は確認できなかった。

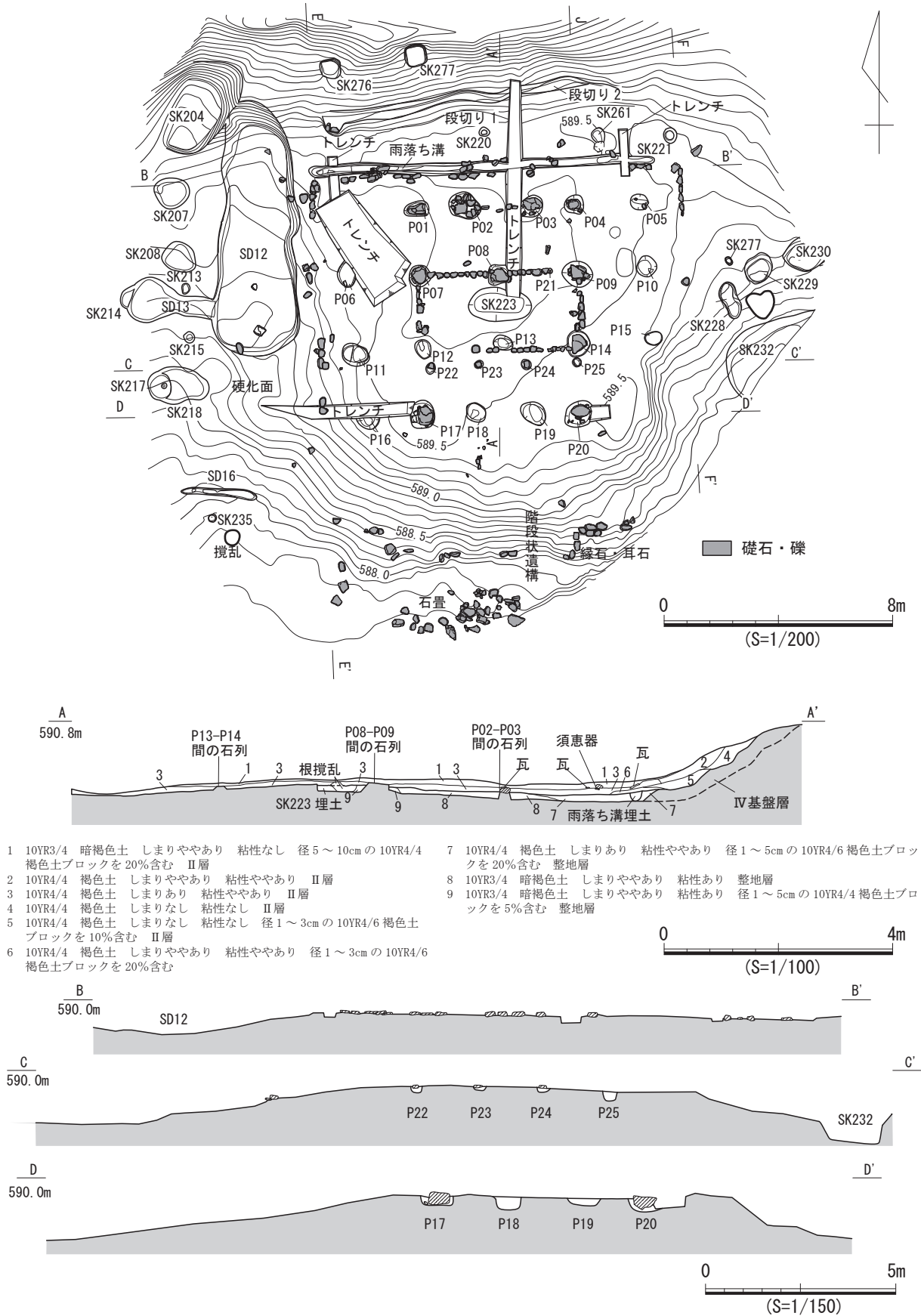
礎石 礎石建物は、22基の礎石により建てられていたと思われるが、このうち北西隅と南東隅の2箇所は礎石及び礎石据付穴が確認できなかった。礎石が残存するものは10基確認でき、残りの10基は礎石据付穴を確認した。残存した礎石は長さ0.5~0.7m程、厚さ0.2~0.4m程の比較的扁平な川原石を利用したものである。礎石は、それよりも一回大きく深さ0.1m~0.3mほどの穴を掘り、平坦な面を上にした状態で置かれていた。礎石上面の高さはほぼ同じで、根石を置くものもあった。須弥壇部分の隅部に用いられた礎石(P07・P09・P14)は、内側を意識するように斜めに整形されていた。礎石据付穴のうちP06・P10・P11の3基は、根石と考えられる小礫が出土した。礎石上面で柱の当たりを確認できたのは、P01・P02・P03・P07・P08・P09・P14・P17・P20である。

須弥壇 P07~P09とP12~P14の6基の礎石からなる部分で、この内部からは八稜鏡を埋納したSK223を検出した。P08とP13は、南側及び北側の礎石列とは柱筋が通らず、建物の中央に位置し本尊と重なるため通し柱ではなかったと思われる。6基の礎石間は石列が配置されていたが、この石列を据える際の掘方は確認できなかった。P08とP09の間では、石列の位置でP21を検出したが、その性格は不明である。須弥壇南側には、P12~P14に沿うように小型の礎石や礎石据付穴を4基(P22~P25)確認した。1.7m間隔に配置され、須弥壇南側の縁束を支える礎石若しくは供物台の礎石と思われる。他の礎石よりも小振りで、P22~P24の3基に長さ0.2~0.3m程度、厚み0.1mほどの扁平な川原石を利用した礎石が残存し、柱の当たりを確認した。須弥壇内中央北寄りの位置で検出したSK223は、2.22m×1.20mの楕円形の土坑で、深さは最大で0.19mである。遺構検出面から0.02m掘り下げた、SK223のほぼ中央の位置で瑞花双鳥八稜鏡が出土した。この鏡は表面を上にして、やや南側に傾いた状態で出土した。この鏡は、地鎮による鎮壇具として埋納されたものと考えられる。

なお、八稜鏡の裏面には付着物があり、靱殻も1点出土したことから、鏡付着物分析と埋土に含まれる微細物の分析を行った(第4章第3節、第5節)。その結果、鏡を包んでいた和紙である可能性が指摘されている。

雨落ち溝 長さ12.60m、幅0.32m、深さ0.03mの東西に延びる溝状遺構である。建物北側の縁石に沿って作られていることから、雨落ち溝と判断した。背後の斜面から流れる雨水や庇の屋根から滴る雨水を平坦地の外に流す役割と思われる。溝の東西端部の底面における標高差は0.03mで若干東端が高い。

段切り 建物北側の緩斜面において、斜面地を削平した際の段を2箇所確認した。溝状とはなっておらず、他の遺構の痕跡とも考えられなかったことから、礎石建物に伴う確証はないものの、基壇の北



- | | |
|--|--|
| <p>1 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性なし 径5~10cmの10YR4/4 褐色土ブロックを20%含む II層</p> <p>2 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり II層</p> <p>3 10YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性ややあり II層</p> <p>4 10YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性なし II層</p> <p>5 10YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性なし 径1~3cmの10YR4/6 褐色土ブロックを10%含む II層</p> <p>6 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmの10YR4/6 褐色土ブロックを20%含む</p> | <p>7 10YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径1~5cmの10YR4/6 褐色土ブロックを20%含む 整地層</p> <p>8 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性あり 整地層</p> <p>9 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性あり 径1~5cmの10YR4/4 褐色土ブロックを5%含む 整地層</p> |
|--|--|

図 224 SB04 遺構図 (1)

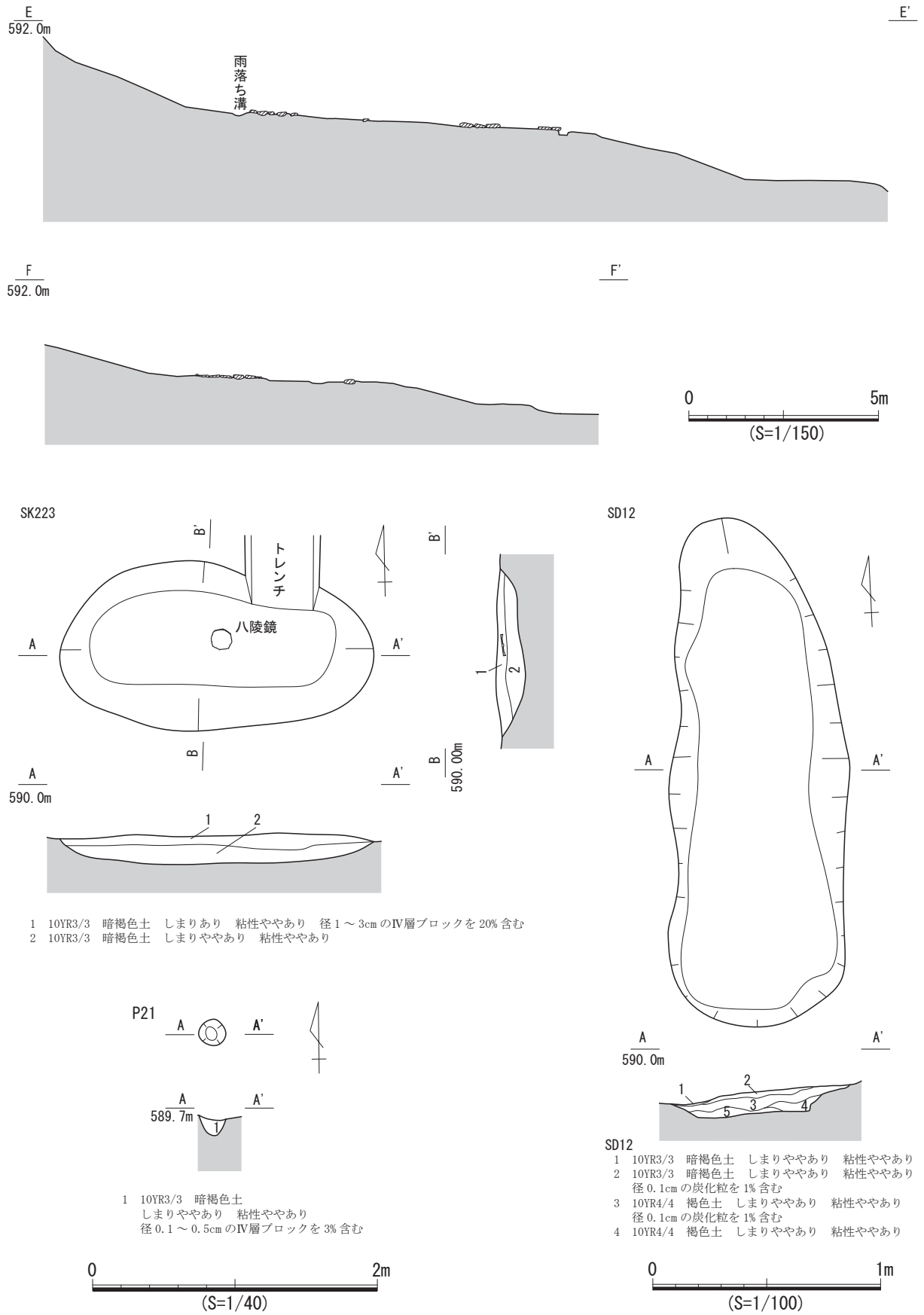


図 225 SB04 遺構図 (2)

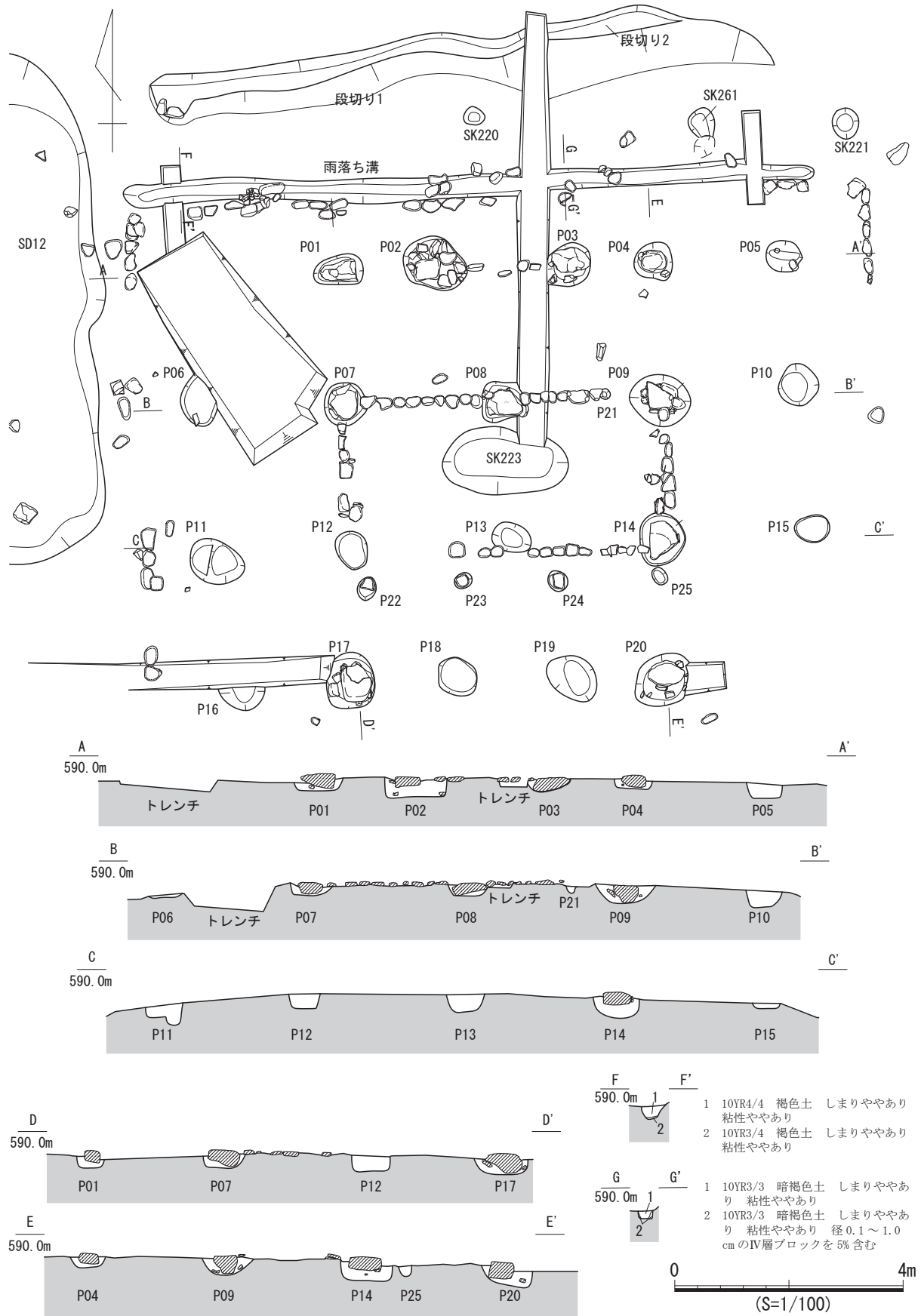


図 226 SB04 遺構図 (3)

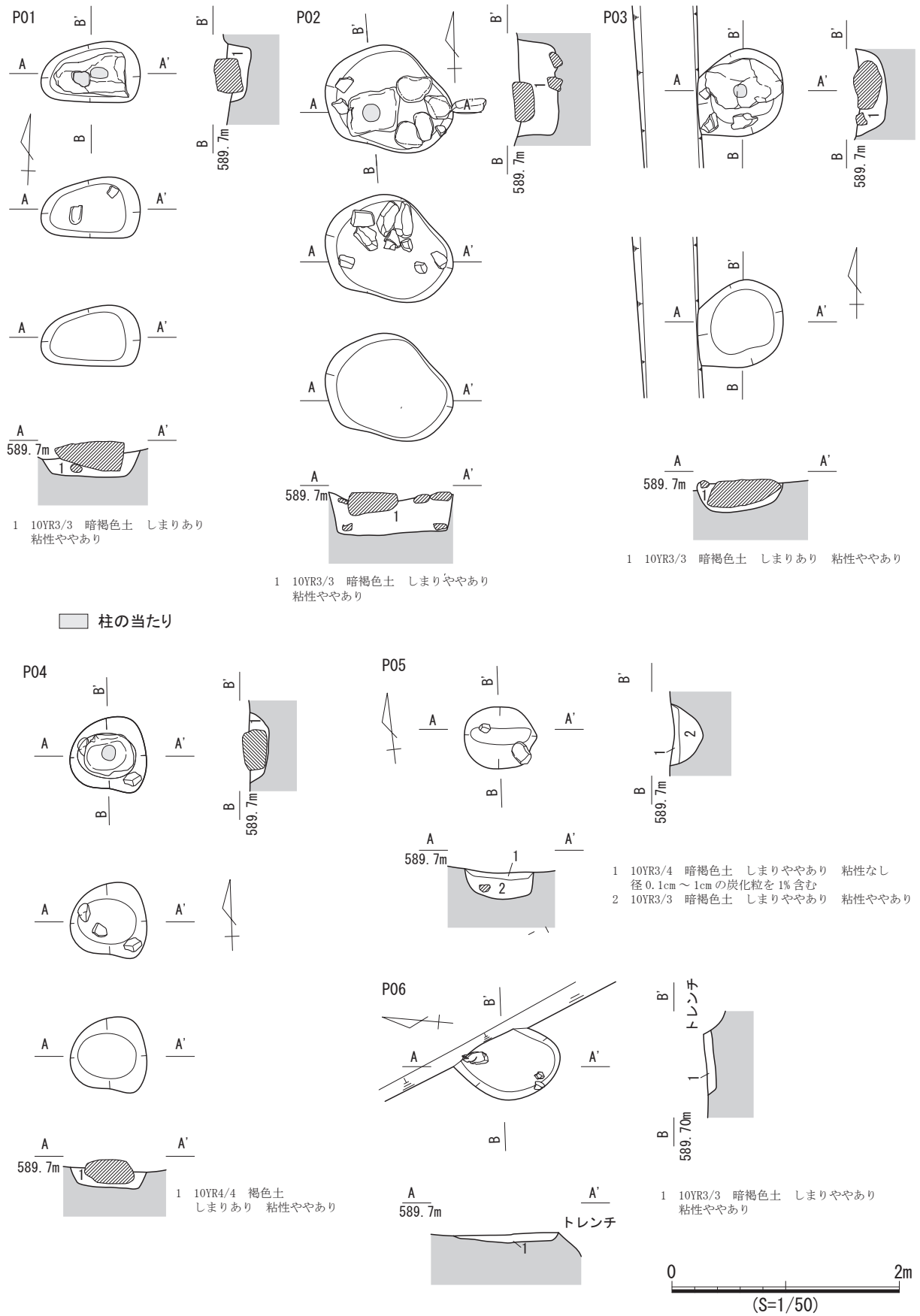


図 227 SB04 遺構図 (4)

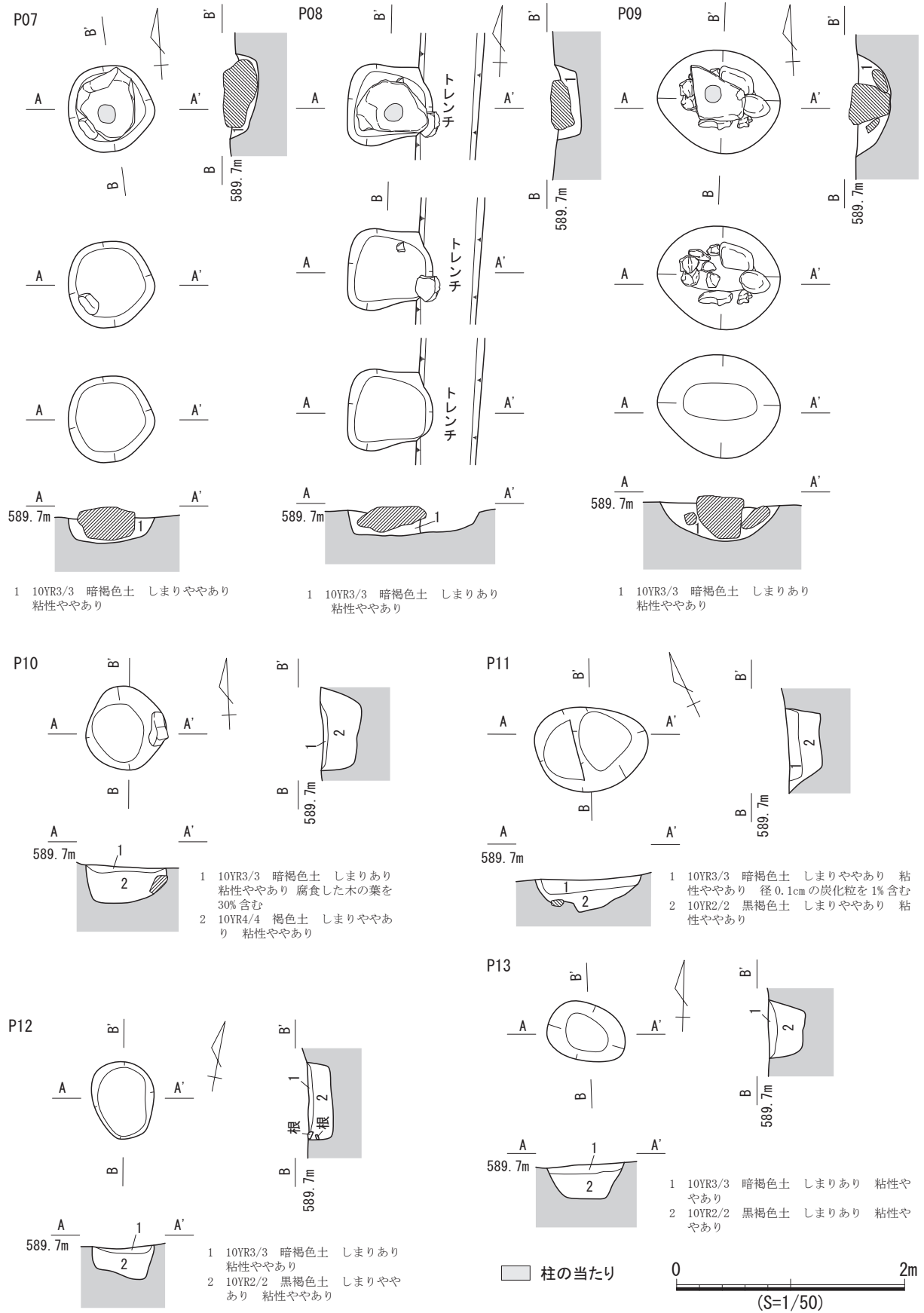


図 228 SB04 遺構図 (5)

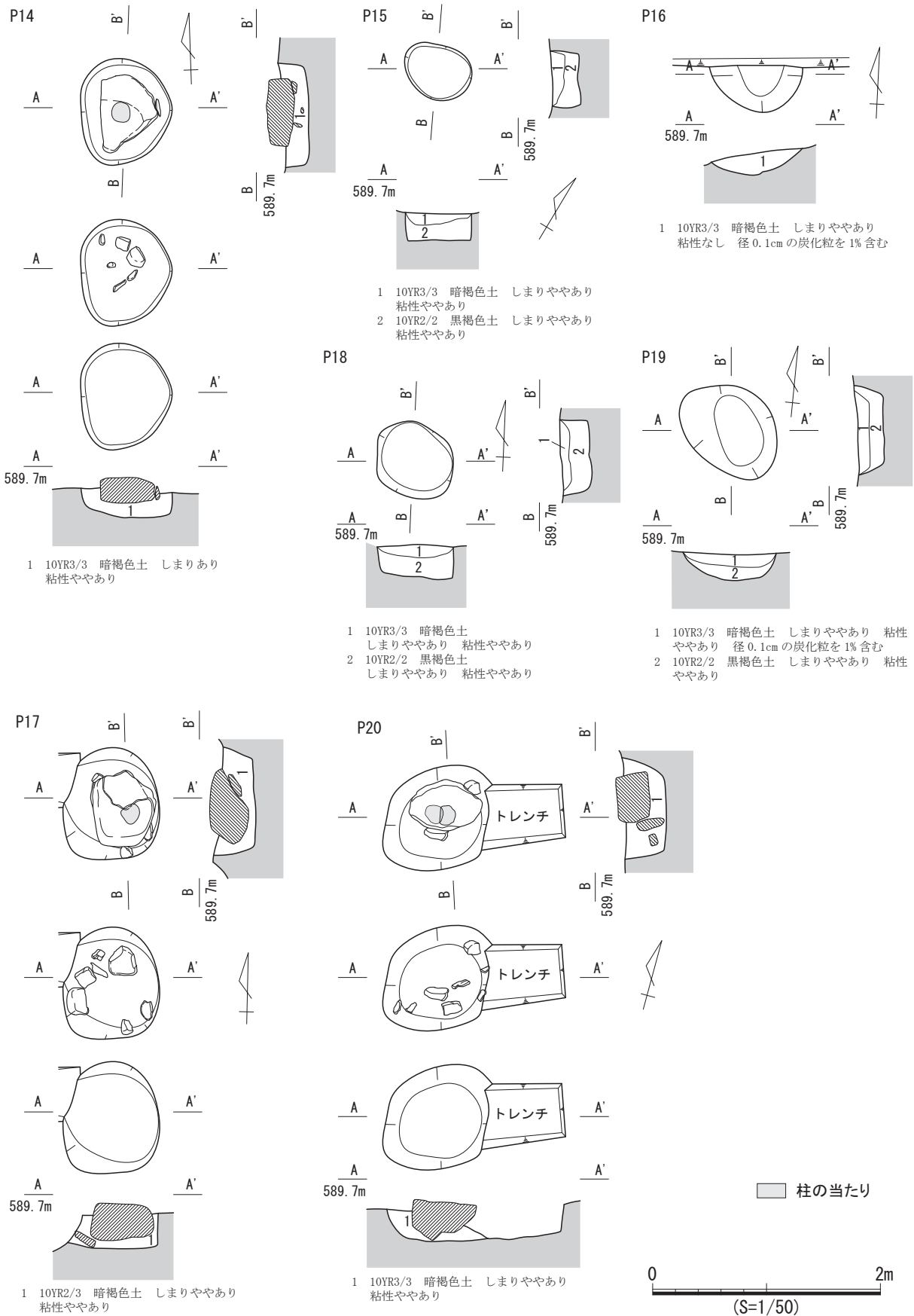


図 229 SB04 遺構図 (6)

辺に沿うように検出したことから、基壇造成に伴うものと考えた。

階段状遺構 建物南側の傾斜面で人頭大の扁平礫がまとまって出土した。この中で東部から出土した扁平礫は長楕円礫が並んだ状態で出土し、須弥壇の東側柱筋の延長部に位置することから、耳石や縁石となる可能性が考えられた。このため、礎石建物南側の傾斜面には、礫を用いた階段状のものが存在していたと思われる。

硬化面 礎石建物の南西部から西側（SD12南側）に、厚さ約0.04mの暗褐色土の硬化面を確認した。礎石建物西側は南側よりも傾斜が緩やかであり、基壇の高さを強調するためにSD12を掘削しているが、その南側は掘り残されて緩斜面のままとなっている。この部分に硬化した面が確認できたことから、通路のような用途を持つ部分と推定される。

遺物出土状況 礎石据付穴（P01～P03・P05～P13・P15・P17・P18）から遺物が出土した。P01では土師器甕と須恵器甕が、P02では土師器と須恵器蓋・甕、瓦などが、P03では土師器と須恵器壺、灰釉陶器碗が礎石周囲から出土した。P05では丸瓦の小破片が、P06では須恵器甕が、P07では土師器と須恵

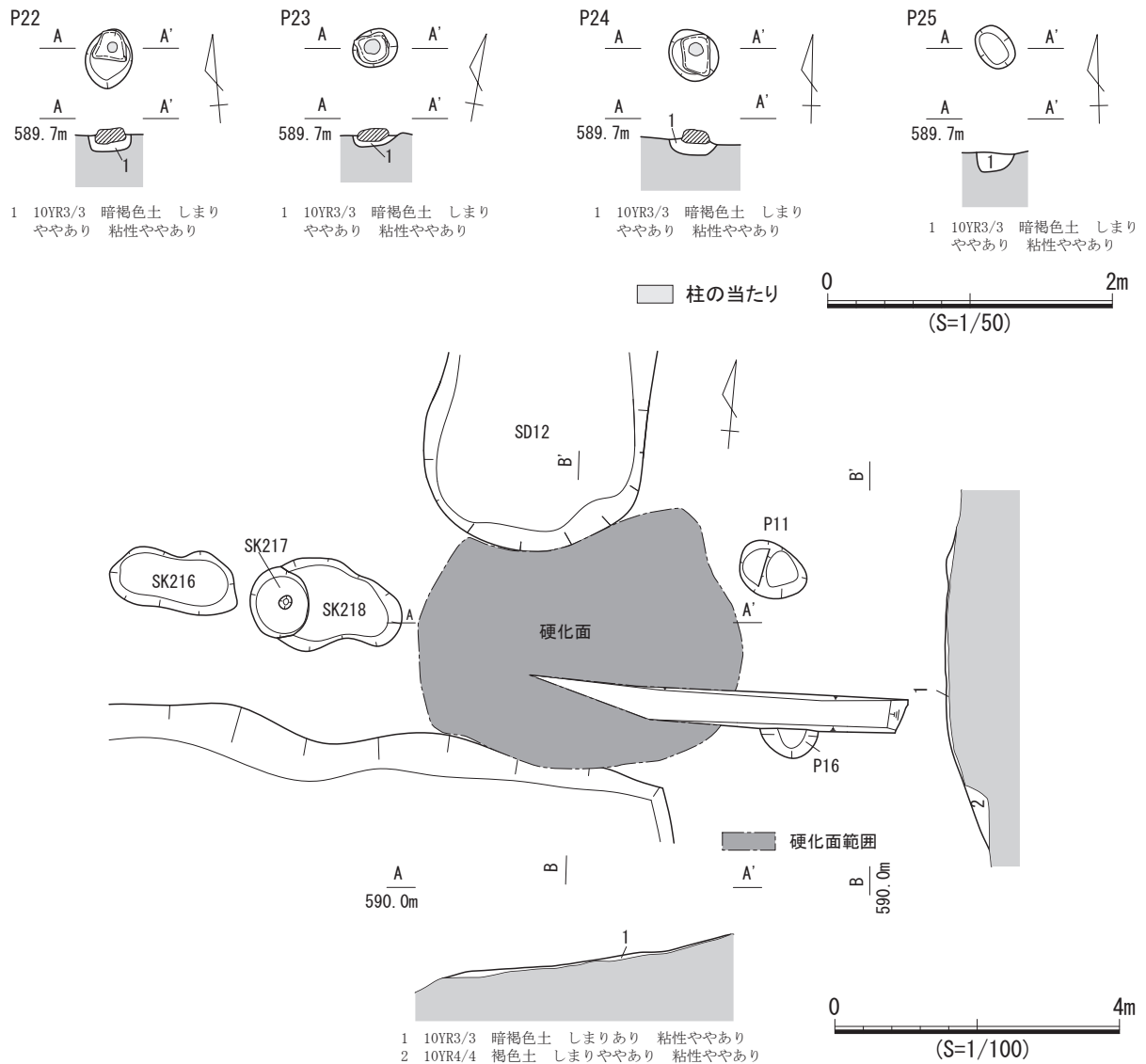


図 230 SB04 遺構図（7）

器坏・壺が、P08 では土師器と須恵器坏・蓋・甕・壺が、P09 では須恵器短頸壺が礎石の周囲から出土した。P10 では土師器が埋土上面から出土した。P11 では底面から土師器、埋土上面から須恵器坏・甕が出土した。P15 では埋土上面から土師器と底面から須恵器が出土した。P12 では須恵器坏が、P13 は土師器甕と須恵器坏・壺・器台が埋土上層から出土した。P17 では土師器片と須恵器片が礎石周囲から出土した。P18 では須恵器甕・壺が埋土上面から出土した。須弥壇南側の礎石据付穴（P23・P25）で遺物が出土した。P23 では土師器片とロクロ土師器が、P25 では縄文土器が埋土上面から出土した。雨落ち溝では、埋土中から須恵器甕片が出土した。埋納遺構（SK223）では、埋土中から土師器甕や須恵器坏・碗・蓋・甕・壺が散在して出土した。また、検出面では灰釉陶器碗、中央の検出面から深さ 0.02 m の位置では瑞花双鳥八稜鏡が、その直下から靱殻 1 点出土した。基壇では、土師器片や須恵器坏・蓋・高杯・甕・壺、ロクロ土師器碗・皿、灰釉陶器碗、瓦、鉄製の釘類が散在して出土した。瓦は礎石建物北側の雨落ち溝周囲で多く出土し、金属製品は身舎内を中心に出土した。

出土遺物 479～481 は P02 から出土した。479 は須恵器蓋で、口縁部と天井部の境に明瞭な段がある。480 は須恵器平瓶の胴部片で、肩部が屈曲し、胴部成形後中央に粘土板の貼り付けが認められる。481 は平瓦で、凸面は格子目のタタキ目、凹面には布目が残る。SI25 出土の 370 や遺物包含層出土の 515 は同系の瓦と考えられる。482 は P03 出土の灰釉陶器碗の口縁部で、胴部にやや丸みを持つ。483 は P05 出土の丸瓦片である。P06 出土の 484 は肩部がやや張る須恵器甕で、外面に格子目のタタキ目、内面は同心円の当て具痕が残る。485 は P08 から出土した美濃須衛窯産の須恵器蓋で、口縁端部が屈曲する。486 は P09 から出土した須恵器短頸壺で、口縁部が直立し、体部は膨らむ。487 は P11 出土の須恵器坏で、口縁部が直線的に開く。488 は P13 から出土した須恵器甕の頸部片である。489 は P15 出土の須恵器甕の口縁部片で、頸部が緩やかに外反して開き、屈曲して直線的な口縁部となる。490 は P23 出土の底部外面に糸切り痕が残るロクロ土師器皿で、内面に漆が付着する（第4章第4節参照）。491 は雨落ち溝出土の須恵器甕で外面に縄目のタタキ目残り、内面は撫で調整されている。492 は SK223 に埋納されていた瑞花双鳥八稜鏡である。鏡は比較的厚手で、内区・外区には段が付き、縁が立つなど立体的で、裏面には瑞花と鳳凰の文様が交互に表現されている。

493～503 は基壇の盛土から出土した遺物である。493 と 494 はロクロ土師器の皿である。493 は口縁部がやや外反し、底部内面には成型時の隆起、底部外面にはヘラ切痕が残る。また、内面のほぼ全面と外面の口縁部付近に、煤と思われるタール状の付着物が付く（第4章第4節参）。494 は底部内面が平坦で、底部外面には糸切痕残り、内面の見込み部分に煤と思われるタール状の付着物が付く。495 は須恵器横瓶で、胎土や色調などから SZ11 周溝出土の 35 と同一固体である可能性が高い。496 は灰釉陶器小碗で、底面から胴部にかけて直線的に開く。高台は底部端部に短く逆台形の高台が付き、回転糸切り痕が残る。仏具である六器の可能性もある。497 は平瓦で、裏面に布目痕、外面に僅かに赤褐色の付着物が付く。498～502 は鉄釘である。498 は犬釘の頭部片、499 は釘の先端付近の破片である。500 は犬釘で 4 寸の長さがある。曲がった先端部から使用した痕跡が確認できる。501 と 502 は折釘の頭部片、503 は折釘で 3 寸釘である。

504～552 は、SB04 を含むグリッド（EG7～EI11）の遺物包含層など、遺構外から出土した古代の遺物であるが、礎石建物に関係する可能性が考えられるため、ここで合わせて報告する。504 は須恵器の坏身で、口縁端部が外反する。505 は 8 世紀と思われる須恵器有台盤である。506 は焼成が甘い須恵器の

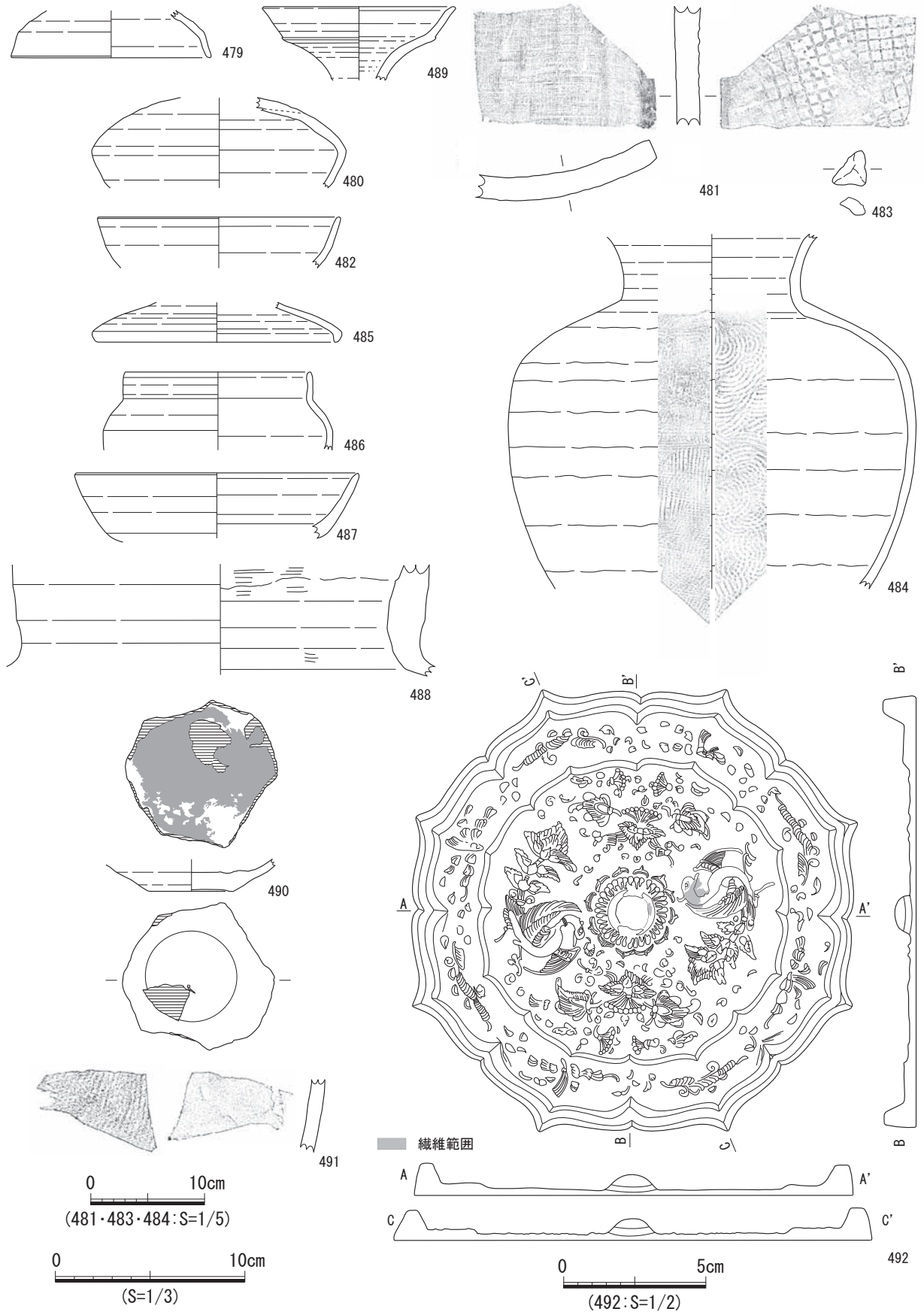
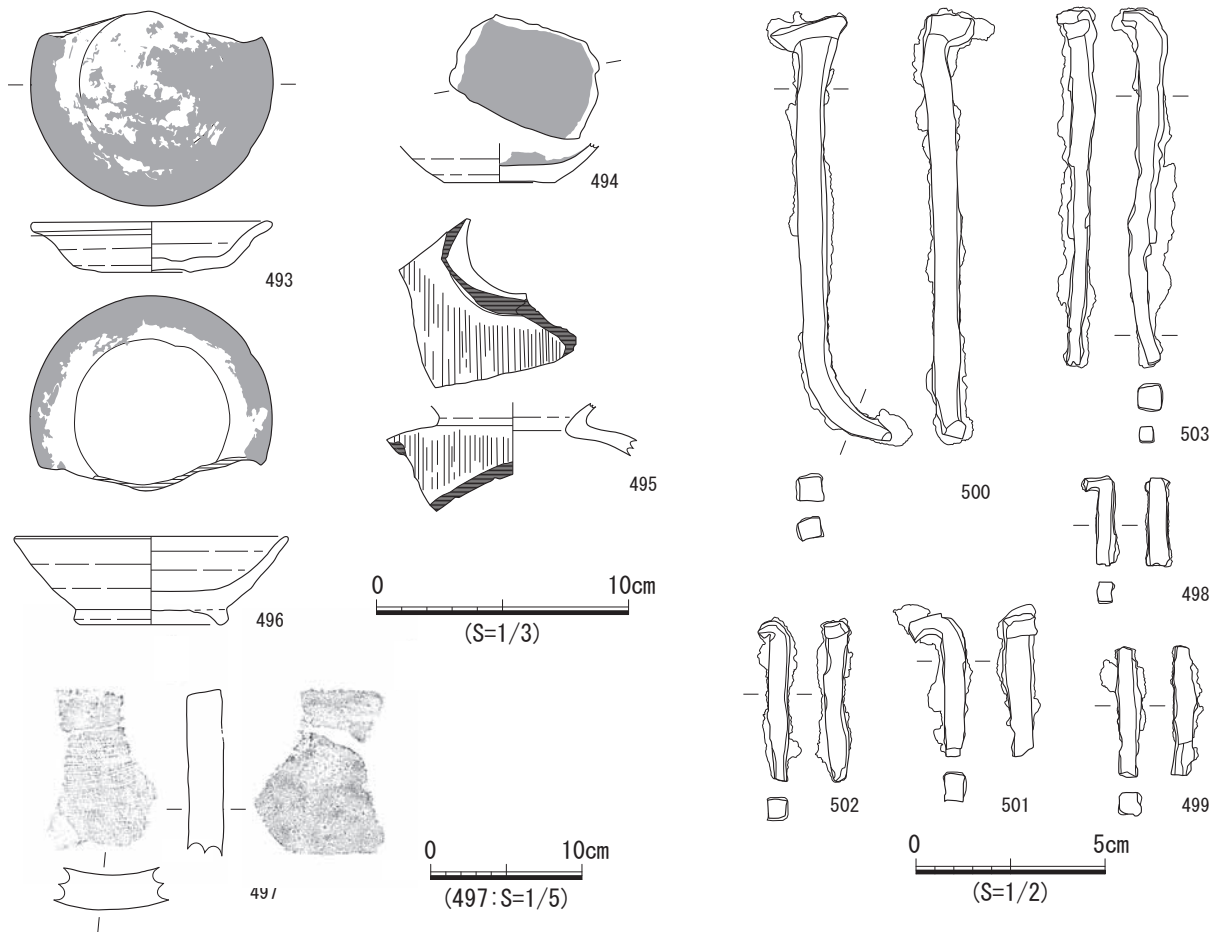


图 231 SB04 出土遺物 (1)

壺で、7世紀代と思われる。507は形状がほぼ判明した須恵器多口瓶で、8世紀末頃に位置づけられる黒笹36号窯出土のものと同形状や作りが類似する。しかし、それよりもやや大形で胎土も異なるため、在地産の可能性はある。508は灰釉陶器多口瓶の肩部から胴部上半部の破片で、肩部に子口頸部が残存する。内面から断面にかけて黒褐色の付着物が付く(第4章第4節参照)。黒笹90号窯式に類例があることから、9世紀後半頃のものと思われる。509は灰釉陶器多口瓶の子口頸部で、508と胎土・色調が似るが、大きさや器面調整がやや異なるため別個体と思われる。510はロクロ土師器の碗で、高い高台が付く。仏具である六器の可能性はある。511はほぼ完形の小碗で、10世紀頃のものと思われる。512は螺髪で、形状は円錐状であるが、先端を丸くする。513は丸瓦で端部に段を持つ。514～516は平瓦で、凹面に布目痕、凸面に叩き目が残る。518～520は熨斗瓦である。521は長方形の硯

基壇出土遺物



SB04 周辺出土遺物

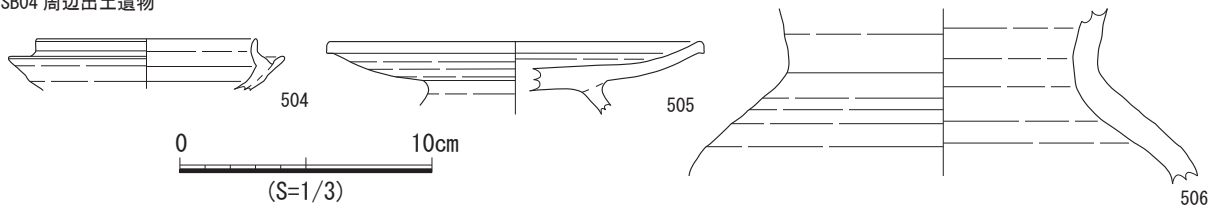


図 232 SB04 出土遺物 (2)

SB04 周辺出土遺物

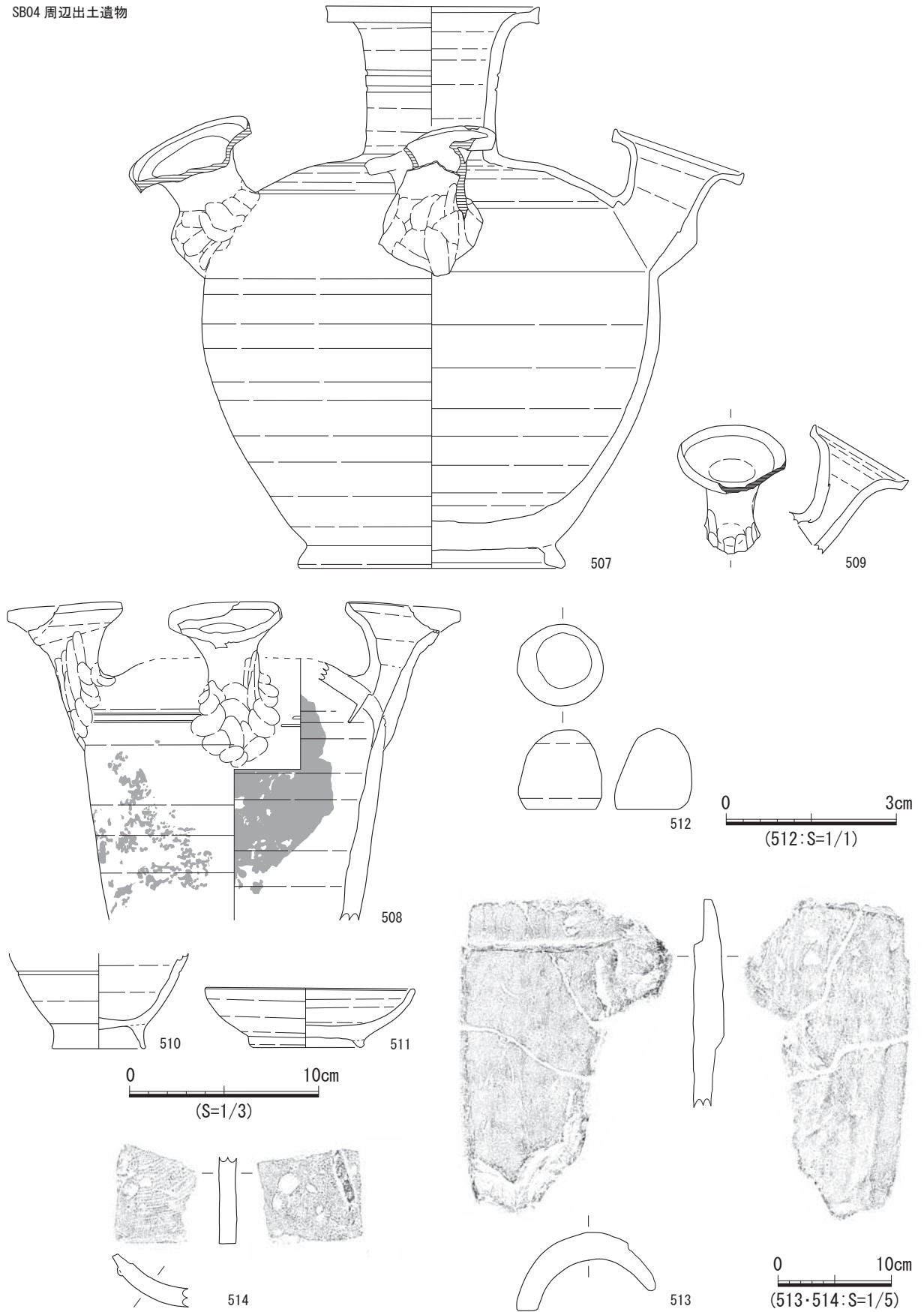


图 233 SB04 出土遺物 (3)

で、墨痕が残る。522 は砥石片である。523 は円頭釘で、円盤形の頭頂部に先端が毀損した角形の基部が付く。524 と 525 は基壇上面で出土した筒状銅製品で、524 の幅が 525 よりもやや大きい。帯状の銅板を筒状に曲げ、両端部には各 2 個の穴を穿いてあり、穴内には棒状の鉄製品が残存する。525 に残

SB04 周辺出土遺物

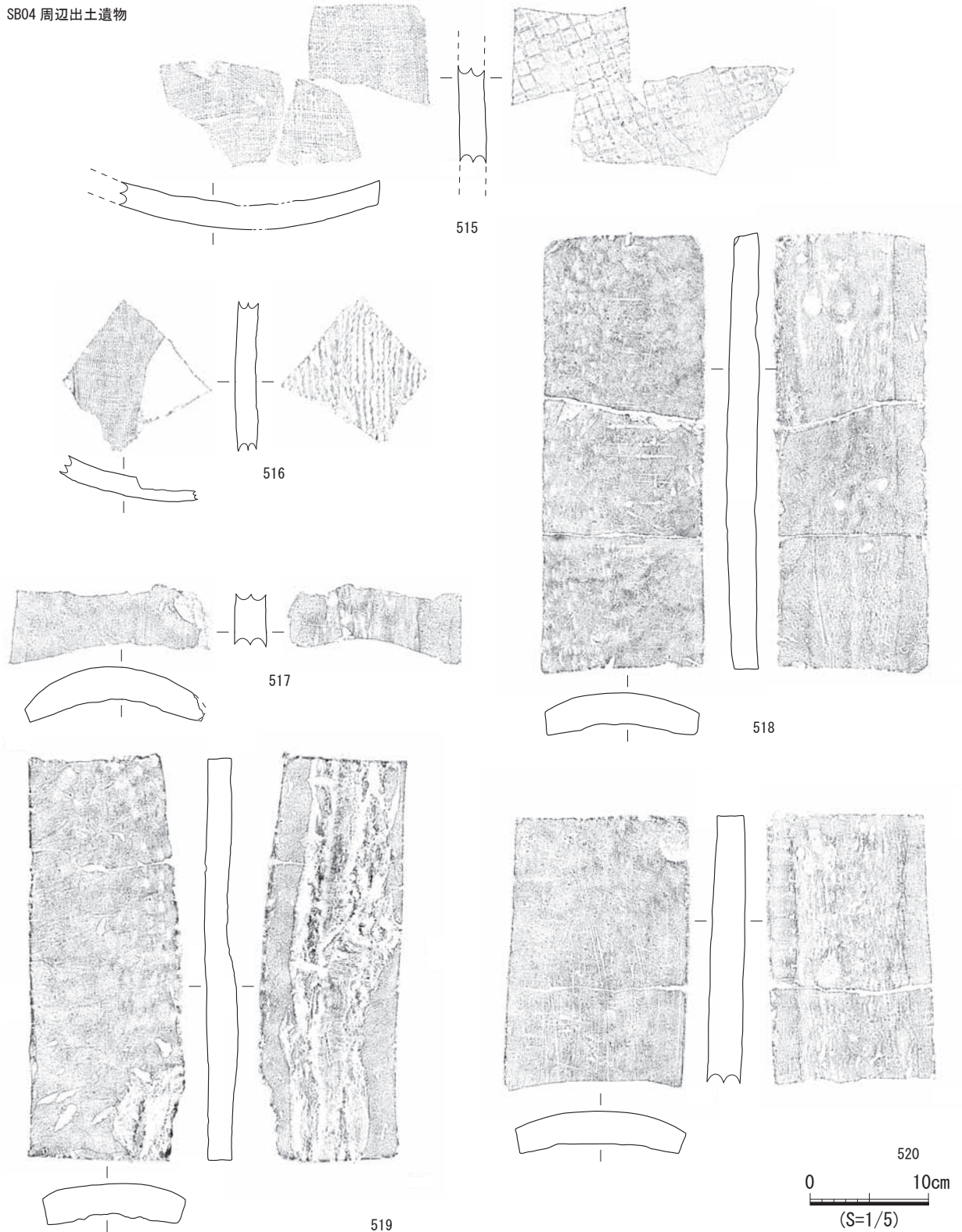


図 234 SB04 出土遺物 (4)

る鉄製品の形状から錠のような固定具と考えられ、筒状銅製品に通した棒とを固定する役割であったと考える。2つの銅製品の歪のない部分の曲線はほぼ同じであることから、直径は5.0 cmほどであったと思われる。須弥壇の近くで出土していることから、仏像の后背の竿の飾り金具である可能性が高い。526は用途不明の鉄製品で、断面が扁平な棒状の板を直角に屈曲させている。527～552は釘類で、主にSB04の基壇内から東面にかけて出土した。527～529は約4寸余りの大形の釘である。530・532～535は3寸以下の釘である。540は頭頂部を切断した切釘で、531は折釘である。536～552は、先端部若しくは頭部を欠損する。これら釘の多くが形状の歪みや欠損が確認できることから、建物等に使用したと考えられる。

時期 礎石建物の礎石掘方から出土した遺物の多くが、8世紀初めと考えられるSI25～SI27出土遺物と同時期の遺物であるが、P03から出土した482とP23の束床から出土した490、基壇整地土から出土した493や494、10世紀後半頃に製作された瑞花双鳥八稜鏡(492)を須弥壇下に埋めた行為が創建時のことであると考えると10世紀後半頃と考えられる。

1) 礎石建物跡全般に関して、久保智康氏のご教示を得た。

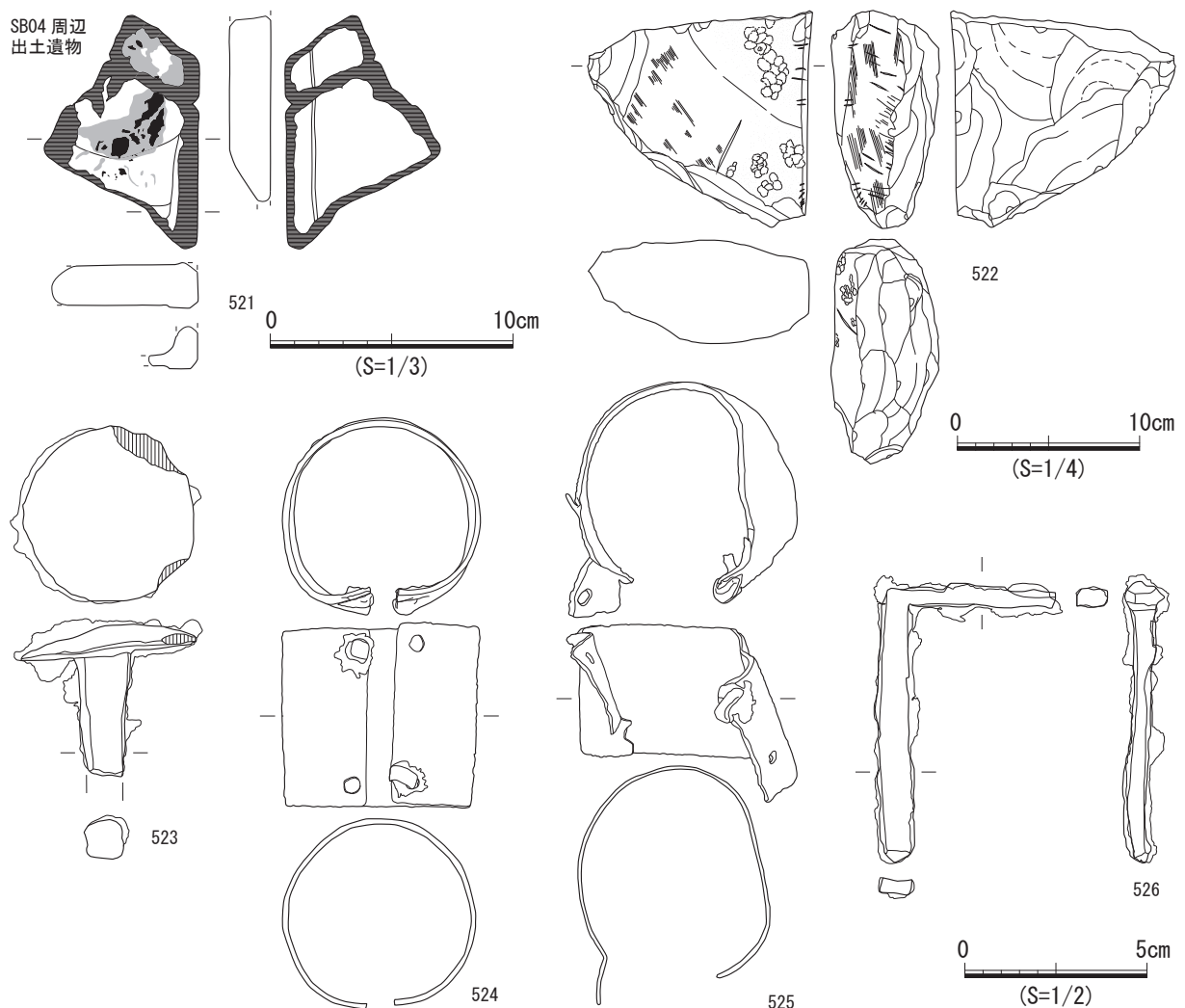


図 235 SB04 出土遺物 (5)

SB04 周辺出土遺物

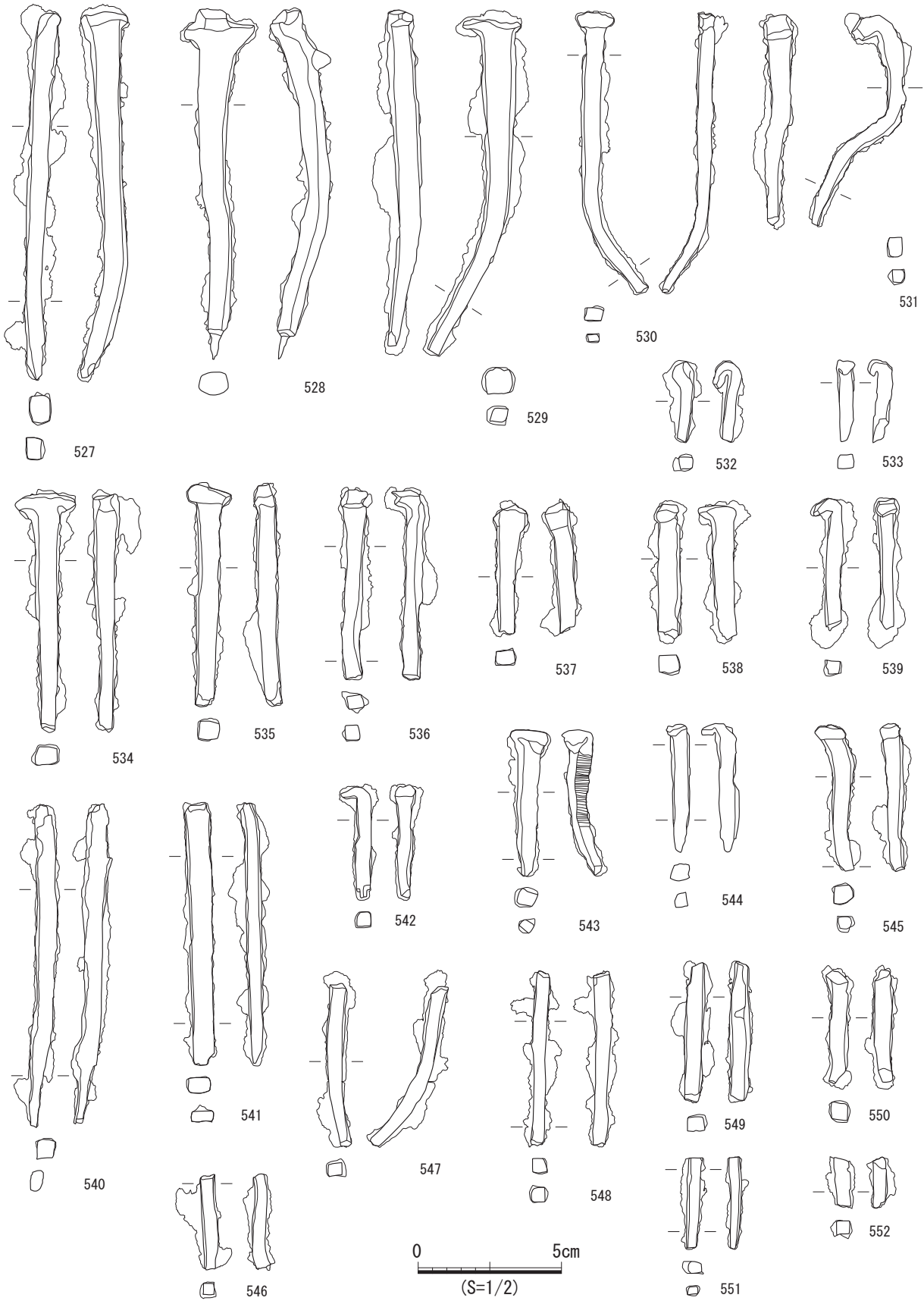


图 236 SB04 出土遺物 (6)

SB05 (図 237)

検出状況 DF19～DI23 グリッド、IV層の上面で検出した掘立柱建物である。畑地として利用されていた場所であり、西から南にかけては段切り造成の影響を受けている可能性がある。緩斜面上に4基の柱穴を検出したが、柱配置は長方形で、柱間が1間(1.46m)×1間(2.08m)である。長軸の方位はN-83°-Eであり、SB01～SB04、SB07、SB08 とほぼ同じである。

柱穴 確認した4基の柱穴にはP01～P04の番号を付した。直径は0.32m～0.40m、深さ0.29m～0.46mで、平面形は不整円形若しくは不整楕円形である。P01、P03、P04に比べ、斜面上方にあるP02はやや深い。なお、いずれの柱穴の埋土にも炭化物が含まれる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 長軸方位の類似性から古代の遺構と考えられる。

SB06 (図 238)

検出状況 EH1～EI2 グリッド、IV層の上面で検出した掘立柱建物である。畑地として利用された場所であり、西から南にかけては段切り造成の影響を受けている。4基の柱穴を検出したが、重複関係からSK485・SK506・SK511・SD32 よりも古く、SK505 よりも新しい。柱配置は長方形で、柱間が1間(1.86m)×1間(2.46m)となり、SB05 と類似する。長軸の方位はN-12°-Wである。

柱穴 確認した4基の柱穴にはP01～P04の番号を付した。直径は0.33m～0.38m、深さ0.05m～0.42

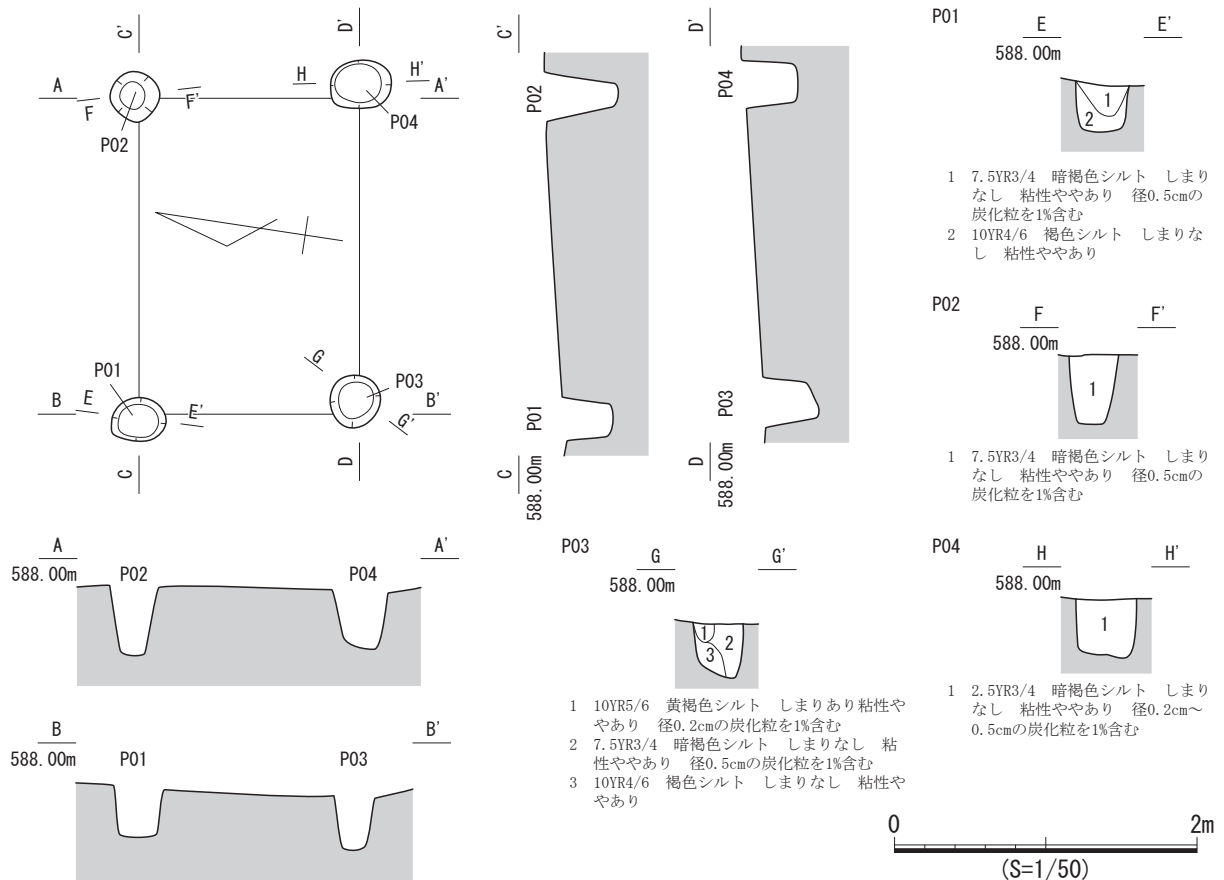


図 237 SB05 遺構図

mで、平面形は不整円形若しくは不整楕円形である。P01、P02は掘方が深く、柱痕跡状の堆積も認められた。

遺物出土状況 P04の1層と2層から灰釉陶器が出土した。

出土遺物 553は1層から出土した、灰釉陶器の碗である。重ね焼痕があり、内面に自然釉が付着しているが、底部内面が摩耗する。

時期 出土した灰釉陶器から、10世紀前半頃と考えられる。

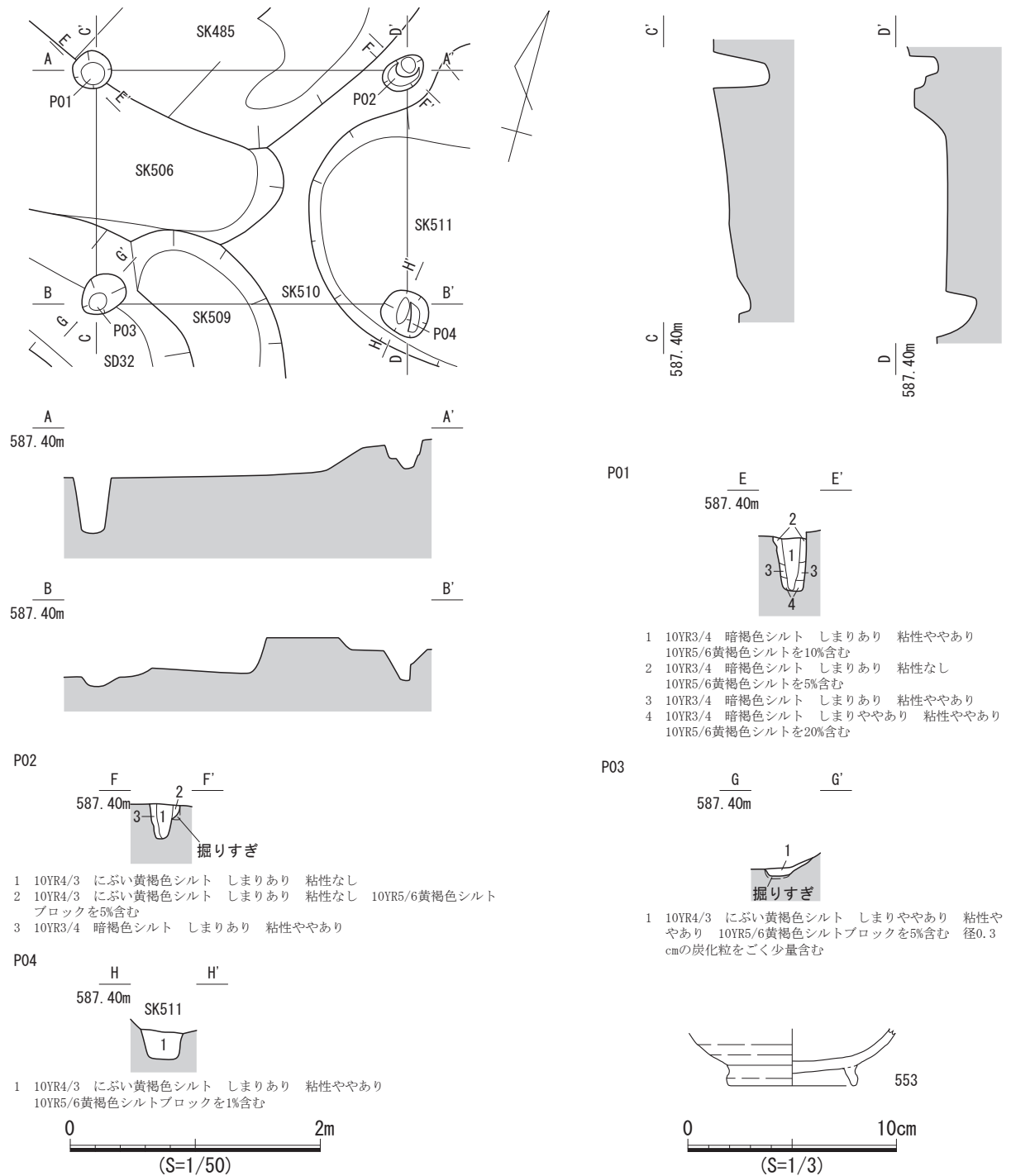


図 238 SB06 遺構図、出土遺物

SB07 (図 239)

検出状況 EJ1～EK2 グリッド、IV層の上面で検出した掘立柱建物である。畑地として利用された場所であり、西から南にかけては段切り造成の影響を受けている。8基の柱穴を検出したが、柱の配置状況からは2基の柱穴を見落としている可能性が高い。柱配置は長方形で、桁行3間(4.92m、柱間1.12m-2.4m-1.4m)×梁行1間(1.42m)の側柱建物である。長軸の方位はN-86°-Wであり、SB01～SB05、SB08 とほぼ同じ方位となる。

柱穴 確認した8基の柱穴にはP01～P08の番号を付した。直径は0.22m～0.35m、深さ0.12m～0.26mで、平面形は不整円形若しくは不整楕円形である。P06の埋土では柱痕跡状の堆積を確認したが、他の柱穴の埋土は単層若しくは水平堆積であった。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 長軸方位の類似性から古代の遺構と考えられる。

SB08 (図 240)

検出状況 E03～EP3 グリッド、IV層の上面で検出した掘立柱建物である。畑地として利用された場所であり、耕作等の影響を受けている。7基の柱穴を検出したが、発掘区外に延びると思われる。土坑や柱穴状の遺構が密集する場所であり、重複関係からSK795やSP61よりも古く、SK738やSK787よりも新しい。柱配置は長方形で、桁行3間(5.18m、柱間1.62m-1.74m-1.82m)×梁行2間(3.26m、柱間1.82m-1.44m)の側柱建物である。長軸の方位はN-1°-Wであり、SB01～SB05、SB07 とほぼ同じ方位となる。

柱穴 確認した7基の柱穴にはP01～P07の番号を付した。直径は0.37m～0.60m、深さ0.18m～0.46mで、平面形は不整円形若しくは不整楕円形である。どの柱穴からも、柱痕跡状の堆積は確認できず、埋土は単層あるいは2層か3層の水平堆積であった。

遺物出土状況 P06の1層から灰釉陶器と銭貨が出土した。

出土遺物 554は開元通寶である。唐で621年に初鑄されたものである。

時期 出土した灰釉陶器から、平安時代の遺構と考えられる。

SB09 (図 241～243)

検出状況 EK5～EM6 グリッド、IV層の上面で検出した掘立柱建物である。畑地として利用された場所であり、南から東にかけては段切り造成の影響を受けている。特に東部は大きく削平されており、柱穴を確認できなかった。15基の柱穴を検出したが、削平の影響により、南あるいは東側にさらに延びる可能性がある。柱配置は削平の影響により不明であるが、検出した範囲では、桁行4間(7.36m、柱間1.9m-1.7m-1.34m-1.96m)×梁行4間(6.78m、柱間2.3m-1.67m-1.58m-1.24m)の側柱建物で、長軸の方位はN-65°-Eである。しかし、内部で検出した柱穴の位置は、北側に並ぶ柱穴とは柱筋が異なるものがあり、SB04の須弥壇の柱配置に類似した位置にあるものの、明確にはできなかった。なお、SI34～SI36と重複するが、いずれの遺構よりもSB09が新しい。

柱穴 確認した15基の柱穴にはP01～P15の番号を付した。直径は0.39m～1.54m、深さ0.09m～0.52mで、平面形は不整円形若しくは不整楕円形である。削平の影響により南側に位置するP013とP014は浅い。また、P08～P10は北側に並ぶP03・P04とは南北の柱筋がずれて、P09はP03とP04の中間の位置にあたる。P01・P02・P04・P05・P08の埋土中では、柱痕跡状の堆積を確認し、P01～P06、P08～P11の底

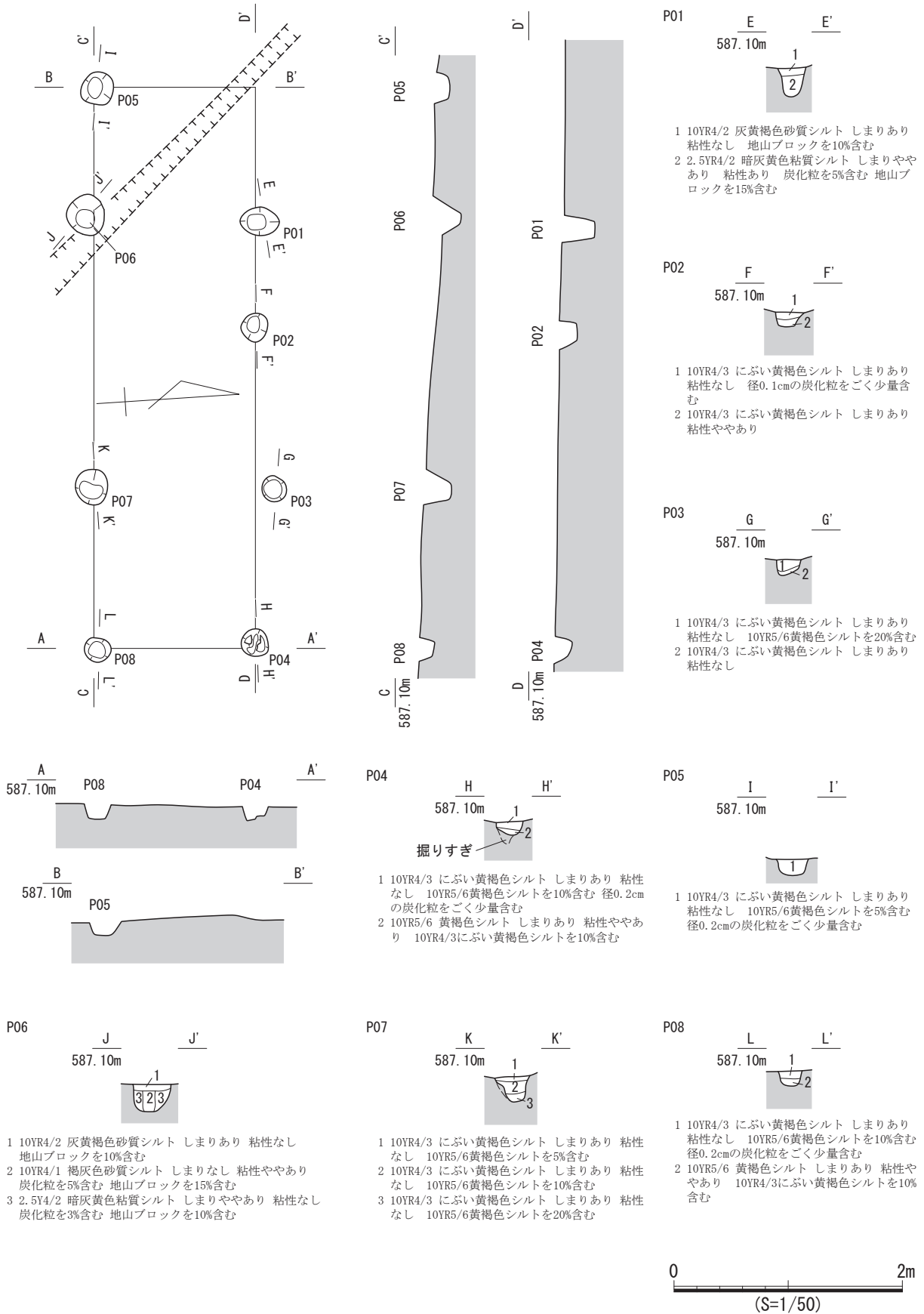


図 239 SB07 遺構図

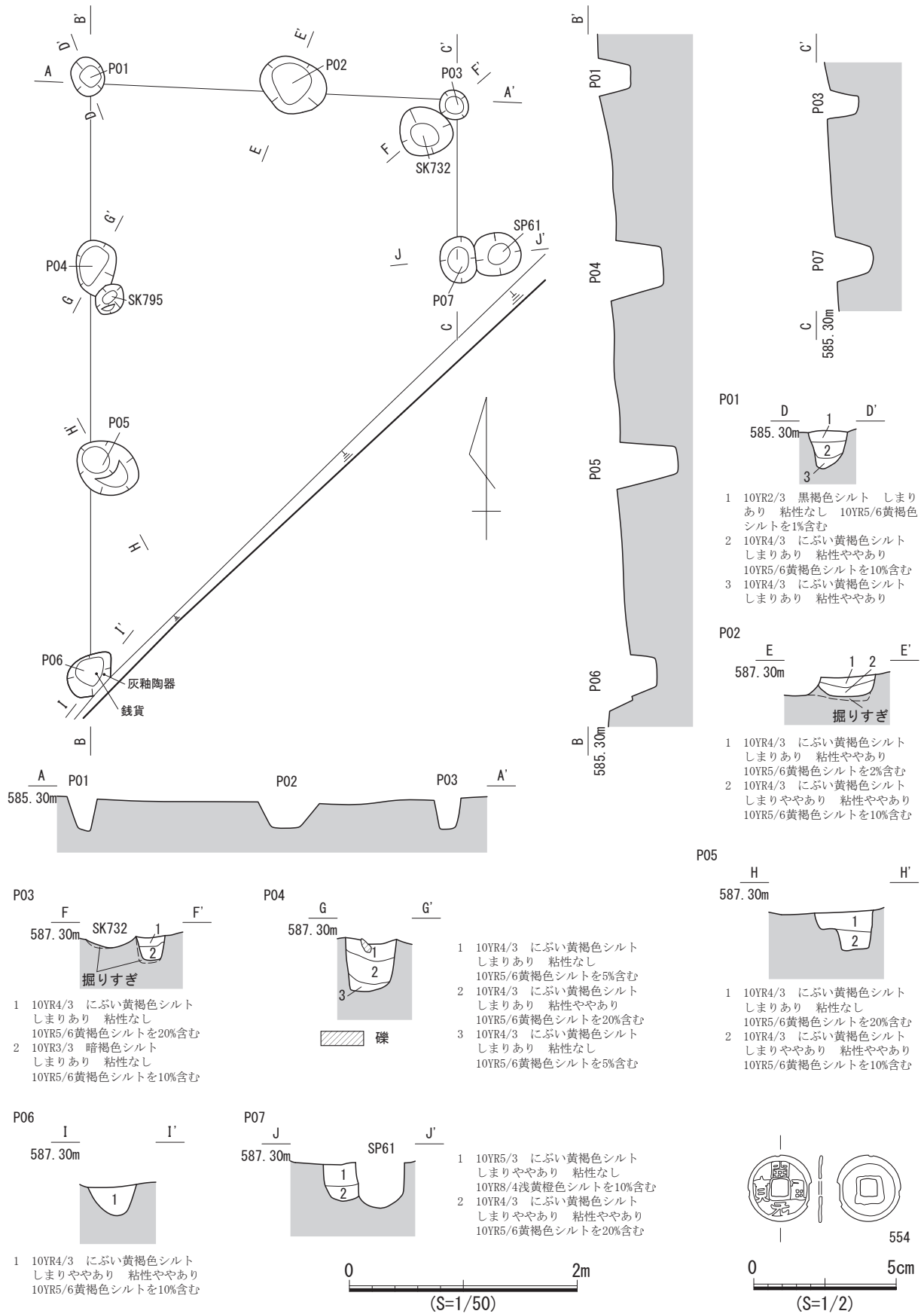


図 240 SB08 遺構図、出土遺物

面では柱当たりによる凹みや硬化を確認した。

遺物出土状況 P01～P09、P15 の埋土中から縄文時代から古代の遺物が出土したが、特徴的な出土状況を示すものはなかった。

出土遺物 555～558 はP03 から出土した。555 は縄文土器の深鉢で、隆帯と条線による文様を施す。556 は土師器碗で、口縁部が緩やかに立ち上がる。557 は灰釉陶器の皿で、無釉で底部内面が摩耗して

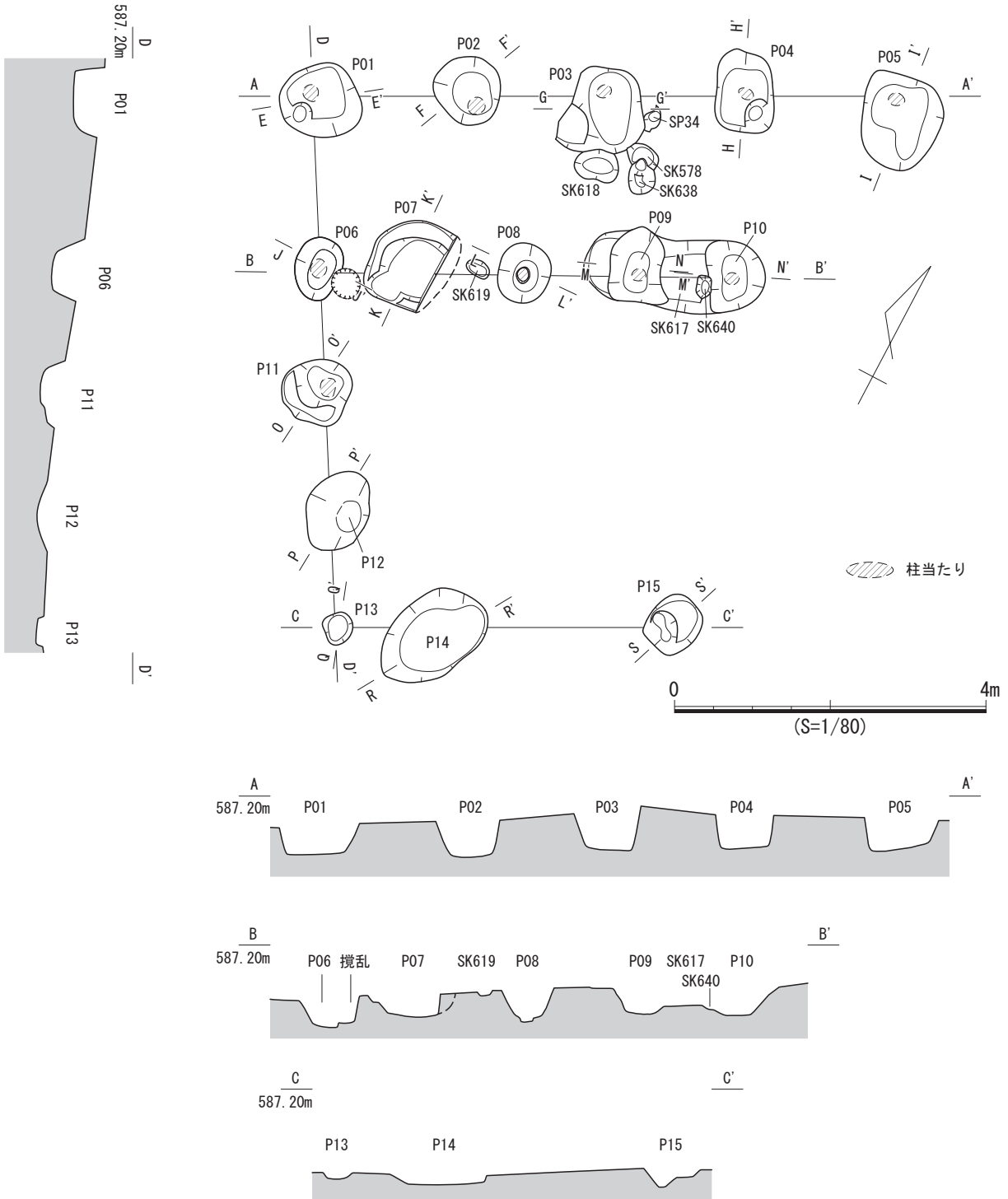
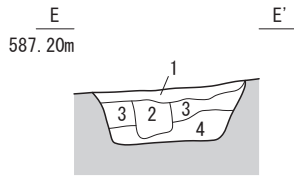


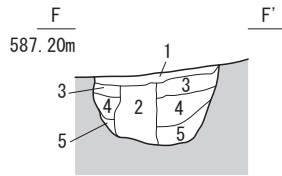
図 241 SB09 遺構図 (1)

P01



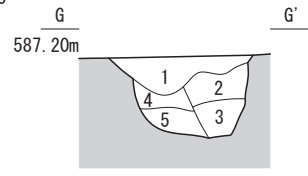
- 1 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト しまりなし 粘性なし
- 2 10YR3/1 黒褐色粘質シルト しまりなし 粘性あり IV層ブロックを1%含む 柱痕跡
- 3 10YR4/1 褐色シルト しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを1%含む
- 4 10YR2/1 黒色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む

P02



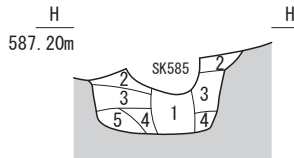
- 1 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト しまりなし 粘性ややあり
- 2 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを5%含む 柱痕跡
- 3 10YR4/1 褐色シルト しまりなし 粘性ややあり
- 4 10YR3/1 黒褐色シルト しまりなし 粘性なし IV層ブロックを10%含む
- 5 2.5Y3/1 黒褐色シルト しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを50%含む

P03



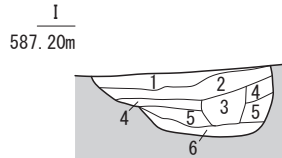
- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~10cmのIV層ブロックを7%含む
- 2 10YR2/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~5cmのIV層ブロックを1%含む
- 3 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~5cmのIV層ブロックを10%含む
- 4 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~5cmのIV層ブロックを10%含む
- 5 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~10cmのIV層ブロックを40%含む

P04



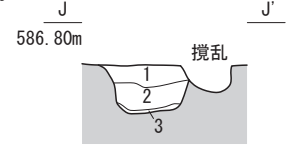
- 1 10YR2/3 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを3%含む 柱痕跡
- 2 10YR2/3 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1~1cmのIV層ブロックを1%含む
- 3 10YR2/3 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1~1cmのIV層ブロックを10%含む
- 4 10YR2/3 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを10%含む
- 5 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり

P05



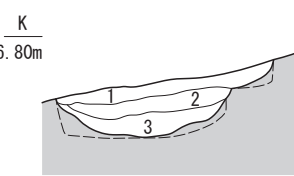
- 1 10YR3/3 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを10%含む
- 2 10YR3/3 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを20%含む 径1cmの炭化粒を1%含む
- 3 10YR2/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを1%含む
- 4 10YR2/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを10%含む
- 5 10YR2/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを20%含む
- 6 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり

P06



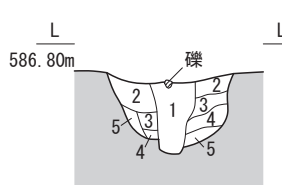
- 1 2.5Y4/1 黄灰色シルト しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを3%含む
- 2 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト しまりなし 粘性なし IV層ブロックを10%含む
- 3 2.5Y2/1 黒色砂質シルト しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを30%含む

P07



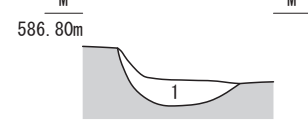
- 1 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト しまりなし 粘性なし
- 2 2.5Y3/1 黒褐色シルト しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを3%含む
- 3 10Y3/1 黒褐色シルト しまりあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む

P08



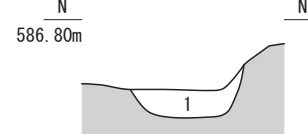
- 1 10YR2/3 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを3%含む 柱痕跡
- 2 10YR2/3 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~5cmのIV層ブロックを10%含む
- 3 10YR2/3 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~5cmのIV層ブロックを20%含む
- 4 10YR2/3 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径3~5cmのIV層ブロックを20%含む
- 5 10YR2/3 黒褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径3~5cmのIV層ブロックを40%含む

P09



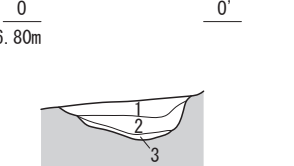
- 1 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~5cmのIV層ブロックを10%含む

P10



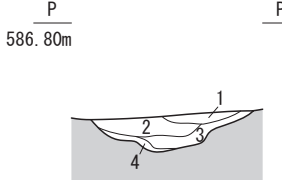
- 1 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~5cmのIV層ブロックを10%含む

P11



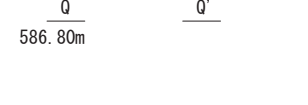
- 1 10YR3/1 黒褐色砂質シルト しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを3%含む
- 2 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを10%含む
- 3 10YR4/1 褐色粘質シルト しまりあり 粘性ややあり IV層ブロックを20%含む

P12



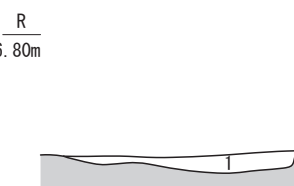
- 1 10YR3/3 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 2 10YR2/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを2%含む
- 3 10YR3/3 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを10%含む
- 4 10YR3/3 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを2%含む

P13



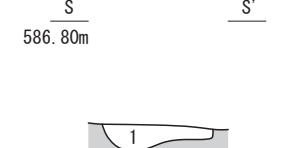
- 1 10YR3/3 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径1~5cmのIV層ブロックを20%含む

P14



- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり

P15



- 1 10YR2/2 黒褐色土 ややしめる 粘性ややあり

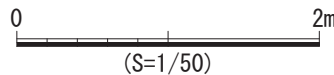


図 242 SB09 遺構図 (2)

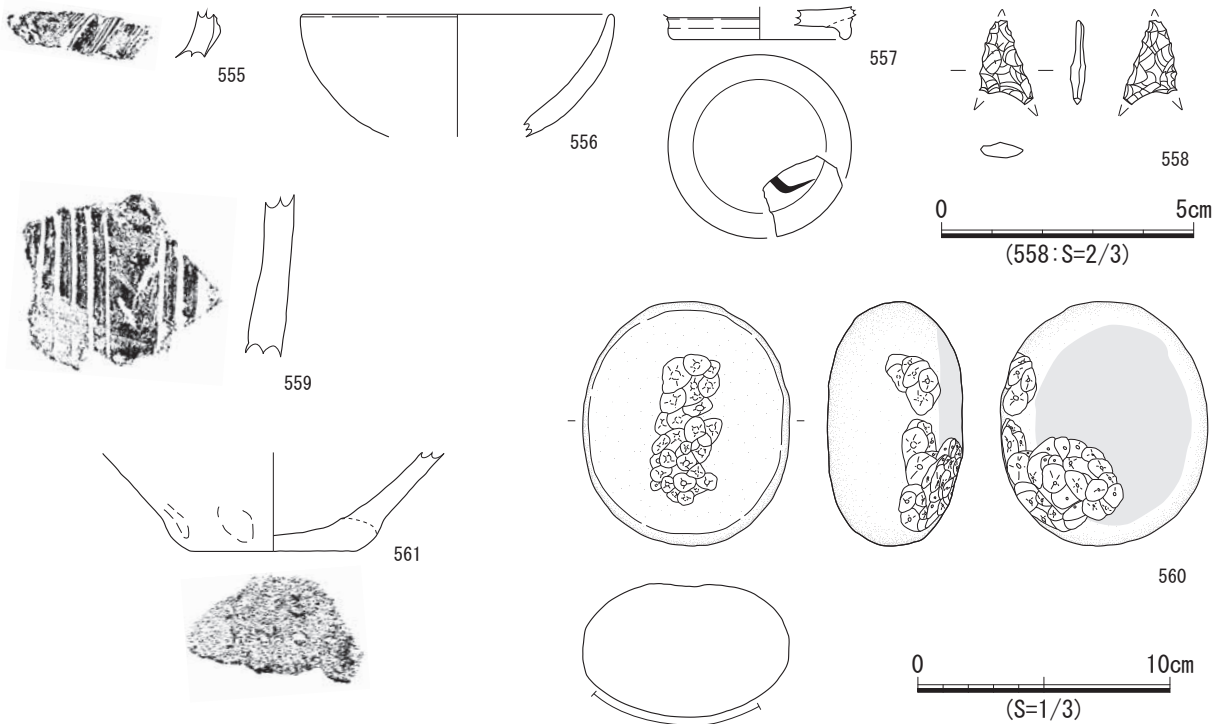


図 243 SB09 出土遺物

いる。底部外面に墨書があり、判読不能であるが「はらい」の部分を確認できる。558 は基部の挟りが浅い石鏝である。559 は P05 から出土した縄文土器の深鉢で、縦位沈線と矢羽状沈線による文様を施す。560 は P08 から出土した磨石・敲石類で、扁平な円礫の表面に磨痕や敲打痕がある。561 は P15 から出土した縄文土器の深鉢底部片である。

時期 P03 の埋土 1 層から出土した灰釉陶器 (557) から、10 世紀後半よりも前と考えられる。

4 柵

SA01 (図 244)

検出状況 A 地点 DG19~EH1 グリッド、P1 と P3 は IV 層の上面、P2 は SK476、P4 は SK487 の底面で検出した。各柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。本遺構は SK476、SK487 より古い。

規模・形状 4 基の柱穴が直線状に並ぶ。全長 7.18m、柱間距離は西から 2.34m-2.02m-2.82m である。長軸の方位は N-72° -W である。

柱穴 柱穴の平面形は P1 は不整楕円形、P2 は不整円形、P3 と P4 は楕円形である。各柱穴で柱痕跡を確認した。柱痕跡、掘方埋土ともに暗褐色若しくは褐色のシルトである。P3 と P4 の上層にはにぶい褐色のシルトが堆積する。いずれの柱穴も壁面は垂直に立ち上がる。P1 は上端の長軸 0.63m と他の柱穴に比べて大きい。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 遺物が出土していないため、時期は判然としないが、古代と思われる SB05 や SB06 などと近い位置にあることから、古代と考えたい。

SA02 (図 245)

検出状況 C 地点 EI4~EJ6 グリッド、IV 層の上面で検出した。各柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。P4 は SK236 と重複し、本遺構は SK236 より古い。

規模・形状 4基の柱穴が直線状に並ぶ。全長 3.16m、柱間距離は西から 1.06m-1.00m-1.10mである。長軸の方位はN-88°-Wである。SA03 とほぼ同じ軸線上に設置されている。

柱穴 柱穴の平面形は P1 が不整形、それ以外は円形である。いずれも柱痕跡は確認できなかったが、P2 と P4 で柱当たりを確認した。埋土はすべて暗褐色土である。P2 と P3 は亜角礫を含む。P4 は2層に炭化物・炭化材を多く含む。P1 は上端の長軸 1.08m と他の柱穴に比べて大きい、これは別遺構の可能性のある2層を含むためである。

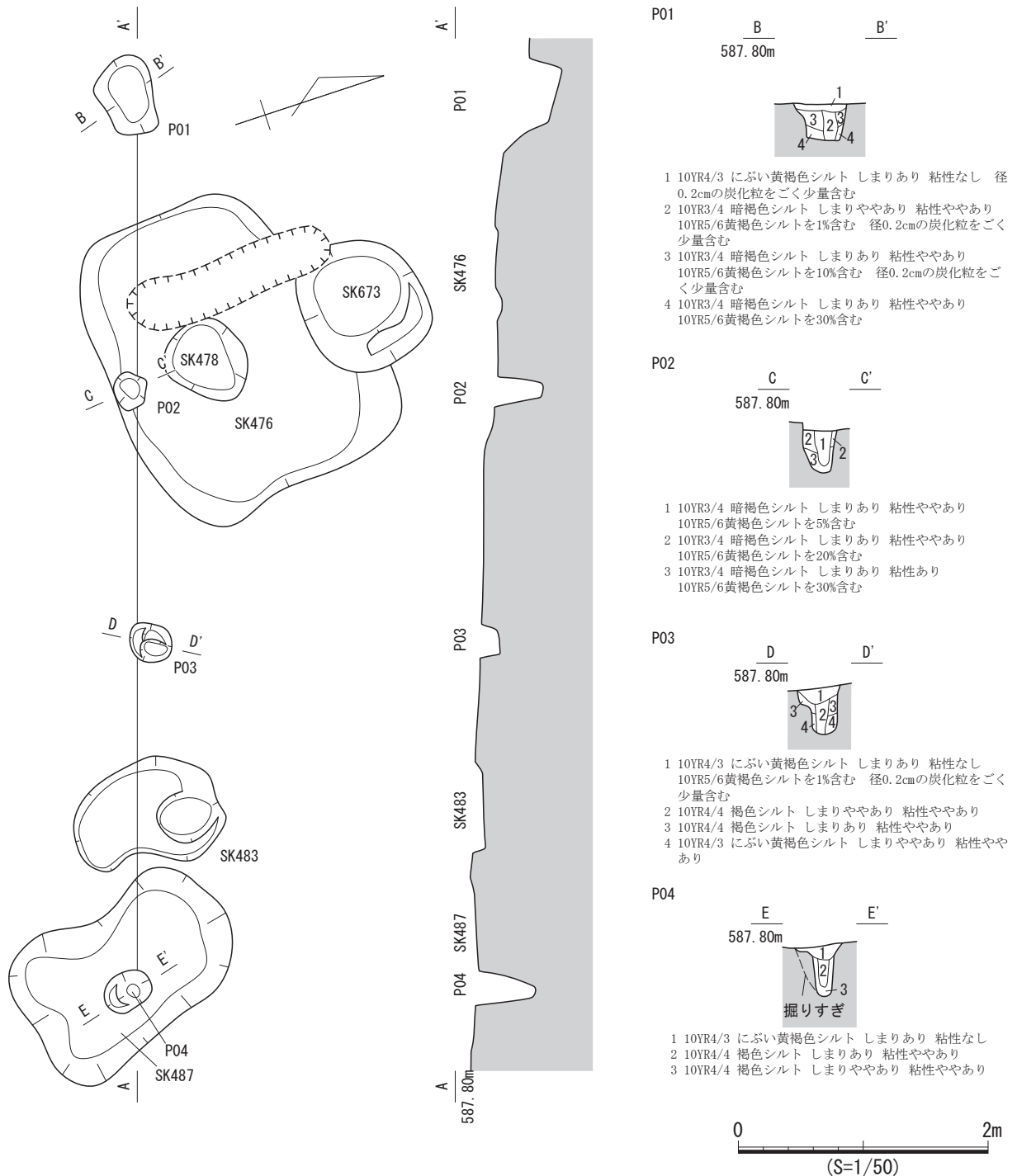


図 244 SA01 遺構図

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 遺物が出土していないため、時期は判然としないが、古代と思われる SB04 や SB07 などと方位が類似することから、古代と考えたい。

SA03 (図 246)

検出状況 C地点 EJ5~EJ6 グリッド、IV層の上面で検出した。各柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。

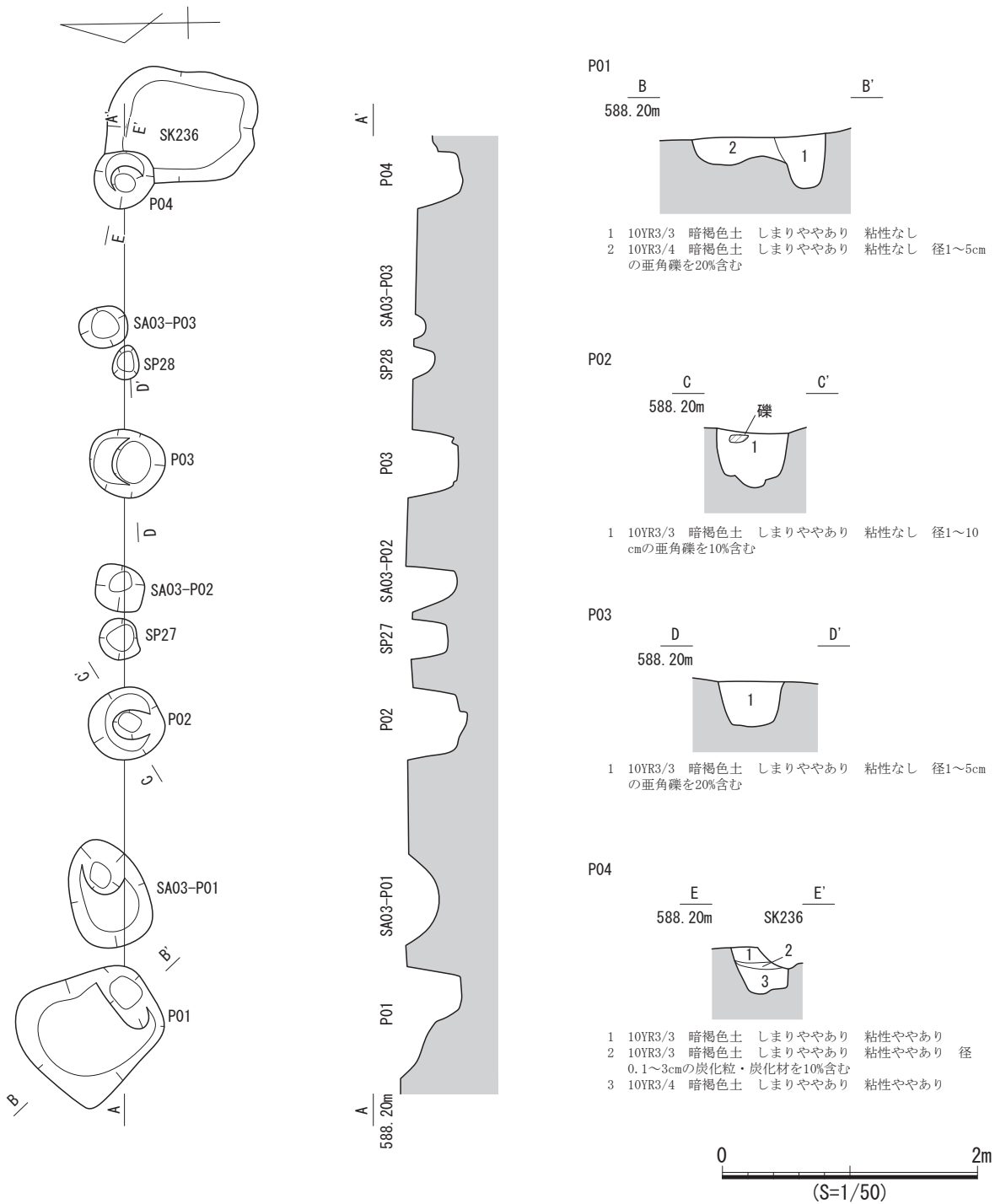


図 245 SA02 遺構図

規模・形状 3基の柱穴が直線状に並ぶ。全長2.28m、柱間距離は西から1.28m-1.00mである。方位はN-87°-Wである。SA02とほぼ同じ軸線上に設置されている。

柱穴 柱穴の平面形はP1は楕円形、P2とP3は円形である。いずれも埋土は暗褐色土で単層である。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 遺物が出土していないため、時期は判然としないが、古代と思われるSB04やSB07などと方位が類似することから、古代と考えたい。

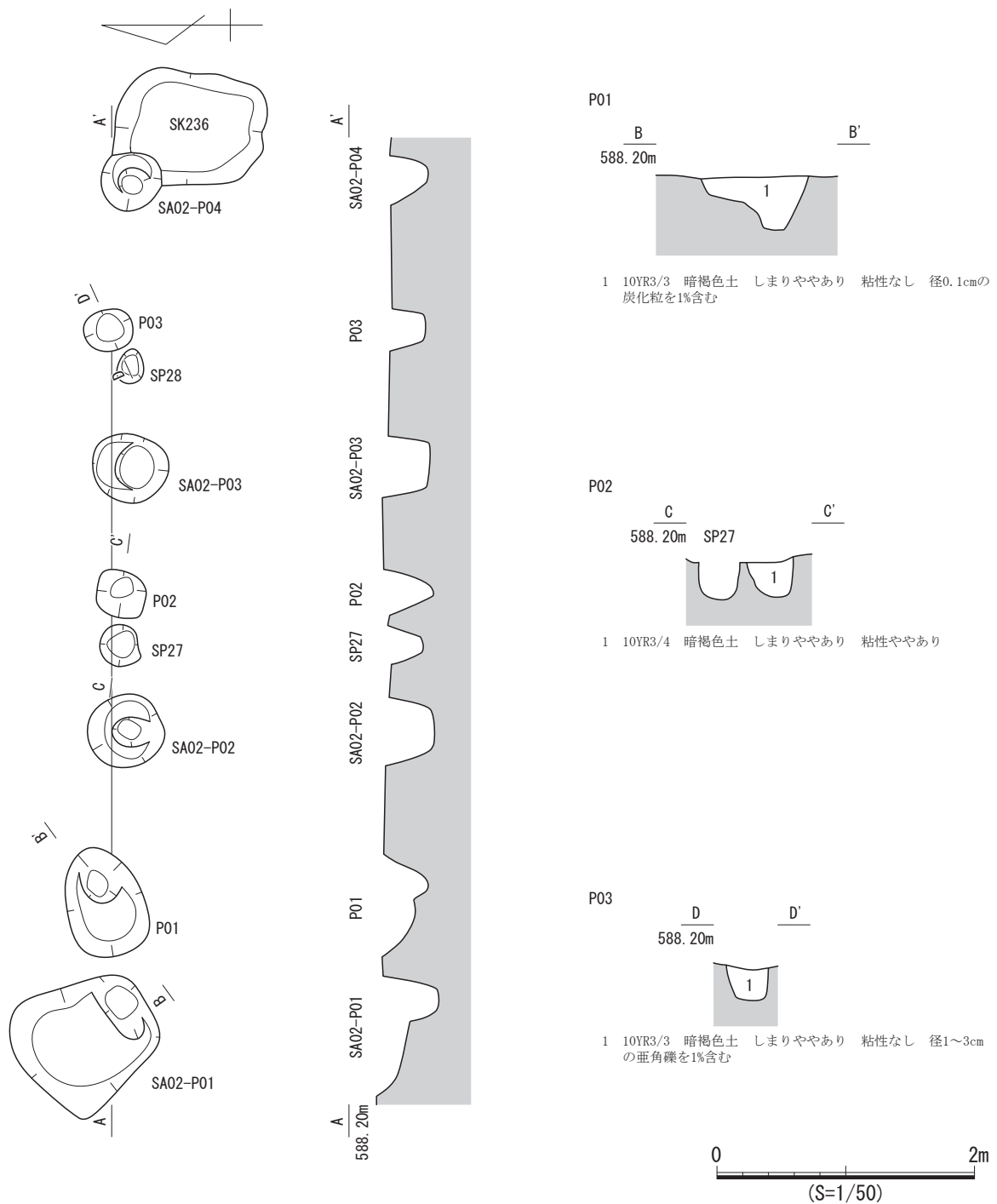


図 246 SA03 遺構図

SA06 (図 247)

検出状況 A地点 EN2~EN3, EK6~EM6 グリッド、IV層の上面で検出した。各柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。P1はSK689、P2はSK703、P3はSK807と重複する。本遺構はいずれの遺構より古い。

規模・形状 3基の柱穴が直線状に並ぶ。全長3.36m、柱間距離は西から1.68m-1.68mである。長軸の方位はN-88°-Wである。

柱穴 柱穴の平面形はP1とP2は楕円形、P3は円形である。すべての柱穴の各層に黄褐色ブロック土を含む。すべての柱穴で柱痕跡を確認した。柱痕跡はいずれもにぶい黄褐色土である。P1から縄文土器、P2から須恵器、石器が散在して出土した。

出土遺物 562は須恵器甕の胴部片で、外面には平行タタキ目が残る。563は折釘である。

時期 少量の遺物しかないため、時期は判然としないが、SB08と近い位置にあり、SA02などと方位が類似することから、古代と考えたい。

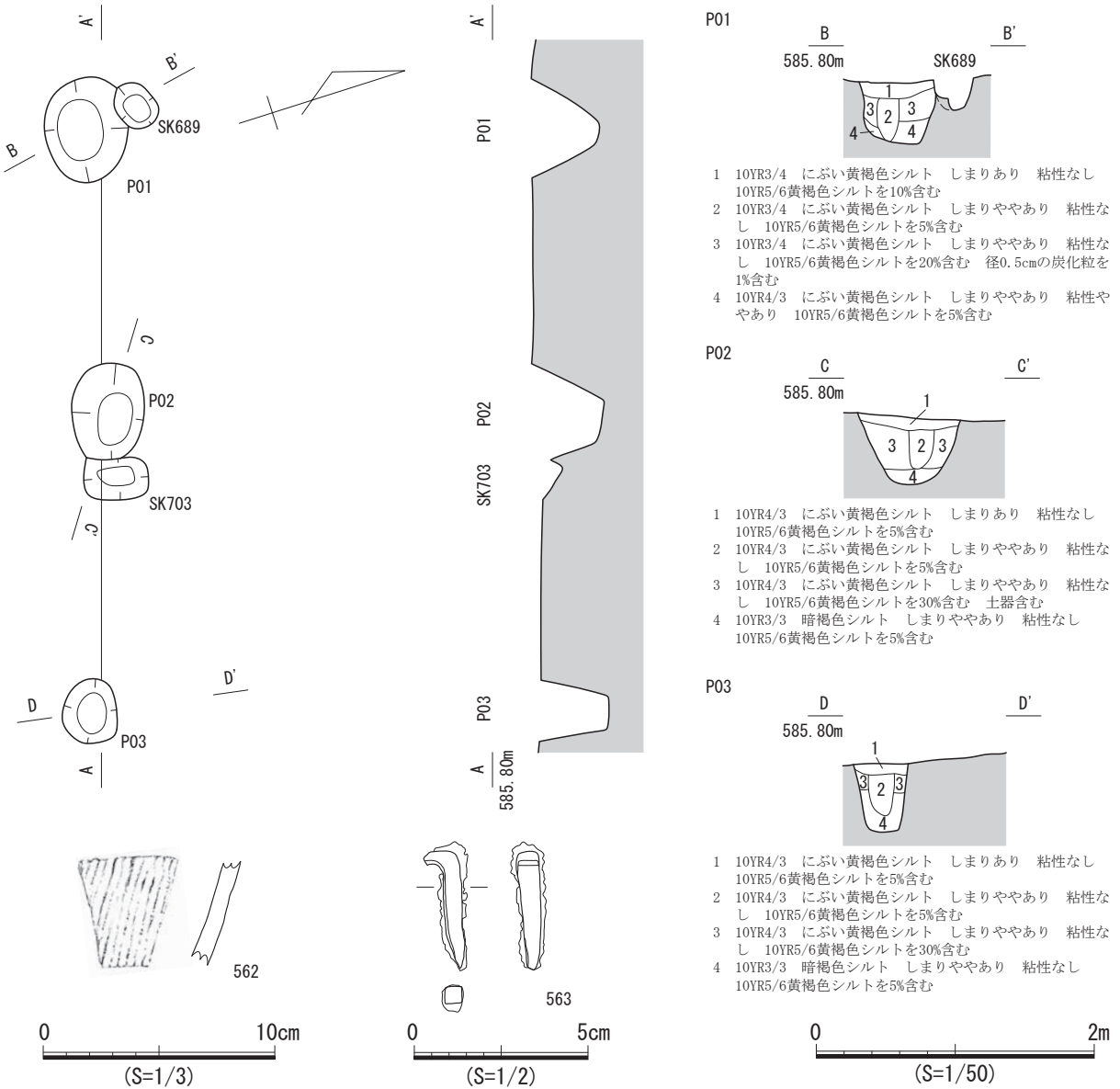


図 247 SA06 遺構図、出土遺物

5 遺物集積

SU01 (図 248~図 249)

検出状況 SI23 などを検出した平場の東側の ED13~EE13 グリッドに位置し、IV層の上面から SZ09 などの埋土上面で検出した。遺物集積に伴う掘方は確認することができなかったが、SZ09 周溝が窪地状となっていた部分に集積された可能性が考えられる。堅穴建物群を検出した平場の東端部に位置することや、遺物にロクロ土師器が多く含まれることから、祭祀的な行為に伴うものであることも考えられる。遺物集積は約 1.80m×0.88mの楕円形に広がる範囲である。なお、遺物集積を除去したところ、SK143~SK145 の3基の土坑を検出した。径 0.5m内外の不整形形の浅い土坑であるが、SK143 と SK144 の埋土中からはロクロ土師器や灰釉陶器が出土しており、遺物集積の土器と時期差が認められないことから、遺物集積に関係する土坑と思われる。

遺物出土状況 南側に土師器甕、須恵器蓋・甕、金属製品が少量出土したが、大半はロクロ土師器と灰釉陶器で、多くが逆位や破片が積み重ねられたように出土した。

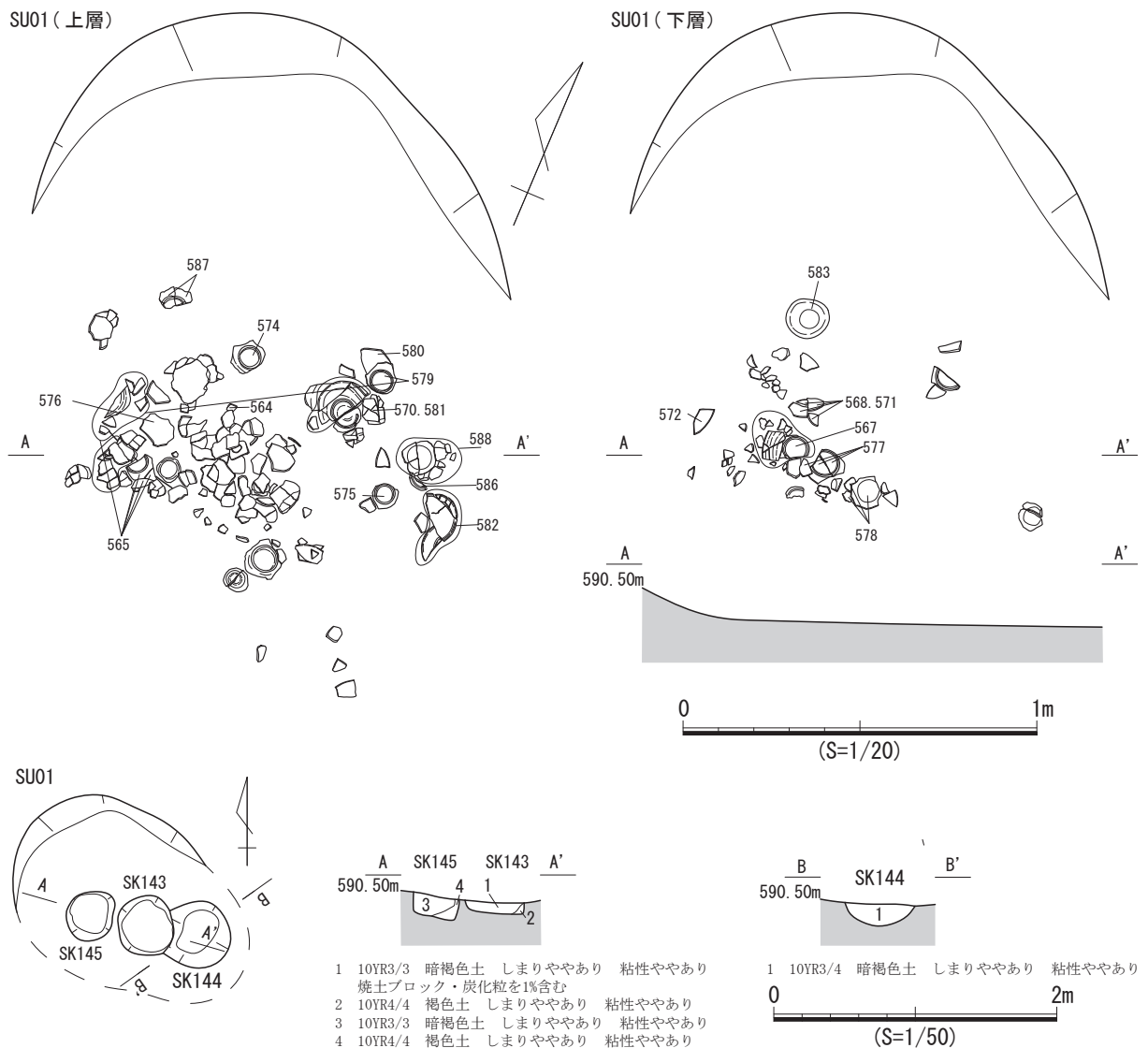


図 248 SU01 遺構図

SK143 出土遺物

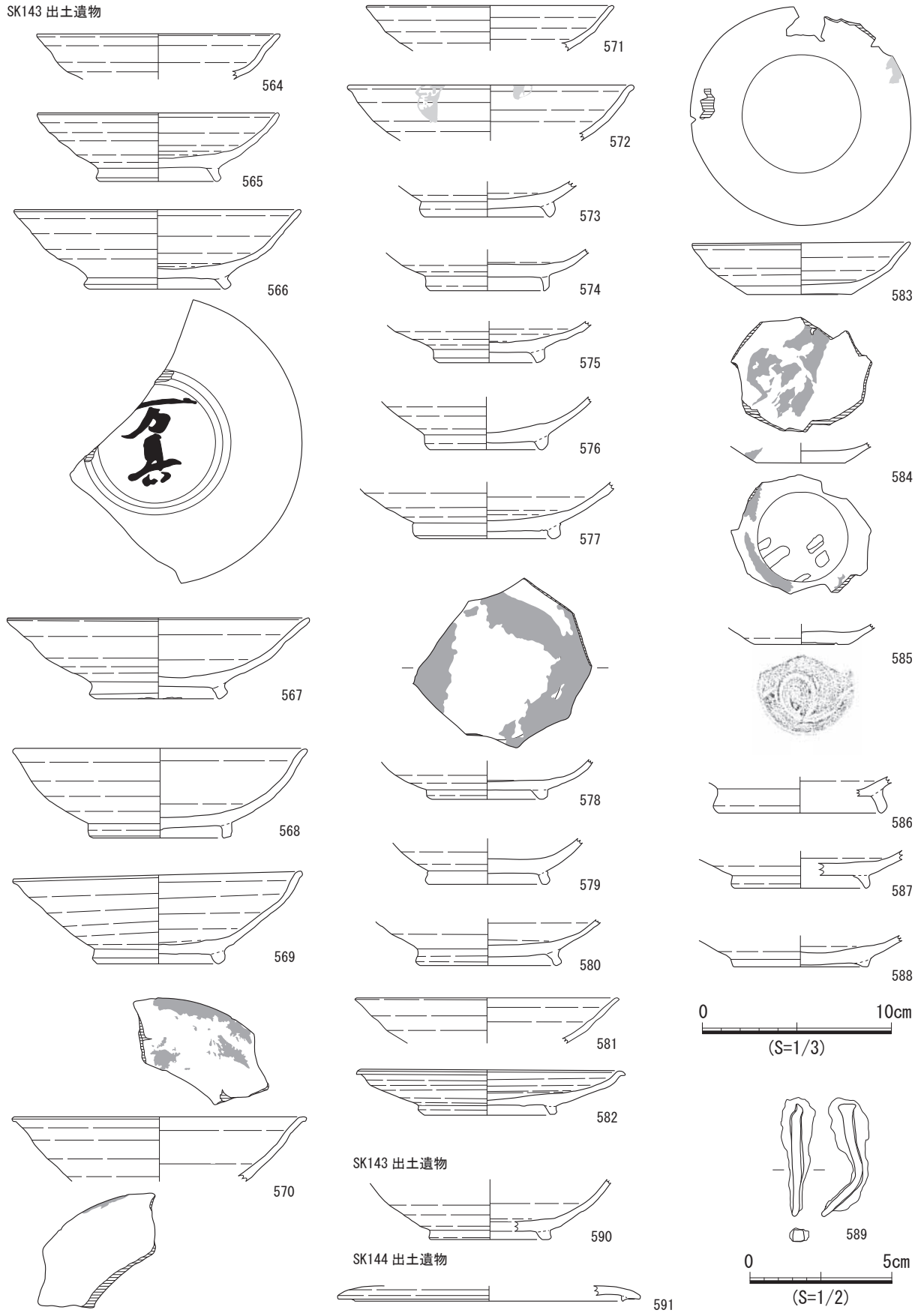


図 249 SU01・SK143・SK144 出土遺物

出土遺物 564～581 は灰釉陶器の碗である。564 は口縁部がやや湾曲して開く。565～567 は、口縁部が直線的に開き、ハ字状に開く高台が付く。これらの底部外面には回転糸切り痕が確認できる。566 では、底部外面に「万具」の墨書を確認した。568 は体部がやや膨らみ、口縁端部が少し外反する。長方形の高台を付け、底部外面には回転ヘラ削り調整する。569 は体部が直線的に開き、口縁部がやや内湾する。低く幅広の高台を付け、底部外面には回転ヘラ削り調整する。570 は口縁部が直線的に大きく開き、口縁端部が少し外反する。口縁端部から口縁部内面にかけて付着物が認められる。571 と 572 は口縁部が大きく開く。572 の口縁部内外面には、煤状の付着物が認められる。573～577 は、やや内湾する高台や低く幅広の高台を付ける。578 は低く幅広の高台を付ける。内面には煤状の付着物と、漆と思われる付着物を確認した。579 と 580 は、ハ字状に開く高台を付ける。581 は、口縁部が直線的に開く。582 は灰釉陶器皿で、口縁端部が内湾した後短く外反する。低く外に開く高台を付ける。583～585 はロクロ土師器皿である。583 は口縁部が直線的に開き、口縁部内面に煤状の付着物がみられ、灯明皿として使用された可能性が考えられる。584 の内外面には付着物が認められ、585 の底部外面には渦巻き状の糸切り痕が残る。586～588 はロクロ土師器碗である。586 は直線的でハ字状に開く高台を付ける。587 は低くやや内湾する高台を付ける。588 は低く幅広の高台を付ける。589 は突出した頭部側の下面に小さな窪みがあることから、頭部を叩き伸ばした部分を折り曲げて頭部にまとめたものと思われ犬釘と思われる。

SK143 から出土した 590 は灰釉陶器碗で、低く幅広の高台が付く。SK144 から出土した 591 は須恵器蓋で、口縁部内面に返りを持つ。胎土から在地系のもと思われる。

時期 出土した灰釉陶器から 11 世紀頃と思われる。

6 集石遺構

SS01 (図 250)

検出状況 EE8～EE9 グリッド、SI20 埋土上面で検出した集石遺構である。扁平な長径 8～35 cm の亜角礫 15 点が、平坦面をそろえるように並べた状態で出土した。下部に土坑を確認することはできな

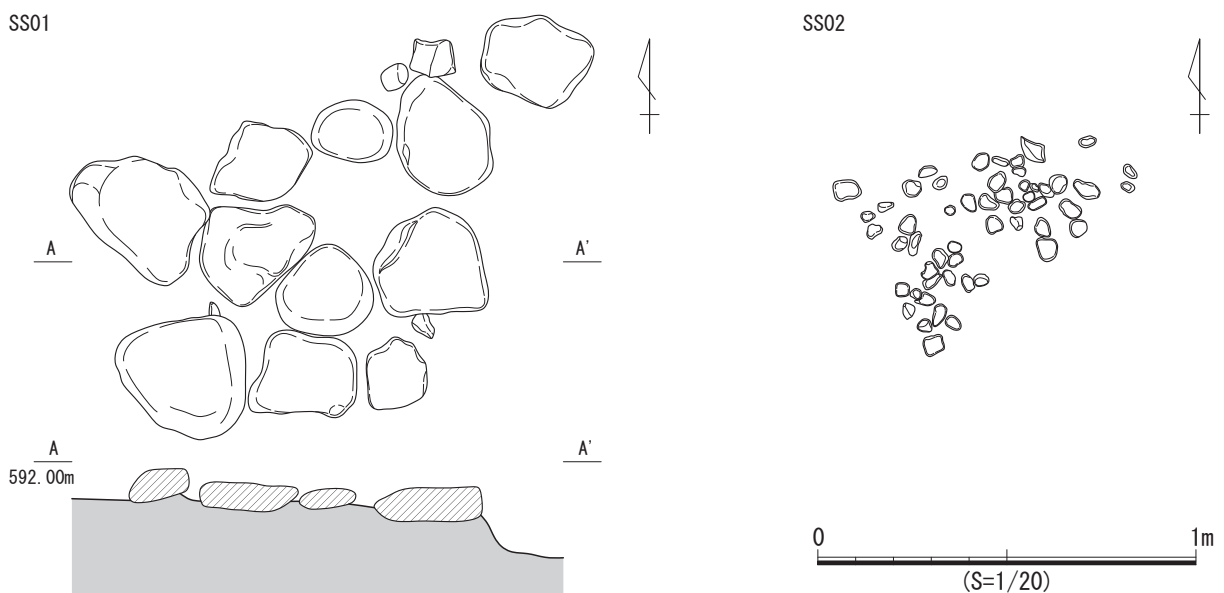


図 250 SS01・SS02 遺構図

ったため、SI20 埋没後に設置された配石遺構と考えられるが、礎石建物の背後に位置することから、何らかの関係があることも考えられる。

出土遺物 配石遺構に伴う遺物は確認できなかった。

時期 SI20 の埋土上面に位置することから、8世紀以降のものと考えられる。礎石建物との関係があるとすれば、その建立時期の可能性もある。

SS02 (図 250)

検出状況 EG6 グリッド、SK184 や SK195 埋土上面で検出した集石遺構である。約 50 点余りの亜角礫がまとまって出土したことから、集石遺構と考えたが、その下部には SK195 があり、SK195 埋土上面に含まれたものである可能性も考えられる。

出土遺物 集石遺構に伴う遺物は出土しなかった。

時期 集石遺構下部で検出した SK184 や SK195 が、出土遺物から 9 世紀末～10 世紀初め頃のものと考えられることから、それ以降の時期と考えられる。

7 単独柱穴

SP29 (図 251)

検出状況 EJ5 グリッド、IV層の上面で検出した。SA02 の南に位置するが、柱穴の位置関係からは、SA02 との関係性はないと思われる。平面形は明瞭であった。

形状 平面形は不整形で、底面は 2 段となる。壁面は東側が比較的立ち上がり、西側はやや傾斜する。

埋土 2 層に分層したが、1 層が柱痕跡状の堆積で、2 層が掘方埋土と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から須恵器や灰釉陶器が、散在した状態で出土した。

出土遺物 592 は灰釉陶器の碗の底部である。

時期 出土した灰釉陶器から、10 世紀後半と考えられる。

SP30 (図 251)

検出状況 EK1 グリッド、IV層の上面で検出した。SB07 の南に位置するが、柱穴の位置関係からは、SB07 との関係性はないと思われる。平面形は明瞭であった。

形状 平面形はほぼ円形で、壁面が立ち上がり、深い穴となる。断面形は逆台形で、底面は平坦である。

埋土 2 層に分層したが、明瞭な柱痕跡状の堆積としては確認できなかった。しかし、2 層には IV 層起源のブロック土が混じり、人為堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 出土遺物がないため時期の判断ができないが、SP30 の周囲では古代の遺構が検出され、柱穴状の遺構も比較的集中することから、古代のものである可能性が考えられる。

SP40 (図 251)

検出状況 EL5 グリッド、IV層の上面で検出した。SB09 の南に位置するが、柱穴の位置関係からは、SB09 との関係性はないと思われる。平面形は明瞭であった。

形状 平面形は不整形で、壁面が立ち上がり、深い穴となる。底面は平坦である。

埋土 4 層に分層したが、明瞭な柱痕跡状の堆積は確認できなかった。しかし、各層に IV 層起源のブ

ロック土が混じることから、人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土中から土師器、灰釉陶器、石鏃が散在した状態で出土した。

出土遺物 593 は抉りの浅い凹基の石鏃で、側辺に角を持ち五角形状となる。

時期 灰釉陶器が出土したことから、平安時代の遺構と考えられる。

SP54 (図 251)

検出状況 E02 グリッド、IV層の上面で検出した。SI38 の西、SB08 の北西に位置するが、柱穴の位置関係からは、これらの遺構との関係性はないと思われる。平面形は明瞭であった。

形状 平面形はほぼ円形で、壁面が比較的立ち上がり、深い穴となる。断面形は東壁が垂直に近い逆台形で、底面は平坦である。

埋土 5層に分層したが、2層が柱痕状の堆積で、3層～5層が柱掘方埋土と考えられる。いずれの埋土にもIV層起源のブロック土が混じり、人為堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 出土遺物がないため時期の判断ができないが、SP54 の周囲では古代の遺構が検出され、柱穴状の遺構も比較的集中することから、古代のものである可能性が考えられる。

SP55 (図 251)

検出状況 E02 グリッド、IV層の上面で検出した。SI38 の西、SB08 の北西に位置するが、柱穴の位置関係からは、これらの遺構との関係性はないと思われる。平面形は明瞭であった。

形状 平面形は円形で、壁面が立ち上がり、深い穴となる。断面形は長方形に近いが、西壁がわずかに段状となり、底面は平坦である。

埋土 5層に分層したが、2層が柱痕状の堆積で、3層～5層が柱掘方埋土と考えられる。いずれの埋土にもIV層起源のブロック土が混じり、人為堆積と思われる。

遺物出土状況 縄文土器2点、石器2点が、埋土中から散在した状態で出土した。

出土遺物 594 は深鉢の口縁部片であるが、口縁部上端に爪型文を巡らせ、その下に沈線と刺突列を施す。595 は口縁部近くの破片と思われるが、沈線を施す。いずれも北陸系の縄文時代中期の土器と思われる。596 は基部が平坦比較的平坦な石鏃である。

時期 縄文時代の遺物しか出土していないが、SP55 の周囲では古代の遺構が検出され、柱穴状の遺構も比較的集中することから、古代のものである可能性が考えられる。

SP60 (図 251)

検出状況 E03 グリッド、IV層の上面で検出した。SI38 の東、SB08 の北東に位置するが、柱穴の位置関係からは、これらの遺構との関係性はないと思われる。平面形は明瞭であった。

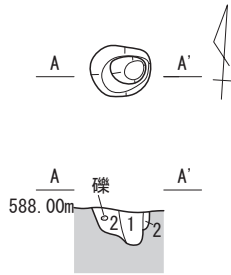
形状 平面形は不整楕円形で、壁面が立ち上がり、深い穴となる。断面形は東壁が内側に湾曲して外側に広がり、西壁が2段に掘り込まれている。底面は平坦である。

埋土 4層に分層したが、2層が柱痕状の堆積で、3層と4層が柱掘方埋土と考えられる。3層を除きIV層起源のブロック土が混じり、人為堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

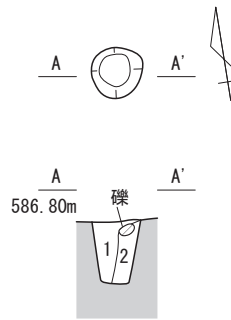
時期 出土遺物がないため時期の判断ができないが、SP60 の周囲では古代の遺構が検出され、柱穴状の遺構も比較的集中することから、古代のものである可能性が考えられる。

SP29



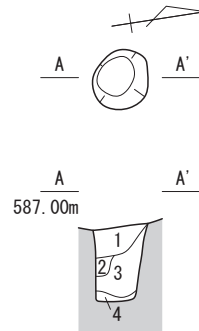
- 1 10YR3/3 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 2 10YR2/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり

SP30



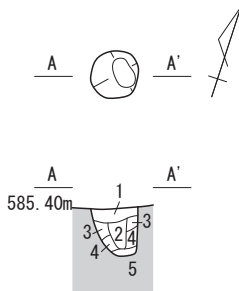
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性ややあり
- 2 10YR4/4 褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 10YR5/6黄褐色シルトブロックを30%含む

SP40



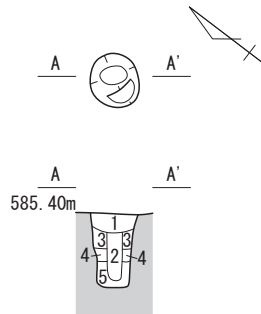
- 1 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト しまりややあり 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む 炭化粒を1%含む
- 2 2.5Y3/1 黒褐色シルト しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを3%含む
- 3 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを40%含む
- 4 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト しまりややあり 粘性あり IV層ブロックを10%含む

SP54



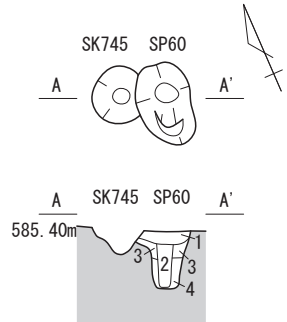
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性なし 10YR5/6黄褐色シルトを5%含む
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 10YR5/6黄褐色シルトを1%含む
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 10YR5/6黄褐色シルトを30%含む
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 10YR5/6黄褐色シルトを10%含む
- 5 10YR5/6 黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 10YR4/6にぶい黄褐色土を10%含む

SP55



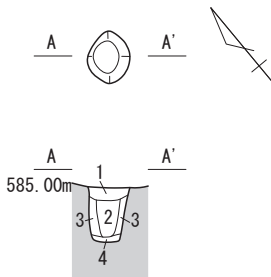
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性なし 10YR5/6黄褐色シルトを5%含む
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 10YR5/6黄褐色シルトを1%含む
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 10YR5/6黄褐色シルトを30%含む
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 10YR5/6黄褐色シルトを10%含む
- 5 10YR5/6 黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 10YR4/6にぶい黄褐色土を10%含む

SP60

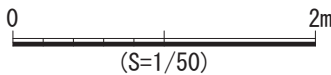


- 1 10YR4/6 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性ややあり 10YR5/6黄褐色シルトを5%含む
- 2 10YR5/6 黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 10YR4/3にぶい黄褐色シルトを10%含む
- 3 10YR5/6 黄褐色シルト しまりなし 粘性あり
- 4 10YR4/6 にぶい黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 10YR5/6黄褐色シルトを5%含む

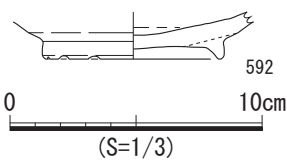
SP66



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性なし 10YR5/6黄褐色シルトを1%含む 径0.5cmの炭化粒を1%含む
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性なし 10YR5/6黄褐色シルトを2%含む
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性ややあり 10YR5/6黄褐色シルトを20%含む
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり



SP29出土遺物



SP55出土遺物



SP40出土遺物

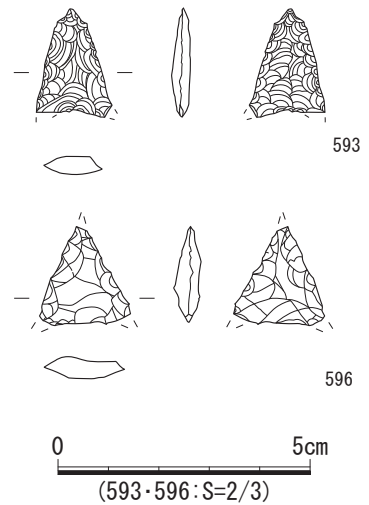


図 251 SP29・SP30・SP40・SP54・SP55・SP60・SP66 遺構図、SP29・SP40・SP55 出土遺物

SP66 (図 251)

検出状況 EP2 グリッド、IV層の上面で検出した。SI38 と SB08 の南西に位置するが、柱穴の位置関係からは、これらの遺構との関係性はないと思われる。平面形は明瞭であった。

形状 平面形は不整円形で、壁面が立ち上がり、深い穴となる。断面形は北西-南東の壁が垂直に近い逆台形で、底面は平坦である。

埋土 4層に分層したが、2層が柱痕状の堆積で、3層と4層が柱掘方埋土と考えられる。4層を除きIV層起源のブロック土が混じり、人為堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 出土遺物がないため時期の判断ができないが、SP66 の周囲では古代の遺構が検出され、柱穴状の遺構も比較的集中することから、古代のものである可能性が考えられる。

8 溝状遺構

SD04 (図 252)

検出状況 EE4~EF5 グリッドの南東部側の段切り造成等による土地の改変部分に位置し、IV層の上面で検出した溝状遺構である。SK063 と重複し、検出状況から SK063 の方が新しい。南西部分は発掘区外のため不明であるが、判明している遺構の規模は約 4.43m×2.00mである。形状は不整形で、壁面は比較的傾斜する。最大の深さが 0.31mある。

埋土 埋土は5層に分層したが、上部に1層が厚く堆積し、底面に2層~5層が薄く堆積する。

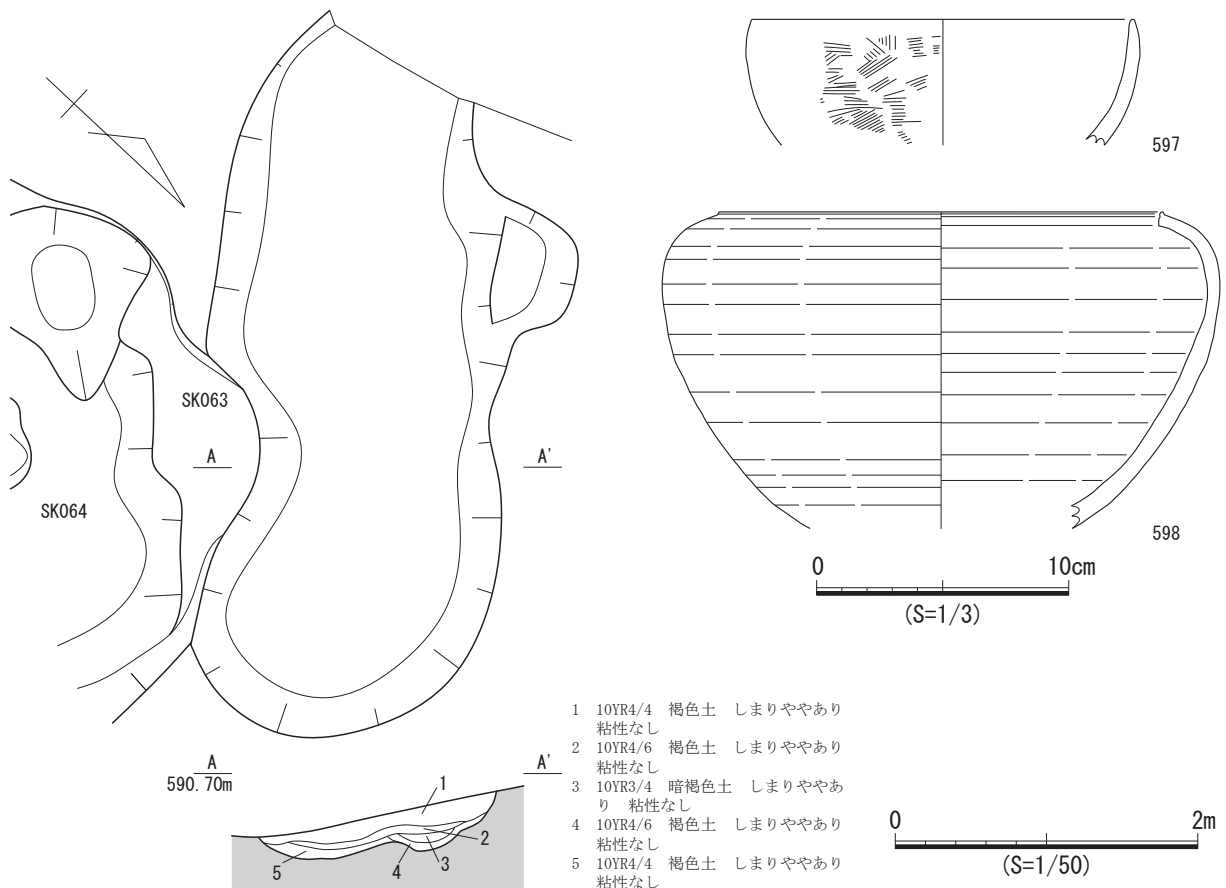


図 252 SD04 遺構図、出土遺物

遺物出土状況 土師器や須恵器が、埋土中から散在した状態で出土した。溝の東端のg層から土師器の鉢（597）、a層から須恵器の鉢（598）が出土した。

出土遺物 597は土師器鉢の口縁部で、外面に不定方向のハケ目調整が施される。598は須恵器鉄鉢形土器の口縁部から胴部片である。胴部上面が大きく張り出し、口縁部は強く内湾し口唇端部が僅かに立ち上がる。9世紀前半頃のものと思われる。

時期 出土した須恵器から、9世紀前半頃と思われる。

SD10 (図 253)

検出状況 EE7～EF8 グリッドのSI21などを検出した平場の西端に位置し、IV層の上面で検出した。平面形は、東側はSK180に切られ、南側は平成28年度調査で確認できなかったため不明である。重複関係はSK180よりも古い。壁面は開き、底面は比較的平坦で、最大の深さは0.46mである。

埋土 埋土は単層でIV層起源のブロック土を含むことから、人為堆積の可能性が考えられる。

遺物出土状況 須恵器や土師器が、埋土中から散在した状態で出土した。

出土遺物 599は7世紀後葉の美濃須衛産の無台の須恵器坏で、底面は平坦にヘラ削り調整されている。口縁部は直線的でやや開く。600は猿投産の特殊品で、ミニチュアの須恵器高台付碗である。底面から胴部の器壁は厚く、胴部へはやや開く。底面のやや内側に付けた高台は、直線的で外側へ開く。やや窪んだ見込み部分にヘラ記号が刻まれ、底面はヘラ削り痕が残る。

時期 出土遺物から7世紀後葉と考えられる。

SD12 (図 254)

検出状況 SK207やSK208の東側でEF7～EH8グリッド位置し、IV層の上面からSK209埋土上面で検出した。SK209、SK204などと重複するが、検出状況からSD12が新しいと判断した。平面形は長楕円形で8.94m×3.18mの溝状遺構である。壁面は開き、底面は比較的平坦で、最大の深さは0.44mある。SB04基壇西辺に沿うように掘削されており、基壇の高まりを強調するように掘削された可能性が考えられる。

埋土 4層に分層したが、ほぼ水平に堆積する。

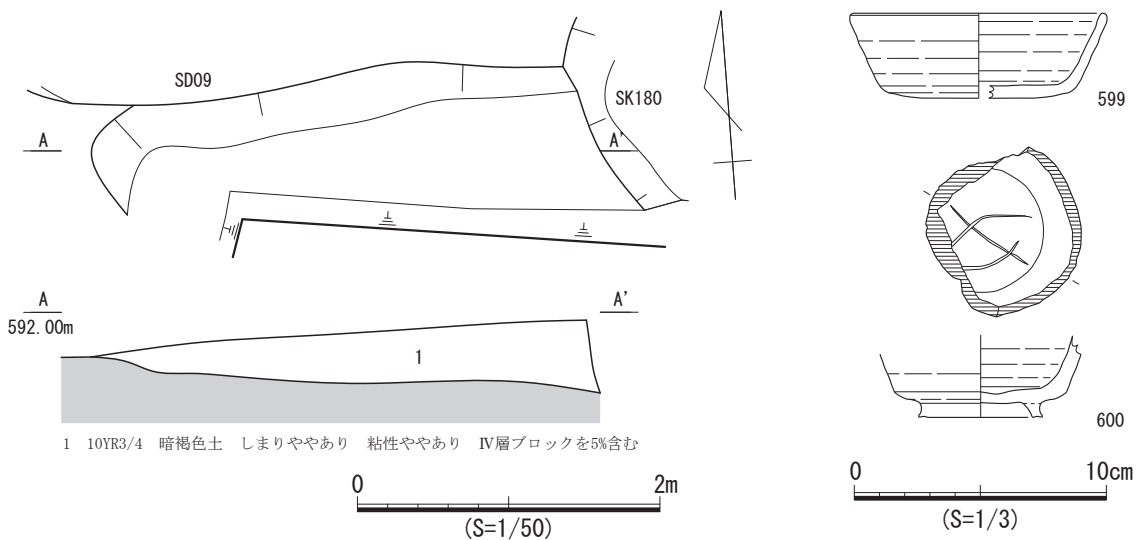


図 253 SD10 遺構図、出土遺物

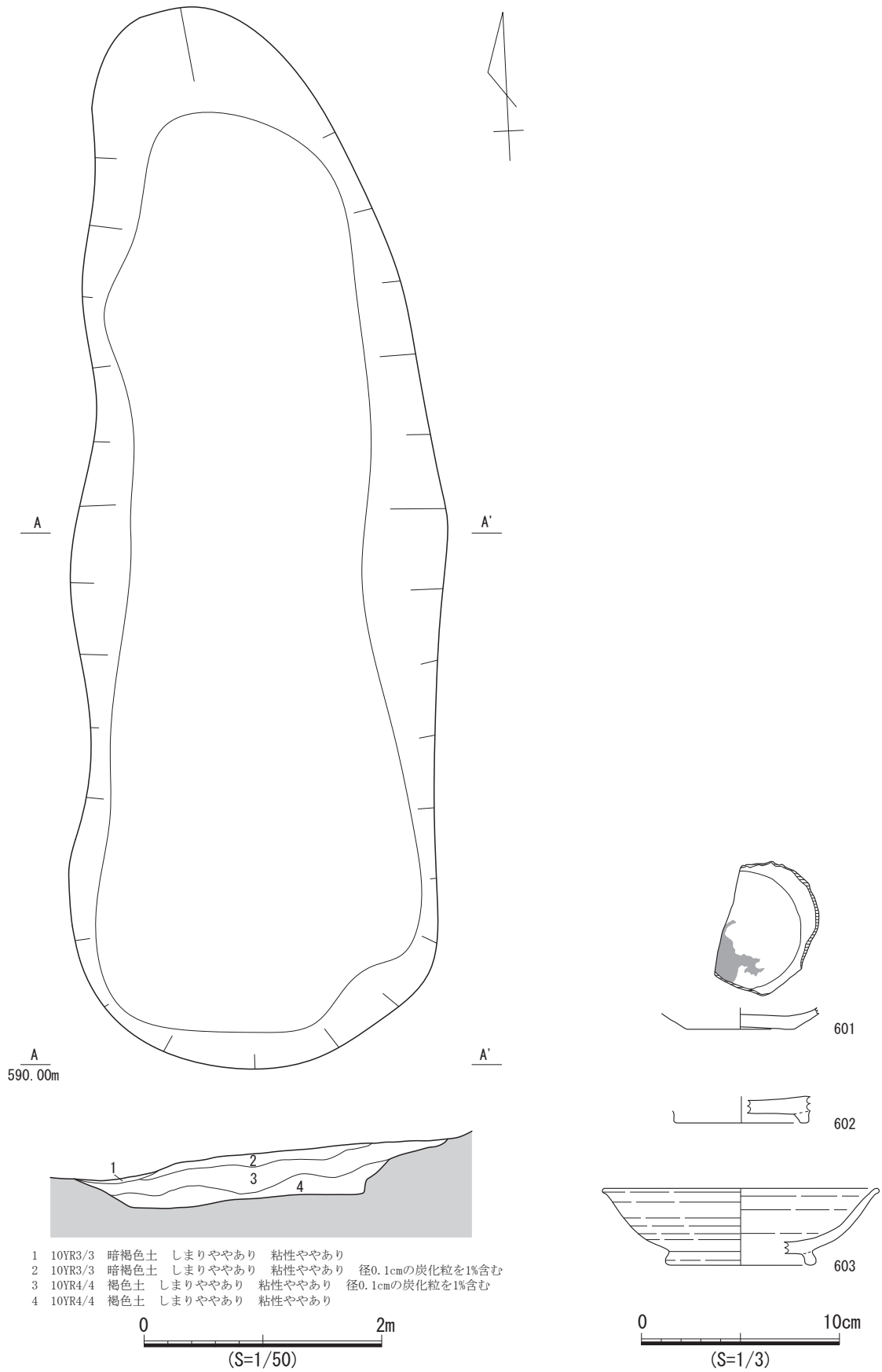


図 254 SD12 遺構図、出土遺物

遺物出土状況 土師器や須恵器、ロクロ土師器、灰釉陶器が、埋土中から散在した状態で出土した。

出土遺物 601 はロクロ土師器碗で、見込み部に漆と思われる黒褐色の付着物が付く。底面には回転糸切り痕が残る。602 もロクロ土師器碗だが、低く逆台形の高台が付く。底部外面は回転へら削り調整する。603 は灰釉陶器碗で、胴部がやや膨らみ、口縁端部が少し外反する。低く幅広の高台が付く。底部外面は回転へら削り調整する。

時期 埋土中から出土した遺物が 10 世紀頃のものであり、また、10 世紀後半頃に創建されたと思われる、礎石建物の基壇造成に伴い掘削された可能性が考えられる。

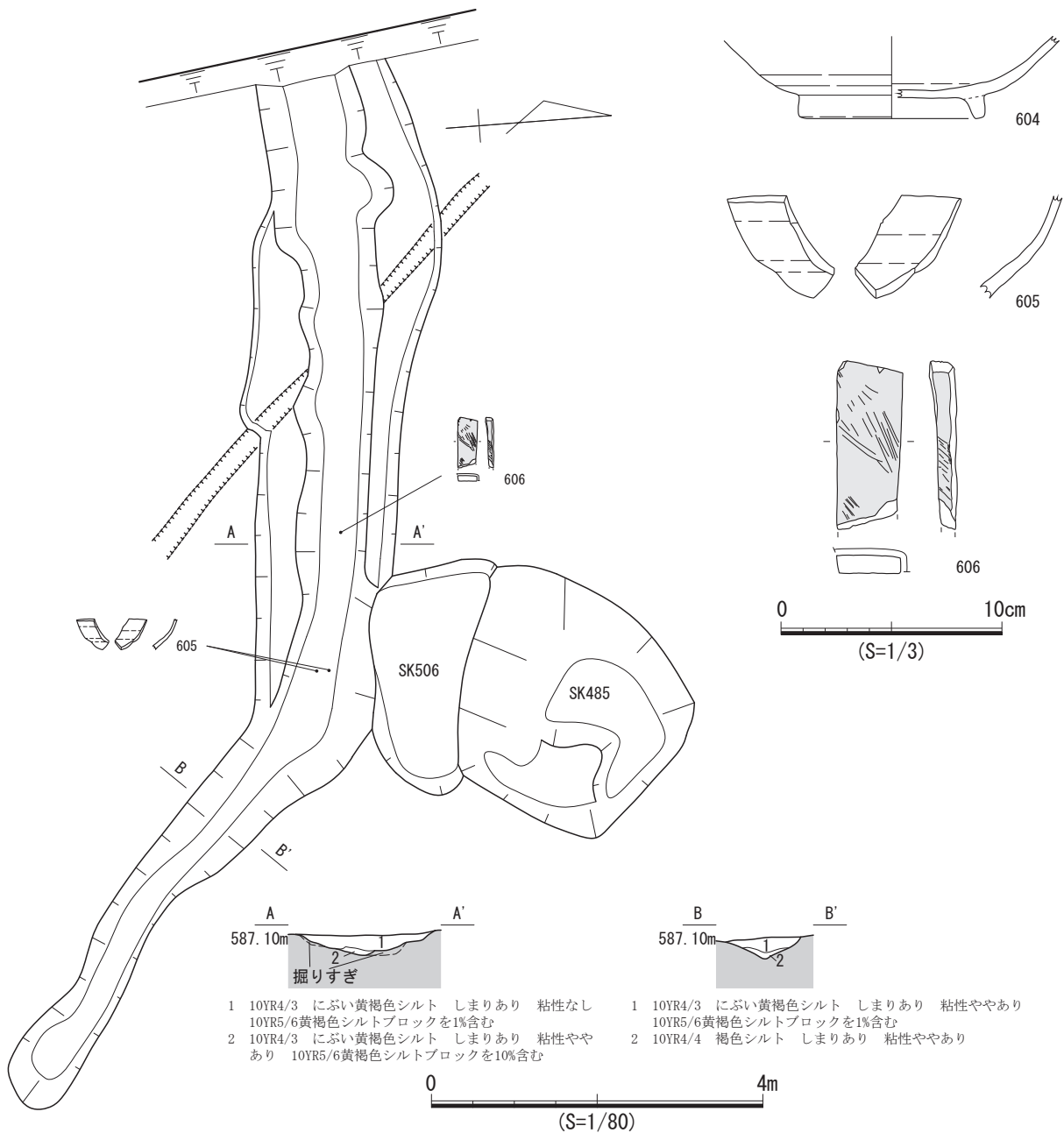


図 255 SD32 遺構図、出土遺物

SD32 (図 255)

検出状況 DI19～EJ2 グリッド、IV層の上面で検出した。北側でSK506、SK509、SK513、南側でSK512、SK535と重複する。検出状況から本遺構はSK506より古く、それ以外の遺構より新しいと判断した。また、底面からSK072、SK508、SP45、SB06-P03を検出した。西側が発掘区外のため不明であるが、検出した遺構の規模は、長さ13.48m、最大幅2.30mである。東西方向の溝状遺構であるが、途中でやや屈曲し、東部は収束する。屈曲部から西側はやや幅広となり、肩部にテラス状の段を持つ。東側は幅が狭くなる。壁面は緩やかに傾斜し、深さは最大で0.24mである。

埋土 2層に分層したが、上層に1層が厚く堆積し、底面に2層が薄く堆積する。

遺物出土状況 埋土中から土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、近世陶器、瓦、石器が散在して出土した。近世陶器は小破片が2点出土したが、他の遺構との重複関係から混入したものと思われる。

出土遺物 604は高台を持つ須恵器の碗で、内面に重ね焼痕が残る。605は緑釉陶器の碗である。606は砥石で、砥面が2面ある。

時期 出土した遺物から、9世紀頃と考えられる。

9 土坑

SK009 (図 256)

検出状況 AT20～EB2 グリッドの斜面に位置し、IV層の上面で検出した大型の土坑である。中央部から南西部分の大半は発掘区外のため不明であるが、判明している遺構の規模は約5.8m×5.5mである。形状は不整形で、壁面は比較的傾斜する。最大の深さが0.56mである。底面には小穴を確認したが、重複関係にあるものと判断した。

埋土 埋土は3層に分層したが、底面や斜面に3層が薄く堆積し、2層とIV層起源のブロック土を含む1層が堆積する。

遺物出土状況 大量の須恵器と少量の土師器片、灰釉陶器の小破片2点が、埋土中から散在した状態で出土した。遺構内の壁面に沿ってd層からr層で出土している。

出土遺物 607は須恵器坏で底部が厚く、胴部から口縁部は直線的で大きく開く。底面はへら削り調整し、高台部の幅が小さく低い。608は須恵器の蓋で、口縁端部が屈曲する。609は美濃須衛窯産の須恵器壺の口縁部片で、口縁部が大きく外反する。口縁端部には1条の沈線が巡る。610は猿投窯産の可能性のある須恵器甕の口縁部片で、緩やかに外反し、口縁端部がやや肥厚する。611は先端部が欠損している鉄釘で、頭部を扁平にしてから折り曲げる犬釘である。

時期 出土した須恵器から8世紀前葉頃と考えられる。

SK029 (図 257)

検出状況 EB1～EB2 グリッドの斜面に位置し、IV層の上面で検出した遺構である。西部分は発掘区外のため不明であるが、検出した範囲での遺構の規模は1.80m×1.39mで、形状は方形である。深さは0.2mほどと浅い。

埋土 埋土は3層に分層したが、中央部分が窪む堆積である。

遺物出土状況 埋土中から土師器の小破片4点と埋土上部から鉄釘1点が出土した。

出土遺物 612は先端部が欠損している鉄釘で、突出した頭部側の下面に小さな窪みがあることから、頭部を叩き伸ばした部分を折り曲げて頭部にまとめた犬釘である。

時期 出土した土器からは時期は不明であるが、SB04 基壇を中心として鉄釘が多く出土していることから、SB04 と同じ時期の可能性が考えられる。

SK064 (図 257)

検出状況 平成 27 年度の A 地点と平成 28 年度の C 地点にまたがり、EE4~EF5 グリッド、IV層の上面で検出した遺構である。調査時は 1 基の遺構として扱っていたが、調査後の土層堆積状況を検討した結果、2 基の土坑が重複すると判断し、土層観察により新しい当遺構を SK064、もう一つの遺構を SK063 とした。平面形は不整形で底面にも凹みがある。

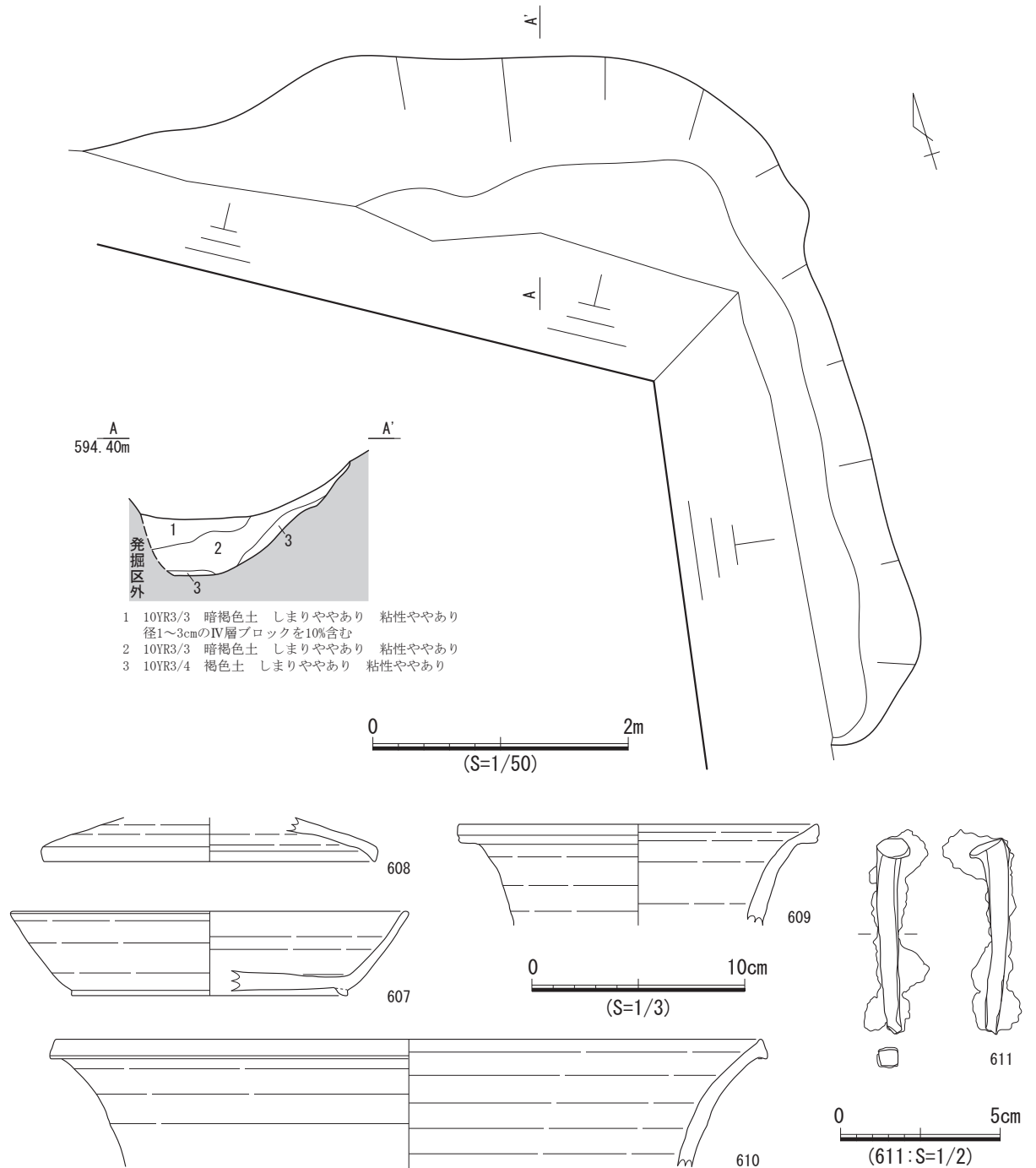
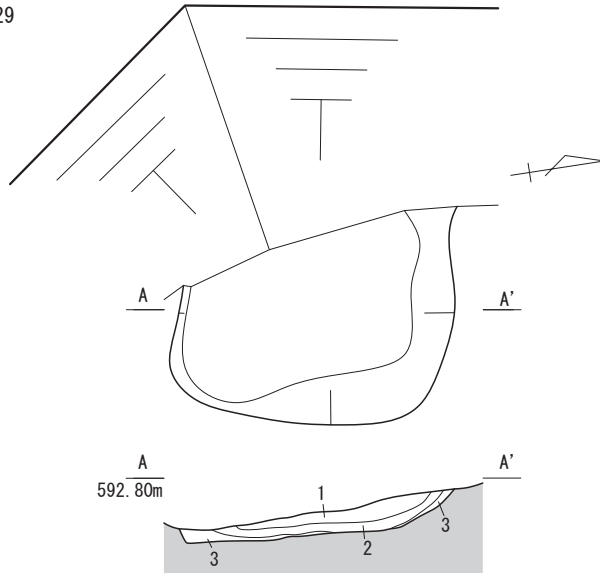


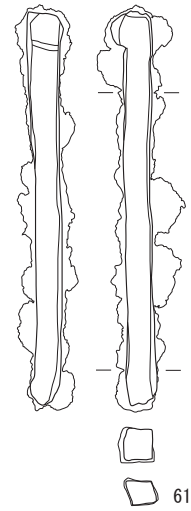
図 256 SK009 遺構図、出土遺物

SK029



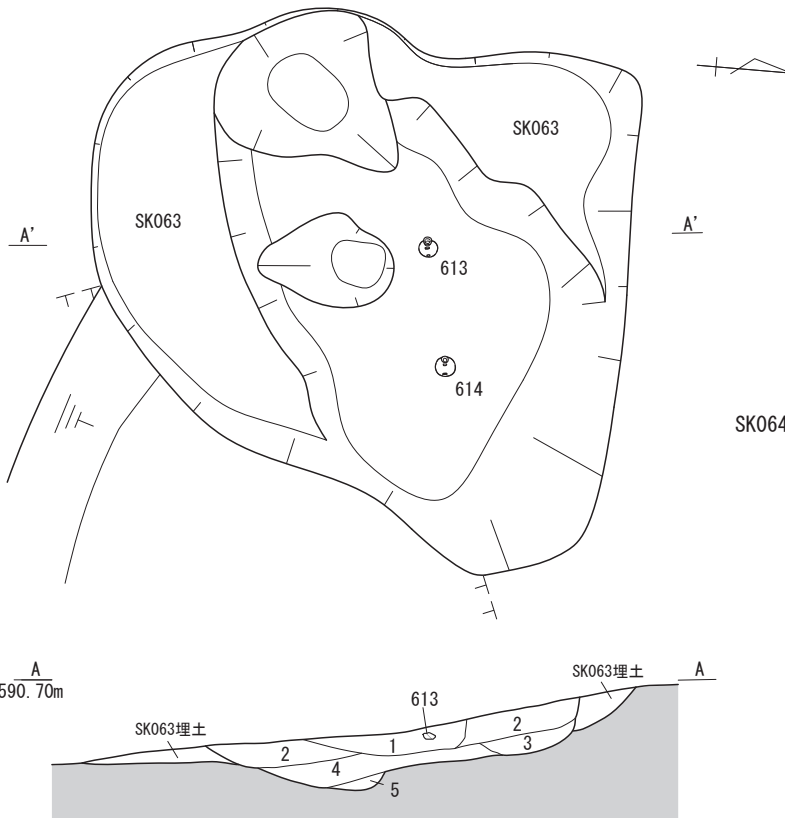
- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
径1~3cmのIV層ブロックを1%含む
- 2 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 3 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり

SK029出土遺物



0 5cm
(S=1/2)

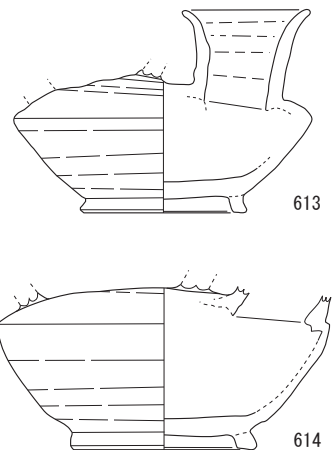
SK064



- 1 10YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 2 10YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 3 10YR3/4 暗褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径1~3cmのIV層ブロックを3%含む
- 4 10YR4/6 褐色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 5 10YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性ややあり

0 2m
(S=1/50)

SK064出土遺物



0 10cm
(S=1/3)

図 257 SK029・SK064 遺構図、出土遺物

埋土 埋土は5層に分層した。5層は遺構底面の窪みに堆積した埋土である。遺構底面に4層と北側のみ3層が堆積し、その上部に堆積する2層を掘り込むような1層の堆積がある。2層にIV層起源のブロックを含んだ層が堆積することから、人為堆積の可能性が考えられる。

遺物出土状況 須恵器と土師器が散在した状態で出土したが、このうち須恵器の平瓶2点が5 cmから15 cmほど掘り下げたレベルにおいて、口縁部を西に向けた正位の状態出土した。遺構を埋め戻す過程で配置した可能性が考えられる。この平瓶2点の他は、小破片が多く図化できなかった。

出土遺物 613 と 614 は猿投産の平瓶で、2点ともに把手部分が欠損し、614 はさらに口縁部が欠損する。613 は底部に回転ヘラ切り痕、614 は回転糸切り痕が見られ、613 が一回り小さい。いずれも鳴海32号窯式頃のものと思われる。

時期 出土した須恵器から8世紀後葉と考えられる。

SK139 (図 258)

検出状況 SI23などを検出した平場の東側のED13グリッドの斜面上に位置し、IV層の上面で検出した。この南西側にはSU01があり、堅穴建物群によって造成された平場の東端となる。平面形は楕円形で、2.08m×1.54mである。壁面は直立に近く、斜面北側からの深さは0.84mである。

埋土 8層に分層したが、北壁側から埋没するが、埋土中にはIV層起源のブロック土を含むことから、人為堆積の可能性が考えられる。

遺物出土状況 灰釉陶器は南端部で集中して出土したが、ロクロ土師器は埋土中から散在して出土した。

出土遺物 615 と 616 は灰釉陶器碗で、ハ字状に開く高台を付け、底部外面を回転ヘラ削り調整する。615の見込み部には黒色の付着物が見られる。

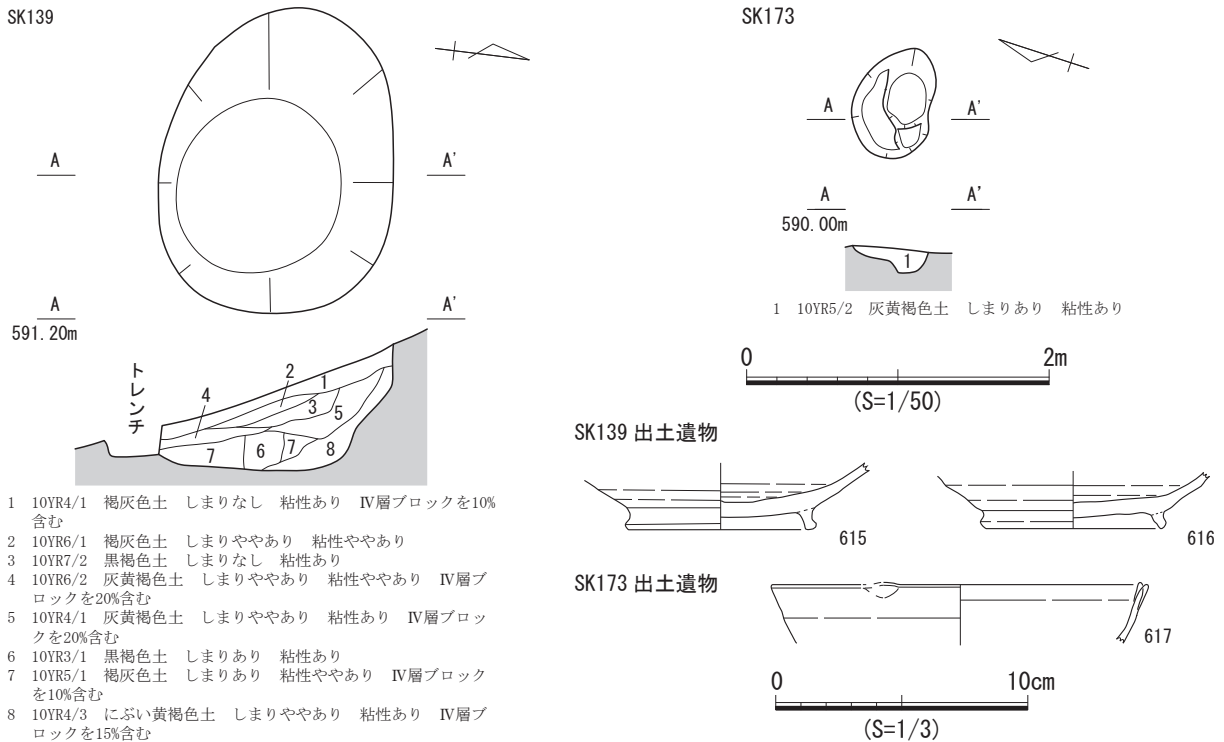


図 258 SK139・SK173 遺構図、出土遺物

時期 出土した灰釉陶器から 11 世紀頃と思われる。

SK173 (図 258)

検出状況 SI23～SI24 の堅穴建物により形成された平場の EF12 グリッドに位置し、SI24 床面で検出した。出土遺物から SI24 よりも新しいと判断した。壁面は北面が緩やかで、南面はやや開き気味に立ち上がる。平面形は不整形で、最大の深さは 0.15m である。

埋土 埋土は単層である。

遺物出土状況 灰釉陶器輪花碗が北端中央から出土した。

出土遺物 617 は灰釉陶器輪花碗の口縁部片である。

時期 出土した遺物から 10 世紀後半から 11 世紀代頃と思われる。

SK180 (図 259)

検出状況 EE8～EF8 グリッドの SI21 などを検出した平場の西端に位置し、IV層の上面で検出した。平成 27 年度の発掘区で検出し、遺構の南端部は平成 28 年度の発掘区に広がるが、平成 28 年度の調査では確認できなかった。平面形状は不整楕円形で、SD09、SD10、SK140 と重複し、検出状況から SK180 が新しいと判断した。壁面は開き、底面は丸底状で、最大の深さは 0.50m である。

埋土 埋土は 4 層に分層した。最下層 4 層黒褐色土以外の上層は暗褐色で、3 層以外に IV 層起源のブロック土を含むことから、人為的な堆積の可能性が高い。

遺物出土状況 土師器や須恵器が、埋土中から散在した状態で出土した。

出土遺物 618 は坏身で底面は丸みがある。厚みがある底部から、直線的な口縁部がやや開く。619 は 7 世紀後葉の美濃須衛産の甕の口縁部である。表面にはクシ描きの波状文が施されている。

時期 出土遺物から 7 世紀後葉と考えられる。

SK182 (図 260)

検出状況 EE5～EF6 グリッドの斜面に位置し、IV層の上面で検出した。SK183 と重複するが、検出状況から SK182 が新しいと判断した。南面が段切り造成と思われる削平により消失しているが、残存部

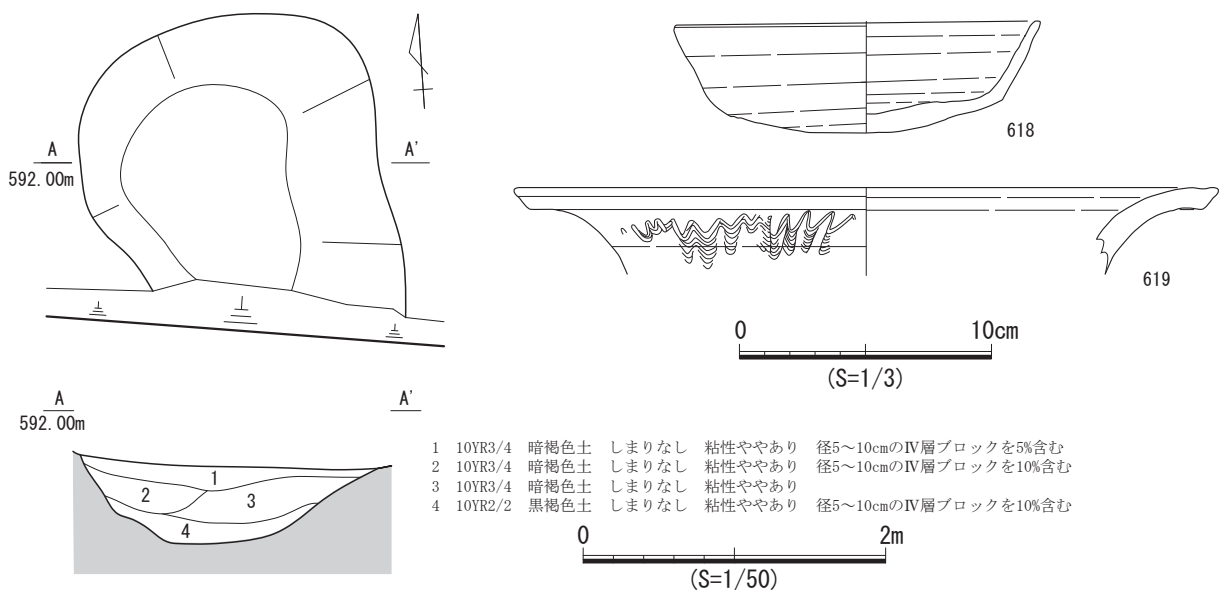


図 259 SK180 遺構図、出土遺物

分の平面形状からは不整形と思われる。壁面は比較的立ち上がり、深さは最大で0.80mある。

埋土 埋土は3層に分層した。3層は底面に堆積するが、2層は壁面側が厚く、中央に向かって薄くなる堆積で、中央の窪みを埋めるように1層が堆積する。

遺物出土状況 須恵器や土師器、叩石が、埋土中から散在した状態で出土した。

出土遺物 620は須恵器甕の口縁部で、口縁部に波状文と2条の沈線を施す。621は7世紀代の猿投窯産と思われる須恵器甕の胴部下半で、外面に格子のタタキ目、内面に同心円の当て具痕が残る。622は、ロクロ土師器の碗と思われる破片で、外面に膠や脂のような茶色の付着物と、内面に漆と思われる付着物が確認できる。底部はやや突出し、底部外面には回転糸切り痕が残る。

時期 出土した土師器から11世紀頃のものと思われる。

SK183 (図261)

検出状況 EE6~EF6グリッドの斜面に位置し、IV層の上面で検出した。SK182、SK186、SD08と重複し、SK182はSK183よりも新しく、SK186やSD08はSK183よりも古い。南面が段切り造成と思われる削平により消失しているが、残存部分の平面形状からは不整形と思われる。底面の南側は一段深くなり、別の掘り込みの可能性があるが、埋土の観察からは同一の遺構と判断した。壁面は比較的立ち上がり、深さは最大で1.38mある。

埋土 埋土は9層に分層したが、南側の一段深くなった部分に6層から9層が堆積し、その後壁面側から2層から5層が堆積している。中央から南側の窪みとなった部分を埋めるように1層が堆積する。

遺物出土状況 縄文土器や土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦が埋土中から散在した状態で出土した。

出土遺物 623は7世紀後葉の美濃須衛窯産の可能性がある須恵器高坏で、坏部に明瞭な稜を持ち、

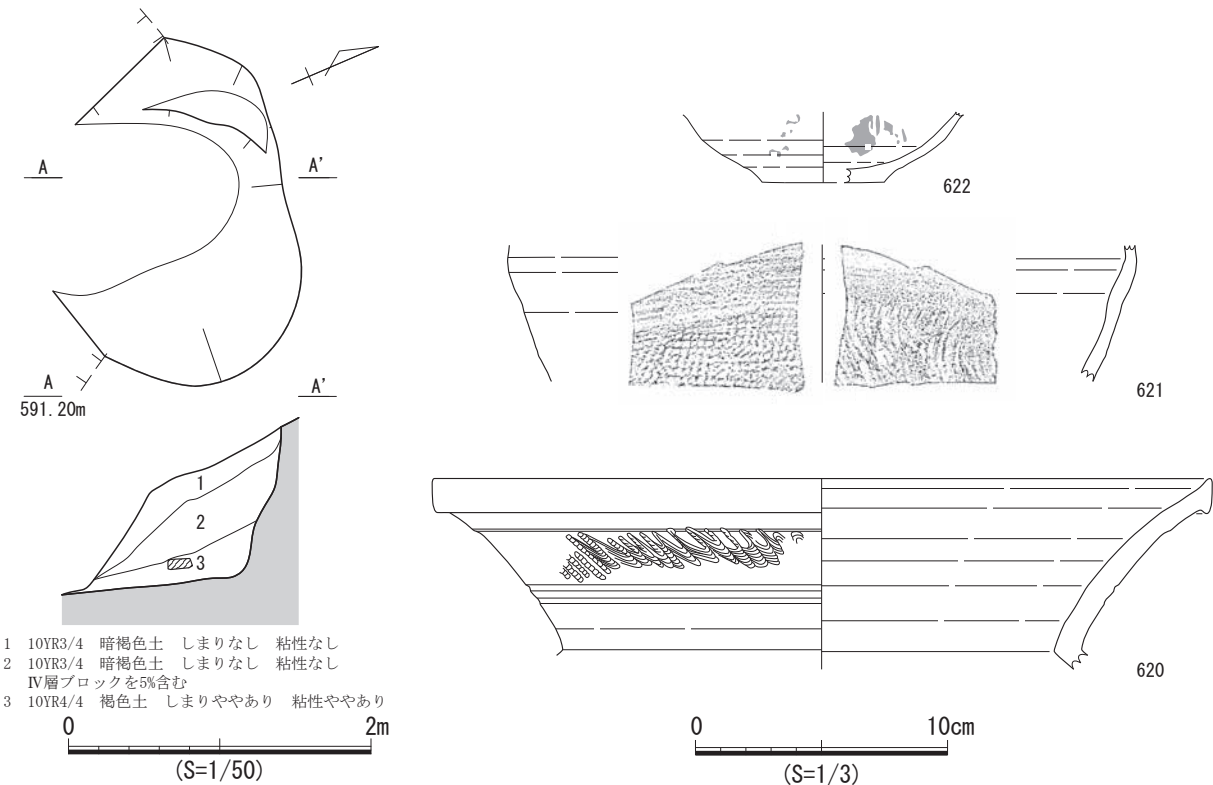
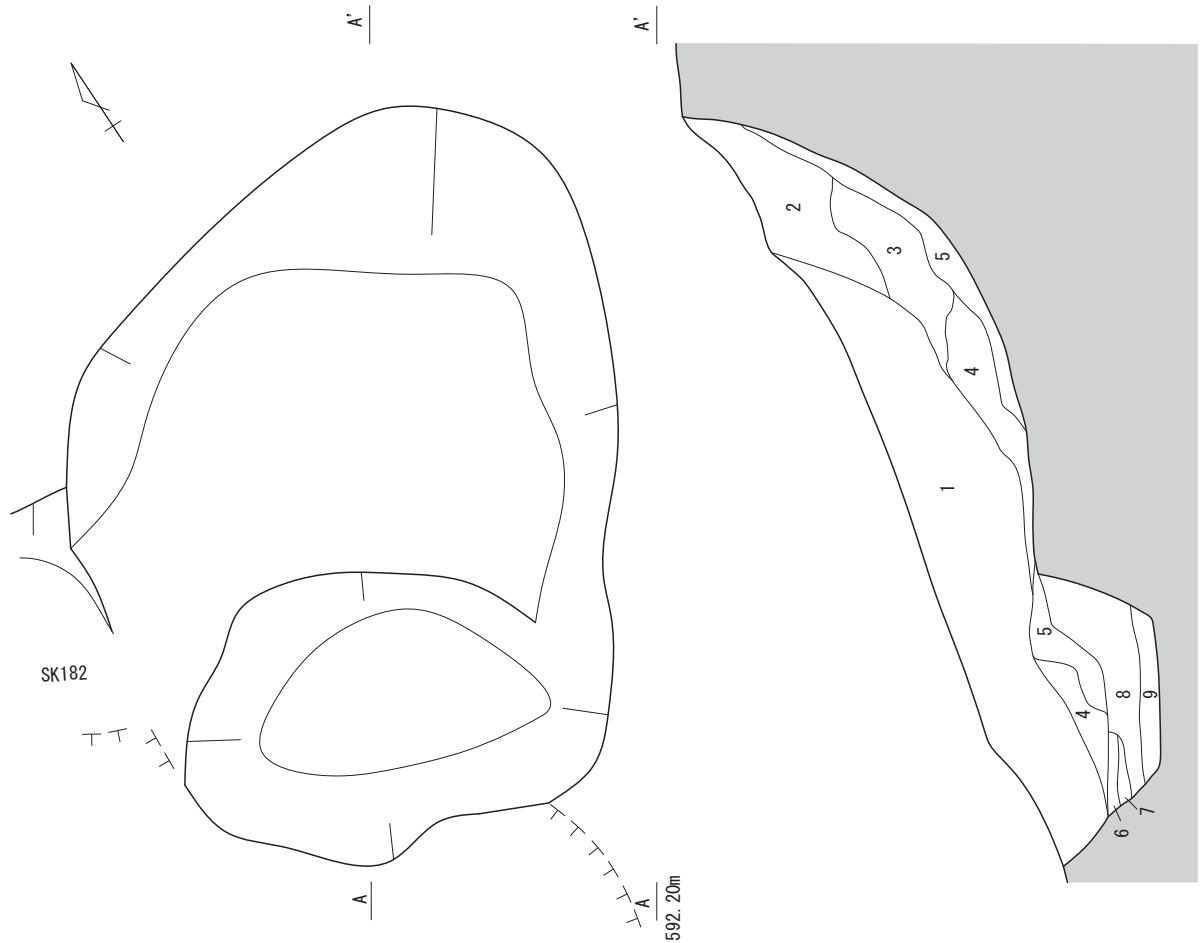


図260 SK182 遺構図、出土遺物



- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり
- 2 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを5%含む
- 3 10YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性ややあり
- 4 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを20%含む
- 5 10YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性ややあり IV層ブロックを40%含む
- 6 10YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり
- 7 10YR3/3 黄褐色土 しまりあり 粘性あり
- 8 10YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 炭化粒を1%含む
- 9 7.5YR5/8 明褐色土 しまりあり 粘性なし

0 2m
(S=1/50)

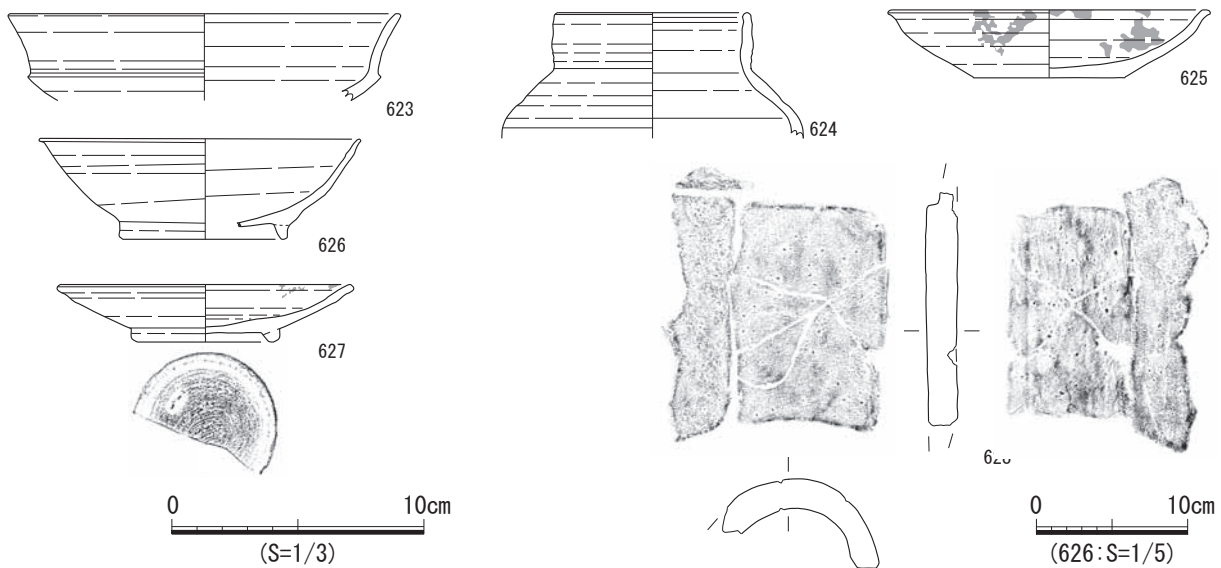


図 261 SK183 遺構図、出土遺物

口縁部がやや外反する。624 は7世紀の美濃須衛窯産の須恵器短頸壺で、肩部は張らず口縁部は垂直に立ち上がる。625 はロクロ土師器皿で、口縁部は大きく開き、口縁端部で外反する。底部外面には回転糸切り痕が残る。口縁部内外面の一部に漆のような黒色の付着物や、膠や脂のような茶色の付着物が認められる。626 は灰釉陶器碗で、胴部から口縁部は緩やかに開く。底部外面には回転糸切り痕が残り、高台は低くて厚みがあり、端部が少し外反する。627 は灰釉陶器皿で、底面から口縁部にかけて直線的に開く。高台は碗と同様に低くて厚みがあり、底部外面には回転糸切り痕が残る。口縁部内面に僅かに漆のような黒色の付着物が確認できる。628 は丸瓦で SI28 出土の丸瓦と同類と考えられる。SB04 基壇上から出土した瓦と接合した。円柱状の型に粘土を巻き付け成形し、半截したあと側面端縁を面取り、凹面をナデ調整している。玉縁は削り出しである。

時期 出土した灰釉陶器や土師器から11世紀頃と思われる。

SK184 (図 262・図 263)

検出状況 EG6 グリッドの斜面に位置し、IV層の上面で検出した。SK185、SK186、SK187、SK191、SK195 と重複するが、検出状況からいずれも SK184 より古い。北端部が攪乱により削平されているが、検出した平面形状は不整長楕円形である。壁面は傾斜しており、底面は比較的平坦で、深さは最大で0.45mある。

埋土 埋土は2層に分層したが、ほぼ水平に堆積しており、1層には炭化物や焼土ブロックが含まれている。

遺物出土状況 土師器や須恵器、ロクロ土師器、灰釉陶器、器種不明の土製品、石器類などが埋土中から散在した状態で出土した。940 点程の出土遺物のうち灰釉陶器と須恵器が約1割で、ロクロ土師器が約7割を占め、SK185 と類似した特徴的な遺物組成である。

出土遺物 629 は高台を持つ須恵器盤で、器厚の厚い底部から大きく開き口縁部が短く立ち上がる。高台は端部が肥厚する。胎土や器形の特徴から8世紀後半の猿投窯産と考えられる。630 は須恵器の鉄鉢形土器で、大きく開く体部から口縁部が内湾する。631 と 632 はロクロ土師器の碗である。631 は

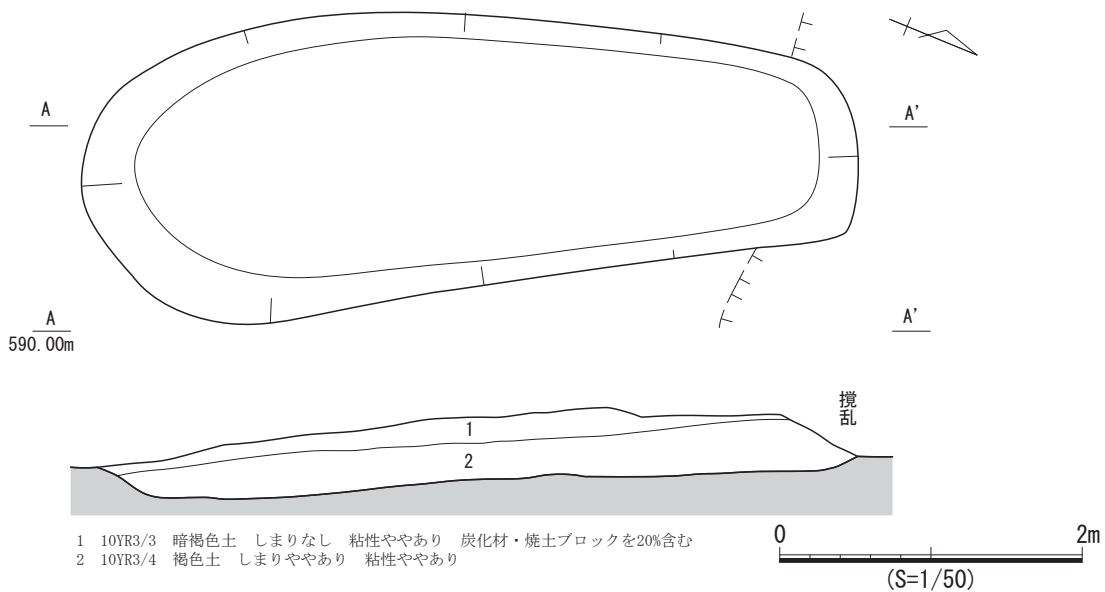


図 262 SK184 遺構図

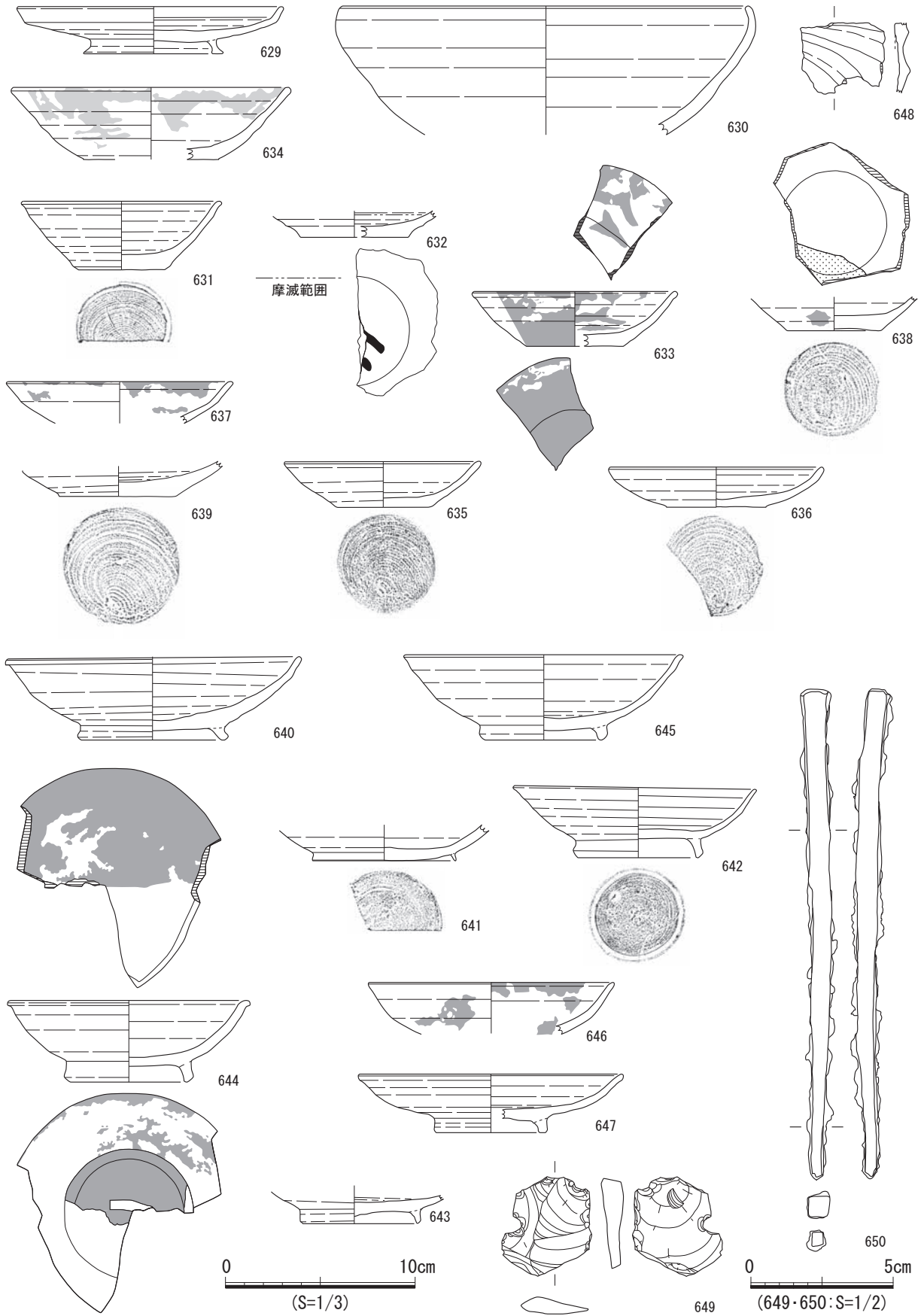


图 263 SK184 出土遺物

底部が厚く、口縁部が直線的に開く。632 は底部内面が摩滅し、黒色の付着物が見られることから、転用碗の可能性が考えられる。また、底部外面には糸切り痕と墨書を確認した。墨書はわずかに確認できただけであり、判読不能である。633～639 はロクロ土師器皿で、内外面に漆や煤状の付着物が認められる。636 は胎土が緻密で焼成が悪い。口縁部は底部から大きく開き、底部外面には回転糸切り痕が残る。636 は口縁部がやや内湾し、底部内面はやや凹むが中央は突起状に残る。637 は口縁部片で、内外面に漆と考えられる付着物が認められる。638 は外面に漆と、内外面に煤状の付着物が認められる。638 と 639 の底部外面には糸切り痕が残る。640～646 は灰釉陶器の碗である。640 は口縁部がやや内湾し、底部外面には糸切り痕が残る、高台は開く。接合した破片の一方には、破断面も含めて全体に煤状の付着物が確認できることから、割れた後に被熱を受けたと考えられる。641 は薄く直線的な高台が付く。642 は体部にやや膨らみを持ち、底部外面は回転ヘラ切り痕が残る。また、厚みのある高台部は直線的に開き、端部外面はヘラ削りされている。643 は、底部外面に回転ヘラ削り痕が認められる。644 は、内外面付近に漆と考えられる付着物が確認できる。接合した別個体には付着物がなく、破断面まで付着物が付いていることから、破片の状態が付着したものである。645 は底部外面に回転糸切り痕が残る碗で、全体の3分の2以上に煤状の付着物が見られる。646 はやや内湾する碗の口縁部で、内外面に漆や煤と思われる付着物が確認できる。647 は灰釉陶器皿で、厚みのある底部から大きく口縁部が緩やかに開き、口縁端部は少し外反する。短く方形の高台が付けられている。高台の内側には赤色の付着物が確認できる。648 は褐色を呈した土製品の一部で、表面はナデ調整で滑らかに仕上げ、ここに朱に近い彩色が僅かに認められる。衣の褌のような形状から仏像一部である可能性が考えられる。649 はチャート製の抉入石器で、一辺の中央に抉りを入れて刃部を設けている。650 は切釘の4寸釘である。

時期 出土した灰釉陶器やロクロ土師器から10世紀頃と思われる。

SK185 (図264)

検出状況 EF6～EG6 グリッドの斜面に位置し、IV層の上面で検出した。SK184、SK186、SK187 と重複し、SK184 はSK185 よりも新しく、SK187 やSK186 はSK185 よりも古い。北西面が攪乱で、南面はSK184 により削平されているため、全体の形状は不明である。壁面は緩やかに開き、深さは最大で0.43mである。

埋土 埋土は3層に分層したが、3層は壁面のテラス状部分に堆積し、1層と2層はほぼ水平に堆積する。

遺物出土状況 土師器や須恵器、ロクロ土師器、灰釉陶器、金属製品が埋土中から散在した状態で出土した。380点あまりの出土遺物のうち灰釉陶器と須恵器が約1割であるが、ロクロ土師器が約6割を占め、SK184 と類似した遺物組成である。

出土遺物 651 は須恵器平瓶で、口縁部と把手などを欠く。体部は直線的に開き、肩部で屈曲する。底部外面はヘラ切り後指押え調整する。隣接するSK183 とSK239、SI20 があるEE7～EF8 グリッドのII層出土遺物と接合した。652 はロクロ土師器の碗、653 と654 はロクロ土師器皿で、内外面に漆や煤と考えられる付着物が認められ、底部外面は回転糸切り痕が残る。655～658 は灰釉陶器の碗である。655 は高台が厚くやや内湾する。一部に被熱による変色を確認できる。656 と657 低い高台が付き、内外面に多量の漆や煤と思われる付着物が認められる。658 は灰釉陶器碗で、体部はやや丸みがある。

長方形の高台はやや開き、端部は平坦に調整されている。口縁部から胴部上半に灰釉が施され、外面に僅かに煤状の付着物が確認できる。659 は灰釉陶器小碗で、口縁部が少し外反する。底部から体部下半まで器壁が厚く、高台は幅広で短い。底部外面には回転ヘラ削り痕、高台端部には板の圧痕が残り、全面に灰釉が施されている。660 は灰釉陶器皿で口縁部は直線的に大きく開く。高台は幅広で短く、端部外面を丸く調整する。661 と 662 は小型の角釘で、661 は頭部を、662 は頭部と先端部を欠損する。

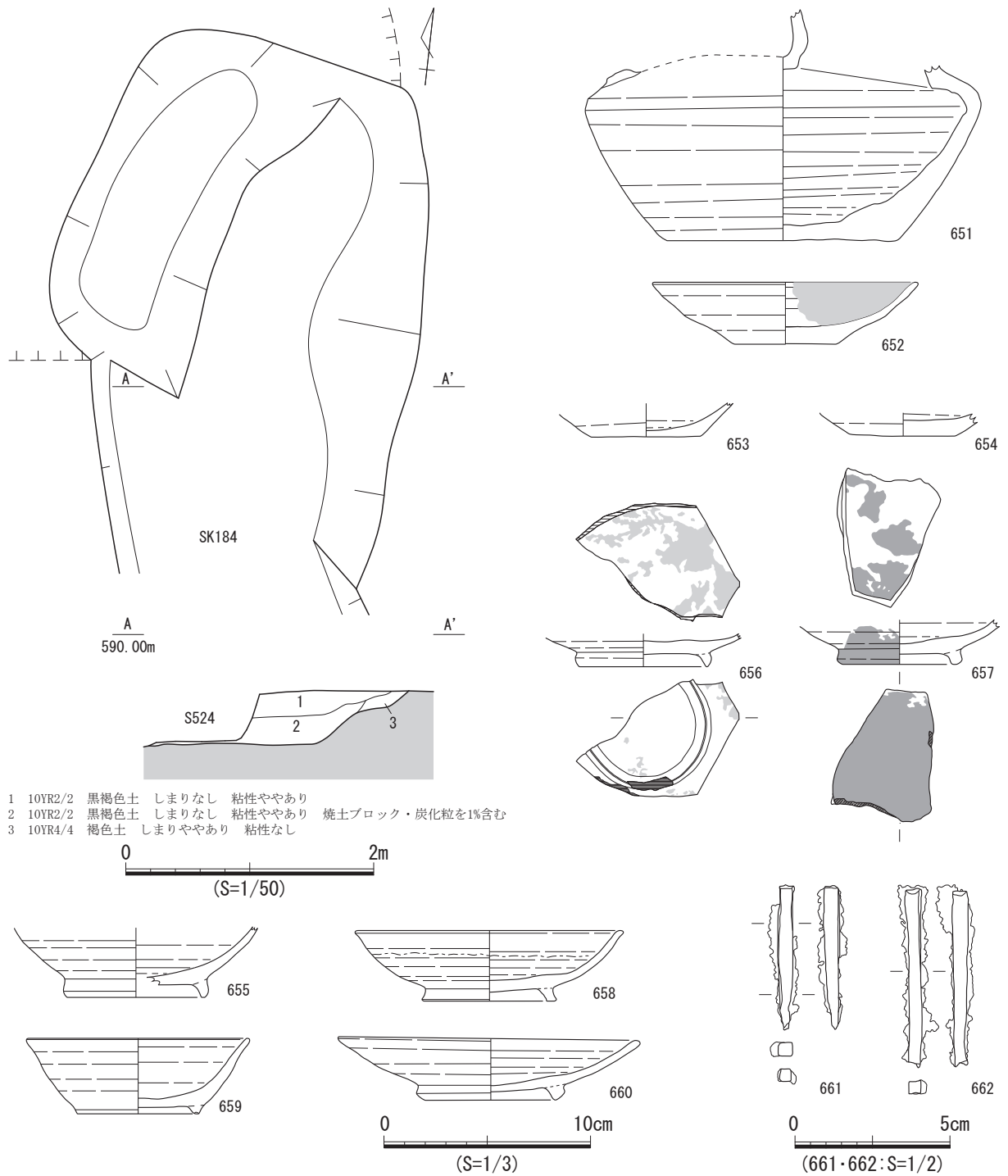


図 264 SK185 遺構図、出土遺物

時期 出土した灰釉陶器やロクロ土師器から、10世紀頃から11世紀頃と思われる。

SK186 (図 265・図 266)

検出状況 EF5～EG6 グリッドの斜面に位置し、IV層の上面で検出した。SK183、SK185、SK187、SK184、SK193 と重複し、いずれも SK186 よりも新しい。北西側が段切り造成と思われる攪乱、北側は SK183、南東側は SK187、南側は SK184 と SK193 により削平されている。残存する形状は不定形で、壁面は立ち上がり、深さは最大で 0.56m である。底面には土坑状の一段深くなる部分がある。なお、遺構埋土掘削途中で当初の検出プランよりも南面に広がる事が判明したが、A-A' 土層断面を延長しないまま掘削したため、記録を残せなかった。

埋土 埋土は9層に分層したが、8層・9層は5層～7層に削平されるように観察されたが、一応同じ遺構の埋土と判断した。また、2層～4層は北側壁面から中央に向かって薄くなる堆積であるため、

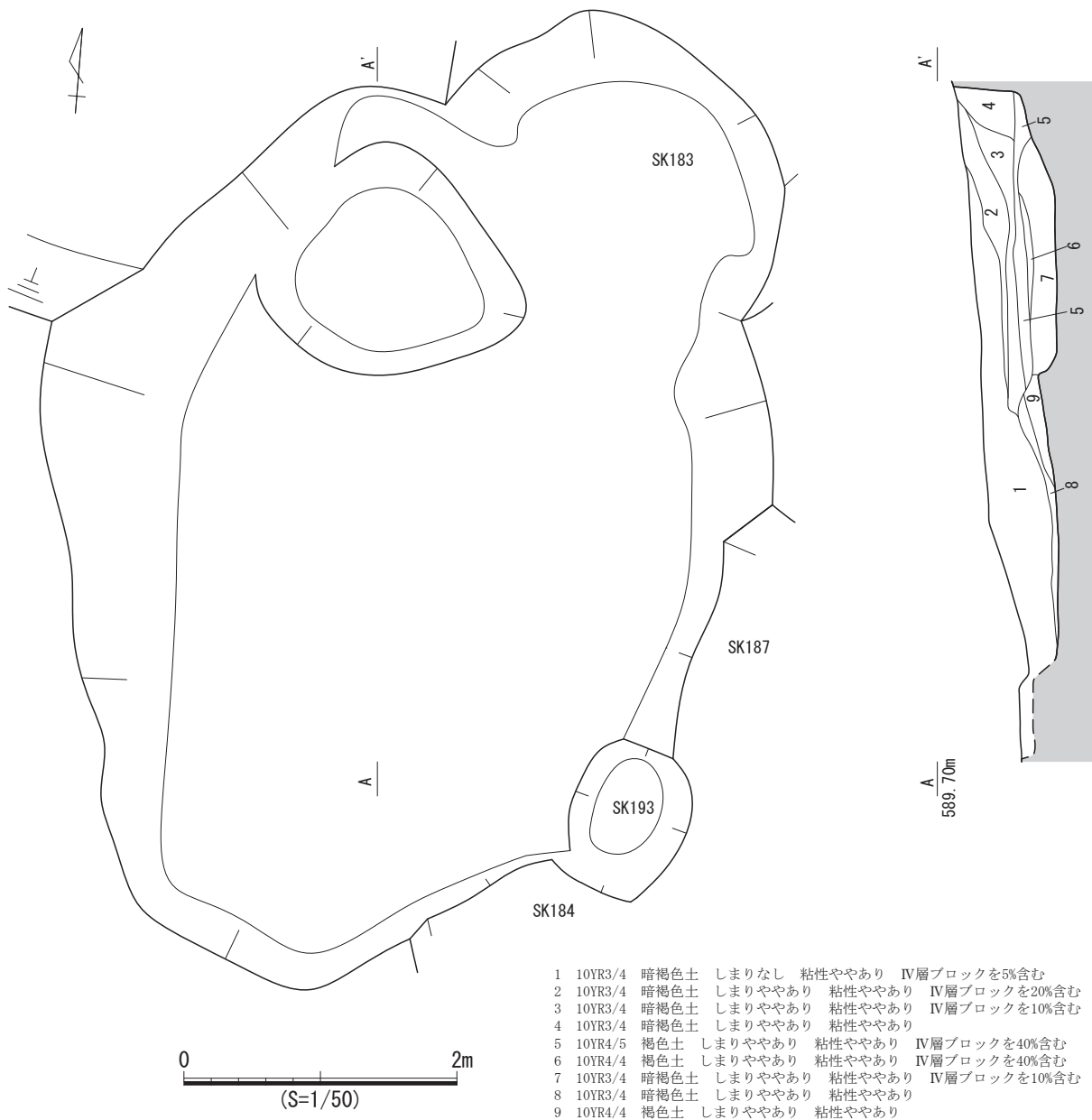


図 265 SK186 遺構図

中央から南側の窪みとなった部分を埋めるように1層が堆積する。IV層起源のブロックを含む土層があることから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物出土状況 土師器や須恵器、灰釉陶器などが、埋土中から散在した状態で出土した。

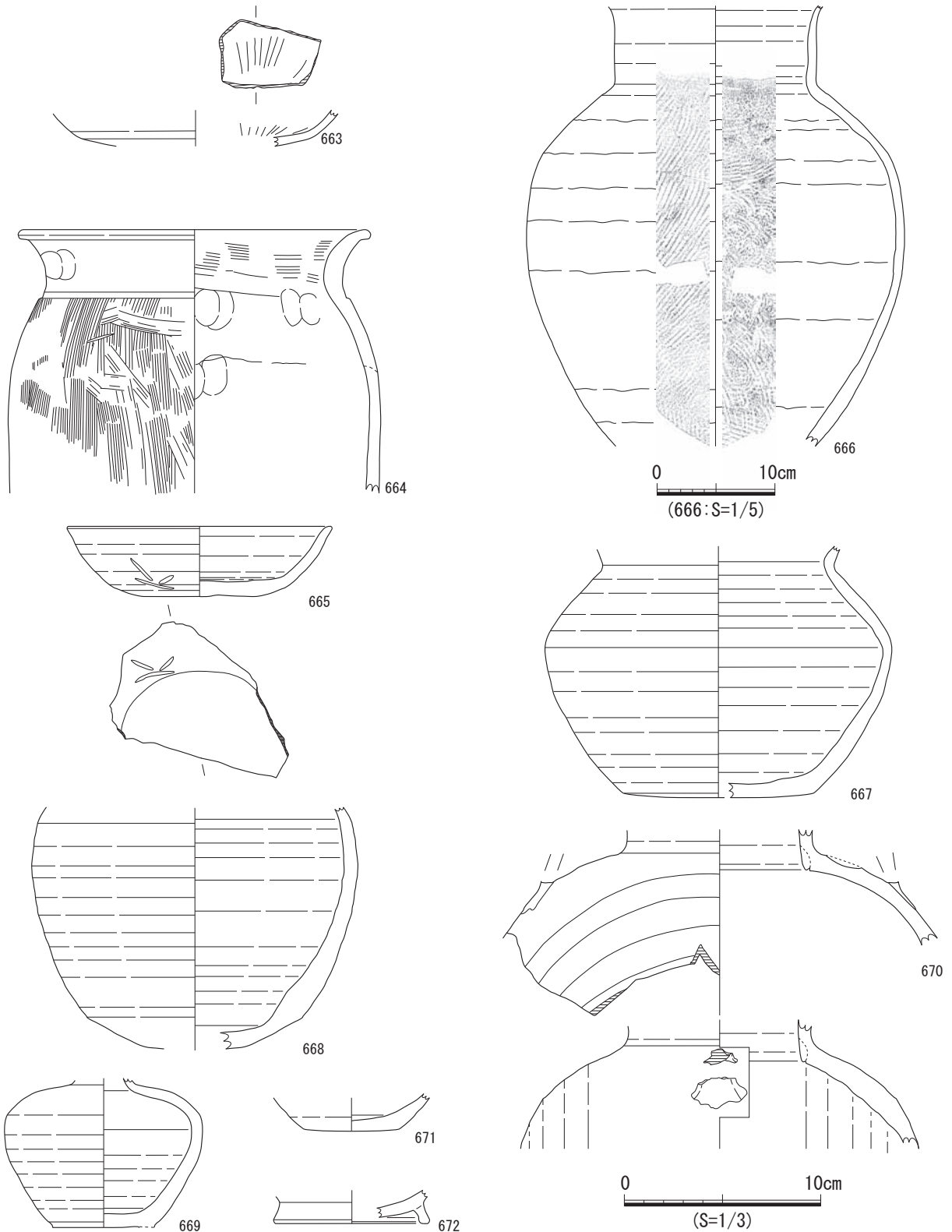


図 266 SK186 出土遺物

出土遺物 663 は土師器坏で、内面に放射状の暗文を施す。664 は土師器甕で、口縁部から頸部が外反し、頸部と胴部の境に一条の沈線を巡らす。665 は8世紀頃と思われる在地系の須恵器坏で、厚みのある底部から胴部は緩やかに立ち上がり、やや丸みを持つ。底部外面には回転ヘラ切り痕が確認できる。胴部下半には、坏身を逆位に置いて「一」「ハ」を組み合わせたヘラ記号が刻まれている。666 は8世紀代の美濃須衛窯産の須恵器甕で、胴部や肩部に張りがない長胴形となる。頸部は直立し、胴部外面には並行タタキ目、内面に同心円の当て具痕が残る。同一個体片がSK064やSK185、SK187、SK186、SK183からも出土し接合した。667～669 は須恵器壺で、667 は7世紀後葉の美濃須衛窯産と思われ、胴部がやや強く張る。668 は7世紀代と思われ、底部外面はヘラ削り調整され、胴部内面にはロクロ目が顕著に残る。669 は美濃須衛窯産の小型の長頸壺で肩部が張る。底部外面には回転糸切り痕が残る。高台が剥離している。670 は須恵器提瓶で、8世紀頃と思われる。671 はロクロ土師器皿で、底部外面に回転糸切り痕が残る。全体に被熱の痕跡が認められる。672 は灰釉陶器碗で、底部外面には回転糸切り痕が残る。高台は直線的に伸びて外反し、端部は平坦に調整されている。

時期 主体となる遺物から8世紀頃と思われる。灰釉陶器やロクロ土師器など10世紀から11世紀のものも少量出土したが、混入したものと思われる。

SK194 (図 267)

検出状況 EH6～EH7 グリッドの斜面に位置し、IV層の上面で検出した。SK195と重複し、検出状況からSK194が新しいと判断した。平面形は不整楕円形で、壁面は比較的立ち上がり、底面は平坦である。最大の深さは、0.16mである。

埋土 埋土は単層であるが、上面に約0.02m～0.15mの垂角礫が約370点集積していた。

遺物出土状況 埋土中から灰釉陶器などが2点出土した。

出土遺物 673 は灰釉陶器壺の肩部と思われる、時期不明である。

時期 当遺構より古いSK195から灰釉陶器が出土していることから、11世紀以降と思われる。

SK200 (図 267)

検出状況 EG6～EH7 グリッドの斜面に位置し、IV層の上面で検出した。平成27年度の発掘区で検出したが、平成28年度発掘区では確認できなかった。平成27年度発掘区で検出した範囲では、平面形は不整長方形で、壁面は南側が立ちあがり、北側から西側は開く。底面は比較的平坦で、最大の深さは0.28mである。

埋土 埋土は4層に分層した。1層と3層にはIV層起源のブロック土を含むことから、人為堆積の可能性が考えられる。

遺物出土状況 須恵器やロクロ土師器、灰釉陶器が、遺構中央から東壁面寄りで比較的まとまって出土した。

出土遺物 674 は須恵器の器台で、円筒状の脚柱部から受け部が屈曲して開く。脚裾部はわずかに屈曲して開く。675 と 676 はロクロ土師器碗で全面が黒色化しており、被熱による変色の可能性が考えられる。どちらも底部外面に回転糸切り痕が残る。677 は灰釉陶器碗で、高台はハ字状に開き、底部外面には回転糸切り痕が残る。678 は角釘である。釘頭部から体部にかけて複雑に湾曲しているが正面の歪みがないため、部材からの釘抜き時に生じたものと考えられる。脚端部を扁平してから折り曲げて頭部を作り出すことから、犬釘で、全長から4寸釘と判断した。

時期 出土遺物から11世紀頃と思われる。

SK201 (図268)

検出状況 EG7グリッドの緩斜面に位置し、SK202埋土上面で検出した。平面形は不整形で、壁面は開き、底面は比較的平坦で、最大の深さは0.14mである。

埋土 3層に分層した。1層と2層には焼土ブロックや炭化物が含まれる。

遺物出土状況 須恵器やロクロ土師器、灰釉陶器が、埋土中から散在した状態で出土した。

出土遺物 679と680はロクロ土師器碗で、679は全体に煤状の付着物と外面に漆状の付着物が、680は見込み部分に漆状の付着物が認められる。どちらにも底部外面に回転糸切り痕が残る。681と682は灰釉陶器の碗である。681はやや高い高台をやや開き気味に付け、体部から口縁部はやや内湾して開く。682は低くやや外に開く高台を付ける。683と684は角釘で、扁平な端部を折り曲げて頭部を作り出すことから、犬釘と考えられる。

時期 出土した遺物から、10世紀後葉から11世紀前半頃と思われる。

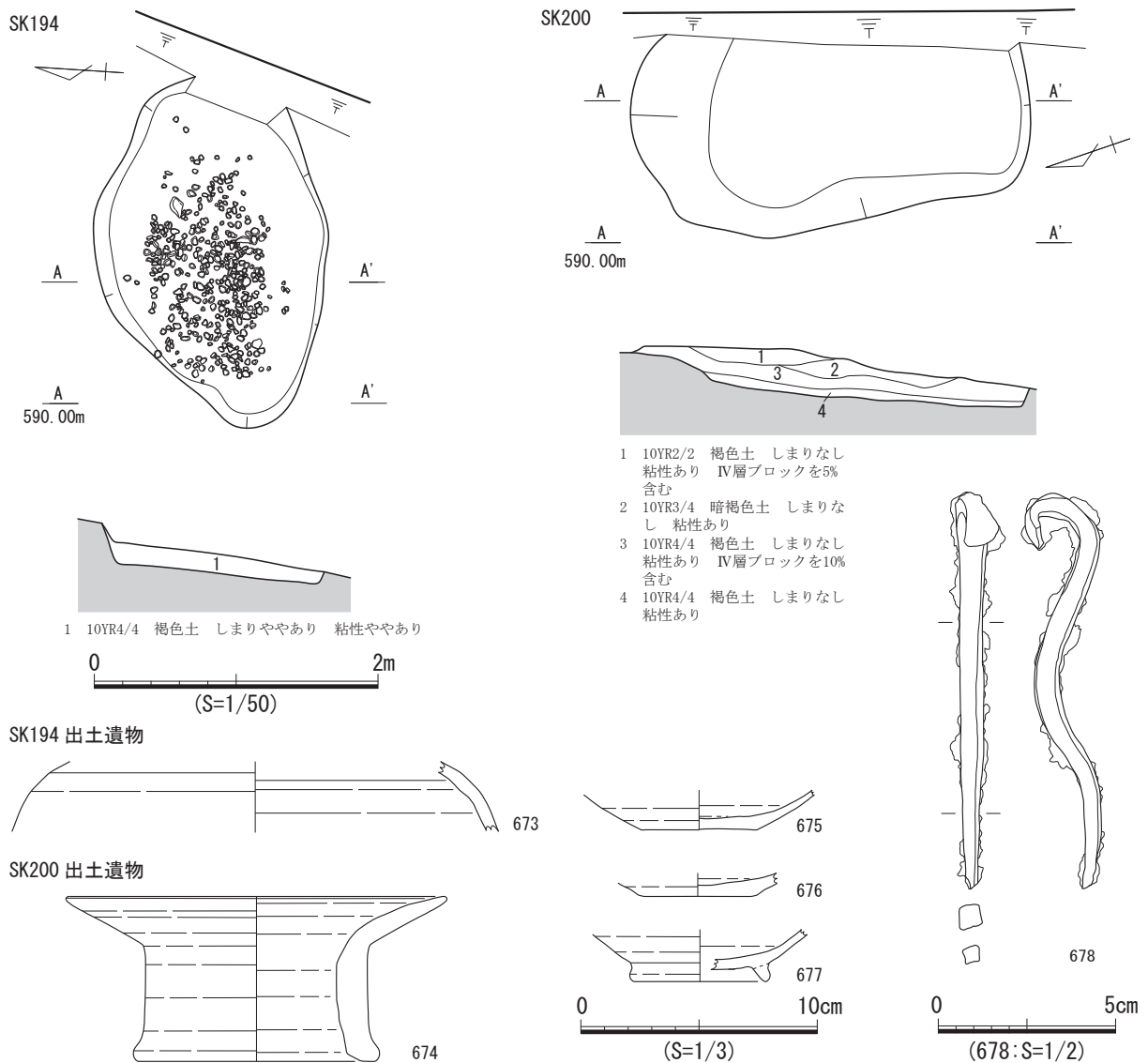


図267 SK194・SK200 遺構図、出土遺物

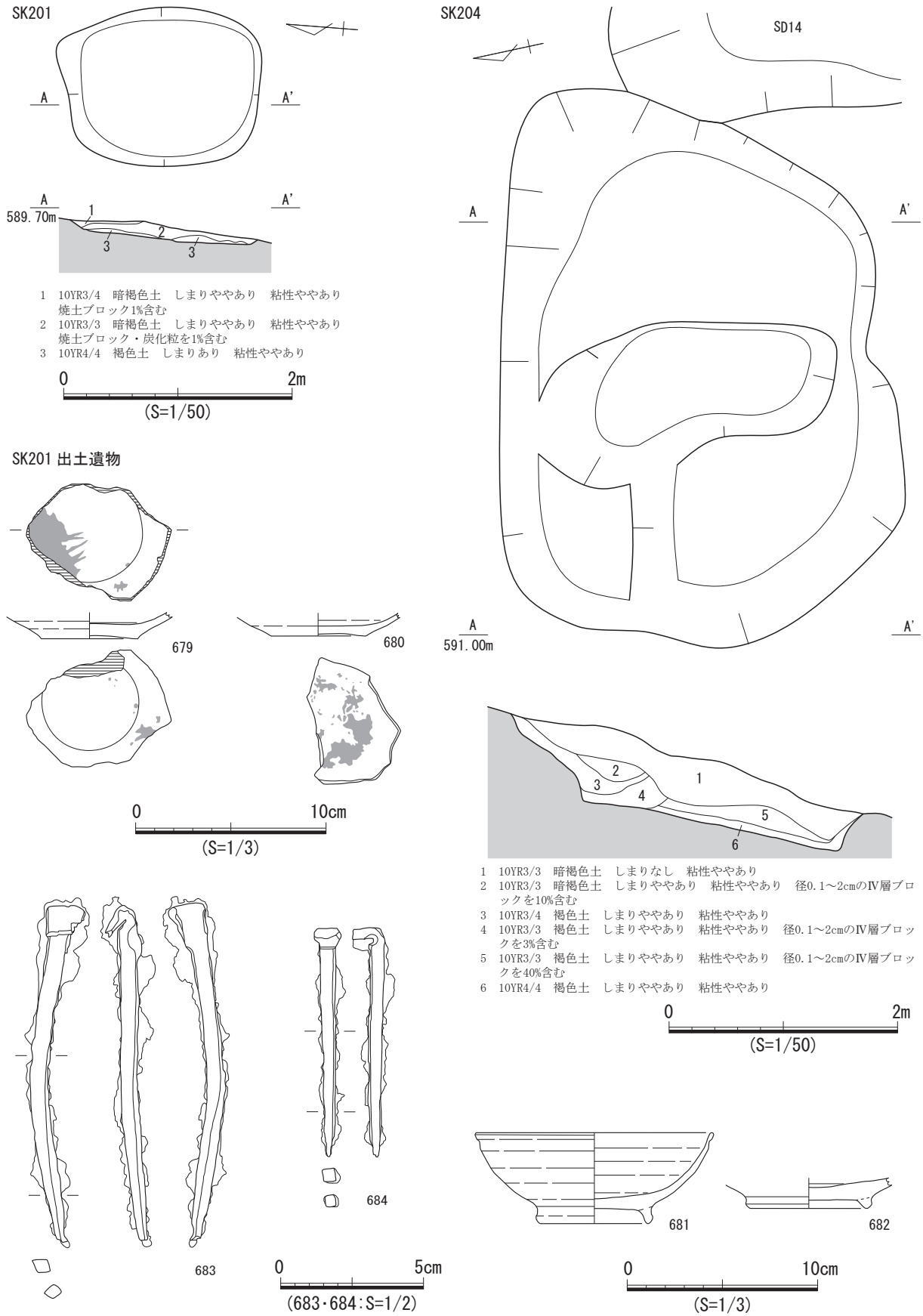


図 268 SK201・SK204 遺構図、SK201 出土遺物

SK204 (図 268・図 269)

検出状況 SI21 などを検出した平場の西端の EF7~EF8 グリッドに位置し、IV層の上面で検出した。SD12、SK209 と SK202 と重複するが、検出状況から SD12、SK209 よりも古く、SK202 よりも新しいと判断した。平成 27 年度に遺構の西側を、平成 28 年度に遺構の東側を調査した。平面形状は不整楕円形で 4.74m×3.56m の大型土坑である。壁面は開き、底面は段があり中央が凹む。最大の深さは 0.68m である。

埋土 埋土は 6 層に分層したが、2 層や 4 層、5 層に IV 層起源のブロック土を含む。

遺物出土状況 土師器や須恵器が、埋土中から散在した状態で出土した。

出土遺物 685 は須恵器高坏の坏部で、口縁部が大きく開く。686 は器高 40 cm 以上ある須恵器の大型甕で、胴部下半が窄まり肩部が張る。頸部から口縁部へは緩やかに外反し、口縁端部は外面に断面三角形の縁帯がある。8 世紀頃のものと思われる。なお、当遺構の西に位置する SK183 や、斜面地の約 10m 上方の ED6・ED7 (II 層) から出土した破片が接合した。687 は須恵器壺の底部で平底である。

時期 出土した遺物から 8 世紀頃と思われる。

SK207 (図 269)

検出状況 SI25 などを検出した平場の西側、EG7 グリッドの斜面に位置し、SK209 埋土上面で検出し

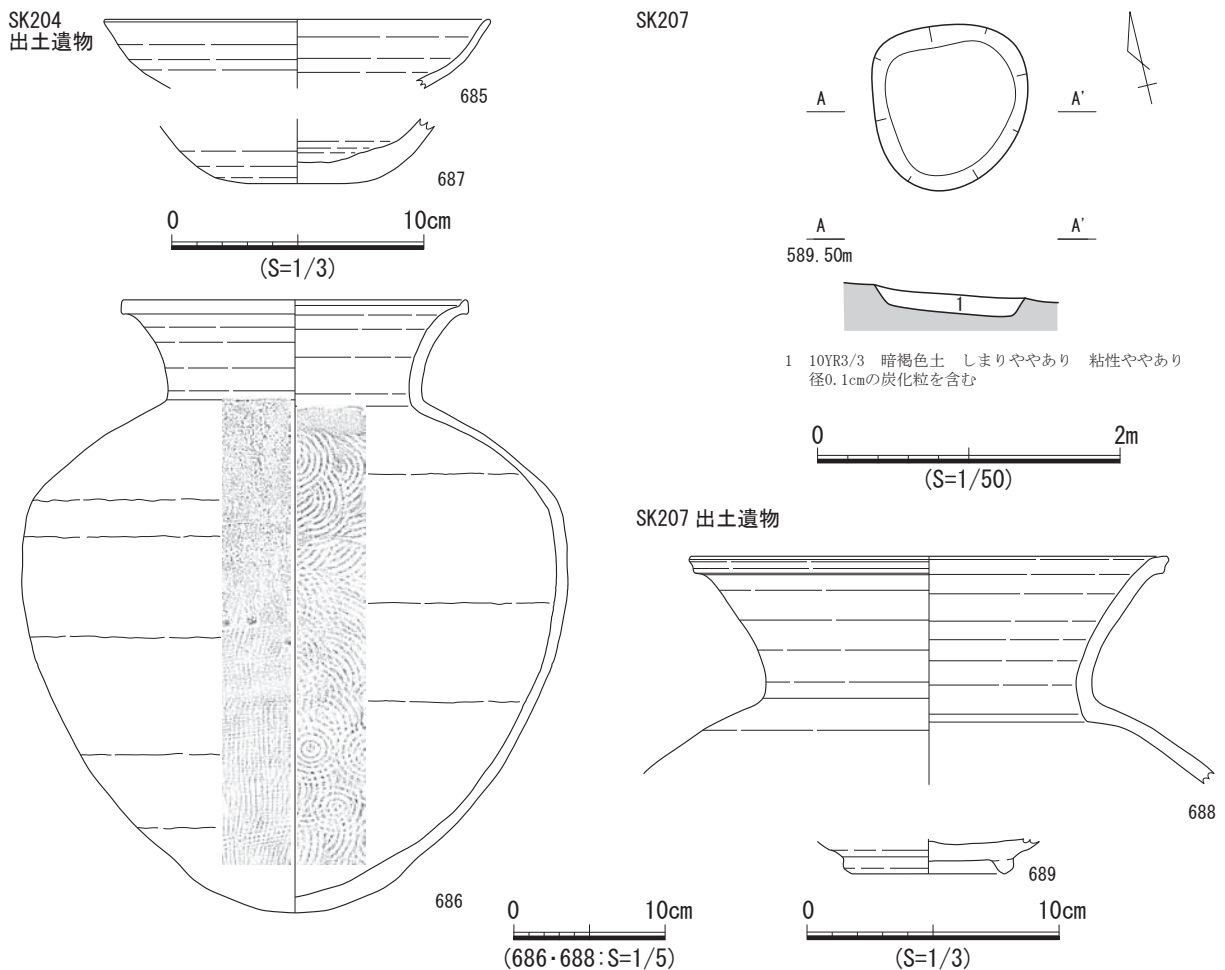


図 269 SK207 遺構図、SK204・SK207 出土遺物

た。平面形状は不整円形で最大径 1.14m の土坑である。壁面は開き、底面は平坦で、最大の深さは 0.12m である。

埋土 単層で僅かに炭化物を含む。

遺物出土状況 縄文土器や土師器、須恵器、ロクロ土師器、灰釉陶器が、埋土中から散在した状態で出土した。

出土遺物 688 は 8 世紀頃の猿投窯産の須恵器甕で、口縁部が大きく外反し、口縁端部外面に断面三角形縁帯がある。689 は灰釉陶器の碗で、低く幅広の高台を付ける。

時期 重複する SK209 から出土した遺物が 9 世紀末から 10 世紀初めのものであることから、それよりも新しい時期の遺構と思われる。

SK208 (図 270)

検出状況 EG7 グリッドの SK207 南側に位置し、SK209 埋土上面で検出した。平面形は不整円形で遺構の最大径 1.18m の土坑である。壁面は立ち上がり、底面は平坦で、最大の深さは 0.26m である。

埋土 2 層に分層したが、下層に IV 層起源のブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物出土状況 遺構の西寄り、土師器や須恵器、金属製品が出土した。

出土遺物 690 は須恵器甕の口縁部で、8 世紀末から 9 世紀初めの美濃須衛窯産と思われる。頸部から口縁部へ大きく外反し、口縁部を屈曲させて口縁端部は内外に拡張して断面が T 字形となる。691 は刀子と思われる鉄製品である。接合していないが同一個体と思われる。

時期 重複する SK209 から出土した遺物が 9 世紀末から 10 世紀初めのものであることから、それよりも新しい時期と思われる。

SK209 (図 270・図 271)

検出状況 SI25 などを検出した平場の西端の EG7～EG8 グリッドに位置し、IV 層の上面で検出した。SK207、SK208、SD12、SK204 と重複するが、検出状況から SK204 よりも新しく、他の遺構よりも古いと判断した。平成 27 年度発掘区の SK203 と同一遺構の可能性も考えたが、土層堆積状況から別の遺構と判断した。平面形は不整円形で径 4.7m ほどの大型土坑である。壁面は開き、底面はやや凹凸がある。

埋土 6 層に分層した。東西方向の土層断面の西端は平成 27 年度発掘区の SK203 埋土と思われるが、検出時に確認ができていないため、一緒に掘り下げてしまった。埋土は南側から堆積し、中央から北側が窪みとなり埋没したと思われる。

遺物出土状況 土師器や須恵器、ロクロ土師器、瓦などが、埋土中から散在した状態で出土した。

出土遺物 692～694 須恵器壺である。692 は頸部から口縁部が外反して開き、口縁端部が肥厚する。693 は丸底状の底部に高台を付け、SD12 から出土した破片と接合した。694 は、平底の底部から胴部が開き気味に立ちあがる。695～698 はロクロ土師器碗である。695 は口縁部が直線的に開き、口縁部内面から外面にかけて煤状の付着物が認められる。697 は底部がやや突出する。内外面には黒褐色の付着物があり、漆の可能性もある(第 4 章第 4 節参照)。698 は漆や煤と考えられる黒色と黒褐色の付着物が内外面に認められ、底部外面は回転糸切り痕が残る。699 と 700 は灰釉陶器の碗である。699 は体部にやや膨らみがあり、口縁端部が少し外反する。700 は底部外面をヘラ削り調整し、低い高台を

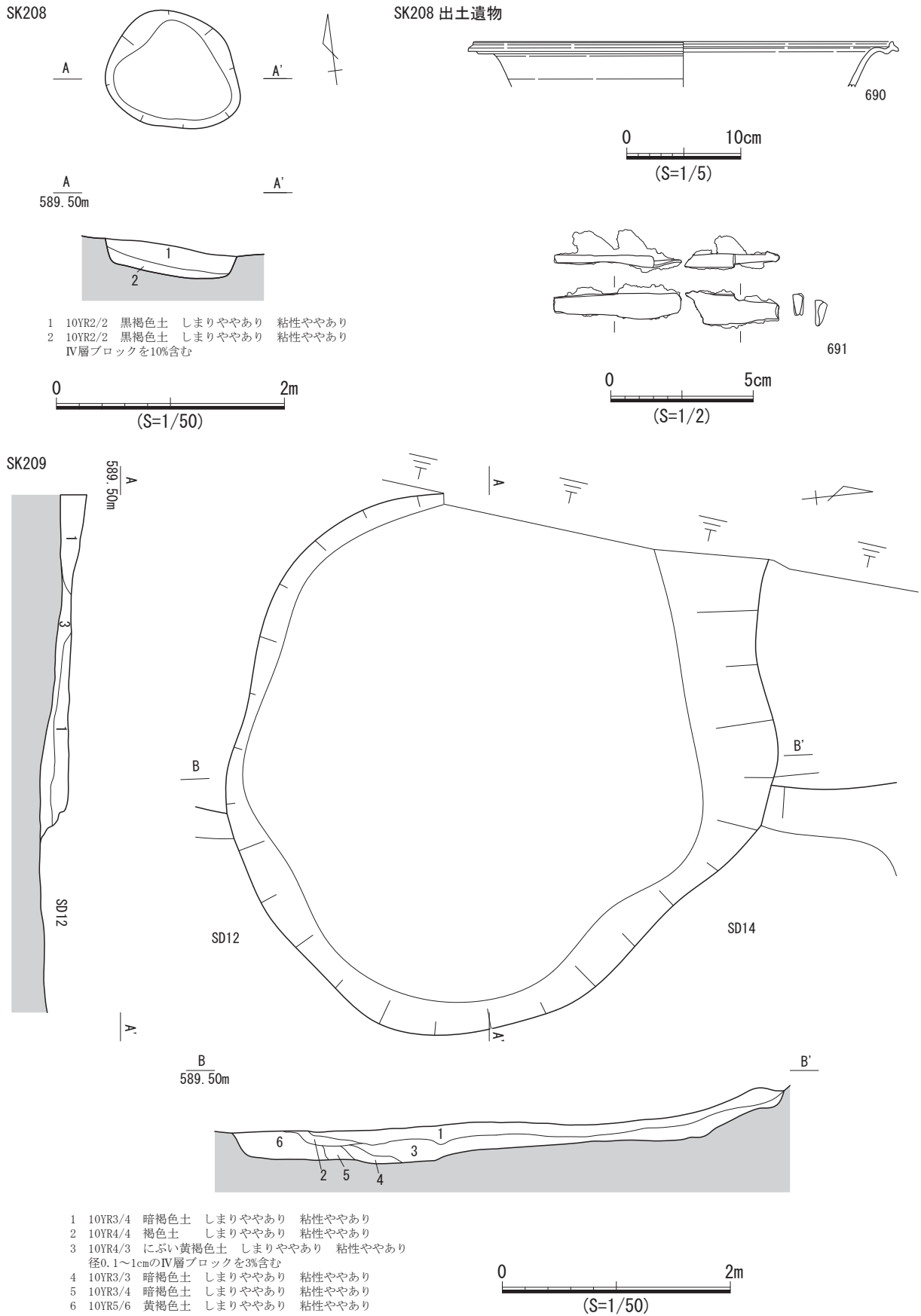


図 270 SK208・SK209 遺構図、SK208 出土遺物

付ける。701は灰釉陶器皿で、底部外面には回転糸切り痕が残り、低い高台が付く。底部外面に「大」の墨書がある。702は丸瓦で、外面はナデ調整、内面には布目痕が確認できる。703は頭部に作り出しがない角釘であるため、切り釘と考えられる。

時期 出土した遺物から10世紀から11世紀頃と思われる。

SK211 (図 271)

検出状況 SI21などを検出した平場の西端のEG8~EH8グリッドに位置し、IV層の上面で検出した。

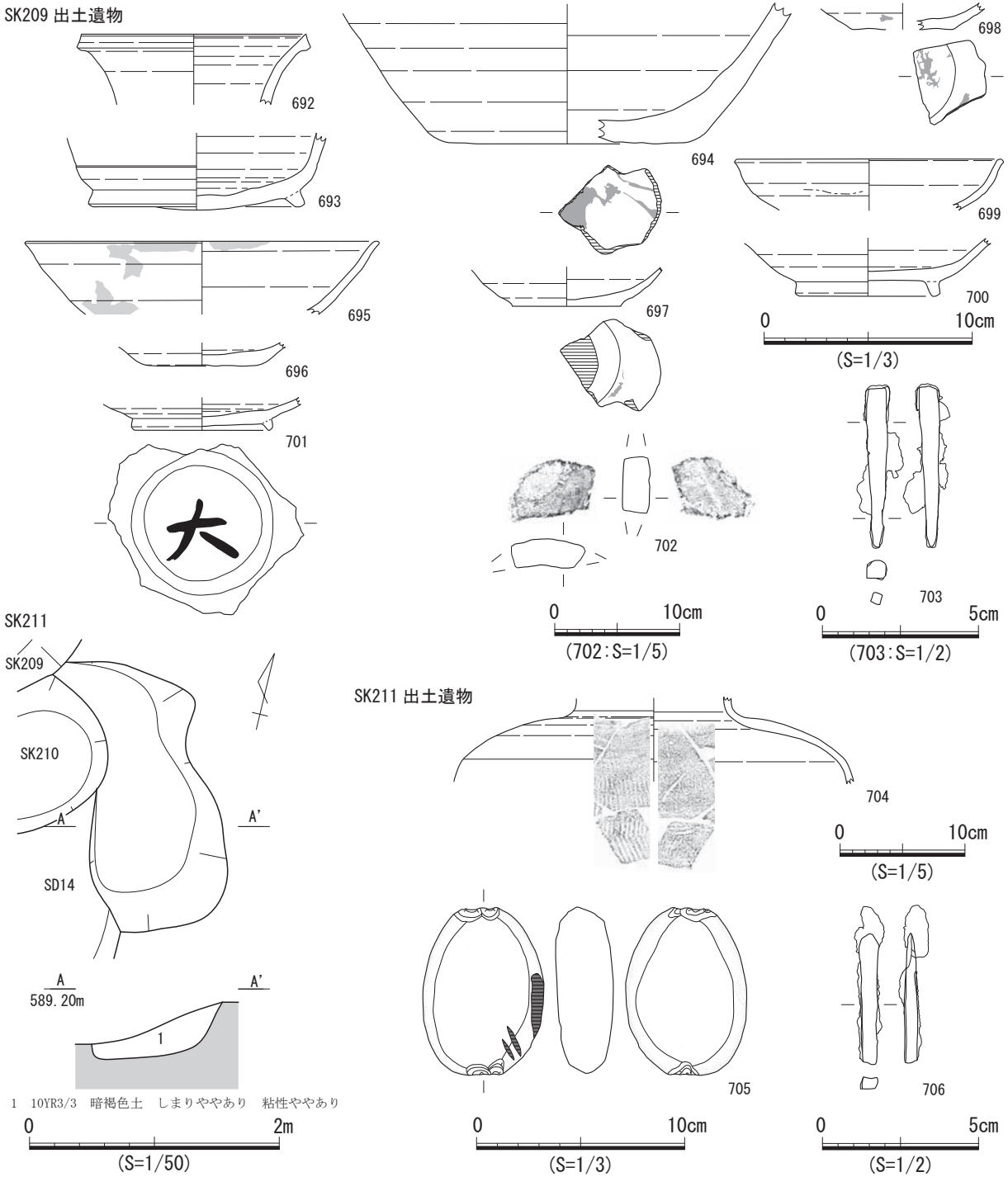


図 271 SK211 遺構図、SK209・SK211 出土遺物

SI25、SD12、SK210、SB04-P20 と重複するが、検出状況から SI25 よりも新しく、他の遺構よりも古いと判断した。平面形は他の遺構との重複関係はから不明であるが、残存部で 2.15m×1.06m の土坑である。壁面は開き、底面は比較的平坦で、最大の深さは 0.30m である。

埋土 埋土は単層である。

遺物出土状況 土師器や須恵器、ロクロ土師器、石器が、埋土中から散在した状態で出土した。

出土遺物 704 は 7 世紀頃と思われる須恵器甕で、外面は並行タタキ目、内面は同心円状の当て具痕が残る。705 は扁平な円礫を用いた石錘で、長軸方向の両端を打ち欠いている。706 は先端部が欠落した角釘である。平坦に潰している部分は折り曲げられていないが、頭部と思われる。

時期 他の遺構との重複関係や出土した遺物から、9 世紀末から 10 世紀初め頃のものと考えられる。

SK232 (図 272)

検出状況 斜面裾部の EH11～EH12 グリッドに位置し、IV 層の上面で検出した。SZ13 の周溝と重複し、SK232 が新しい。大半が発掘区外となるため平面形は不明であるが、壁面は大きく開き、最大の深さは 0.20m である。

埋土 埋土は単層で、IV 層起源のブロック土を含むことから、人為堆積の可能性が考えられる。

遺物出土状況 土師器や須恵器、石器が、埋土中から散在した状態で出土した。

出土遺物 707 は須恵器坏蓋で、7 世紀後葉の美濃須衛産と思われる。天井部はやや丸みを持ち、口

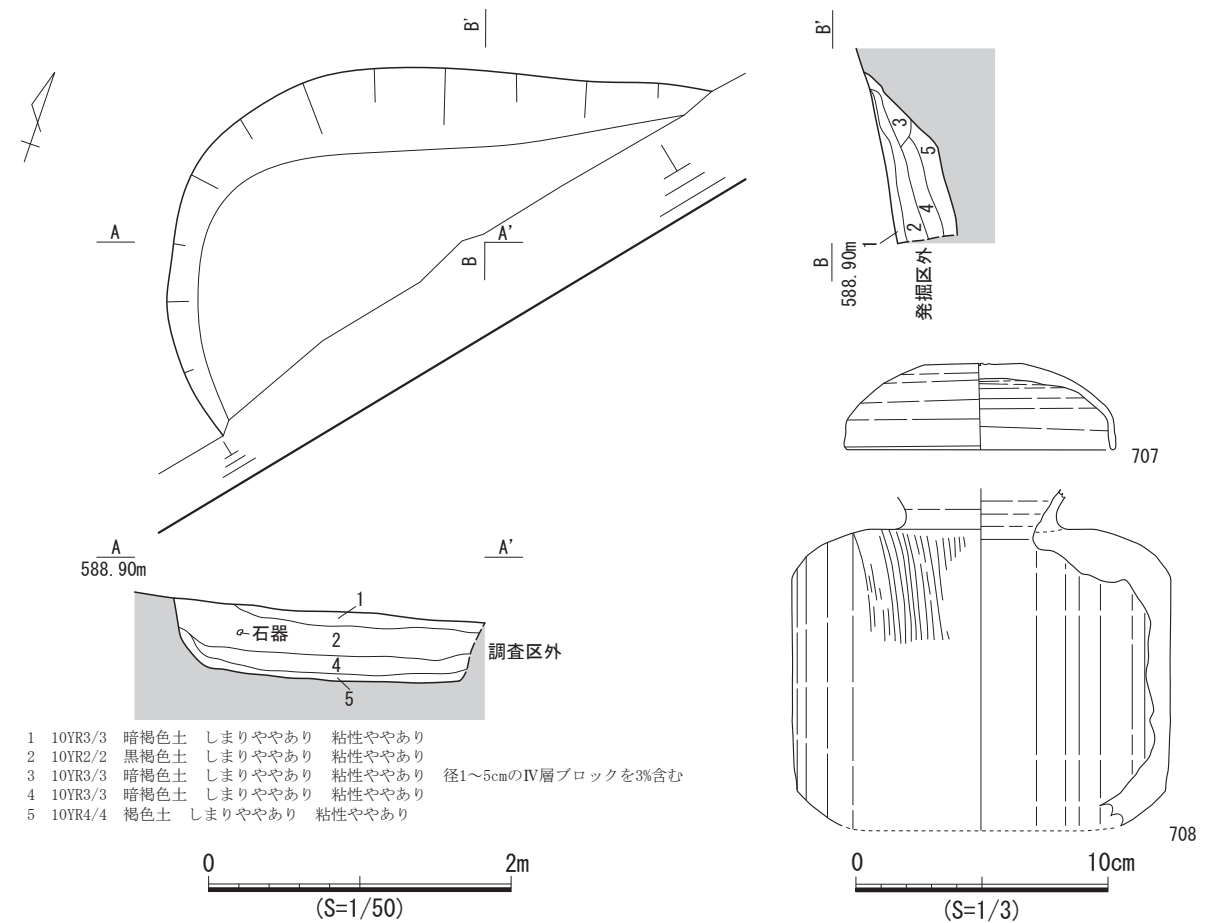


図 272 SK232 遺構図、出土遺物

縁部が直線的である。SI28 出土遺物と接合した。708 は須恵器横瓶で、7 世紀後葉の在在系と思われる。側面をヘラ削り調整する。

時期 出土遺物から 7 世紀後葉と思われる。

SK233 (図 273)

検出状況 平坦面⑤にあたる EI8 グリッド、IV 層上面で検出した。SI27 埋土上面で検出したため、SK233 は SI27 より新しい。平面形は不整楕円形で、壁面は直立し、最大の深さは 0.26m である。

埋土 埋土は単層で、ややしまりのある土層である。

遺物出土状況 土師器や須恵器が、埋土中から散在した状態で出土した。

出土遺物 709 は土師器甕の口縁部で、緩く外反する。8 世紀頃のものと思われる。

時期 SI27 との重複関係や出土遺物から、8 世紀頃と思われる。

SK239 (図 273~276)

検出状況 斜面裾部の EJ7 グリッドに位置し、IV 層の上面で検出した。SK243、SK238、SK241、SK242、SK240 と重複し、SK239 が最も新しい。南西側壁面は直立し、それ以外の壁面は途中にテラス状の平坦部があり緩やかに立ち上がる。平面形は不整円形で、最大の深さは 0.54m である。

埋土 埋土は 6 層に分層した。堆積状況はほぼ水平堆積であるが、4 層と 6 層に IV 層起源のブロック土、5 層に炭化粒を含み、1 層~4 層内には人頭大の礫がまとまって出土していることから、人為堆積の可能性が高い。

遺物出土状況 土師器や須恵器、ロクロ土師器、灰釉陶器が、埋土中から散在した状態で出土した。瓦は遺構中央から西側においてまとまって出土し、金属製品は南北側になく、中央から東西側で出土した。人頭大の川原石は、遺構中央部やや西寄りの上面で円を描くように置かれ、熨斗瓦がその中央部から下面にかけて積み重なるように出土した。

出土遺物 710 は無台の須恵器坏で、底部外面に「又」状のヘラ刻みを施す。711~713 はロクロ土師器碗である。711 は口縁部が開き、712 と 713 は内外面に漆や煤等と思われる付着物が認められる(第 4 章第 4 節参照)。714 はロクロ土師器皿で、底部がやや突出し底部外面には糸目が細かい回転糸切り痕が残り、見込み部はヘラ削りする。厚い底部から口縁部が直線的に開く。715~720 は灰釉陶器碗である。715 は口縁部が直線的に開き、低く幅広の高台が付く。716 は体部に膨らみがあり、高い高台を付ける。717~719 は、やや内湾する高台を付ける。719 と 720 の見込み部は平滑で、朱と思われる付着物が認められることから、転用硯と思われる。721 は灰釉陶器輪花碗で、口縁部が直線的に開く。722 は灰釉陶器皿で、体部が少し膨らみを持ち口縁部が開く。723 は灰釉陶器段皿、724 は灰釉陶器折縁皿である。725 は丸瓦で灰白色であるが、熨斗瓦よりも白色が強い。棒状の型に粘土の 1 枚板を巻き付け、接合部を伸ばして、形を整えている。半裁して型から取り出し、側面角を面取りして丁寧に仕上げている。726~737 は熨斗瓦で、「桶巻き技法」で製作している。凸面はナデ調整しているが、732 のみ叩き目が残る。四方向の側面と凹面脇部をヘラ切りし、凹面中央の未調整部分には布目が残る。733 と 734 以外は、桶の木目と思われる痕跡があった。熨斗瓦は灰白色を呈して焼成が甘く粗雑な感じではあるが、成形・調整作業は極めて丁寧である。熨斗瓦の側面を調整しているため桶の大きさは不明である。また、個体毎の法量に若干の差が認められるが、ほぼ完形の 726 は、全長 34.9 cm、幅 12.1 cm、厚さ 3.3 cm である。738 はチャート製の石鏃で、基部がわずかに抉られる。金属製品は釘

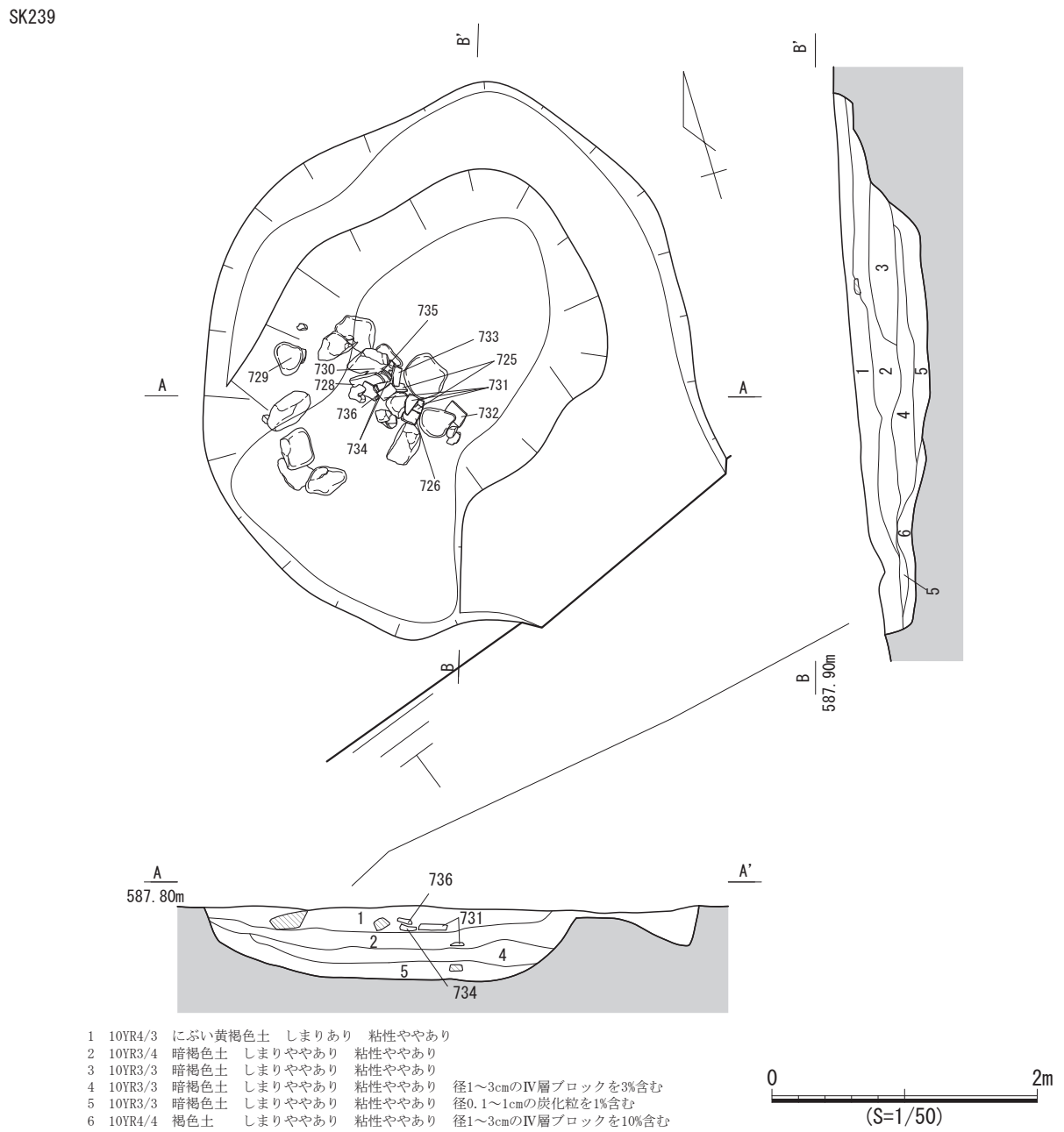
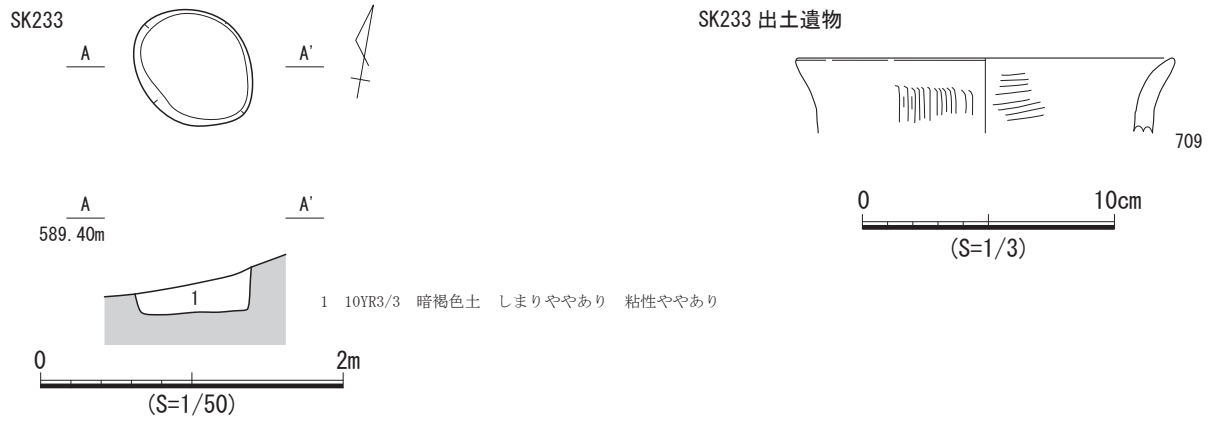


図 273 SK233・SK239 遺構図、SK233 出土遺物

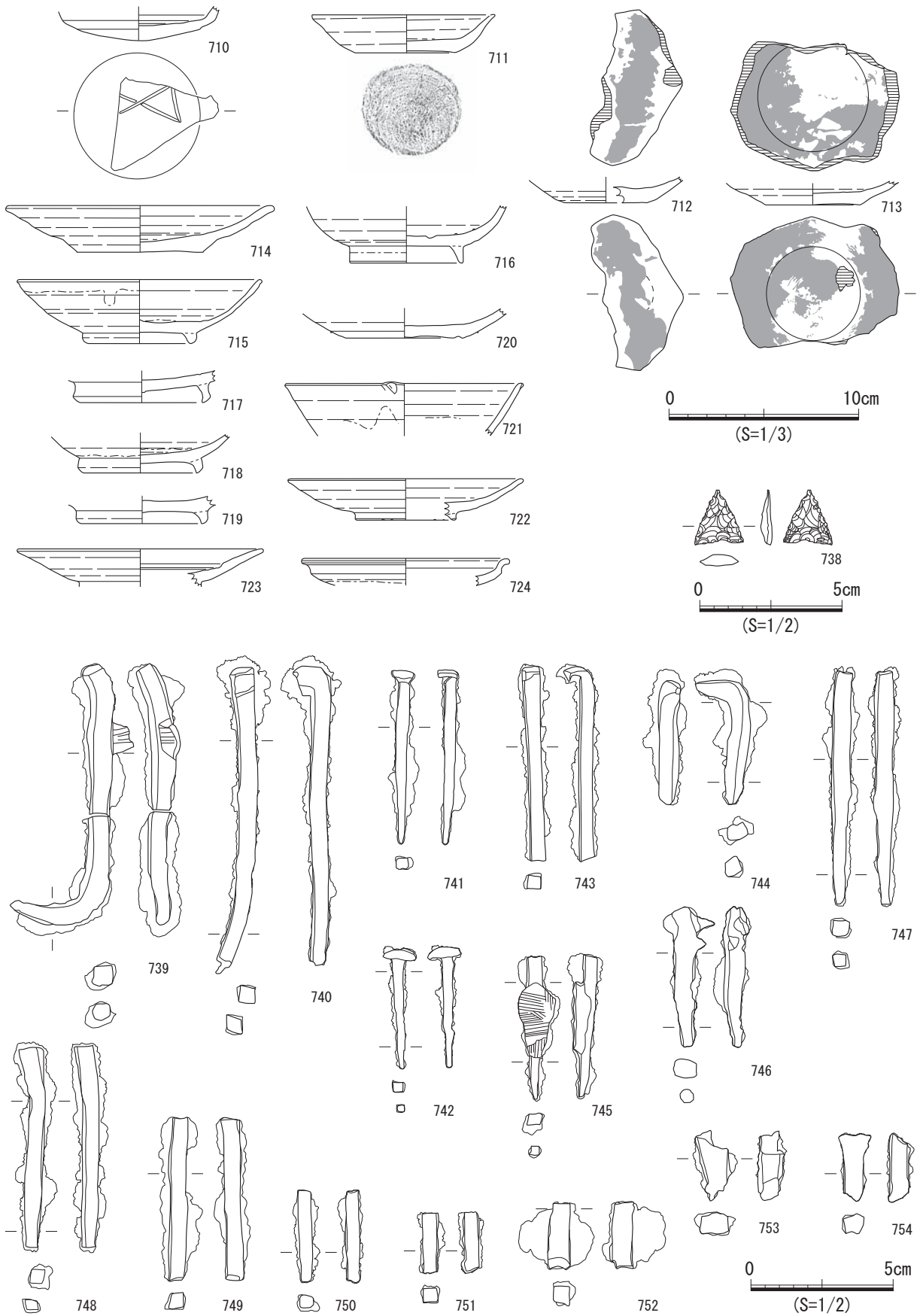


图 274 SK239 出土遺物 (1)

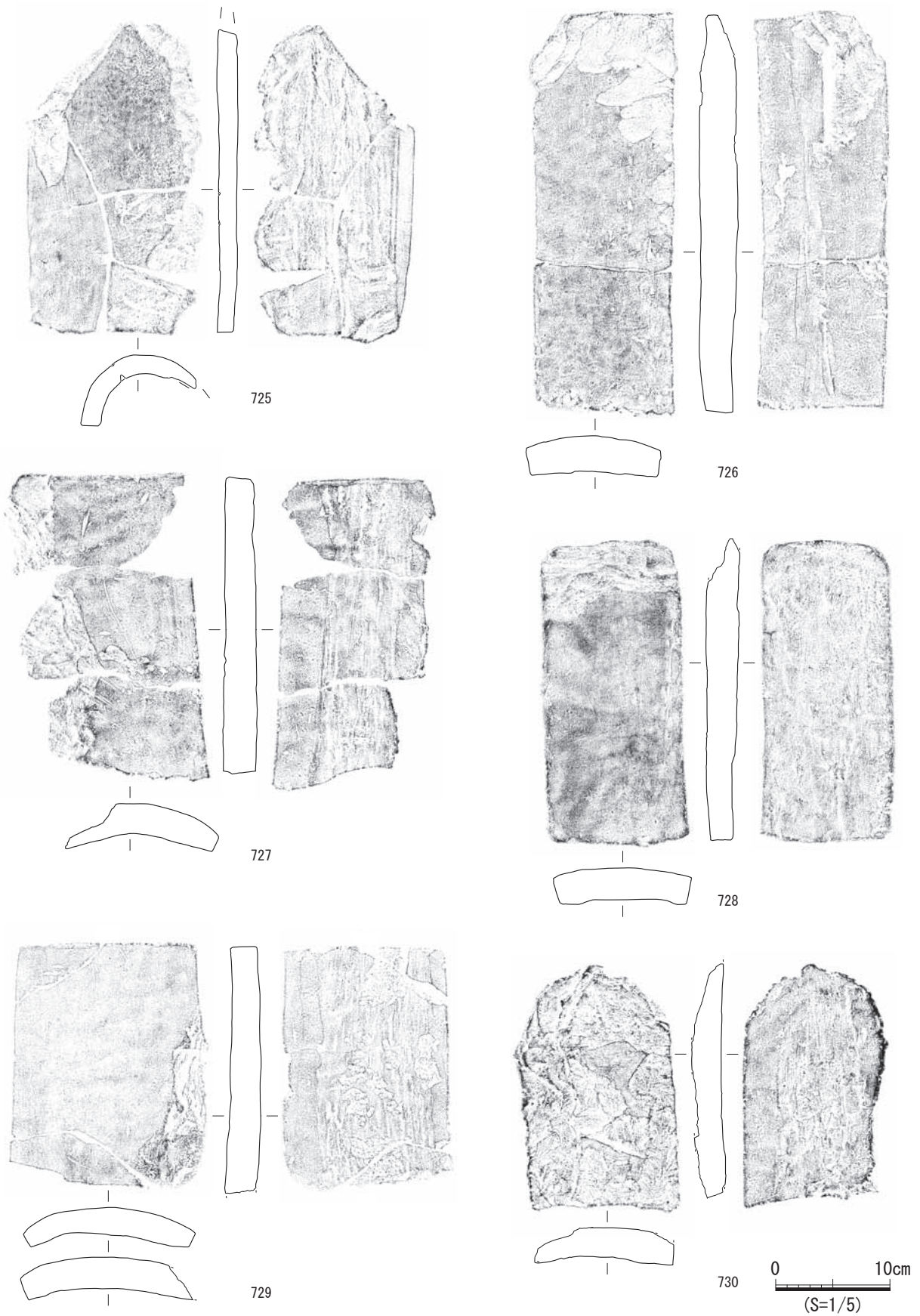


図 275 SK239 出土遺物 (2)

類で、特別に頭部を作り出さない切釘が 747~749、脚部の厚さのまま折り曲げた折釘が 740・743、頭部を扁平にして折り曲げた折釘が 741、笠形に頭部を作り出した円頭釘が 742 である。また、脚部から先端部までのものが 739 と 744~747 で、739 と 744 は先端部が L 字に折り曲がっている。750~754 は脚部片と考えられる。

時期 出土した灰釉陶器から 10 世紀前半頃と思われる。

SK243 (図 277)

検出状況 斜面裾部の EJ6~FK7 グリッドに位置し、IV層の上面で検出した。SK239 と重複し、SK239 が新しい。壁面は大きく開く。平面形は不整形で、最大の深さは 0.20m である。

埋土 埋土は単層で、IV層起源のブロック土を含むことから、人為堆積の可能性が考えられる。

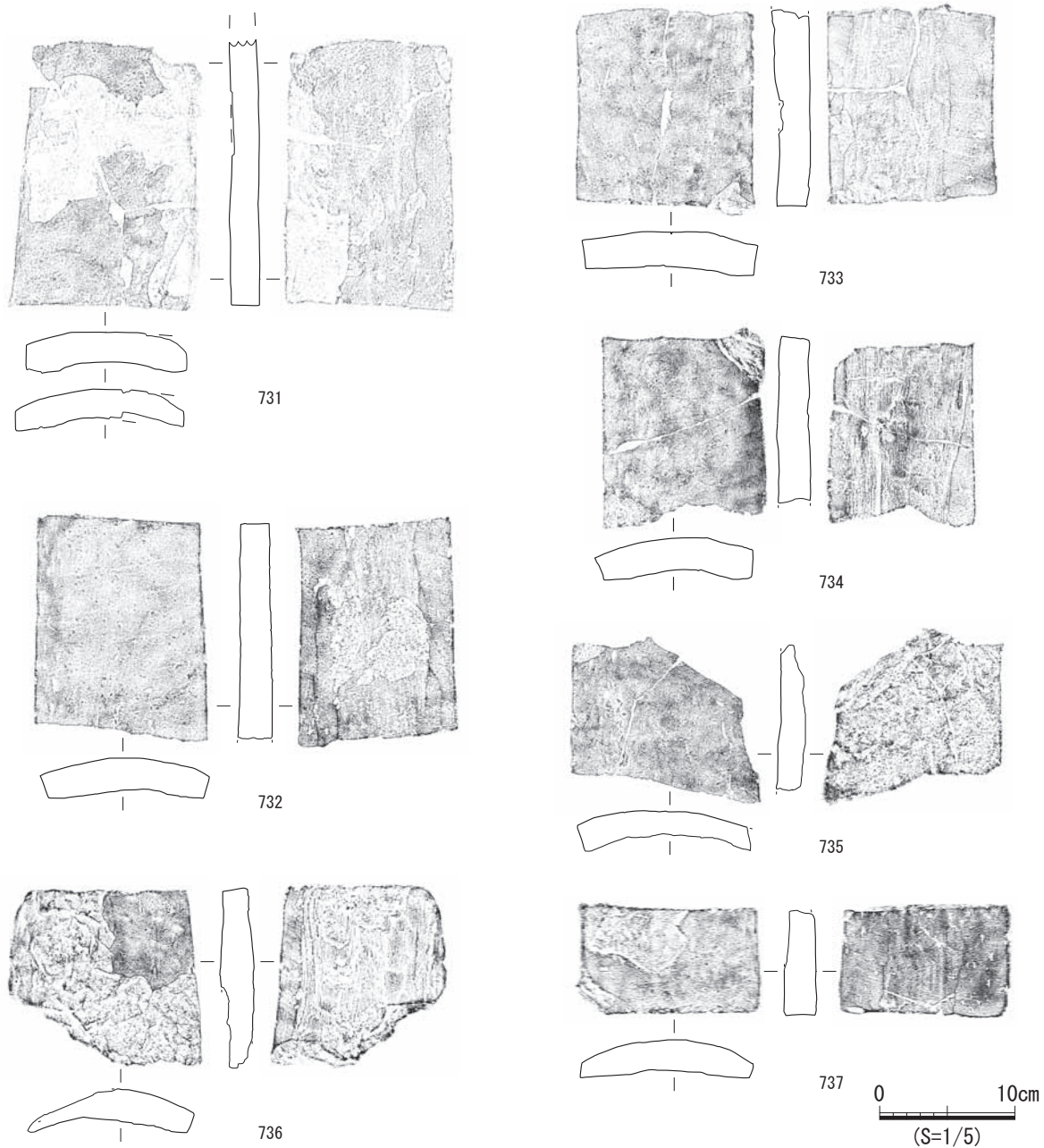


図 276 SK239 出土遺物 (3)

遺物出土状況 土師器や須恵器、ロクロ土師器、灰釉陶器、金属製品が、埋土中から散在した状態で出土した。

出土遺物 755は灰釉陶器碗で、低く幅広の高台が付く。756はL字に曲がった釘で、先端を扁平に成形した部分が折り曲げていない状態の頭部とすると、犬釘と考えられる。757は釘の先端部である。

時期 SK239に先行する遺構であるが、出土した灰釉陶器から、10世紀頃と思われる。

SK262 (図 278)

検出状況 SI23などを検出した平場のEE11～EE12グリッドに位置し、IV層の上面で検出した。SZ09やSK152と重複するが、検出状況からSK262が新しく、埋土上面ではSK158を検出した。平面形は東側がやや膨らむ不整長楕円形で、壁面は大きく開き、深さは最大で0.22mである。

埋土 3層に分層したが、部分的に3層が堆積し、1層と2層がほぼ水平に堆積する。

遺物出土状況 土師器や須恵器、ロクロ土師器、灰釉陶器が、埋土中から散在した状態で出土した。

出土遺物 758～760はロクロ土師器碗で、底部がやや突出する。758の内面と760の外面に煤状の付着物が認められる。761～764は灰釉陶器の碗である。761は直線的な口縁部が大きく開き、幅広の高台が開く。口縁部外面のみ灰釉が認められた。762はやや膨らみを持つ体部から口縁端部が外反し、幅広の高台が開く。763は直線的な口縁部が大きく開き、低く幅広の高台が開く。764は体部がやや膨らみ口縁部が直線的に開く。内面に煤状の付着物がある。765は灰釉陶器多口瓶の子口頸部で、口縁端部が内側に屈曲する。

時期 出土した遺物から10世紀後半と思われる。

SK363 (図 278)

検出状況 BT16グリッド、SZ51墳丘上で検出した。平面形は東西方向に長い不整な楕円形である。底面は平坦で、壁面は底面から緩やかに開く。壁の残存高は最大で0.36mである。

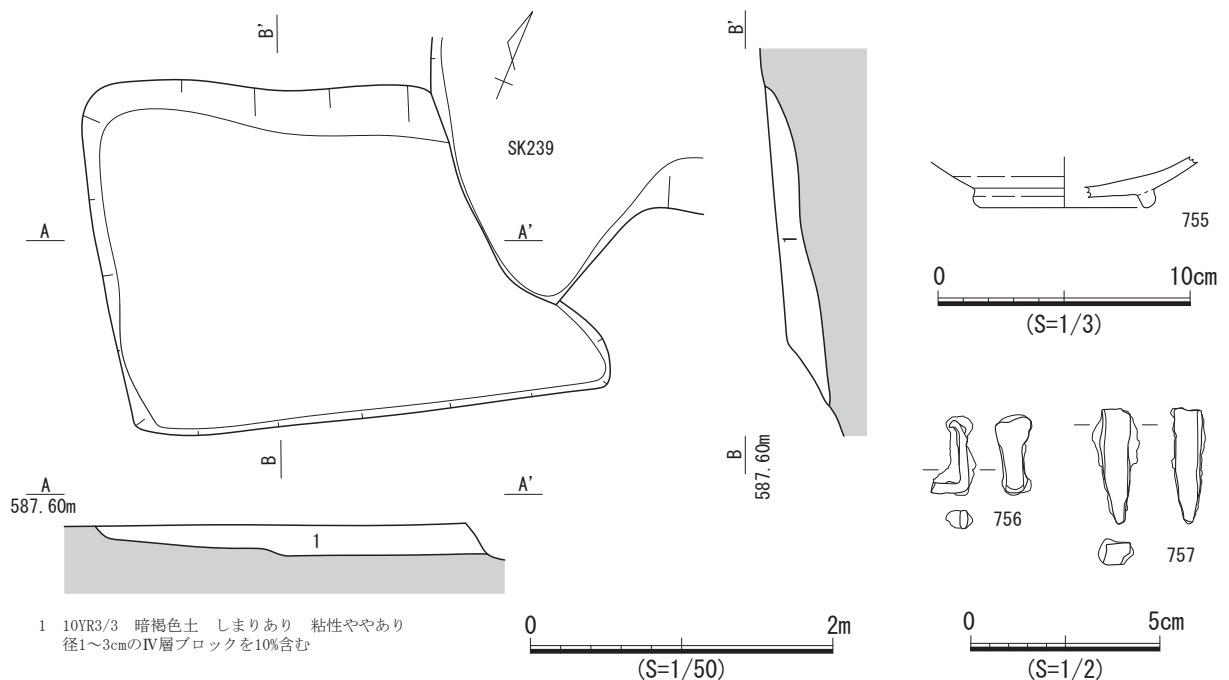
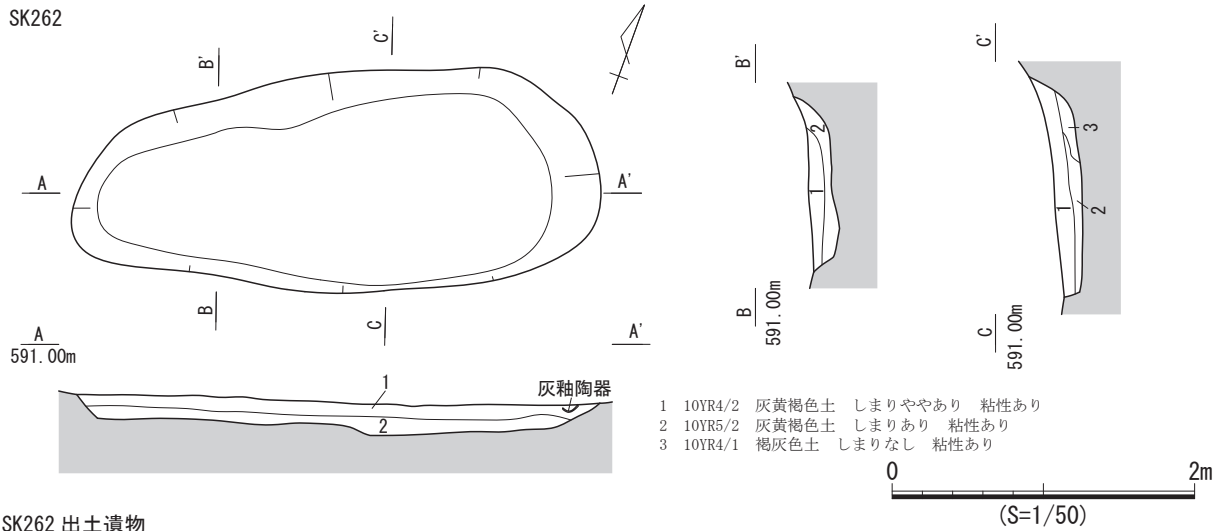
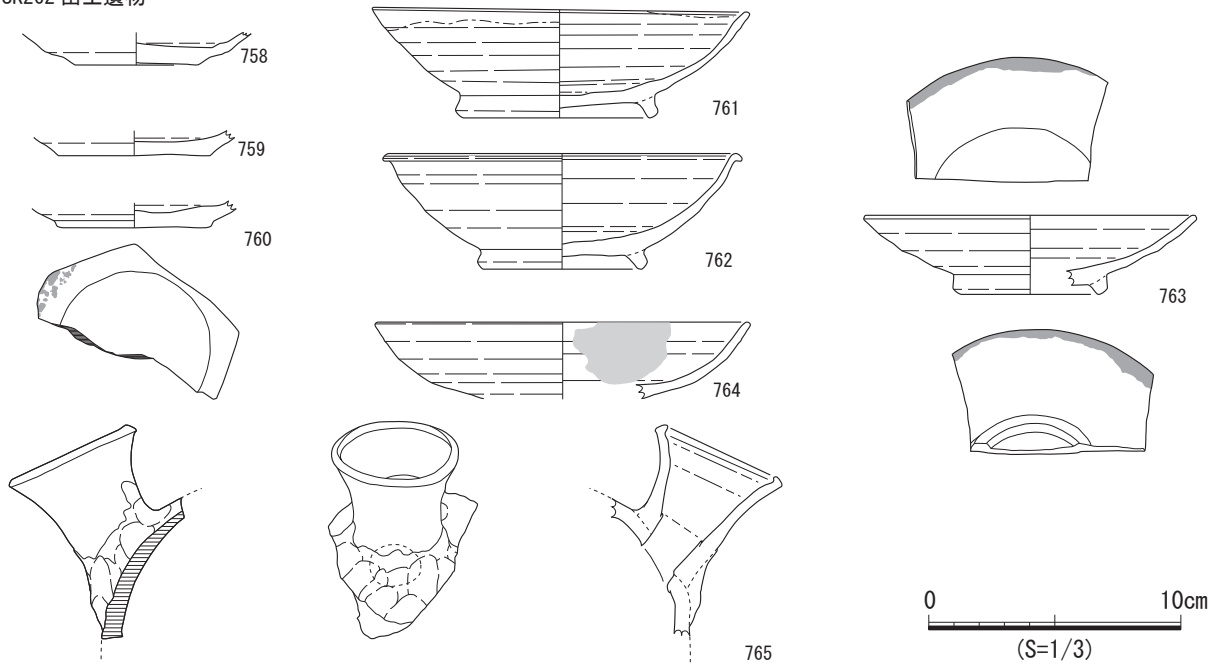


図 277 SK243 遺構図、出土遺物

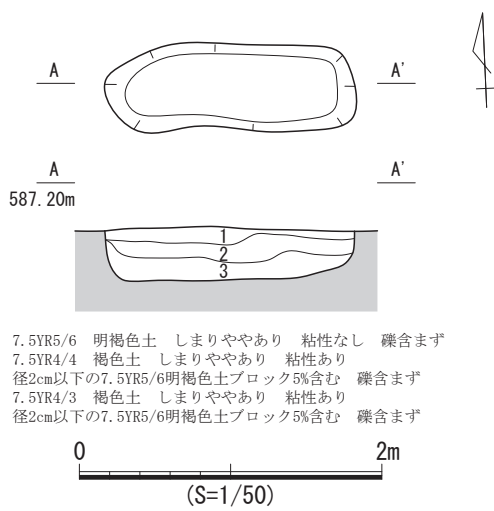
SK262



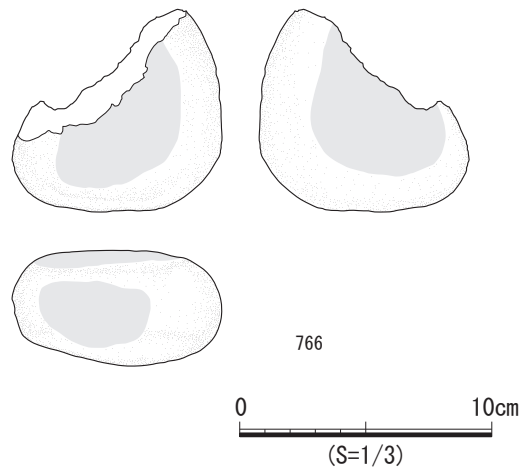
SK262 出土遺物



SK363



SK363出土遺物



- 1 7.5YR5/6 明褐色土 しまりややあり 粘性なし 礫含まず
 2 7.5YR4/4 褐色土 しまりややあり 粘性あり 径2cm以下の7.5YR5/6明褐色土ブロック5%含む 礫含まず
 3 7.5YR4/3 褐色土 しまりややあり 粘性あり 径2cm以下の7.5YR5/6明褐色土ブロック5%含む 礫含まず

図 278 SK262・SK363 遺構図、出土遺物

埋土 3層に分層した。IV層に類似した色調の埋土がほぼ水平に堆積する。

遺物出土状況 1層から石器が1点出土した。

出土遺物 766は握り拳大の扁平な円礫を用いた磨石で、平坦な両面と側面に磨面をもつ。全体に被熱して赤みを帯び、半分近くを欠損している。

時期 SZ51の墳丘上で検出した遺構であるが、SZ51とは関係性がないと思われることから、古代の以降の遺構と思われる。

SK405 (図 279)

検出状況 BT18~EA19グリッド、IV層の上面で検出した土坑で、南部は発掘区外である。長軸が6.5m以上ある大型の遺構で、調査時は墳墓の周溝である可能性も考えていたが、現況地形測量では本遺

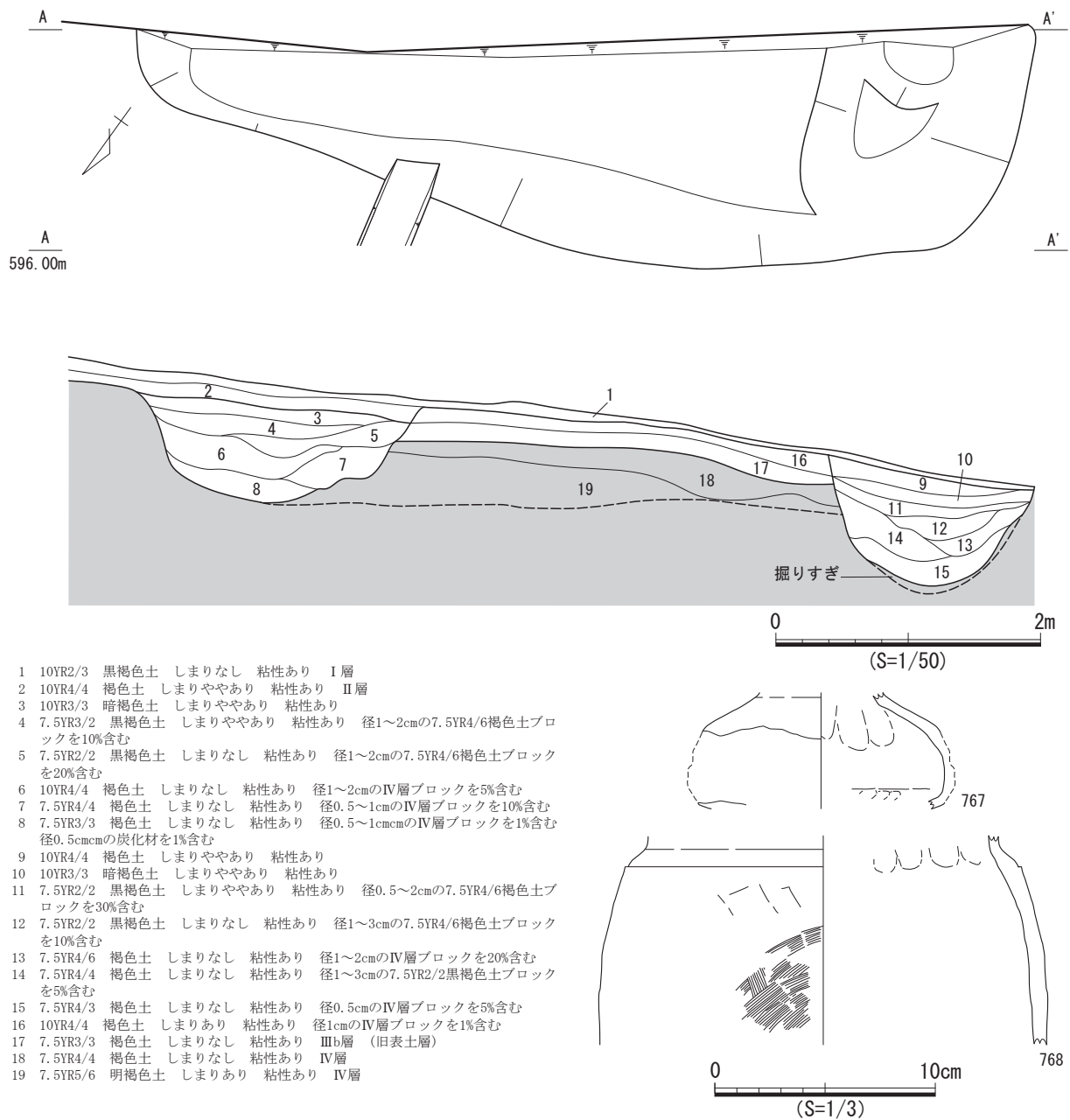


図 279 SK405 遺構図、出土遺物

構の南側に墳丘は確認できなかった。検出した形状から、平面は方形若しくは長方形と考えられる。発掘区南壁際を掘り過ぎていたため本来の底面形状は不明であるが、土層断面では、遺構東西の両端に別の掘り込みが存在しており、西端の底面にはその名残がある。遺構東西の掘り込みは、断面形状や規模がほぼ同じである。このことから、調査時は周溝が回っており、その間の堆積は墳丘盛土としていた。しかし、その想定では平面形と整合がとれないことや、遺物の出土状況から弥生時代の遺構とは考えにくいことから、墳墓とはしなかった。

埋土 大半はIV層に類似する褐色土であるが、東西の掘り込みの上層のみに黒褐色土が堆積する。

遺物出土状況 埋土内から、縄文土器や弥生土器、土師器、灰釉陶器が、散在した状態で出土した。この内、灰釉陶器は遺構検出面から 0.05～0.1mの深さから出土しているが、その他は古墳時代後期以降の土師器甕と考えられる 768 も含め、ほぼ底面に近い位置で出土した。

出土遺物 767 は弥生土器の台付装飾壺の可能性があるが、外面の装飾が剥離しているため詳細は不明である。768 は土師器の甕で、頸部外面に明瞭な段をもつ。

時期 出土した遺物から、7世紀後半以降と思われる。

SK438 (図 280)

検出状況 BT12～BT13 グリッド、IV層の上面で検出した。SZ48 の墳丘下から周溝底面で検出したが、出土した遺物から、SZ48 調査時に SK438 を見落としていたと思われる。SK436 とは検出時の重複関係から SK438 が古い。平面形は南北方向に長軸を持つ長楕円形の土坑で、壁面は比較的緩やかに開く。壁の残存高は最大で 0.36m である。

埋土 2層に分層したが、ほぼ水平堆積で、IV層ブロックを含むことから人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土中から須恵器が 1点出土した。

出土遺物 769 は高台を持つ須恵器碗で、表土出土のものと接合した。胎土からは在地産と思われるが、美濃須衛窯V期第1小期に併行すると思われる。

時期 出土した遺物から、9世紀前半と思われる。

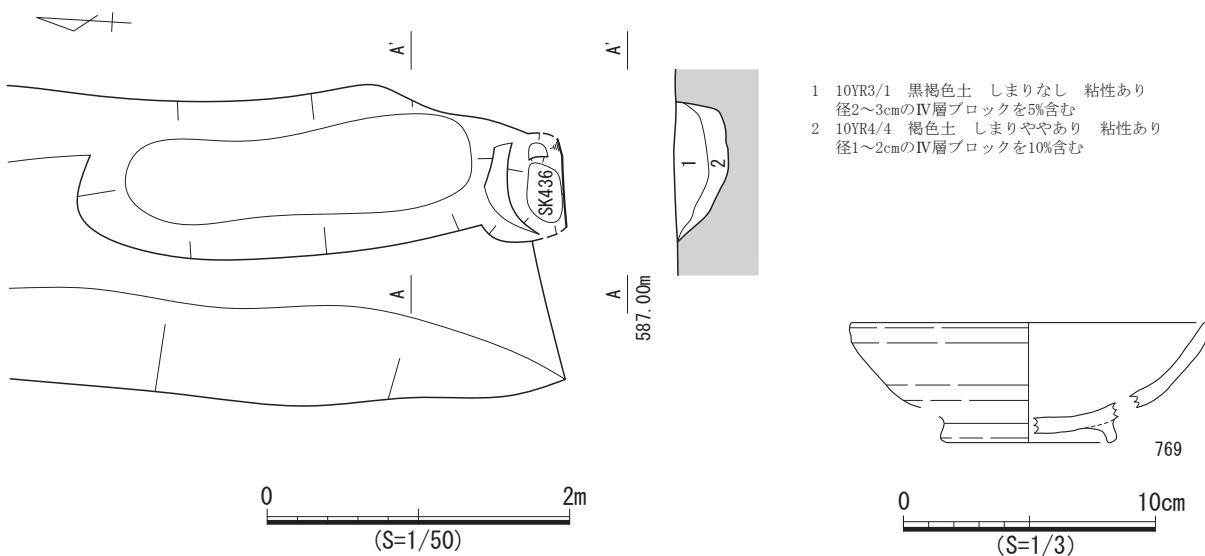


図 280 SK438 遺構図、出土遺物

SK485 (図 281)

検出状況 DH20～EI1 グリッド、IV層の上面で検出した。南西で SK506 と重複していることから全形は不明であるが、残存部分では北東-南西方向に長い不整な長方形である。底面は平坦で2段に掘り込まれ、南東側にテラス状の平坦面を有する。本遺構は SK506 より古い。壁面は底面から緩やかに開く。壁の残存高は最大で 0.30m である。

埋土 3層に分層した。ほぼ水平に堆積し、いずれもしまりがあり、粘性がややある埋土である。

遺物出土状況 埋土中から土師器や須恵器、灰釉陶器、瓦が、散在した状態で出土した。

出土遺物 770 は須恵器の有台坏である。771 は美濃須衛窯産と思われる須恵器の碗で、体部外面に墨

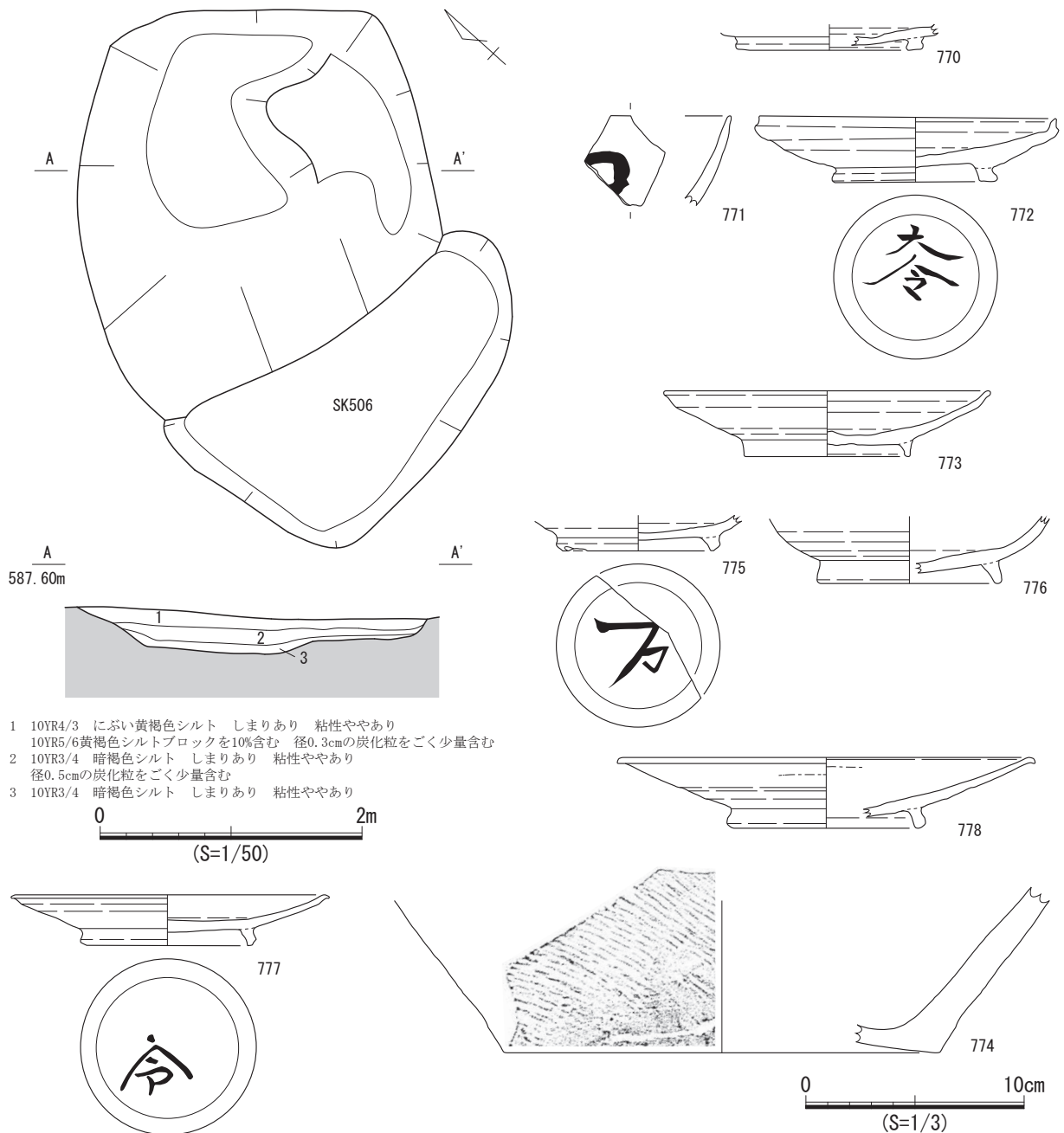


図 281 SK485 遺構図、出土遺物

書を確認したが判読不能である。772 と 773 は高台を持つ須恵器盤である。772 の底部外面に「大令」と判読できる墨書を確認した。774 は須恵器の甕の底部片である。775 と 776 は灰釉陶器の碗である。775 の底部外面に「万」と判読できる墨書を確認した。777 と 778 は灰釉陶器の皿である。777 は底部外面に「令」と判読できる墨書を確認した。778 は灰釉を浸け掛けする。

時期 出土した遺物は9世紀から10世紀のものがあるが、最も新しいと思われる778から、10世紀後半と考えられる。

SK506 (図 282)

検出状況 DI20~EI1 グリッド、IV層の上面で検出した、平面形が不定形の土坑である。底面は平坦に近いが、東側が緩やかに下がる。壁面は底面から緩やかに開き、壁の残存高は最大で0.18mである。

埋土 2層に分層した。いずれもしまりがある埋土である。

遺物出土状況 埋土中から須恵器や灰釉陶器などが、散在した状態で出土した。

出土遺物 779 は須恵器の碗で、内面に重ね焼痕があり、底部外面を回転ヘラケズリ調整した後に高台を貼り付けている。780 は灰釉陶器の碗で、内面に墨痕が認められる。

時期 出土した灰釉陶器から、10世紀前半頃と思われる。

SK511 (図 283)

検出状況 EI1~EI2 グリッド、IV層の上面で検出した。平面は東西方向に長い楕円形で、一部北方向への張り出しがある。底面は平坦である。壁面は底面から緩やかに開く。壁の残存高は最大で0.39mである。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平に堆積し、いずれもしまりがある埋土である。

遺物出土状況 埋土中から土師器や須恵器、灰釉陶器、陶磁器、瓦、石器が、散在した状態で出土した。

出土遺物 781~787 は灰釉陶器の碗である。781 の底部外面に「万富」と判読できる墨書を確認した。782 の底部外面に記号と思われる墨書があるが、判読不能である。783 の内面には自然釉が付着してい

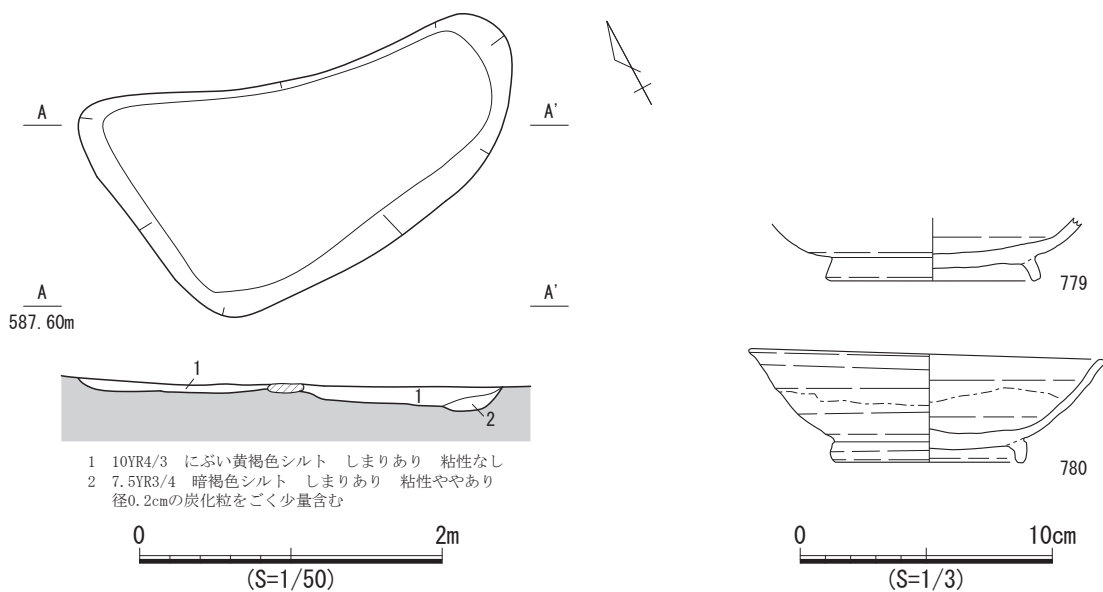


図 282 SK506 遺構図、出土遺物

る。784の底部外面には一部欠損するが、「寺」の可能性のある墨書を確認した。内外面に自然釉が付着している。785は内外面に自然釉が付着している。786は高台下部に植物圧痕、底部外面に板目圧痕がある。底部内面は摩耗している。787は重ね焼痕があり、灰釉が刷毛塗りされている。内面に自然釉が付着している。788は灰釉陶器の皿で、底部内面が摩耗し、見込み部に墨痕が認められることから、転用硯の可能性もある。789は縦長の剥片で、両側辺に微細な剥離痕を持つ。790は砥石片である。

時期 出土した遺物は9世紀から10世紀のものがあるが、最も新しいと思われる782から、10世紀後半と考えられる。

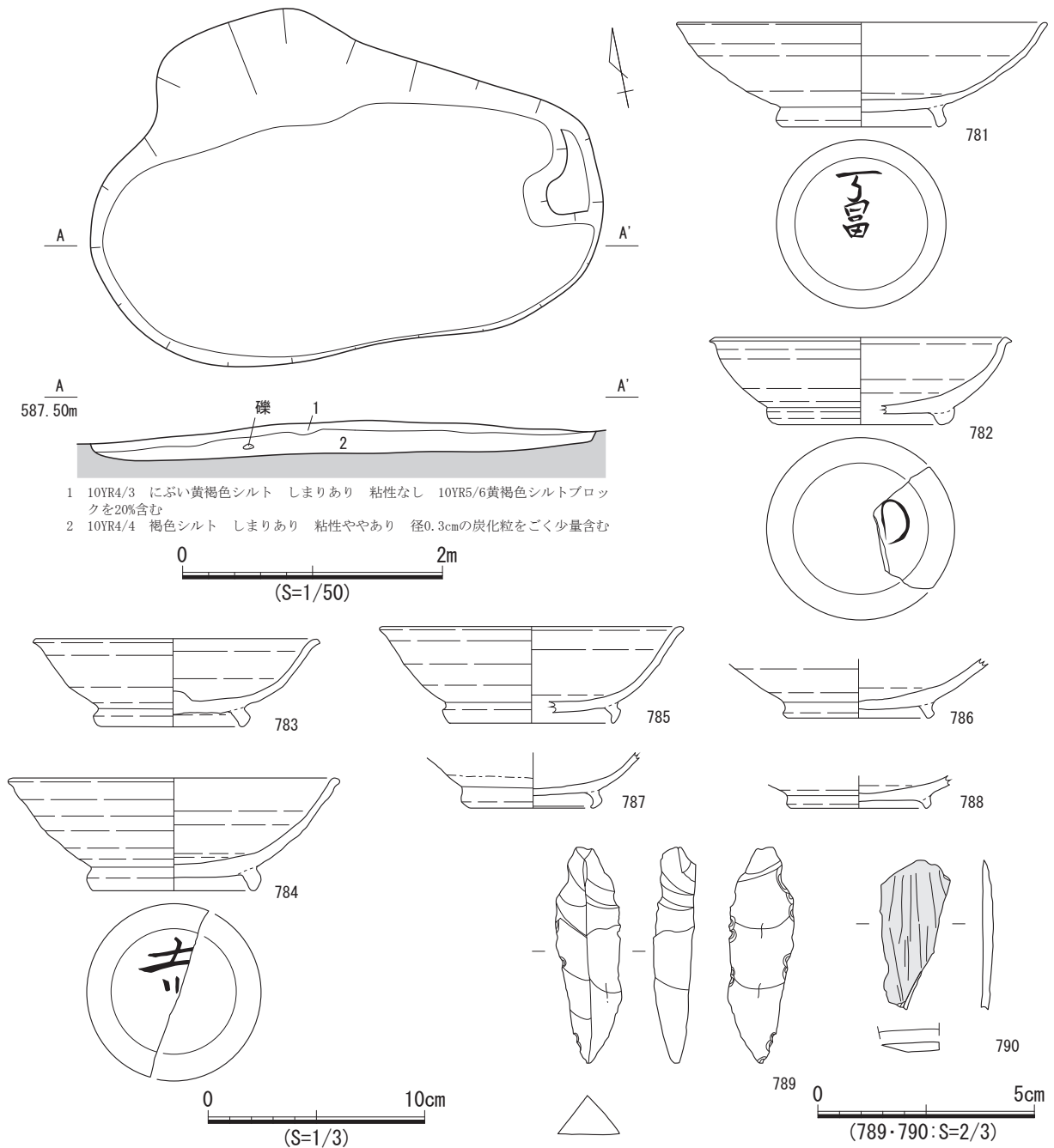


図 283 SK511 遺構図、出土遺物

SK514 (図 284)

検出状況 EI2~EJ2 グリッド、IV層の上面で検出した、平面形が不定形の土坑である。底面は平坦に近いが、中央から北にかけて緩やかに下がる。壁面は底面から緩やかに開き、壁の残存高は最大で0.12mである。

埋土 2層に分層した。いずれもブロック土が混じることから人為堆積と思われる。また、1層にはわずかだが炭化物が含まれる。

遺物出土状況 埋土中から土師器や須恵器、灰釉陶器、石器が、散在した状態で出土した。

出土遺物 791は灰釉陶器の皿である。内面には重ね焼痕が残る。

時期 出土した灰釉陶器から、10世紀後半頃と思われる。

SK516 (図 284)

検出状況 EI2 グリッド、IV層の上面で検出した。平面形が円形に近い形状で、底面は平坦である。壁面は底面から緩やかに開き、壁の残存高は最大で0.28mである。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平に堆積し、いずれもIV層に類似するブロック土を含むことから、人

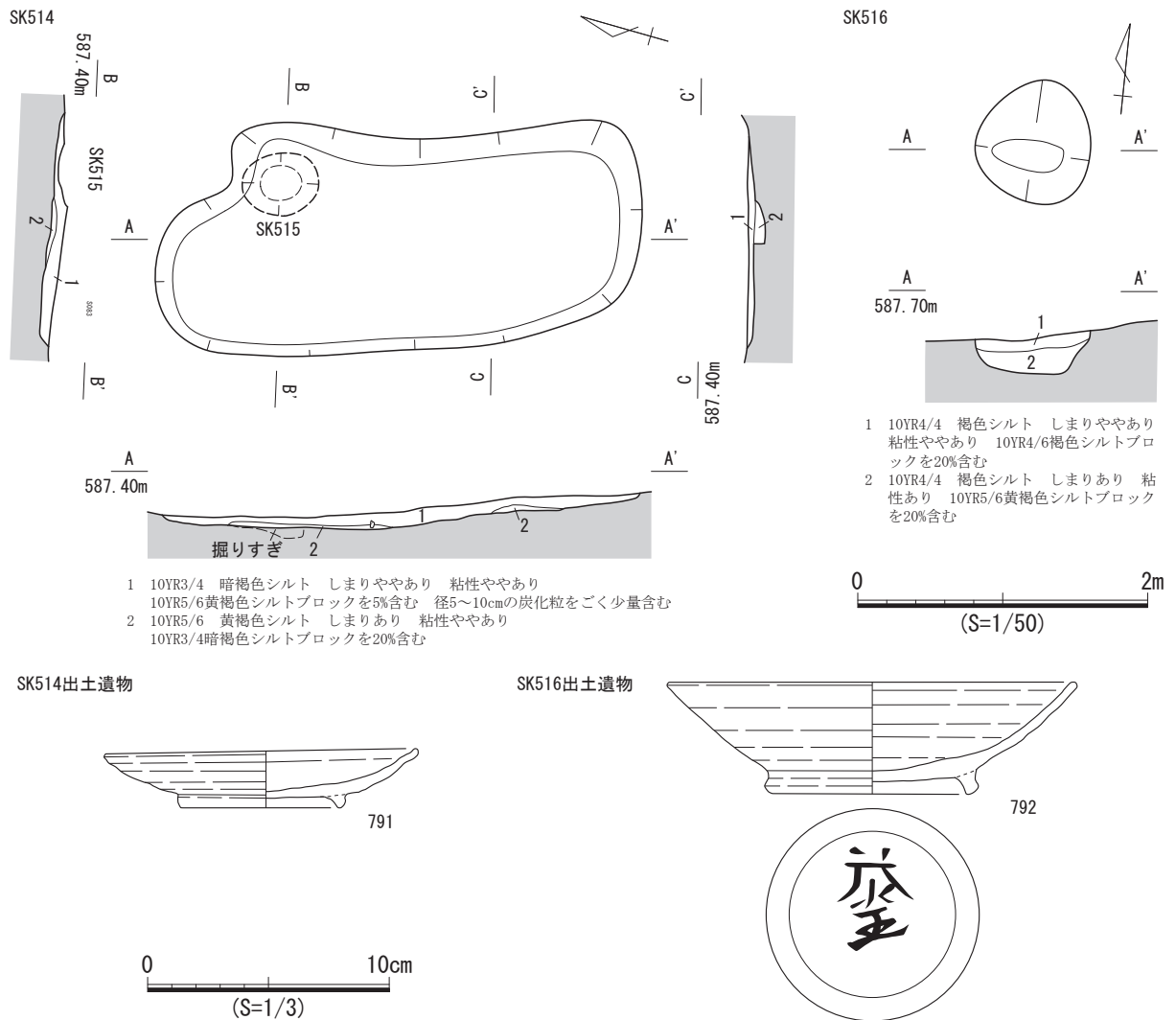


図 284 SK514・SK516 遺構図、出土遺物

為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土中から須恵器や灰釉陶器が、散在した状態で出土した。

出土遺物 792 は灰釉陶器の碗である。内面に重ね焼痕が残り、底部外面には「益」とと思われる墨書を確認した。

時期 出土した灰釉陶器から、10世紀頃と思われる。

SK517 (図 285)

検出状況 EI2 グリッド、IV層の上面で検出した、不定形の土坑である。底面は多少の凹凸があり、SK496 の中に含まれるように検出され、北側ではSK516 と重複する。土層堆積状況からSK496 はSK517 よりも新しく、SK516 はSK517 よりも古いと判断した。壁面は、底面から緩やかに開き、壁の残存高は最大で0.19mである。

埋土 単層であるが、多量の土器が含まれていた。

遺物出土状況 埋土上部において、土師器や須恵器、灰釉陶器がまとまって出土した。特に規則性はないものと思われ、廃棄された可能性が高い。

出土遺物 793～813 はロクロ土師器の碗で、多くの底部外面に回転糸切り痕が残る。798・801～804・806～813 には内外面に煤が付着している。814～818 は灰釉陶器の碗である。814 は底部外面に「寺」と判読できる墨書を確認した。815 は底部外面に回転糸切り痕が残り、底部内面見込み部に墨が付着している。817 は外面に煤が付着している。819 は灰釉陶器の皿で、回転糸切り痕が残る。

時期 出土した灰釉陶器から、10世紀後半と考えられる。

SK527 (図 286)

検出状況 DJ20 グリッド、IV層の上面で検出した。平面は東辺がやや直線的な円形に近い形状で、西側に平坦面を有する。壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁の残存高は最大で0.61mである。

埋土 4層に分層した。水平に堆積し、いずれもⅢb層に類似するにぶい黄褐色シルトである。

遺物出土状況 埋土中から土師器や灰釉陶器、石器が、散在した状態で出土した。

出土遺物 820 は磨石・敲石類で、側面に磨痕、長軸の一端に敲打痕が認められる。

時期 灰釉陶器が出土したことから、平安時代の遺構と考えられる。

SK557 (図 286)

検出状況 EK1 グリッド、IV層の上面で検出した。平面形が楕円形に近い形状で、底面はほぼ平坦である。壁面は底面から直線的に立ち上がり、壁の残存高は最大で0.22mである。

埋土 3層に分層したが、ほぼ水平堆積で、1層と2層からはIV層に類似するブロック土を含むことから、人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土中から須恵器が、散在した状態で出土した。

出土遺物 821 は高台を持つ須恵器盤である。内面に重ね焼痕を確認した。

時期 出土した須恵器から、9世紀前半の遺構と思われる。

SK589 (図 286)

検出状況 EL1～EL2 グリッド、IV層の上面で検出した。東側は試掘調査時に掘削しているため、全形は不明である。底面は平坦で、壁面は底面から緩やかに開く。壁の残存高は最大で0.15mである。

埋土 単層で、IV層に類似するブロック土を含むことから、人為堆積と思われる。

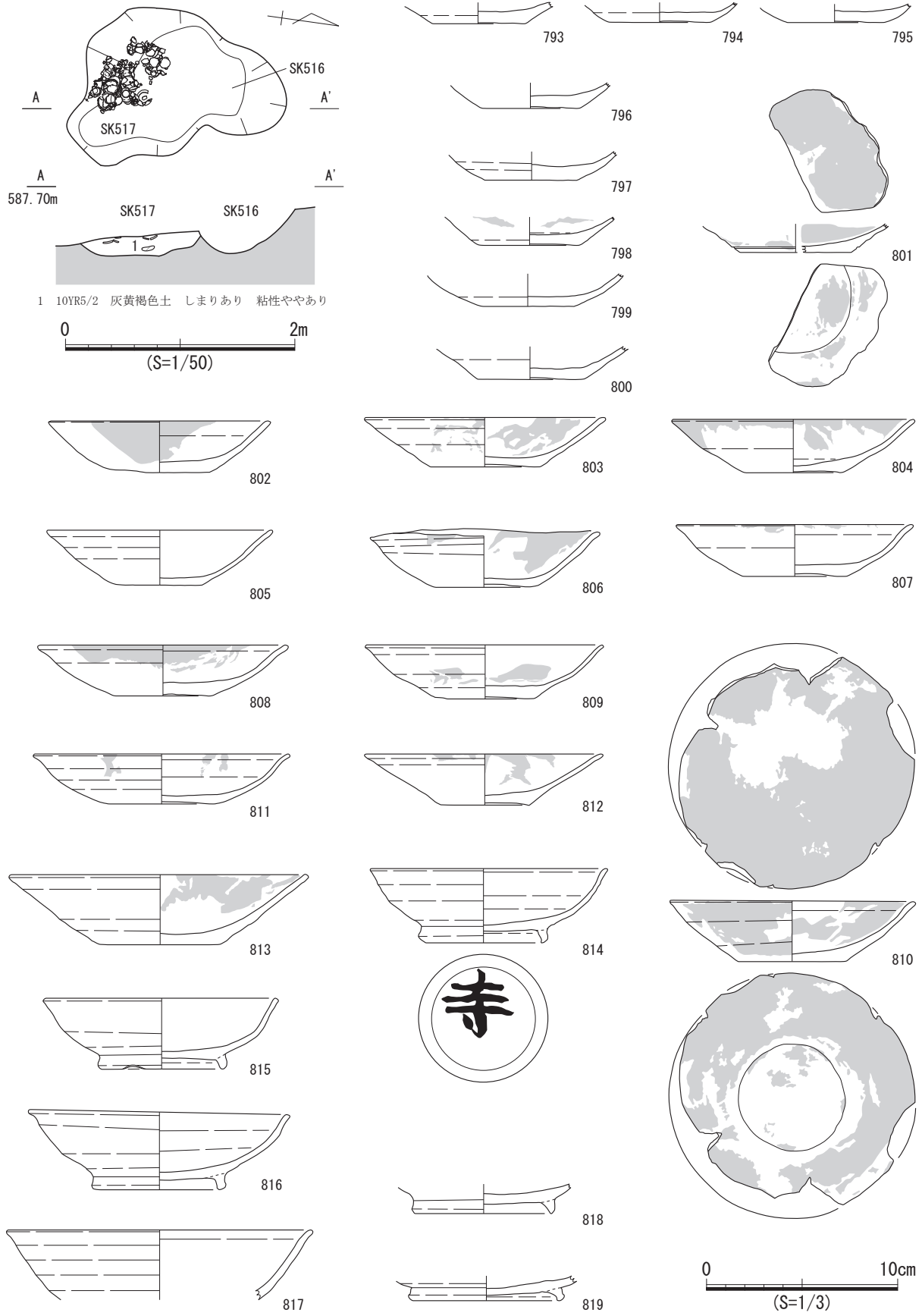


図 285 SK517 遺構図、出土遺物

遺物出土状況 埋土中から須恵器や灰釉陶器、石器などが、散在した状態で出土した。

出土遺物 822 は灰釉陶器の碗で、口縁部が直線的に開く。823 は、縦長剥片の側面に刃部を作り出したスクレイパーである。

時期 出土した灰釉陶器から、10世紀後半頃と思われる。

SK622 (図 287)

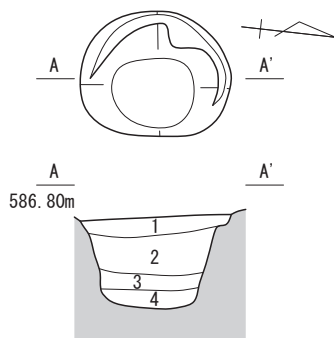
検出状況 EL6 グリッド、IV層の上面で検出した。東側は SK626 と重複していることから、全形は不明である。底面は平坦である。北壁は底面から緩やかに開き、南壁は垂直に立ち上がる。壁の残存高は最大で 0.16m である。

遺物出土状況 埋土中から釘が出土した。

出土遺物 824 は鉄製の釘である

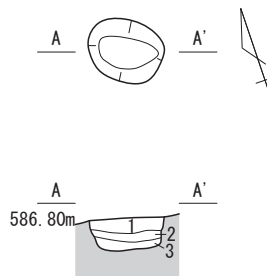
時期 鉄釘出土しが出土したことから、古代の遺構と思われる。

SK527



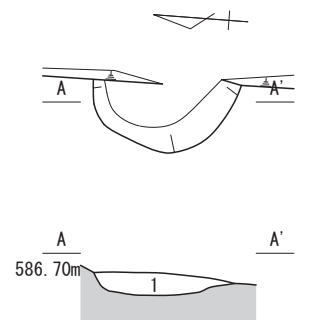
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性なし 10YR5/6黄褐色シルトブロックを10%含む
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 10YR5/6黄褐色シルトブロックを30%含む
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性ややあり 10YR5/6黄褐色シルトブロックを5%含む
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性あり 10YR5/6黄褐色シルトブロックを20%含む

SK557

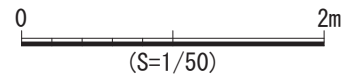


- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性なし 10YR5/6黄褐色シルトブロックを10%含む 径0.5cmの炭化粒をごく少量含む
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性なし 10YR5/6黄褐色シルトブロックを5%含む
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性ややあり

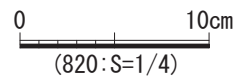
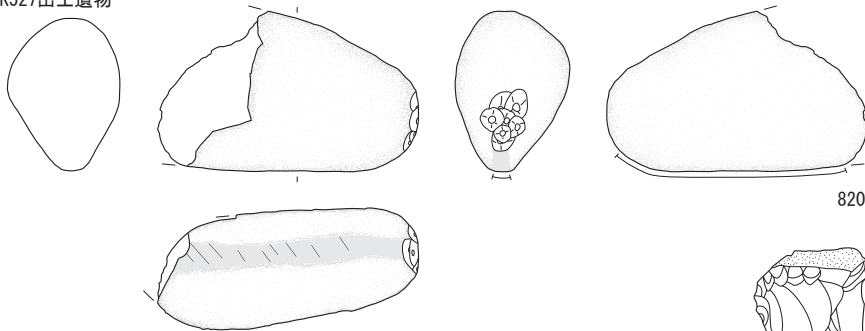
SK589



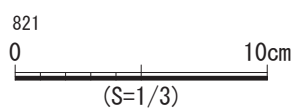
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性なし 10YR5/6黄褐色シルトブロックを10%含む



SK527出土遺物



SK557出土遺物



SK589出土遺物

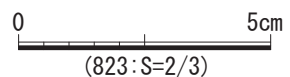
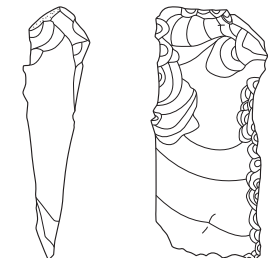
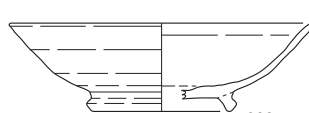


図 286 SK527・SK557・SK589 遺構図、出土遺物

SK644 (図 287)

検出状況 EM1 グリッド、IV層の上面で検出した。平面形が長方形で、底面には東側に凹みがある。壁面は底面から緩やかに開き、壁の残存高は最大で0.14mである。

埋土 単層で、IV層に類似するブロック土を含むことから、人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土中から土師器が、散在した状態で出土した。

出土遺物 825 はロクロ土師器の皿である。底部外面に回転糸切り痕が残り、口縁部の内外面に煤が付着している。

時期 出土した土師器から、11世紀頃と思われる。

SK650 (図 287)

検出状況 EM3~EM4 グリッド、IV層の上面で検出した。平面形が楕円形で、底面は東側がやや凹む。壁面は底面から緩やかに開き、壁の残存高は最大で0.20mである。

埋土 2層に分層した。いずれもIV層に類似するブロック土を含むことから、人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土中から縄文土器、土師器が、散在した状態で出土した。

出土遺物 826 は縄文土器である。縄文時代中期後葉の深鉢で、地文にLR縄文を施し、縦位沈線で区画する。

時期 土師器が出土したことから、古代と思われる。

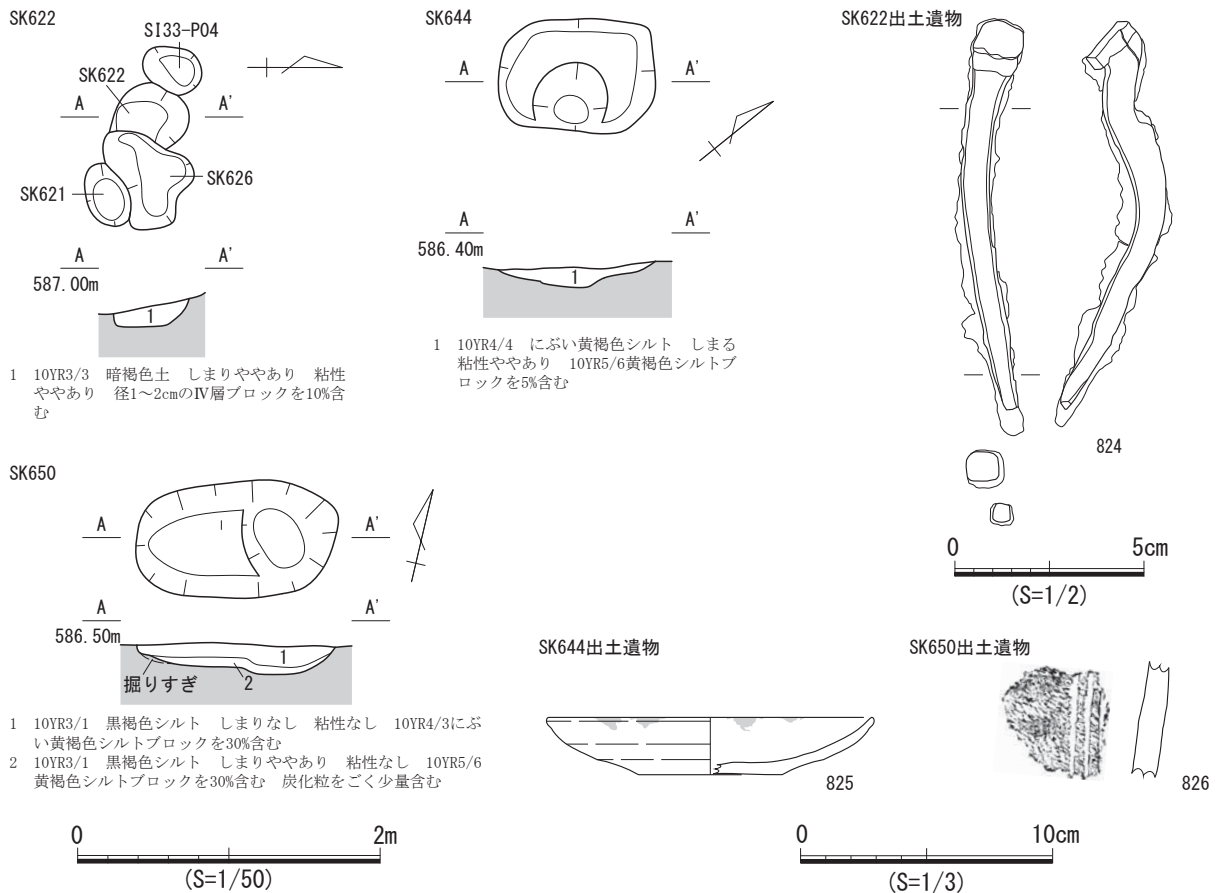


図 287 SK622・SK644・SK650 遺構図、出土遺物

SK659 (図 288)

検出状況 EM4 グリッド、IV層の上面で検出した。平面は円形に近いが、東西辺がやや直線的である。底面はほぼ平坦で、壁面は底面から直線的に立ち上がる。壁の残存高は最大で0.28mである。

埋土 3層に分層した。ほぼ水平に堆積し、1層と3層にIV層起源のブロック土を含むことから、人為堆積の可能性が高いと思われる。

遺物出土状況 埋土上面で須恵器の坏身(827)や横瓶(828)などが、内面を上に向けた状態で出土した。その他に縄文土器や土師器が、埋土中から散在した状態で出土した。

出土遺物 827は須恵器の坏身である。828は須恵器の横瓶である。

時期 出土した須恵器から、7世紀後半の遺構と考えられる。

SK669 (図 289)

検出状況 EL5~EM5 グリッド、IV層の上面で検出した。南東側でSK615、南側でSI37と重複する。当初、SK669とSI37を同じ遺構として掘削したが、土層断面でSK669がSI37より新しい遺構であることを確認した。底面は凹凸があり、壁面は底面から緩やかに開く。壁の残存高は最大で0.10mである。

埋土 2層に分層した。いずれもIV層に類似する黄褐色シルトブロック土を含むことから、人為堆積の可能性が高いと思われる。

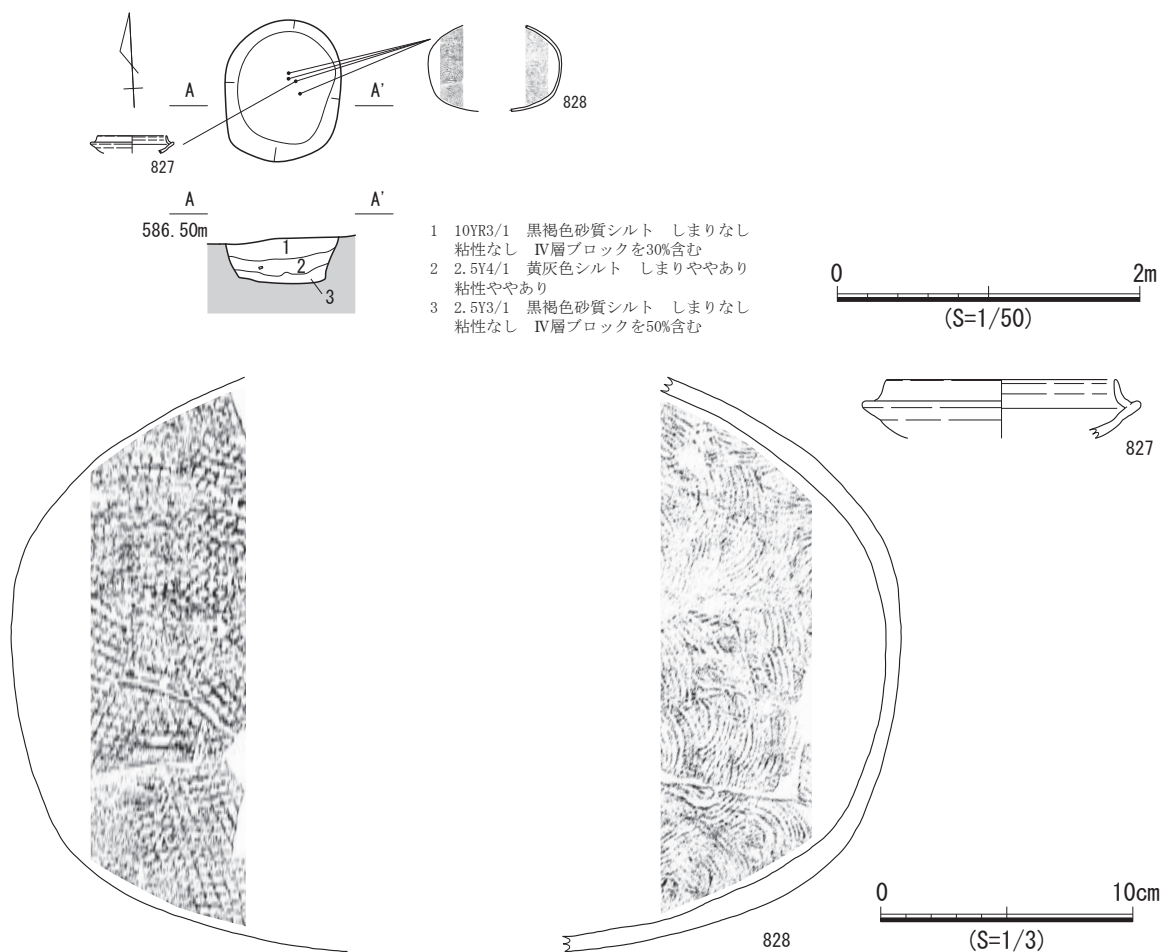


図 288 SK659 遺構図、出土遺物

遺物出土状況 埋土中から縄文土器や須恵器、灰釉陶器が、散在した状態で出土した。

出土遺物 829 は須恵器の甕である。

時期 出土した灰釉陶器から、平安時代の遺構と考えられる。

SK677 (図 289)

検出状況 EM6~EM7 グリッド、IV層の上面で検出した。平面形が長方形に近い形状で、底面は平坦であるが、南壁面側に小穴がある。壁はほぼ直線的に立ち上がり、壁の残存高は最大で 0.82mである。

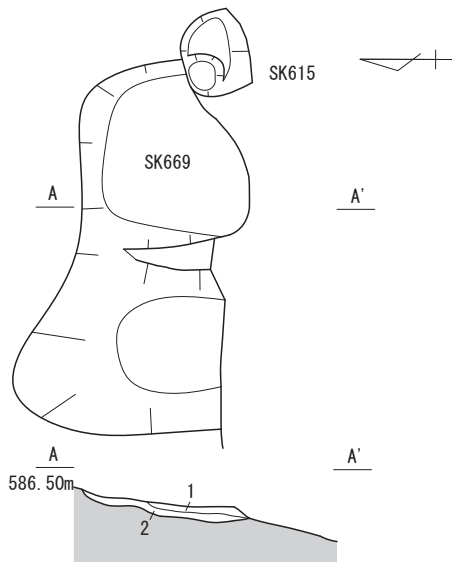
埋土 4層に分層した。ほぼ水平に堆積し、いずれもIV層ブロック土を含むことから、人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土中から縄文土器や土師器、須恵器、石器が、散在した状態で出土した。

出土遺物 830 は平基の石鏃で、平面形がほぼ正三角形となる。831 は縦長剥片の両側辺に、微細な剥離痕がある。

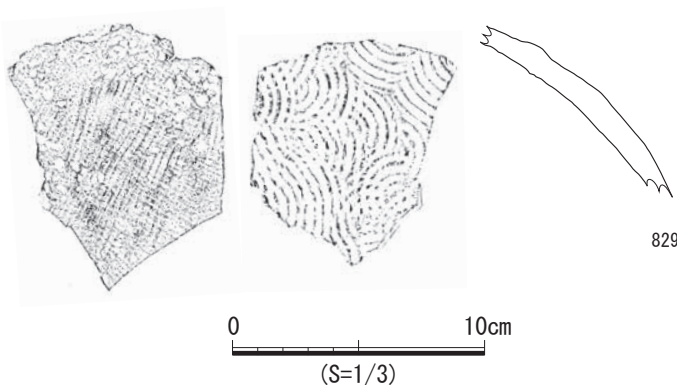
時期 出土した須恵器に口縁部に返りを持つ蓋の小片があることから、7世紀後半と思われる。

SK669

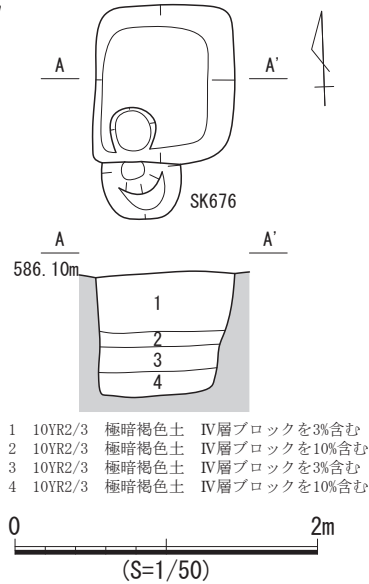


- 1 10YR3/3 暗褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 10YR5/6黄褐色シルトブロックを5%含む 径0.3cmの炭化粒をごく少量含む
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 10YR5/6黄褐色シルトブロックを1%含む 2.5YR5/8明赤褐色シルトブロックを1%含む

SK669出土遺物



SK677



- 1 10YR2/3 極暗褐色土 IV層ブロックを3%含む
- 2 10YR2/3 極暗褐色土 IV層ブロックを10%含む
- 3 10YR2/3 極暗褐色土 IV層ブロックを3%含む
- 4 10YR2/3 極暗褐色土 IV層ブロックを10%含む

SK677出土遺物

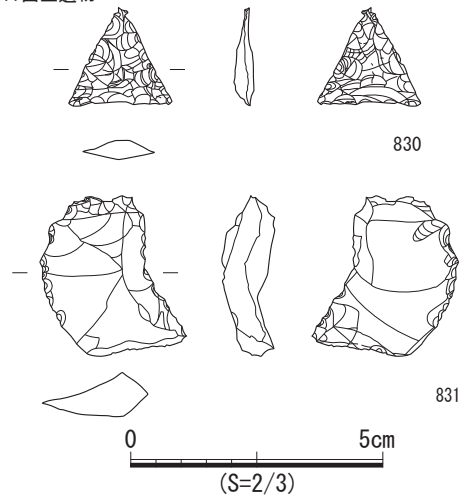


図 289 SK669・SK677 遺構図、出土遺物

SK708 (図 290)

検出状況 EN5～E05 グリッド、IV層の上面で検出した。東側は発掘区外であることから全形は不明であるが、底面は丸みがある。壁面は底面から緩やかに立ち上がり、壁の残存高は最大で0.16mである。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平堆積で、いずれもIV層に類似するブロック土を含むことから、人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土中から縄文土器や土師器が、散在した状態で出土した。

出土遺物 832 は縄文時代中期中葉の北陸系上山田式と思われる深鉢で、半截竹管状工具による横位の半隆起線文を施し、一部を押しきして爪形文とする。

時期 土師器が出土したことから、古代と思われる。

SK759 (図 290)

検出状況 E05 グリッド、IV層の上面で検出した。遺構の大半が発掘区外であることから全形は不明であるが、底面は比較的平坦である。北壁は底面から垂直に立ち上がり、南壁は発掘区外であることから不明である。残存部では不定形の土坑である。壁の残存高は最大で0.22mである。

埋土 5層に分層した。いずれもIV層起源のブロック土を含むことから、人為堆積と思われる。

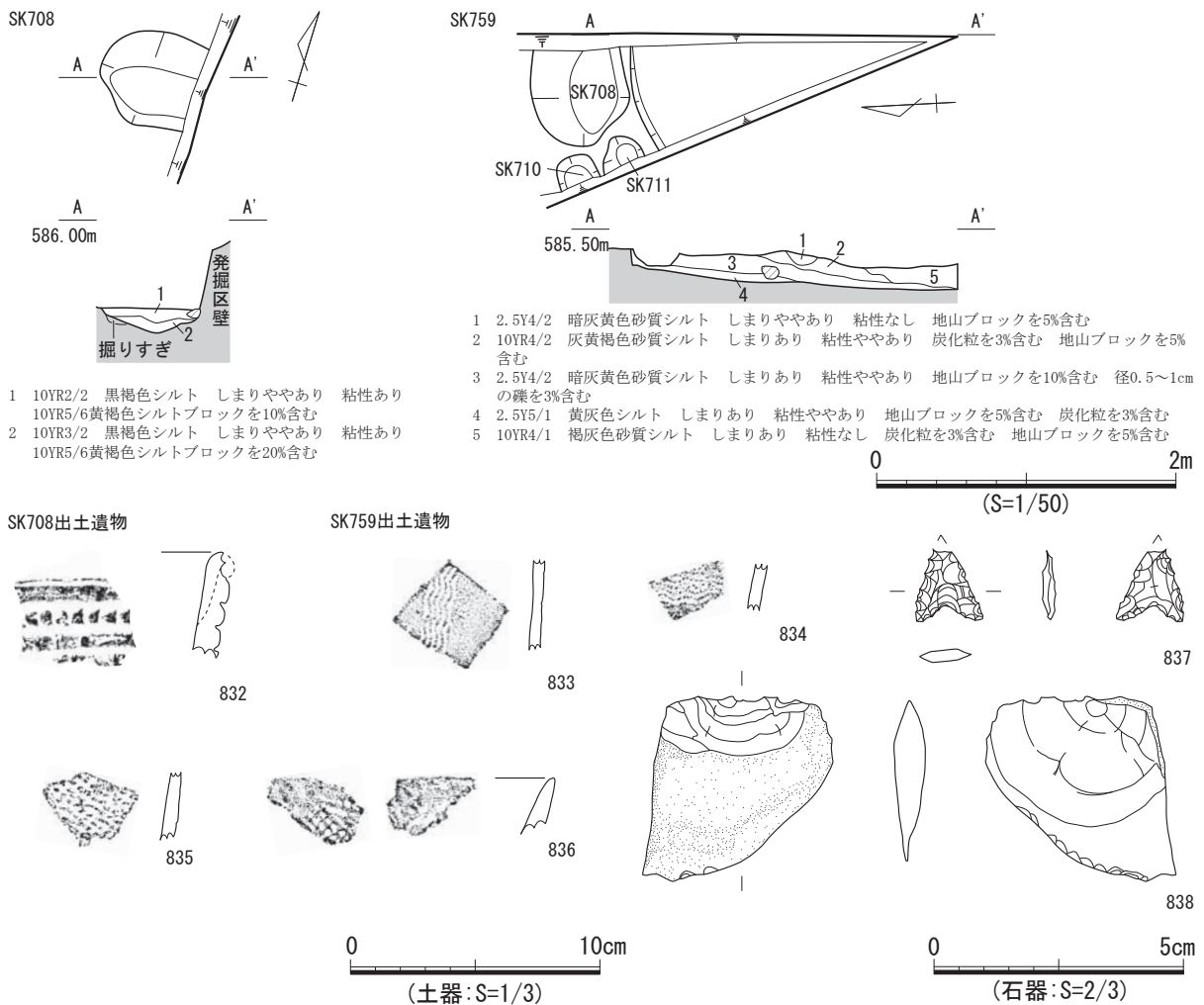


図 290 SK708・SK759 遺構図、出土遺物

遺物出土状況 埋土中から縄文土器、土師器、石器が残在して出土した。

出土遺物 833 と 834 は縄文時代早期の押形文土器で、胎土に黒鉛を含む沢式である。山形文を施す。835 も縄文時代早期の押形文土器で、楕円文を施す。836 は深鉢の口縁部と思われるが、LR 縄文を施すだけである。縄文時代中期のものと思われる。837 は下呂石製の石鏃で、先端部を欠損し、基部をやや挟る。838 は下呂石製の剥片で、末端辺に微細な剥離痕を持つ。

時期 土師器が出土したことから、古代の遺構と思われる。

SK767 (図 291)

検出状況 EP1 グリッド、IV層の上面で検出した。平面形が東西に長い楕円形に近い形状で、底面は平坦である。壁面は底面から緩やかに開き、壁の残存高は最大で 0.06m である。SK764 と重複し、SK767 が古い。

埋土 単層でIV層に類似するブロック土を含むことから、人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土中から灰釉陶器が、散在した状態で出土した。

出土遺物 839 は灰釉陶器の碗である。底部内面が摩耗し、灰釉を浸け掛けする。

時期 出土した灰釉陶器から、10 世紀後半と思われる。

SK782 (図 291)

検出状況 EP2~EQ2 グリッド、IV層の上面で検出した。南東部は発掘区外であることから全形は不明である。底面は平坦で、東壁は底面から垂直に立ち上がり、西壁は緩やかに開く。壁の残存高は最大で 0.18m である。

埋土 単層で、IV層に類似するブロック土を含むことから、人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土中から土師器と石器が、散在した状態で出土した。

出土遺物 840 は石鏃で、剥片の両側辺を調整し、鏃部を作り出している。

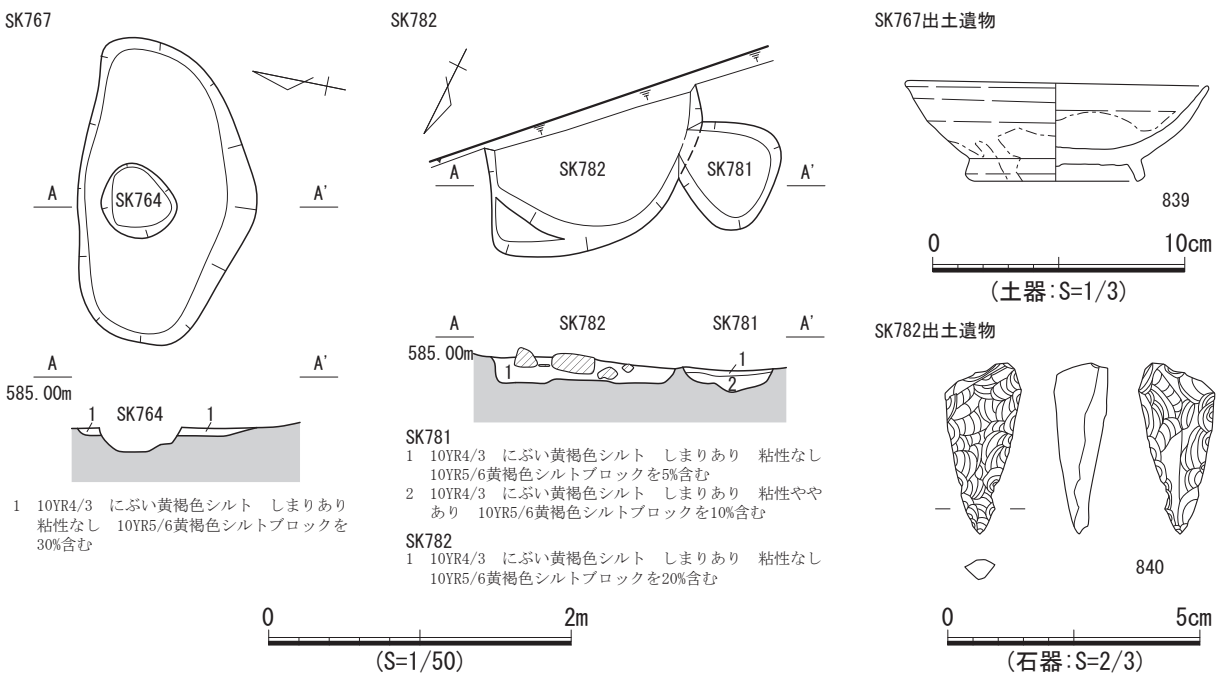


図 291 SK767・SK782 遺構図、出土遺物

時期 土師器が出土したことから、古代と思われる。

SK808 (図 292)

検出状況 DH20~DI20 グリッド、IV層の上面で検出した。平面形が円形に近く、底面は比較的平坦である。東壁は緩やかに開き、西壁は底面から垂直に立ち上がる。壁の残存高は最大で 0.20mである。

埋土 4層に分層したが、1層と2層は3層と4層が堆積した後に掘り込まれたような堆積となり、遺構の重複を見落とした可能性がある。いずれの土層からもIV層に類似するブロック土を含むことから、人為堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土中から縄文土器と灰釉陶器が、散在した状態で出土した。

出土遺物 841 と 842 は灰釉陶器碗の底部で、高台を貼り付けている。

時期 出土した灰釉陶器から、10世紀後半と思われる。

SK811 (図 292)

検出状況 DH19~DI20 グリッド、IV層の上面で検出した。平面形が東西に長い台形に近い形状で、底面は平坦である。壁面は底面から緩やかに開き、壁の残存高は最大で 0.12mである。SK808 と重複しているが、SK811 が古い。

埋土 2層に分層したが、ほぼ水平に堆積している。1層にはIV層に類似するブロック土を含むことから、人為堆積の可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から縄文土器や須恵器、灰釉陶器が、散在した状態で出土した。

出土遺物 843 は須恵器の高台を付けた坏である。

時期 灰釉陶器が出土したことから、平安時代と思われる。

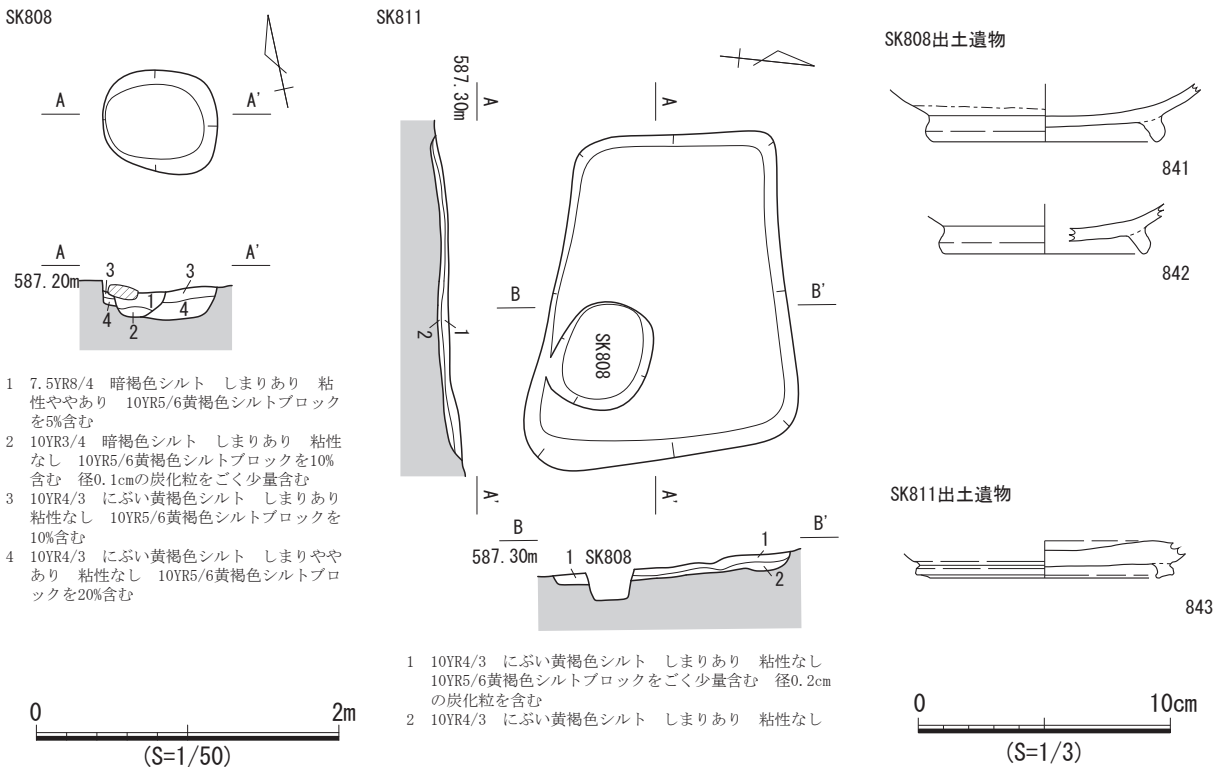


図 292 SK808・SK811 遺構図、出土遺物

10 遺構外出土遺物

844～846 は土師器甕である。844 は上胴部の張りが弱く、頸部が直立した後、口縁部が外反する。出土した場所は、SI19 のカマド上部にあたり、SI19 に関係する可能性がある。845 は844 と同様の口縁部片で、846 は胴部片である。847～849 は無台の須恵器坏である。847 は底部がやや丸みを持ち、口縁部は直立する。底部内面には「×」のヘラ記号が認められる。848 は底部が未調整で、口縁部は直線的である。849 は7世紀後半の大型の坏である。850～853 は須恵器蓋である。850 は扁平な宝珠様の摘みを天井部に付け、口縁部内面に短い返りを付ける。851 は口縁部を欠くが、天井部に扁平な宝珠様の摘みを付ける。852 は口縁端部が屈曲する。853 は天井部を欠くが、口縁部が屈曲する。854～856 は須恵器の盤と思われ、854 は口縁部が屈曲し、瓶類のような高台が付く。855 は直立する高台を、856 は短い高台を付ける。857 と858 は須恵器高坏で、低い脚部で脚裾部が下方に屈曲する。859

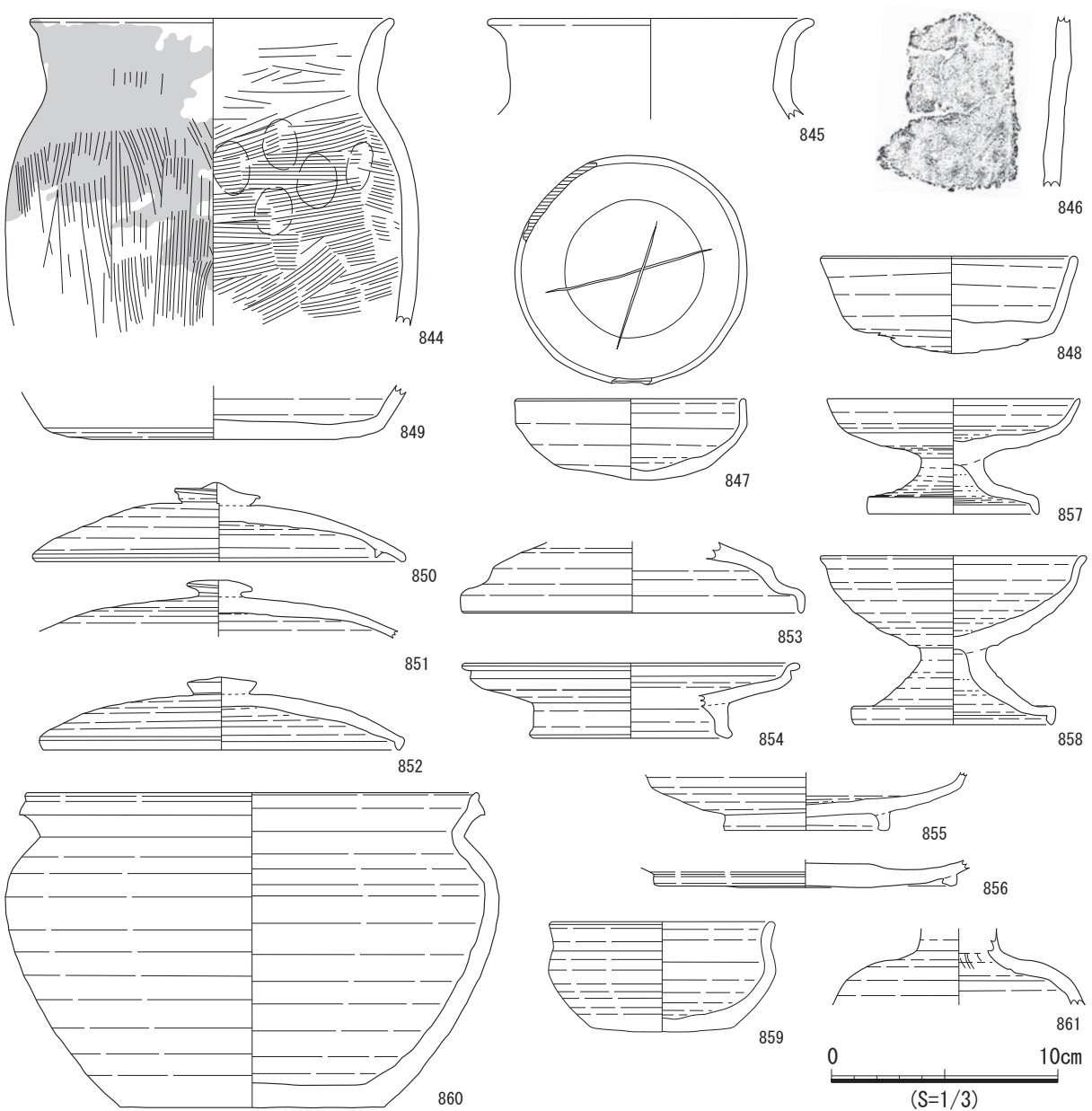


図 293 古代の遺構外出土遺物 (1)

は須恵器鉢で、口縁部が短く外反し、胴部は浅く、自然釉が付着する。860 は8世紀後半と思われる須恵器鉢で、口縁部端部が角張る。861 は須恵器甕の頸部片である。862～865 は須恵器短頸壺である。862 と863 は肩部が屈曲し、口縁部が短く立ち上がる。862 は8世紀後半の猿投産と思われる。864 は肩部が強く張り、口縁部が短く外反する。7世紀後半の美濃須衛産に似るが、外面に格子のタタキ目があるため、在地産の可能性が高い。865 は口縁部を欠くが、底部に内面側から打ち欠いた穿孔がある。866 は須恵器壺と思われる胴部から底部片である。867 は須恵器有耳壺で、肩部の張りは弱い。868 は須恵器多口瓶の子口頸部で、口縁部が外反する。869 と870 は須恵器甕である。869 は胴部上半から頸部まで内側に緩やかに傾き、頸部では丸味を帯びつつ「く」の字に曲がり、口縁部は直線的に開く。口縁端部裏面に僅かに窪みが巡る。美濃須衛産の7世紀後葉のものと考えられる。870 は肩部が丸味を持って張り、丸底となる。SZ5周溝東部の埋土上面で、破片が散在して出土した。SZ23の須恵器等と類似する出土状況であり、何らかの目的で持ち込まれたと考えられる。胎土から在地産と考えられ

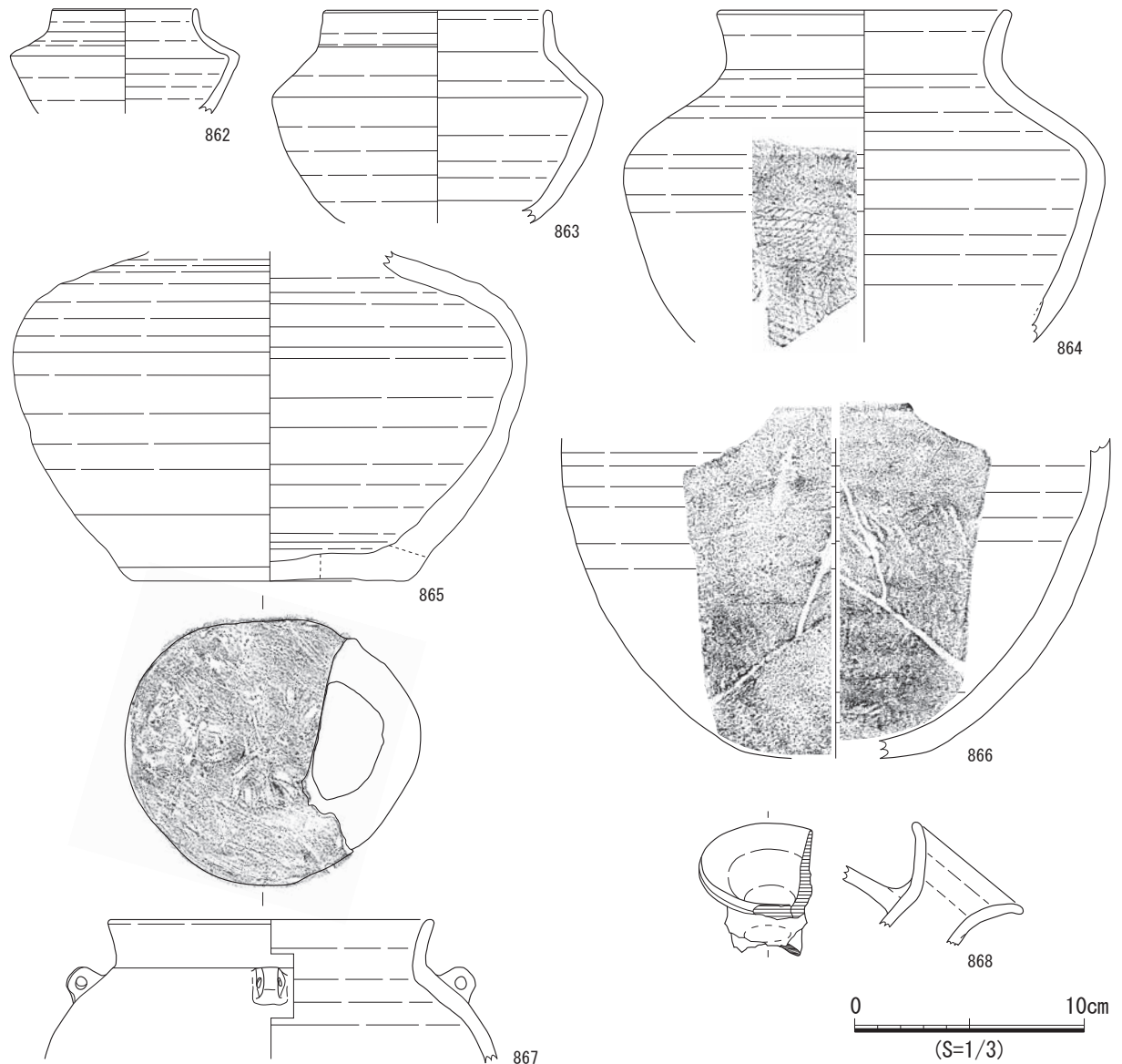


図 294 古代の遺構外出土遺物（2）

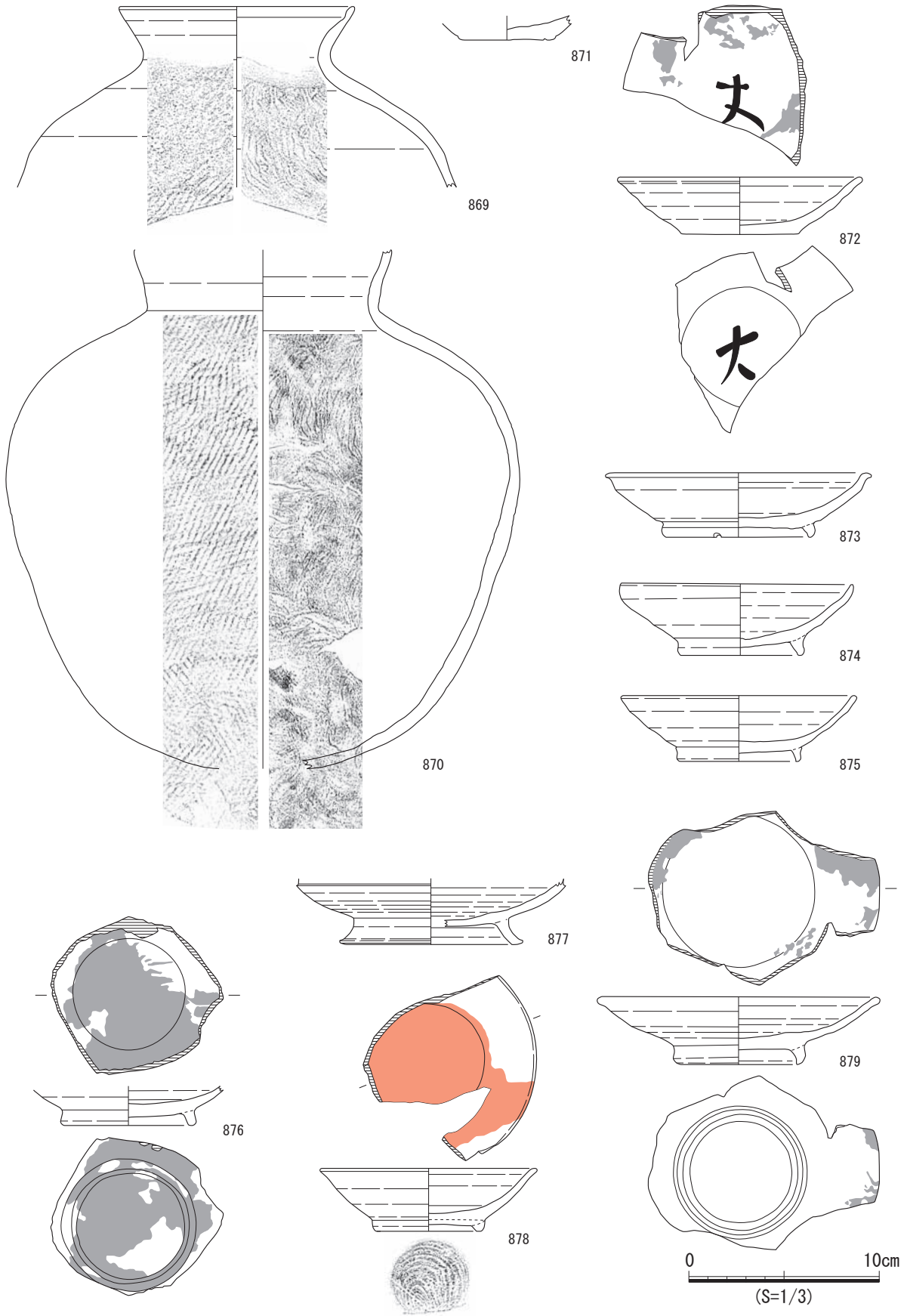


図 295 古代の遺構外出土遺物 (3)

る。871 と 872 はロクロ土師器碗で、871 は底部片である。872 は底部内外面に「火」と考えられる墨書が見られ、黒褐色の付着物がある。873～876・879 は灰釉陶器の碗である。873 は三日月形の高台を付け、口縁端部が外反する。高台に棒状の圧痕が認められ、灰釉はなく、胎土から在地産と思われる。SZ17 周溝埋土上のⅡ層から出土した。874 は高台が開き、口縁端部がやや内湾する。SZ42 の墳丘上から出土した。875 は高台がやや開き、口縁部は比較的直線的となる。転用碗の可能性ある。876 はやや開く高台を付けるが、内外面に黒色の付着物がある。877 は灰釉陶器の碗類と思われるが、ハ字形に開くやや高い高台を付け、胴部に段があることから、やや特殊な器形である。878 は灰釉陶器のやや小型の碗で、低い高台を付ける。878 の口縁部はやや外反する。内面に朱墨の痕跡が残る。879 は三日月形の高台を付け、口縁部は直線的に大きく開く。内面に黒褐色の付着物が認められる。880～882 は灰釉陶器の皿である。880 は断面方形の高台を付け、口縁端部がやや肥厚する。881 は断面方形で、

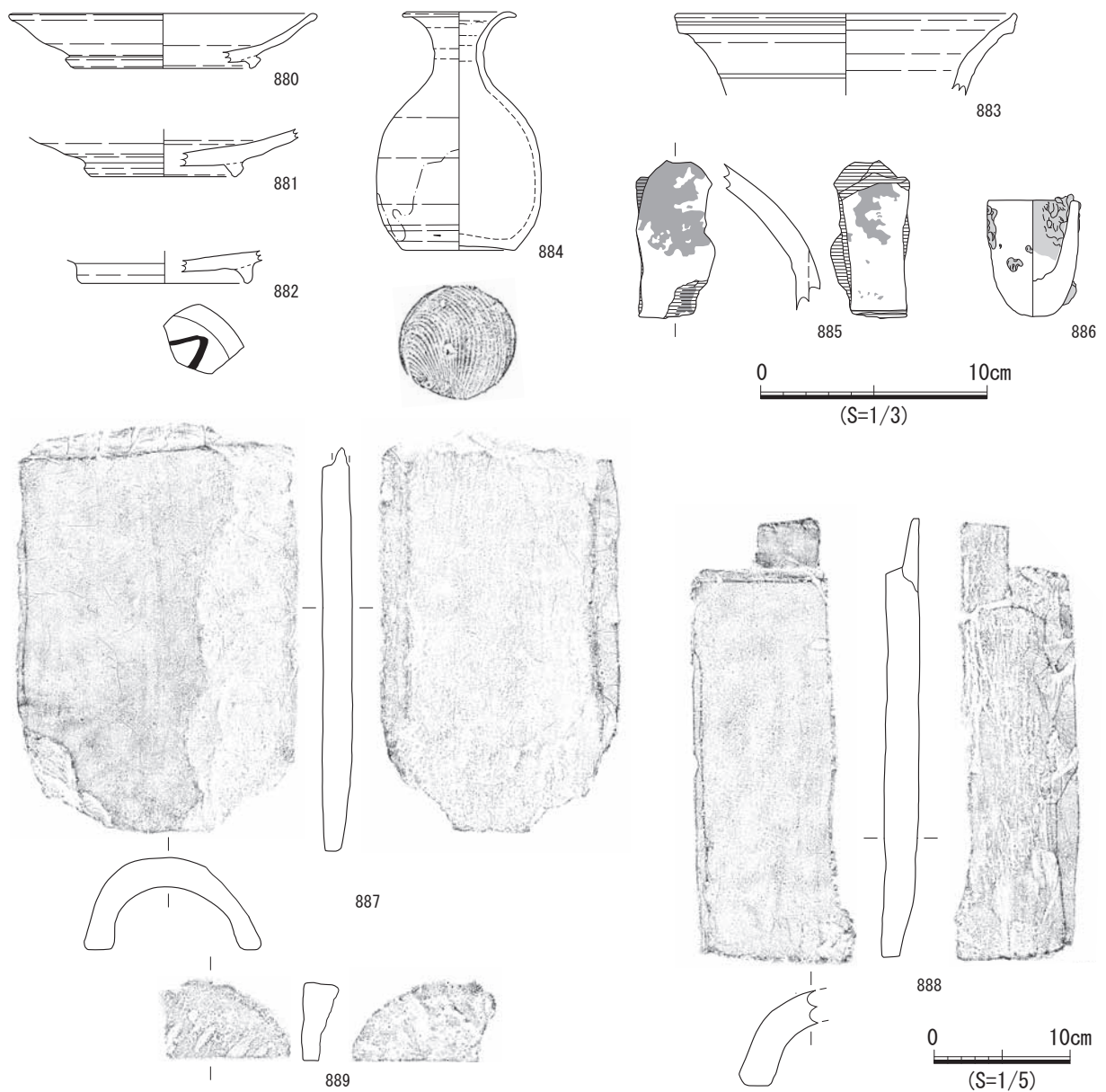


図 296 古代の遺構外出土遺物 (4)

幅広の高台を付ける。882は底部外面に墨痕が認められるが、破片であり判読不能であった。883は灰釉陶器の長頸壺と思われる。SZ50とSZ51の間に設定した東西方向の断ち割りトレンチ内でまとまって出土した4点の灰釉陶器の1点であるが、調査ではこの位置で遺構を確認していないため、883を含む遺構を見落とした可能性がある。また、先述した866もほぼ同位置で出土している。内面は自然釉、外面には灰釉が認められ、胎土から猿投窯などからの搬入品と思われる。9世紀頃のものか。884は灰釉陶器の小瓶である。SZ33南側のII層から出土しており、口縁部の一部を除いてほぼ完形である。非常に薄手で丁寧成形されており、底面には回転糸切り痕が明瞭に残る。灰釉を刷毛塗りで口縁端部の内面と口縁部から体部にかけての外面に施す。胎土から猿投窯などからの搬入品で、K-90号窯式期と考えられる。885は瓶類の胴部片で、内外面に黒色の付着物が付く。886は焼き締まった須恵器のような色調をもち、内外面に緑青や銅のスラグのような付着物が認められることから埴埴と思われる。887と888は丸瓦で、889は軒丸瓦の瓦当部分と思われる。890は熨斗瓦である。SB04と北側の段切りとの間から出土していることから、SB04に関係する遺物の可能性がある。

891は銅芯金張りの耳環で、腐食が激しい。SI12北面のSZ01周溝上面の包含層にて出土した。892は1068年に初鑄された熙寧元寶である。893は鉄製のU字形の鋏か鋤の刃先である。内湾部の縁に沿って、深さ0.5cm～1.5cmの袋部を作る。左側側面が大きく磨耗している。894は環状の鉄製品で、用途不明である。895～898は鉄製の釘類である。895～898は頭部がT字形となる犬釘で、895は頭頂部が扁平な未製品、897は先端部が屈曲し、898はL字に大きく曲がる。

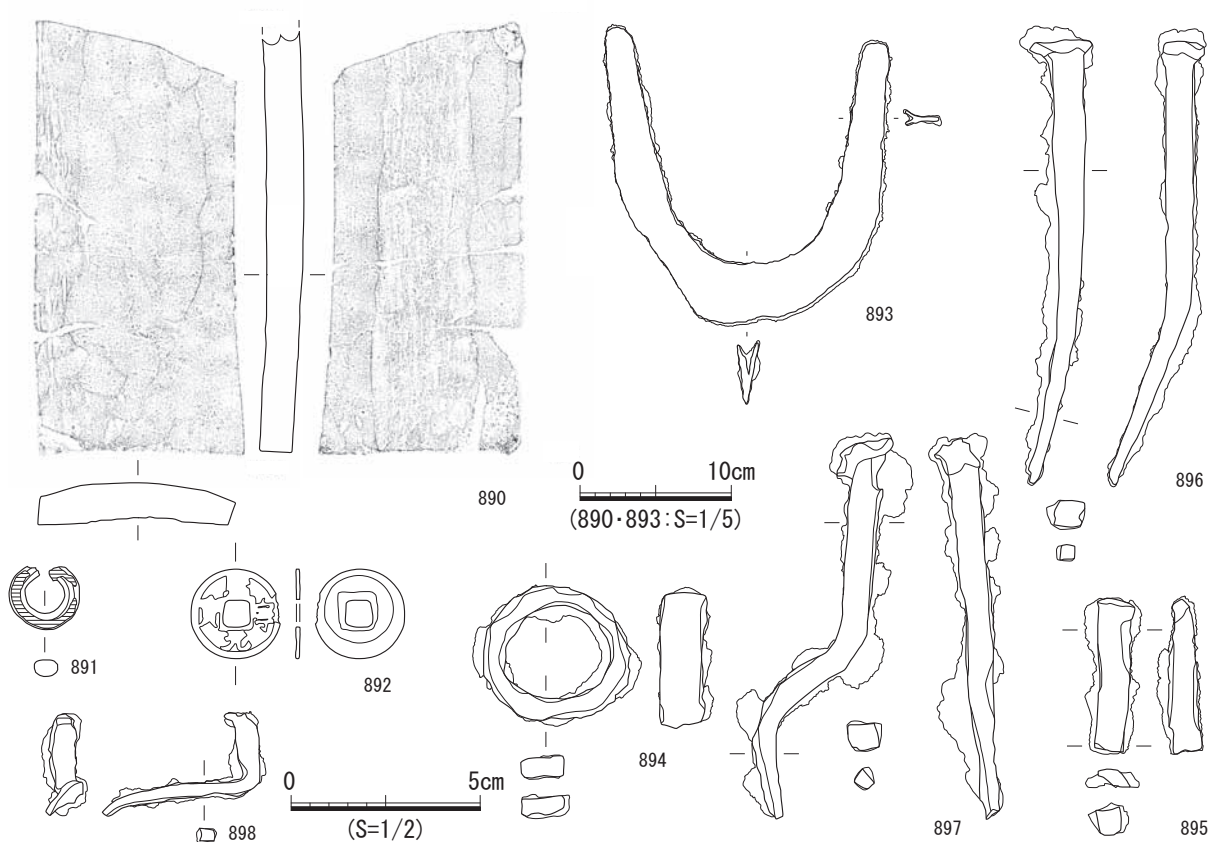


図 297 古代の遺構外出土遺物 (5)

報 告 書 抄 録

ふりがな	かみざりてらおこふんぐん・ひやけいせき							
書名	上切寺尾古墳群・日焼遺跡							
副書名								
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書							
シリーズ番号	第154集							
編著者名	柳坪武志・柏木賢一・長谷川幸志・澤村雄一郎・三島誠							
編集機関	岐阜県文化財保護センター							
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL058-237-8550 FAX058-237-8551							
発行年月日	2021年3月5日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
かみざりてらおこふんぐん 上切寺尾古墳群	ぎふけん 岐阜県 たかやまし 高山市	21203	06586	36°10'10"	137°13'58"	20150507～ 20151203、	8,250	記録保存 調査
ひやけいせき 日焼遺跡	かみざりちよう 上切町	21203	00455	36°10'8"	137°13'57"	20160509～ 20161125		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
上切寺尾古墳群 日焼遺跡	その他の墓 集落 社寺跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代 中世	墳墓 51基 竪穴建物38軒 礎石建物1棟 掘立柱建物8棟 土坑墓 10基 など	縄文土器 604点 弥生土器 787点 土師器 10,489点 須恵器 5,717点 灰釉陶器 1,620点 石器・石製品 284点 金属製品 158点 など	縄文時代の竪穴建物、弥生時代後期から古墳時代初頭の墳墓群、古代の集落跡や仏堂などを確認した。			
要約	<p>上切寺尾古墳群は、高山盆地北西部の丘陵尾根及び傾斜地に位置する。出土した遺物から弥生時代後期から古墳時代初頭の墳墓群であることが判明した。多くの墳墓が略方形に周溝を巡らせ、主体部が1基となる。北陸地方や濃尾平野の影響を受けた土器が出土しており、墳墓群もこうした影響のもと造営された可能性が考えられる。</p> <p>日焼遺跡は、縄文時代及び古代を中心とする遺跡で、上切寺尾古墳群と重複する範囲に遺構が広がる。縄文時代早期の煙道付炉穴、縄文時代中期の竪穴建物、古代の竪穴建物、掘立柱建物、礎石建物などを確認した。このうち、古代の礎石建物では、鏡が埋納されており、螺髪や多口瓶、鉄鉢形土器など遺構の性格を示す資料が出土した。また、掘立柱建物の下には大型の竪穴建物があり、一般的な集落とは異なる様相を持つ。</p>							

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第154集

上切寺尾古墳群・日焼遺跡

(第1分冊)

2021年3月5日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印刷 株式会社もとすいんさつ